

# 東方氷異伝

城が猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

今日もさいきよーの存在としての証明の為の活動（遊び）に余念がない一匹の氷精（チルノ）しかし、その途上で、

謎の蒼い結晶を発見し・・・それに触れ記憶を取り戻すと共に、

真の最強とは何か？、多種多様な世界への旅で、

それぞれの強さという名の最強（かたち）を知る物語。

# 目次

## 第一章 影蟲異変の章

第一話	氷過	1
第二話	氷留	19
第三話	氷流	42
第四話	氷始	62
第五話	氷怪	86
第六話	氷迷	109
第七話	氷乱	144
第八話	氷鳴	177
第九話	氷開	200
第十話	氷路	229
第十一話	氷稀	262
第十二話	氷京	288
第冷話	涼利	314
第十三話	氷争(序)	342
第十三話	氷争(紅魔 其の壹)	376
第十三話	氷争(紅魔 其の貳)	400
第十三話	氷争(紅魔 其の参)	447
第十三話	氷争(紅魔 完結)	472
第十三話	氷争(白楼 其の壹)	504
第十三話	氷争(白楼 其の貳)	535
第十三話	氷争(白楼 其の参)	573
第十三話	氷争(白楼 其の肆)	612
第十三話	氷争(白楼 完結)	652

第十三話 氷争 (萃夢) 其の壺  
第十三話 氷争 (萃夢) 其の式

# 第一章 影蟲異変の章

## 第一話 氷過

あたいはチルノ！ このげんそーきよーで  
さいきよーのそんざい！ 今日もあたいがさ  
いきよーであることのしようめいをするため  
に、みんなにあたいのさいきよーさをおもい  
しらせにいくわよー！ そのためのなかまを  
よんだはずだったんだけど、みんなほかによ  
うじ？があるとかで、きてくれなかった。  
ま、まあ・・・さいきよーのしようご  
うをもつあたになかなかついてこられない  
のはしかたがないとして、もうすこしどりよ  
くすべきじゃないかしら・・・。

まあ、ひとりでもいくことはいくけどさあ・  
・・・。

チ「さて、きょうもかえるをこおらせたり、  
迷い込んだにんげんにいたずらするぞー！  
あたいつたらさいきよーね!!!」

ひとしきりかんがえごととかしたら、あた  
いについてくることのできなかつたいつもの  
なかまはほうつといて、いつものえいぎよう  
(さいきよーのにつか)にとりかかるあた  
い、やっぱさいきよーはいつでもへいじよう  
うんでんをかかしちゃだめだよねー。

チ「あれ？ここらへんこんなにしずかだつた  
っけ」

あたいはいつものかえるをこおらせてあそ  
．．．いや、さいきよーかつどうしてるいつ  
もきりがかかったみずうみにきていた。  
でもそこにはいつもうるさいくらいにないて  
いるかえるがいなかった。

というよりも．．．

チ「あれれ？ もうこおってるし．．．」  
いつものようにかえるをこおらせてあそぼ  
うとしていたら、すでにこおったかえるがそ  
こらへんにころがってた．．．。

え？ でもあたいいがいにかえるをこおらせる  
ようなやつなんて．．．

とおもっている、ここよりもいっぱいこお  
ったかえるのいるちゆうしんに、なんか、あ  
おくひかる、ろっかくけい？のすいしようみ  
たいな、ほうせきみたいなのがおいてあつ  
た。

チ「なに？これ．．．」

よくよく見てみるとこれがかえるをこおら  
せてるみたい．．．

しかもこれかえるいがいにもこれのまわりは  
ぜんぶこおってるし．．．

まあ、みてるだけじゃよくわかんないしさわ  
つてみようかしら

チ「!!!」

そうしてさわつてみたたん、すごいりよ  
うの情報がいつきにあたいのあたまを駆け巡  
ってきた。

チ「な．．．に、これ．．．!!

!!．．．記憶？」

そこで、あたいのいしきはかんぜんなくら  
やみにおちていった……。

『氷河期』

そう、いつもあたしは一人だった……

ずっと一人でいることが普通で、なんの寂し  
さも心苦しさも感じていなかった。

そこには、ただただ静寂とただただひたすら  
に一種類の自然の力……

「冷気」が支配する世界とあたいがあるだけ  
だった。

でもそれだけで満ち足りていた。

だってそうでしょ？

生れついてそのことしか知らないし、自由だ  
ってあつたし、

なにも物を知らな過ぎてほんの少しの事でも  
満足してしまう。

でもそんな毎日に、あれは突然あたしの前に  
置かれた。

それはいつもどおりその辺を自由に飛び回り  
、空からの景色をただ眺めていた時に、見つ  
けた。

チ「？」

最初は何かの黒い点が物珍しかったから近  
づいただけだった。

でもその黒い点だったものは近づいていくに

につれて大きくなり、最後にはすぐ近くに降り立ったことで二冊の黒い本であることが分かった。

正確には黒い本と認識していたわけではなかったけれど、

四角い形と黒い色をしていると言うことだけしかわからなかったが、それが開くことのできるものであると悟ると、二つある内の一つを手にとって開き、見てみた。

すると、言葉を発音するための、また言葉を覚えるための内容が書いてあったのだ。

そこで、生れて始めて発音をした。

チ「あ……い……う……え  
、お？」

ただたどしくも確かに発音し、長い時のなかで練習する内、言葉もそれなりに覚え、もう一方の本にも興味が湧いて読んでみたくなつた。

チ「ふーん、タイトルは……『結界陣大全』か……ちよつと面白そうだしに読んでみよつ！暇つぶし程度にはなるでしょ」

いくら満ち足りていたといっても退屈を全く感じないわけではなかったからあたしは突如目の前に出現したそれに自然とのめりこんでいった。

読んで内容を理解するだけでも面白く、これはいい退屈しのぎを手に入れたと思つた。

しかし、毎日読み耽っていたわけではないの



で、全てを理解するのに数か月ほど時間が経ったけど、それらを何度も読むうち、そらで言えるほどに覚えてしまった。

その本の中には多種多様な結界について書かれていた。

チ「ここまで読んでせっかく覚えたんだし、ちよつとやってみようかな・・・」

あたしは暇つぶしに読んでいたその本の知識を使つて更に暇をつぶすため、書いてあることをやってみようと思った。

その為にまずは・・・

莫大な力の保存と制御をする結界から試してみよう。

チ「うん、まずは、結界の形成からだね」

細かい理論は省くけど力の循環に深くかわる部分だかららしい。

この結界陣の形成の成否が力を正確に制御できるかどうか、どれだけのエネルギーを蓄えられるかに影響する。

チ「次は・・・力の込め方を・・・!!」

次は陣に己の周囲や自身の力を注ぎこむ作業で、これは込める力はなんでもよくてただ込め方にこつがあり、込める妖力の属性によつて変わってくる。

あたしの『冷気』なら手のひらからそのまま冷気が溢れて来るよう、溢れた冷気が結界陣に吸い込まれるようなイメージでやらなければ

ばならず、それは急いでやっても、たとえ丁寧  
に遅くやつても失敗する。

でも、やっぱり焦ってやるより、ゆっくり丁寧  
にやった方が成功率は上がるみたい。

チ「よし!!! 順調、順調♪」

.....

そして、結界に妖力を注ぎ始めて数時間後。

チ「くつつ.....!!!.....

つつううう!!!」

あたしの体が妖力を込めている指先から、

徐々に結界に飲み込まれ始めた。

本にも書いてあったことだけど、自身の力の  
約9割を越える力を注ぎすぎると、そのまま  
自身の体ごと力を全て吸い尽くされるらしい。  
でも、吸い尽くした結界の方は力の結晶が結  
界の周りにできてそのまま残るし、それには  
力を込めていくことも出来る.....まあ  
それだと自分が死んじゃうから意味無いとは  
思うけど。

チ「や、やりすぎちゃった.....はあ

.....はあ.....かな.....

?.....つうううう!!!」

もはや指先と言わず、全身が単なるエネルギー  
ギーとなつて、自分で作った結界に飲み込ま  
れようとしている。

そして、その時は訪れた。

チ「う.....うわああああああ

ああああああ!!!」

!!!!!!!

次の瞬間あたしの眼の前は真っ暗になり完

全な無が訪れた・・・  
そしてあたしがいた場所には純粋な氷を六角に削り取ったような薄く透き通った青色をした大きい水晶の塊だけが残されていた。

それから約3日後、あたしは一回休みから復活し、例の場所で目覚めた。

チ「・・・・・・・・!! あれ?・・・・・・・・ここは?」

最初は何故こんなところにいるのかと混乱した。

でも・・・・・・・・

チ「・・・・・・・・つつつううううううう!!!?」

突然の激しい頭痛と共に全てを思いだした。恐らくどこかにあるあの塊に触れたんだと思う。

チ「・・・・・・・・そうか・・・・・・・・あたしは一回死んだんだ。力を込めすぎたせいで力を体ごと吸い取られて・・・・・・・・でも・・・・・・・・思い出せて良かった。やっぱり、研究記録保存用の結界陣を念のため組み込んでいて正解だね。」

そう、こうなるかもしれないことを見越してあらかじめ復活する場所を限定する結界と、研究記録を保存しておくための記憶保存用の結界を一緒に組み込んでおいて、あの塊に

偶然でも触れれば、記憶を取り戻すように細工してあった。

チ「？　これが、その結晶かな」

手元を見てみれば手と足の間に六角体の大きい水晶が転がっていた。

恐らくその水晶に足が触れるか何かしたのでろう、それに改めて触れて、どのくらいの妖力が入っているかと残りの容量を確認する。

チ「・・・それにしても、全部飲み込まれちゃったか・・・その甲斐あつてあたしまるまる一人分の妖力の結晶が出来あがつたわけだけど・・・」

チ「ああ・・・でもこの大きさでようやく一人分か、妖力を込められる容量・・・」

「・・・まあ、この陣の大きさじゃ、これが限界かもね」

その本には結界の維持の方法や形成のしかた、効果だったり容量の調節のやり方なんかも書かれていて、なかでも容量に関しては、他の結界がどうかは知らないけど、描く陣の大きさが小さく、精巧なほどより多くの力を蓄えられると記述されていた。

チ「でも、もうあんまりやりたくないなあ：・・・なんかめちやくちや痛いんだもん」

自身の体ごと全ての力を持つていかれる瞬間、とてつもない激痛が全身を襲い死にいたる・・・と、この結界を使用する上での注意事項として書かれていた。

それに、貯められたとしてもようやく一人分だし、残りの容量も一人分では割に合わない

と思った。

チ「痛くならないように少しずつ入れればいいんだろうけど……なんか面倒だな……」

最初は結構、退屈しのぎになるかなと思っただけど、徐々に面倒だけになってきた。

大体、今そんなに力が必要なわけじゃないし、退屈しのぎならいままでのがあるしね。

チ「疲れたし、寝よ」

そして、それからはいつも通りの毎日が繰り返されたけど、やがてあることに気付いた。

チ「……？ あれ？ なんかホンツと……に微妙に……力……」

・弱くなってきたくない？」

それは幸運だったと思う。いつも力を使っただけであつて、ほんの些細な力の減少にも気付くことが出来た、しかし、最初はほんの気のせいみたいなもので、力の減少が始まって三日くらい経たないとやはり力が衰えてきている事には、いつも遊んでいて力の機微に敏くなつていると言つても最初は全く気付かなかった。

チ「……う……ん……  
やばいかも……」

これが、単なる調子とかの問題ならば、若しくは元に戻るようなものなら問題はなかったが、もし、今はほんの小さな力の弱体化だけれど、これが減少の一途を辿るとすれば待ち受ける未来は……

チ「これ……もしかして、完全消滅

して戻ってこれなかったり？」

嫌な想像が頭によぎり、周りは冷気に覆われていて気持ち良いはずなのに、冷たい汗が頬を伝い落ちて、氷の粒と成り氷の地面に落ちて砕けた。

この一件があたしの危機感をあおった。

……急いで力を貯めて備えないと

……!!!

……ここで一応、説明させてもらう。ちよつと、力が弱くなつたくらいで大騒ぎしすぎじゃない？ って思われるかもだけど、今までにない事が起きたことなのというのは、それほどまでにあたしに衝撃を与えたし、徐々に力が失われていくと言うことはあたしの自然の化身としての源である冷気が減って行く……つまり……

……氷河期の終末を意味していた。

チ「も、もう、痛みがどうか、面倒がどうか、疲れるとか言ってる場合じゃない!!」  
急いで以前の手順を思い出し、さつそく取り掛かるがその前に、前に一度やった後に思いついていた方法を試して見ようと考えた。それが成功すれば、より多くの妖力を短時間で貯めていくことが可能だからだ。

チ「まず、復活（一回休みからの復帰）を早めるためにこの辺りの冷気を集められるように結界を描いておこう……それから、記憶を引き継ぐための陣を組み込んでおいて……つと」

今更だけど、あたしは妖精で自然の化身な

ので、あたいの妖力の属性である冷気と妖力は妖力⇨冷気の関係で繋がっている。なので、周囲の自然が集まれば、おのずとすぐに復活出来る。

チ「確か……あの本には形成する結界陣が極小で且つ精巧であればある程蓄えられる力は多く、制御がしやすく、短時間で貯めていくことが可能になるって、書いてあつたよね……」

そう、そして極小ならば、莫大な力を貯蔵することができ、精巧であれば、制御がより精密になり、力の吸収率があがるとあつただ。そして更に、出来る結晶は小さく、持ち運びやすくもなる。そうとわかれば善は急げである。一刻も早くできるだけ大量に作り上げたいところだ。

チ「陣を小さく且つ精巧にできるあたしだからこそ出来るあの方法を試そう、ただ最初がとても重要でデリケートだからなあ……」

その方法とは、あたし（氷精）が雪の結晶を陣として使用するというもので、とても最初の形成から精度が要求され、更に力を注ぐ時にも注意が必要な作業である。

チ「よ……し!! それじゃあ、早速!!」  
冷気を絶妙にコントロールし、超極小サイズの雪の結晶を作り更に結界陣の形に仕立てて形成していく……

あたし（チルノ）の手の中で淡い青い光が光  
つては消え光つては消え、たどたどしくはあ  
つても、しかし着実に完成に近づく・・・  
・・・が、

チ「・・・よーし、もう少しで・・・  
・・・あつ・・・！」パリッ

あと少しの所で加減を間違つて壊してしま  
つた。しかしそう簡単にあきらめるわけには  
行かない。こっちは存在の消滅がかかつてい  
るのだから。

チ「・・・50回目、今度こそ・・・  
・・・!!」

それから、手の中で何度も、何度も淡い光  
が消えては点いてを繰り返し、ゆうに数百に  
達するかというところでようやく・・・  
・・・

チ「やった!!!! 成功!!!!」

とてつもなく極小で顕微鏡で見なければわ  
からないのではというような結界陣の形をし  
た、氷の結晶があたしの手の中にあつた。

（ちなみに顕微鏡がないのになぜ見えるのか

というところは、氷をレンズの形に作つて拡  
大して見ている）

チ「後はこれに力を注ぎこんでいって、と・・・  
・・・っつ!!!!」

そして、妖力を込め初めてわずか数秒で、  
全身に異変が生じ始めた。

まさかこんなに早いなんて思わなかったけれ  
ど、書いてあつた通り、極小であればあるだ  
け蓄えられる力は無尽蔵で、すぐに入れる力



に限界が来るようだ。

まあ、普通は力を込める時にも全部を持って  
かれないように注意するんだろうけどあたし  
は氷精なのでそこは関係なかった。

チ「まあ．．．．．つつ!!! 関係ない  
って言っても．．．．．!!これは早すぎ  
ない!!!」

そして実に数週間ぶりくらいに、あの、全  
身を無理やり小さな箱に詰め込まれるかの  
ような痛みと対面することになった。

そして．．．．．

チ「ぐ．．．．．!!! つつうううう

うううううつつううううううう!!!

うわああああああああああああ!!!

!!!」

そして、またしても世界は暗転した．．．

．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．

先ほどまでの記憶も持った状態で同じ所に立  
っていた。

あたしは手のひらの上にとってもなく微細な  
氷の粒があるのを氷のレンズで見っていた。

チ「あれ？ 復活早くない？ やっぱ集束  
結界陣のおかげかな．．．」

あたし（氷精）は自然のなかでも冷気の化  
身なので、辺りが氷点下のこの場所では冷気  
を集めることができれば、即復活出来るので  
ある。

そして今の結界は周囲のあらゆるもの（主に  
空気中）を集めることのできるもので、今は

それを冷気に設定していたので、一瞬で元に戻れた。

チ「……………ツていうか、小つつつき！

!! このレンズでようやく見えるレベルじゃん!!」

それは、手元のレンズがあつて初めて見えるほどの、サイズの氷の微細な粒で、レンズがない状態ではそこにあると言われてもわからないほど小さなものだった。

チ「でも、これならいっぱい力を貯められそうね……………そうとわかれば後はこの作業を繰り返していくだけだね」

もう結界陣には、自身の力が結晶化してついて居り、多少の強度が存在するのでもうあまり、慎重にする必要もないのだけれど、念のため力の注ぎ方には注意していくことにしていた。

あと周りから冷気を集めるといってもそのせいでこの氷河期の終わりが近づくということもない。

高々氷精一人分の冷気を集め続けたからと言って、温暖化に拍車がかかるわけじゃない。

チ「同じ作業は退屈かも知れないけれど、今後は疲れることもないと思うし、そんなことを言ってる場合でもないもんね」

そして、再び己の全エネルギーを目の前の結晶に込める作業を再開した。

痛みの件に関しては考えないようにしていた。それにある程度覚悟を決めてしまえば多少はましだし、吸収される時は突然で、強制的に

吸収されて止められないのでやりきってしまえるし、復活時も記憶を取り戻すけど、記憶の中の痛みは過去のもので、のど元を過ぎた熱さと同じで、繰り返すことに抵抗は無かった。

チ「さて、どんどん行くよー！ー！！！！」

それから幾度となく、己自身（氷精）の全てを片時も休むことなく込め続け、そのまま、時は流れ・・・今がいつかもわからなくなった頃。

そして・・・

チ「ついにあたしの姿も、ここまで小さくなっちゃったか・・・まあ、力は大分蓄えたけどさ」

そう、あれから最初につくった力の結晶も手のひらサイズになり、そこから10個ほど、その結晶が出来上がるほどには力を蓄え続けた。

兎に角難しかったのは最初の一個だけで、あとは全く難しくなかった。

そこで、その時に自分で出来る全力で精巧さをあげていこうと試したところ、なんと1回目、最初の結界の数倍の精度で作ることが出来た。

明らかに力の制御の精度が格段に上がっていたのを実感できる出来事だった

（結界のサイズはもうあれ以上小さくできなかつた）

チ「さてと、ここももう駄目だろうし確か大

分前（数万年昔）に読んだ本に冬つという季節のある所があるみたいだったから、そこに行ってみようかな」

などと、手元の結晶を手元で遊ばせながら

、次の住処の事を考えていると、突如、どこからともなく声が聞こえて来た。

？「その必要はないわ、あなたを幻想郷に招待しましょう」

チ「え？ う、うわあああああああああああああああああああああ………、（ん、ん、ん）」

声が聞こえたと思ったら、唐突に足元の地面が黒く開いたと思ったら急に吸い込まれていってしまった。

そうして、上も下も右も左も後ろもわからない状態で真っ暗で無数の目があるような空間の中を落ち続け、次の瞬間には地面が目の前に迫っていた。

チ「えええ？ ツツ!!!」

そして地面に激突し、気を失う瞬間に声を聞いた気がした。

？「あっ！ 間違えた……。まあ、良いか」

全然良くない、「ふうざあけるなあああああああっつっつーっー!!!」と言いたい。

そして、あたしの意識は暗闇の中に落ちた。そこでこの記憶は途絶えた。

これがあたいが、この幻想郷にやってきた経緯らしい。

・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ | ・ |

そして場面は現在に戻る。今あたいは霧の湖の付近にへたり込んでいた。

記憶と力を取り戻した影響とあまりの経緯の突拍子のなさに、しばらく言葉を失っていた。

チ「そうか……あたいは昔一人だったんだね……そして、最強とまでは言わなくても、そこそこ力を持つてたんだ……なんだ、じゃあこれからは別に無理に強がらなくても良いんだね」

今までは、自分の力に限界をうすうす感じていたから、周りに対して強く出ていたところもなきにしもあらずだったけど、もうそんな必要もない。それに弱いからこそそれに甘えずに強さを追い求めるといふ情熱に燃えてたところもあったのに……こんなに中途半端に強いんじゃないかと冷めてしまうというものだ。

じゃあもう、やめてしまおう、最強を名乗るのも、求めるのも。

チ「あたいは結局、最初から最強なんかじゃなかった……もう、こんなのは最強じゃない……し、これはあたいの求める『最強』じゃない」

そして、10個もの六角体の水晶が、最初に見つけた淡く蒼く輝くものも含めてそこに丸く円を描くようにあたりをいつの間にか取

り囲んでいた。

チ「そうか、そういえば……紛失防止のために、それぞれに一つの結晶をみつけたら、その近くに他のものも転移してくるよ  
うに術式を組んでたっけ」

そう、これは一匹の氷精の若干冷めつつも一瞬の、若しくは永遠の輝きを持つ物語……

## 第二話 氷留

チルルノ

あたいはまず今ある力で、自分で生活出来るように基盤を整えることにした。

そんなことしなくても、生きていけるんだけど、規則的な生活のリズムを作りたいと思っただことが一つ、と人里の人たちがそうやって暮らしているのがなんか面白そうだなと思っただ事が一つ、そしてある程度の知能があつて厄介だなと思わせることで人妖どちらからもなめられないように牽制するのが一つ、の三つの理由があつた。

そして、あたいは一つの仕事を選択した。

チ「ここは、氷の妖精のあたいらしく、かき氷屋でもやっておこうか・・・別にあたいは年中何か必要なわけでもないし、ちよつと稼げれば良いだけだからね」

それに今は初夏で、これから夏に入つていこうという時期にあたるからちようどいいだろう。

あたいは、10個ある妖力の結晶体の内の一個で淡く碧色に輝き、吸収に特化したものを、霧の湖の隅のほうに投げ込んだ。

これで後は数時間ほど待てば、その辺り一帯・・・正確には半径8メートル程の円を描いて、凍り、そして凍った氷は不純物の無い純粋な氷となつていくという仕組みだ。

その理由は、この結晶に組み込まれた結界陣が周りの不純物と温度を妖力として自身に蓄

えるように、術式が組まれているからだ。

あとは、氷を削る器具と店舗と味の種類をどうするかだけど。――

チ「さて、と目途も立つてきたし、店の名前  
．．．．．何にしようかな？流水屋？  
．．．．．いや、氷結屋も捨てがたいかな。  
．．．．．あ、でも氷柱屋つちらなんかも良いね。  
．．．．．」

幾つもの案が浮かんでは消えていく中で、あたいは一つに決めた。

チ「うん．．．．．『氷河屋』にするか」  
と、今後の目途が立つたところで、どこかから声が聞こえて来た。

その声に、今まで考えていた事を中断して、そっちの方に意識を向ける。

大妖精Ⅱ大

？「チルノちゃん!!! 用事終わったから来たよ〜〜! あそぼ〜〜!」

と、その声をかけて来たのは大妖精という、翠の髪を黄色のリボンで左側にまとめたサイドテールに青いワンピースを着たあたいの親友だ。

大「．．．．．え!!? あれ!? チルノちゃん!」

そういえば、一人だったのは過去の話だった。

この幻想郷に来てからはいつも仲間と遊んでいたっけ。

まあ、別にその時は初めから一人でそれに慣れていたのもあつてか何とも思つてなかつたけど、仲間という楽しさを知った今から思え



ば、結構寂しい奴だったのかもしれない。

大「えっ？何の話？」

チ「ううん、なんでも無いよ」

大「……………っは!!! そういえばチ

ルノちゃん、その姿どうしたの!？」

大ちゃんがあたいの姿を見て驚いている。

まあ、無理もないか、あの結晶に触れる前と後じゃあ、姿が結構違ってるから……………

(それでも分かるのは、気配でだと思っ)

前の姿は髪は水色で、ウエーブのかかったセミショートヘアーに青い瞳、青の大きなリボンを付け、服装は白のシャツの上から青いワンピースを着用し、首元には赤いリボンが巻き、水色のストラップシューズをはいていたけど、

今は、ウエーブがかかっているのは同じでもロングで、背も前よりも高いし、青い瞳は透明度が若干増して、空色に変わっているし、服装も白のシャツに青いワンピースだったのが、そでの短い白のTシャツと短パン（スリークオーター）、青と白のラインが襟に沿って入った左腕の側だけ長い、丈がひざ上までの着物をTシャツの上から着ていて、帯も若干長いという格好だからだと思っ。

それと自分で言うのもあれんだけど、体も以前と比べて凹凸が分かるほどには成長していると言っか、まあ元に戻ったと言っか。

大体、人間で言うところの17歳前後？

しかし、氷精の羽根はそのままだからあたいだと認識出来たのもあるんだろう。

(あと、あたいの気配があるのにその場に—

人しか居なかつたらほぼ確実にそいつだろう」  
大「なんだか、全体的に少し大人っぽくなつたというか……」  
大「ちやんが上から下までを見て折り返して下から上を見ていく、その見ていく途中のあ  
る一点に目を止めながら意味深に言った。

(何にとは言わない)

「というかこれがもとの姿なんだけどね。」

チ「……まあ、いろいろあつたんだよ、いろいろと、あたかもさつき知つたばかりなだけだよ」

大「ふうん……そうなんだ、でもなんだか、いつものチルノちゃんと違うみたい」

チ「ま、多少違つたところで、あたいはあたいな事には違いないよ？だからいつもと変わらず接してくれると、あたかも嬉しいかな」  
そんな風に、あたいの思いを伝えると大ちやんも笑顔でそれに応えてくれた。

大「うん!!! チルノちゃんがどんなに変わつてもチルノちゃんはチルノちゃんだもんね！」

チ「うん、そうだよ！」

チ「あはははっ!!」大「うふふふふっ！」  
そうして少しの間大ちやんと笑いあつているとあたいはふと疑問が浮かんだ、大ちやんとはこうして会つたけど、他の皆はどこにいるんだろう。

別に忙しいなら全然構わないけど、出来る事なら会っておきたい。

そこであたいは大ちやんに他のメンバーについて聞いてみることにした。

チ「ところで大ちゃん、他のみんなもまだ何か用事？」

大「ううん、わからないよ？ チルノちゃん以外とは今日は会ってないから」

これはもう本人たちに直接会ってみるしかないさそうだ。

その際にどうやって探すかが問題だけど、そこはちちゃんと方法があるので別に心配はいらない、あたいの持つ10の結晶体の中には、探知に特化したものもあってそれなら、探したい相手の持ち物や身につけている物などがあれば、そこから相手の妖力を結晶が吸収し、その妖力が近くにあれば反応してくれる。しかも、転移に特化した物もあってそれはある程度の距離にその反応した存在が居れば、その座標に直接飛ぶこともできるので、すぐに見つかるだろう。

チ「これは、直接本人たちに会ってみるしかないな……で、最初はみすちーかな」  
そう言つて、歩き出そうとしたところで、大ちゃんが驚いた様子で呼びとめる。

大「え!? チルノちゃん、みすちーの屋台の場所覚えてるの？」

チ「うん、まあ大体は。あつ……」  
そこも前とは違うところか」

あたいはあの結晶に触った時に、記憶と一緒に妖力の方も取り戻したせいかな最近の事をまともに覚えていられるほどには記憶力が上がった。

大「それでも、そこに行っても会えるかどうかかわからないよ？ どうするの？」

チ「そこはあたいに任せてもらえばいいし、

別に心配する事無いよ」

大「だったら良いんだけど・・・」

そろそろ、方針も決まったところで、あたいたちは、みすちーことミステイア・ローレライの営む焼きヤツメウナギ屋の移動式屋台のポイントの一つである迷いの竹林へ飛んで行った。

チ「あ、そうだ！　じゃあ道すがら、あたいが幻想郷に来る前の話でもしてあげるよ」

大「ほんとう!?　それは聞きたいかも!!」

なんだか不安そうにしていたのでその気分転換に、今までの経緯を語ることを提案すると、大ちゃんもあたいのこれまでの話を聞きたいみたいなので、あたいは目的地に向かう飛行中に自分がこの幻想郷に来るまでの経緯を大ちゃんに語ることにした。

そして、あたいが何故、力を蓄えようと思っただかのところまで話したところで、ミステイアが屋台をやっているところのついに辿りついた。

チ「——つてことがあって・・・つと、着いたみたいだね」

大「・・・でも、居ないみたいだね」  
確かに、高度を落として近づいてみても、それらしきものは見当たらない。

どころか、鬱蒼と竹が生い茂るばかりである。しかも、もう夕暮れに差し掛かっており、その黄昏に入る前の状態が、不気味さを林に追加していた。

そう、ここは迷いの竹林、群生する竹が凄ま

じいスピードで成長するのと、霧が深いので一度入ったら方向感覚がつかめず、迷い入った者を返さない、しかもここには、凶暴な妖怪も存在するため、一度入り込めば二度と出られない場所として、有名だが、あたいたちはその入り口に用があったただけなので、全く関係ない。

大「ここには居ないみたいだけど、この後どうするの？」

チ「・・・・・・じゃあ、手間かけて悪いんだけど、あたいと一緒にみすちーの痕跡がどこかに残ってないかさがしてくれないかな？それを元にしてあたいが居場所をみつけるからさ」

大「うん、了解だよ!! みすちーがここにいた痕跡を探せばいいんだね」

それから、二人でみすちーの痕跡を探し始めた。

本当はその場に残留した妖力でも良いはずなんだけど、ここを離れてから時間が経ってるのか、妖力が薄まっていたので、痕跡から妖力を辿ることにした。

・・・・・・

それからおよそ数十分後

大「あつたよー!! チルノちゃん!!

これってみすちーの羽根じゃない？」

チ「・・・・・・？ うん、そうだね! ありがとう。これで探せるよじゃあ、その羽根をこつちにちょうだい？」

大「ちーちゃんが見つけてくれたのは、ミステイアの妖力をしっかり感じ取れる羽根だった。」

なぜ、みすちーのだとわかるかと言えば、この場にかすかに感じる、みすちーの妖力と同じ妖力の気配がその羽根から感じるからだ。

大「うん、これでいい？」

チ「うん、ありがと」

大「ちやんから羽根を受け取り、探知に特化した淡く鈍色にびいろに輝く結晶を取り出し、その結晶に羽根を吸収させた。

それと同時にどの方角から力を一番感じるか、転移出来る距離にいかがわかった。

チ「・・・近いね。これならすぐ着くし、飛んでいこう」

大「え、？ もう、わかったの!？」

チ「大体の方角と距離はね。後はその方向に進んでいけば着けるよ」

すぐに転移することもできるけど、そのやり方はちよつと力を使ってしまうからあまり使いたくない。

だから、その方法はよほどの緊急時にしか使わない。

そして、そこからまた二人で目的地までのんびりと飛び、その道中であたいが幻想郷に来るまでの話をし終えて、数分が経った頃目的地が見えて来た。

大「え？ ここって・・・人里？ あそこから近いって、人里のことだったの？」

チ「うん、この方角と距離からして人里ここだろうなとは思っていたけど、やっぱりそうだったね」

おおよその距離と方角から、恐らく人里の辺りだろうとは思っていたけど、その予想は的

中した。

そしてその人里の中へと、周りに誰もいないことを確認して、そつと降り立つ。

降り立ってからは、より一層正確な位置が分かった。

対象に近づけば近づく程この結晶は反応するし、より正確な座標もわかるようになる。

人里はその規模に見合ったそれなりの人の活気を見せていた。

子供たちが仲間同士で遊んでいたり、大人たちが仕事や世間話をしていたり、買い物客がちらほら見えたりする中に、かすかに人外の者たち、人ならざるものの姿も確認できた。

主に、頭に小さな葉っぱを乗せているもの、頭の側面から二本角が生えているものに尻尾が九本のもの、自身のそばに人魂のようなものを従えた白髪の少女……

など様々だが確実にこの人里に入り込んでいた。

あと、程良く人口がありばらついている。

人里は、この幻想郷に於いて人妖のバランスを取るために存在している。

人が妖怪を恐れ、時として妖怪が人を喰らうことによって成り立っている。

しかし、妖怪の方が人を喰らい過ぎて人口が減っては畏れを得づらくなり、逆に人が幅を利かせ、妖怪が減れば、人里を災害から守る者が無くなる。

何故守るかというと、先ほどの理由と同じで人が減ると畏れを得づらくなるかもつと悪く

して完全に人が居なくなると妖怪も存在出来なくなるからである。

よってここでは、一定の人口を保たれている。

そんな人里の子供達が遊ぶその広場のような場所から離れた大通りの曲がり角の人気無い路地裏にあたいと大ちゃんは降り立った。

・・・へえ、稗田邸の入口か・・・

・・・また珍しいところにあるね。

でも、あそこなら人通りもそこそこあるか

・・・女中さんとか使用人とかまあ、

流石に仕事中に屋台に行かないだろうけど。

仕事終わりのすぐ後に、目の前に美味しそうなおいの屋台があれば立ち寄ることもあるかもしれないし、そうなると案外悪くないのかもね。

それに、あそこには行こうと思ってたところだしちように良いや。

それじゃ、さっそく用件を済ませに行きますか。

およその方針も決まったところで、あたいと大ちゃんは稗田邸に歩き始めた。

---

そして、歩き出し

て間もなく、大ちゃんが不思議そうに声をかけて来た。



大「ねえ、チルノちゃん、さつきは隠れてたのに、いまは普通に大通りとか歩いてるけどいいの？目立たない？」

いま、大ちゃんが心配しているのは、自分達の容姿が人とはかけ離れているから（背中の羽根とか）目立つことを気にしている。

この人里に混じっている妖怪たちは皆各々の方法で人間に正体がばれないように気を付けている。葉っぱを乗せた者なら変化によって、頭に角が二本生えた者なら自身の存在を薄く分散して、人魂を従えた者は人魂は人には見えないので何もする必要がなく、尾が九本の者も己の姿を人からは尾が見えないか、気付かれないよう妖術を操るなど、皆そうやって人目をしのんでいる。

そしてそれは、この人里に妖怪が表立って干渉するのはこの幻想郷のルールに反するからで、この幻想郷の支配者であり創始者の妖怪の賢者や、博麗大結界を守護する博麗の巫女に目を付けられ、退治されてしまうからだ。と言っても、別に妖怪ならなんでもかんでも受け入れないと言うわけではなく、半人半妖が寺子屋の教師だったり、地底の鬼が呑みに来ていたり、山の天狗が新聞を、迷いの竹林の医者や薬を妖怪が売りに来ていたり人間の間を割るという割には案外人間以外も出入りがある。

まあ、要は下手な騒ぎさえ起こさなければ特に問題は無い。

そんなわけで、あたかもその例にもれず既に結晶で、音や、臭い、光を消失させる（二人

の間は例外)術式を発動させ、自分の姿を大  
ちやんごと隠していた。

そんなあたいの手にはほのかに墨色に輝く結  
晶が握られている。

まあ、いまは夕暮れ時だし、いらない手間か  
もしれないけど、念には念をだ。

結晶を懐にしまったあたいは、そのことを大  
ちやんに説明した。

大「・・・でもそれなら、ずっとそれ  
かけてれば良かったんじゃない?」人に  
飛んでるところを見られるかも知れないし」  
チ「そうなんだけど、出来るだけ力使いたく  
ないからさ、確かに無尽蔵にあるけど念には  
念を入れて、使う必要がない時には使わない  
ようにしてるんだよ。さっきは人に見られて  
いないか確認しながら降りてたしね。まあ、  
誰かが妖精を見たところで騒ぎになんてなら  
ないから別に良いっちゃ良いんだけど・・・  
大ちやんだって、別に姿を隠したりして無い  
でしょ?」

大「あ、確かに・・・あつ・・・  
・・・なんか大きいお屋敷が見えて来たよ!  
?あれじゃない?」

大ちやんが声を上げて指をさす先をみると  
そこには、確かにそこには如何にも歴史を感  
じさせる、広大な屋敷が建っていた。

そして話をしていくうちに目的地に着いたら  
しい。

その屋敷の入口で、夜雀の屋台は営業中だっ  
た。

二人で中をのぞいてみるとそこには目当ての

人物が屋台の女将として働き、その女将が  
たい達に気付かず、普通の客に声かけるよう  
に声をかけようとして、目があつた時に驚き  
の声をあげた。

ミスティア・ローレライⅡミ

ミ「いらつしやいま・・・・・・・・・・  
・・・・・・・・え!? 大ちゃんに・・・・・・・・チルノ? 二  
人ともどうしたの? うちの屋台に食べにき  
たつてこと? っていうかチルノ! その格  
好は?」

一瞬の困惑のあと、疑問を次々と口にする  
みすちー。

大「みすちー!! ま、まずは落ち着いて!」  
チ「・・・・・・・・順を追って話すよ」

あたいはみすちーにこれまでの経緯、あた  
いが霧の湖で、ある結晶を拾って記憶と妖力  
を取り戻したあと、大ちゃん（大妖精）に会  
い、それからみすちー（ミスティア）を探  
すため、迷いの竹林の入り口付近に行ったこ  
と、そして、そこでみすちーの羽根を拾い、  
それを元にここまで辿りついたことなどを話  
した。

ミ「ふーん、そんなことが・・・・・・・・で  
・・・・・・・・これからどうするの? あたしは見て  
の通り屋台を出さなきゃだし・・・・・・・・構  
ってあげられないよ? お客さんとしてなら  
大歓迎だけどね?」

みすちーがあたいの話を聞いて事情を理解  
したその後にこれからどうするのかを、若干  
申し訳なさそうにしながら、自分は一緒に行  
くことが出来ないと言う旨を伝えてくる。

チ「そのことなら心配いらぬよ。丁度この稗田の当主に用があつたし、ちゃんと屋台には客として入るよ」

大「え？ 稗田の当主って……阿求さん？ なんで阿求さんに用があるの？」

ミ「それに、客として来るって……その、お金は？ あたしだって妖怪だって言っても屋台の遣り繰りがあるし、流石にタダつてわけにはいかないんだけど」

チ「そこらへんも大丈夫。少し待ってもらうかもだけどちゃんと払うし、稗田の当主にはそのお金を稼ぐ上で必要な事を相談しにいくなりね」

そう、稗田邸にはいずれ行くつもりだったが、偶々みすちーの屋台が近くにあつた事もあり、丁度いいから、一緒に用を済ませてしまおうと思つたのだ。

その用というのは、金銭関係ということからもう想像できているとは思うが、例のかき氷屋の屋台を人里に出す許可を出してもらいたいのである。

実際に許可を出すのは他の人間かもしれないが、稗田は人里でも名家であり、更に彼女（稗田阿求）の執筆する幻想郷縁起は妖怪についての詳細がまとめられている書物である。

その名家の当主が人里の有力者にかかけあえば、ある程度の要求は通るだろうし、変に正体を隠したりして人目を忍ぶこともなく、何より稗田の公認ならば妖怪の賢者に目を付けられにくいだろうと言うわけだ。

それにあちら（縁起の編纂者）としても新た

に加わった妖精の情報は知りたくないことだろう。そのインタビューに応じ、ヤツメウナギ屋のお代を持つ代わりに相談にのってもらおうもとい、こちらの願いを聞いてもらおうという算段だ。

なのでまずはこの場までご足労頂くことにした。

これでも妖精だけあつて悪戯は得意だ。

大「でも、どうやって出てきてもらうの？

いまは姿を隠してないみたいだけどこのままの姿じゃ、出てきてすらくれないんじゃ…」

チ「そこはホラ、妖精だけにちよつと悪戯をしかけようかなつて」

ミ「え!? 悪戯って何するつもり? 下手

なことされてここにいられなくなるのは困るんだけど!」

チ「そんなに心配しなくても大丈夫だつて! ちゃんと考えてあるから」

満を持ってそう宣言し、あたいは姿を再び消して稗田邸の内部に入り込むと――

夕焼け空が残るも、星の瞬く夜の訪れと共に去つていこうとしている夕暮れが見事なグラデーションを描く空を背景にした稗田邸の庭に出て来た。

するとそこから見える縁側の中の和室で一人机に向かい書物をしたためている和装の美少女の正座姿が目に入る。

今は初夏であるので、雨戸や障子をあけているんだろう。

誰であろう、その和装の少女こそが稗田家九代目当主、稗田阿求その人である。

そこに少しの間目を向けていると、その少女の声が耳に入ってきた。

稗田阿求Ⅱ求

求「あーあーあああはあああ・・・んんううん・・・。いやー・・・。あ・・・、流石に没頭しすぎたかなあ。あまり根を詰めすぎても良く無いし少し休憩しようかな。切りも良いし」

などという言動と体を伸ばす動作から、察するにかなりお疲れなご様子で、悪戯をするのが気が引けたが、こちらとて早めに用を済ましてしまいたいのと、疲れている今なら悪戯という名の誘導が成功しやすいだろうと、実行に移すことにした。

チ「うん、申し訳ないけど、こっちまできてもらおう」

姿を隠した状態で、屋敷内に入ると机に積みあがっていた書類の一番上を風で舞い上がったかのように引っ張りつつ、そよ風程度の冷風をおこし、本人の目に入るように外に持ち出していく。その際にも風に煽られている演出は欠かさない。

(手前味噌だが、かなり上手いと思う)

それを見てとった阿求がその紙を取り戻そうと立ちあがり追いかけて来た。

求「あれ!? いけない!!! せつかくまと

めた縁起用の資料が・・・!! 後は綴じたら完成なのに!!」

どうやら奇しくも書類の正体は幻想郷縁起らしかった。

まあ、不思議じゃないと言えばそうかも知れ

ない。

何せそれが本業だし。

そうやって、追いかけてくる様を楽しみつつ

(結構可愛い) あたいは阿求を外の稗田邸の

入り口まで、おびき寄せろ。

阿求が外に出て来たところで、あたいは消失化を解いた。

するとそこには急に現れたことに驚いたのか目を見開いた阿求の姿があつた。

その阿求の口から「あつ」と声が漏れ、手で口を抑える。

そして、今までの事を思い返し、状況を察すると少し顔を伏せた後、顔をあげて若干威圧的かつ営業的な笑顔を阿求は向けて来た――

―それはそうだろう、誰でも仕事の邪魔をされたら怒るに決まっている。

求「あら?? 何で妖精がこんなところにいるのかしら・・・ひよつとして道に迷ったんですか? 妖精がこんな人里にいらんておかしいですもんね・・・。しかし残念ながらあなたたちに道を教えてあげる余裕はこちらには皆無なので早々にお引き取り願えますか?」

その気配にひるんだ大ちゃんが、大急ぎで阿求に謝る。

大「ご、ごごごごめんなさいいいー――

!!、消えます!!、すぐ消えますくく!!  
!!」

そんな大ちゃんの手を掴んで引き留め、――

――その間にも大ちゃんは「ふっふっ……」と足で地面を削るけどただ削るだけだった――

あたいは用件を伝えるために話しかけた。

チ「まあまあ、そう殺気立たないですよあたいたちは、消えないし、別に迷子でもないよ」  
求「……………では、何のご用なのでしょ

う？」

どこかイラついたように眉が動くけど、しかしそれが隠れてしまいそうな上品さで返す阿求。

チ「実は、あたいこの人里でかき氷屋を出してそこで暮らしたいと思ってるんだ。そこでは相談なんだけど、幻想郷縁起にあたいのことについて追記してほしいんだよ。そしてそのことを公に広めて欲しくてね……………それに：今はすぐそこみすちーのヤツメウナギ屋台もあるし、そこで食べながら話を聞いて欲しいと思つてさ……………勿論、お代はあたいが持つよ？」

そこまで、あたいが言つたところで阿求はようやくあたいの姿を上から下まで、今日の初めに会つた大ちゃん（大妖精）がそうしたように見渡した。——なんか、若干動きが被つて軽くデジャブだった——そして今までのあたいの言動を思い返して、更に幻想郷縁起にまとめたあたいの情報と大分食い違つていることに気付いて興味がわいたのか、先ほどとは打って変わって半ばお願いするように、あたいに取材を申し込んできた。

その目は稗田としての使命、自身の好奇心、知識欲、そのどれもを帯びている気がした。求「なるほど、確かに私の纏めた縁起の内容との相違がみられるようですね……………」



これは内容を改めなければなりませんし、私個人もあなたに興味がありましたので、正式にこちらからも取材をお申し込みしたいと思えますがいかがでしょうか？（・・・なにがあつたらここまで変わるのかしら？）」

チ「いかがも何もあたいから言ったことだし、是非お願いするよ。それとさっきの要求だけど」

求「もちろん、そんなことでよろしければ私としてもお力添えするのは吝かではありませんし、もちろんその内容は公表させて頂きません」

チ「うーん、それだけじゃなくてさ」

求「はい？」

チ「ヤツメウナギと一緒に食べようってのも

要求のうち何だけど？」

求「——!! ふふふふ、有難う御座います。

それではお言葉に甘えてご相伴にあずかります！」

一瞬間喰つたような顔になり、それから柔らかに微笑んでからこちらの提案に肯定の意を示した。

それは恐らくこの取材に対する興味深さ故のことじゃないかとも思う。

なぜなら、この編纂者の纏めた幻想郷縁起に記されているチルノという氷精の取るだろう行動とあたいが今、取った行動があまりにもかけ離れていたからだろう。以前のあたいなら十中八九取ることは無い行動だからだ。

大「チルノちゃん、大丈夫？ 怖くない？」  
先ほどから静か（もともとそんなに騒がし

くは無いが)だと思つたら大ちゃんはさつき  
の、阿求の空気にまだひるんで、遠巻きにし  
ていたようだ。

チ「別に怖くなんてないよ。というかそもそも  
あたいた達と人間じゃ力の差は歴然だし、手  
の出しようがないじゃん」

大「そ、そんなことできないし、なんだか雰  
囲気に圧されちゃうし・・・怖いし」

チ「大ちゃんは優しくしておとなしいし、そう  
言う発想にはならないからしようがないか」  
とあたいが言葉を発した後に大ちゃんがぼ  
そりと

大「でも、チルノちゃんや他の仲間たちの為  
だったら流石に仕方ないけど」

という呟きはおろか、大ちゃんこと大妖精  
というこの子の芯の強さと本性をこの時に気  
付くことは無く後になって、とことん思い知  
らされるとはこの時は夢にも思っていなかつ  
た。

ということとはさておき、阿求の取材に応じ……  
と言うか自分から提案して、その話し合いに  
於いて、この状態に至る経緯や幻想郷以前の  
記憶、一介の妖精には過ぎた力に今後の身の  
振り方や自身の客観的な危険度、友好度、更  
に周りから見た危険度、有効度——  
因みにこの場合の周りはその場にいたみすち  
ー(ミステリア)や大ちゃん(大妖精)であ  
り危険度や友好度は主に人間に対するものな  
どが取材の内容だ。

あ、あとはあたいが運営する店の事とかかな。  
求「ということは、今は先程のように必要に

かられでもしない限り、人間に悪戯したり、  
危害を加えるようなこともないし、多少は、  
当たり障りが無い程度には協力しても良いと  
さえ思っているんですね？」

チ「うん、まあね。だつて基本、人里に住ま  
わせてもらうんだし、ご近所どうしは助け合  
うものなんでしょ？それに、悪戯は今ではや  
んちや過ぎたんじやないかって思うよ。後悔  
は全然してないけれど反省はしてるかな。今  
までがしよがなかつたとしてもこれからは  
やめていこうかなつて。まあ、以前のよう  
この手元にある結晶が紛失か、消失か、破壊  
されるとかしてあたいから失われたら元に戻  
つちやうかもだけどね・・・だからさ  
、そうなつてたら何らかの要因があつたから  
以前のチルノ（氷精）に戻っているんだと思  
つてもらつたほうがいいかもね」

求「なるほど、」

といった風な内容を話し合い、阿求が話を  
紙と筆で纏め、それも終盤に差し掛かろうと  
言う時

——ぐううぐうとお腹のなる音がした。

求「／／／・・・う・・・失礼  
しました・・・」

と顔をほのかに赤らめながら阿求が小声で  
つぶやいた。これは流石に恥ずかしかったら  
しい。

別に気にしなくても良いと思うが、恥じらう  
ようすも可愛いと思つたので敢えて何も言わ  
なかつた。

と言うか申し訳ないくらいだった。

話しは食べながらという話しだったはずなのにそれも無しについて長く話し過ぎたようだ。チ「いや、こちらこそごめん。屋台で食べながら話そうって流れだったのに、こんな

食べ物の屋台がそばにある空間ですつと

立ち話なんてさせちやつて……そりやあ

お腹がすいて当然だよね……その、言い

訳になつちやうけど、あんまり食い付き

が凄いもんだから、つい……じゃあ、そ

ろそろ食べようか」

大「あのく……チルノちゃん

……そのお……」

チ「うん、大ちゃんもいつしよに食べようよ  
当たり前じゃん」

大「うん!!! ありがとう!!!」

チルノちゃん!!!」

さつきから大ちゃんもヤツメウナギを始め

とする様々な食材に目が奪われているのを見

てたのであたいが大ちゃんを誘って、三人で

、みすちーの屋台を堪能することになった。

ミ「さつきから、良い反応してくれるじゃな

いの!! これは張り甲斐があるね!!!

……さあ!! どれにする? ご注文

、承るよ!!」

そうして、しばらくの間、みすちーの焼き

ヤツメウナギの屋台からは真夜中まで煙が消

えることは無かった。



### 第三話 氷流

朝日が眼に眩しく鳥の鳴き声がさわやかに朝の訪れを告げる。

澄み渡る青空に申し訳程度に白い雲が浮かんでいる。

その空の下稗田邸の一室、広い和室の真ん中の布団の中であたいは目をこすり上半身を起こした。

あの後、夜半頃には満腹になり、話も落ち着いて、その場は解散となった。

大ちゃんはその自分の寢床に帰っていき（まだ阿求に恐れを若干持っているようだった）、みすちーは店の営業中であり、あたいはというと阿求に稗田邸に一泊していつてはどうかと誘われ、最終的にその誘いに乗ることにした。

最初はあたいは気にしないし、どこでも寝れると言ったんだけど、幻想郷縁起の編纂に協力してくれたこと、また屋台で御馳走になったことへのお礼がしたいとのことだった。しかし、そのことに対する要求がもう通っているから、別に気を使わなくても良いと言ったのだが、縁起の参考人として扱った以上、客人としても扱わないと稗田の名折れだ。とまでいわれたら断るのも、変な話かも知れないと、そのご厚意に甘えることにした。

そして、実際に寝てみるととても寢心地が良く、横になるとたちまちに眠りに落ち、そして今朝にいたると言うわけだ。

チ「ふわあああ〜〜〜・・・・・・・・良く寝たあ

くく・・・ さて、今日はどうしようかな……  
：昨日はちゃんと約束してくれたしな・・・  
・・じゃ、その里の有力者のところに行こうかな。それと昨日は結局みすちーの所に行けなかったから他のメンバーの所にも時間があったら行ってみようかな」  
そう、昨日は偶々最初に会おうと思っただみすちーの場所が、行こうと考えていた稗田邸のそばにあつたため、そこで済ませてしまおうと思ひ結果的に長引き、そのまま一夜を過ごしてしまったのだ。

とそこまで考えていた時に襖の外から声をかけられた。

女中「チルノ様。 当主から、朝餉の用意が出来たので居間までお越しくださいとのこと  
で御座います。 いつでも良いとの事ですので、無理のない時、チルノ様のお時間の都合の良い時に、お越しく下さい。それではわたくしめはこれにて失礼いたします」

チ「いや、もう行くよ。今、目が覚めた所だし、待たせるのもなんか悪いしね」

布団から起き上がりながらそう応えると、あたいは布団をたたみ襖を開けてその部屋を後にした。

チ「それにしても・・・長い廊下だなあ。 どんだけ広いんだ……この屋敷……掃除とか絶対大変だろうな」

この屋敷の広大さに感嘆し、管理の大変さを想像しながら、昨日も一応通された居間への道を歩いていた。

するとなぜか、自分の影に目を落

とした時にふとした違和感を感じた。

違和感の正体は何とも漠然としているけど、何か一瞬己の影が不自然に揺らいだ？かのようだった。

チ「まあ、気のせいか……」

とその時は対して気にも留めずに歩いて行った。

そして阿求の待つ、朝食が並べられているであろう部屋の襖をあけ、そして中に入っていた。

求「お待ちしていましたよ。それでは頂きましょう」

食べずに待っていたのだろう。阿求の前には手つかずの朝食が机に並べられたままになっていた。

そのようすを一瞥するとあたかも朝食の席に着いた。

チ「……先に食べてても良かったのに……まさか待つててくれていたとはね。こんなことならもうちよつとぐらい急げば良かったな」

求「構いませんよ。仮にもお客様であるチルノさんより先に自分が食べるわけにはいきませんし、ついさつき来たようなものですから」  
微笑みながらあたいにそう返すとあたいに朝食を勧めてきてくれた。

あ、因みに昨日の飲み会で阿求とはかなり打ち解けている。

求「それに、そう言うことなら早く食べて頂いた方がこちらとしても助かります」

チ「ああ、ごめんね？気を使わせちゃって……それじゃ……いただきます」



求「はい・・・いただきます。」

その後、食事を済ませてからあたいは阿求と今後の事などを話した。

求「それでは、まずは有力者の元に？」

チ「うん。回ってこようと思うよ。里の顔役の人たちに会って直接態度で示したいかなって」

求「それでは御一緒させていただきます。

丁度私の方も幻想郷縁起の更新内容を伝えたいと思っていましたし」

チ「そう、それなら一緒に行こうか」

求「その後はどちらに？」

チ「うくくくん・・・仲間たちに近況報告・・・かな」

その後一口二口、会話をしてそれぞれ出発の準備を済ませに行った。

まあ、あたいは着の身着のまま（寝巻はもう着替えた）で良いけれど、阿求にはまだ支度があるみたいだったから、稗田邸の門前で待つことにした。

そして待つこと数分で、阿求は現れた。

その服装は緑色の長着に花柄がある黄色い羽織と赤色の袴、髪型はセミロングで髪飾りは、黄色い羽織にある花柄と同じ椿という出で立ち、背中に大きい風呂敷で包まれた葛籠<sup>つづら</sup>を背負い、手にも小さめの風呂敷に包んだ何かを持っている。

チ「意外と速かったね。もうちよつとゆつくりでも良かったんだよ？」

求「いえ、あちら様をお待たせするわけにもいきませんので・・・」

チ「ふーん……所でその荷物重そうだけどあた  
いが持とうか？」

求「いいえ、このくらいは別に何ともありま  
せん。妖精とはいえ客人にそんなそば仕えみ  
たいなことをさせるわけにはいきませんから」

……と言いつつも、額に汗がうつ  
すら浮かんでいるのが見える。

「意地っ張り……」自分にだけ聞こえる声で呟く。

そこであたいは阿求を——お姫様だつこの  
要領で——持ち上げた。

求「／／／!!?い、いきなりなにを……  
……」

可愛い顔をほんのり赤く染め、恥ずかしさ  
で尻すぼみになっていく言葉を聞き届けたあ  
たいはそれに返事をかえず。

チ「あたいがそのまま、あんたが重い荷物を  
背負ってるのに涼しい顔でいたらあちら様の  
心象に良く無いから……つと言うわ  
けでここからは手っ取り早く飛んで行くから」

求「まっ、待ってください!!心の準備があ  
……って、きやあっ……!!!」

あたいは阿求の制止も構わずに空に浮かび  
、飛んで行った。飛んでいる時に悲鳴は歓声  
に変わっているのを

あたいは聞き逃さなかった。まあ、喜んでも  
らえて何よりだ。

——そして、里の有力者たちへの挨拶  
は思いの他とんとん拍子に進み、あたいは晴  
れて里に定住出来ることになった。

扱いとしては、里の守護者に近いそうだが、  
守護者になるつもりは毛頭ないのでそれは辞

退した。

まあ、自分の住んでいるところだし危なくなつたらそれなりに対処するけれど……でもそんな大層な肩書は要らない。

今回の円滑な交渉は阿求の送ってくれた手紙などの根回しがあつたのと、稗田の当主に協力的だつたことが要因のようだつた。

改めて権力の凄さに驚嘆すると共に自分の行動が間違つていなかった事に安堵を抱くのだつた。

チ「まさか、あんなにうまくいくとはね……願つたりかなつたりだけど」

求「そうですか？……チルノさんの人（妖精）柄が伝わった当然の結果だと思えますよ？」

チ「またまた……まあ、何にしても上手くいって良かったよ」

求「そうですね。……それではこれから、ご友人のところには？」

チ「うん、そのつもりだよ——つと、その前に……その敬語なんかならない？もう客

とそれをもてなす当主の関係？も終わったし、あたかもこれからこの住人になるんだしさ気楽にいこうよ」

求「……そうですね、じゃあ……これからよろしく!!チルノ!!!」

花が咲いたような笑顔でそう返す阿求に、心が少し暖かくなった。

こんな風に幻想郷の全員と仲良くなりたいたかすかに思った。

——それからはお互いに、阿求は屋敷に

あたいは仲間探しにそれぞれ向かった。

……さてと、まずは大ちゃんかな  
……大ちゃんなら昨日も一緒にいた  
し妖力の波動は覚えているし、(結晶に) 覚え  
こませているから位置は大体わかる。

あとは他のメンバーだけど……

チ「他の仲間って、確かに大体いるところわ  
かってるけど、気まぐれだからな……

……ま、時間を置いて大ちゃんの所に行け  
ば大体集まってると思うんだけど……。

それなら、みすちーの時のように、大体普段  
いるところに行って何か痕跡が無いか探せば  
良いか」

そう、あたいもそうだったけど大抵大ちゃん  
たちかみすちー(ミステイア)の所にいる  
可能性が高いので、そこを次に目指すことに  
した。

そして、あたいはまた飛行して、それぞれの  
仲間に会い今の現状を話した。

以下、それぞれの特徴と話をした場所及び、  
それぞれの反応である。

・リグル

太陽の畑にて(当然ここでは花を踏んだり  
傷つけたりしないよう気を付ける)、人間の  
子供位の首元にかかるかからないか位の緑  
色のショートカットヘア、甲虫の外羽を模し  
た燕尾状に分かれたマントに白シャツに紺の  
キュロットパンツ姿が見え、これはもう完全  
にリグルだと確信し、話しをしに行くことに  
した。

するとどうやら見回り中とのことだった。

リグルルリ

リ「やあ！ チルノひさしぶ……………」

!? な、なんか変わったね……………  
ずいぶんと、その……………なにかあった？」

チ「やあつ！……………まあ、さして大したことも無かったと言うか、元に戻っただけ  
というか？」

リ「へ、へえ……………(汗) そうなんだ  
……………で、今日はどうしたの？」

チ「実は、——かくかくしかじか——……………  
……………でさ。」

リ「へえ——、人里に……………それは  
またずいぶん変わったことするんだね」

チ「そうでもないよ。今まで、無茶苦茶し過ぎ  
たと思ってるくらいだし、まあそんなわけ  
だから当分はおとなしくしてるよ」

リ「まあ……………暇だったら遊びに行かないことも  
ないけど？」

チ「うん、じゃあその時は一緒に遊ぼうね！」  
リ「……………本当、なんか変わったね」

・ルーミア

魔法の森の奥に幼い少女すがたで、目は赤  
、髪は黄色のボブで白黒の洋服を身につけ、  
スカートはロングで黒の左側頭部に誰が何の  
ために付けたかわからない「お札」をリボン  
にした姿が両手を左右にめいっばい伸ばし  
て呆けていたので声をかけてみた。

ルーミアル

ル「そーなのかー」

チ「いや、まだ何も言っていないんだけど……………  
……………」

ル「そーなのかー」

チ「わかってて言ってる？」

ル「そーなのかー」

チ「ふう……まあ、一方的に話とするよ……実は、かくかくしかじか……」

ル「かき氷なのかー」

チ「ま、まあそうなんだけど……」

これは……食べ物的事だから？

それとも一応ちゃんと聞いている……か

ら……？」

・ミステイア（みすちー）

ジャンパースカートの雀のようにシツクな茶色で、曲線のラインにそって蛾をイメージしたような、毒々しさを感じさせる紫のリボンが多数あしらわれており、曲線部分は服の裂け目で異形の翼、爪、耳の羽根といった姿が、これまた同じく魔法の森近辺で、屋台をやっていてるところを見つけ声をかけた。

ミステイアⅡミ

ミ「お！いらっしやい！チルノ！何か食べてく？」

チ「今は遠慮しとくよ。まだ前のツケのお代も払えて無いし、それよりも聞いてほしいこともあるしさ」

ミ「お代のことなら気長に待ってるから気にすること無いのに……こつちとしては最終的に払ってくれさえすればおっけーだしね……で、話したいことって？」

チ「まあ、主に昨日の件なんだけど」

ミ「え？……昨日？……何だっけ

？」

チ「残念記憶……じゃあ、最初から説明するからメモ取つといて？実はあれから……かくかくしかじか……」

ミ「……ああ!!! その件か！

!!へえーっ!! 良かったじゃん！

これからもよろしくチルノ!!」

チ「よろしく！ それじゃ、そういうことだから」

・大妖精の容姿は左側頭部を黄色いリボンでサイドテールにまとめ、服は白のシャツに青い服で首からは黄色いネクタイを付けている。その背中からは虫とも鳥ともつかない縁のついた一對の羽が生えている。

話し合った場所は人里と霧の湖の中間付近だった。

・大妖精（大ちゃん）

大妖精Ⅱ大

大「あ!! チルノちゃん!! 昨

日はどうだった？ 上手くいった？」

チ「うん！ その事なんだけどねあれから稗田邸にお世話になって、それから里のお偉いさんの所に言つてさ、まあ、阿求の助力もあつて何だけど里の住人に認められて、お店（かき氷屋）も開業出来ることになったよ」

大「チルノちゃんすご〜い!! じゃ

あ、これから新しい生活が始まるんだね!! かき氷屋さん、やってたら寺子屋の帰りに寄らせてもらうね!!」

チ「うん、いいよ……つて！ 大ちゃん寺子屋に通つてたの!？」

大「うん!! そうだよ……つてああ!!  
そう言えば話すの忘れてた。とつくに  
伝わってると思ってたのもあるけど」

チ「……初耳だよ……びつ  
くりしたよ……」

大「ごめんね、チルノちゃん……でも  
、そうなんだ!! たまに用事であけてた時  
があつたでしょ? それが寺子屋に通つて  
る日だったの」

チ「そうだったんだね。確かに何時もあたい  
の誘い断るとき、何してるんだらうとは思っ  
てたけど」

大「でも、そうか……なら、いつも  
以上に会える機会が増えたんだね!!」

チ「そうだね。でも、きっかけはなんだつた  
の?」

大「それは、私が寺子屋の前でそわそわして  
入ったそうにして遠くから見たら、その様  
子を何時も見てた人がいて、その人  
に誘われたの」

チ「へえ……その人って?」

大「上白沢慧音っていう、寺子屋の先生だよ」

チ「上白沢慧音……その人ならそう  
言えば里の挨拶周りの時に会ったな」

大「え!? 本当!? どう? 元気だった?」

チ「うん。元気だったよ。それにかなり人当  
たりの良い人だったかな……」

大「うんうん!! いいよね! 慧音先生!!」

チ「あの先生、里の守護者でもあるみたいで  
さ。なんか、あたかもならないかって誘われ  
ただけど」



大「え？すごい……っていうか慧音先生もそうなんだ……」

チ「いや、あたいは断ったけどね？」

大「？……どうして？その方が里の人たちもチルノちゃんと仲良くしてくれそうだけど？」

大「……あ、でもチルノちゃんそう言うの苦手そうだよ。人づき合いとか」

チ「うん……それに肩書が大仰だし、責任を取り切れないかなって」

大「そうなんだ……あ、そうそうこのあと何か予定はある？チルノちゃん！」

チ「この頃付き合いが悪くなって、悪いんだけどあたいはまだやることがあつて……

・特にかき氷屋関連で」

大「あ……そうだよね!! ごめん

ね、気付かなくて……無理ならしよ  
うがないよ!……そう言えばチルノ  
ちゃんもいつも無理に誘ったことは無かつたよ  
ね、他の友達の話も」

チ「ちよつと冷めた奴かなとも思うけどね」  
それに対して「ううん」と首を横に振る大  
ちゃん。

大「そのおかげで私たちも気兼ね無く過ごせ  
たし、何より気を使ってくれてるのが伝わっ  
たもん」

チ「……誘う度胸が無かつただけ  
……かもしれないよ？」

大「そんなことないよ。ありがとう、チルノ  
ちゃん！」

元気のいい満面の笑顔で、そう応える大

やん。それにあたかも笑顔でこう返す。  
チ「……こつちこそ……ありがと  
う……そう言ってもらえるところだよ！」  
本当に氷河期あのとぎとはまるつきり違い、かけが  
えのない友人に恵まれたものだと思う。  
まあ、あの時は友人そのものが居なかつたけ  
れど。

その後、少しだけ話してあたいた達はそれぞ  
れ、大ちゃん是人里の方へ飛んでいき、あた  
いは霧の湖の方へ向かった。

だからこの時、あたかも既に大ちゃんに背を  
向け、夕日の空を背にして己の目的  
地に向かっていた。

……故に気付けたはずが無かった。

——不気味なほど綺麗な夕焼けに照ら  
されて伸びる大ちゃんの影が、

朝に稗田邸で一瞬とは言え垣間見た、自分の  
影と同じように不自然に揺らいでいたのを――

……

その翌日、あたいは人里に向かっていた。

片手には昨日の夕方に霧の湖付近の木を切つ  
て、店を建築するための木材を収納した薄く  
紫に透き通った結晶が握られている。

あたいの持つ十の結晶の内の一つでものを収  
納し仕舞っておくのに特化したもので、中に  
は凝縮と記憶の結界陣が込められており、凝

縮したものの形状と質を記憶した上で結晶の中に吸収する。

吸収の結晶との違いはそのまま妖力に変換されずに、蓄積されていつでも取り出しが可能という点だ。

そして、この中にはもうひとつ、一昨日から結晶を放置して作り上げた高純度な氷も収納されている。

その量は実に、霧の湖一杯分にもなっていた。

——ちよつと放つとき過ぎた——

え？・・・その無くなった分の氷（水）はどうなったのかって？

それももちろん問題無い。

湖一帯の空気を冷やして霧を水に変えて補充した。

（霧が立ち込めていたから助かった）その霧

もその周辺の空気を冷やすことで元に戻した。

——というわけで、開業の準備は完全に整い、満を持して人里でその為の作業を行うところだった。

そして人里の中で、影になりやすそうなところを探し、ちよつどいいところを見つけたので、そこに店兼住居を立てることにした。

何故影なのかというと氷が溶けにくくするためと、涼を求めてくる人の事を考えてのことだ。

その理由はと言うと店に来た人が涼しいだろうと言う気遣いの面と、夏は涼しいところに人が来やすいだろうという営利目的の面の二つの理由からだった。

チ「ここら辺でいいかな・・・じゃ、早

速取り掛かりますか!!」

因みに建築関係の知識は、鬼じゃあるまいし持ち合わせが無いので、それ関連の本は昨日の挨拶周りのついでに人里の貸し本屋に寄って借りて来たので、その本の通りにとりあえず進めていくことにした。

と言ってもあらかたそのように昨日の内に木材を切り出しているのです、それを組み立てるだけだった。

チ「えー……つと……まずは、基礎工事からか……」

まずはじめに建物を立てるに於いて重要な基礎工事を自分の能力等を駆使しながら行っていく。

冷気をコントロールして氷と水の水平機を作り、氷でレーキを作り、能力で空気を冷やし地面を濡らすことで、削りやすくし、均していく、基礎が終わると、木材を結晶から取り出し、組み立てていく。

……そして、昼に差し掛かろうかというところで、ひと段落し区切りが付いた。

早いなど思われるかもしれないが、高々かき氷を削るだけの店一軒（住居付きだがただ寝たり食べたりするだけのもの）であることに加え、今のあたいは控えめにいっても能力が大幅に上がっているのです、この程度は軽くこなせる。

チ「よし!! 大体形になってきたかな? ……つとそろそろお昼か。じゃ、休憩しようかな」

前にも言っただと思うけど、特に必要がなく

でも生活リズムを持つとうと思っっている。

あたいは休憩や食事など、通常、人が必要とするような行為はとっていくつもりでいる。

それに食事は全くの無意味というわけでもない。

美味しい食事はそれだけで気分が良くなるし

、ほんのかすかにだが、(今のあたいの妖力量からすれば) 妖力の足しにすることもできる。

ちなみにそれだけ吸収すれば、一スペカ分の妖力くらいなら補充できるだろう。

そして、そろそろ休憩にしようかというところで、聞き覚えのある声に声をかけられた。

上白沢慧音Ⅱ慧

慧「おお！チルノじゃないか！」

チ「?.....ああ.....慧音先生.....  
どうも」

彼女は上白沢慧音。

腰まで届こうかというまで長い、青のメツシユが入った銀髪に頭には頂に赤いリボンをつけた六面体の青い帽子を乗せ、衣服は胸元が大きく開き、上下が一体になっている青い服で胸元に赤いリボンをつけ、長いスカートといった姿をしており、半人半獣で獣の部分は中国の聖獣、白沢で人間時は歴史を食べる(隠す)程度の能力、白沢時は歴史を創る程度の能力を有しており、半分妖怪の身でありながら、人間を愛し、常に人間の側に立ち行動しその能力と力を里を守るために使う為、人里の守護者という立ち位置にいる。

なお非常に頭が良く、寺子屋で教師も務めて

おり、本人は面倒見が良く、生真面目で他人を放っておけない性格をしているからか教師という仕事があつていと思う。

しかし、噂では授業自体はあまり面白く無いみたいだが。

慧「今日は・・・あぁ、なるほど昨日言っていた店を建ててる所か、精が出るな！それに、意外に大きくないか？」

チ「まあ・・・客足が少なくてもゆとりはとつておきたいと思ひまして。(それに住居を兼ねてるし)」

慧「そうか、客足が少な・・・つて！いまからそんな消極的はどうするんだ！せつかく出すんだから繁盛しすぎて忙殺されるくらい目指してみたらどうだ？まあ、あんまり無理をするのも良く無いが……………」

こちらを励ますためか、若干過激に元気づけるように激励をおくる慧音先生。

いや、でも、こつちとしてはのんびりやりた  
いんだけどな……………」

気持は嬉しいんだけど少し暑苦しく感じてしまふ。

チ「いや……………そこそこのんびりい  
きますよ……………ははは……………」

……………何というか悪くは無いし、悪  
気も無いんだらうけど少し苦手だなこの人。

慧「……………うん、まあ、なんだ。店主はお前  
なわけだし、それが経営方針だと言うのなら  
もう何も言うまい。しかし、個人的には期待  
しているぞ……………しつかりな！」

チ「そう仰るなら……………是非うちを御贖

肩にしていたきたいだすね！」

慧「うん!!その意気だ!いまから客引きをするくらいでなければな。なにせ夏はこれらが本番だし、暇があれば立ち寄らせてもらうことにするよ!」

チ「冷やかしはご遠慮させていただくので、ちゃんとお代を持ってお客様としてお越し下さい?」

と片目を閉じるあたい。

それを受けて慧音も笑う。

慧「:はははははっ!これは手厳しいな!

無論だ!お代は忘れず持つてくることにしよう!」

うん、やつぱり、苦手は苦手でも別に嫌いではないな。

——とか考えていると、慧音先生から声がかかった。

慧「それじゃ、わたしはこれにて失礼するよ。次に会うときは客と店主だな。」

チ「つていつてもいるのは、あたい一人だけですから店主も店員もあまり関係ありませんどね。それでは、また……」

慧「ああ!またな!!」

あたいがそう返すと、それだけ言つて笑顔で手を振り去つて行つた。

——そして、また、何かの違和感が走つた——

去つていく慧音先生の影が何か揺らいだ気がしたのだ。

しかし、辺りの空気も暑さでかげろうのようにゆらゆらと揺れているし、そのせいかとも

思った。

なにより……

チ「流石にちよつと疲れてるのかな？ 早朝からぶっ続けはちよつとしんどかった？」

しかし、特に疲れても無いのになどそんな違和感を持ちながらも、瞼をなんとなくこすりながら、昼休みに入った。

その日の昼は特に食べ物を持ってもいなかった。その日、そのまま昼寝だけをした。

朝から食べていないが（昨日の夕方は木の実、その日の昼は人里で御馳走になっていた。勿論、ツケてもらっている）

、人間だつて二食ぐらい食べなくても死ぬわけではないし、これは生活リズム的にセーフだと思ふことにした。

——そして、昼（正午から午後1時）を寝て過ごし、午後一番に作業を再開した。

それからは夕方頃には作業は完了し、そこには当初の構想通りの店が出来上がっていた。

チ「よし……完成!! さてと。そろ

そろちやんと食べるか。流石に三食抜くのはね……（実際いらないけど）木の実

とかだけでもあれだし、みすちーの屋台でも探すかな……やってるかわからないけど」

あれから、店の出来の報告も兼ねて、みす

ちーの屋台に行き、また今度払うと約束して、前の分と合わせてツケてもらった。

……その際にとても疑われてしまった——しかし、軽い冗談見たいな感じだったので、問題無いだろう——のは言うまでも無



いことだけど、何とか納得してもらった。  
・・・・これは、何か一緒にもっていく  
のと、利子分くらいは払わないのかな？  
それと、なるべく早く持っていくようにしよう。

## 第四話 氷始

——何故こうなったのか、全く以って理解不能だ。

？「さあ、始めましょうか!!! スペルカード戦と言う名の独占取材を!!! この私が直々にその実力、量って差しあげましょう！さ、手加減してあげるから本気で掛ってきなさい!!!」

目の前の相手が声高に開始と宣戦布告を言い放つ。

——周りは開けており、青空が眼前に広がる。

下を見やれば、魔法の森や人里などが小さくまるで模型のようだった。

上からは昼下がり頃の夏の太陽が容赦なく照りつているが、時折吹く風がその陽の熱さを和らげている。

「……そう、ここは人里の遥か上空。

何故、このようなところにいるかというと……

チ「……………はあ……………」

「……………本当に、なんでこうなってしまったんだろうね……………」

——それは遡ること数時間前。

数時間前

早朝頃、あたいは、かき氷屋とは別に副業を思いつき、それを実行に移していた。

この時期は水田にとって厄介な、雑草の多く生える季節である。

それはこの幻想郷における人里の水田も例外では無かった。

しかし、今までもそうだったけれど、お米は問題無く取れていたし何とか雑草も全員で取れば、手間はかかるものの処理できないこともなかった。しかし、中々手の回らないところというのは出てくるようで、雑草の生い茂っている所はやっぱりあちらこちらの水田に見受けられた。

そしてやはり、雑草の生えているところとそうでないところでは、収量に差があるようである、早めに除去してしまいたいのだそうだ。

そこであたいが、この冷気を操る程度の能力で雑草だけを凍らせ、粉々にしてしまうか、冷気で枯らせてるか、氷であたいの分身を作って手伝おうと思ったのだ。

実質、里の住人としては新参者であるが、里の有力者の説得に成功しているあたいは、比較的穏やかに受け入れられたのだろう。

今、説明をしたようなことをやらせてくれる農家がほとんどだった。

なかには訝しみながら断る人もいたけれど、それは大抵里の変わり者というような少数のものだった。

そして、雑草の除去をさせてもらった農家から他の野菜などの農作物をくれるところもあり、それを報酬、収入にすることにした。

……まあ、それが目当てだったからもらえ無ければ、困るわけだけど、こちらから言うのは少し気が引けるというか、下心をあまり見せたくなかったというのもあって、

言えなかったもので、もらえるかどうかは不安だったものの、宣言した助け合いが早速その通りになり、ほっと胸をなで降ろしていた。因みにその手伝いは早朝であり、かき氷屋に支障はきたさない。

——早朝なのは時間の兼ね合いと共に、(比較的のだが夏は意外に朝も暑い) 涼しい時間帯なら力の節約に繋がるため——あたいは、頂きものである野菜を結晶内に収納する(約10件中6件の農家から野菜をもらえた)と家路についた。

チ「まさか、初日にもらえるとはね・・・  
・・・まあ、もらえなきや困るわけだけど、それでも初日だし、駄目もとだったんだけどな・・・  
・・・これは助かる」

道すがら、最後に回ったところの野菜をわけてくれた老齡の、優しい雰囲気女性の事を思い返していた。

老女「本当に、手伝ってもらえるのかい？」

チ「はい!! どんなことでも構いませんよ? ものを運ぶでも、雑草を取り除いてほしいでも・・・」

老女「それじゃあ・・・お願いしてみよ

うかねえ・・・」

チ「はい!! 任せて下さい!」

その後は、野菜の収穫、雑草の除去、いろいろなもの運んだりをした。

それだけのことをしたのにも関わらず、能力を駆使したためか、そこまで時間は掛らなかった。

チ「・・・つとこんなものかな?」

老女「おお!! ありがとうかねえ・・・この年にな

ると作業も辛くて・・・跡取りはまだ半人前でね・・・もう少ししたら継いでくれそうなんだけどね」

チ「へえくくく・・・でも、それなら安心です。後を託せる人がいるんだから」

老女「それでも、まだ今は自分の仕事をやるので精一杯みただいだから、あなたがこうやって手伝ってくれるのは助かるよ」

チ「・・・そうですか・・・」

それからいくつか話しをした後、収穫した野菜を何種類か頂いた。

老女「今日は本当に有難うねえ。手伝ってくれたお礼にこれを持って行っておくれ」

チ「こんなに・・・本当に良いんですか？」

老女「これくらいあげても、うちにはまだ全然あるから心配ないよ。むしろ持つて行ってくれなけりや申し訳ないくらいさ」

チ「・・・それなら、有難く頂いておきます。主にこの時間帯ですが、また時間があればこうしてお手伝い出来ますし、その時またお伺い致しますんで、何でも言っして下さいね？」

老女「うん、ありがとう。それじゃ、その時はまたお願いするよ」

チ「それじゃ、あたいはこれで失礼します」  
老女「うん、またね」

かき氷屋に戻ると、あたいは自身の能力で冷気と氷を操って氷でかき氷機を作り、収納していた純粋な氷を取り出す。

その氷はほとんど不純物が無いため、微妙に青く透き通っている。

それを適当な大きさに切り、かき氷機にセットし、氷で器を作りかき氷機の下に入れ、セットした氷を削る。

すると、中から削られた微細な氷が器に落ち、山になる。

更にその器を取り出し四角く中が透明で見通せるように凍らせ店頭に置く。

チ「うん、ここなら良く見えるし、日は当たらないね」

そして、それを人目に付きやすいように店内のカウンターにおいた。

別に、陽に当たっても融けはしないのだが、わざとわざ外に置くよりも、

良いと思っただし、かき氷屋であると言う目印は、既に店の外で『氷河屋』『氷』と涼しげに筆で書かれた布看板が時折吹く風になびいているので必要はないはずだ。

「……そんなことを思っていると、早速この暑さに音をあげたような話し声と足音が聞こえて来て、その気配がこの店の暖簾をくぐり入って来た。

見るとどうやら、若い男性の二人組のようだ。すぐに出て行き対応する。

チ「いらつしやい！ お二人さん、何にしましたよう？」

二人組の片方「あーっつと……とりあえず、このイチゴのかき氷をひとつもらおうかな」

チ「イチゴが一つ……そこのお連れの方は？」

もう片方「……それじゃ、このレモン味とかいうやつで」

チ「はいよ！それじゃ、イチゴとレモン一つずつね」

因みに客の対応はこのスタンスで行こうと思  
っている。

気兼ね無く話しあえる間柄というイメージのつ  
もりだ。

若者二人の注文に応えるべく今朝、仕入れた野  
菜等のもらいものの中から、イチゴとレモンを  
取り出し、凍らせ、粉々に砕き、器に入れ解凍  
する。

そして、それをかきたてのかき氷の上にかけて  
、完成。

匙も氷で造りそれを最初の客に持って行った後  
に後の客への対応をする。

そうしていくうちに店内が客で埋まりかけてい  
た。

どうやら、今日の暑さにはこの里の多くの人が  
参っているらしい。

通りに面した店の入り口ら辺から、あついで、  
だの、死ぬくくだのと暑さを訴えるうめき声が  
聞こえたかと思うと、の店に入った瞬間、生き  
返るくくとか、涼しっ！と言う声に変わって  
いく……とその中に見知った顔が居るのを発見す  
る。

……あれは阿求と慧音先生？

——良く見ると、それはやはり阿求と慧  
音先生のようなだった。

二人はこちらにやってきたので、こちらからも  
二人に近づく。

するとあちらから声をかけて来た。

求「おはようございます。チルノさん」

慧「おはよう、チルノ。ずいぶんと盛況だな  
・・・宣言通りとはやるじゃないか!!」

チ「おはよう、阿求。それと慧音先生、これは  
今日が猛暑日でたまたまお客さんが多いだけで  
すよ」

それだけ言うと、あたいは二人にもお品書き

(メニュー)を渡した。

チ「お二人もなにかどうぞ、なんならお安くし  
ときますよ?」

求「いえ・・・正規の料金をお支払いします」

慧「私もだ。この流行りっぷりを見れただけ  
でも十分なくらいだよ・・・私も何か  
頼もうかな」

それならと二人の注文を受け付ける。

——とここであたいのかき氷の種類はと  
りあえず十個程あつて、苺、檸檬、西瓜、蜜  
柑、桃、葡萄、梨、無花果、林檎、サクラン  
ボなどだ——そのうちで二人はそれぞ  
れ、阿求は桃で、慧音先生は蜜柑の味を選ん  
だ。

チ「はい、それぞれ桃と蜜柑のかき氷お待ち  
どうさま!!」

求「有難う御座います」

慧「ああ、ありがとう。おお!!これはとて  
も美味そうだし、涼しくなれそうだ!」

求「あつ、!涼しいと言えば、この店内は何  
故か程良く涼しいですが、これもあなたが能  
力で?」

チ「良く気付いたね。それでも半分正解で半  
分ハズレだけど」

その言葉に興味深そうにそして半ば察した



ように阿求が問いを寄こした。

その隣（慧音）を見ても同じだった。

求「……………どういことですか？」

チ「その様子を見るに既にわかつてそうかどうか？」

求「まあ、答え合わせですよ。外れているかもしれませんし」

微笑みながらそんな風に返されたあたりは

答えることにした。

もしも食い違っていたら微妙に気持悪いからし。

チ「あたいの妖力は今莫大にあると言つても、そんなにバカバカと使いたくないからさ、

この店自体が涼しくなるように、また、涼しくしやすいような造りにしてあるつて……………まあ、言つちやえばそれだけだよ。と言うかそも

そも、木造建築つて乾燥すれば縮んで、湿気を含めば膨らむからそれで夏は涼しく、冬は

温かいからさ……………それを建て方を工夫して助け

ているだけ」

求「なるほど!!やはりそうでしたか……………道理で私の屋敷きと似たような感じがしたわけですね」

慧「うむ、なかなか客に対する気遣いが行き届いているな。店内も掃除が行き届いているようだし……………」

そう褒めて貰えるのは悪い気はしないが、

ここはそもそも、そんなに汚れる所ではないので、

そう褒められるほどではないのだが、ここは礼を返すところだろう。

チ「そう言ってもらえて何よりです。ここに  
来て下さった方にはゆつくり気分良く休んで  
欲しいですからね」

慧音先生からそんな風に褒められてから、  
ふとあることを思い出し、それを頼もうと思  
っていた相手が目の前にいることにちようと  
いいと思いますあたいはその人物に話しかけた。

チ「ねえ、ちよつと阿求に頼みがあるんだけ  
ど良いかな？」

求「はい。何でしょう？わたしに出来ること  
はなら良いのですが・・・」

チ「それなら、心配ないよ。あたいが頼みた  
いののは幻想郷縁起を見せて欲しいだけだから」

求「そんなことでいいのですか？ それなら  
、是非どうぞ。あれを読もうと思うかたはそ  
うそういなくて、少し困っていたくらいで」

チ「そうなんだ。あ、この間も言ったけど、  
敬語……………無いと嬉しいかな」

そういうと、あつと口を手で抑える阿求。  
そして申し訳なさそうに一言。

求「すみません……………つい、いつもの調子で  
……………」

チ「まあそつちの方が話し易いなら別に無  
理にとは言わないけどさ」

求「……………ううん、気を付けるわ。私も気兼  
ね無く話せる相手が居るのは嬉しいです…………  
嬉しいし」

チ「いや、別に言い直さなくても……………まあ  
良いけど……………」

まあ、それはそれとして……………阿求のその悩  
みも納得できる。

確かに、既に過ぎ去った異変について興味を示す者は少ないし、それに妖怪たちに対する危険度なども里の中にある限りほぼ安全なことを考えればあまり関係無い。

それは理解出来るし無理も無いと思うんだけど・・・しかし、それもほぼそうなのであつて、全くの零と言うわけではないというところ（実際に里に出入りする妖怪もいるし）が阿求が幻想郷縁起を皆に読んでおいて欲しい理由なのだろう。

なぜなら、いざという時に対処法を知っているかいないかでは、天と地ほどの差があるだろうからだ。

チ「それなら良かった。是非見させてもらうよ。この後、涼しくなる夕方ごろ、この店を閉める予定だからその頃にお邪魔させてもらうよ」

慧「ということとは、この店の営業時間は、日照時間に合わせると言うことか？」

チ「そのつもりだよ？　涼しくなつてからかき氷を食べに来る人もいないでしょう？」

慧「まあ、確かにな・・・（では昼休みにでも来るとするか、生徒たちを誘つて：）・・・だが、仕事終わりの客などはどうするんだ？　夕方頃に仕事が終わる客も居るだろう？」

チ「そこら辺も込みで考えた夕方なんで大丈夫です。ご心配には及びませんよ」

慧「ふむ、そういうことなら……」

チ「それじゃ、そんなわけではらくゆつくりしていきなよ。まだ外は暑いからね」

そしてあたいは他の客の対応のため、その場を後にした。

すると、その場から背を向け離れる時に、二人の話声が聞こえて来た。

——それにしても涼しさはあり且つ、湿気はほとんどないな。

それがここのかき氷の美味しさとも関係しているのかもしれませんが——

それをあたいはふっ、と口角を少し上げながら聞き流し、接客に向かった。

---

それから、閉店した後、幻想郷縁起を閲覧するため稗田邸を訪れ……

る予定のその日の昼休み中（店番は水であったいの分身を造って任せてある）、店の裏にある樹木のその枝と幹の間で休んでいると、思いがけない来客……いや、ある程度予想していたし、そしてどうせならこのまま……

チ「……来なければいいのに」

と考えていた者が、あたいの前に風を巻き起こしながら現れた。

その者の姿は、黒髪ショート赤い瞳で、赤い山伏の帽子、赤い天狗下駄、フリル付きの黒スカートと半袖の白いシャツを着ており、

「風を操る程度の能力」を持った、『人里に最も近い天狗』の異名を持つ

……

文「どうも!! 毎度お馴染み!!! 幻想郷の

伝統ブン屋!! 清く正しい射命丸文ですっ!

・・つて言うか『来なければいいのに』つて  
！思わず本音が漏れちゃってますけど!？」

射命丸文Ⅱ文

チ「いや、それわざと。それに馴染みたくな  
いし、清く正しいかどうかも怪しいし、実は  
幻想郷の伝統ブン屋つて言うもガセネタじゃ  
ないの?」

文「まさかの全否定!? つていうか拒絶強  
すぎませんか? 私に対して」

チ「ま、ブン屋のクダリまで含めてどうでも  
いいけど。で? 用件は?」

文「ああ、その用件はですね・・つて! ど  
うでもよくありませんよ!! 私は清く正し  
い幻想の伝統ブン屋でお馴染みと定評がある  
射命丸文です!」

チ「もう一度言う・・・用件は何だつて  
言っただよクソカラス!!」

苛立ったあたいはどこかの某忍の物語に登  
場する兄に復讐するために対面した弟のセリ  
フのように言い放った。

——まあ、その忍の物語が何なのか、Nか  
ら始まりOで終わるアルファベット6文字な  
のかどうか知らないけれど（因みに貸本屋で  
読んだ）——すると、相手は更におどけた  
ように返ってきてイラツと来たが、一応話は  
進んだので良しとすることにした。

文「——ツ! 特に意味のない罵倒が私を襲う!  
?——つと茶番はこのくらいにしてそろそろ  
本題と行きますか」

チ「できればもっと早くにそうして欲しかつ  
たけれど、まあいいよ。で? 急に力を持つて

頭がマシになりだした氷精に何か用でも？」

文「そうそう!! そうなんですよ! 実はその

取<sub>z</sub>・・・って私が言おうと思つてた事を

先読みして言わないでください!?!?・・・

どこぞのさとりですかああなたは」

チ「って言うか、このタイミングであたいに取材しに来るなんてそのこと以外になにがあるのさ?」

文「まあでも・・・それは話が早くて助かります。じゃあ改めて、あなた（氷精）のことを取材させて下さい」

チ「だが、受けるとは言っていない」

文「そんな……嘘でしょ!?! Σ ( ㄩ。 ; / )」

チ「まあ嘘だけでも」

そう言つてやるとほつと胸を撫で下ろして安堵する射命丸。そして、ボソツと実力行使は面倒しかありませんし……と呟いていた。

こいつ、やっぱり叩き帰そうかな……

チ「そうだね、やっぱ知名度はある程度は必要だし、あたかも店が繁盛するならそつちの方がいいかな……」

文「そうでしょう! そうでしょう!」

チ「だが、断る」

文「バカ野郎!!」

文「な・・・なんで!?!」

チ「うん、いや・・・めんど……やっぱり信用できないし、いま、昼休み中なだけでまだ営業時間中だし」

文「明らかに今、本音を建前で隠しましたよね!?! 面倒くさいだけですよね!?!・・・

・・・信用できないのはともかくとして、昼

休みつて言っても分身に店番任せてる時点で  
関係ないじゃないですか！絶賛サボタージュ  
中じゃないですか！」

チツ！やっぱり分身の件はバレてたか。

となると別の手を……と考えていた  
ところで相手から思わぬ提案があつた。

文「わかりました!!……それでは  
スペルカード戦をしましょう!!」

チ「……スペカ戦？」

文「そうです!!やはり、幻想郷でもめ事が  
起きたらこれでしょう！」

スペルカード戦とは、お互いに制限時間付  
きのスペルカードと呼ばれる、その人特有の  
パターンの弾幕を放つカードを三枚用意し、

(用意するスペカの数に制限は無く、互いの

同意の上ならば別に被弾数もスペカの枚数も  
自由に決められる)互いのそのスペルカード

(以下スペカ)を(三枚なら)三回使い切る

か、そのスペカ戦中に(三回被弾なら)三回  
相手の弾に被弾すれば負けと言う、至ってシ  
ンプルなゲームでこの幻想郷に於いて、人が  
妖怪などの強大な存在にも勝ちうる可能性を  
もたらすためのルールである。

そして、主に被弾は相手からの攻撃であれば  
なんでもありで、殴打や蹴り、斬撃などでも  
良く、それで被弾扱いになる。

そして、相手が死ぬもしくは重傷を負わない  
程度に手加減することも求められる。

まあ、身代わりを用意出来るなら関係無いけ  
ど……もちろんスペカ発動中も自身で弾幕を放  
つことが出来る。

そしてこれはルールには無いが、このスペカ戦には主に美しさや派手さなどが求められている。

……以上がスペルカード戦：通称、弾幕ごっことも呼ばれているもののルールと遊び方である。

あと、幻想郷での争いはこれに置き換えられるので、揉め事の際にはよく持ち出される。

説明終了。

要は文はこれでどちらの主張を通すか決着をつけようと言うのだ。

文「それに、あなたの実力も是非知っておきたいと思っていましたし、これはもはや取材は始まっているといっても過言ではありませんん!!」

チ「ふーん、じゃあ、あたいが勝てばおとなしく引きさがってくれるってことだね。

……確か、天狗って格上にはそんな風に出しやばらないよね？それに、同等の相手にも滅多に仕掛けないはず……ってことは結構ナメられてたりする？　いくら強くなっただって言っても氷精は氷精……毛が生えた程度だろう……と？」

面倒なことは嫌いだ、ナメられるのは癪だし、放って置けない。

それに、ナメられて敵が増えるのもごめんだしね。

それにもうこれ以上、個人的な時間プライベートを邪魔されるのもいい加減限界だ。

とか考えていると、文は厭味つたらしいほど礼儀正しい笑顔の裏に相手をあざ笑うかのよ





文「さあ、始めましょうか!!! スペルカー  
ド戦と言う名の独占取材を!!! この私が  
直々にその実力、量って差しあげましょう!  
さ、手加減してあげるから本気で掛つてき  
なさい!!!」

—— 本当に、何故こうなってしまった  
のだろうか? . . . . . いや、本当はわかっ  
ている。

あんな見え見えの挑発にまんまと乗ってしま  
った自分が悪いと。  
しかし、やはり言わせたままでは我慢できな  
かったことと、ナメられたままでは静かに暮  
らせないかもしれないと思いつい受けてしま  
った。

いや、別に勝てない訳じゃない、むしろ自信  
はある . . . . . けど、万に一つと言うことも  
あるし、そもそもやってしまってもいいのだ  
ろうかと思うのだけど、相手は本気で来いと  
言っているしなあ . . . . . (セリフ上のもの  
とはいえ) ま、適当に相手をしたらお引き取  
り願うことにしよう。

つとそんなことを考えているあたいのすぐ傍  
を文の弾幕が通り過ぎていく、

文「ほらほら!! よそ見してると、あぶない  
ですよつと!!」

とか言いながら、あたいに向けて風の妖力  
弾をその天狗の団扇を扇ぐようにして打ち出  
してくる。

それを受けてあたいも動き出した。

冷気を操り、氷の武器を生成する。

造り出した武器の種類は日本刀。

そう、今は戦闘の真つ最中だ。

しかし、途中で考え事をしていても全く被弾する気がしない。

まあ、手加減してるって言うしこんなものかな？。

——今のこのスペルカード戦はスペカ数三枚の被弾三回——

と、避け続けている内に相手が痺れを切らしたのか、こちらの動きを見切った（と思つた）のかはわからないが——文なので恐らく後者——スペルを宣言してきた。

文「……突風『猿田彦の先導』！」

そのスペルを宣言した直後、凄まじい勢いで急加速し、こちらに突撃してき——…いや、もう突撃し終えていた。

あたる前に何とか横跳びに飛んで躲し、そして後ろを見ると少し遠いような距離で減速し旋回しようとしているところだった。

な、なんて……速度だ!!

いまはなんとか躲せたけれど、これを制限時間一杯（30秒間）か……などと、軽く戦慄していると、旋回を終えた文がまた、こちらに突撃してくるところだった。

——あーあ、そう言いやそうだったね……  
……おちやらけた雰囲気とかでごまかさ  
れてたけどこの天狗、幻想郷最速なんだつた  
……。

そして、次の瞬間にはほぼ全て決着した。

そして、数分後……両手と両足に翼を凍りつかされ、悔しいような、それでいて驚いていたような、新たなネタに出会って嬉しいようなそして信じられないものでも見るかのような感じが混ざった絶妙な表情をして、最後には嘆息する……そんな天狗の姿がそこに転がっていた。スペカ戦の結果はこのあた、チルノの勝ちだ。

文「まさか、最初のスペカが見切られていたなんてね……そりゃ、勝てないわよね……はは……は……」

などと、乾いた笑いを口にした文に対して、得意げに言い放ってやった。

ちよつと追い打ち気味だが別に気にしないことにした。

それだけ業腹だったということだ。

実はあたいがバカにされるくらいなら、そこまで腹は立たなかっただろうが、あいつは妖精全体を嘲笑った。

それは種族の性質上仕方ないものと言うのは理解はしていたが、それでも抑えられなかったのは、妖精がバカにされることで、あたいの大事な親友まで貶められた気がしたからだろう。その事があたいの琴線に触れたのが今回のこの結果だ。

チ「まあ、手加減してたんでしょ？ だったらしょうがないんじゃない？ ……まあ、限度ってものがあると思うけど。どれだけ手を抜いたらあたい（氷精）相手にあんな結果にな

るのやら……。ところでさあ、あたいの実力を量るとか言つてたけど、どう？ 量れた？……。ふ……。いや、聞くだけ無駄か」また再び悔しさと驚きと、興味や好奇心と言つた感情を緬い交ぜにしたかのような複雑そうな表情に戻りながら、その感想を口にした。

文「ええ……。それはもう、悔しく情けないことこの上ない限りですが、あなたの実力を思いつ切り見誤りましたよっ!!!まさか、ここまでとは……。全く、手の抜き甲斐がありませんでしたよ……。ははは……。本当に……。まさかここまで、とは……。ふむ……。」

それは、心の底からの紛れもない本音のようだった。

……。手加減をして、更には相手に本気で来いなどと言うからこのような目に遭うんだ、とそんなことを思いながら、先ほどまでの戦闘と、その結果を改めて振り返る。これほどまでに（嬉しさはともかく）、相手が悔しさを感じているのは、ただ単に負けたからでは無く。

完封試合だったことが原因だ。

つまり、あたいは被弾もスペカ使用も0で、通常弾幕と近接戦だけで勝利を取めたのだつた。

しかもわずか数分程の出来事だった。

……。でも、決着の早さというなら相手が速かったからというのもあるかも知れないが、美しさや派手さ等が求められる中で、それとは対極に位置するような一戦だった。

圧倒的過ぎて、冷めていて、派手さも無ければ美しさもない。

強いて言うのならば、まっさらで何も無いという意味での美しさだけが存在し、まさに無味乾燥と言う言葉がふさわしい一戦だろう。

・スペルカード戦

それは、呆気無い幕切れだった。

あの、スペカ宣言の後で文が音速に届こうかと言うような突撃をしてきたときに、なんとなくまずい気配を感じて横に跳び、何とか初撃を避けることが出来た。

一度避けることができれば、その後は余裕を持って見れる。(驚いたのは予想外だったため)しかしそれだけスピードがあり、勢いが付いていれば、すぐに戻ってくることは難しいだろうとわかっていた。

事実、そのスピードのまま旋回してこちらに向かってきた。

いったん止まって折り返すよりもその方が負担が少なく、且つ勢いも速度も殺さずに済む。ただ、それはそのまま旋回することを余儀なくされる事を意味する。

つまり旋回する分の隙が出来る。それでも速いものは速かったけども。

(あれだけ勢いがあった旋回にたったの2秒  
つて・・・)その旋回する余白が空けば後は注意していれば目で追うことが出来る。

だが、初撃を躲す事に失敗していた場合、逆にこちらがストレート負けしていただろうことは、想像に難くない。なぜなら直撃してい

ればこちらはその衝撃でしばらく動けず、そうでなくとも隙が生じるからだ。

その隙に次の突撃を喰らってしまったえば、次は動けずそれで三回被弾で終わっていたことだろう。

だが、その後は難なく相手の動きを見切り、手足を刀で切って凍らせ（あたる瞬間に刃の部分が冷気に変わるように調整している）、まさか見切られ攻撃を当てられるとは思っていなかったのか、驚いていた隙に更に片翼を凍らせ（凍った箇所は後で解凍され元に戻る）動きを止めたところで、最後に額にでこピンをくらわせ被弾数が3になった。

ん？それじゃ、4発じゃないかって？ああ、言い忘れてたけど、それは一度被弾させてから3秒間は被弾しても被弾した扱いにならないからだ。

つまり手足は3秒以内にほぼ同時にあてたから被弾1にしかない。

と、まあ何とも味気ないけれど、それでも勝ちには勝ちなので特に気にはしない。

そこでふと隣を見やると、もう凍らせた手足や翼が元に戻り、伸びをする文の姿が目に入った。

もう治ったのか・・・あと10秒くらいはあのままのはずなんだけど。

文「いやー！、珍しい事もあるもんですね!! まさか手加減あなたしたとはいえ、氷精あなたに完封されてしまうなんて思いもありませんでしたよ!!」

先ほどまでの悔しげな表情とは打って変わ

ってまた元の、どことなく距離を感じさせる、裏の読めない満面の笑顔を貼り付けて文が言う。

それについては、あたかも同意見だ。

勝てるとは思っていたがまさか完封してしまふとは。

それ以外に方法が無かったとは言え、これが必要以上に目立ってしまう恐れがある。

それは避けなければならぬ。

さもなければ面倒が舞い込んでくるだろう。

よってこれを記事にされるのはまずい気がした。

チ「それはあたかもそう思う。まさかこんな結果になるとは……これを記事にされるとまずそうだからそれはナシね。ほら、勝負はこっち勝ったんだから、従って貰うよ？」

文「それもそうですね、私もこんな自分の醜態を敢えて記事になんてしたくありませんし。ではお約束通り、今回は引き下がりますよ」  
そう言うと、何かを企むような悪戯をする前の子供のような輝きが文の目に一瞬宿った。それと同時に、狙った獲物を逃さないとかばかりの顔をその笑顔の奥に潜ませながら次の事を言った。

文「まあ、今回は引き下がります。ええ、私も約束は守るほうでしてここは引き下がります。なので、次回にまた、お会いした時にはよろしくお願いしますね！」

チ「え、ええ!?これで終わりじゃないの? ま、また来るってどういうこと? って言う



か取材はお断り何だつて!!」

文「えっ?でも、今のこの取材を断られただけで、この先もずつとしてはいけないとは明言されなかつたじゃないですか?」

したり顔でそんなことを宣のたまう「心翼共に真つ黒な捏造カラス。

チ「じよ、ジョウダンじゃナイ!!! そんなの聞いてないよ!!?」

文「それじゃ、またの機会を楽しみにしてますねー!!!」

こちらのセリフの途中に被せながらそう言うのと、風と共に飛び去ってしまった。

これが、ほんとの風と共に去りぬつてやつか  
.....はあ.....面倒が一つ増えた。

.....あのバカなようできて、ずるがしこはらぐろい狡賢腹黒い

烏天狗が一方的に次回の取材の約束を取り付けて飛び去っていった二十分ぐくらしいに、あたいは店に戻り、分身と入れ替わって店を、涼しくなりだす夕暮れ頃まで営業させ、閉店の作業をして店に閉店の看板を立てたあと、阿求の元へ幻想郷縁起を閲覧しに行く前に、みすちーへの付けの代金と朝にもらった野菜を持って、あの夜雀の屋台へと紅くれない色に染まる空に飛んで行った。

.....そして、その夕焼け空に夜の帳が下りる前、通りを行く人々の影が不自然に揺らいでいるのに気付いている者は――

――とある者を於いて外には誰もいなかった。

## 第五話 氷怪

夕焼け空に赤く染まっていくまるで青の水  
彩から赤の水彩へと徐々に移り行くかのよう  
な空のもと、何かこの退屈から抜け出せるよ  
うな事が起こらないか（異変以外で）と私、  
博麗の巫女こと博麗霊夢は神社の中にある私  
の部屋の縁側に座り深いため息をついて、隣  
に用意してある、煎餅に手を伸ばした。

そうして、いつも通り神社の境内の掃除に倉  
庫の中の整理や夕食の仕込みを既に終えてく  
つろいでいた。

すると、燃えるように紅くれない色の空から一つの黒  
点が大きくなっていくのを見て更に溜息を吐い  
た。

普通なら、鳥か何かと見間違うようなそれは、  
私にはなじみ深い者であり、何かと厄介事を  
運んでくる者でもあった。

しかし、ちようど暇だったし話だけでも聞い  
てやろうと、縁側から立ちあがって前に進み  
出た。

博麗霊夢Ⅱ霊

霊「まあ、暇つぶしくらいにはなるかしらね  
・・・」

その黒い点のようなそれは大きくなっていくと、  
徐々にそのシル  
エットを箒にまたがって空を飛ぶ一人の少  
女に変えた。

そして、その姿が境内の自分の前に着地した。

霧雨魔理沙Ⅱ魔

魔「よつす!! 元気か〜霊夢!! わた  
し? わたしは今日も元気だぜ!!」

などと、あたしに勢いよく、暑苦しい挨拶をして来た。

しかし、そつけないと余計に絡まれるので、仕方なく相手をする。

霊「はいはい・・・、元気なのは良いけど、何の用なのかぐらい言ったらどうなのよ？」

魔「はあ？、人と会ったときは挨拶は基本だろ？ 先生か周りの大人に習わなかったか？ それともお前は会うなり、いきなり用件を伝えるのか？」

霊「うん、伝えるわね。例えば目の前の白黒

魔法使いに鬱陶しいから帰れ とか」

魔「・・・つたく!!つれない奴だなくく

く！ そうカリカリすんなって。おもしろい話し持って来てやったんだからさ！」

そう言うのと魔理沙はどこからともなく、この幻想郷に於いて信用がイマイチな新聞記事

——文々。新聞——を取り出して見せた。

今更、そんな記事がなんだというのだろう。

霊「何よ・・・こちらら、あとは縁側でゆつくり過ごすだけ……って面白い話？ でもそれってただのあの捏造記者の新聞じゃない。あてにならないわよそんなの」

しかし、そんなことはどこ吹く風とばかりに、彼女は続ける。

魔「・・・と思うよな!! ところが意外と

・・・そうでもなさそうなんだな！これが！」

霊「・・・それ、どういう意味？」

そして魔理沙は先ほどの私の言葉を否定しながら、手の中の新聞を振っていた。

そのことが気になり、質問すると、これ、見

てみるよ!!

と新聞を投げて寄こして来たので、それを受け取り内容に目を通す。

……するとそこには、次のようなことが一面大見出しになっていた。

——『最弱（さいきょう）の妖精、とある烏天狗に勝利!?!』——

……本日午後、妖怪の山のとある天狗が一匹の氷精にスペカ戦を挑んだところ、一匹の妖精が持ち得るとは到底思えない実力で、その天狗を圧倒し、大差で敗北させるといふこの幻想郷に於いてあり得ないはずの事象が起きた。

まさに天地が引つ繰り返るとはこのことである。

仮にそれが妖怪の山で最弱の天狗だったとしても、驚くべき下剋上であることに変わりはない。

その結果はというと——妖精：被弾、スペカ使用数共に零、天狗：被弾数、参・スペカ使用数、壹——というこれまた驚愕の結果に終わっている。

更にこれだけにとどまらず、この妖精、戦いの中で完全に相手の事を掌握し、更に手加減をする余裕を残していた。

その後のインタビュ―でも案の定彼女は、

「まあ、あそこで敢えてもう一つスペカを使わせるとか、わざと被弾したりとかで盛り上げることも出来ただけだし、他に見てる人もいないし、めんどいし、相手が「本気で掛ってこい!!」とかいうもんだから望み通り

にしてあげただけどね……。

まあ、本来の力の一厘も出せたかは怪しいけどね、でも相手も手加減してたみたいだしお互いさまじゃない？」

などと供述しており……。

魔「なあ？ 面白いだろ!!? あのプライ

ドが高くてで仲間意識の強い烏天狗が、仲間がやられた事を記事にするか？ そしてそんな嘘つくメリットなんてどこにもないだろ！

？……下手したら天狗共の権威が失墜しかねない訳だからな……ってことは、ほぼ本当のことだろこれ!？」

確かに、あの自分達が高位であることに誇

りを持つてるあの集団が、それもあの新聞記者あが書いたとなると……本当に起こったことなのかかもしれない……でも……

霊「このやられた天狗って……文よね？」

魔「は？なんでそう言い切れるんだ？」

霊「この文章、とどこどこに對戦者でしか知り得ない情報が載ってるじゃない。わざとわかるようにしてあるのか、そうせざるを得なかったのかはわからないけどまあ、両方でしょうね……そんな文章が載ってるってことは筆者、つまり……文が直接戦ったってことですよ？ 後、あいつは仲間がやられて黙ってるような奴じゃないし、例えやられたのが他の天狗でも、自らリベンジを挑むはず……それに仲間のことだったら……なおさら記事にはしないわ。でも、どうしても書きたくなって、でも自分が負けたと書くのはプラ

イドが許さないし、あと妖怪の山の天狗の体裁的にも不味いから、こんな風に他の誰が負けたと濁すしかなかったんでしょね」

魔「でも、それなら、そもそも記事にしなきゃ済む話じゃ無いのか？」

霊「……考えてもみなさい：あの、常にスクープに飢えた腹黒記者のことよ？ 例え頭でわかっていても、『氷精が天狗に勝つ』なんて言う絶好の特ダネを前に抑え切れなかったに違い無いわ」

魔「ああ〜……」

うん、魔理沙にも今、言ったことがありありと想像できる見たいね………（遠い目）

そうして、しばらく遠い目をした後、魔理沙は——得心いった、という風に頷いて見せた。

魔「なるほど〜解説の霊夢さん、ありがとうございました！ いや〜あまりに衝撃的な見出し過ぎて、詳しい内容の方まで目がいってなかったぜ」

霊「……でも、問題はこの妖精が何者のなのか、よね……あの、文が手加減したとはいえ負けるだなんて………っていうかこいつも手加減してたっぽいし………やっぱりまだ信じられないわ」

魔「なっ!? 面白そうな話だったろ？ まあ、どこぞの山の巫女は『この幻想郷では常識に囚われてはいけないのですねっ!』

（………）キリッ）『とか言い出しそうだが、幻想郷にすでにある常識すら打ち破られた

らどうすればいいんだろうな」

霊「本当ね．．．．．まあ、興味をひかれる内容ではあったわね」

流石に、またも遠い目をする私。

しかし、その妖精とはいったい誰なのか。

幻想郷にいる妖精と言ったら、光の三妖精（ルナチャイルド、サニーミルク、スターサファイア）、大妖精とチルノ、エタニティラルバ、クラウンピース（神社の地下在住）、リリーホワイト（今は夏）くらいのもので、あとはごくごく小さな奴しかいないし．．．．．まさか、その小さな奴が天狗（しかも、文）に勝てるとは思えないし、私の勘からいってもまずあり得ない。

．．．．．となるとき言った妖精の誰かと言ふことになるんだけど．．．．．

霊「．．．．．駄目ね。さつき挙げた誰でも出来なさそうで、その中で一人でも出来るっていうなら全員出来そうな気がする．．．．．あ、いやでもラルバかクラウンピース辺りなら．．．．．？」

魔「霊夢でも無理か．．．．．」

霊「いや、神霊に聞けば一発なんだけどねえ．．．．．それをやったらなんとなく負ける気がするからやりたくない」

魔「まあ．．．．．実際チートだよなアレ．．．．．ではどうするのかと言えば、もうそれは一つしかない。」

霊「もう面倒だから、阿求の所に行くわ．．．．．」

魔「おい!!それでもいいのか博麗の巫女．．

・・・」

霊「だって、一々妖精に総当たりとか・・・探すだけでも面倒なのに……」

そう、ある程度住処は絞られているとはいえ、基本的に気まぐれな妖精たちのこと、探すのは流石に手間がかかってしまう。

魔「確かに探すのは面倒だが……って

!!妖精全員に当たっていくつもりだったのか

!?!それは手間かかるぞ……」

霊「だって、考えてもてしようがないし……

その方が手っ取り早くて、正確でしょ?」

魔「で、その手っ取り早い方法ですら嫌になつたと」

霊「当たり前じゃない。どれだけいると思つてんのよ!?!それに……」

魔「それに?」

霊「阿求のそこに行けば、何か、普通にわかるような気がするのよ。普通に、いやもう妖精全員総当たりとかまどろっこしいことしなくとも普通に」

魔「まあ、霊夢の勘はよく当たるしな。それはもう初めから知っていたんじゃないかってくらいに」

と、大げさに持ちあげてくる魔理沙。

そう思われるのも無理がないくらい自分でも驚くほどよく当たるが、そこまで言われるのは少し違う気がする。

霊「いくらなんでも……それはないわよ。買いかぶりすぎでしょ?」

魔「そうでもないとおもうけどなあ……じゃあ、とりあえずは稗田邸か!」



霊「そうなるわね。それじゃ行きましようか」  
魔「おう!!」

それを合図に私たち二人はそのまま人里の  
稗田邸に向かって飛んでいった。

稗田邸

今、私達は一つの書物の前で絶賛絶句中だ  
った。

何かの手がかりくらいしか掴めないのではと  
思っていた私達の前には、答えそのものが手  
の中にあつたからだ。

それはもう普通にそこに書かれてあつた

……流石に、これはないわ……

魔「ビンゴどころの騒ぎじゃないな……」

霊「なによ……まんま答えじゃない

こんなの。……あー心配して損した」

私達が遠い目（本日三回目）をしながら手  
に持つて読んでいるのは、稗田阿求が編纂し  
ているこの幻想郷の妖怪について記されてい  
る書物。

——幻想郷縁起——その中の妖精に関する記  
述で、気になるところの話ではないものが記  
されていた。

他の妖精の所の欄は特に変わったところは無  
いものの、問題のそいつ——チルノ（氷精  
）の所だけ、大幅に書きかわっていた。

まず、危険度が低から極高へ、次いで人間友  
好度も普通から高へ、主な遭遇場所はどこで  
も（主に霧の湖）から人里へ移住している。

これは勘だが、急に力を取り戻しまともに考えることができるようになり、その頭で身の振り方を考えた結果、下手に侮られも目立ちもしないようと、住処を移動し、今に至ったのではないだろうか。

そして、それらにもう一度目を通したところで、ここに来るまでの事を思い出した。

数分前

私と魔理沙は稗田邸の無駄に立派な門の前に降り立った。

そして門付近にいた女中さんに用件を告げるとすぐさま通された。

女中さんから用件を聞いた阿求がこつちに来てすぐさま対応し、事情を理解するとすんなり（読んでほしかったのもあると思う）幻想郷縁起をこちらに寄こしてくれた。

そしてその一冊の本に二人して目を通すこと数秒くらいで、と言うか最初の数ページで目的の所を見つけると、絶句の後に、私達は思わず大声をあげてしまった。

霊「・・・ 魔「はあああああああああ  
!?!」ああ!?!」（しかも、軽くハモった）

霊「えっ・・・ちよ・・・なによこr魔「これは一体どう言うことだぜ!?!」

思わず私のセリフの上から言葉を重ねる普通の魔法使い。

普通なら文句の一つも言いたいところだが、そんな場合では無い。

驚いた私はその驚かされた相手に文句を言う。

霊「ちよつと!!!阿求!!! 何か異常が

あつた時は私にも言ってもらわなきゃ困るじ

やない！」

魔「そうだぜ!!何かあってからじゃ困るか  
らな!!(私はあとからの解決でも私が解決  
できれば全然いいが)」

二人してその声を荒げると(あとから思っ  
たが、それほどのことでもなかった)、困っ  
たような、それでいてこうなることはわかっ  
ていて覚悟を決めていたかのような面持ちでこ  
う告げた。

求「その件に関しては非常に申し訳ありませ  
ん。……しかし依頼人もとい取材協力  
者の方はほどほどに知られつつも、なるべく  
目立ちたくなかったようで……協力の条件の  
中に他言無用も含まれてまして……協  
力者の意思を尊重する上でも破るわけには行  
かなかつたんです」

霊「守秘義務があつたつてわけ？」

求「はい。それにその条件も、もし私を訪ね  
て来られた方が、成り行きで縁起を見せるこ  
とになつたら仕方ない、とそういう約束でし  
たので……」

その言葉を聞いて合点がいった。  
つまりその依頼者は阿求の幻想郷縁起がなか  
なか読まれずにいることを考えて、己があま  
り目立ちたくないと言うことを逆に利用して  
両立またはどちらに転んでも良いようにさつ  
きのような条件にしたのだろう。

縁起があまり読まれないうのなら、そこを  
通してしか自分に行きつかないよう、一方……  
縁起が読まれると言う形でなら自分に行き着  
くように、、

つまりは……縁起が読まれるか、己  
が知られるとしても縁起が読まれる、と言う  
どちらに転んでも双方の利となるように計つ  
たのだろうか。でも……

霊「つまり、こいつ文々こ。新聞れに嗅ぎつけら  
れることも計算の内だったわね……」

魔「……ってことは、そいつはこうな  
ることを見越してその約束を取り付けたんだ  
な!!」

求「——つまり……私の為でもある、ですか  
……ふむ」

霊「そういうことになるわね。まあ、半分は  
あなたの縁起の不人気を利用してたんでしょ  
うけど。……でも、あいつ、本当に  
変わったわね。」

魔「ああ!!あの……霊「チルノがねえ  
……」

今度はしつかりセリフを奪ってやったし、  
さっきのはこれでチャラね。

……それにしても、何があつたらこ  
んなに変わるのかしらしかも、なんか人が良  
くなってるし……妖精だけだ。

それはそうと、特に何も無かつたようだし、  
適当に阿求に言い含めて帰りますか。

わたしはまだ少し何かを考えている阿求に声  
をかけた。

霊「今回は何もなかつたようだから、良かつ  
たようなものの次からは変わった事があつた  
らちやんと使用人を通してでも良いから伝え  
なさい?分かつた?」

求「確かに、チルノさ……チルノの情報を

得ようところ最近、幻想郷縁起を読む人が増えたよな)・・・!!? は、はい!

わかりました。今後はちゃんとお伝えします」  
霊「ほんとに判ってる?」

求「…………ええ、本当に」

なにやら、呼びかけられてようやく気付いたような感じだったので、少し心配だったが、話の内容は理解してるようだし、良いと思うことにした。

霊「それじゃ、頼んだわよ〜」

魔「邪魔したな!!これで私らは帰るのぜ!」  
それだけ言うと、私は稗田邸を後にした。

---

一方その頃、営業時間を過ぎた人里のかき氷屋の奥にある居住空間、その土間にて——  
チルノside

チ「キラキラダイヤモンド 輝く星のように  
栄光、志望校なんとかして入ろう 天才秀才  
トップ目指して (GO GO!)」

歌を口ずさみながら、もらったお米を研ぎ窯に火を入れ、お米を炊く。

その間に、各種を適当な大きさに切り、調味料で味付けをしてながら炒めていく、

チ「ばーかばーか×3 ちよっ、ちがっ、ば  
かじゃないもん!ばーかばーか×3 ばかっ  
て言うほうがばかなのよ!ばーかばーか×3  
なによるさいわね、このばかっ! ばーか  
ばーか×3 紅魔館からバスが出て 初めに三  
人乗りました 白玉楼で一人降りて半人だけ  
乗りました 八雲さん家で二人降りて結局乗

客合計何人だ？ 答えは答えは0人0人 なぜならなぜならそれは 幻想郷にバス無い ヤマオチ意味などないわ キャラクター立てばいいのよ 元気があればなんでも1！ 2！ ⑨！ くるくる時計の針 ぐるぐる頭回る だってつぶら目玉二つしかないのに 三本の針なんてちんぷんかん 次々問題出る まだまだ授業続く 凍る部屋の中ひんやりした温度も 時間も気にせずゆっくりしていつてね！ ばーかばーか×3 だから、ばかじゃないって言ってるでしょ！ ばーかばーか×3 いい加減にしないと冷凍するわよ！ ばーかばーか×3 そして粉々になって死ねばいいのよ！ ばーかばーか×3 霊夢とこの百万円 のつぼを誰かが割っちゃった 永遠亭のえーりんが弁償しに来ましたよ 知らんぷりのイタズラてる 結局賠償金額いくら？ 答えは 答えは0円0円 なぜならなぜなら それはそんなつぼあるわけない 常識超えたところに 世界の真理がある 秘密の数字目指して 1！ 2！ ⑨！ ヘラヘラにやけながら ゲラゲラ笑いながら うっざー！ 因幡うざぎ可愛げもないのに 新参の厨なんてほしいほしい 再生百万回 もれなく愚民なんて どういうことなのよ どちらかって言うならサーバー管理も お疲れさんってとこね わかった！アタイがあまりにも天才だから嫉妬してるんでしょ？ ほんと、しょうがないわねえ せっかくだからアタイの天才の秘訣をちよつとだけ教えてあげてもいいわよ あらゆる×5英知を 集めて×4束ねても

あたいの×5丈夫な 頭に×4かなわな  
朝飯×5食べたら 赤子の×4手をひねる  
あたいは×5完璧 いわゆる×4パーフェ  
クト ひやくおくちようまんバツチリー  
ー☆ ヤマオチ意味などないわ キャラク  
ター立てばいいのよ 元気があればなんでも  
1! 2! ⑨! くるくる時計の針 ぐる  
ぐる頭回る だつてつぶら目玉二つしかない  
のに 三本の針なんてちんぷんかん 次々問  
題出る まだまだ授業続く 凍る部屋の中ひ  
んやりした温度も 時間も気にせず ゆつく  
りしていつてね! ばーかばーか×3 ば  
ーかばーか! ばーかばーか×3 ばーかば  
ーか! ばーかばーか×3 もうばかでいい  
わよ、知らない! ばーかばーか×3」  
と歌が終わったところに味噌汁にかけていた  
火を止めて冷まし、ご飯の炊きあがりを見る  
とふつくらと炊き上がっていた。

炒め物は良い具合を見計らつて既に火を止め  
ていた。  
味噌汁の方も味見をする。

「うん、こんなものだろう。  
……と、今日の夕食が完成したと  
ころで、出来た料理をお盆に載せ奥の居間へ  
と運び、ちゃぶ台の上に乗せ、夕飯にするこ  
とにした。

チ「さてと……頂きます」  
今日の夕飯は白ご飯と野菜の炒め物、味噌  
汁の具は油揚げに白菜と豆腐と質素だが純和  
風といった感じで、ほぼ全て、手伝いのその  
お礼にいただいたもので構成されている。

野菜も豆腐も良い大きさに切れていると我ながら自負している。

火加減も悪くは無はずだ。

——因みに火はそこら辺の枝を能力の応用で燃やして起こしている。

燃やしたい所から冷気を取り除き、高熱にする事で燃やしている——

野菜炒めは、人参やホウレンソウ、モヤシや玉ねぎなどと人里で買った牛肉を使用している。そして——

文「このご飯の炊き具合もなかなか見事なものですね~~~~!!」

——そうそう、ご飯も全体的にふつくらとしてまさに銀シャリのそr・・・は？

文「うん!!! この炒め物も調味料の味がしかりしていてご飯が進みますね!!おかわり!!」

チ「・・・!!!か~~~~→、え~~~~←、れ~~~~↓!!（。ロ\）（。ロ\）」

ここでやつと——

あたいはこの家に例の捏造記者が入り込んであたいの夕飯を勝手に食べていることに気がつき、そしてそれを理解し、他人の家に勝手に上がり込んだばかりかそのお碗に勝手にご飯をよそって食べてやがる不届き者を家から追い出すべく動き出した。

文「え？ ちよ、ちよつと待つ!? 話くらい聞いてくれたって良いじゃないですか!?! な、なんです・・・その手に持つてるものは!?!み、見ればわかるって・・・そんな物騒なものは降ろして話し合いますしょう



!?え、ええ!? ちよつ・・・なんで近づ

いてくるんです!!?・・・遠かったら話し

合うこともできないだろう!? い、いや、

その様を見るに・・・明らかに話し合いをし

ようって感じじゃないじゃないですか!!!

・・・ちよつそれは流石にやb・・・こ

、こないで! いやーー!!!」

チ「・・・(ニコツ) 血祭りにアゲてやる

・・・!!」

文「オ、オオおおタスケください!!」

とまあ、余計な茶番を挟みつつも本題に入

ることが出来た。

・・・特に深い意味はないが、隣では

文が頭を摩さすっている。(因みに、文の奴は大

袈裟に言っていたが取り出したのはただの氷

のピコハンである。)

チ「で? タダ飯だけが狙いじゃないのはわか

ってるから、さっさと話しに入ってくれない

?」

文「ううう・・・わかってるなら別に怒らな

くても良いじゃないですかあ・・・ご飯も

一杯だけだったし」

チ「一つ、まず他人の夕飯に勝手に手を付け

る方が悪い。二つ、この家では食料は貴重。

にもかかわらず、あんたはおかわりしようと

した「それは、だだの冗だ」三つーあんた

に食われるのはなんか業腹」

文「・・・最後のに至っては個人の好みだ

し・・・」

チ「でも、あんたが相手でもちやんと断りを

入れて、正面玄関から、入ってくれば分け

てあげるくらいしたかもよ？それで？一体何  
のよう？」

文「後からなら何とでも言えるでしょうに……  
……まあいいです。とりあえず、率直に言わ  
せて頂きますと……」

ネタください!!!」

チ「……ハア？」

藪から棒に一体何を言い出すのだろうこの  
天狗は？ こいつに限らず天狗は総じて頭が  
良いはずなんだけどな……実はこの  
天狗に限ってあたいより馬鹿とか？

文「あ、すみません。言い方が良くなかった  
ですね……言いなおします!! ネタに  
なって下さい!!」

チ「……今のでより悪くなっただけ!?  
え……?つまり、なに? あたいに何か新  
聞の記事になるようなことをやらかせとでも  
?」

文「ああ、その辺はご安心ください!! や  
る内容の方はもう決まってるので!!」

チ「いや、不安しかないんだけど?」  
何かやるものを考えた上でそれを実行しな  
ければならないのか(もしやるとすればだが)  
と思っただけど、もう何をするか決まってるの  
か……? っていうか……  
なんにしても、不安しかないな。

チ「全然安心出来ない……し、不安  
しかないっ!」

文「いやいや、そこは大船に乗った気持でい  
て下さい!!! 絶対スコープ……  
いや、成功間違いなしです!!」

チ「いま、明らかに言い直したよね……  
……もはや取り返しがつかないレベルで……  
……」

文「な、何のことですかねえ……（汗）」  
若干焦り、後ろをわずかに振り返りながら  
しどろもどろにあたいから視線をそらす馬鹿  
ガラス……いや、案外馬鹿に出来な  
いかもしれない。

それと言うのもあたいは最近結構、暇を持って  
余している。

確かに、生活にリズムが出来て平穩にはなっ  
ているもののその分、と言うかなんとか  
いつもの友人たちと遊ぶ機会が少ない気がす  
る。

早朝は農家の手伝いに、午前中から夕方頃は  
店番に、夕方からは夕食の調理に（もちろん  
朝も昼も食べている）とあるがそのほかは意  
外とのんびりできているのだが、帯に短しと  
いうか、他の連中と遊ぶ時間はあまり取れな  
いでいた。

しかし、空きはあつて暇なので、その時間を  
持て余していたというわけだ。

……まあ、休業日を設けてその日を  
遊びに費やせば良いだけなのだが、そう言う  
時に限って何をするか思いつかなかつたり、  
相手の都合が合わなかつたり（何の都合だ？  
）と、いろいろと齟齬が生じる。

一度やってみたらわかる……あれ  
はなかなか空しかったな……。  
空いた休日に、暇つぶしにひたすら読書した  
っけ……それは、それで楽しかった

けど。

そんなところにいまのこの話だ。

最初は「なに言ってるんだ？こいつ」と思ったが、なるほど。

こいつの新聞のネタにされるのは癪だし、下手に目立つのは控えたいし、無理して今の生活をしているわけでもなかったけれど、こちらでこういう気分転換的なものたまには良いのかもしれない・・・まだ内容を聞くまで、そういうものとは限らないけれど……まあ、相手も馬鹿じゃないし、あたいを誘い出すために、それくらいは考えてくるだろう。なのでもう少し話を聞いてみることにした。チ「……………で？ そのやるものって何なのよ？」

文「あやや？ てつきりやる気がないか、断つてくるかと思っただんですが……………話を聞いて下さるんですか？」

チ「……………そう思うんなら、あたいの気が変わらないうちに話したら？ それに聞くだけで、まだ引き受けるとはいってないし？」

文「あやややや……………やっぱりそうきますか？……………」

チ「当然でしょ？」

文「……………わかりました!!それではお話させていただきます。あなたにやって頂きたいのは……………妖精全員を集めた料理教室、です!!!」

チ「な!?!ナンダッテ……………→……………  
……………って驚いてみたけどそれはなんなの？」

文「あやや・・・ノリが良いのか悪いのか……」  
いきなり料理教室と言われても、あたいが教  
えられるものなんてたかが知れているし、（  
実際、一人分の自炊しかしないからあまりこ  
だわらないし適当）

人にものを教えたことなどないのでわからな  
いことだらけなのだ。

まあ、皆で集まって何かをするというのはこ  
とのほかテンションが上がるものなので、き  
つと盛り上がるなだろうが………  
だそれに問題もある。

まず場所と日時、全員が集まれるような場所  
と時間が必要であること、そしてあたいの料  
理の腕の問題……正直あまり自信はない。  
さっきの料理も、たまの休日に人里の貸し本  
屋である「鈴奈庵」で借りて読んだ本の中に  
料理本があつてそこに書いてあつたのをやつ  
ただけだし、それだけの内容で良いのかどう  
かがわからない。

その辺のことを文に問うと……

文「なんだあー！！そんなことですか！

！ それなら大丈夫ですよ！！」

チ「……それはなんでって、聞いていい？」

文「もちろんですとも!!! まず場所です  
が、博麗神社が良いと思います。なぜかと言  
うと、妖精のほとんどがそこに集めやすいで  
すし、何より博麗の巫女の監視付きで、この  
上なく安全安心!!そこに及ばずながらわた  
しも常にシャツt……目を光らせて  
ますので滅多なことが無い限り大丈夫でしょ  
う！」

なるほどまあ……、さつき言い直したセリフと、博麗の巫女（霊夢）に迷惑が掛ることが引つかかるけど、（まあ異変に気付けるならカメラを光らせるんでも良いけど）それ以外は大丈夫そう……いや、まだ問題は残る。

チ「でも、それはほとんどの妖精でしょ？ それにその中で神社に来れないと言うか来ない子がいるよね？……それにあたいの料理の腕ってそんなに高く無いから、教えられることも少ないよ？」

文「それも心配いりません。その来れない子って、エタニテイラルバでしょう？ 彼女は風が苦手ですからね！ でも！ここに風を操れる人が居るじゃないですか！」

そう言いながら、得意げに片目を閉じて見せる文。

確かにそれなら問題無い。

場所の問題は解決か……あとは……文「あとは、腕に自信がない……でしたっけ？ そんなことありませんよ！自信をもってください！ それになんとと言っても妖精相手なんですから料理の基礎でも出来ればそれだけでそれはもう大したもんなんですから！ それでも不安だと言うなら期間を設けますからその間に上達したらいいじゃないですか!!」料理の基礎だけでも凄いつて……いくら何でも舐め過ぎではないだろうか？……そりや出来ない奴もいるだろうけど。

チ「で？期間空けるって？どのくらい？」

文「ざっと二、三週間あれば足りませんか？ どうです？」

チ「……………逆にそんなに空ける？さっきの話し  
だとそんなに料理の腕は必要じゃないみたい  
だったし、一週間もあればいいよ」

文「それならなおさら良いですね!! ……そ  
れで、どうです？ 引き受けて下さる気にな  
りました？」

……………こいつの、これでもう決まりだろう！  
みたいな顔が腹立つけど……………まあ、もう特に異  
論もないし、やって見ようかな。

チ「わかったよ……………丁度、暇を持て余してたし  
、空き時間を使ってやれるとこまでやってそ  
の日を楽しむことにするか……………そしてあんたは  
それを記事にでもなんでも好きにしな」

文「それでは、交渉成立ですね!!」  
そう言いながら文は手を差し出して来たの  
で、一応その手をあたいも握り返しておいた。  
……………その様子をこの6畳間の部屋隅  
、入口付近の隙間の影から、こちらをじつと  
窺っている者がいることをこの時のあたいも  
文も気付くことは無かった。

---

再び霊夢 side

霊「……………!!」

魔「？霊夢……………どうかしたのか？」  
博麗神社への帰り道、人里を抜けて少し過  
ぎたところで、妙な気配を背後に感じて、反  
射的にお札を取り出しながら振り返り、構え  
ていた。

その様子を見ていた魔理沙も、ただならぬ雰  
囲気を感じ、

あたしと同じ方を振り返り、身構える。

霊「いや、気の所為？ でも、確かに・・・  
・・・何かの気配を感じただけだけどそれも知  
ってる奴の」

魔「知ってる奴ってのは？」

霊「それが・・・わからなかったわ。なんだかよ  
く知らない気配と一緒に混ざってて・・・すぐ  
に紛れて混ざったから」

霊「ねえ、魔理沙」

魔「なんだぜ？」

霊「さつきはあの氷精の件はなんてことない  
事だと思っただけど、今の事に関連して警戒は  
しておきましょう・・・なにか嫌な予感がす  
るわ」

魔「・・・ま、用心するに越したことは無  
いしな……………」

霊「……………(でも、知ってるっぽい方  
は嫌な感じは特に無かったわね…………警戒してお  
くに越したことはないけど…………)」

そんな風に、まだ見ぬ脅威に対して意識を  
高めながら、家路に就く二人の横を夜の生温  
かい風が静かに通り過ぎて行った…………。



## 第六話 氷迷

その後、文が妖怪の山へと帰った後、夕飯を済ませ食器を片づけて、その日はもう遅かったので、眠ることにした。

そして、その翌日の貸し本屋が営業を始める頃合いを見計らって、貸し本屋へと向かった。そこには、その貸し本屋「鈴奈庵」の看板娘である本居小鈴がお店の暖簾をあげているところだった。

なので自然とその容姿も目に入ってくる。その姿は髪を鈴のような髪留めでツインテールにし、着物は紅色と薄紅色の市松模様でスカートは若草色でクリーム色のエプロンをしている。

そしてそのエプロンの右下には鈴奈庵の文字と胸の部分にはKOSUZUの文字が書かれている。

暖簾をあげるその様子を観察していると、視線に気付いたのか、振り返り、あたいだとかると手を振り、声をかけて来た。

本居小鈴 鈴

鈴「あ！チルノさん!! おはようございます！ 今日何か借りに来られたんですか？」  
朝の一番にこの明るく元気な笑顔を見ると、心なしか癒されるようだった。

チ「ああ、おはよう！ うん、そうだよ。ちよつと料理本を探しててね」

鈴「あ！それならいいのがありますよ！ 見に行かれますか？」

チ「良いね！じゃあ、見せてもらおうかな！」

本当にこの子はまじめで気立ても良くて、  
良い子だな……。どこかのカラスにも  
見習わせたい……。でも確かあれって  
単なるポーズで、天狗組織内に於いては結構  
シビアだったつけ。  
なら不真面目扱いするのも筋違いか？  
そんなことを考えながら、小鈴に案内される  
ままに鈴奈庵の暖簾をくぐった。

それから数日後

「鈴奈庵」で借りた本を元に自炊する中で  
、料理の腕を高めていき、――紅魔館の完全で  
瀟洒なメイドや白玉楼の半人半霊の庭師など  
と比べるのは是非ともやめて戴きたい。  
こちらのレベルが低く過ぎて、死ねないのに  
死にたくなってくる――誰かに教えられるくら  
いには上手くなり、知識もそれなりになっ  
てきたのではないかと自負するまでにはなれた  
ので、そろそろ文に皆を集めるように言っ  
てもいいかもしれない。  
しかし、同じ妖精たちに上手く教えられるか  
どうか不安が無いかと言われればウソになる  
が。  
そうと決まれば、今日も今日とてどこかでス  
クープのネタを探しているであろう腹黒記者  
を探し出しますか。

霊夢 s i d e

霊「あゝゝゝ暇ねゝゝゝ。でもこの暇で静かなひと時が一番よねゝゝゝ何も起こらないのが一番よ」

ついこの間の事件？の時以来、何も変化は無く平和そのもので、なんてことのない、いつもの日常をかみしめ満喫しながら、縁側でお茶を飲んで日向ぼっこしているとどこから声がした。

？「——！！——……さ……む……さ……

ん……れ……い……」

ん？ イマイチ聴きとれないわね……

そうして耳を澄ましていると、何かが声を発しているような気がした、そしてそれはものすごいスピードで近づいてきており……文「れ——い——む——さ——ん！！」

それが例の新聞記者であると言うことを遅まきにだが理解した。

そして、理解した時には遅かった。

霊「げっ!!!あや!? なんであやが落ちてくんのよ!? ……つてうわあああああああ!!」

文「ちやあああくちいいいいいいいい!!!」

とんでもない速度でほぼ真上から飛んで来たかと思うと、辺りに砂埃を捲き上げ散らしながら着地した。

霊「げほっ……けほっ……うえ……」

着地時に舞い上がった砂が顔にかかり口の

中に入ってしまった。

その元凶を睨みながらまたは平穩無事だった己の日常を壊した者を睨みながら、恨めしげに用件を聞く。

霊「文……もう、一体なんの用なのよ!!!……いえ、何か用があったとしてもこれはないわ………」

文「ああ、霊夢さんお久しぶりです!! 清く正しい射命丸文。ただいま参上致しました! いや〜よくぞ聞いてくれました! 用件と言うのはですね………」

霊「いや、やっぱり言わなくてもいいわ。

出会いがしらに砂埃をかけてくるような奴の用件を聞く耳なんて持ち合わせてないし………」

そう言うや否やお札をどこからともなく取り出して構える。

文「え? え? またこのパターンですか? その……砂をかけてしまったのは申し訳ありませんでした……ですから、その御払い棒とお札を下げ……え? だ、だから なんで霊夢さんも近づいて来るんです? え、ちよつま……うわああああああああ!」

霊「問答無用!!」

とおふぎはこのくらいにして本題に入ろう。(本当にぶちかましてやりたかったが) まあ、なぜか全身から薄く煙をあげている文が隣にいるけど……。

霊「それじゃ、何の用なのか話してみなさい」  
文「あややや……このくだり二回

目なんですけど……」

霊「あら……まだ喰らい足りない？（ニコツ）」

文「いえ!!!いいです!!!……十分です

!!……いや……十二分です!!……

実はですね……」

私は文から大体の事情を聞き、考えた後、

最終的には許可することにした。

理由は、そうどこか目の届かないところで問

題を起こされるよりかは目の届く範囲にいて

くれた方がいいことが一つと、この目の前の

新聞記者に弾幕勝負で勝ったっていう例の氷

精のチルノに会ってみたいからなどが主な理

由だが……」

霊「なんか、面倒くさそうなのよね……

……特に他の妖精の監視とか」

文「そこは……ホラ!! 相手は妖精です

し、実質、実力者が3人もいますし問題を起

こしそうな妖精も少ないですから良

いじゃないですか!」

霊「まあ、変なことになってこじれなければ

なんでもいいわ……でも、面倒を増や

すのだけはやめてよね」

文「はい!!!そこはお任せください」

霊「……（不安だわ……なんとなく）」

こうして文との話し合いは終了し、博麗神

社であの氷精の料理教室が開かれることとな

った。

どうも!!!清く正しい、伝統の幻想ブン

屋こと射命丸文です!!今回はわたしがナレ

ーションですよ!!はい・・・所で、

私の日ごろの活動ぶりを皆様に示すべく、ここに、私がチルノさんの料理教室に呼んだ妖精たちとの会話を書いていっちゃいます!!へ?・・・よく約束を覚えていたな。

カラスのくせに鳥頭じゃないんだな。

まさか妖精との約束を律儀に守るとは・・・

・・・ですって!!?失礼しちやいますね

!! 私はちゃんと約束は守るほうですし、

今回の事は私から持ちかけているんですから、尚のこと忘れはしませんよ!!

ではここから先は、私の孤軍奮闘ぶりをとくとご覧下さい!

エタニティラルバの場合

エタニティラルバIIエ

エ「~~~~~♪、ふふふっ・・・☒、今日も

良い天気だなあ~~~~(笑 やっぱり夏は

いいね!! 風は冷たくないし、お日様は暖

かくて気持ちがいいし♪」

とおおよそそんなことを言いながら、太陽

の畑の一面にひまわりが咲き誇るその上空を心地よさそうに適度に風に身を任せ「真夏のアゲハ蝶の妖精」ことエタニティラルバさんが漂っています。

その容姿は水色の髪に橙色の瞳を持ち、他の妖精と同じく裸足に、服には全体にアゲハ蝶の幼虫く成虫の意匠が施されており、頭の角とスカートは幼虫、お腹周りは蛹、背中 of 羽根は成虫を表した恰好をしている。

「……なんだか、気持よさそうなところを邪魔しそうで、気が引けますが、なんの!!その程度でこの私が退くと思っただら大間違いですね!突撃いっく!!そう意気込み、私は今も気持ちよさそうにして浮かんでるラルバさんの元へと飛んで行きました。」

文「どうも! こんにちは、蝶の妖精さん! 清く正しい幻想ブン屋こと、射命丸文です! お忙しいところすみませんが少しの間、お時間よろしいですか?」

エ「あ、速い新聞屋さんだ! こんにちは!!  
……うん、大丈夫だよ! ただ陽に当たってくつろいでください」

文「そうですか!!それは助かります……  
……実は、お話したいことがあります……  
て……」

「そう切り出すと私は、事の次第を説明した。  
……あれ?別に私、頑張つて無いですね……もつとこう……説得とか必要なんじゃないかって思ってたんですけど……素直すぎて手応えを感じないというか、あんまりにも上手く行き過ぎて肩透かしを食らった気分です……とはいえ、順調にいくならそれに越したことはないわけですし、相手も妖精こんなものでしょう……まあ、この調子で次も行けますかね!!」

文「……というわけなんです」  
エ「へえー!!! 面白そうだね!!」

「それならそっちに行っちゃおうかな……  
……あ、でも博麗神社でやるんでしょ?あそこってなんか風強いからなあ……」

文「そのことなら、お任せください!!あの場所一帯の風を私の『風を操る程度の能力』で無風状態にしてあげますから!!」

言いながら、天狗の葉団扇を取り出して見せる（実際はそんなもの関係無いが）

エ「無風も無風で嫌だけど・・・でも、すごいね!そんなことできちゃんうんだ!」

文「はい!!もちろん!!お望みとあらば、常にそよ風程度は起きるように調整もできますよ!!」

エ「ならその方がいいかも!!それなら行きたい!!!」

文「はい!では、お伝えした日時に博麗神社に集まっていたかどうかということ!!」

よし!これでまず一人目! 私は話終えるとその場から離れ、次の場所に向かった。

それじゃ次は、あの人の所ですね・・・。私は次に訪ねる人の事を考えていた。

### 大妖精の場合

人で賑わう人里の通りを、人間に扮した格好で歩く。

すると目の前から、人里の寺子屋の教師であり、半人半獣の上白沢慧音が眼の前から歩いて来た。

どうやら、時間から言つて、今は昼休みのようです。

そうだ、せっかくだからあの人について行き寺子屋を見学させてもらうことにしましょう。そこに目当ての人物もいるはずですし。

まあ、多分あの教師は私のことを知っていて



嫌がるでしょうから、こつそりとあとをつけるんですけれどね。

文「・・・・・・・・・・」

慧「・・・・・・・・・・」

こつそりについていくこと数分程たつたころに、尾行の対象である慧音が人気（ひとけ

）が無い路地で立ち止まった。

慧「・・・・・・・・・・そこにいるのは誰だ？

・・・・・・・・居るのはわかつてるぞ」

文「いや〜、バレてしまいましたか！流石は人里の守護者ですね!!」

慧「白々しい・・・・・・・・あんなに気配が伝わってきて気付かない方がおかしいどうせ、わざとだろう？」

文「・・・・・・・・それも、わかっちゃいました？」

慧「当たり前だろう。私以外に気配を気付かせないよう加減していたことがその証拠だ。わざわざそんなことまでして……私に一体何の用だ？」

そう、私は最初からこの半獣と二人きりになるために、気配をこの人だけが気付けるように気配を送りながら後をつけていたのだ。なぜなら、これから話すのはこの教師のある生徒についての話になるからだ。

文「そう、警戒しないでください♪ 別に大したことはありませんよ。話と言うのはですね・・・・・・・・」

そして説明を終えると、慧音先生の方から如何にも拍子抜けされたと言う様子で切り出される。

慧「……ふむ。なんだ、そんなことだったのか  
……だつたら、別に私を通さなくても  
直接本人に会えば良かったんじゃないか？」  
文「それでも良かったんですけど、先生を通  
した方が受け入れやすいかと思ひまして。  
それに、天狗の私が直接出向くと、おもいつ  
きり警戒されそうじゃないですか……」  
慧「ああ……確かに。あいつはあれで  
結構怖がりなところがあるからな……」  
文「それにこれは彼女の妖精としての話です  
し、人目に触れるのはまずいですし、第一、  
彼女、大妖精の生徒としての恰好が  
わからないですよ……」  
慧「なんだ、それは知らないのか……」  
文「その寺子屋に通つてるといふ情報だつて  
チルノさんから聞いて初めて知りましたし、  
そのチルノさんは生徒姿の大妖精を知らない  
ので探せないですよ……」  
……もしかしたら探せないこともない  
もしれないが、手間がかかるし、どうせ慧音  
を通すので必要ないと判断した。  
慧「……そうだったのか……ま  
あ、事情は分かった。そういう事なら協力す  
るとしよう。因みに……今、大妖精は  
ユキノという名で寺子屋かよに通つていてな、な  
かなか可愛らしい恰好を しているぞ」  
その言葉を聞いて、少し私の心に悪戯心が  
沸いた。  
文「へえ……じゃあ、あなたと  
どちらが可愛いんですかね……」  
そういうと、わたしは相手の不意を突いて

後ろに回り込み、相手の顎に手を添えると、そのことと、不意を突かれたことに動揺した守護者が慌てだされる。

慧「はあ!? ……おお、お前……きゅ、急に何を……／＼／＼」

動揺しているところに追い打ちをかけるように身体に手を這わせながら耳打ちをする。文「実はですね……こんなところにお呼びしたのはあなた個人に興味があつたからでもあるんですよね……」

慧「……つるるるる!!／＼／＼」

相手も能力の上ではさすがに敵わないと観念したのかそれともまんざらでもないのか、

(自分で言うのもなんだが、顔立ちはいい方

だと思う) いずれにしても、相手が動かないのをいいことにそのまま相手の首筋に軽く歯を立てようとした、その時……

鈴「……えっ……!!／＼」

そこには判読眼のビブロフィリアであり、

鈴奈庵の看板娘の本居小鈴が頬を少し赤く染め、息を呑んだまま固まっていた。

そして、その小鈴の目の前には、今まさに獲物を捕えんとする飢えた獣のような、妖艶な表情の私、射命丸文と、赤面しながら何かを覚悟したように眼を堅く瞑ってその時を待つ気弱に眉の下がった表情の上白沢慧音が映っていた。(本人談)

その時私はどうと、慧音の後ろから右手を慧音の顎に回し、左手は相手の体に這わせ、首筋に歯を軽く立てて甘噛みしようとしているところで小鈴に視線が固定されていた。

そして、一向に何もしてこないことを不思議に思った慧音も目を開けると小鈴を見た。

慧・文「あ……」

鈴「……し、ししししし失礼しました  
ーっ!!!」

そう口走るが早いか、脱兎の如くその場から走り去る小鈴嬢。

文「ち……違うんだーっ!!!」

鈴「早く現場から」にげるんだあ……」

はい。何も違いませんでしたー。

やはり悪ふざけはするもんじや有りませんね。こんな風にあらぬ誤解を受ける事になってしまいます。

ここは早めに捕まえて誤解を解きましょう。まあ、誤解させたままでも別に問題無かったのですが、自分が誤解されたままというのはなんとなく厭ですし、反射的にね。

と言うわけで私はすぐさま今なお逃走中の小鈴嬢を能力全開で捕まえる。

文「はくくく。ストーっツプ!!」

追いついた私は小鈴の口を手でふさぎ、片方の手を捕まえて動きを止めた。

そこで、口から手を離すと小鈴は顔を赤らめ少し涙目になりながら、可愛い顔で、お願い許してえ……!などと言って来るものだから一瞬このままさらってしまいたくなくてしまいました。

いや、ほんとマジ可愛い……お持ち帰りしたい。

いやいや、駄目でしょ。

誤解を解くために追いついたのにそれでは更なる誤解を……

じゃ、さっさと誤解を解いておきますか。

文「大丈夫ですよ。別に何もしたりしませんから……」

だの冗談ですし……」

鈴「えっ？ そうだったんですか？ 私てつきり……」

そこまで言うと、一体いつからそこにいたのだろう、慧音が追いついて後ろにゴゴと音が聞こえそうな迫力のある笑顔でゆっくり私の両腕をガシツと捕まえながら、

慧「ほう……冗談か……良い度胸だなこちら  
はもう観念していろいろと覚悟すらしたと  
言うのに……」

文「え？、え……ま、またですか？ この頃の私、多くありません？ こういうの……!!」

顔を若干青ざめさせ顔の右上に縦線が幾つか入ったような感じで顔をひきつらせていると、

慧「……この……不届き者があ……!!」  
文「むぎや……!!」

その言葉と共に振りおろされた頭突きが見事に脳天に直撃した。

そして、意識を失う前に見た人里の守護者（けいね）の顔は少し赤らんでいた。

キュ……っという効果音が聞こえてきそうな昏倒の仕方をした私は倒れて意識を手放す前に以下の会話を聞いた。

慧「まったく・・・、ああ・・・さつきは見苦しいところを見せてしまつて・・・すまないな小鈴」

鈴「いえ・・・それにしても大変ですわね・・・  
・・・慧音さんも。お疲れ様です（汗）」

慧「ああ、全くだ（怒）・・・この色魔ガラスが・・・!!おっと、そうだ、すまないがこの色魔を運ぶのを手伝つてはくれないか？　こんなところで立ち話もなんだし、こいつとも一応話の途中だったのでな」

鈴「ええ、構いませんよ！・・・それでしたら、とりあえず鈴奈庵にでも運びましようか」

慧「ああ、そうしてもらえると助かる。本当にすまない：ありがとう」

そこで私は意識を手放した。そして次に眼を覚ますと本棚が幾つも見える天井が広がっていた。

文「う、うくくん・・・ここは・・・？」

慧「ここは鈴奈庵だ。小鈴に頼んで運ぶのを手伝ってもらつた」

声のする方へ顔を向けるとそこには、慧音が椅子に腰かけ何かの本を手に取つて読んでいた。

そして確かに意識が飛ぶ前にそんなような会話を聞いたような？

慧「それで、さつきの話の続きだがユキノ：もとい大妖精にはわたしから誘つておけばいいのか？・・・その料理教室とやらに」

文「はい。お願いします。誘いに乗つたかどうかはまたお訪ねしますのでその時に教えて

ください」

慧「分かった。……（とはいえ、あいつがチルノがらみのことを断るとも思えんが）ボソツ」  
文「ん？何か言いました？」

慧「いや、何でもない。任せておけ」

文「？そうですか？・・・それでは私はこの辺でお暇します。ではまた」

慧「ああ、またな」

そこで私は鈴奈庵を後にして、次の目的地に向かいました・・・と、一応なぜ、小鈴ちゃんがあんな人気のない通りを通ったかを説明しますと単に鈴奈庵への近道だったというそれだけの理由らしいです。（慧音談）

・・・どうでもいいですね!!すみません!!  
さて、次の探し人は、どこにいるか分からないので先に探しておきましょう。

その他はほぼ一か所に固まっていますしね。それからは幻想郷中を飛び回り、春告精であるリリーホワイトを探し回っていました。

そのリリーホワイトの特徴は以下の通りで、姿は金髪に赤いラインの入った白いワンピースに揃いのとんがり帽子にリボンをして、春先には幻想郷中を「春ですよ〜〜」と言いながら飛んでいる。

実際にそんな風に飛んでいる姿を毎年のように見たので、間違いはないでしょう。――しかし今は春ではなく夏なので姿で探すしかない――その姿を見つけるため、幻想郷中を（風を操る程度の）能力を駆使して探していると、そのような姿を妖怪の山付近で発見しました。

しかも、よく見てみるとなんだか元気が無さそうですね。

リリーホワイトの場合

リリーホワイトⅡホ

ホ「春じゃないですよ……： な……つで……すよお……」

……いつもの台詞じゃないけど、言いはするの……。しかも何やら暑そうですね……。(ホ「あつい……」あ、言った。

まあ、気にせず行きましょう！ それでは、いざ突撃!!

文「ちよつとすみません！そこに浮かんでいる妖精さん!!お時間大丈夫でしょうか!?

うん！明らかに大丈夫ですね!!では少し失礼しますね!!」

ホ「……えっ?えっ!?!な、なに!?!何事?!?」

相手が戸惑うのも構わず手を取ると、スピード全開で人里の方へ飛行する。

その道すがら、事情を説明したのですが、混乱状態にあった彼女には全く伝わってなかったみたいです……

まあ、最終的に結果オーライだったので良いんですけどね。

そして数分くらい経ったころ、会わせたい妖精のチルノさんがなぜかあちらの方からもやってきました!!……うん!やはり

本日はツイて……あれ?チルノさんに手を振りながら近づいて行ったのですが、こちらに気付いたチルノさんの様子がなにかおか



しい。

手をぽきぽきと鳴らし、その拳を口の前にも  
つていき、はあくくつと息を吐きかけている  
……まさか!!!

チ「……なに無理やり連れてきてんだコ  
ラ……」

文「ふげっ!!……ぐうふっ!!」

そう喝を飛ばすや否や、急接近してきたそ  
の勢いのままにチルノさんから私の鳩尾に拳  
をもらい、危うく気絶しかけました。

あれ……?私、何かしたかな?

文「げふっ……かは……ちよっ……  
ちよつと待つてください!! 私まだ何もし  
てないじゃないですか!!?」

チ「……ということはこれからまだなん  
かする気なのか……よし……そこに直  
れ!」

文「違います!違いますよ!!! 何もしま  
せんって!!」

チ「……でもその子、明らかに嫌がつて  
るじゃない」

文「え?……あ……」

そう言われて後ろに目をやると、私の手を  
振りほどこうと目をへくの形にバツにしなが  
ら暴れているリリーホワイトの姿があった。

ホ「……はなすですよ……」

……はなしてえ……!!! ……こわ  
いですよ……!!!」

チ「……ほら怖がつてるじゃない……」

文「あ……れえええ? いや、すみません……  
……ホラ……怖くないですよ……」

そう言いながら手を離すと、一目散にチルノさんの方へ飛んでいき、その背中に隠れながら私を警戒するように睨むリリーホワイト氏。

ホ「・・・・・・・・むうう!!」

チ「あんた・・・・・・・・ほんとに何したのよ・・・・・・・・」

自分の背に隠れた春告精リリーホワイトの頭を撫でてやりながら呆れたようにそう呟くチルノさん。いや、今回は別になにもしてない・・・・・・・・と思うんですけど？

文「いや、ほんとに何もしてませんって!!手を引いている間に事情は説明しましたし・・・・・・・・少し飛ばしましたけど・・・・・・・・」

チ「・・・・・・・・それちゃんと事情を説明してから引つ張つてつたの？まあ、それでも強引だと思うけど」

文「・・・・・・・・あ!」

確かにうっかりしていました・・・・・・・・ここまであまりに順調なもので（慧音との件は除く）、つい強引に相手の了承も何もなく連れてきてしまいました!!

・・・・・・・・おかしいですねえ、普段ならこんな事疲れてもしないはずなのに・・・・・・・・やっぱり何か調子がおかしいですね。

まあ、そんなことはさておき会わせることは成功したものの・・・・・・・・どうしましょう・・・・・・・・

そんなことを考えていると、春告精の様子が何か変わった。

何かあったのかとそつちに視線をやると、ど

うやらチルノさんに懐いているようだ。

チ「うっくん、困ったなあ……」

ホ「この人の周り、何だかすずしく……ですよ!! なんだか春が来る前みたいですよ!

!」

チルノさんの方はその様子に困り果て、リリーホワイト（以下リリー）はチルノさんの側がとて過ごしやすいみたいで、とても懐いている。

これはチャンスですね!! やはり連れてきて良かった（殴られたけど）。

文「リリーさん!! 今から行くところに付いて来てくれればその人と一緒にいられますよ!」

ホ「ほんと!!? いやくくずっと暑くてまいつてたんですよくく!! そう言う事なら行くですよ♪」

チ「ちよつと!! また勝手にそんなこと言うて!!」

文「いいじゃないですか!! このまま行きましょうよ! どうせ、ここで会ったのも私を探して準備できたことを伝えるためでしょ? なんせ、今日が当日ですもんね!」

チ「……ハア……:……どうしてそういう方は頭回るかな……でも今行こうとしてたわけじゃないよ……それにもう全員に言い終わったの? この子で最後?」

文「はい!! 博麗神社に住む面々には霊夢さんにアポを取った時にまとめて説明しましたから!」

チ「それならいいんだけどさ……まだ

伝えてある日時には早いんじゃないの？」  
文「そうですね・・・なら、チルノさんと霊夢さんの顔合わせということにしましょう。それなら問題ないでしょう？」  
チ「確かに、まあ、開始する少し前に前もつてあつておいた方がいいかもね」  
そうして、この場の全員で博麗神社へと行くことになった。

回想くく

光の三妖精（サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア）とクラウンピースの場合

サニーミルク⇨サニー ルナチャイルド⇨ルナ  
スターサファイア⇨スター

クラウンピース⇨ク

さて、霊夢さんに許可も取ったし、この辺の妖精に先に話をつけておきましょうかね。そう考え、私はまず、この神社の地下在住の地獄の妖精から話をつけることにした。

く博麗神社地下く

地下は薄暗いせいで視界が悪く、私が妖怪であることと空を飛べていなければたちまち躓いていただろうほどの環境の悪さだった。そんな地下道をしばらく進んでいると、それはいた。  
ヘカーティア・ラピスラズリの部下であり地獄の妖精、人を狂わす程度の能力を持った妖精、クラウンピースは退屈そうにそこで座っていた。

クラウンピースの場合

ク「・・・はあ、ここは気質があうから

住んでいるけど、悪戯するものがないからツマンナイよ・・・はあ・・・ツマラナイ」

心底つまらなさそうにそう呟いた、その地獄の妖精の容姿は、髪は金髪のロングに目の色は赤紫色で頭に玉が三つ付いた紫に水玉の帽子を被り、首元にひだ襟の付いた青地に白い星マークと赤と白のストライプの服を着ている。その服は右がストライプ、左が星だが履いているカラータイツはその逆の右が星、左がストライプとなっている。

その姿の顔の部分には本当に退屈だという表情が張り付いていた。

・・・というか最後の台詞とか、すべてを見通せるがゆえに世界に退屈したどころの希望ですか。

そんなにつまらないか（汗

そしてこの世のすべての退屈をそこに置いてきたような顔がこちらに気付いた。

その瞬間、憂鬱な顔が一気にいい笑顔に変わり、凄惨で好戦的なものに変化した。

ク「退屈しのぎ・・・みいっくっつけたっくっ・・・!!」

文「あやや・・・これは、もしかしてやるしかない感じですか？」

ク「きやははは!!そこなお姉さん!!

ちよつと地獄の炎に狂ってもらおうよ!!」

こうして、唐突とも言えるスペルカード戦の幕が切って落とされた。

スペカ戦

地獄の妖精クラウンピース

V S

伝統の幻想ブン屋射命丸文

文「やれやれ、仕方ないですね……」

ク「遊んでくれるの？」

文「ええ、いいですよ。その代わりに条件を聞いてもらいますが」

ク「いいよ♪何でも言って!!」

文「私が勝ったら私の言う行事に参加してもらいます。有無を言わさず」

ク「へえくく!! 面白そうだね!!それなら別に条件にしくなくても参加するけど」

文「しかし、私が勝利した場合有無を言わさず強制参加してもらおうという条件なので、たとえあなたが勝っても参加するというなら別に止めはしません」

ク「そう……だつたらこっちはあたいが勝つたら、お姉さんはあたいが飽きるまで永遠にあたいの相手をしてもらうよっつ!!」

文「う……なかなかヘヴィですね……ではルールはスタンダードのスペカ三枚の被弾三回でいいですか？」

ク「うん!!いいよ!! それじゃ、合図は何にする？」

文「……そうですね……」

そこで私は、洞窟の中を見回し、開始の合図となるものを探した。

そしてどこから落ちているのか、水滴の落ちる音が一定の間隔でしているのに気づいたので、その音を合図に決めてクラウンピースに言った。

文「水滴の落ちる音がするので、それが次に落ちた時から数えて5回目で始めましょう！」

ク「おっけくくく!! じゃあ、もう一つ落ちたからあと4回だね!!」

文「ええ!それでは!」

・ ・ ・そして5回目の水滴の落ちる音が洞窟に鳴り響いた。

ク「よくくくい・ ・ ・ドン!!」

チルノさんとの勝負以来の妖精とのスペカ戦が始まった。

ク「それじゃあ、あたいから行くよ!!」

獄符『ヘルエクリプス』!!」

この戦いが始まって一枚目のスペルカードが開始早々宣言された。

文「のっけから飛ばしますね!!もう!!」

その宣言と同時に私の前に反時計回りに高速で回るワインダーと画面中央を旋回する月が出現し、星の中弾がばらまかれ、弾幕が展開された。

このスペルでは相手に弾を当てても効かなかったので恐らく耐久スペルだと思われる。

耐久スペルとはボス(つまり相手)の体力の減らないスペルカードのことであり、相手は被弾しないので制限時間までスペルが解除されることが無い。つまり、30秒間よけ続ける他に解除する術は無い。

耐久スペルにはこのように相手が被弾しない他、相手自体が消失するので、当てようがないものの二種類存在する。

なので、今はよけ続けるしかない!!

文「うわつと・ ・ ・危ない危ない・ ・ ・」

ク「うわあ・ ・ ・おっしい!!! ・ ・ ・お姉

さん、すごく速いね・ ・ ・確かに、良く見れ

ばカラスの羽根みたいの生えてるし、烏天狗だよね・・・それなら速いわけだ」

先ほどワインダーを形成する光弾の一つが私のすぐ隣りを通り過ぎて行つた。

何とか躲したがぎりぎりだ。

ク「でも、烏のお姉さん・・・避け方間違えたね♪」

文「な・・・!!」

そう言われて見てみると、今まさに目の前に星型の弾幕が迫ってきているところだった。文「しまっ……くつつつ!!」

残り3秒というところだったのでまだ良かったものの、一回被弾してしまった。

ク「おおー!! なんとか耐えたみたいだね

ー……なら次はこんななんてどうかなー……!!」

文「!!」

ク「獄炎『グレイズインフェルノ』!!」

次のスペルが間髪入れずに宣言された。

一見きついように見えるが、ここはチャンスだ。しばらく相手の弾幕を躲した後、私もスペルを宣言する。

文「ここです!! 突符『天狗のマクロバー

スト』!!」

ここで私もスペルを宣言し相手のスペルと相殺することで、相手はスペカを二つ消費、こちらはまだあと二つスペカを残して有利に運ぼうとしただけなのですが、ここでうれしい誤算。

ク「げ!!・・・痛ったく!!」



私が上方から下に向けて弾幕を展開しているとスペルの射線上に位置していた相手が被弾し、スペルが解除されました。

てつきり二連続で耐久が来るのかと思っていただけに拍子抜けでしたが、これで完全にこちらが有利になった。

相手はもう二枚消費したのでこれでスペカはあと一枚、こちらは二枚残した上にまだスペルは続いています。．．．．．そして、もうすぐ時間というところで、相手が二回目の被弾をしてくれました。これで．．．．．

ク「うわっつ!!! く．．．．．追い込まれた．．．．」

文「．．．．．かあった．．．．」

ク「．．．．．と思っていたのか」

文「何!!!?」

ク「今度は（自分の）スペカに気を取られすぎたね．．．!!」

文「!!!」

見るとそこには自機狙いの弾幕が私を取り

囲んでおり、そして．．．．

文「いつの間に．．．．．きやあつつつ!!!」

ク「これでお互い被弾数は2．．．．．まだまだ分からないね♪」

文「．．．．．」

ク「さて．．．．．ここからはちよつと温存させてもらおうかな」

文「ようやくこちらのターンですか．．．．．なら．．．．．ここは派手に行きましょう!!」

文「スペルカード発動!!風神『二百十日』

!!」

この奥まった狭い場所では、この密度の弾幕はそうそう躲せないはず……。

しかし、なぜか悠々と避けて行くクラウンピース。良く見ると、洞窟のくぼみや柱などの障害物を利用して、盾にしていた。

……そしてついに、制限時間がきてスペルが終わりを迎えた。

文「く……避け切られましたか……」  
ク「甘いよ!! この障害物を利用すれば

、あんな密度だけの弾幕なんて……」  
ちよつと手加減しすぎましたかね?

……これで、お互いにスペカ使用数二枚、被弾二回……最後くらい本気で  
行きますようか……

いや、まだあと一つだけスペルは残っていますし、ここは最後までこのまま行きますかね……。

そこからは通常弾幕の応酬が続き、お互いになかなか3枚目を出さない状況が続いた。

それもそのはず、ここで相手に先に出させてしまえば、あとはそれを避けるか

耐えるだけで勝ちとなる。

数分後

通常弾幕での攻防が続く中、互いに自身に掠る(グレイズ)弾が多くなってきました。

これはそろそろ潮時ですか……ね!

そんなことを考えていたそばから、自身の横を弾幕がかすめたが被弾ではない。

それでは行きますか!!!

文・ク「(文) 旋風『鳥居つむじ風』!!」

「(ク) 地獄「アポロ捏造説」!!」

文・ク「「え．．．？」」

．．．．なるほど、考えることは同じでしたか．．．．。

やはり耐えるなんて野暮なことはず、勝ちに行くしかないようですね!!

．．．．と思ったのですが、相手のスペル、これ!、、耐久ですね!?

これ．．．．このまま耐え続けても引き分けになるパターンじゃ．．．．

光の三妖精 side

とある木を改造したツリーハウスの中で、

光の三妖精のサニーミルク、ルナチャイルド、スターファイアの三人は優雅な午後を過ごしている．．．．はずだったのだが．．．．

サニー「ねえくくく．．．．」

ルナチャ「．．．．」

スター「．．．．」

サニー「ねえつてばくくく．．．．」

ルナチャ「．．．．なによ、サニー．．．．暑いんだからあまり話しかけてこないでよ」

スター「そうよ．．．．暑さに響くじゃない．．．．」

サニー「だって．．．．いつまでもこうしてたって暑いだけじゃない．．．．」

ルナチャ「それはそうだけど．．．．」

スター「．．．．」

そう、いまこのツリーハウス内は外の温度

と同等かその次くらいには熱気に支配されており、その暑さに三妖精も参っていたと言うわけである。

それほどまでにこの日はこの夏の最高気温を更新していた。

外では日が燦々と照りつけ、セミの声がこれでもかと響き、聴くものを更に暑い気分にならせている……それはこのハウスの三妖精も同様だった。

ルナチャ「でもだからって、他にどうするのよ……言っておくけど、悪戯になんて行く気にならないからね……？」

スター「そうよ……私達みんなこの暑さに干からびて死ぬんだわ……」

サニー「ちよつと!!なに物騒なこと言ってるのよ!?!スター!!」

ルナチャ「まあ、死んでも妖精わたしたちは一回休みになるだけけどね……」

サニー「そ、それはそうだけど……」

スター「あつい……あついよ……」

ルナチャ「あついあついって連呼しないでよ余計暑くなるじゃない……」

スター「だつてえ……」

サニー「むむむ……」

この三人のなかでもリーダー格のサニーが無い頭をフル動員して考える。

ここから、別の場所に行く?でもどこに?どこかに涼しい場所は?

そうやって文字通り必死になりながら、考えていたサニーの頭に一つの場所が思い浮かぶ。

サニー「……………そうだわ!!!」

ルナチャ「どうしたのよ……………大きい声出して……………」

スター「本当になんなの……………」

サニー「良い避暑地を見つけたの!!!」

スター「本当!!!?」

ルナチャ「そんなところがあるってどういうの?」

サニー「ええ!!!まっかせなさい!!!」

して、その場所に三妖精は向かうのであった。

一方その頃――

side

ク「そらそら!! 当たっちゃうよ……………」

?きやははははは!!」

文「もう!!!自分はまだ負けの心配がないから……………」

そう、もはや勝負は決したも同然、ここからの同点はあり得ても逆転まではもうない。

そんな状況に私、射命丸文は追い込まれていた。ここから何かが起こるとすれば、だれかの乱入でうやむやになってくれる……………」とかしかありませんよね……………」でも、そんな都合よく……………」とそんなことを考えながら何とか相手の耐久スペカを自身の弾幕で打ち消したり避けたりしていると、どこから声がひそひそと聞こえて来たではありませんか。

あまりそちらに集中すると被弾しそうになるので出来ませんが、『風を操る程度の能力』

で気流を操作して聞こえてくる会話の内容からして、どうやら私達のこの勝負（スペカ戦）の事を言っているみたいですね。

再び

三妖精 side

三妖精は暑さから逃れるため、博麗神社の地下に来ていた。

そう、サニーが思いついた避暑地とは博麗神社の地下である。

そこは妖精が思いついたにしてはとても良い場所だった。

まず、そこには陽は当たらず、地下なので有る程度冷気も溜まっており

適度に湿度もある。

少し肌寒いくらいの場所なのである。

しかし、それも奥にいくにつれてだんだん無くなっていくのであるが。

それでも、そこにいればいいだけであり、既にある程度熱気から解放されたため、三妖精たちはもう充分に暑さから回復していた。

サニー「はあくくくく・・・生き返るうー  
ー!!!」

ルナチャ「本当ねくくく・・・」

スター「確かに・・・なんでこんなところ思いつかなかったのかしら・・・サニーには感謝しないとね♪」

サニー「そうでしょう、そうでしょう!!!」

・・・さて、元気になったところで!!」

ルナチャ「やる気ね・・・サニー!!!」

スター「もう、何も（三人なら）怖くない!」

(有名なフラグ)

サニー・ルナ・スター「悪戯開始!!!」

┌

三人は悪戯を開始するべく動き始めた。

そして、その悪戯の標的もこの地下に居ると  
いうのが三妖精にとつてこの場所が良いとい  
うもう一つの点であつた………が………  
サニー「フフフツ♪ ね!!いいでしょ!!」  
ルナチャ「確かに、ここにはあの地獄の妖精  
が住んでいたわ。悪戯の相手までそこにいるな  
んてサニーにしては冴えてるわね」  
スター「そうね……あの妖精の驚く顔が楽  
しみだわ!!」

そう、これは妖精が妖精に仕掛ける悪戯、  
ふつうはそれほど脅威ではないかもしれない。  
しかし、地獄の妖精たるクラウンピースが妖  
精として規格外なために、悪戯を仕掛ける相  
手としてはスリルも申し分ないのである。

この三妖精にとつては肝試しのようなもので  
、これも涼を得るための一環でもあつた。

三人でしばらくお喋りしながら飛んでいると  
、スターサファイア（以下スター）が生き物  
の気配を感じ取つた。

スター「なにかしら………何かの気配を  
感じるんだけど………」

サニー「そりゃあ、あの地獄妖精のじゃない  
の?」

スター「そうかもしれないんだけど……  
でも絶えず動き回つてるような感じでしかも  
なんか二つあるし」

ルナチャ「それって、ほかに誰かいるんじや  
ない?」

この『動くものの気配を感探る程度の能力』  
が彼女、スターの能力である。

この能力によって三人はほかの誰かが来るまでに、悪戯を完遂させたり、逃げ出したりすることに使っている。

スター「この感じは・・・弾幕ごっこ？」

サニー「へえくくく!! なんだか面白くなってきたじゃない!!」

ルナチャ「誰かのスペルカード戦か・・・観戦するもよし、乱入して邪魔するもよし」

サニー「とにかく行ってみましょ!!」

その三人の向かった先では今まさに弾幕ごっこが展開されている最中だった。

しかも、対戦カードは自分たちの悪戯の標的であった、地獄の妖精クラウンピース……………とこちらは予定外だが、伝統の幻想ブン屋こと射命丸文だった。

サニー「ねえ・・・アレって・・・」

ルナチャ「うん、間違いないわね」

スター「あの新聞記者・・・よね？」

サニー「いいわね!! いいわね!! 前はなんかダシにされたみたいだったし、ここらで「ぎやふん」と言わせましょ!!」

ルナチャ「それはいいけど、「ぎやふん」てきょうび聞かないような・・・」

スター「ぎやふん!!」

ルナチャ「いや、言わなくていいから・・・」

サニー「とにかく!!ここで私たちの能力を使って邪魔しちやいませようよ!!」

スター「いいわね!!」

ルナチャ「うんうん!!」



サニー「それじゃあ、行くわよー!!」  
サニー・ルナチャ・スター「おー!!」

そして、光の三妖精の悪戯作戦が密かに開始された。

文 side

なるほどなるほど!! これは好都合ですね・・・ここでうまく妖精たちが邪魔して、このスペカ戦が中止されれば・・・。そのためにも少し私も手伝ってあげましょかね。

スペカ戦

DDFF風味

※これはイメージ

です。実際の戦

闘とはなんの関係

もありませんww。

ク「ほくくくら!! 終わりにしてあげるよ

ww・・・!!」

(ホーリースター)

文「く・・・その身に刻め!!! (泣)」

(真空波)

ク「逃がさないよ!! ...ユニゾンだ

w・・・!」

(フォースシンフォニー)

文「ぐ・・・殲滅する・・・! (涙)」

(天鳴万雷)

ク「・・・どうだい? ...消えて・・・無くなれ!!!」

(アルテマ)

文「うう・・・ど、どこを見ている!! ...

(咽)

(絶影)

(・・・っと、そろそろですかね・・・)

そう、妖精たちの会話を盗み聞いておいた  
限りではそろそろ行動を起こすはず・・・

・・・今か!!!

そう思った瞬間、目の前の弾幕がすべて消え  
た。ここですかさず!!

文「う、うわっ・・・弾幕が消えた!!?

そちらは大丈夫ですかー?」

ク「うえっ? どうなってるの?」

こつちも弾幕が消えたんだけど・・・!!」

文「ついでに音もききましたね・・・」

そこで私は手の身振り手振りで続行不能な

ことを伝えると、相手も不承不承と言った感  
じで、戦闘を中止した。

お互いに近くに来て、大まかな読唇術や身振  
り手振りで話し合い、これはあの光の三妖精  
の仕業ではないかという結論に至った。

まあ、私は最初から知っていたわけだが・・・

・・・というか、結局、私が手伝うことなど  
なかった。

そして三人の妖精、サニーミルク、ルナチャ  
イルド、スターサファイアは私が能力で気流  
操作で位置を特定して、クラウンピースがそ  
の位置の妖精たちを狂わせ、能力を解除させ  
ることで、場はもとに戻った。

サニー「あれ? 私たちは何を・・・って  
!げっ!」

スター「どうしたの? サニー・・・うわ  
っ!!」

ルナチャ「あれ? ここは・・・ああ

・・・」

こうして、光の三妖精も捕まえ、企画を説明して、その場はお開きとなりましたとき。めでたしめでたし!!

尚、クラウンピースはその時に再戦をするという条件付きでの承諾となりましたが、まあ結果オーライということ。

とここまですが回想で、これで全員に参加してもらえようになったので、

あとはその日を待つのみです。

いやはや!!いまから楽しみですね・・・!!

## 第七話 氷乱

料理教室のその当日、朝のかすかに涼しい空気に陽射しが照らす中、博麗神社の階段を上り、博麗神社に着いたあたいがまず目にしたのは……

『チルノのパーフエクト料理教室』

というフザけた看板だった。

あの天狗……一体いつから……などと考えていると、背後から例の記者の能天気な声が聞こえてきたので振り返る。

文「……ということがあつてですね……」

霊「ふくくくん……」

すると、相手もこちらに気付いたようだ。

うん、マジで殴りかかる五秒前M N 5だ。

文「あ!!チルノさくくん!! ヤッホー!!」

チ「おい……アレはなんだ……」

文「ああ!!いいでしょ!?!あれっ!!」

あの時チルノさんも唄ってましたし丁度いいかなと思つてww」

チ「……いつから聞いてた……」

文「さ・い・しよ・か・らww!!」

チ「フウザけるなああつっ!!」

文「……つと!今度はガードwww!!」

普通に動きを見切られて突き出した拳を掴まれた……まあ、手加減してるけどさ。

……ああ、それにしてもムカつく!!  
そして恥ずい……あの看板は即撤去さ

せてもらおうことにしよう。

まあ、場所がわかかってるなら、集まるのも別に使わないだろうし。

・・・それはそうとすぐくこつちに視線を感じるんですけど・・・

霊「……うくくん……」

そして、うなっているかと思えば、あたいの全身を見回す博麗の巫女。

チ「あの・・・何か？」

霊「うくくくん……えいつ」

そしてまた唐突にほっぺをつねられるあたり。

チ「いひ<sup>痛</sup>ひ<sup>い</sup>いで<sup>す</sup>ふ<sup>や</sup>ひ<sup>め</sup>めて<sup>く</sup>ら<sup>だ</sup>ひ<sup>さ</sup>ひ<sup>い</sup>」

霊「・・・うん。顔合わせの時も思っただけ

ど、前の氷精<sup>チルノ</sup>とは持つてる力も姿も違うわ

ね・・・そして、大人しい」

いや、大人しいってあたりは野生動物か

なんかか・・・まあ、言わんとするこ

とはわからんでもないけど。

とにかく、この人が今回のこの料理教室の

会場の提供者である博麗の巫女、博麗霊夢

その人である。

その姿はまっすぐな黒髪に茶色の瞳で身長

が高く、服は袖のない肩・脇の露出した赤

い巫女服を着ており、頭には模様と縫い目

の入った赤く大きいリボンを後頭部で結ん

でいる。

この人とは、リリーホワイトを連れて行ったときにすでに顔合わせが済んでいる。

・・・あと、いい加減ほっぺから手を放してほしい。

しばらくそうしていると、また別の方から声がかかった。

魔「お〜〜〜い！食い物が出るって言うのはここか〜〜!?」

現れたのは普通の魔法使いこと、霧雨魔理沙。

彼女は彼女で、リボンのついた三角帽子を頭に被り、黒系の服に白いエプロンといういかにも魔法使い然とした恰好をしている。

確かにここで料理教室をやる予定だけど、いきなり食い物に食いつくのはどうなんだ？（食べる気まんまんだな）

というか誰に聞いた……まあ、またあのバカラスがしゃべったんだろうけど……

と思っていると、相手があたいに気付いた。

魔「お〜〜!! チルノ……つて、お前本当にチルノか？ めちゃくちゃ見た目変わってるな!!なんていうか、強そうだし！」

第一声がそれか……大ちゃんとは大違いだ。

それにしても、もう少し言うことがあるんじゃないか？

とか考えていると、あたいの頬から手を離れた霊夢が、

霊「いや、あんた……もつと他に言うことあるでしょ……」

と、言ってくれた。素直にうれしい。

そして、そんな風に看板撤去（文に泣きつかれたが無視）などをして適当に過ごしていると続々とメンバーが集まってきた。

まず、クラウンピースが地下から出てきて、

そして上空からはリリーホワイトと、大妖精、  
そしてエタニテイルバが飛んできた。

大「あ!!チルノちゃん!!おはよう!!!

今日はよろしくね!!」

まず、大ちゃんがあたいに笑顔で挨拶して  
きた。それにあたいも快く答える。

チ「うん!こちらこそよろしく!美味しい  
ものいっぱい作ろう!」

大「うん!!!」

そこで、次はリリーが飛んできて・・・

・・急に抱き着かれた。

ホ「わーい!! チルノですよー!!  
くっつけて下さいですよー!!」

チ「うわっ・・・と・・・ちよっつ・・・  
こら・・・／／!!」

大「はわわわわわわ・・・／／／／／  
・・・り、リリーちゃん・・・!!」

リリーはあたいの身体で最も冷たいところ  
を探しているのか、あたいの体のあらゆると  
ころをまさぐっている。

そこにくすぐったさと恥ずかしさを覚える。

しかし、リリーのスキンシップは止まるとこ  
ろを知らなかった。

ホ「はあ~~~~。涼しい~~~~  
ですよ・・・。冷たいですよ・・・。気持  
ちいいですよ~~~~」

そして、困り果てていたところについてに救  
いの手はいった。

やはり、持つべきものは親友だ、

大「もう!!リリーちゃん!? いい加減に  
しないと!!チルノちゃんが困ってるでしょ

!!だいたい、私だつてまだそんな・・・」  
そう言いながら（最後はなんて言つたのか  
聞き取れなかった）、あたいからリリーを引  
き剥がしてくれる大ちゃん。本当に頭が上  
らない。

ホ「いーやーでーすーよーよーよー!!!

（泣 離れたらあついですよ~~~~!!）」

そして、半分ぐらい剥がれたところで、あ  
たいが提案を持ち掛ける。

チ「それじゃ、あなたの周りだけ涼しくでき  
るようにするからさ、それで勘弁してよ」

ホ「本当!? やつたーよーですよ!!」

チ「じゃあ、コレを貸しといてあげるよ」

そういつて取り出したのは、あたいの持つ  
結晶の中でも放出を司る妖力結晶だそれから  
は常に妖気を冷気に変え放出するように設定  
しておいた。

（ちなみに持つ人の周囲にまんべんなく寒す  
ぎないようにもなっている）

そしてそれをリリーに手渡す。

チ「細かいことは別に説明しないけど、それ  
を持ってれば涼しいはずだから、この夏の間  
だけ、貸しといてあげるよ」

ホ「本当だーよーよー!!!涼しいですよ」

く!!ありがとうございます!!!」

チ「どういたしまして」

大「いいの？ チルノちゃん？」

チ「纏わりつかれるよりはましだよ・・・  
ふう・・・」

大「・・・大変だね・・・お疲れ様、  
チルノちゃん」



まったく、分かってくれるのは大ちゃんだけか・・・と、親友のありがたみを心底かみしめていると、新たに声がかかった。

エ「お!!この気配は・・・!! やっほ

ー!!チルノ!!久しぶり!!」

神に近づく蝶の妖精、エタニテイルルバがこちらに飛んできた。

彼女とは、確か何かの支配者にどちらがなるかと競い合っていたと思うのだが、細かなことは忘れてしまった。

とにかく知らない仲じやないことは分かっている。

チ「やあ! あんたも来たんだね・・・よろしく」

エ「うん! こちらこそよろしく!! ..  
・・・いつもここは風が強いから来ないんだけどねくく♪今日は、あそこにいる天狗さんが風を操って、弱めてくれてるんだくく♪」

チ「へくくえ・・・そうだったんだ・・・」  
そういわれてみると、今日は比較的風が穏やかな気がする。

そこでその例の天狗に目を向けると、関係者に取材して回っているところだった。

そこで、とある人物のところへ行こうとしたかと思うと、急に驚くほど自然に踵を返してその場から立ち去ろうとした・・・が、あえなくその人物に見つかり、声を掛けられ、立ち止まっている間に捕まった。

その人物とは、地獄の妖精クラウンピース。  
・・・ 逃げるくらいなら呼ばなければい

いのに……。

そして、少し話をしたかと思うとおもむろに二人とも、(弾幕がこちらに届かない範囲まで)上昇してスペルカード戦を始めてしまった。

……それにしても、この周辺の風を操りながら、でも勝てるのだろうか……  
まあ、どうでもいいか……。

そこでまたふと、何かの違和感を覚えた。  
しかしその正体はあっけなく見つかった。  
……周りの音が消えている。

皆口々に言葉を交わしているはずなのに、あたいにだけその音声が届かない。

さらに、皆の姿まで、見えなくなっている。

……これは……

チ「……すう……はあ……

……そこだ！」

その声とともに、氷で形作った短剣を当たりをつけた位置に投げると何かが驚いたような気配とともに、あたいを覆っていた異変が解けた。

そしてそこにあつたのは、地面に刺さった氷の短剣に驚いて尻餅をつく光の三妖精、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア、の三人の姿だった。

チ「……そこで何やってんのよ……」

サニー「い、一瞬で私たちだと見抜くだけじゃなく、居場所まで掴むなんて……  
……す、少しはやるようになったじゃな

い・・・!!」

ルナチャ「いや・・・素直に認めなよ  
・・・これはもう私たちの敵う相手でも  
、あの時と同じ氷精チルノでもないって・・・」  
スター「うう・・・気付かれています  
ことにすら気付かなかったんだけど・・・  
・・・」

最後はこいつらか・・・(最後だろ  
うな・・・? まあ、恐らく最後だろう)  
そのこいつらも何の理由で来たんだか知  
らないけど、まあ一応理由を尋ねてみよう。  
チ「・・・で? あんたらは何が目的で  
ここへ?」

ルナチャ「・・・なにかを企んでいるの  
が前提みたいな聞き方ね・・・(汗」  
スター「確かに、若干の棘を感じるかも  
・・・」

サニー「そうよ!! 私たちはただ単に、  
料理の参考にしようと教わりに来ただけ  
よ!!」

チ「そりゃ、いきなりあんなことをされ  
れば疑いたくもなるし、これまでの行い  
がなあ・・・かまくらかも潰されたし・・・ボソツ」  
サニー「そ、それは・・・  
て、最後何か言った?」

チ「何でもないよ・・・っていうか、本  
当に教わりに来ただけ?」

サニー・ルナチャ・スター「「も、も  
ちろんよ!!!」」

サニー(本当はついさつき悪戯から料理  
教室の受講に目的が変わったけど!! (汗)

ルナチャ（そ、それに私たちは自分たちでも自炊するから、チルノの料理が気に入ったし!!）（汗）

スター（私たちがの方が料理の腕が上だったら逆に教えてやるのも優越感だし!!!

（汗）

チ「まあ、別にそれだけなら何も言わないよ・・・それじゃあ今日一日、よろしくね!」

サニー「ええ、よろしく!!」

ルナチャ「よろしくお願いします・・・」

スター「よろしくで〜す!!」

それからほかのメンバーも集まり神社の中に場所を移して、準備も整え、料理教室がスタートした。

それから紆余曲折ありながらも、何とか料理を（教えられる所は）教えたり、共同作業したりしながら、時は過ぎ去っていった。

途中困難にも直面したけど、それも含めて楽しいイベントになったんじゃないかと個人的にはそう思っている。

そして料理教室終了間近であの新聞記者がこんな提案をしてきた。

文「さあて、ここで例の奴をやりましょうか!!」

チ「・・・何のことだよ」

文「とつくにご存知なんだろう?（野沢さん）」

チ「・・・だから、何の話だよ・・・」

文「せっかくこうして皆で集まれたんですから、記念撮影しましょうよ! 第一回チルノのパーフエクト料理教室として!!」

チ「その名称はもう「ヤメロ」(。D。)。／／／／

／!! 恥ずかしいから!!。．．．．つて  
待って!! 第一回とか．．．なにシリーズ  
化しようとしてんの!? え?もう終わりじ  
やないの?」

文「そんなこと一言でも言いましたっけ?」

チ「ま．．．またその手口か!? 汚い奴だ  
くく!!」

文「ふふん．．．当たり前でしょう! こ  
んな面白い企画、一回で終わらせるなんて勿  
体ないじゃないですかくく! そして、この  
記録は文々。新聞に掲載するつもりなのでそ  
のおつもりで!!」

チ「やっぱネタの確保か!!!」

そこで抗議の声をあげていると、みんなか  
ら声が上がった。

大「いいじゃない!!次もやろうよ!チルノ  
ちゃん!!」

ホ「また、一緒にやりたいですよくく!!」

ク「暇潰しにはもってこいじゃない!」

エ「たまにはこういうのもいいね!!」

サニー「な、なかなかの腕前だったじゃない!  
今度こそ越えてやるわ!!」

ルナ「．．．今後の自炊の参考にする!」

スター「互いに高めあうのも悪くないわね!」

霊「まあ．．．いいんじゃない?とくに面  
倒も起こらなかつたし．．．」

魔「ま、どうせ霊夢はただ飯が目当てなだけ  
だろうがな」

霊「な．．．あんだだつて同じようなものし  
よ!? それに．．．こういう機会でもない

となかなかありつけないのよ!!・・・つていうか毎日騒がれるとか、たまったもんじやないわよ・・・」

魔「まっ、それもそうか・・・?で、どうするんだ? またやるのか?」

そう言えば、こんな風にみんなで騒ぐなんていつ以来だろう・・・と思いかけて――  
そうだ、あたいはここに、幻想郷に来てからずっとみんなで・・・

そう、記憶と力が戻ってからは、あまり積極的に関わっていかなかったのと、取り戻した記憶があまりに長い期間のものだったために霞んでいたけど、今、あたいは・・・

チ「・・・ふっ・・・」

一同「「「「「「「・・・?」」」」」」

一同が見守る中、あたいはこらえきれずに大笑いした。

チ「ぷっ・・・くく・・・あははははははははっ・・・はあくくふふっ・・・!!」

皆が唾然とする中、ひとしきり笑い終え、息を整えると皆の意見を受け入れる旨を伝えた。

チ「あー！ー！・・・わかったよ!

！ やろう!!第二回!!こんなもんで良ければいつでも教えてあげるよ!!」

文「それじゃ、決まりですね!!」

ホ「やたー！ー!!」

エ「次が楽しみだ!!」

サニー「本当ね!!」

ルナチャ「所でサニー、ちゃんと頭に入つて

る?」

スター「聞くだけ野暮じゃない?」

ク「さあ、次の勝負も負けないよ!文さん!  
!」

文「しよ、勝負つてまさか!」

ク「何言ってるのwww?私は料理のことを  
言つてただけどwwまあ、そんなに言  
うなら弾幕勝負してあげないこともないよ?

ww」

文「・・・タスケテください( ; ; ω ; ; )」

霊「ば、場所を提供する者として聞いておき  
たいんだけど・・・次はいつやる予定なの  
かしら? / / /」

魔「おいおい………またここで私に料理作つて

くださいって言えよ( ; ; )! 素直じゃね( ; ; )

くなあ( ; ; )!! (・▽・)ニヤニヤ」

霊「な、なによ / / !! 私の勝手でしょ!!」

大「次が楽しみだね!! チルノちゃん!!」

その親友の言葉に、満面の笑みであたいも  
それに同意した。

チ「・・・うん!! そうだね、大ちゃん!!」

ああ、皆と居られて本当に——

そして……………みんなとの

記念撮影が終わつてすぐ後のこと——

——事態は急変した……………。

博麗神社境内

くく記念撮影くく

文「じゃあ、行きますよ( ; ; )!!!!!!」

……………はいつチーズ!!」

その掛け声とともに、シャッターが切られ

、皆の一瞬のほんの少しばかりの緊張も切れた後、文の

文「それじゃ、皆さんお疲れ様でしたくくく!!」

という挨拶に皆が思い思いに返答して、帰

路に就こうとしたその時・・・

どさつと、不意に誰かが床に倒れる音がした。

・・・そこに倒れていたのは

チ「?・・・大ちゃん?」

あたいの親友、大妖精だいちゃんだった。

——そして、その時なぜか背筋に悪

寒が走った。

がしかし、かまわずに走り寄ろうとすると、

今度は霊夢に制止された。

霊「・・・!! 待ちなさい!!! 明らか

かに様子が変よ!!」

何なんだ!!と苛立ちとともに振り返り霊

夢を見ると、その目が危険を訴えていた。

そして次にまた振り返り大ちゃんに目を移す

と、大妖精だいちゃんは今まさに立ち上がろうとして

いた。

その姿に、安心したのも束の間、すぐに違和

感があたいを襲ったのに少しだけ遅れて、

大妖精しんゆうの弾幕があたいを襲った。

・・・直後、あたいの周りに、向こう側

が透けて見えるような結界が張られ、その壁

に弾幕はすべて跳弾され、事無きを得た。

後ろを見ると霊夢が結界を張ってお札を手に

あたいの肩越しを睨みつけている。

隣に眼をやると魔理沙も同様にミニ八卦炉を

構えていた。



霊「ボサつとしない!!!はやく前見て構えて!!」

魔「……………!!これはヤバいぜ……………!!!」

チ「まっ……待つてよ!!皆は?」

それを聞いた霊夢は口を嚙締め、額に汗しながら……

霊「……………あれ……見てみなさい……

……………全滅よ……!!」

そういう言われて再び前を見るとそこには、倒れたところから次々と起き上がり、あたいた達をうつろな目で狙う彼女たちの姿があたいの眼に写り込んできた。

文は手に葉団扇を持ち、クラウンピースは説明を持ち、他の妖精たちは各々両手を前に構え、こちらに弾幕を放つ準備をしている。

助かったのは結界の内側にいるあたいと霊夢と魔理沙だけだった。

チ「そんな……でも、皆正気じゃなくて、動かされているだろ!? それなのに戦うなんて……!!」

霊「……んなの言われなくたってわかってるわよ!!!!」

チ「……!!」

そして、こう続けた。

霊「……でも……今は戦うしかないじゃない!!!」

すると、ついに相手からの弾幕が結界を叩いた。

霊「……ツツ……!! ほら

!!!来るわよ!!備えて!!!」

そこで一人、血が滲まんばかりに口を嚙締

めるあたいは誰にとも無くなんでこんな事になるんだよ……、とひとり呟く。

あたいは、これからも皆と一緒にただ何気ない日常を、ただただ平和で退屈な日常を、今日みたいにもたまたま皆で料理教室のような他愛もないことをやって過ごして行きたいだけなのに……どうして……

そこまで思つて、脳裏にふとみんなの笑顔と親友である大妖精の笑顔が浮かんで……

——チルノちゃん!!

……そして消えた。

チ「なんでなんだよ!!!!」

……そう叫びながら、振り向き様に氷で造った槍を構えた。

時刻はすでに夕方となっていた。天高くあつた陽も山の稜線に沈みかけ、空に赤から群青までのグラデーションを残している。

そんな空を背景に前方を睨みつけ、氷槍を構える。

未だに八卦炉を構えたまま箒にまたがる魔理沙。

結界を維持しつつ、お札とお払い棒を構えながら結界の破壊に備える霊夢。

そこでついに結界が破られ、戦いの火蓋が切つて落とされた。

神に近づく蝶の妖精・エタニテイルバ

春を告げる妖精・リリーホワイト

地獄の妖精・クラウンピース

光の三妖精

「悪戯好きの日の光・サニーミルク

静かなる月の光・ルナチャイルド

降り注ぐ星の光・スターサファイア」  
氷精の親友・大妖精  
伝統の幻想ブン屋・射命丸文

V S

楽園の巫女・博麗霊夢

普通の魔法使い・霧雨魔理沙

氷の妖精・チルノ

先ず、霊夢が第一声を相手の弾幕を躲しな  
がら叫んだ。

霊「光の三妖精の三人はそれぞれ引き離しな  
さい!!! 固まられると厄介な能力を持っ  
てるわ!!!」

チ「それには、同感!!!」

魔「まあ・・・そうなるよなあっ!!!」

その声にあたい達ももそれぞれ返す。

そこで霊夢がサニーとルナチャの間にお札を  
投げ、分断しにかかる。

サニーとルナチャが離れると、その隙間に霊  
夢が入り込みサニーに向き合った。

霊「この赤いのは私がやるわ!!」

そうはさせまいとルナチャがサニーに合流  
しようと飛ぼうとしたところに

あたいが霊夢を背にするようにして立ちはだ  
かる。

チ「ごめん・・・!!ちよつと痛いだろ  
うけど・・・我慢してくれ・・・!!」

そして、そのルナチャに助けに入ろうとし  
たスターを魔理沙が突撃型の弾幕で引き剥が  
す。

魔「それじゃ、わたしがスターの相手をする  
ぜ!!! 彗星『ブレイジングスター』!!」

これで、三妖精のそれぞれと相對する形と  
なつた。

そこに射命丸文とエタニティラルバ、そして  
クラウンピースがやってきて、それぞれ、ピ  
ースはサニー、文はルナチャ、ラルバはスタ  
ーに付いた。

霊「……………これもこれで嫌な組み合わせ  
ね……………」

魔「つたく本当……面白くなりそうだなあ？  
……！チクショウ……！！」

そして、その霊夢と魔理沙を挟撃するかの  
ように、背後から大ちゃんトリリーがそれぞ  
れ、リリーは霊夢に、大ちゃんは魔理沙の方  
へ付いた。

それと同時に弾幕が再び展開される。

それをあたい達は各々の方法で迎え撃つ。

霊「夢符『二重結界』！！」

チ「冷防『絶対冷域』！！」

魔「うわつと……………!!! 危ない危ない

い……………魔符『スターダストレヴァリエ』！  
！」

霊夢は結界で跳ね返し、あたいは氷壁を造つ  
て防ぎ、魔理沙は一旦避けてから弾幕を相手  
に放つ。

あたいは周りに造つた氷壁を徐々に広げなが  
ら、相手に氷槍を放つべく、振りかぶつたと  
ころで異変に気づいた。

(音がしない……………)

さつきまであつた文の弾幕と風の音が全くし  
ない……………そして、急にあたいの目の前  
の氷壁に罅が入り始めた。

チ「な．．．!!!」

当然罅が入った音もしなかった。

．．．．．やっぱり、霊夢の言った通り、  
厄介な組み合わせだな．．．

チ「ルナチャか．．．．．」

そう、文の全力による真空の刃の弾幕の風切り音や暴風の音をルナチャイルドの消音能力で消している。

それにより、猛攻を受けていることに今まで気付かず、壁に罅がいくまで気付かなかった。だが．．．．．!!!

チ「罅がいったぐらいなら問題無い!!」

すぐに冷気を操る程度の能力で補修と強化を始めた。

霊夢 s i d e

．．．．．つとに!!鬱陶しいわね!!!

今相對している、地獄の妖精と三妖精の一人と春告精に苦戦しながら、内心で毒づく。

正直、厄介な奴ら同士で組まれたと思っっている。

なぜなら、あっちにいるクラウンピースは人を狂わす程度の能力を持っており、それはあいつの持つ松明の光を浴びることで発動してしまう。

本来ならその光を遮光結界で避けているだけで勝てるのだが、そこに光の屈折を操れる妖精がそばにいることによってなかなか相手に近づけない。

全部の面を結界で覆えば突っ込めるかもしれないが、それだとこちらからも視界が利かな

いし、サニーが光の屈折を操って光を集中させたら届いてしまう。

背後の春告精はともかく、この二人が問題……など考えていると、なぜか急に眠気に襲われた。

霊「……!!!」

慌てて、眠気を飛ばし、相手の弾幕に集中するも絶えず眠気は襲ってくる……まさか……

自身の勘を信じ、辺りを見回す……すると背後から春告精（リリーホワイト）が春を告げる程度の能力で、眠りに誘いやすいぐらいの暖気を弾幕と一緒にこちらに送ってきているのがわかった。

……訂正するわ……後ろの奴も十分厄介ね!!

春眠暁を覚えずなんて言うけれど、こんな使い方してくるなんて……!!

くっ……意識が……!!

コレ……私の所、ハズレじゃないでしょうね……!!

——それに、これ……

魔理沙 side

全く……分断したのは良かったのか悪かったのか、これじゃ全然わからないぜ!!

ふと、他の二人を見ると二人とも苦戦を強いられているようだ。

しかし、こっちもこっちで手一杯だぜ。

何しろ……あっちからの攻撃は雨のように降り注いでくるのに、こっちの攻撃は全くと言っていいほど当たらないからな!!

魔「くそっ・・・・・・・・このままじゃ・・・・・・・・!!」

最初にあの蝶の鱗粉があたりに散布され始めた時はなんのつもりかと思っただが・・・・・・・・スターサファイアの「動くもの探る程度の能力」を補助するためのものだったらしい。しかもこちらは鱗粉で視界が悪いが相手にそれは関係ない。

加えて・・・・・・・・

魔「全く・・・・・・・・意外に手強いな!!あいつ!!!」

大妖精が持つ瞬間移動能力によって、他の二人を回避させていた。

魔「・・・・・・・・今のところ回避率100%だな・・・・・・・・くっ!!」

私が撃った弾幕はすべて躲され、こちらには弾幕の嵐が吹き荒れる。

不利どころの話じゃないぜ。

しかし・・・・・・・・それにしても、妙だな・・・・・・・・

あいつらはさつきから一言も言葉を交わしていないばかりか、目を合わせてすらいないのに、どうやって連携をとってるんだ？

霊夢 side

・・・・・・・・それに、おかしなことはもう一つある・・・・・・・・

いくら何でも強すぎる——私の結界を破った時、覚悟してたタイミングよりも破れるのが早かった。

それに、本来なら束になっただって破れるはずがないものなのに、簡単に突破された。

あの弾幕が当たった手応えからして、危険を感じたから破壊に備えたけど・・・天狗やあの地獄の妖精が向こうにいるから？

いや、そのことを警戒してのあの結界の強度のほずだったのに破られたということはそれ以上のなにかがあったとみるべき・・・だけども今は考えている余裕はなさそうね!!

霊「く・・・!! 弾幕の密度が上がってきてる!!」

そう、これはそもそも、弾幕ごっこなど関係無いただの殺し合い……しかもそれは相手だけで、こちらは加減しなければなら無いのだが相手にそんなことは関係無い。

・・・むしろ、今まで様子見でもしていたのではと思うほどだ。

でも、もう遊びは終わりらしい。

・・・さつきから何も喋らないから分かりにくいけど・・・あれは!!

クラウンピース

獄符『ヘルエクリプス』

サニーミルク

日符『アグレッツシブライト』

リリーホワイト

春符『サプライズスプリング』

クラウンピースは耐久できたか!!!

しかも、これは弾幕ごっこじゃない・・・相手は三回被弾したからと言って攻撃の手を止めてくれるわけじゃない!!!



チルノside

・・・氷壁硬度最大！修復率100%！

これで絶対に突破はさせない!!

あたいはいま相手の弾幕から身を守るため、  
氷で形作った球体の中でその球状の壁の補修  
と強化を行っていた。

こちらは氷壁で周りが見え無いが、文の妖力  
は既に結晶が記憶している…………つまり相手の  
位置を特定できる。

チ「いっけえー！ー！！」

手に持っていた槍を探知で探ったところに  
思い切り投げる。

その槍はあたいを相手とを隔てる壁ににぶつ  
かることなく、壁をすり抜けるようにして飛  
んでいった。

それは同じ妖力同士であり、当たる瞬間に冷  
気と力が壁に乗り移るようにして壁に槍は吸  
い込まれ、同時に外側の壁から槍が打ち出さ  
れるという仕組みだ。

この高度な操作はあたいがあの地獄の日々の  
中で得た高精度な妖力の操作によって実現さ  
れている。

故にこの「冷防『絶対冷域』」は耐久スペル  
であり、この絶対防御の中でこちらから相手  
の位置を把握しながら一方的に弾幕を放つ、  
あたいの新たなスペカだ!!

そして今投げた槍は貫くためのものじゃなく  
、相手を拘束するためのもの！

これが通れば、あの二人は助け出せるはず！  
氷の槍が突っ込んだ中は文が発生させた暴  
風域の中だが、そこも問題はない。

あの槍は吸収と放出の応用で、あたる風自体を槍本体の中に妖力として吸収し、その吸収した分は推進力として後方に妖力を放出するように術式を組んであるので、むしろこの風の中では速度を増していく。

例えそのことに気がついたとしても、風を止めた時には、既に到達しており目標に着弾すると、その当る寸前に冷気に変換されて二人を凍らせ、拘束する。

もちろん二人を拘束するのに十分な妖力が込められている。

残された問題は、二人が同じ場所にいるときにこれを放たなければならぬが、それは探知で確認済みだ。

そして、着弾の気配を氷壁の中で感じ取った。大気のひび割れるような何かが凍りつく音がこちらにまで届き、氷槍の妖力も拘束するために分散したのを確認した。

あと、周りの風が止み音が再び聞こえるようになる。

チ「よし!!! これで・・・!!」

そして、氷壁を解き目の前を見ると、驚いたような表情でこちらを見ながら氷の中にいるルナチャイルドの姿が眼に映った。

そのルナチャが入った氷塊が無事地面に着地したことに安堵すると、すぐ他の霊夢と魔理沙（二人）のどちらの救援に行くか考える。

よし・・・まずは霊m・・・!!

・・・キイイイインツツ!!!

・・・先に気づくことで氷の盾でなんとか防ぐことが出来たけど、あたいに向けて一筋の剣閃が走っていった。

その走り去った方向を見ると、そこに・・・

チ「・・・やっぱり、一筋縄じゃいかないか・・・文!!」

天狗装束を身に纏い、手にはひと振りの刀を持ち、その得物をこちらに向ける、手加減など微塵も感じさせない一匹の烏天狗の姿があたいの瞳に移る。

恐らく、とつさにルナチヤを盾にして、離れつつ風を操って冷気を遠ざけたのだろう。

光の無い、その暗い洞のような眼いつもの口数が皆無であること、そして全力で向かって来るといふ、本人らしからぬ様子を見て、不思議と安心感がこの身を包んだ。

それはなぜかと問われれば、この敵対行為が彼女たちの本意ではないことを彼女らその状態が如実に物語っているから・・・  
そうだ、あいつらはただ操られてるだけなんだ・・・だからこそ言える・・・  
チ「必ず・・・助け出す!!!」

その言葉と共に再び氷で形作った普通の4倍ほどの太めの刀身をした大剣を構え、手加減無しで向かって来る幻想郷最速の烏天狗に相対した。

霊夢 side

ああ、もう!!!罫が明かない!!!

わたしが最終手段に出ようとしたその時に、

隣で、ピキイツと何かが凍り付くような音が響いた。

そして横目に隣を見ると、光の三妖精のひとつ、リルナチャイルドが氷漬けになって落ちていつ……そしてすぐに視線を目の前に戻す。

……うまくやったわね……まだ文が残っているみたいだけど、あつちは時間の問題か……何せ、あの氷精チルノが相手だしね……

縁起を見たときは、何の冗談かと思っただけだし……。

さて、こつちもいい加減、幕ひかせてもらおうわ!!

霊「夢符『夢想封印』!!」

そのスペカ宣言と同時に色とりどりの大きな目の光弾が目の前に飛んでいく……さらにそれと同時に、後ろに振り返りざまに春告精に向けて封魔針を放って動きをとらえようとしたが、座標移動されてしまい、針は空を切る。

そしてまた前を見ると、三妖精の一人、サニールルクがボロボロになりながら墜落しているところだった。(加減している為消滅はしない)

その身体を飛んでいつて受け止め、静かに地面におろしてから保護と拘束のため結界を施す。

そうしてまた上を見上げると、そこにはリリーホワイトとクラウンピースと一緒に空を飛んでいた。

霊「ちつ……躲されたか……!!」

リリーホワイトが針を躲すため移動した先がクラウンピースの座標であり、そのクラウンピースとともに、また座標を瞬間移動して、夢想封印を躲したというところだろう。

できれば相手を痛めるであろうこのスペルを使いたくはなかったが、それを使って尚、一匹しか取り返せなかったことに苛立ちが募るは・・・それに立ち止まっている暇はない。すると、隣のさらに向こう側で、凄まじい爆発音が聞こえてきた。

霊「へえ・・・やるじゃない・・・」

魔理沙

「どうやら、魔理沙の方も片が着きつつあるようだ。」

「なら、なおのことここで立ち止まっているわけにはいかない。」

「私は相手に向き合うべく、お祓<sup>大</sup>い棒とお札を構えた。」

「霊「私も負けてられないわね!!」」

魔理沙 side

・・・さて・・・ここからが正念場だな・・・

・・・さつきからこつちでは、回避されて弾幕を放たれてはこちらも何とか躲して弾幕を放つ、の繰り返しが続いていた。

大妖精が二人を、特に、スターサファイアを運び弾幕から遠ざける。

しかも、回避が難しいような弾幕を放つ前には必ず事前に察知され、何らかの方法で大妖精に伝わり、それを受けて大妖精が二人を座標移動で運ぶ、ということが繰り返し返されて避

け続けられている。

何故、伝わっているとわかるのかと言えば、動きをみていればそれが分かる。

辺りにはエタニティラルバの放つ鱗粉が舞い、更にスターファイアには動くものを探る程度の能力があるが、それらが無い大妖精が上手く反応して、二人を逃がしている。

そんな動きは、二人と同じ能力を持っているか、大妖精に二人が得た情報が伝わっている以外にあり得ない。そして、大妖精が二人と同じ能力を持っているのならあいつ一人でも十分なはずだ・・・となると、必然と答えは絞られることになる。

だが、それにしても・・・

魔「くっそ・・・埒が開かねえ・・・

!!!

思わずそう漏らす私の目の前で、もう感情など忘れてしまったかのような大妖精の眼がこちらを静かに見つめ返していた。

魔「なんでそんな眼をしてんだよ!! お前はチルノの親友じゃないのかよ!!!おい!

!!しっかりしろ!!」

そんな、私の声が聞こえているのかいないのか、ただただ冷たく凍ってしまったかのような瞳で大妖精とその隣の二人は見つめ返してきた。

大妖精

わたしは・・・あれ? 確か・・・

・チルノちゃんのお別れの挨拶をして・・・

・・・それから・・・どうしたんだ

つけ? 、ああ・・・頭がぼうつとして

．．．．．なんだかとても眠い．．．．．  
。

．．．．．誰かが話しかけてきてる？—

—もう、眠いんだから静かにしてよ

．．．．．もう少し．．．．．寝かせてくれて

もいいじゃない．．．．．

．．．．．

．．．．．そのまま、私の意識は深い闇の中に落

ちて行った。

再び大妖精たちからの弾幕が再開された時

私はあることを思いついていた。

しかし、それが成功するかどうかは賭けだし、  
成功したとしても、相手に重大なダメージを  
追わせることになるかも知れない方法だった。

しかし、このままではジリ貧なのは明らか．．  
．．．．．ここは多少のリスクを覚悟でやるしかな  
い。

魔「まったく．．．．．そっちが潔くやられな

いのが悪いんだぜ!? 少しぐらいは我慢しろよ

!!!  
」

自身最大の攻撃であるスペカ相手への照準が合  
う瞬間を見計らい、相手に向けて．．．．．特に  
大妖精に向けてとっておきを放った。

魔「行くぞ!!! 恋符『マスター・スパーク

』!!!  
」

見ると、やはりと言うべきか、動きを察知さ

れ最小限の動きで攻撃をかわされた。

魔「やっぱり、避けてくるよな……だが……!!!」

……にもかかわらずセリフの後に指を鳴らし、笑顔を浮かべる。(指を鳴らした際に☆が飛んでいったような気がした)

しかしその最小限の動きが今回に限つ

ては致命的になる。ただ、マスパのすぐ隣に避けただけの動き。

その避けたばかりのその場所でマスパによる火花が散り……次の瞬間。

——いつの間にか夜の帳が降り、星々の輝いていた空に——凄まじい閃光と轟音が次々と鳴り響いた。

そして、辺りが照らされた時に何かふと違和感を抱いた……がその原因がなんなのかわからなかった。

魔「？」

……種を明かすつまらないくらい単純だが、一応説明しとくと、辺りに舞うエタニテイの鱗粉を逆に利用させてもらったと言うだけの話だ。

辺りに舞う引火しやすい粉塵に火が引火すると、辺り一帯に爆発が生じると言ういわゆる粉塵爆発を攻撃に利用させてもらった。

知つてのとおり、私の魔法は熱と光のそれなので私の持つ魔法の中でも最大の火力を持つ、マスタースパークで火花を起こし、鱗粉を粉塵代わりに爆発させたと言う、それだけの話だ。

しかし、これも相手が粉塵爆発について知つていて且つ警戒されていたら使えない手法だったが、そこは何とか上手くいつてくれたようだぜ。



これで、後は霊夢達のところか……. . . . .  
ついていた矢先……私はなんとなく気配がして  
、上に飛び上がると、その先ほどまで私がいた  
ところを二つの影が飛び去って行った。

魔「ああ……くつそ……しぶといな……  
……」

見るとそこには、大妖精とエタニティラルバ  
が夜の空を臨む博麗神社の上空に悠然と佇んで  
いた。

恐らく何かしら勘づかれ、兎に角近くにいたエ  
タニティラルバ（蝶の妖精）と一緒に座標移動  
で爆発の射程外にとんだのだろう。

となると……. . . . .と思い地面を見て見ると、スターサ  
ファイアが服がところどころ少し破けた状態で、  
渦巻き状に目を回しながらそこに伸びていた。

魔「今のうちに復活される前に拘束しとくか……  
……」

そう言うが早いか他二人が様子見か何かで攻  
撃してこないうちに、地面に降り、スターを偶  
然持っていた縄で拘束しておいた。

そして、二人に向き直り、戦いを再開するため  
、箒にまたがり空に飛び上がった。

魔「さあて……. . . . .二回戦と行くか!!!」

チルノside

難航するかと思われた、あたいと文との戦いは  
、意外にもあつさりあたいの勝ちで決着がついた。  
あたいは、相手が本気で来ていることを悟り、こ  
ちらも本気で行かなければ到底、文を助け出せな  
いだろうと考え自身に身に付いていた新たな力を  
も開放して挑んだのだけれども、それが思い切り

はまったせいなのか、打ち合っていたのは最初の5回か6回ぐらいで、あとはずいぶん呆気無くあたいの氷の中に身を沈めている射命丸文の姿がそこにあった。

「……いや、あたいもここまであつさりしすぎていると肩すかしと言うか何と言うか……まあ、上手くいくに越したことは無いんだけど……なんかなあ……もつところ……手に汗握るバトル的なものを想像してたんだけど、これはあまりにも……（格好つけた啖呵まで切ったのに）ふふつ……とそこまで考えたところで、なぜか不意に笑いが込み上げ……そして止まった。

チ「ふふつ……いや……笑えないな……流石に二回目以降ともなると……勝利なんて……ただ空しいだけのものなんだな……」

などと、状況にそぐわないニヒルさを気取る氷精の姿がそこにあった。

———というかあたいだった。

「……一応、戦いの内訳を説明しておく。あたいが文と対峙してから、文の方から先制攻撃に真一文字に斬りかかってきて、それをあたいが、剣で防ぎ、切り返すように相手に向かって飛びながら、あたいが文に袈裟斬りを浴びせ、それをもなげに文が躲しながら下段から上に向けて逆袈裟に斬り上げ、それをまた大剣で防ぐも勢いにその剣を持って行かれかけたがその勢いを利用して、回転し相手に向かって突きを放ち、相手はそれを受け流しながらあたいの刀に沿って自身の刀を走らせ、あたいはその刀身を刀からとつさに

離した片手に氷の盾を作って防ぎ、そのまま刀の剣閃の方向へ飛んで行った文を追って更に真一文字に斬りこむもあっさり防がれ、更に間合いを取られ文が刀を振り、放った剣圧に自身の真空刃を乗せて飛ばして来たのを大剣でガードしたり、いなしたり、躲したりしながら文に接近し、上段から縦にあたいが斬りこむものに対して、文が真横に剣で防ぎ、そのまま鏢競り合いとなつて、両者が相手を突き飛ばすように距離を取り、相手に向かつて剣を振り、先に文がやったように剣圧に氷刃を乗せて、相手に放ち、文も先ほどと同じように風の刃を剣圧に乗せて放つて、その力がぶつかり合い、周りに衝撃波を生んだ。

そこまでやってあたいはそのままではキリが無く、この程度では倒れてくれないと確信し、自身にもあつた文と同じ「風を操る程度の能力」で自身の周りに風をまとい文の風刃を無効化して、そのまま文に一太刀入れ、文は己の剣で防ぐが、その手と刀が凍りつき、すぐさまあたいが取って返して二太刀目を入れ、相手を通り過ぎ様に太刀をいれては折り返してを、三、四、五と行い最後に真上から突進するように、とうっ!!

と斬りかかりそのままの勢いで地面に大剣を突き刺し、あとから遅れて上から弾かれてきた文が入った氷があたいの後ろの地面に突き刺さり、収束した。

——因みに、最初に何回打ちあつても文が凍らなかつたのは、風の力で冷気を飛ばされてい  
たからで、あたいが風を操ってからはそれを相殺する程に上乘せできたので、凍らせられた——  
チ「さて、あたいの方は何とか片付いたけど他は

二人はどうか。……」

あたいは他の二人のどちらへ向かうか考える為に偶然、地面を向いていた。

その時、夜空が上で展開された弾幕の明かりによつて、その照らし出された一瞬のうちに今までの違和感の正体が地面に映し出されていた。

## 第八話 氷鳴

チ「え……なに……これ……影が……繋がつてる……」

夜の博麗神社の地面に立っていたあたいは、これまでの違和感の正体に今更ながら気付いた。

思えばいつからだっただろうか、そう、あれは稗田邸の廊下を渡っていた時だった……朝食を取ろうと、廊下を歩いていたら時に、不意に己の影が不自然に揺らめくような感覚がした。

あの時は見間違いか気のせいかとあまり気に止めなかったが、その時からすでに、この異変は始まっていたんだ。

何で、今の今までそれに気づかなかったのか不思議でたまらない上に己の配慮の足りなさが悔やまれた。

影が違和感の正体であるそれは、普段空を飛ぶものならば、そうそう気にならないし、飛んでいる間は己の影など目立たない。

それ故に、今の今まで気付かなかった。

他の皆が気付かなかったのも恐らくそれが理由だ。

そして、その違和感の原因であった影は今活動している四人……クラウンピース、リリーホワイト、エタニティラルバ、そして……大ちゃんのそれぞれの影が繋がった状態であたいの目の前にあった。

いまだに弾幕が夜空を照らし、その場にいる全員の影を形作っており、その影に変化が見

られた。

あたいや霊夢、魔理沙、など今動いている四人以外の影は独立していたにもかかわらず、その四人の繋がった影へとまるで繋がりがあがるかのように、動き始めた。

それを見て、霊夢に叫び、警告しようと口を開きかけたところで、その霊夢の方から悲鳴が聞こえてきた。

それは他ならぬ、本人れいむからの叫び声だった。

霊「う……うあああああああ!!!!!!

……はあ……は……あ……はあ……しまつ……ぐあああ……!!」

何やらしきりに頭を押さえ、うめき、地面に倒れ伏している。

急いで傍に駆け寄るも、なにがどうなっているのかわからない。

まさか、これも影の影響……?」

そんなことを考えていると、今度は反対側から誰かの体が落下する音が響いた。

見ると魔理沙が、身じろぎするのがやっとの様子で地面に倒れている。

チ「……っ!!! 魔理沙ッ!!」

急いで霊夢を背中に自身に寄り掛からせるように、背負うと魔理沙のもとに走って行った。

急ぎ、霊夢を魔理沙の横に寝かせ、周りを絶対冷域で覆う。直後、その氷の壁を弾幕が雨のように叩きつける音が聞こえる。

そして、なるべく負担にならないよう二人から話を聞こうとした。

チ「霊夢・・・いったい何が・・・まさかこれも影の影響？」

しかし、さつき、ちらと見たけどまだ、影は霊夢につながっていなかったよね・・・そんなことを考えていると、霊夢から返答があった。

霊「し、しくじっ・・・たわっ・・・あ・・・あいつの・・・ク・・・クラウンピースの・・・能力を・・・もろに・・・うああ・・・!!」

なるほど、大体の事情を察することができた。

おそらく、何らかの方法でクラウンピースの「人を狂わせる程度有能力」をその身に受けてしまったことが原因だ・・・普通ならその

松明の明かりで狂わされてしまうのを霊夢の中に眠る博麗の血がそれを拒むので苦しんでいるのだ。

その時、魔理沙の方も苦しげではあったが、動きがあったので急いで呼びかける。

チ「魔理沙っ!!・・・おい、魔理沙しっかりしろ!!・・・一体何があった!？」

魔「そんなに・・・怒鳴らなくても聞こえてるぜ・・・つくっ・・・私のほうは・・・どうやら、毒を吸わされた・・・みたいだ・・・体が痺れて動けん・・・!! 多分・・・ラルバの鱗粉に毒性が・・・ち・・・くしょ・・・!!」

確かに、戦いの中で、魔理沙の方から鱗粉のようなものが風に乗ってこちらにも少し来ていたような気がする。

魔理沙はそれを吸い続けてしまったが故に影響が出たらしい、あたいのところには気付くのがやつとなくらいしか飛んでこなかった。恐らく文と戦っている時に文の風で鱗粉が飛ばされるなどして、あたいには影響がでなかったのだろう。

一方魔理沙はもろに吸い続けて、毒が回ってしまったようだ。

そこまで考えて、あたいは外に向かうため、立ち上がる。

そして、横たわっている二人に告げた。

チ「ごめん・・・もう少しだけ、耐えてて!!・・・戦闘これを終わらせてすぐに休めるようにするから・・・!!」

外の脅威を収めない限り、何度でもこのような可能性がある以上、あたいに選択肢はなかった・・・とくに、霊夢の方はピースを倒せば、能力が解け、苦痛から解放されるはずなのでなおさらだ。

この氷壁の中にいる限り、襲われることもないと思うが、早くに終わらせてしまうに越したことはない。

二人にそれだけ告げると、あたいは氷球の外に足を向けた。

霊夢 s i d e

まさか、この私が・・・

いま、私はクラウンピースから受けた「人を狂わす程度の能力」の影響で苦しみのなか、



動けずにいた。

それにしてもわからない・・・なんで？

チルノには油断しただけだと伝えたが実はそうでは無かった。

まさか自身の究極の技である「夢想天生」が、破られるなんて・・・。

私が一番驚いていたし、そんなことを知られなくなかったから口が裂けても言えなかった。・・・それにしても、さつきから頭が割れそうに痛い・・・そのせいか、考えがまとまらない・・・く・・・。

く回想く

あの瞬間までは実に順調だった、どの技も次々と決まって、相手の弾幕や能力は掠りもしない。

このまま押し切れることを手ごたえで感じてもいた……

霊「よし・・・このまま押し切ってやる!!」

私は、追い詰めつつある妖精二匹を見ながら、そう意気込んだ。

光を屈折させることが出来るサニーが居なくなつたおかげで、クラウンピースの松明の光は届かないし、挟まれてさえなければ、リリーの春の暖気による催眠攻撃もあまり意味が無く、眠くなりかけたら封魔針用の針で眠気を飛ばしつつ、距離を取ることで対応もできる。

なおこの方法は挟まれた状態では距離を取ることが出来ず、使えなかったが、挟撃状態にない今なら簡単に使うことが出来た。

しかし、このままでも相手を落とすのはもう

時間の問題だけれど、出来るなら早く終わらせてあげたい。

なので私は自身最高のスペルで決着を付けに行くことにした。

霊「さあ、これで終わりよ!! 『夢想天生

』!!!」

「夢想天生」とは、私のラストワードにして究極奥義。

私の「空を飛ぶ程度の能力」の本質であり、空だけでなく、ありとあらゆるものから浮くことで、相手からの攻撃がすり抜けるということ、魔理沙曰く反則的な技。

本来はスペルカード戦で使う技では無かったのだが魔理沙から名前を与えられて（弾幕ごっこの）遊びになった。

なのでスペカ戦なら制限時間やその他もろもろ、いろいろ決められているが、この場はスペカ戦でもなんでも無いので、全く関係ない。

最初からこれを使っても良かったのだけれど、相手は妖精だし、少ない力で勝てるならそれに越したことは無いと思っていた。

しかし、思いの他手こずりそうなので、押し替えている今のうちに早めに決着を付けようと使用に踏み切ったのだ。

これにより、相手の弾幕は全て私を透過して、私の背後へと流れていく、それにクラウンピースの松明の光も、リリーホワイトの春の暖気も今の私には効かない。

そして、相手にとどめのお札を投げようとしたその時、急に全身にだるさを感じたと思っ

たら、なぜかピースの松明の光が私を照らした。

しまった!!と思った時にはもう遅かった。

私は頭の痛みに絶叫しながら、そのまま落ちていった。

くくく

……あれは一体何だったのか、

あの時感じた妙なだるさは？何故、夢想天生の発動中に関わらず松明の光に当たったのか？今わかることは何もないし、身動きできないほどの激しい頭痛で思考も纏まらないまま、チルノの氷のドームの中でただ呻き続けるしかなかった。

チルノ side

……あたいは一瞬、なにが起きたのかわからなかった。

気がつくときあたいは後ろの氷壁にもたれかかっている、そして胸のあたりからは血を流していた。

その傷口は刀傷のようだった。そして、横に真一文字に少し左から右に斜め上に傷が走っている。

これは一体？いま、こんな事が出来る奴はこの場には一人もいないはず……  
あたいが凍り漬けにして保護・拘束している一人を除いては……まさか、そんなことあるわけ……

と考えていると、あたいに傷を負わせたその

張本人が空中から悠々と地面に降り立った。  
そして、その人物の影は他の四人とも繋がって  
いた……。..  
チ「な……。!? あ……。や……。? どう  
……。して……。はっ！」  
そこには、あたいが氷漬けにしたはずの烏  
天狗、射命丸文が感情の抜けたような無表情  
であたいを見据えていた。

地面にドーム型に立つ氷球の外に出たとほ  
ぼ同時に、あたいは斬り裂かれ後ろの壁にも  
たれかかった。  
傷をかばうようにしながら、相手を睨み、思  
考を巡らせた。

馬鹿な……。あれを破れるはずが無い!!  
外からならまだしも、内側からは絶対に..  
。。そう思いながら先ほどまで、文が氷漬  
けになっていたはずの場所に目をやると、そ  
こには文が捕えられていたであろう氷塊が内  
側から割られたように穴が開いており、  
氷の層が穴に近づくにつれ薄くなっており、  
その下には水たまりが出来ていた。

その隣にもうひとり誰かが居る。  
そこに目を凝らすと、そこにいたのは――  
春告精・リリーホワイトだった。

チ「まさか……。」  
まさか、リリーの「春を告げる程度の能力」  
の春の暖気で氷を溶かされた?  
でも、あの氷はリリーの能力を警戒して、リ  
リー程度の出力じゃ解けないように厚く張っ  
たはず。

しかも、リリーは春の訪れを告げるだけの妖精なので、自らが暖気を出すことなんて出来ないはず……………

そして、その考えを助けるようにあたいの目に答えを示すものが飛び込んできた。

チ「…………!!あれは…………!!」

リリーの氷に向けた方とは反対の手に何かが握られている。

その何かは、あたいが今日、リリーに貸した「放出」の妖力結晶だった。

それはいま小さな手の中で静かに空色の輝きを放っていた。

チ「(そういうことか…………!! 今ま

で相手の弾幕が強かったのは!!)」

あの妖力結晶はいわばあたいの妖力の塊で、10個存在する内の一つ…………よつて、単純にあたいの全妖力の10分の1。

例え10分の1でも得られる妖力が大きすぎる…………

その力はあるの影を通じて、全員に分配していた…………相手の弾幕の強さはそのせいだ。

しかもあの結晶は放出に特化し、出力の調整も思いのままであり、弾幕の強さも結晶<sup>それ</sup>で底上げされたのだろう。

……………そう言えばそうだった。

あまりに皆が操られたことで頭が一杯で気付かなかつたが、今日はこんな事ばかりだ。

気付けたはずの事に気づけないなんてあたいはやはり馬鹿のようだ。

しかも相手は妖精の特性を理解しているのか、死なない程度に手加減されてしまい(死ぬと

一回休みでここでは無いどこかで三日後くらいに復活………あたいの場合は結晶のすぐそば、リリーの持つ結晶のところのすぐさま復活出来る）、怪我を負わされただけで後は見張られてしまっている。

先ほどから何もして来ないが、妙な動きを見せようものなら何時でも取り押さえられるように監視しているのだろう。

そこに追い打ちをかけるようにあたいの目の中に絶望的な光景が映り込んだ。

あたいと霊夢と魔理沙が戦闘不能にしたはずの光の三妖精までもが他の妖精たちによつて復活し始めていた。

縄で縛られていたものは縄を解かれ、結界で困われていたものは、結界を破られ、あたいが凍らせたものはそれを溶かされて完全に自由の身となり復活を果たした。

(影に操られた状態を自由というのならね)

怪我に關してはもう完全に完治したが、依然として文が睨みを効かせている。

——うかつだった………出る直前、弾幕の雨が止んでいたことにおかしいと感じたので警戒はしていたが、まさか………仲間の拘束を解くとは………今、氷壁の中に置いて来た二人の事を考えても、もうすぐにでも決着を付けなければならぬのだが、なぜかさつきから体が重い………

しかし意を決して飛び出そうとしたその時には、既に文の下駄があたいのみぞおちの辺りを捉えてあたいを壁に叩き付け、そのまま踏むように押しつける。

チ「つつ!!!……がはっ……!!」

その足を掴んで凍らせようとするも、それ  
もすぐに見切られ、掴むよりも先に手を刀で  
貫かれた。

チ「うあっ!!……はあ……はあ……  
……!!」

痛みで動きが止まっているうちに、みぞお  
ちを踏んでいた足を離し代わりにもう片方の  
手を踏みつけられ動けなくされる。

そうこうするうち、他の者たちが氷の壁を背  
にしたあたりを囲むように集合した。

その状況にあたいを取り押さえる必要を感じ  
なくなったのか、足をどけ、刀を容赦なく引  
き抜くと一旦後ろに下がった。

乱暴に引き抜かれると同時に鋭い痛みが手に  
走る。

そして、ふと自身に起きた異変に気づく。

チ「(おかしい……何故か、さっき斬り  
付けられた辺りから、能力を上手く使えない  
し体の動きも鈍い……?)」

先ほどは相手を凍りつかせようと相手の足  
に手を伸ばしたが、本当ならそんなことをし  
なくても相手から触れられていれば凍らせる  
ことが出来るはずなのにそれが出来ない上、  
動きも見きられてしまっている。

なんとなく、誰かの手のひらで踊らされてい  
るような気持ちの悪さを感じた。

一度不審感を持つと、そこからどんどん疑問  
が沸き上がってくる。

なんで、文の刀をまともに受けてしまったの  
か？ 何故氷の能力が落ちているのか？ そ

もそも、斬りつけられる事で増したこの疲労感の正体は？

あたいは浮かぶ疑問を解消出来ずに、ただ周りを取り囲む、敵の駒となってしまう仲間を見ているほかなかった。

大妖精 side

意識が朧気ではつきりしない……

ここは、どこ……？ 私は、どこかわからない暗闇かのような、それでいて、今起きていることの詳細ははつきりとわかって、一つの物事として捉えていて、なのにどこまでも他人事のように気持ちが現実と分離していた。

自身の技や妖力も私が使っていると言うより誰かに使わせられている、といった方が正しいような気がする。

誰？誰が使っているの？

そして今起きていることに対しても自分がしていることに対しても感情を放棄するように強制されているかのようにただ状況をありのまま認識し、言われた通りにだけ動けと言われているかのようなのだ。

そして、それに逆らう術は今の私にはなかった。そんな状況に私は置かれていた。

そんな中で、ある一つの事象が私の中に流れ込んできた。

目の前で自身の友人（と認識している存在）が自分を含めた8人によって取り囲まれていて、（その者たちも自分と同じように操られているようだ）今まさに、集中的に攻撃を受けているところだった。

そこで、その友人の苦痛にゆがむ顔を見た時に、



なぜか心がざわつくような感覚を覚える。  
それと同時にその友人、いや親友に関する記憶  
が次第に展開されていく……まるで、水面に浮  
かんでくる泡のように次々と蘇っていく……  
すると、不意に自我が芽生え始めた。  
この子をもう傷つけたくない、こんな事は間違  
っている。  
いつまでも言いなりで良いわけがない。  
そんな感情が心を埋め尽くして溢れそうになる  
といつの間にか行動に移っていた。

チルノ side

状況は最悪だった。誰ひとりとして取り返  
せないどころか自分達も劣勢に追い込まれて  
いる。

そして、最初の攻撃があたいに襲いかかろう  
としていた。

まずは、リリーホワイトの「春を告げる程度  
の能力」による暖気と、文の風との熱風。  
通常ならば、周りに春を呼ぶ程度でしかない  
暖気があたいの妖力結晶によって底上げされ、  
強化されている。

何故だ……熱量を吸収できない……  
しかも、先程から上手く他の能力を制御出来  
ない。

収納も、探知も、制御も、消失も、思わず、  
うう……、と呻く声が漏れる。

続いて、エタニティラルバの恐らく妖毒の鱗  
粉があたいの周りの空気中に舞う。

普通、自然界の鱗粉には毒のあるものは無く  
、毒があるのは鱗粉程の極小の毒針のほうで

、鱗粉自体に毒は無い。

しかしこの鱗粉の毒性はエタニテイの妖毒が鱗粉となって飛んでいるのでそんなことは関係無かった。

その鱗粉があたいの周りに充満していた。

更に、クラウンピースの松明の光がサニーの能力によってあたいに強く照射され、あたいの精神の中にクラウンピースが入り込み、内部からあたいを狂わせ苦しめる。

チ「う、うああああああっつつつ！！！！

……くつつあああ……！！！」

逃げ場などどこにも無かった。

熱風にも似た強い暖気を送りこまれることで冷気を封じられ、妖毒でしびれて動けず、仮に動けたとしても、衆人環視の中であり妙な動きでもしよものなら簡単に取り押さえられる。

とどめはクラウンピースの「人を狂わす程度の能力」で弱らせられるという完全な八方塞がりだった。

そこであたいは溜まらず地面に倒れ、そこを文に踏まれることで押さえつけられる。

とそこで終焉を覚悟した時、かすかな声があたいの耳を打った。

大「チ……ルノ……ちや……ん……

！！う……ううっ……！！！」

声のした方に眼を向けると、そこには敵にまわっていたはずの大妖精だいちゃんの姿があり、明らかに様子がおかしかった。

しきりに頭を押さえ、苦しそうにしている。と思った次の瞬間には、あたいは大ちゃんに

抱えられ、他の七人よりも遙か上空にいた。一瞬のことであり理解が追いつかないが、兎に角、敵から距離を取ることが出来た。そして、その敵は考える余裕をくれそうには無かった。

見ると猛スピードでこちらに接近してきている。

あたいは今は大ちゃんを信じて、あることを叫んだ。

チ「大ちゃん!!! あの氷のドームの中に座標移動!!お願い!!!」

そう叫ぶと同時に、大ちゃんがその空間を認識できるようドームの氷壁を一部、中が見えるほどまでドームの頂点に穴をあける。

すると今度は魔理沙や霊夢が居る、自身の作った氷壁の内部に大ちゃんと共にいた。

チ「よし!!! これでとりあえず・・・あとは入り口を塞げば・・・」

入口を閉ざすため上を見上げる、がそこにはまたしてもこちらに急接近する影が幾つも見えた。

こちらも手をかざして入口を塞ぎに掛るが、ここで急激がな体の重さを感じ、下を見ると驚くべき光景が眼に入ってきた。

自身の影が自分の体を呑みこもうと上がってきている。

チ「・・・つつ!!!? (嘘でしょ!?)」

霊夢に魔理沙・・・それに大ちゃんまで」

そう、影に飲み込まれそうになっていたのは自分だけでは無かった。

他の全員も、正体不明の影に飲み込まれかけ

ていた。

このままでは全滅する、と思ったその時、自身と霊夢、魔理沙のそれぞれ背後の空間に切れ目が生じたかと思えば、その両端にリボンのある切れ目が広がり中は数多くの目が存在する空間が広がった。

その中から、あたいの背後のものからは金髪にリボンの付いたモブキャップに八卦の萃と対極図を描いた中華風の服を着た、今ではないつもの胡散臭い顔の代わりに珍しく焦りを前面に出した表情の者。

霊夢の所には金髪のショートボブに二つの尖がりの付いた帽子を付けた、ゆったりとした長袖ロングスカートに青い前掛けの者。

そして魔理沙の所には緑のドアカバーのような帽子にそこからはみだした猫耳と茶髪、リボンの付いた赤と白の長そでワンピースといった姿の者が出てきた。

？「さあ!!行くわよ、藍!!」

八雲藍||藍

藍「はい、紫様!!・・・橙も用意はいいな!?!」

橙||橙

橙「はい!! 了解です!! 藍様!!」

出てきた人物達は互いに言葉を交わすと、目の前のあたいたちをその両手で掴んだ。

その者たちは、せーのっ!!の掛け声とともにあたいたちをその自分達のいる空間の中に引っ張りこんだ。

その時、あたいはとっさに大ちゃんの胴に手を回し、大ちゃんと一緒にその空間の中へと

消え、他の二人もその場から消えた。

く異界某所く

???  
side

その場から四人が消えるのと、影に縛られた自身の手の者たちがその場に到着

するのは実に紙一重だった。

すんでのところ、獲物を逃がしてしまったか……それも、恐らくはあの魔女が関与をしているのだろう。

このような間の悪い瞬間を狙える者など、あやつくらしいものだからだ。

しかし、あちらも干渉出来る度合いは限られているはず、どちらにせよ計画を先に進めるだけのこと。

その場はうす暗く、目の前の強大な鏡のようなものが映し出す映像の光だけがその空間を淡く照らしていた。

その鏡の中では、今や自身の手管によって、手駒と成り下がった者たちが、主の命じるままに標的を探すように首をまわし、辺りを探っていた。

その様子を見ながら、わずかに口元に笑みを浮かべ、一人で座るには大きなソファに腰掛けながら次の段階へと思考を巡らせた。

?? 「準備が整いました。いつでも次の段階へ進めます」

その声に頷き、すぐに始めるよう促すとその者はすぐに持ち場に戻って行った。

獲物を取り逃がすなど想定内のこと。手中にある者たちだけでも実は十分であり、

得られるのなら得れば良いと言う程度でしかない。

しかし、ただただ見過ごすにはあまりに膨大な力であることは確かで、獲得を試みるだけの価値はあった。

?? 「さあ、幻想郷の地は私に何をもたらすのか・・・若しくは、何ももたらさぬか・・・たまにはこのような寄り道も悪くはない・・・私のシナリオを盤石たらしめるのならば」

その者は胸元に蝙蝠のような紋様があしらわれた黒衣を纏っていた。

くスキマの空間く

あたいたちは今、無数の目が存在する闇とも言える空間の中にいた。

しかし、そこは闇であるにも関わらず、互いの姿だけははっきり見える不思議な空間だった。

その空間の中には、まずあたいと、霊夢、魔理沙、大ちゃん、先ほどその全員をこの空間に引っ張りこんだ三者を合わせて、合計で七人いた。

八雲紫Ⅱ紫

紫「あらあら、嫌ですわ。そんなに警戒しないでくださるかしら」

最初に口を開いたのは、先ほどとは打って変わって、胡散臭い、底の知れない笑みを浮かべその口元を扇子で隠した、いつもの八雲紫だった。

言わずと知れた「境界の妖怪」にして、「妖

怪の賢者」八雲紫その人である。

そして、その言葉はあたいだけに向けられたものではなく、自身の配下以外の全員に向けられたものようだ。

大ちゃんをあたいの後ろに若干隠れ、魔理沙にこやかながら相手を油断なく見つめ、霊夢は先ほどの頭痛から解放されて間もない頭を振り紫の姿を見止めると、またかと言う雰囲気を出しつつ、いつも通り、今度は何を企んでいる？という目つきで紫を見ていたからだ。かくいうあたいも危ないところを助けられたとはいえ、相手をまったく警戒しないというわけにはいかなかった。

それほど迄に強大な力を、「境界を操る程度の能力」などというもはや神のそれに等しい力をこの目の前の人物は持っているからだ。境界、それはあらゆる物に存在する……それがなければ破綻してしまう。

水面がなければ湖は存在せず、稜線がなければ山も空も存在できないようにだ。

もしも全ての物に境界が存在しなければ、それは一つの大きな物、ということになる。

それらを操ることが出来るということは、最早この世の全てを思うままにする事と同義だろう。

霊「全く……何をもって安心しろってのよ……不安しかないわよ、その胡散臭さのおかげで」

次いで言葉を発したのは霊夢だった。頭をガシガシと掻きながら面倒くさそうに、緊張の欠片も無いそぶりを見せながらも、その

眼はしつかと紫に向けられていた。

魔「ほんとにな・・・毎度毎度、怪しい登場か意味深な登場しか出来ない病気にでも罹ってるんじゃないのか？」

次に発言したのは魔理沙で、相手をからかうような口調ではあるが、先ほどと気配は変わっていないかった。

紫「ちよつと、失礼ね・・・そんなこと・・・あるわけないじゃない」

魔「だから、思うほどだつてちやんと言つたぜ・・・つてなんだ？今の間は？」

大「え、ええと・・・あ・・・あの!!」

チ「どうしたの・・・？大ちゃん？」

ここまであたいの後ろにいた、大ちゃんがあたいの横まで出てきて何かを言いたそうに声をあげた。

あたいはどうしたのかと問いかける。

すると、その言葉は本題を進めるものようだった。

大「あの・・・何故、私達を助けてくれたんですか？ それと、何故あのタイミングだったんですか？」

霊「そうよ！来るならもつと早く来なさいよ！」

紫「良い質問ね・・・」

その質問を受けた紫がまた口元を扇子で覆いながら（霊夢は無視）、微笑し、その質問を待っていたと言わんばかりの返答をした。

紫「それを話すのには、少々時間が要るのだけれど構わないかしら？」

チ「出来ることなら、早く済ませてあの子た



ちを取り戻しに行きたいんだけど？　こうしている間にもどうなってるかわからないし」  
紫「ああ、それなら心配いらないわ。この空間はここでの30分が元の場所の1秒くらいに時間の流れに境界を引いて調整してるからここでどんなに過ごそうと、向こうでは大した時間にはならないわ」

チ「・・・なら、初めから答えはわかってるようなもんじゃん・・・」

紫「一応、確認のためよ。一応♪」

あたい以外は特に異論は無いようで、むしろこのわけのわからない状況を一刻も早く抜け出したいが故に、情報を少しでも集めようとしているようだった。

あたいもそれは同じ気持ちだ。

なのでここは大人しく聴く事に決めた。

紫「それじゃあ、話すわね・・・そうね、あれは丁度今日の朝の事だったわ・・・いつものように、藍が朝食に呼びに来るまで布団で・・・は、ゲフン、ゲフン・・・藍が朝に呼びに来るまで机で調べ物や幻想郷で異常が無いかを監視しながら・・・」

チ「ねえ、今明らかに呼びに来るまで布団で寝てたって言いかけたよね？」

霊「朝が弱いのはわかるけど、ほどほどにしないよ・・・」

魔「そんなに立ち位置やキャラが大事か？別に無理しなくても良いんだぜ？　というか言い直すのが遅すぎだな・・・やっぱり内心余裕無いんじゃないか？」

紫「う、うるさいわね・・・(震)。ほっと

いてもらえるかしら？」

大「い、いやでもほら!!いくら時間がある  
とはいえ、先に進めないと!そこはあんま  
り重要じゃないですし、で、ほら!!朝の出  
来ごとだったって所からでしたよね!」

大ちゃんが少し強引にだが、脱線した話を  
元に戻してくれた。

本当にあたいには勿体無い程の親友だ。

しかし、紫の方は大ちゃんに重要じゃないと  
切り捨てられたことを気にしたのか「重要じ  
やない・・・」と少ししよぼくれていた。

(面倒くさいな)だが、切り替えたようです  
ぐさま本題に移った。

紫「・・・じゃあ、気を取り直して行き  
ましょうか。そう、今朝の事でしたわ・・・」  
その次の言葉にあたいたちは総毛立つのを  
止められなかった。

紫「摩多羅隠岐奈・・・彼女からの使者、  
彼女の配下でもある、丁礼田舞と爾子田里  
乃の二人が全身ぼろぼろになりながら主で  
ある隠岐奈の身に起きている危機を知らせ  
にきたのは」



## 第九話 氷開

大ちゃんからの質問に答えるようなことを  
言っていたから、自分で話すのかと思いきや  
、さっそく部下に丸投げした。

紫「藍、あとは貴方から話してくれるかしら」  
藍「はい、かしこまりました。紫様」

そして、八雲紫の式にして右腕「九尾の策  
士」八雲藍があたいたちに向き直る。

藍「では、ここからは紫様に代わり私から話  
させてもらう」

あれは今朝、私が紫様と朝餉をご一緒させ  
て頂いて、再び、紫様が自室に戻られようと  
したときだった。

藍く回想く

紫「藍、私は自室でやる事があるから、後片  
付けもお願いね」

藍「はい。もちろんでございます。

あとはお任せください」

紫「……」

藍「……如何なさいましたか？」

紫「いえ……じゃあ、お願いね……」

そう仰られると紫様は、スキマで自室に向  
かわれた。

別段変わったところなどない。

いつもの日常の一場面だ。

食事の片付けも終わり、買い出しがてら結界  
の様子でも見に行こうと廊下を歩いていると  
、どこからともなく紫様に呼び止められた。

紫「藍、そこにいる？」

藍「はい、ここにおります」

そのお声に返答を返し、なんとなく振り向くと私の目の前にスキマが広がり、中から紫様が上半身を出されている。

紫「ちよつと、困ったことになったわ・・・

・・・今から永遠亭に行くわよ」

藍「？ それはまたどのような・・・」

紫「話は後よ。準備して頂戴」

藍「・・・はい、承知いたしました」

紫様の言葉の端々から、ただならぬものを感じ、それに加え自らも式であるということもあり、仰られた通りに行動した。

内容は永遠亭に向かわれる紫様の付き添いで、それには私の式である橙も伴うようにこのことだった。

つまりは八雲一家総出である。

尚、現地集合とのことで紫様は先に向かわれ、私も諸々準備をしたのち、橙を呼びに妖怪の山へ赴いた。

く妖怪の山く

遠目に見た、妖怪の山はいつも通りの見た目でそこにあつたが、なにやら騒々しい気配を纏っていた。

なにか、外からくるものを極端に拒むような気配がそこにある。

殺気だっていたといつてもいいかもしれない。空を飛びながら、これは安易に踏み込むと厄介なことになると感じた私は、式同士の繋がりを利用して、橙に妖怪の山から出て来ても

らうよう呼び掛けた。

最初からこれを使っても良かったのだが、私が赴いた方が迅速且つ確実だろうし、外の様子も少し気になったので、自らが会いに行く方を選んだのだが、今の妖怪の山を見た結果、私もすぐ近くまで来ているし変にことを荒立てるよりは橙に自ずから妖怪の山の外に出てもらう方が、良いと判断した。

藍「・・・しかし、これはどういう事だ？元々妖怪の山は排他的ではあるがここまで殺気立つのは余程のことがない限りあり得ないと思うのだが・・・」

よく見てみると、普段は山の中を巡回しているだけの白狼天狗に、いつもは新聞づくりに勤しんでいるはずの烏天狗も十数人、妖怪の山の入り口及び、裾野を妖怪の山を守るように飛んでいた。

どの天狗も蟻の子一匹見逃すまいと、厳しい様子で、辺りを見張っている。

藍「・・・なにが起こっている？」  
そうして、数分後には私の呼びかけに応じた橙が妖怪の山からこちらへ飛んでくるところだった。

橙「藍さまあ~~~~!!」

いかにも嬉しそうな、それでいて、どこかホっとしたかのような表情で、こちらに飛んでくる橙に若干癒されながら、こちらも言葉を返す。

藍「橙、よく来てくれた。さっそくだが、永遠亭に急ぐぞ」

橙「はい!! お役に立てるなら、この橙どこへでもお供します!! はあくくく、それにしてもよかったです!!」

いつもは、言うことを聞かないこともある橙が妙に素直なことで、どこか安堵した様子なのが少し引つかかったが、今はそれよりも紫様の所へ向かう方が先決だと思い、橙と共にその場を後にした。

藍「では、行こう。しつかりついてくるんだぞ」

橙「はい! 了解です。藍様!!」

そして、永遠亭に行くため、迷いの竹林の中に入ると、紫様が私が橙にしたように、式神を通して私に呼びかけ、私の前にスキマが開かれたので、その中に二人で入って行った。これならば迷う心配もなく、永遠亭に直行できる。

ただ、中には繋がってなかったようで、スキマを抜けた先にあったのは、永遠亭の玄関だった。

流石にいきなり中に現れるのは失礼にあたるからだろう。

見ると、橙が辺りをしきりに見回していた。初めて来る場所だから、物珍しいのだろう。しかし、それでは示しが付かないので、窘めやめさせようとしたところで、玄関の戸がガラガラと開き、中から足元まである薄紫色の長髪に赤い瞳、ヨレヨレのうさ耳を頭から生やし、服は外の世界でいうところの（ブレザーと言おう）制服のようなものを身に纏った、

「地上の月兎」こと鈴仙・優曇華院・イナバ

が玄関で私たちを出迎えた。

鈴仙・優曇華院・イナバ 優

「お待ちしております。奥で師匠と賢者様が待っております。どうぞこちらへ」

その案内に従い、奥の部屋へと通される私

と橙、流石に家の中まで入った時には、橙も

大人しく付いて来た。

恐らく何か感じるものがあつたのだろう。

案内され長い廊下を進んでいくと、一つの襖の前にたどり着いた、そこで中の方々に私たちが来た旨を伝えると、中からお通ししなさいとの声が上がった。

それにより鈴仙が失礼しますと一声かけて襖を開け、入室しようとしたところで、何か違和感を感じた。

鈴仙の影がわずかだが、揺らいだような気がしたのだ。

しかし、それもただの気のせいと思えるほど小さいもので、見間違いだろうと気には留めなかつた。

鈴仙に続いて部屋の中に入るとそこには、すでに、紫様とその対面に座している上の服は右が赤で左が青、下はその逆といった特殊な配色の服を着た、長い銀髪を一本の三つ編みにまとめた人の姿があつた。

「月の頭脳」、八意永琳その人である。

すると、紫様がこちらを向き、

紫「・・・来たわね、藍、橙」

藍「はい。遅くなつてしまい申し訳ありません」

と私が謝辞を述べると橙も元気よく、



橙「はい！遅れてしまい申し訳ありません！」

と頭を下げた。

紫「いや、いいのよ。それよりも貴方たちにも話しておいた方がいいわね」

それだけ仰ると、対面の八意医師に向き直り、

紫「この二人にも例の患者を見せてもいいかしら。説明するのに必要だと思うから」

八意永琳Ⅱ永

永「まあ、見せるくらいならいいでしょう。

容態も大分落ち着いているし・・・でも、わざわざ見せなくても、話せば分かるんじゃないですか？」

紫「そこは、わたしから話すよりも現場を見た方が多くわかることもあるかと思ひまして」

永「そんなことを言つて、説明が面倒なのではないのでは？・・・まあ、いいでしょう。面会を許可します。尤も、面会相手に今のところ意識はありませんが」

そこまで言われたところで、立ち上がり、こちらです。と部屋の全員を連れてその患者のところまで、歩き出した。

私はこの間、急に患者や容態などという言葉が出てきて困惑していたが、今はそのことは考えず、現地についてから考えることにした。それよりも他の事で何か思い当たることはないかと考えたが、今日は紫様が少し止まっておられたことと急にこの永遠亭への来訪を決められたこと、くらいしか変わったところはなく、そのことでさえ良くあるようなことの

ように思えた。

むしろ、今朝からのことで特に不審に思ったのは、妖怪の山の警備が厳しくなっていたことと、さつき鈴仙が部屋へ入る前にその影が変だったことのほうが特に印象に残っている。あれは一体何だったのか、先程は見間違いかと思っただが、やはりあの影はおかしかったし、妖怪の山もあそこまで戒厳令が敷かれるような状況など、初めてではないだろうか。

一体なにが起こって妖怪の山はあの様相を呈しているのか、考え出せばキリがないが、とにかくあの山の様子から一つ言えることは、この幻想郷にかつてない危機が訪れようとしているのでは、ということだ。

そのように考え事をしてしていると、いつの間にか目的地についていたらしい。

そして、一同が次々に部屋に入って行く。

——そこで目にした者を見て私は驚愕した。そこには変り果てた姿で意識を失う、摩多羅隠岐奈様の部下にして、二童子の丁礼田舞と爾子田里乃の二名が寝台の上に横たわっていたのだから。

橙「ら・・・藍様・・・!! なんです・・・

・・・? これ・・・」

藍「い、いや、さすがに私も混乱せずには居られないのだが・・・これは一体?」

聞きたいことは山ほどあった、

何故、この二人はここにいるのか、

何故、誰が二人をこんな風にしたのか、

何故、ここまで重体なのか、

何故、この二人の主はここにいないのか、

何故、見つけた時点で私に話してくれなかったのか等聞きたいことがあったが、それよりもまず二人の体表面を覆っている黒い影のようなものから感じるのと非常に近い感覚をついさつきも感じたのを思い出していた。

というよりそれはこの部屋に入る前にも考えていたことでそして、そのことが見間違いないではなかったことを裏付ける根拠となった。

なので私が今取るべき行動は、この状況に説明を求めることなどではなく……

藍「紫様……お聞きしたいことが山とございますがその前にまずは……」

紫「……流石ね、藍」

藍「……ちよつと失礼致しますっつ!!」

私は今から妖術で拘束する相手にそれを言うや否や即座にそれを実行した。

妖力で構成された光の縄がその者……

鈴仙・優曇華院・イナバを拘束した。

その場にいた（紫様を除く）誰もが驚愕に目を丸くしていた。

あの八意医師でさえも、驚きを隠せない様子だった。

そして、何より本人が驚きに声を上げていた。

優「い、いや……え?……ちよ……えええええ?」

永「……ふむ、そういうこと……なるほどね」

しかし、八意医師は驚いたのは最初だけで、あとは目を細め、しばらく観察するとその意図を読み取ったようだ。

それにはもう流石としか言いようがない。

優「し、師匠お〜〜・・・助けてください  
〜〜!!」

身じろぎしながら助けを求める薬師の弟子。

藍「・・・では紫様、これは一体どういう事  
なのかお聞かせ願えますでしょうか？」

態度こそいつも通り、主に対する姿勢だが  
内心はいつも振り回してばかりの主人に対し  
て憤慨していた。

その証拠に自分でもこの時の表情は硬かった  
と自分でも思う。

優「いや、あんたがどういことだよ・・・」

永「うどんげ、少し黙っていなさい」

優「師匠!?!」

ツツコミを入れてくる鈴仙を八意医師が窘  
める。

そこに、ようやく紫様が口を開かれた。

紫「あらあら・・・まったく・・・藍?い  
つでも、質問すれば必ず答えが返ってくる  
思ったら大間違いなのよ?少しは自分で考  
えるとかしたのかしら?・・・それにもうあ  
なたなら、薄々勘づいているのではなくて?  
」  
確かに紫様の仰られる通りではあった。

この二童子を永遠亭に運ばれたのは恐らく紫  
様で、この二童子がこれほど手負いの状態  
にいるということはその主に危機が迫ってい  
ることを示しており、私に橙を連れてくるよ  
うに命じられたのは単純に人手が必要だった  
からで、永遠亭に直接私を呼ばれたのは、こ  
の状況をわからせるためと、今後のことを  
この薬師殿と話合う必要があったため等色々  
なことを想像することはできるが、まだわ

いことはあるし、現実とは言い難いので叶うならば、紫様の口から直接お聞きしたかったのと、重要なことをいまだにお話にならない主に憤りのようなものもあつたので、半分意趣返しのような気持ちで次のように返した。

藍「残念ですが、ご期待には添えかねます。

確かに、私の想像の及ぶ所もございますがやはり、憶測の域を出るものではありません。

そのような中途半端な理解では、逆に足を引っ張りかねません。それ、にお忘れですか？ 私は所詮式・・・未知数のものには考えが今一つ考えが及びません。ですのでどうかこの一件のご説明をお願い致します」

紫「でも、さつきはちゃんと意図を察してくれたじゃない」

藍「あれは、察して動いたのではなく私の直感で行動した結果偶然、紫様の意図と一致したに過ぎません」

言葉こそ丁寧に気を付けていたつもりだが、やはり表情は硬かっただろう。

しかし頑として譲るつもりもなかった。

姿勢は低く、且つ譲らない雰囲気を全面に出しながら、今の言葉を口にする。

永「・・・もう諦めて一から説明された方がいいんじゃないですか？」

紫「・・・そうかもしれないわね。ふう・・・分かったわ。それじゃあ、順を追って説明するわね」

ここでようやく、紫様が渋々といった様子で、説明を始められた。

紫「・・・始まりは今朝、私が藍との朝食を

終えてすぐのこと・・・私のマヨヒガの周りに張っておいた境界の中に誰かが入ってきたのを感じたの」

紫「・・・そしてすぐに、その入ってきた場所までスキマを使って移動したわ・・・そこで」

ここで紫様は寝台で横たわる二童子に眼を向けて続けた。

紫「その二人を見つけたのよ」

その話の中で、予想が確信に変わるのを感じた。

藍「(やはり、あの時にはもう・・・)」  
更に話は続く。

紫「その二人を一目見て摩多羅の配下の二人だと気づいたわそしてその二人がこれほど手負いだということは摩多羅自身に何か良くないことが起きていることは容易に想像できたけど、それを裏付けたのがそこにいる二人だった」

紫く回想く

私は、侵入のあった地点に直接スキマで移動して辺りを見回した。

紫「確か、この辺りよね・・・ツツ!!  
あれは・・・!!」

するとすぐを探していた侵入者が二人地面に倒れているのを発見したわ。

急いで駆け寄ると、例の二人組がそろって全身に手傷を負いながら、息も絶え絶えに横たわっていたので、流星に私も心配になって、呼びかけたの。

紫「・・・っ!!しっかりしなさい!!」

「何があつたの!? . . . 隠岐奈は!?

呼び掛けて見ても、意識がない見たいだったから、永遠亭に移そうと思つたその時に、何か違和感のようなものを感じて、二人をよく見たとき、二人に黒い影のようなものが汚れみために張り付いていた。

それと、その二人の影がその汚れの分薄くなつて見えるように見えた。

その時感じた感覚はとても気持ちの悪いもので、これはすぐに何者かの攻撃ではないかと考えた。

そこで、ふと隠岐奈のところがこれでは、この分だと永遠亭もすでに落ちてしまつているかもしれないと危惧した私は、先にスキマで永遠亭の様子を確かめ、無事なことを確認すると、スキマで二人を運ぼうとした所で、下から微かに声が上がつたのよ。

紫「!! . . . どうしたの!? . . . 大丈夫!?!」

あまりにか細かい声だったから、耳を近づけないと聞こえなかつたけれど、確かにこう言つたわ。

丁礼田舞 舞 爾子田里乃 舞 里

舞「お、お願いします . . . . .」

里「どうか . . . お師匠様を . . . . .」

里・舞「助けてください . . . . .」

紫「やはり、隠岐奈は . . . 何者かの手に落ちてきているのね」

舞「お師匠様は . . . 私たちを逃がそうと」

里「お一人で . . . その場に . . . . .」

残られて・・・」

舞「私たちの後ろに・・・扉を・・・開かれて」

里・舞「私たちを・・・逃がしてくださいましたツツ!!」

舞「ですから・・・ゴホツツ・・・ゴホツツ・・・どうか・・・」

紫「・・・もういいわ・・・無理に喋らない方がよい。なたたちの気持ちは伝わったわ・・・友人あのことじゃないけれど、その願い・・・叶えましょう」

それから、スキマで永遠亭の中に二人を連れて移動し、その薬師さんに話をつけて、二人の治療を頼んで、藍と合流してから再び、永遠亭に向かったというより、合流した時にはすでに永遠亭の中に居たと言ったほうが良いわね。

そこからは、藍と橙の到着を待つ間・・・え？なんで橙を連れて来るように言ったか、ですって？それは人手は多い方がよいからよ・・・人手というより猫の手かしら。

本当、猫の手も借りたいぐらいだったからね。それは貴方もわかっているんでしょう？…………で、待っている間、丁礼田舞と爾子田里乃の応急処置を終えた永琳と今後のことについて話をしている、そこに藍と橙あなたたちがそこで縛られている妖怪兎の案内でここに来た、というわけよ。

く回想終了く

ここまでの話を聞き、合点の行くところは



幾つもあったが、特に得心いったのはやはりあの影のことだ。

藍「やはり、紫様もあの二人からも発せられている妙な気配を感じて居られたのですね……そこに縛っている妖怪れいせん兔からも」

紫「ええ、あの場でやると何のことか説明するのもややこしかったしあなたを試してもみたかったしね。……でもそれにはその場に直に行く必要があったのよ」

なるほど、やはり、あえて私にあの二人を見せたかったという事らしい。

なぜなら、その場にいる全員が感じているだろうが、あの影のようなものの気配はほんの微かなものでしかなくここまで近づかない限り、感じ取ることにはできないようなものだったからだ。

それはそのままでは気のせいだと見過ごしそうになるほどに。

そして、先ほどこの部屋に入った時に浮かんだ疑問もこれで解消された。

まず、この二童子の手傷はこの影を操っていた者で間違いないだろう。

そして、二人の能力を互いに使いあえばここまで重傷化することもないはずなのに、そうでないのは、恐らくこの影が関係しているのだろう。

また、ここにこの二人の主人がいないのは、二人を庇ったのことで、私に話せなかったのは単純にタイミングの問題だった。

まだ、分からないことはあるが、それはこれから明らかにしていくしかないところでの質

問は控えた。

とりあえず今分かることはこのくらいだ。

そこで、薬師の弟子の鈴仙・優曇華院・イナバが声を上げる。

優「あの・・・私はなんで縛られているのか  
未だに分からないんですが？」

簀巻き状に縛られ、橙に指先で突かれながら  
らそう漏らす鈴仙。

それを聞いた彼女の師匠がその質問に答える。  
永「それはうどんげ、その影の気配が貴方からした  
ということは、そこで安静にしている二人のように、  
力を取られることもあれば、その影を遣わした者の  
命令で、ここで暴れる可能性もあったからよ」

優「どういうことですか？というか、何故そんな  
ことがそのお二人に？」

紫「私はその影を間近で見ているのと永琳先生の  
診断結果を聞いているから」

藍「私はこの部屋で改めて貴方に会ってから感じた  
気配と同じ気配がこの二人からしたので改めてよく  
読み取ってみると、これは憑依させた相手を意のまま  
にする事のできる類の術であると分かったので」

優「・・・そこまでのことを・・・!!」

橙「流石は藍様!!」

ここで八意医師が話を次に進めた。

永「・・・それで、紫様？先ほどの話の続きになる  
のですが・・・」

紫「ええ・・・そうだったわね・・・なにか  
しら？」

永「私たち永遠亭勢はこの事態に対して自主

防衛に徹し、静観の構えを取らせていただきます」

その発言に対し紫様は扇子で口元を隠されながら、いつものような底知れない笑みを浮かべこう切り出された。

紫「そう来ると思っていたましたわ・・・でもいいのかしら？　これは恐らく幻想郷全体の危機・・・あなた方だつて住むところが無くなるのは手痛いのではないですか？」

永「そこはそれ、私には慕ってくれる月の民が月におり万が一、いえ万々が一のことがあれば最悪月に戻ることで回避できます」

紫「その月にも、すでに手が回っているかもしれないわよ？」

永「その時はその時・・・それに我々も、全く何もしないというわけではありませんし」

紫「・・・どういふことかしら？」

相手の意思を最初から見透かされるように目を細め、もはや確認と相槌の為だけに質問をされる紫様。

永「私わたくしども共はこの永遠亭・・・ひいてはこの竹林に害を与えんとする勢力に対し、徹底的に交戦、防衛し、またここに避難民を受け入れ、要救助者を積極的に救助し、治療が必要な者にはそれを完全無償で行います」

紫「ふふっ・・・成程」

永「ただし、それは幻想郷にこの危機が去るまでの期間そして、無償の医療はその危機及び妖魔の類によるもののみ対象といたします」

紫「・・・その真偽はどうやって見分けるのかしら」

永「言わずと知れたことです・・・逆にどうやってこの名医わたくしの目を欺くのか教えていただきたいくらいです・・・万一、それでも安心出来ないなら、地霊殿の主でも付けるだけのことです」

そう豪語する八意医師はこちらもまた、底の計り知れない満面の笑顔で紫様を見返している。

紫「それなら、もうそれで構いませんわ・・・

・・・この辺が引き際でしょう」

・・・相手方はさぞ、よくもぬけぬけと思っっていることだろう。

恐らく最初からこの着地点を紫様は目指して居られたらうからだ。

しかし、ここまで話がスムーズに進むとは意外だった。

いや、私が知らないだけでお二人で話されているときにはもっと拮抗していたのかもしれない。

紫「それはそうとせんせい医師、貴方のお弟子さんに少し試したいことがあるのですけどよろしいかしら？」

永「・・・ええ、どうぞ・・・煮るなり、焼くなり好きにしてください構いません」

その言葉を聞いていた私は、彼女の目を見たとき、そんなことは日常茶飯事、今更どうということはない。

というような冷酷な気配を一瞬感じた気がして、少し身震いした。

そんな私はその床に転がっている鈴仙に同情の視線を横目でチラと向けた。

優「うっうう・・・ししょくく・・・  
ひうつ・・・ひぐつ・・・( ; ω ; )  
あんまりですよくく・・・」

・・・何故だろう、彼女の境遇に同情  
を禁じ得ない自分がいる・・・この時の  
私はさぞや遠い目をしていたことだろう。

紫「心配は要らないわ・・・悪いようにはし  
ないから」

優「い、いやもう、その前置きが、逆につ、  
怪しいですつっ・・・!!」

言つて、私の光縄から逃れようとじたばた  
する鈴仙。

紫「始めるわ・・・藍、ちよつとそこの兎さ  
んを気絶させてくれる？」

そしてなぜか、ご自分の親指で自らの首切  
るという誤解を生みそんな動作を交えながら  
仰られる紫様。

それを受けて、ひいひいっと声を漏らし、目  
尻に涙をためる鈴仙に、ちよつと一緒に泣き  
そうになつてしまった。

・・・それにしても、紫様・・・楽しそうだなあ  
・・・しかし、それはそれとして、私は命じ  
られるままに動いた。

相手の背後に回り、相手を持ち上げて立たせ  
たと同時に素早く後頭部に手刀を当て気絶さ  
せた。

その際崩れ落ちる彼女を支えるのも忘れない。  
その時の鈴仙の目がへになり口が開いてい  
た(↑「かわいい」byブローリー)

ことで、あわや私まで嘔き出す所だった。

紫「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そこで紫様を見ると、鈴仙の方をじつと見つめられてからまるで鈴仙を切るように扇子をゆっくり上から縦に振られた。

いつものスキマを開く動作かに見えたが、スキマは開かず代わりに鈴仙の影が急に濃くなったかと思うと、そこから黒い影のようなものが這い出してきた。

紫「・・・出たわね」

そのことを予想しておられたかのように言葉を発し、次の瞬間には、鈴仙の影から完全に離れたそれをその周りに境界を引くことの中で閉じ込められた。

境界の妖怪の本領が発揮されていた。

その目の前の黒い霧のような影のようなものに視線を定め、扇子を開かれるとそれと扇子を重ねるようにして再び扇子をゆっくりと閉じて行かれると同時に結界としての境界も収縮し閉じられていく。

それに対して中のものは最後のあがきとばかりに、暴れるが抵抗虚しく扇子がすべて閉じられるとともに消滅した。

敵を滅ぼす時でさえ優雅で美しい・・・そのお姿に惚れ直していると、

紫「藍・・・もうその子の拘束を解いてもいいわよ」

藍「・・・は、はい！」

その声にはつと我に返り、鈴仙に施した束縛をすぐさま解き、空いている寝台の上に彼女をそつと横たえた。

そこで、彼女の師匠から声が上がった。

永「紫様・・・この度はこの鈴仙に憑いた魔

を祓って頂きありがとうございます。あれには私でも、どうすれば良いのか途方に暮れていたの、助かりました」

紫「いいいえ、私もあの方法で祓えるかどうか確証がなかったですし、それが有効であることがさっきで分かったので、お互い様ですわ」

永「ならば、そのついでと言っては何ですがこここの他の者たちにも同様にしてくださいますか？」

紫「ええ、もちろん・・・というより元々、幻想郷の人妖を含むすべての者に実施するつもりでしたし」

その言葉を聞いて愕然とした。表面上は平静を装っていたが、内心は穏やかではない。幻想郷のすべて？あんなものが他の者にもまだ憑いていると言うのだろうか？

それは野良妖怪等も含むのだろうか。

だとすれば相当骨の折れる作業になることは間違いない。

と考えたところで、八意医師が私の疑問を口にしてくれた。

永「幻想郷のすべての・・・それは、野良妖怪等も含めてそうなのでしょう？だとすれば、到底間に合うものでは無いかと思われませんが・・・」

紫「いいえ、確かにその可能性も捨てきれませんが、恐らくは力のある存在に限定していると思われるので、幻想郷の各勢力を回って行けば、問題ないでしょう。」

永「・・・なるほどそれなら問題はないの

かもしれませんね」

そこで、なぜか妖怪の山のことが頭に浮かんだ。

ここに来る前に見たが、何やら異様に殺気立っていた。

そして橙も、妖怪の山を出るときに何か安堵した様子だったような・・・

藍「橙、妖怪の山を出るとき、何かに安堵した様子だったが何かあったのか？」

橙「・・・ああっ!! そうだ! 聞いてください

い藍様ー!! 実は私、あの山に配下の猫

達を連れていってたんですけどくく・・・あ

んまり言う事聞いてくれないのはいつものこ

ととして、やたらと反抗的というか、フク

ツツ!! と唸ったり、引つ掻いて来たり、さ

んざんで・・・しかも妖怪の山自体もいつも

よりピリピリしてたし・・・」

橙から話を聞いた私は猫たちが橙に反抗的

だったのは橙の中にあるものが原因ではない

かと睨んだ。

そして橙に意識を集中すると案の定、本当に

微弱だが、先ほどと同じ気配を感じ取った

藍「橙、落ち着いて聞いてくれ。お前の中に

さっきの鈴仙と同じものを見つけた」

橙「え・・・ええええツツ!!」

藍「だが心配は要らない、さっきと同じ手順

で、簡単に祓えるだろう・・・だから少しの

間眠っていてくれ」

橙「わ、わかりました・・・・・・ZZZZ」

私が眠るよう命じると橙はすぐに寝台の上



に乗り猫のように丸まって寝息を立てて寝はじめた。

橙は私の式神なので、このように眠れと命じれば、眠ることが可能なのだ。

藍「それでは、紫様・・・お願い致します」  
紫「・・・ええ、任せて頂戴」

今度は少し手を橙の方に振っただけで、橙の影から例の黒い何かが小振りながら出てきた。

恐らくは個体差があるのだろう。

橙の力はそれほど必要ではなく、あれば嬉しい程度でしかなかったのかもしれない。

その馬鹿にしたような考えには腹が立つがそのおかげで、難なくそれもあっけなく祓うことができた。

橙が眠るその隣では鈴仙が横たわり、静かに寝息を立てていた。

すると彼女の師から質問が投げかけられた。

永「それでは、これからどうされるおつもりですか？ 幻想郷中の人妖とその他の有力者を訪ねて回られるのですか？」

紫「それも当然するつもりだけれど、まずはここ、永遠亭と竹林の者たちに憑いているかもしれない影を取り除くことからかしらね・・・その後は先に、そこで眠る二人との約束を果たしに行きますわ」

紫様はその寝台で眠る二人・・・丁礼田舞と爾子田里乃を見ながら、そう仰られた。

そこからは、まず丁礼田舞と爾子田里乃の兩名に取り憑いた影を消し去り、永遠亭内にいる全員（鈴仙を除く）をすべて調べ、憑かれ

ていた場合、それを取り除くという作業が行われた。

その結果憑かれていたのは、八意永琳、蓬莱山輝夜、因幡てゐ、藤原妹紅の四名だった。このうち、三名は実力者であり、因幡てゐに憑いていた影の規模の小ささからも、紫様の考えは正しいと思われる。

因みに、この四名の影をどのように祓ったかという点、以下の通りである。

まず初めに、ここの実質的な支配者といっても過言ではない蓬莱山輝夜、輝夜姫のもとへ行き、彼女の配下でもあり、師でもある八意医師から事情を説明して貰い。

彼女の調合した睡眠薬を服用してもらったことで、姫の影の中に居るものを取り払った。

続いて、因幡てゐだが、彼女はこの迷いの竹林を熟知しており、彼女だけがわかる場所に隠れているので、普通ならなかなか見つけられないのだが、ここで鈴仙の意識が回復し、彼女がもつ「狂気を操る程度の能力」の本質である波長を操る力で私たちに合流し、更にその能力をてゐを探すために使用してもらった。

それに対し礼を言うと、彼女からもさっきの影のようなものが取れてから、いつからか感じていた体のだるさが無くなり、文字通り憑き物が落ちたかのように体が軽くなったとのことである。その件に関しての礼を言われた。

そして見つかった「幸運の素兎<sup>しろうさぎ</sup>」は普段から悪戯ばかりを働き、名目上とはいえ上司である鈴仙の言う事を聞かず、逆に彼女を悪戯

のメインターゲットにしているらしいが、流石に上司（鈴仙）のその師匠である八意医師には逆らえないのか素直に従ってくれた。

（当然悪戯もしない）

こちらも同様に睡眠薬の服用である。

次に、厄介なのが藤原妹紅である。

彼女は言ってしまうえば永遠亭組とは敵対しているのだが、しかし、竹林で迷っているものや、病気等で永遠亭に用があるものを永遠亭まで案内、または運び込むといったこともしているという、複雑な関係が成り立っていた。それに、敵対と言っても、その永遠亭の中の蓬萊山輝夜その人に対してのみであり、その他の者に関して・・・例えば鈴仙などは「鈴仙ちゃん」と親しげに呼んでいる。その他の者に対しては知らないが、少なくとも鈴仙に対しては悪い印象を抱いてはいないようである。

しかし、対する鈴仙は、「師匠ほうらいせんかぐやの上司」の

敵である妹紅とはあまり親しくしたくないようだ。妹紅の鈴仙に対する心象が良いことはこちらとしては好都合だ。

実際妹紅も鈴仙からの言葉を疑う様子はなく、最近の体の不調や妖術ちからが思うように使えなかった等、心当たりがあるようだったのでこちらも難なく事が運んだ。

最後に八意医師の場合は、自前で調査してもらった睡眠薬を例によって服用してもらい。影を祓ったのだが、影の規模と力が大きい割に見つけるのが難しかった。

恐らくどうしても手に入れたかったのだと思

われる。

それも無理もないかもしれない。

彼女自身の凄まじい妖気からも相当な力を秘めている上、更にあらゆる「薬を作る程度の能力」という能力というより技能からも分かる通り、「月の頭脳」とも称される彼女は、

まさしく天才である。その彼女が敵の手に落ちていたらと思うと戦慄を禁じ得ないどころか絶望すらしていたのではないかとすら思う。なので今回のことは大きかったと見るべきだと私は思った。

彼女が敵の手に落ちる前にそれを防げたことは素直に喜ぶべきである。

実際、紫様もこれまでとは違い、相手こずって居られるようだった。

が無事、影を切り離すと永遠にあらゆるものからその存在を消し去られた。

紫「これで、ここは全部かしらね・・・」

藍「お疲れ様です」

橙「お疲れ様です!!」

橙も負けじと元気よく挨拶をし、敬礼もつける。(↑かわいい)

紫「さて、次は・・・隠岐奈のところね。順番的には後になってしまったけれど、いつ助けるとは言っていないなかったし、それに私、その場でできることをまず、やっておく性質だからね・・・そしてこれも性格だけれど、約束は守る方なのよ・・・今行かないと間に合わないかもしれないから、幻想郷を回るのは後回しね」

そんな弁解ともとれることを、誰にともな

く眩かれる紫様。

紫「さあ、それじゃあ、行きましようか」

去り際にそれだけ言い残されると紫様を含めた我々はこの場を後にしようとするのを返した。

その時・・・

優「あ、あの・・・!!」

その声に一同が振り向くとそこには鈴仙がこちらを見つめて立っていた。

優「この度は誠に・・・ありがとうございます  
ました!!こちらの立場としては全くの中立  
みたいなので、何もできないかもしれませんが  
が・・・せめて、皆さまのご健闘をお祈り  
いたします」

紫「いいえ、こちらこそありがとうございます。精一杯、  
そこで休まれている方の助力となりなさい  
な。それが・・・この幻想郷のためにもなる  
のだから」

そのセリフと妖艶な笑みを残されて、今度こそ紫様はご自分が開かれたスキマの中に消えた、私と橙もそれに続き、永遠亭を後にした。

く回想終了く

藍「その後は、紫様のお知り合いの摩多羅様を救出後、お前たちと急ぎ合流したというわけだ：これが、これまでの経緯だ。理解したか?」

魔「うんうん、なるほど・・・お前が橙と鈴仙を可愛いと思っていたことはよくわかったぜ!!」

いかにも理解していないように理解している振りをしているような態度を取った後、親指を立てながらいい笑顔で、的外れなこと言ひ出す魔理沙。

(→もちろん冗談)

しかし、そんなことは関係なく全員で、魔理沙を弄っていく。

チ「ちよつと魔理沙・・・あたいより馬鹿になつてどうすんのさ・・・」

霊「魔理沙・・・ついにキノコに頭をやられたのね・・・安心しなさい、骨は拾つてあげるから・・・まったく、だからあれほどあのキノコはやめたほうがいいと・・・ヤムチャしやがって！(泣)」

明らかに嘘とわかる泣き真似の素振りをしながら言う霊夢。

大「ま、まあ誰かを好きという気持ちは・・・重要ですよね!!」

(→全員と言つたな・・・あれは嘘だ。

大「ちやんはやつぱり優しかった」

橙「ら、藍様・・・実は私をそんな目で・・・」

(→嘘2 一人錯乱状態)

藍「ち、違うぞ橙・・・!! 私は決してっ・・・そんな疚しい気持ちは!!」

(→嘘3 もう一人パニック)

紫「うふふ・・・全く、この非常時にまで・・・私がその頭に見境いという概念を与えてあげましょうか？」

冒頭のボケを皆(正確には四人)から弄られる魔理沙。

魔「ちよつと待て皆、特に霊夢とチルノ!!

今のはほんの冗談だつて!!」

霊「うん、知ってる」

チ「まあ、そんなところだろうと思っただけど  
さ」

橙「そ、そうですね・・・そんなわけない  
ですよね（笑）・・・ホッ」

藍「そっそうだぞ・・・橙。全く・・・こ  
んな時に何を考えているんだ・・・」

大「私もチルノちゃんど・・・（。ヾ）ハッ!  
な、なんでもあり、です（何でもありません）  
!!」

紫「・・・そろそろ話を戻してもいいかし  
ら」

一人、ジト目の入った呆れ顔でこちらを見  
ていた紫が呼びかける。

チ「ああ、良いよ。待たせたね」

あたいの一声で皆さつきまでの気持ちを切  
り替えて、紫に向き直る。

チ「この異変への対策を話し合うんでしょ？」

紫「それもしなきゃいけないんだけど、それ  
にはまず、貴方のことを話しておかなければ  
と思つてね」

チ「・・・あたいの何を話すつていうのか  
な」

紫「その様子・・・もう、薄々分かっている  
みたいじゃない」

扇で口を隠しながら、意味深にそうこぼす  
妖怪の賢者。

チ「・・・まあ、一応確認のためだよ」

紫「まあ、言つてしまうと・・・あなたが

一人で、氷河気を過ごしていた時、黒い装丁  
の本の数々をあなたの行動範囲に置いたのは  
．．．．．  
紫「この．．．．．私よ」



## 第十話 氷路

チ「うん、そんなことだろうと思った……」  
あたいは、あれだけ溜めて秘密を明かされたにも関わらず、あつけなくそう言っただ。

紫「まあ、そうよね……」

だが、紫は気付かれていたことにさして意外でもないのか、平然としている。

しかしそれとは裏腹に周りは騒然となった。

そう、この場であたいの事情を知らないのは橙だけだった。

何が何だか分からないといった様子で小首を傾げている。(↑かわいい)

霊夢と魔理沙は既に縁起に目を通していたし、藍も恐らくまめに確認しているのだろう。

大ちゃんにはあたいが説明したし、紫はそもそも当事者で且つ、縁起に乗せる内容に問題が無いか確認する立場にある。

霊「あなた……やっぱり何か企んでたんじゃない」

魔「チルノがここまで強くなったのにはお前が関わってたのか……まあ、そうでもなければ不自然だけどき」

藍「確かに、最初はなんとなく驚いてしまっただが、紫様が関与されているとなれば納得がいく」

大「チルノちゃん……」

紫「企んでいるだなんて……人間きが悪いわ……霊夢……むしろ私は幻想郷の危機に備えるために動いたに過ぎないのよ？」

霊「?どういうことよ・・・」

紫「縁起の内容を、よく思い返して見なさい

・・・話すのはそれからよ」

ここで、幻想郷縁起の内容、あたいの過去に触れておくことにしよう。

縁起に書かれたあたいの頁ページには以下の様に書かれている。

・氷の妖精 頁目

チルノ

能力 冷気を操る

程度の能力(強化)

学習する

程度の能力(追加)

危険度 低↓極高または不明

人間友好度普通↓高

主な活動場所 霧の湖↓人里

この妖精に関して、更新し

なければならぬ情報が入っ

たので、ここに追記する。

この妖精の力は

今までは妖精の域

を出ることはなか

ったのだが、とあ

る事象をきっかけ

に、もともと持つ

ていた力を取り戻

した。

※1 冷気と氷

と寒気に覆

その力とは、この

われた過去

幻想郷に来るより

の地球

以前に居た、氷河

期（※1）のような冷

気が道溢れた広大

な空間で、そこで

己の体を丸ごと妖

力に変換し、自身

の妖精としての特

性（※2）を利用して

甦る、という行為

を只ひたすらに繰

り返しながら、遙

かに長い年月を過

ことで得た、莫大

な妖力の結晶。

それはまさに二つ

の意味において結

晶だった。一つは

実物がそのもの結

晶である。これは

見せてもらったの

で間違いはない。

そしてこの結晶は

全部で十個あるら

しく、それぞれが

様々な色と役割を

持っていた。

二つ目は努力の

賜物という意味の

結晶である。いや

、正確には忍耐の

賜物と言っても良

いかかもしれない。

※2 そこに自身

が体現する

自然がある

限り甦れる

なぜなら、その結晶に力を貯める、つまり、己自身を妖力結晶化すると、いう行為には凄まじい苦痛が生じるからで、あり、それを何億回、何兆回……いや、それ

以上の天文学的回数をこなさねばならないからである。

その痛みはまるで身体を無理やり小さい箱の中に押し込まれるかのような激痛（※3）であるのだとか

※3 よくも心が折れなかつたものだとか感心する。

勿論その行為の度に今言った様な痛みが発生する。

そのような経験をしたことなどないので（※4）ただただ

※4 絶対に経験

想像を絶するばかりだが、かなりの激痛であるのは間違いないだろう……

したく無い。筆筒の角に足の小指をぶつけただ

莫大な力にはそれと同等の対価が必要ということかも

でも痛いのに。

しれない。  
まさしく本人の努力の結晶という訳である。

最近、何処に住  
処があるのかが判  
明した。

というより、元の  
住処を離れ、今で  
は人里でかき氷屋  
兼自宅の木造家屋

(※5)に移り住み、  
そこでかき氷を  
販売したり、人里  
の農家を手伝いに  
行ったりして生活  
している。

※5 一から自分

で木を切つ  
て作った、  
完全自作ら  
しい。私も

見たがとて  
も妖精が作  
ったとは思  
え無いほど  
素晴らしい  
出来映えだ  
った。

突然だが、ここ  
で一つ忠告を兼ね  
て彼女の危険度  
について述べさせて  
貰おうと思う。  
何故かというと、  
温厚で争いを好ま  
ない普段の様子か  
らは想像できない  
かも知れないが、

彼女を敵に回すことは、そのまま途轍もない脅威を敵に回すことを意味する。

それは彼女の、ありとあらゆるものを学習してしまう力、「学習する程度の能力」にある。前述した通り、チルノは苦行、荒行とも言える壮絶な修行の末、今の力を得た訳だが、その修行を行うには、先に高度な術式を会得体得している必要があるのである。

長い年月の中、無尽蔵に時間はあつたとはいえ、彼女はその場に何故かはわからないが置かれていた高等術式に関する書物から知識を得て、学習し、事実、莫大な妖力を手にした。その学習できるも

のは能力も例外ではなく、如何に強力無比な能力を持つていようと彼女に学習されてしまえば、動きを見切られ、更には弱点を突かれ、拳句の果てには同じ能力を使用され対応されてしまうという恐ろしさを持っている。

まあ、そうでなくとも無尽蔵の妖力だけで私たち人間には十分脅威だが………  
その危険度はその能力を行使した場合計り知れないので、最早不明である。

相手にする者のレベルに応じて上がって行くので、まさに底なしと言つて良いだろう。  
しかも、一旦上がったレベルは下がらない。

つまり、こと妖怪  
退治に関して彼女  
を頼り続けると、  
その危険度は跳ね  
上がっていく事に  
なる。

これ以上なく頼も  
しいとはいえ、む  
やみやたらと頼る  
のも考え物である。

〔目撃報告例〕

・それだったらこ  
の間、俺の近所  
にある農家の爺  
さんを手伝って  
るのをみたよ。  
皆が皆あんな妖  
精なら大歓迎な  
んだが。

(里の農家)

・あの家のかき氷  
は、今やこの里  
では夏の必需品  
になりつつある  
よ。あと美味い。  
確かに、美味し  
い。私も一度行っ  
たことがあるが、  
特に今日のような

(食べ盛りの太公望)



猛暑日には打って  
である。

※6 サクランボ  
のこと。

そして極めつけは  
その品揃えで、苺  
檸檬、西瓜、蜜柑  
、桃、葡萄、梨、

※7 味というか

無花果、林檎、黄  
桃（※6）という十

最早ただの

種類の味の中から

味のないか

選ぶことができ、

き氷。

中には水味（※7）

という一見、何の  
需要もなさそうな  
ものまであるのだ  
が、これが意外に  
も夏場の涼を兼ね  
た水分補給に一役  
買っているらしく  
、純粋な水分と涼  
のみを求める客か  
ら人気があるらし  
い。

しかも、原料が水  
だけだからなのか  
、値段は他の味付  
きのものよりも格  
段に安く、リーズ  
ナブル。

それにしても、あ  
の店のかき氷の味  
の中には今の季節

には取れない果物もあるはずなのだがどうやって調達しているのだろうか？

・なんか、木陰で涼んでる時に、上を見たら、白くて綺麗な着物のお姉さんが木に上って休んでたけど、あれってあの氷の妖精だったんだね。

(寺子屋帰りの子供)

・なんか、前に見た時と姿が違うような気がするんだが……あんなに美人だったか？

(彦左衛門)

力が戻ったことで、姿もそれに応じて成長したような形をとっているそうなので、案外、元から造形は悪くなかったのかも知れない。というよりそもそも妖魔の類は皆、

※8 その方が人

間が近寄っ

て来やすい

為

総じて美男美女で  
ある場合が多い。

(※8)なので、い  
くら見目麗しいか  
らと言つてうかつ  
に近寄つてはいけ  
ない。

### 〔対策〕

非常に申し訳な  
い限りなのだが、  
以前というか、こ  
の頁の前頁で紹介  
させて頂いた手法  
をとると、逆効果  
であり、大変危険  
なので止めて頂き  
たい。

というのも、今の  
彼女は完全に力を  
取り戻し、非常に  
強力で知能もある  
ので、前項で述べ  
たような手法をと  
ると、却つて気分  
を害し、何をされ  
るか分つたもので  
はない。

注意を払つてい  
ようといなからう

と関係ないし、大抵はあのかき氷屋にいる。

簡単ななぞなぞ程度、すぐに解いてしまうし、松明をかざすなど以つての外だ。

まあもつとも、そんな松明の火など彼女にかかれば、すぐに消火され、呆れられて終わらうだろう。

しかしだからといって悲観的になることはない。

以前とは比べ物にならないほどに強くなっているが、その分理性的で、何故かは分からないが好戦的な部分が無く、争いを好まない。

なので、余程の怒りを買うようなことが無い限り無害であるばかりか有益ですらある。

そのことは数ある

目撃談からも見て  
取れる。

それに、これほど  
の者を完全に味方  
に付ければ、どれ  
ほど心強いことだ  
ろう。

ただ、妖精として  
の悪戯好きな性質は  
まだあるようで、今  
、人里に多少の貢献  
をしているのは、今  
までの行いの反省も  
あるが半分は、悪戯  
の一環であり里の者  
が急に協力的になっ  
た妖精を見て、困惑  
する様を見て楽しむ  
・・・という悪戯で  
あるのだとか。

以上が、幻想郷縁起に追加されたあたいの頁  
の全てである。あたりは阿求とも話をしたし  
、何度も縁起を見返したので、諳んじること  
もできるけれど、一回見た程度の霊夢や魔理  
沙はそうは行かないようで、思い出すのに苦  
戦していた。

そこで、やっと思い出せた一文に対して霊夢  
が、

霊「……………確か、ずいぶんと人気者だっ  
たわよね・・・妬ましいわ」

といい、それに対し魔理沙が冗談めかして

返す。

魔「おいおい・・・(笑) 霊夢・・・、どっ

かの橋姫さんみたくなってるぜ？」

霊「……………だつて！これ、絶対後々儲かつて行く奴じゃない？ダメじゃない？妖精の

癖に一丁前に繁栄しちゃうじゃない！人

気が経済力に反映されちゃうじゃない！

！……………つくうくくつ……………あああ

あああああああくく……………」

魔「なあ誰か助けてくれ。親友がみすぼらし

さと貧しさとみつともなさを全開にしな

がら頭抱えて蹲り出したんだが……………」

魔理沙が割りと本気で助けを求める目であ

たいを見る。(見るな見るな)

霊「ううつ・・・冗談よ・・・でも、そうね

・・・他にも印象的だったのは、何度も

自分を殺したつてくだりとそれをする過

程で身に付いた学習はんそくわざみたいなする程度の能力ぐら

いなんだけど？」

魔「後、お前よりも里の人から親しまれてる

所だろ？(笑)」

霊「そこはもういいのよっ……………!!……………

つていうかしつこい!!」

うん、本当にしつこい。いい加減にして貰

いたい。

魔「でも……………それが一体なんだつて言う

んだぜ……………？

過去のチルノに知識を与えたことと・

……………この状況に何の関係が……………」

そこで霊夢が何かに気付いたようにはつと

なった。

霊「!!!」

……この事態を予測していたとで

も言うつもりじゃないでしょうね」

あたかもその結論に至っていた。

にわかには信じがたいが、もはやそれくらいしか思いつくものがない。

だがそれだと分からないことがある。

そして当の本人も、

紫「ご名答♪……その通りよ、霊夢……」

とあっさり認めた。しかし、それに対し彼女の従者が声を上げる。

藍「しかし、それでは、事態がここまで進行

する前に食い止められたはずではありませんか。

せんか。何故そのようにされなかったの

です？」

霊「そうよ!!……分かってたんなら何と

かできたはずでしょ!!」

紫「いいえ、それが無理なのよ」

魔「どういう事だぜ……?」

魔理沙が疑問を口にしたところで、紫と目があつた。

明らかにこちらを見透かすような視線を送つたあと、あたいに話を振った。

紫「貴方はもう気付いているでしょう?……

……チルノ」

そこで全員の視線があたいに集まる。とは

いえ、霊夢も魔理沙も他のみんなも既に気付いたようで、あたいはその答え合わせの為に考えを口にした。

チ「……予測といつても具体的じゃなく、何処で何が起きるか、いつ起きるのか

正確には分からなかったってことでしょ？」

あたいがそれを口にするのと皆も納得したようだった。

同じことを考えたのだろう。それはそうだが、予測できたのに未然に防げなかったと言うのであれば最早それくらいしかない。

紫「そう・・・私が視たのは幻想郷が荒廃していくイメージ・・・」

空が闇に覆われ、地は裂け、水は濁る：

：そんな典型的とも言える滅びのイメージ

ジよ・・・まあ、いつ起こるかは大まか

には分かったけれど・・・それでも、正

確な日時は分からなくて、大体この辺の

時期ということしか分からなかったわ」

魔「マジかよ・・・」

霊「ちよつと!!!どうゆう事よそれ!!」

紫「そんなもの、私が聞きたいわよ・・・」

そう零す紫の顔には困惑と憂いの感情が読み取れた。

幻想郷に迫る危機に流石に、戸惑いを隠せないらしい。

とここで、ここまで沈黙していた大ちゃんが疑問を投げかける。

大「でもそんな、どうやって・・・未来を視

たんですか？」

紫「今そのことはあまり問題ではないのだけれど、一応言っておくと、ふと、この

幻想郷の未来が気になってね……………この素

晴らしくも残酷で、全てを受け入れるこ

の幻想郷はどこまで存続出来るのか……………



ね、勿論いつまでも続いて欲しいけれど、それには先に待ち受ける災厄を回避する必要がある。だから、今の妖力の半分を消費して、現在と未来の境界を少し弄ってみたのよ」

大「そんな事まで可能なんですか？・・・へえ〜〜〜！」

紫「ええ、妖力の半分と引き換えに、だけれどね・・・因みにチルノに本を与えた時もこの方法のを使ったわ」

この妖怪の境界を操る能力は概念にも及ぶ、阿求の幻想郷縁起の中においても対策も防、御策の存在しないまさに神にも匹敵する力だと紹介されている。

だが、それにより新たな疑問が発生した。

魔「ちよつと待ってくれ!!・・・今の話を聞いて思い出したんだが・・・確か、お前の能力つてその存在自体を否定することもできたはずだよな」

そうなのだ。この能力の恐ろしいところは、防御も許さず一方的にその存在を否定され抹消されることにある。それを行えば、藍の話にあったようなまどろっこしい方法をとらなくとも消滅させられたはずだ。

紫「ああ、それは・・・あの影は最初から存在が不安定過ぎて否定して消そうにも中々上手く行かないのよ。」

魔「それって、逆に消しやすそうなんだが……」

紫「そこに境界があればそれをなくせば消せたりするんだけどね・・・」

あれには初めからそれが無いというか、

まるで煙を掴もうとしているみたいで」  
なるほど、どうやら初めからなくすべき境界が無ければ、存在を否定することは難しいらしい。

紫「だから、影を引き剥がすにはあの影と取り憑かれている者との間に意識と無意識の差を生み出してそこを境界として剥がすという方法をとっているの」

藍「!!・・・なるほど、だから気絶させるよう私に仰られたのですね」

紫「そういう事よ。あれには少なくとも対象の存在を飲み込む、または操る、妖力等の力を掠め取るなどの目的意識が働いている。

それに対して憑かれている者の意識を奪い、意識と無意識という差を両者の間に生み出すことでそこを起点に祓ったのよ」

魔「ってことはわざわざ境界で困ったのも……?」

紫「そう、逃がさないようにするため」

霊「・・・でも、これって偶然なわけがないわよね……」

霊夢の言う通りだ。これは完全に紫に向けた対策だ。

紫に対策できる者がいたことにも驚きだが、紫の存在を認識してそれに対応したことに何か得体の知れない寒気を覚える。

大「でも、その対策も結局消されているんじゃない、あまり意味はなかったみたいですね」

その大ちゃんの言葉に、紫は何処か不安要素を拭い切れないような険しい表情でこう続

けた。

紫「それが、そうとも言い切れないのよね……」

霊「どういう意味よ」

紫「私は、確かに消したわよ？　でもそれは存在を根底から無くしたんじゃないわ

てこの幻想郷から消したに過ぎないわ」

魔「……それがどう違うんだぜ？」

チ「つまり、この攻撃みたいなのは、この幻想郷とは違う、どこか別の次元から来ているんじゃないかってことでしょ？」

自分から口を開いたことで周囲の注目が集まり騒然となる。があたいは続ける。

チ「この幻想郷にはこんなことをできる者はいない、それを知っているあんたはこれが何処か別の世界、別の次元からのものだと考えている。だから幻想郷から消し去れても、またここではないどこか……つまりはこの影を遣わしてきた奴のところに戻るだけなんじゃないかと考えている……違う？」

あたいは、紫を真っ直ぐ見つめそう言い切った。

紫「いえ……違わないわ、その通りよ。あと、一つ言っておくと外の世界にもそんなことができる者は居なかったからこの世界にはいないことは確かね」

大「え、えつと……じゃあ……ここまでの話を要約すると……まず、八雲さん、

(紫「紫でいいわ」)　そ、それでは、紫さん……

……が幻想郷の未来を視ることで幻想郷が滅びる未来が視えたので、その危機に備える為に

、過去のチルノちゃんに術関連の知識を与えて強くして、幻想郷の戦力にしようとした。次にそのチルノちゃんを幻想郷に連れてくる。でも今回の事件が起きた、それも何の予兆も感じさせずに：だから紫さんも事前に動くことができなくてここまで事態が進行してしまっただ。

幸いだったのは、チルノちゃんが力を既に取り戻したことで・・・え？それは紫さんが？なるほど、大まかな時期は分かってたんですもんね・・・訂正します。

紫さんがチルノちゃんを元に戻すきっかけを作って、チルノちゃんに力が戻った後に異変が幻想郷の各地で起こって、私たちが襲われたのもそれが原因で、それを紫さんたちが消して回っていた時に私たちと合流・・・そして、この異変を仕組んだ人物はこの次元、世界には居らず、紫さんの存在を把握してその能力に対策を施した上で仕掛けてきた：とこんなところでしょうか？」

紫「ええ、ありがとう。事前に起こることは分かっているもそれがどのようなものか分かっていなかったから、対策を立てようがない。でも、せめて戦力を増強しようとしてそこにいる氷精を使ったのよ」

チ「・・・なるほど・・・あたいに学習の能力を身に付けさせたのは敵を分析させる為か」

紫「そう、そしてあなたにこの幻想郷の全戦力を総合してもらおうでもあるわ」

魔「えっ・・・それってまさか・・・」

霊「……………とんでもないこと考えてくれ  
ちやつて……………」

大「……………あ……………あ……………!!」

藍「紫様……………!?!」

橙「え?……………なにになに?どうしたの?」

紫の発した言葉から波紋が広がるように皆  
が思い思いの言葉を口にする。

魔「……………つたく、ごり押しにも限度つて  
もんがあんぜ!!」

紫「いつも「弾幕はパワーだぜ!!」とか言  
つてる人に言われたくないわね」

目を笑わせ、笑い交じりに紫が言う。その  
言葉の意味はつまり、あたいが幻想郷にいる  
人妖を含めた実力者たちの能力をその身に宿  
し、膨大な妖力と術式の知識を総動員して、  
幻想郷の戦力を実質二倍以上  
にしようとしたという事らしい。

紫「まあ、その二倍という数字は全員が全員  
協力してくれた場合のものだけけれど」

確かに、全員は難しいかもしれない。本当  
に曲者揃いだからだ。

だが、自分の住処を侵されると言われて黙っ  
ていられるものなど居るのだろうか。

紫「それじゃあ、あの影共をこの幻想郷から  
美しく残酷にぶっ飛ばしに行きましょうか」

チ「ちよつと待つて、あと一つだけ答えてよ」  
もう話しは終わったとばかりに、戦場に戻  
ろうとする紫達をあたいは呼び止めた。

紫は口元を扇子で隠している。

紫「……………なにかしら?」

チ「さつき言つてたよね。影を引き離すには

境界が必要だつて……ならあたいたちから引き剥がした時の境界は一体何だったの？」  
魔「そう言われりゃあ、死ぬほど苦しかったけど、気絶はしなかったな」

霊「私も同じね……」

大「私も、どうやって支配から抜け出れたかわかりません」

それは思いの強さじゃないか……？と、一同は思った。

紫「なんだ……そんなこと……それは恐らく……あなたたちを引つ張り込むと  
きに見たからわかるんだけど……霊夢、あなた影たちから魔理沙とチルノを結界で守つたりした？」

霊「……確かに、最初に魔理沙たちを影に操られた奴らの弾幕から守るために結界を張つたわ」

紫「それが答えよ。つまり——  
影と霊夢、チルノ、魔理沙との

境界は影が憑くまでの時差」

チ「!!そうか……あの一瞬、霊夢の結界が守っていたのは弾幕からだけじゃなくて」

魔「影共からもだったってわけか。流石は霊夢だぜ!!!」

霊「ま、まあ……意識してたわけじゃないけどね……／／／／」

大「えっ？それじゃあ、私は……？」

紫「あなたは……大好きなお友達が目の前で苦しむ姿を見るのが苦痛で仕方ない思いで一杯になって、その思いの強さが影との差を生んだのよ」

感心と呆れが同居したようなその言葉に一同が、やっぱり・・・と頷く心の声が聞こえてきそうだった。

紫「それでは今度こそ、行きましょう」

その一言を合図に今度こそ、その場の全員が出口に向かう為目の前の紫に付いていく。

そこで、ふと今度は紫が足を止める。

そのことに霊夢が訝しげに、どうしたのよ、と問いかける。

紫「・・・あらあら、懐かしい気配がすると思つたら・・・」

と眩きながら何もない虚空を見つめる紫に、一同が首を傾げていると、おもむろに扇子を視線の先に掲げ、すううーっつと円を描くように動かした。

するとそこに、薄紫色の光が浮かび、その中に一人の妖艶な雰囲気的美女が立っている映像がうつし出された。

その姿は、胸元の空いた黒のドレス姿であり、髪型は永遠亭の姫やスターと似ているが長い髪を後ろで束ねている。紫とはまた違った意味で妖しさを持つ女性である。

その表情は微かに憂いを帯びていた。

？「・・・久し振りね、紫・・・」

紫「・・・ええ・・・お久し振り、壱原侑子さん・・・それとも、こう呼んだ方が良いかしら・・・次元の魔女さん？」

壱原侑子Ⅱ侑

侑「侑子でいいわ、それより・・・そっちは今から何か始めるところ？」

その憂いを帯びた表情をほんの少し綻ばせ

ながら、侑子と呼ばれた女性は言葉を発した。紫「相変わらず、こつちのことをいろいろ知ってるわりに得体がしれないわね・・・。ええ、そうよ・・・まあ尤も、あなたには関係ないことでしょうけど。じゃあ、これで挨拶も済んだようだし、そろそろお暇するわ：・・・こちらも生憎暇ではないの、ごめんなさいね」

その女性は紫と旧知の仲らしかった。それにしても、映像越しだというのに凄まじい力を感じる。

一方、紫の方は何故か、侑子との会話を打ち切り、すぐに離れたそうにしていた。

それを知ってか知らずか他の者たちは映像の向こうの彼女に挨拶した。

霊「始めまして・・・私は博麗霊夢、博麗の巫女よ。とりあえず名乗っておくわ・・・ちよつと、紫・・・誰なのよこの人・・・」

魔「やあ、私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだぜ!!! うん、何というかあれだな・・・。・・・お前とはまた違った意味で胡散臭い人だな!!」

大「あ、あの・・・初めまして!! 大妖精と言います!・・・チルノちゃんの友達です! 紫さんのご友人ですか?」  
大「ちやんが侑子に挨拶をする。」

藍「見たところ、紫様のお知り合いの方とお見受けします。私、紫様の従者の八雲藍と申します。主がお世話になっております。」

藍が頭を下げる。それに続くように橙も元気に頭を下げる。



橙「お世話になっております!!! 橙です

!! 藍様の式神です!!」

あたかも一応流れに乗って、挨拶だけはしておくことにした。

チ「・・・よろしく、あたいはチルノ

・・・ただの氷精だ」

全員の簡単な自己紹介が終わったところで

、侑子が再び口を開いた。

侑「あら、これはご丁寧に・・・どこかのス

キマ妖怪とはえらい違いね……」

紫「……あら？それは私の事を言ってるってこ

とでいいのかしら？（#^ω^）ピキピキ」

平静を装っているが、その言葉に少し頭に

来たのか棘のある言葉を返した。

・・・そして心なしか青筋を立てているようにも見える。

侑「・・・え？、それ以外の意味に聞こえた

？・・・もしかして、耳が遠いのかしら？

・・・いやねえ〜っ！年は取りたくないわ

〜〜」

紫「・・・は？そっちが回りくどい言い

方をするから親切に確認してあげただけなん

だけど？」

侑「へえ〜・・・それじゃあ、この通信を

繋いでくれたのも単なる確認のため？」

紫「・・・それは貴方が一番わかっている

と思うのだけど？わざわざ私の境界操作に干

渉して、出られなくしたのはどのどなたか

しら？」

魔・大「そんなことになってたのぜ!?!」

んですか!?!」

霊「なら、どうやって出ようとしてたのよ？  
……つてかこの人が現れてから、なんか急に慌ててたわよね？」

紫「……そんなもの、この空間の主導権が私にあるからよ……あと、この魔女まじに関わると大抵、ロクでもないことになるから……」

……ならば、面会もせずに、そのまま突破すればよかつたのではないか？

そこまで考えたところで、彼女の従者がその疑問を口にした。

藍「そこまで仰られるのでしたら、そのまま無視されればよかつたのでは」

霊「そうよ!!なんで反応したの!!」  
なんかデジャブだな……。

紫「それなんだけど……一度あそこで通信しないと干渉力が弱まらないようになってたのよ。つまりはあそこで一度は必ず顔を合わせなければならぬように仕組まれてたのよ」  
侑「そうよ?でも、ひどいわ、ゆかり……ん……どうして通り過ぎようとしたのよ……?私頑張つて……絶対お話できるようにしてたのに……」

先ほどの、不気味な雰囲気におちやらけたようなものが混ざる。

不思議といつもの調子のような気がした。

紫「くう……そ……んなところで、頑張るなあ……!!……あと、ゆかりん言うな!!」

今度は取り繕う様子もなく扇子を折れるのではないかというほどに、握り締め、若干猫

背になりながら肩を震わせ叫ぶ紫。

なんだか一瞬、学ラン姿の線の細い眼鏡の少年が面白いモーションをしながら叫び、つっこむのが重なって見えた・・・うん、見なかつたことにしよう。そして侑子が一瞬、似てる・・・と呟いたのも聞こえなかったことにしよう。

侑「それに霊夢ちゃんも藍ちゃんも酷いわ：・・・さつきはちゃんと挨拶してくれたのに無視すればよかつたのにだなんて・・・よよよ・・・」

とわかりやすい泣き真似をする侑子。

霊「まあ、あれは行きがかり上なんとなく：・・・?」

藍「私も同様です。申し訳ありません」

橙「私は藍様が名乗られたので!!」

魔「まあ・・・霊夢が名乗って私が名乗らないのはありえないのぜ・・・はは・・・」

チ「あたかも・・・まあ、なんとなく流れで」

大「み、みんな!!侑子さんが可哀そうだよ!!私は・・・侑子さんのお話を聞いてみたくてです」

侑「ま、まぶしい・・・!?大妖精ちゃんの真心と優しさと純真と・・・とまあ、おふざけはこのくらいにして・・・」

素晴らしい終わると同時に最初の妖しげ且つ物憂げな雰囲気にもどる侑子。

魔「・・・って、ふざけてたのかよ!!!」

魔理沙がすかさずツツコミを入れる。その動作を見て侑子が微かに、四月わたぬき一日に似てる

わね主にツツコミの動作が……と呟いた気がした。

侑「まあ、それはともかくまずは、あたしからも改めて名乗らせてもらおうわ……私の名前は壱原侑子……偽名よ」

そこで魔理沙が、いや、偽名かよ!!!と

突っ込むと、やっぱり似てるわ……ツツコミが、とつぶやく侑子。

侑「まあ……ほかにも私を次元の魔女と呼ぶモノもいるわね……さっきの紫のように」

そういえば、先ほど紫が、侑子に対して次元の魔女と呼んだ方が良いか、と聞いていた。

侑「でも、まあどちらでも好きな方で呼べばいいわ……それには拘らないから……あと、アタシの話を聞きたいのは大妖精ちゃんだけかしら？」

その問いに最初に答えたのは、紫だった。

次いで霊夢、魔理沙、藍、橙、あたいの順に侑子が話を振っていった。

紫「……やっぱり気が変わったわ……聞いておきましょう。関係ないかもしれないけれど、もし関わっているなら今は少しでも多くの情報欲したい。……それに……あなたがここで出てくるという事には何か意味があるはずだもの…………くよくよく考えてみれば……あなたはそういう存在……今も昔も」

侑「そうね……紫……それで霊夢、あなたは？」

霊「話くらいは聞いてあげなくもないわよ？」

……それでもし、あんたが異変の元凶だったら私がぶっ飛ばす!!!」

言葉とともに大幣を侑子に向ける霊夢。

侑「おお……怖い怖い……、魔理沙は？」

魔「おいおい、霊夢が行くつてのに私が行かないなんてあるかよ……!! それに、ここまで来といて……そりや無いだろ!!」

そう言いながら魔理沙はニツと笑う。

侑「それもそうね……藍はどうかしら？」

藍「私は紫様の式ですので、主人の意向に従いますが、個人的にはお聞きしたいと思いません。それが紫様の助けとなりそうですし」

侑「忠義と信頼……それに覚悟……」

大したものだわ……橙？アナタも？」

橙「私も藍様の式なので、藍様についていきます!!!」

侑「元気がいいわね……チルノ、あなたは どうする？」

その問いかけは何故か、自身の選択に責任がうことをはつきりと感じさせる響きのよう なものを持っていた。だが、あたいは迷うことなく……

チ「勿論……聞かせてもらうよ。今度は流れなんかじゃなくて、自分の意思でね」

侑「皆の意思、確かに受け取ったわ」

これで全員に確認が取れた。とそこで紫が口を挟む。

紫「でも、なんで藍や橙にまで？あの子たちは私の式よ？私についてくるに決まっているじゃない……それに……そうでなくては式でないと言ええるわ。だって私に従わなければ力を出せないし……」

それに対して侑子が答える。

侑「それでも、それに従うか従わないかも彼女たちが決めること…できれば無理に従わせるより、自ずからついてきて欲しいでしょう？だから、こちらとしても意思を確かめる必要があったのよ。己で思考し、己でコタエを導き、従うか従わないか、この話を聞くか聞かないかをね…」

霊「…それで？全員の答えが出そろったみたいだけど？全員が話を聞く方向で」

侑「そうね…それにはまず、紫…：あなたに謝らなければならぬわ。いいえ、アナタにとりより、アナタとアナタの愛した幻想郷、総てにと言った方が正確かしらね…：その何処か物憂げな表情と自白ともとれる謝罪の言葉から、いつでも飛び出せるように準備、警戒する霊夢。尤も、その相手は映像の向こうに居るのであり、ここにはいないのだが。」

一方、その言葉を聞き、何かに勘づいたような紫が目を細めながら問いかける。

紫「それは…：一体、どういう意味かしら？」

侑「あなたたちが今、戦っているあの影たちは…：コよ」

チ「…：コ？」

魔「コ？…：コって、なんだぜ？」

霊「つていうか、異変のことを知ってんじゃない!!言ったわよね？あんたがその元凶なんだったらぶっ飛ばすって!!!」

異変に関係していると見るや、元凶と見切りをつけ、飛びかかろうとする霊夢。

それを、紫が片手で制した。

紫「待ちなさい。それに止めなさい。まだ話は終わっていないわ。あと、こんな事あんまり言いたくないんだけど・・・あなたじゃ、まず勝てないわよ？」

霊「そんなの、やってみなさい・・・」

紫「分かるのよ、次元が違いすぎる・・・第一、映像越しの相手にどうやって仕掛けるつもり？」

そのことに霊夢がはつとする。

霊「それはそうね・・・ちよつと熱くなりすぎたかも・・・冷静じゃなかったわ・・・ごめんなさい」

紫「いいのよ・・・恐らくは多かれ少なかれ皆同じ気持ちだろうから・・・止めてしまつて悪かつたわね・・・続けてちようだい？」

侑「ええ、そうさせてもらうわ・・・その、コだけけれど、訓読みではムシと読むの」

それに藍が反応する。

藍「蟲ムシ・・・！蟲毒の蟲か!!」

蟲毒・・・毒を持った数多くの動物、ムシ等を同じ容器で飼育し、互いに共食いさせ、勝ち残ったものの毒を採取して、飲食物に混ぜるなどして人に害を与える呪術。

だが、ここではその毒ではなく蟲に話の焦点が合っている。

侑「ご名答・・・そして、そのコだけけれど、あなたたちのところに遣わしたものを知っているわ」

紫「やっぱり・・・術者を知っているのね」  
何らかの情報は得られるかとは思ってい

だが、まさか術者まで特定できるとは思わなかった。尤も紫はすでに察していたようだが。これは大きい。

侑「その者の名は………」

く異界某所く

真つ暗な空間の中、鏡から映し出される映像の光が鏡とそれを見るものを空間から浮き立たせる。

その中で男は一人、自身の計画が順調に進んでいる事に満足感とその先にあるものに対する確信を感じていた。

暗い部屋の中で、その片眼鏡が光を反射し、大きく開かれた目のような印象を与える。

? 「くくくつ……動き出したか……」

だが、今回はこちらが先手を打った……

・あちらが干渉できる値も最低限になるよ

う計らった……これで、あの魔女は……

幻想郷この地に満足に手だしできなくなった。

そして……これより第二段階に移る星火シンフォ、

始めろ」

星火シンフォ 火

火「はい。第二段階に移行します」

? 「さあ………壮大なる実験の始まり

だ………この運命ながれの行く末をこの目で

見届けよう」

? 「我が名は………」

くスキマ空間／異界某所く

侑・飛「飛王フエイワン・リード……!!」





## 第十一話 氷稀

霊「ふえい……わん……?」

魔「リード?」

大「……って誰ですか?」

藍「?」

紫「……」

橙「ほえ?」

チ「……」

飛王<sup>フレイワン</sup>「リード……その名を聞いて、首

を傾げないものは誰もいなかった。

それが全く知らない人物だったからだ。

だが、これでこの異変を、いや、侵略を仕掛けているのが別の世界どころか、別の次元からの人間によるものであるということが現実のものになった。

そのことを、理解したからなのか紫はその名を聞いて驚いた表情を見せたあと、いつもの、不敵な笑みに戻っていたが。

侑「知らないのも無理はないわ……本来なら、関わり合いにすらならないはずの相手……そして、この男は世界を自らの目的のために歪めようとする、ことわり理の敵……いえ、世界の敵といってもいいかも知れない」

侑子がしばらく語っていると、紫が口を開いた。

紫「それで?その情報の対価は何なのかしら?」

ここで、また知らない単語が出てきてしまった。

(→意味を知らないという事ではない)

対価だ?!?そんなものが必要など初耳だ。

霊「・・・対価って、ちよつと、あんた!  
!うちにそんなもの払えるだけのお金あると  
思ってたんの?」

確かに、霊夢の懐では話にならないだろう

・・・が、そういう事ではなかった。

紫「違うわよ・・・お金なんてそんなも  
のを払う必要はない・・・でも、まあ場合によ  
ってはそれが対価になることもあつたかしら  
・・・兎に角、そんな金銭的なものではなく  
て、その人にとつて価値のあるものや、その  
ネガイに見合つただけの価値が同じモノを要  
求されるのよ・・・例えば、私だつた  
らこの幻想郷を手放せだとか、そんな感じ:  
...だから、ロクなことにならないって言った  
のよ」

!!・・・それが本当なら、話を聞

いたのはまずかつたかも知れない。

いや、必ずしもそうではないんだつたか。

霊「そ、そうかくくそう言うこと・・・  
それじゃあ、良かつ・・・て、良く  
なくくくい!!! それって!!私の場合、

お金を要求されるってことじゃない!!」

霊夢の神社は貧乏なので、いつもお金に困  
っているが故に、本人も金銭に対して執着が  
強い。確かにそれでは金銭を要求されかねな  
い。

でもだからってそつちに食いつくのか? 幻  
想郷を手放せの方じゃなくて?

その今にも泣きだしそうな切ない顔で悲痛な  
叫びをあげる霊夢の方に呆れを含んだ遠い目

をむけていた。

しかし、侑子からの返答は意外なものだった。侑「いいえ。今回に限り、対価は発生しないわ。こちら側に落ち度があるものに対価をもとめることはできない」

その言葉に飛びついたのは霊夢である。

その様子をその場の誰もが何か哀れなものを見るような目で見ていたのは言うまでもない。

霊「そ、そう！……ほんとに？……はあくくくよかった……でもそうよね……勝手にそっちから話しておいてそれで何かを寄越せだなんて……」

藍「ならば何故、この話を我々に？」

侑「そうね、さつきも言ったけれど謝りたいの……こちらの不注意のせいでアナタたちの幻想郷に亀裂を生じさせてしまったことを」

紫「どういうことかしら？」

侑「わたしの認識が甘かったということ……まさか、飛王フエイワンが博麗大結界と紫の概念の境界、それと幾重にも重ねられた結界で隔絶されたアナタたちの幻想郷せかいに手を出そうとするとは……完全に想定外だったわ。

でも、それだけのことをする価値が、この幻想郷にはある。彼が求める膨大な力がここには溢れ、そして眠っている」

そう話す侑子の顔はそこに悔しさを滲ませていた。

侑「精神的に発達した人々、妖怪という種族、忘れられた神々、もし、それらを手にすることができれば得られる力は絶大なもの……でも、まさかそこまでできる力があつただな

んて……」

紫「それで？話はもう終わりなの？」

その侑子の罪悪感と対価が発生しないというところに目を付けたのか、紫が更にその先をそれとなく促す。

こういう足元を見るみたいなのは好きじゃないが今は仕方がないように思えた。

侑「いいえ、これからコへの完全な対処法を教えるわ。それと力のある法具をそちらに送らせてもらうわ」

紫「なら、法具だけでいいわ。影への対処はもう分かっているから」

侑「言ったでしょ？完全な、よ……確かに、今の対処の仕方の間違ってはいない……というより、それしか方法が無いわ……でも、それだけでは不完全」

これからの影の動きへの対処？ここから先にまだ、なにかあるというのか？

紫はその侑子の言葉を聞いて、不安要素が現実になったことに顔を顰めた。

紫「成程……で、その対処法とは？」

侑「……あなたのところに蟲を操ることのできるものがあるわよね……その彼女、リグル・ナイトバグに会って、彼女の能力を『コ』にも通じるように紫、あなたの能力で

作り変えなさい……そして協力を求め、『コ』を一か所に集める」

なるほど、と思わずにはいられなかった。

確かにそれならこの世界から消えた影が飛王フエイワン

とかいう奴のところに行くことはできない。

何せ、ここに止められるのだから。

しかし、そのことに対して疑問を口にする者がいた。

霊「でも、それ何の意味があるの？その方法なら確かにそいつのところには影はいかないでしょうけど、留めておくのも限界があるでしょうし、第一、影から吸収された力は結局そいつのところに行くんでしよう？」

侑「そこはアナタの出番……霊夢、アナタは捕らえた『コ』、一匹一匹に結界を施しなさい……そうすれば、何処にも逃げられないし、力も供給されないわ」

霊「でもそれにも限界が来ると思うのよねえ……ねえ、影共を一つにまとめて結界で縛るんじやダメなの？その方が遥かに負担が少ないんだけど……」

侑「それはダメ……あのタイプの『影』は、集まると形を持つて更に強力になるし、より命令に忠実に動くから、彼からの指示で突破されてしまうわ」

藍「ですが、そこはリグルが押さええれば良いのでは？」

侑「それもダメね……能力を拡大させて『コ』を操れるといても、元々は彼が作ったもの……彼の方が影響力が強い、小さい一つ一つだからこちらが操れるのであって、寄り集まられると飛王フレイワンとの結びつきが強固になって

影響力において負けてしまうわ」

大「……なら、どうすればいいんですか？」  
とここままで、静かに聞いていた大ちゃんが質問を投げかける。

集めた影コを一体どうするというのだろう……

…あたいはそこで一つの答えを閃いたので声を上げた。

チ「……そうか、法具だね」

あたいのその声に頬を緩めたのは侑子だけでなく、紫もだった。

すでに気付いていたらしい。

侑「正解よ……でも、そのの出番はもう少し先だから、その時に説明するわ」

霊「もう、今言つときなさいよ……面倒くさいわね……」

魔「そうだぜ!!出し惜しみはよくないのぜ」  
侑「こういうのは最後の楽しみにとっておく

ものよ?それに、今説明してもややこしくなるだけだし、無事に全部の『コ』を集められるかも分からないしね。だから、今のところは回収にだけ専念しなさい」

霊「ええ、何が何でも集めてやるわよ!!博麗の巫女を舐めないことね!!」

魔「私もいるぜ!!なんととっても異変の解決者は霊夢と、この私!だからな!!」

何気に魔理沙が自分の名前だけを強調したのが気になるが……

しかし、その二人の威勢の良さは次の一言で打ち砕かれた。

侑「いいわねくく!そのやる気、活気。うちのバイトくんにも見習わせいわ……でも、まあアレを集めるのはアナタたちじゃないんだけどね……」

侑子の最後の台詞にどこぞの漫画のような盛大なズッコケを披露する二人。

霊「ちよ、ちよつと!!……どうゆう

事よ!!」

魔「そうだぜ!! 私達じゃないなら一体だれが……」

そこでふと紫を見るともうすでに気付いて居るようだった。

侑子も霊夢と魔理沙に別の仕事を振ってから、こちらの方に視線をやる。

侑「その代わりにアナタたちには別の仕事をお願いするわ。だから、集めてもらうのは……」

チ「……チルノ、そして大妖精……アナタたちよ……」

……」

大「わっわわわわわわ……わっ……わっ……わっ……私ですかあああっ……っ!!」

あたいは抗議の目で侑子を見つめ、大ちゃん……可哀そうに、取り乱してしまっている

それに心なしか顔が赤いような気がする。今にも泣きだしたいのではないだろうか。

チ「なんでだよ……大ちゃんは関係ないだろ……あたいだけいいはずじゃないか……大ちゃんを危険に巻き込むなよ……!!あたいの

親友を危険に晒そうって言うならあたいは……」この話を降りる、と言いかけたところで……

……

大「関係なくなんかないよっつ!!」

チ「!!っ……大ちゃん……」

大「チルノちゃんの気持ちは嬉しいよ……?私のことを思ってたって来てくれるんでしょ?でもだからって一人で背負い込まないで!!

……友達として、一緒に背負わせてよ!私はチルノちゃんが一人で頑張ってる時に



自分は何もしないなんて耐えられないよ…それなら、チルノちゃんの側と一緒に戦いたい!!辛いことや苦しいことも、二人でいれば半分にできる…」

大ちゃんの言葉は素直に嬉しい…  
…だが、あたいはまだ迷っていた。

大ちゃんに重荷を背負わせたくない、大ちゃんには辛い目に遭って欲しくない。

チ「でも…二人でいるから、辛いことや苦しいことも二倍になるかもしれないよ?」

大「それなら!!その分、楽しいことや、嬉しいことを私が頑張って二倍にするよ!!チルノちゃんとだったらどんなことでも分かち合いたい!!!私はどんな時だって、いつでもチルノちゃんの友達だから!!!」

その言葉を聞いた時、あたいは目から涙が溢れそうだった。

溢れて凍った涙が

宝石みたいになりそうだった。

でも、飲み込んだ。

宝石は心の中だけで充分だ。

代わりにあたいは笑顔を大ちゃんに向けた。

チ「うん…ありがとう…大ちゃん…一緒に背負ってくれて…一緒に戦おう…」

そして、絶対に勝とう!!!」

魔「ふふふっ…」

…つたく…チートカップルが…」

霊「こりや、負けたわ…主役を取られるわけね…」

藍「まあ、なんというか…おめでとう」

橙「何だかわからないけど……おめでとう!!」

紫「うふふふ……」

侑「……ふくくん……」

ニヤニヤッ……」

ん？何故か皆の様子がおかしかった。

まず魔理沙は最後のところがよく聞こえなかったし、霊夢はとりあえず、お株を奪われたからだとしても、藍の祝いの言葉だったり（橙も一緒）紫の含み笑いが、いつもの意味深なものに若干微笑ましいものを見るような、いや喜ぶところではあるんだけど、なんかそういう意味合いではないような、そして侑子の方を見ても、また顔を綻ばせていて、今度はその中に悪戯っぽさも入っている。

一体なんなんだ……？　だがこれで、一つの役が決まった。

となると後は必然的に

……

侑「さて、とても目に好いものも見れたところで、霊夢、魔理沙アナたちにやって欲しいことを言うわ」

霊「やってやろうじゃない!!!」

と意気込む霊夢。

魔「おうっ!!どんどこいつっ!!!」

それに続くように威勢よく、ニツと笑い、

次の言葉を待ち受ける魔理沙。

侑「二人には博麗神社で、捕まえた『コ』を見張っておいて欲しいの」

その、なんとというかあれだけ威勢よく出た割に地味だったことが衝撃的

だったのか、一瞬言葉を失う二人。

霊「ま、まあ?・・・神社の境内ならホームグラウンドだし?」

(いつも縁側でまったりしている)

魔「…………じゅ、じゅうようなのは…………内容の方…………だぜ? 案外これが重要な役だったりしてだな…………別にこれが、只の留守番なんじゃないかとかは…………ぜんっぜん!!…………思っていないぜ?(汗)」

(かなり思っている)

そして、その反応を見て(かなり分かりやすい)、説明に入る侑子

侑「たしかに、一見只のお留守番みたく見えるけれど、これはさつき魔理沙が言った通り、かなり重要な役…………ある意味最も辛いかもしれないわ。主に持久力的な意味で」

その言葉にほっとしたように魔理沙と霊夢が順に口走る。

魔「ホ、ホラッ!!…………いった通りだっただろ…………?」

霊「まあそうよね!!当たり前よ当たり前!」  
それには構わず、侑子は先を続ける。

侑「まず、これのキツいところの一つ目、霊夢、アナタは蟲籠としての結界の維持に集中しなければならぬということ、『コ』は常に結界から出ようとするとするから、それにも注意を払わないといけない」

霊「…………分かったわ、任せなさい!!」

侑「そして二つ目、魔理沙、あなたはその霊夢を守らなければならない。その結界に近づくとモノから…………霊夢に仇なすモノから…………でなけ

れば、結界を維持できない」

魔「……合点承知だぜ!!!」

侑「……以上よ」

ん？二つだけ？そんな空気がこの場に流れ始め、二人にも若干の気の緩みが出たところで、

侑「あと、この言葉を覚えておいて。霊夢、アナタは魔理沙がアナタを守るためにどれほどボロボロになろうとその場を離れることはできない……。逆に、魔理沙。アナタはその身がどれほど傷つこうと、霊夢を守ることをやめてはならないし、守り切らなければならぬ」

それは、その言葉はあたいたちにすら、変えようのない現実、揺ぎ無い流れであるという事をまざまざと見せられたかのような……この後に起こる未来を宣告されたかのような……それでいて、そのことに負けないで欲しいというネガイも添えられたような……そんな印象を与えた。

そして、霊夢と魔理沙に告げられたことの通りならば、あたいと大ちゃんは……

侑「そして、もしかしたら気付いているかもしれないけれど……チルノ、大妖精……アナタたちは一刻も早く、できるだけ早く、この異変を収束に導かなければならない……そうでなければ……わかるわね？」

あたいの頬を、本当に久し振りに汗が流れて、頬にある間に小さい結晶になって床？に落ちた……。

途端に呼吸が早くなり、息が上がってくる。

ハアツ！ハアツ！という自分の荒い息遣いが聞こえる。

侑子の言う意味、あたいと大ちゃんは……霊夢と魔理沙が体力を削られて力尽きる前に、影を全て集めなければならぬということだ。

それは、つまり、霊夢達の命は……あたいたちが握って……！

チ「はは……まったく、ハードだよね……」

大「大丈夫だよ……チルノちゃん……」

その時、あたいはいつの間にか親友に抱き締められていた。

なんだか……とても温かくて、安心する。

大「私たちは負けないよ……絶対に負けたりなんかしない!!!だから、こんな異変早く終わらせよう!!

それで、みんなでまた一緒に遊ぼう!!」

その言葉に何回救われたか、その笑顔に何回力をもらったか、もう数えてないけれど、でも何回でもあたいはこう返すだろう。

チ「ありがとう……あたいと、友達になつてくれて、ありがとう。支えてくれて……ありがとう」

大「もう、チルノちゃん？そういうのは全部終わってから言うんだよ？」

チ「うん……!!……ぐんっ……!!!」

あたいは気付くと目から、大粒の涙の宝石を落としていた。

ああ……とうとう堪え切れなかったか。

泣かないと決めていたのに。

霊「まったく……ちよつとちよつとくっく!!」

なんて顔してんのよ……まるで、私たちが少しも持たずに負けるみたいじゃない!!!」

魔「そうだそうだ!!何てったって、あの霊夢とこの私がやるんだぜ?向かってくる奴なんざ、全部まとめてぶっ飛ばしてやるよ!!主に私が!大丈夫だ!!大船に乗った気でいろ!!!……じゃないと逆に失礼してもんだぜ?」

全く、泣くなと言いながら更に泣かすようなこと言うなよ……そんなことを想いながら、あたいは目の涙を拭い、霊夢と魔理沙に心から感謝した。その時あたりは気付かなかったけど、藍や紫、橙も温かい視線を送っていた。侑「やっぱり、アナたちで良かった。アタシの目に狂いはなかった。最強のコンビと最友のペア……アナたちのカクゴ……確かに受け取ったわ。そして、行きなさい。過酷な試練の先にある楽園に……そして、本当にごめんなさい。私にできることは……ここまでが限界……」

そして、侑子も最初の憂いを帯びた表情に戻り、その中に罪悪感が見て取れた。

そこで、霊夢が、それに続いて魔理沙、藍、橙、大ちゃん、紫、そしてあたりもそれに続いた。

霊「そんなに謝るようなことじゃないでしょ?……まあ、確かにあんたにも落ち度があるんだらうけど、それを言うならそのスキマ妖怪だって……なんなら私だって、幻想郷に侵入を許すようなヤワな結界を張って満足していたのもたちの落ち度ってもんじゃない?

……つていうか、異変の元凶とかじゃないなら私はぶつちやけどうでも良いわ」

魔「まあ、何せそのスキマの謳い文句は、

『幻想郷は全てを受け入れる…それはそれは

残酷な話ですわ…』だもんなくく!!」

の結果、害あるモノを受け入れてりや世話ね

えぜ!!」

藍「私は紫様の式ですが、これだけは言わせて頂きます。これを機にたまにはご自分で

境界をご確認されては如何ですか？」

橙「私も藍様の式として、まだまだ修行が足りません!!こういう時にお役に立てるよう

、足を引つ張らぬように精進します!!」

大「何も、侑子さんだけが悪いわけありません。というか別に、私には悪いとも思えませんが。相手の方が予想を超えてくることだつて当然あるでしょうし、それが起きたからつて侑子さんが責められるべきとは思え無いです。

確かに、ルールはルールなんですし、それでも私は侑子さんを責められません。それどころか、感謝してもし足りないくらいです。見ず知らずの私たちのためにここまでしてくださつて…：本当ありがとうございます」

そう言つて深々と頭を下げる、大ちゃん。

それを見る侑子の顔は先ほどまでの憂いの表情に少しの嬉しさと苦しさが混ざつたようだった。

紫「まあ、霊夢の言う事にも一理あつたり、無かつたりよ（霊「いや、あるでしょ」）あなたは世の理に従つて行動してきた。今回もそれに準じて貰うので十分。別にあなたから

の謝罪は必要ないわ。まあ、その気持ちは頂いておくけれど」

チ「あたかも……侑子が悪いとは思えない。あたかも大ちゃんと同じだ……一応、感謝はしてる……ありがとう」

各々、思いのたけを述べる。それらを聞きながら、少しだけ微笑み、感謝の言葉を侑子は口にした。

……と、そこで紫が皆の斜め前方を扇子で指しながら話す。

紫「それじゃ、皆……お互い、頑張りましょう？　そこに出口を作るから先に行っていて頂戴」

霊「……あなたはどうするのよ」

紫「私はまだやる事があるから……大丈夫、そんなにかからないし、私なら終わってすぐにスキマで移動できるから」

霊「まっ、それもそうね……じゃ、できるだけ早く来なさいよね！」

紫「言われなくてもそのつもりよ」

魔「そう言えば霊夢……おまえ、かなりのダメージ負ってたはずじゃないか？　実は私もやばかったんだけど、私は回復薬を持ってきてたから何とかなったんだ。でもお前はどうかんだ？　いざことに当るって時にへばられちゃ、たまったもんじゃないぜ？」

霊「私を誰だと思ってるのよ……確かに能力の影響下にあった時はやばかったけど、外れて少しすれば元に戻るし、戦闘の疲労もこの空間は立ったままに見えて横になっているのと全く変わらないくらい楽だったから、その



状態で何時間も過ごせば流石に全快するわよ」  
そして、紫、藍、橙の八雲一家以外の全員  
が出口に向かって歩き始めた。

その時、最後尾を歩いていたあたいはふと紫  
とすれ違い様、ふと疑問が浮かんだので問い  
かけることにした。

それに伴い皆も足を止める。

チ「ねえ、紫……一つ聞いてもいいかな？」

紫「なにかしら？」

チ「紫たちがあたいたちを助けてくれた時、  
スキマの中に引っ張り込む直前のあなたの顔  
が気になつて……あの時、なんで焦つてたの？」

紫「何でつて……それは、あなたたちが影に飲  
まれる寸前だったからとは思わなかったの？」

チ「最初はそうなのかとも思ってたけど、それ  
にしては……」

紫「切り替わりが早かった？……それとも若干  
嬉しそうな顔が出てたかしら？」

やはり、何か様子がおかしかったと思った  
から質問してみれば案の定、何かあつたらしい。

チ「どっちもかな……で、それはどうして？」  
紫「本当に知りたい？」

チ「うん、まあ……ちよつと引つかかるつて  
くらいには気になつてるからね」

紫「……まあ、良いでしょう……戦いには  
万全を期して貰いたいものね……気になつて  
いたことが原因で負けられても困るもの……」  
チ「いや、そこはもう戦いの方に集中する  
けど……」

紫「実はね、あなたに憑いていた影のだけ  
れど、とんでもなく大きなモノだったのよ」

チ「……………」

紫「大きなモノというのは、この場合、見た目のことじゃなく、途轍もなく強力なものと  
いう意味よ」

紫の言わんとしていること、それはつまり  
……………

紫「そう……最初に見たときは驚いたわ……あなた、あんなに強力なモノで押さえつけられてるのに、普通に動き回っているのだからとても愉快そうな笑みを湛えながら紫はそう続けた。そうか、助けたときとその直後の表情の理由はそういう事か……………」

チ「つまり、焦っていたのはあたいの妖力ちからが予想以上に強くて、それを影に取られそうになっ  
ていたからで、そして嬉しそうだったのは、奪われる前に救い出せたからか……………」

紫「ええ、その通りよ♪ あの時流石に肝が冷えたわ……所で、氷精さん？あなた……………その力の貯蔵の為に何回死んだか覚えてる？」

チ「そんなもの、覚えていられるわけないし……………覚えてくもない」

あたいは心底忌々しそうにそう言い放った。

紫「そう……………」

チ「でも……………一分間にどのくらい死んだかなら……………印象深かったから覚えてるよ」

あたいの一言で、また場が騒然となる。

霊「ええっ!!？」

魔「マジか……………」

大「チルノちゃん……………」

藍「……………凄まじいものだな」

橙「へえ……………」

侑「……………」

紫「で、何回？」

チ「……大体五秒に一回死んでたと思うから、十二回くらいかな」

周りから息をのむ気配が伝わる。

うん、まあ……そりゃ、引くよね。

一分間に十二回も死ぬような行為を時間の続く限り、それも途方もなく長い時間ときを使ってやっつてたんだから。

紫「ありがと♡……………それで、もう質問は終わりかしら？」

チ「うん、あたいからは以上だよ……こつちこそ、答えてくれてありがとう」

そして、大ちゃんから順に、侑子と紫らに向けて出発する旨を伝える。

大「それでは、行つてきます!!!」

チ「まあ……そこそこ期待してまつてよ」

霊「紫!! あんた、この異変が解決したらあなたの奢りで宴会しなさいよね!! わかった!?!」

魔「まっそのくらいは当然なんじゃないか？

何せ幻想郷の危機を弾幕勝負関係無く救うんだからな……それ相応のリスクに対するリターンってやつだぜ!!」

紫「わかったから!!……早く行きなさい! まったくもう、気が早いことだわ……」

紫にそう促され、次々と、じやーな!、や、頑張ります!!、宴会でまた会いましょう

!!などの台詞を口にしながら次々にスキマの外に消えていく今回の立役者たち。

そしてあたいも、その一人だった。

最後にあたかも、それじゃ、また……とスキマの外に消えた。

紫 side

自身の支配する空間であるここで、私と私の従者しきとその式が、目だけの暗い空間に浮かぶ映像の中の友人と向かい合っていた。

侑「……それで？私に何か聞きたいことがあるんでしょう？紫……」

紫「先ほど、あなたはこれは自分の落ち度だから対価は発生しないと云っていたけれど……ある意味の対価はちゃんと発生しているわよね？」

藍「!?!……どういう事ですか紫様……まさかこの者が嘘をついていると？そんなようには見受けられませんでしたが……」

紫「……ええ、別に嘘を吐いていたというわけではないわ……現に、こちらからは何も渡していないのだから……そうよね侑子」

侑「ええそうね……いつも、というか大抵はアタシに何かを渡して貰う必要があるんだけど、今回はそれに当てはまらない……」

……何かを行動するときにはその行動に対する責任が伴う。その行動を選択するときと同時にいてくる結果……そういうものも対価には含まれる……それを貰ったのよ」

紫「今回でいえば、先ほど侑子が霊夢に対して宣告した、行動に対する結果……自身は境界の維持に集中し、なにがあっても動いては

ならない。魔理沙に対しては何が何でも霊夢のことを脅威から守らなければならぬ……とかそんな感じ」

藍「？……しかしそれは、そう教えられてそう行動するのですから当然というか……」

紫「そうね、例えば、目的地に向かうのに徒歩で向かうとして、そのために足を痛めるか疲れさせるといった具合に……切つても切り離せない関係にある、ということよ」

侑「その通り、その行動の代償として支払うもの……それが今回の対価ということになるわ」

その言葉を発するときの侑子は先ほどよりもどこか申し訳なさそうにしていた。

紫「でも、自分に落ち度がある手前、そのことは言い出せなかったでしょう……まあ……言わないでいてくれた方が話が単純で助かるのだけれど」

藍「それでは、チルノや大妖精に課せられた対価は、霊夢や魔理沙が力尽きる前に出来るだけ早急に影を集めること、という事になりますね」

紫「本来なら、それに加えて、侑子に対価を支払わなければならないのだけれど……」

侑「今回は……本当に信じ難いことだけれど、私が間違ったことによつてアナタたちに危機が迫り、それにもかかわらずアナタたち自身が対処せねばならないという対価を既に貰っているような状態……だからこちらが支払わなければならぬ」

紫「例の法具をわたすことと、対処法を教え

ること……ね」

侑「そういう事」

藍「……そのような裏があったのですね」

紫「ええ……ややこしいことにね……」

その事情の複雑さに私が閉口していると、

侑子から話を振られた。

侑「それで、ほかに聞きたいことはない？」

紫「まだあるわ……ここが肝心なんだけれど

……侑子、私たちはまだ存在する影カを見つけ

て、捕らえる為にあの子チルノと大妖精たちについてい

けばいいのよね？そして、「蟲ムシを操る程度の

能力」を持つ彼女……リグルを見つけ出して

能力を拡張する」

侑「そうね、それで合っているわ……まあ、

実際、どんな手法を取るかはアナタたちの自

由だけれど」

紫「でも、見つけられてない状態で、影カを

剥がしたらどうすればいいの？」

侑「それは……もうその場でアナタが消すか、

先にその子を見つけるかの二択になるわね。

でも……アナタなら見つけることも容易いはず

……問題は無いでしょう」

紫「確かに、そうね……すぐに見つけられる

でしょう。つまりは私が最初にすべきなのは

リグル・ナイトバグを見つけて保護、若しくは

影カから引き剥がして正気に戻すことね……

わかったわ」

藍「一つお聞きしても宜しいでしょうか？」

ここで藍が侑子に質問を投げかける。

侑「なにかしら？」

藍「私や紫様は影カを見つけて、剥がす役しか

できないのでしょうか？ 戦闘に参加することは？　そして、紫様の境界操作で意識を奪うこともできると思うのですが」

侑「それは、アタシに聞くよりも紫に聞いた方がいいんじゃない？」

紫「藍、それは確かに考えたのだけれど、無理だという結論に至ったわ」

藍「？……何故ですか？」

紫「その影……『コ』には私への対策がされていた。一度あの永遠亭の兎さんの影を意識がある状態で引き？がそうとしてみたのだけれど、無理だったし、意識を奪ってからやろうとしたら今度は私の境界操作を伝って私に取り憑こうとしてきたわ」

藍「そ、そのようなことがあったのならもつと早くに仰ってください!!!紫様の身に何かあったらどうするのですか!……し、しかしあの時は境界であの影を……」

自身の危険を黙っていたことを咎める私の優秀な式、流石に驚きを隠せないようだ。

紫「それは完全に閉じ込めることができたからなのと、その前段階の切り離しの時は、相手の意識が無い状態だったからよ」

私とて出来ることならばそうしたい、その方が確実に早いからだ。

だが、現実はあるの影共には私に対する創意工夫が凝らされている。

悔しいことに、条件が整わない限り手も足もでない。

しかし私はあの子達……特にチルノなら出来ると確信している。

藍「ならば、戦いに参加することは？」

紫「それはできるかも知れないけれど、精々助力する程度ね……それ以上深入りしたら却って足を引っぱりかねないわ」

藍「それでは……本当に」

紫「ええ、私たちにできるのはリグルを見つけ、能力を拡張して協力してもらおうことと影を見つけて剥がすことだけ……だから、藍、橙、頼んだわよ？」

藍「？それは一体、どういうことですか……  
……？ あ、いえ……無論、全身全霊を  
尽くすつもりは有りますが」

橙「わ、私もですかー！ー!?でも、私も頑張ります！」

橙の方は藍が用いられることは不思議に思っ  
つておらず、自身にまで話が来たことに驚い  
ている。一方藍は何故自分に任されたかよく  
わかっていない。

紫「……何度も言うようだけれど、あれには  
私への徹底的な対策が施されている。それは  
感覚に対してもそうなのよ。私にはあれがど  
こにいるのかわからない」

藍「しかし、鈴仙の時には……」

紫「あれは実はあの医師せんせいから（うどんげの様  
子がおかしい）と相談されていたから少しだ  
け気になって、彼女の内を覗いたらそこに居  
たというだけの話。そしてその覗く行為も危  
険な橋だったわ。覗くと同時に乗り移ろうと  
してきたから」

藍「なるほど……（あの時、私を試されたの  
は影カゲを見つけれられるかどうかを見るためだっ



たのか。しかしなぜ私ならできると思われたんだ？」

藍「しかし、なぜ私にそれができると？」

紫「それはあの影はあなたのような妖獣にはとても不快なモノ。もつと言えば獣達にとつて不快なのよ。つまり、あの時それと分かったのはあなたの獣の部分が反応していたからなの。獣にとつてはあの影のようなものは気持ち悪さしかないんでしょうね……まあ、私も見ていて気持ち悪いけれども敏感に察知できるほどではないわ。それと何故獣があれを嫌いなのでは、と思つたかというと、最初に隠岐奈の部下二人を運んだ時、周りには動物の気配が全くなかったから。まるで何かから逃げるかのように。その場には私とその二童子しかいなかったからよ」

藍「……よくわかりました。ありがとうございます  
います!!不肖この藍、全身全霊でお手伝い  
させていただきます!!」

橙「それなら……私も!」

紫「ええ、感じ取れるはずよ」

橙「やったああく!! 私もお役に立てる  
ように頑張りますね!!」

その全開の笑顔に藍も顔が綻んでいたのは  
言うまでもない。

その後、二三の会話をして、私たちは霊夢た  
ちのところへ向かう為、先ほど自分が作った  
出口へ向かった。

紫「それじゃあ、行ってくるわ。またね、侑  
子……」

藍「行って参ります」

橙「行ってきます!!!」

侑「ええ、行ってらっしゃい……健闘を祈るわ」

侑子にそう送りだされ、出口からスキマの外へ吸い込まれる私たち。

そうして、残った空間には侑子の移る映像だけがポツンと浮かんでいた。

侑子 s i d e

場所は日本の某所、周りをビルに囲まれたその店の中にある倉庫の更の中で、数多くの物品に囲まれながら、カガミの前に立っている。

そこで、誰にともなく、一人呟く。

侑「どうか彼女らの行く末に幸多からんことを」

そして倉庫の中に渡すことを約束した物品を探しに歩いていき、その目的の品物が目の前に現れると、それを手に取る。

侑「これも運命さだめなのかしらね……クロウ」



## 第十二話 氷京

スキマから出ると数時間前にスキマに入った時とほとんど変わらない景色が目の前に広がっていた。

ここは、あたいの作った氷球というか氷壁と  
いうか氷のドームのなかである。

既に敵はここにはおらず、外に出ているらしい。

他の三人も油断なく辺りを見回していると、  
形容し難い音共にスキマが開き、中から紫  
ちが出てきた。

その瞬間を目撃した霊夢が、到着の速さに驚く。

霊「ちよつ．．．いくら何でも早くない？」

紫「だから：時間の流れを弄ってあるって言ったじゃない．．．向こうでは結構長く話したけど、ここでの時間は一瞬なのよ。それに、その方が都合が良いでしょう？」

霊夢と紫が話している間にあたいはドームに開けた穴を直していた。

あたいと大ちゃんが逃げるために開けた穴だ。

霊夢と紫が、そりやそうだけど．．．そうでしょう？などと話している横で、魔理沙と藍も、なに話してたんだ？、今後の予定等を話していた、など話している。

そこであたいは大ちゃんが小刻みに震えているのに気付いた。

チ「．．．大丈夫？大ちゃん？」

大「．．．うん．．．うん．．．大丈夫だよ!!」

チ「嘘だよ……」

大「えっ……そんなこと……（本当は怖い、チルノちゃんが遠くに行ってしまいそうで）」

チ「本当は怖いくせに……ほらっ……」

そう言つて微笑みながら、手を差し出すあたいに大ちゃんも微笑み返し、そして手を取った。

大「ありがとう!! これでもう怖くない!

!!（私がいまここに居るのもここに立っていられるのも全部チルノちゃんのおかげ。だから、今度は、私が!!）」

大ちゃんの手を取った瞬間、自身の中にあつた不安が嘘のように消えた。

なんだかんだ言つても、あたいは親友には敵わない。

勇気づけるつもりが逆に勇気づけられてしまつている。

本当は自分が怖かつたのかもしれない。

今手を繋いでいる親友を、あたいのかけがえない仲間たちを……失うことが。

……その時、嫌な気配を全身で感じた。

そして周りを見ると、全員油断なく、あたいが向いたのと同じ方向を向いていた。

各々臨戦態勢をとる。

チ「……来たか」

大「うん……」

あたいは氷で刀を作り構える。

（大ちゃんの手を片方繋いだまま）

紫「ここからが本番よ……」

紫は今一度スキマに入り上半身だけを出し

た格好になる。

魔「任せろ!! 一気に決めてやるぜ!!」

魔理沙はミニ八卦炉を構える。

霊「ちよつと…人質いんだから加減はしなさいよ? 魔理沙…」

霊夢も大幣を構える。

藍「では…少々キツイお灸をすえるか…操られた者ではなくその奥の者にな…行くぞ! 橙!」

橙「お任せください!!!」

藍と橙もそれぞれ手を向いている方向に出し、そして構える。

.....

そして、その時は訪れた…。

バアン!! キヤラ…キヤ…キヤ…

突如、氷のドームが真ん中の頂点部分から割れたと思ったら、そこから一気に雪崩込んできた。

最初は文、次いでピース、ラルバ、リリー、サニー、ルナチャ、スターの順だった。

そう、あたいたちが向いていた方向とは上である。

そして、最初の頃とは比べものにならないほど強力な弾幕がとつさに張られた霊夢の結界を叩く。

こちら弾幕を展開しようと皆が身構える中で、あたいは大ちゃんにこう頼んでいた。  
チ「大ちゃん、あの子達のところまでとべる?」

大「うん、大丈夫だよ。任せて」  
すでに弾幕の嵐が飛び交っている。

チ「じゃあ、あたいが手を軽く握ったらそれを合図にとんでね！」

大「うん！分かった」

チ「それじゃあいくよ………せーのっ!!」

そう、一息に言った瞬間にはもう全て終わっていた。影……侑子の言うところの『ゴ』に囚われた者たちは皆、氷漬けになって地面に転がっている。

恐らく意識はないだろう。

当然、弾幕の嵐も止んでいる。

大「す………すごい!!」

驚嘆に息をのむ大ちゃんの横で血振りをするのように刀を振り払い、そのまま刀を消滅させる。

勿論、手はまだ繋いだままだ。

魔「おいおいおい………」

霊「まったく………最早化け物ってレベルじゃないわよ?」

橙「えっ………なになに?………何が起きっ………て、ええええええええええええ!!」

藍「なっ!!………まさかここまでとは………一瞬だと!? (普段の妖精相手なら私でも圧勝できただろうが、全体的に強化されている上、あの射命丸文まで居るというのに………!!)」

紫「!!つつ………ふふっ」

紫 s i d e

私は目の前で親友だいようせいの手を握る自らの作品に息を飲むとともに、高揚感を抑えながら眼

前の美しい光景に見惚れていた。  
その作品しょうじよの周りにはいくつも微細な氷が舞い、夜にも関わらず光を吸光し、微かに輝く……その情景と少女に心の中で敬意を表し、眺めながら私はつい先刻までいたスキマのなかでの会話を思い出していた。

紫

く回想く

私たちは今、私の作ったスキマ空間で他に話すべきことは無いか精査していた。

その時、ふと侑子が、

侑「ねえ、紫？ 一つ質問、良いかしら？」

紫「なあに？ 侑子」

侑「さつき……自分たちが入ると却って、あの子……チルノの足手纏いになると言っていたけれど、どうしてかしら？ ……あと……あの子の膨大という言葉ですら足りないほどの妖力は？」

紫「……侑子はさつき、あの子が氷河期に何回、死んだかを話たのを覚えている？」

侑「ええ、確かに聞いたわ。一分間におよそ十二回……だったかしら？ それがあの子の膨大すぎる力とどう関係しているの？」

紫「それを話すには、あの子が氷河時代にどれほどの妖力を持っていたかと、あの子を誰も届かない高みへと押し上げる私の計画のことを話さないといけないわ」

そうして、私はチルノ強化計画の全貌を話



始めた。

紫「まだ、あなたには話してなかったわね：  
：私は未来と現在の境界を弄って、未来の幻想郷を見た。そこで、荒廃した幻想郷の姿を見た私は、今幻想郷にいる者たちのなかで一人、というか一匹に目を付けた。

それがチルノよ。そのチルノを妖精のとある性質を使つて、強化しようと考えた。この際なぜチルノを選んだかとかは省くわ話がややこしくなるし、あとでどうせ分かることだからね。……さて、今の幻想郷に居るチルノを強化しようとしたらとてもじゃないけど時間が足りない。そこで、この幻想郷に来る前のチルノに細工を使用したの。まずは、未来と現在の境界を弄った要領で過去と現在を弄り、予め用意しておいた結界や術式を行うのに必要な書物とそれらを読めるようにするための語学の書物を、弄つてすぐそこに見えるている過去の地球……およそ24億年前の氷河時代にそれらを投げ入れた。それだけすれば、後は、氷河期が終わりを迎える頃を狙って弄りあの子探すだけ……探すのは妖力のを感知するだけで良いからそんなに掛からなかったわ……。でも、嬉しい誤算という奴ね……地球最初の氷河期の終わりを見てもまだ、あの子は作業を続けていた。恐らく、作業に夢中で気付けなかつたんでしよう。そしてさらに、二つ目の氷河時代クライオジュニアンに突入してその終末期にようやく止まった。……最初の氷河期が3億年、次の氷河期が2・2億年だったわ。そして、2・2億年の方は地球が全

面水で覆われるほどの大寒波……その時の氷精チルのの妖力は私のものを軽く超えている。

最初は私と同じくらいだったけれどね……因みに便宜上私の妖力を百とすると、妖力が最盛期のクライオジュニアン時のあの子妖力は百八十ぐらいまであった。と、ここで至極単純な計算をしましょうか……ふふつまず、一分間に死んだ……あの子が自身を術式を使って結晶の中に封じた回数が十二回……ええ、そういうこと。死んだというのは、あの子が自分の体を全部単純で純粋な妖力に変換して、結晶の中に込めたという意味。そして、妖精はそこに自身の元になる自然がある限り何度でも復活する。あの子の場合は冷氣……そして、その復活を早めるための結界も施しておいた上でそれを行った。それが十二回、次に1時間は60分で12×60、その次は1日は24時間、12×60×24、更に1年は……これはうるう年などもあるけどここでは考えずに365日だとして、12×60×24×365……ここまでざっと計算すると、530720。つまり、1年間の間にそれだけの回数、己自身を妖力として丸ごと結晶の中に込めた事になる……もう分かるかしら？でも一応言わせて頂戴……そこに、3を掛けると1592160、530720にもう一度、次は2・2を掛けると1167584、更にそれに180を掛けると210165120、1592160の方にも100を掛ける……159216000……

・最後に、その二つを合計すると……」

ここで、侑子が答えを合わせるかのように口を開いた。

侑「369381120……」

紫「ご名答♪……なんだけれど、その一位には億が入るわ……だから、正確には三京六千九百三十八兆一千百二十億よ。それと彼女は妖力の結晶を十に分けているから……結晶一つに、三千六百九十三兆八千百十二億も力が凝縮されている……実際は役割ごとに妖力の割り振り方に差があるかも知れないけれどね……そして、制御力の方は例え妖力の規模が100以下になっただとしても霊夢に弾幕勝負で圧勝できるほどに高められている」  
余りの規模の大きさに圧倒されていたのだろうか……ここまで黙って聞いていた藍が恐る恐ると言った調子で質問してきた。

藍「……まさか……そこまでは……しかし、紫様……ならばなぜチルノは苦戦を強いられていたのですか？　いくら影が憑いていようとそのような莫大で膨大な妖力を抑えきれるとは到底思えないのですが……」

紫「それは、チルノのその妖力は結晶からの供給によって成り立っているからよ。  
影はそれを阻害することで、チルノの力を抑えていたの……ちようど、池の水を田んぼに引いてくる時に堰で塞ぐようなものね……」  
藍「なるほど……それでも尚動き回ったり、剩れ相手を圧倒するとは……底が知れませんか」

紫「ふふっ……そうでしょう？」  
とそこで、侑子が話始める。その顔はどこか諦めたような、そして何かを慈しむかのような雰囲気なのが見て取れた。

侑「つまり、彼女は途方もない長い時間と、身に余るような激痛や苦痛、そしてその長い時間の中、その身を激痛に晒され続けることを対価に今の力を得たということね」

紫「そういう事」

侑「しかも、それは必然的に過不足なく等価で、その道を選んだもの彼女自身の選択……彼女がそう望んだから……あなたが本を投げ入れたのは単なる切っ掛けに過ぎないと……まったく、恐ろしいことを考えるわね……はつきり言って、反則ギリギリよ？」

紫「まあ、いいじゃない……ギリギリセーフなのでしょ？」

そういう私の目は愉悦に歪んでいたと思う。我ながら、選択の余地があったのだとは言え彼女に苦痛を強いたのは悪どいとも思うが、それでも私は幻想郷を守る立場にあるし、あの地を心から愛しているのだ。

だから仕方がなかったと諦めてもらうほかない。

く回想終了く

チルノ side

何故か、後ろから視線を感じる。ふと振り返ると紫が目を細めながらこちらを見ていた。それはまるで眩し、自分には手の届かないものを見るかのような視線だったように思う。

そして、再び前を見ながらあたいはあの激痛に塗れた日々を思い出した。

実際にそうだが、あれはもう遥か昔のこのように思う。

だが、あの痛みはまだ昨日のこのように思い出せる。あの時はもうすぐに氷河期が終わると焦っていたが、本当はそんなことはなく、ただ単に冷気に上がり下がりがあるだけで、その先もずっと続いていた。

でも、そんなことは実はどうでも良くなっていた、たしかに激痛は耐え難かったし、果てしなさにうんざりすることもあったが、それ以上にこの激痛を極めた先にあるものを見て見たくなくなってしまったのだ、どこまで貯められるのか、どこまで上がるのかと、その興味の方がいつも勝っていた……………

だから止めなかった……………

やめようと思えば、いつでも止められたはずなのに……………挫けそうになる度、もう少し先は何があるのか、という興味があたいの背中を押しした。

でも後悔はしていない、あの苦痛に満ちた日々のおかげでこの力があり、この力で守りたいものを守る……………一緒に背中を守り合える。共に戦える。

あたいはもう最強でもなんでもないけれど、皆の役に立つことができる。

それをとても嬉しく思う……………

チ「これでもう……………この場は全部かな？」

大「そうだと思うよ！チルノちゃん!!」

大「ちやんが笑顔でそう答える。」

それに呼応するように全員が周りに集まり口々に話す。

その中で紫が直ぐに作業に取り掛かる。境界で引き？がす作業だ。

霊「やるじゃない!!この調子でちやつちやと片付けちやつてよね！」

魔「やるな!!これは期待できるぜ！」

藍「…ああ、これならば、すぐにでも終わりそうだ」

橙「そうだそうだ!!やつちやえ!やつちやえ!!」

紫「それじゃ、さっそく始めるわね……」

紫が境界を操作して、射命丸文、リリーホワイト、エタニティラルバ、サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイア、クラウンピースの計七名の体から影が離れていく、それに対しすかさずお札で結界を施す霊夢。そうして、皆がこの圧勝に湧き上がるなかで、あたいはふとりリーホワイトに貸したままの放出の結晶を思い出し、それを取りにリリーホワイトの元へ行き、今は流石に返して貰わないとな……などと考えながらそれに手を伸ばした。

く異界某所く

わずかな明かりを放つ鏡の向こうでは、初勝利に沸き立つ少女たちの姿が映っている。

その中では自身が差し向けた影のような不定形な生物は捕らえられ、操っていた者たちも今は、安らかな様子で横たえられている。その者にとつては全く好ましくないような状況であるはずにも関わらず、映像を眺めるその男は不敵に口の端を釣り上げていた。

飛王・リードⅡ飛

飛「総ては……これより行われる……」

仄暗いその空間の中で彼の者の声だけが不気味に響いた。

〈博麗神社〉

藍 s i d e

……何かがおかしい。確かに、上手くいくに越したことはないのだが、何かが引っかかる。

そこで、辺りを何気なく見回してみる。

紫様が既にチルノによつて凍結を解かれた者たちの影を取り払っている……その取り払われた影が霊夢の結界に捕らえられ、地面をのたうち回るのが目に入る。

魔理沙も霊夢を守るため周囲に目を光らせている。

大妖精は処置の済んだものを介抱し、横に寝かせている……橙は私の隣に控えている。

そこでチルノの姿を探してみると、チルノは寝かされたリリーホワイトの傍に行き、何か

に手を伸ばすところだった。

それは、話にあったチルノの結晶のようだった。

だが……何かがおかしい、そう思い、そこに感覚を集中するとそこには……影の気配が纏わり憑くようにそこにあつた。

止めさせなければ!!!と思うと同時に叫んでいた。

藍「チルノ!!!それに触れてはいけない!

!!!」

だが、もう間に合わなかった。

私の声に振り向く頃にはもう、チルノは結晶それに触れていた。

チ「え?……藍、どうし……? うっ……うぐ

ああああああ!!……」

結晶から影がチルノを覆うように広がって

いき、チルノを取り込もうとする。

拙ますい!なんとかしなければ!とそう考え、

すぐに紫様と霊夢の方を見るが二人とも既に私と同じ考えに至っていたのかもう行動に移っていた。

紫様がチルノと影の間の物理的差で境界を引き、広げ、その隙間に霊夢が結界を張って、チルノを影から守る。

チ「はあ……はあっ!!……うっうぐうううっ!!」

しかし、完全には守り切れないようで、最初に触った手の部分の影はまだ付いたままだった。

……マズイことになった。

これで、チルノが乗っ取られでもしたら、勝



てるものが居なくなる・・・そのことは紫様も重々承知なようで、寸前のところで、それだけは食い止めておられる。

だが、影の方も意識の乗っ取りが難しそうだと悟ると、即座に妖力の吸収へと舵を切ったようだ。

チルノの妖力が流れていくのが分かる。

チ「あつ……あああああああ！……うあああつ……！！」

霊「あんた！！……しっかりしなさい！！」

・・・のまれんじやないわよ……！！」

紫「………くっ！！」

他の結界の維持に加え、必死にチルノを守る霊夢とチルノの意識に影が入らないように食い止めて居られる紫様。

その二人以外のものはただ見ている他に術がなかった。

魔「くそっつ！！ただ見てるしかねえのかよ！！」

大「そんなんっ………！！」

橙「ううう………」

藍「………っつ！！」

皆もただ見ていることしかできないことが歯がゆい様子だった。

斯く言う私も人知れず歯ぎしりするのを禁じ得ない。

そうして、数刻ほどたった頃、僅かな変化が訪れた。

影が辺りにバチバチとスパークしながらチルノから離れ始めたのだ。

漸く離すことに成功したのかと思い、霊夢と紫様を見るも、二人も不思議な様子でその光景を見ている。

「どうやら違うようだ……これからまだ何かが起こる前兆らしい。」

チ「うっ……うっ……くっ！」

チルノは影がやっと離れたが、相当吸い取られたのか片手で頭を抱えて立っている。

急いで、皆でチルノの元に駆け寄る。周りで、おいっ!!大丈夫か!?!等の声が聞こえる。

そこでふと、影の方を警戒してそちらを見ると、そこには驚くべき光景が見えた。

影<sup>コ</sup>「ウネウネ……ぐにやり……ぐにや

……

『うつうつ……』

「それ」はぐにやぐにやと形を捏ねていた

かとおもうと、人の形にまとまりだし、中からエコーのようなくぐもった声を発し出した。

そして、それのとった『形』は……

藍「お……おい、嘘だろう……?」

思わず震えた声が口から洩れた。

それにつられてか他の者も私の見ている方を見る。

皆の反応も似たり寄つたりのものだった。

霊「ねえ……そんな!!……う

そでしょ?」

チルノに肩を貸しながら霊夢が呟く。

魔「どうすりゃいいってんだよ……」

……こんな……」

橙「うええええええ!!……あ、あわわわわわわわっ……」

紫「・・・・・・・・・・・・・・・・」  
大「え・・・・・・・・そんな・・・・・・・・チ  
ル・・・・・・・・ノ・・・・・・・・ちゃん？」  
そう、目の前の影は何を隠そう、私たちの  
そばに今もいる、チルノと瓜二つの外見を取  
っていた。

チルノ side

・・・・・・・・・視界がぼやける、頭がクラク  
ラする。

恐らく・・・・・・・・妖力の半分近くを持って行かれて  
しまったようだ。

そうこうするうち、視界も回復してきた……  
今、あたいに肩を貸してくれているのは……  
霊夢か。

チ「ありがとう霊夢・・・・・・・・ところで、  
今状況はどうなって・・・・・・・・!？」

そう言いながら、自分でも確認しようと思  
を見たときに、あまりの不可解さに、一瞬思  
考が止まってしまった。

えっなに？・・・・・・・・あれは・・・・・・・・あたい？

一瞬のフリーズも無理もないと思うのは自分  
だけだろうか？ だって、気が付くと目の前  
にもう一人の自分が居るのだから訳が分から  
ない・・・・・・・・

しかし、それにしてもあたいよりも全身が黒  
みがかっていた。

まるでそれが、唯一あたいと「それ」の見分

け方であるとも言えるかのよう。

すると、あたいの姿をしたそれが言葉を発した。

黒チルノⅡ黒

黒「ウツウウウウ……!!アアツツ

……ココはどこだ……ワタシ……

……イヤ、アタシ……アタ……い

ハ……」

「それ」はまだ混乱しているのか、片手で

頭を抑えながら呻いている。

それをあたいと大ちゃんはただ見ているだけだったが周りの皆は先手必勝とばかりに各々の方法で攻撃する。

霊夢はお札と封魔針、魔理沙は魔法弾、藍は妖術による火球、橙は弾幕、紫はその攻撃の進行方向にスキマを作り、黒いあたいの姿をしたそいつの周りにも同時にスキマを展開し、相手の目の前まで全員の攻撃をジャンプさせて反応できないようにしていた………反応……できないはずだった。

しかし、そいつはその方向を見ていなかったにも関わらず、瞬時に黒ずんだ氷を盾のように周りに張り止めたばかりか、全ての攻撃をその盾に吸収し、その分だけ氷が成長した。

藍「そっそんな馬鹿な……!!」

魔「嘘だろ……バケモンかよ……

……!!」

霊「紫の合いの手も完璧だったはず……しかも、そっちを見ずに反応するなんて……」

橙「そ、そんなにやあ……」

紫「これは、まさか……」

大「あ、ああっ……!!」

みんなは目の前の光景に唾然としている。

紫は気付いたようだが、実際に吸い取られているあたいにはよくわかる。

あれはあたいを通じて結晶から妖力の半分近くを奪っていった。

それと同時にあたいの制御力も自身に写している。

吸収されているとき、何かを写し取られているような感覚があった。

恐らくあの時だ……とその時、あたいの姿をした黒いそいつ……黒チルノは、氷の盾を解除し前方をゆつくりと見た。

そいつの姿は、あたいと全く同じ姿で髪も服も黒く、腕や足、顔といった体の部位はふうの肌色ではあるもののどこか影がさしていた。

そして、その黒く透き通った眼を片方、片手で抑えながら、あたいのことを見るとその目が急に見開かれ、全員を言いよのない寒気と肌を刺すような殺気が襲った。

影「オマえは……お前方……

……おま……エのセイでっつ!! ナンデ

……「アタイが……っ!!」

……「コンナ」……あああああ

ああああああああああああああああ

……イ……イ……イ……痛い……

……痛い……痛い……痛い……痛い……

……痛い……痛い……痛い……痛い……

……痛い……痛い……痛い……痛い……

……痛い……痛い……痛い……痛い……

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！痛い！  
！るたい！遺体！異体！胃体！入たい！イタ  
い．．．．．

いたいイイイ

っ!! ア☒ア☒ア☒アアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

ツツツ!!!」

そいつ!!!影があたいの姿を取った、影チル  
ノとも呼べるものは激しい憎しみの籠った目  
であたいを睨み、目から黒い涙を流していた。  
そしてその涙が凍り、黒く陰った結晶になつ  
て地面に落ちると、それと同時に、叫び地面  
を蹴りながらあたいがようやく捉えられるよ  
うなスピードで突進してきた。

蹴った地面は地割れが起こり、その罅の中は  
氷が詰まっております、その上には氷の剣山が出  
来上がっていた。

しかし、霊夢たち所に影チルノが届く前にあ  
たいも奴の前に出て、突撃とともに相手が出  
していた刀の切っ先を槍の切っ先で止める。  
その瞬間辺りにキイイインツツ!!と衝撃波  
が広がる。

私は今、何が起こったのかまるで分らなかつた……。突如、目の前の奴が叫び出すと同時に走り出そうとする構えをとったかと思うと、甲高い金属音のようなものが生じ、辺りが衝撃波に包まれ、地面が削れ、砂煙が舞う。

そして砂煙が晴れるとそこには衝撃が生まれた爆心地でチルノがこちらに背を向けて、何かに氷の槍を突き付けている。

全員が状況を把握しようとしてチルノの横に回りこむと、そこには驚愕の光景が広がっていた。地面が薄く抉れたクレーターの中心で、二人の氷精が互いに寸分の狂いもなく互いの切っ先を突き合わせ、鬨ぎ合っている。

互いに一步も譲らない……。双方の刀と槍が夜の僅かな光を拾い集め、輝き、その切っ先はさらに一段と輝いていた。

そして二人の顔は一方は涙が、もう一方は汗が頬を一筋伝い、その雫が凍り、結晶となって地面に落ちる。

そんな光景に皆が呆気に取られていると、声を上げる者があつた。

魔「……。つて！見惚れてる場合か！

！早く援護するぞっ!!」

声を上げたのは魔理沙だった。しかし、その声に対しチルノが叫び声をあげる。

チ「……。ダメだ！みんなっ……。一旦下がって!!……。こいつはあたいにだ

け向かって来てるっ……!!あたいが相手をしている間に何か有効な手を考えて!!」

影<sup>チルノ</sup>「ヴウウウウー……ツッ!!!」

そうチルノが叫ぶ間にも切っ先同士はキリキリと音を立てる。するとその均衡は突如として破られる。

影チルノが刀を横に薙いだ。

恐らく痺れを切らしたのだろう。

その瞬間にすでに影チルノの姿はなく、チルノの姿もなかった。

すると突然、上空から凄まじい量の、氷と氷のぶつかる音がするそれは凍りのぶつかる音のほずなのに若干金属音、めいていた。

それがそこかしこから聞こえてきて、二人がどこに居るかはおろか、どこから聞こえているのかさえわからない。

更には空を切った剣の風圧、ぶつかり合った際の衝撃波まで飛んで来ている。

そして辺りを埋め尽くす、刃と刃の擦れ合う音、ぶつかり合う音、弾<sup>はじ</sup>き合う音……音、音、音……だが、音の来る方向、剣圧のくる方向、衝撃波の来る方向から、辛うじて二人の行く先は球形を描いていることが分かった。

恐らく、チルノが私たちになるべく被害が及ばないように図っているのだろう。

そんな中……

紫「もう、誰もこれに届かない……」

その壮絶さに息を飲み、一人眩く者。

魔「何かって言われても、どうすりゃ良いん



だ!! 影の奴に当てようとすれば・・・  
・・・あいつにまで・・・」

手詰まりな状況に嘆く者。

橙「らっ……藍様あ……」

不安げに主に助けを求める者。

藍「大丈夫だ、橙……きつと何か手があるはず……!!」

その部下を宥め安心させようとする者。

大「チルノちゃん……」

親友の身を案じ、その名を呼ぶ者。

……などはいてもその中で誰も何かいい手立てを思いつくものはなかった。

霊「まったく……簡単に言ってくれじゃない……」

そして私も、何も考え付かなかった。

いつそ二人とも結界で囲ってしまおうかとも思ったが、それで余計に戦い辛くなってしまうのは本末転倒だ。

なら、一斉に皆で二人の方向に弾幕を撃つか？ いやそれも、先ほど魔理沙が言った様に、チルノに当たるかも知れないし、影の方に当たるとしても吸収されては最悪だ。

結局何も思いつかないまま数分が過ぎたとき、一人、提案する者が現れた。

大「あ、あの……一つ思いついたんですけど……」

自然とその提案者に皆の視線が集まる。

大「……皆で一斉にチルノちゃんたち目掛けて弾幕を放ちましょう!!」

やはりそれしかないか、とはいえそれには大きな問題がある。

それによつて無理だという結論に至つた所なのだから。

だから、当然それには反論の声が上がつた。

魔「確かに、それぐらいしかないんだろっけだよ……でもそれじゃあ、あいつにあたるかも知れないし、よしんば影の方に当たつたとしてだぜ？ 吸収されちまつたらもつと悪くなるじゃねえか……」

藍「……うむ……それでは敵に塩を送るようなものだな」

橙「ううう……」

紫「……いえ、それがいいかも知れないわね」

ここで何故か紫が賛成の声を上げた。

藍「紫様!？」

紫「知つての通り、あの二人の戦いは誰かが介入できる範疇を大きく逸脱している。下手に助太刀に入ろうものなら巻き込まれるか、最悪、足を引つ張ることになるでしょう……  
……しかし、このまま手を拱こまねいて

いるわけには行かない。

ならばいつそ戦闘の手が届かないところから二人の方に弾幕を放ち、あの子に力を吸収して貰えばいい。

あの影にできて、あの子にできないはずはないし、影にもその力を取られてしまうかも知れない事を考えれば、むしろあの子チルノの方に弾幕が行つて欲しいくらいよ。

つまり……あの子のことを信じて弾幕を通じて力を渡す……そういう事でしょう？」

その最後の問いに、大妖精は強く頷いた。

その目は真っ直ぐ紫を見つめ返している。  
その目は少しの迷いも浮かんでいない・・・  
・・・澄んだ瞳をしていた。  
大「はい!!私に親友を・・・。チルノ  
ちゃんを信じます!!」  
その言動に心動かされないほど、愚かな者  
はこの場にはいなかった。

挿入歌

【東方Vocal／Traditional Rock】  
「心綺楼」

魔「さて……それじゃあ一つ派手にぶちかま  
すか!! 弾幕は火力だつてことを思い知ら  
せてやるぜ!!」

霊「……つて、ちよつと魔理沙?あんたは後  
が控えてるんだから、ほどほどにしときなさ  
いよ?……まあ、私はやるんだけどね!!」

紫「あなたこそ控えなさいな霊夢……あとは  
私に任せて結界の維持に集中したら?これに  
力を使つて結界の維持ができなくなるなんて  
笑い話にもならないわよ?」

霊「はっ!!冗談・・・私を誰だと思つてる  
のよ!!その程度でへばつたりなんかしない  
わ!!!」

魔「霊夢にできて私にできないとか、神や仏  
が許しても私が許さないのぜ!!これで全力  
を出した後も絶対に霊夢を守り切つてみせて  
やる!!」

藍「不肖、私も炉に入る炭の一片としてこの  
身を燃やすといたしましょう!!」

橙「私だつてえくくくく・・・えええー  
ーい!!私だつてえくくくく!!!」

こうして、チルノを援護するための作戦内容が決まった。

全員で、二人が戦う球状の戦場を対角線で囲み、一斉に球の範囲に向けて弾幕を放つ。というものだ。

結界に近い方が負担が少ないだろうというところで私は地上付近の配置となった。

他のみんなの配置は以下の通りだ。

まず、魔理沙は私から見て右斜め上後方の位置、ちょうど逆三角形の右の頂点部分。

次に大妖精。

私から見て左斜め上後方で魔理沙に対して水平、左の頂点部分。

そして私から見て真上に紫、三角形の頂点部分。その紫から右斜め下後方に藍が、そのちょうど点対象の位置には橙がいる。

そして、大妖精、魔理沙、藍、橙は水平に陣取り、それぞれの点を結ぶと正四角形となり、それぞれの位置を結ぶと三角形の面が八つできる要するに、早い話が正八面体である。各々が所定の位置に付くと、紫が自身の弾幕を合図にする旨を皆に伝える。

そして……

紫「みんな、準備はいいわね？……それじゃ、わたしから行くわ……結界「動と静の境界」！」

橙・藍・大・魔・霊・「仙符「鳳凰展翅」！」

「式神！」「十二神将の宴！」「妖符「エル

フィーニョ弦翔」！！「星符「ドラゴンメテ

オ」！！「宝符「陰陽宝玉」！」「……」

全員が一斉に発動したスペルカードが、既

に戦場と化していた空を煌びやかな無数の弾幕で彩った。

## 第冷話 涼利

今日のメンバーと一通りの顔合わせが済んだあと、神社の中に全員が入った。

これから素人（教師込みで）だらけの料理教室がスタートするはずなのだが……

ク「貧弱貧弱くくッ（笑）!!」

文「もうダメだあ……おしまいだあ……」

エ「計画通り……」

ホ「富士山だツツ！」

サニー「熱くなれよ!!」

スター「どうしてそこで諦めるんだ!!そこ  
でっ!!」

ルナチャ「ダメだこいつ（ら）……早く……何とか  
しないと」

大「ちよ……みんな落ち着いて……落ち着けえ  
く!!」

魔「いいぞ、もつとやれくく!!」

霊「（なんだか分かんないけど）があくくん  
ばれよおくく……」

場が何故か変な意味で盛り上がっている。

妖精たちはともかく何故文まで、変なテンションになっているのか……何が何だかわからない……（L）。

おっと、あたかも何故かこのテンションに飲まれかけているみたいだ。

そうしてみると、また変に周りが騒いでいる。

クラウンピースが文と何かで競って、それにみんなが群がる形だ。

でも、妖精の中でも大ちゃんには望みをかけてたのになくくく……まあしばらく様子を見るか。

文「勝てるわけがない!!」

ク「ホワアくくく×ツツホツホツホツ

ホくくく!!」

エ「(思い通り、思い通り、思い通り!!)」

ホ「違いますよ」

エ「急急急急ー!?」

サニー「いい夢をみよう……」

スター「悔しい……! (悔しい!) 悔しい

……!! (悔しい!!)」

ルナチャ「だがこれで良い!!」

大「わけねえだろおい!!」

魔「お、(文が) 巻き返してる、巻き返してる」

霊「へえー(、)」

どうやら、文が巻き返しているようだ。

まあ、心底どうでもいいが。

ク「く……何故だ…何故死なない!?!」

文「くくく……見くびっていたな…… (笑)」

エ「そんな(私の負ける) 世の中でいいの

かあ!!! (泣叫)」

ホ「まあ……いいんじゃないかなあ…… (笑)」

スター「素晴らしい……」

サニー「(勝利よ) 待たせたなあ!!」

ルナチャ「ご退場願おうか……」

大「れ、れ、冷静になれ…… (な、なんだか

チルノちゃんの顔が徐々に険しく……でも、

そんな顔も……/ / / /」

魔「終わったのか……?」

霊「いいや…まだ、始まってすらいない……  
つていうか目的が何か忘れてない？」

魔「え？目的って、文とクラウンピースの  
野菜の千切り対決の勝敗を全員で賭ける事  
じゃなかったっけ？」

霊「なんてアレな間違い方を……つていう  
かそんなことしてたのか（興味ないから見  
てなかった）……食材、まだちゃんとある  
んでしようね……？」

魔「まあ、千切ってるのはキャベツだけみ  
たいだから、あるんじゃないか？……いつ  
始まるのか楽しみだぜ……」  
さて、もうそろそろいいかな。

チ「お静かに」

そのどこかの「大佐兼ラピュタ王」のよ  
うな台詞と共に、部屋の温度を物理的に一  
気に7℃くらい下げる。

……やはりテンションがおかしい……調子で  
も悪いのかな。

しかし、能力の方は通常運転のようで、案  
の定皆は寒さにそれぞれ感想を漏らしなが  
ら、止まる。

文「うわっ寒っ！」

ク「うわあ……」

エ「やられたっ!!!」

ホ「さ、寒いですっ……ブルブル」

スター「ひゃあっ……」

サニー「キンキンに冷えてやがる!!!」

ルナチャ「うっうう……」

大「ううう……」

うん、若干……約二名ほどテンションがその



ままだけど、始めるとしますか。

そこまで考えて、あたいは室温をもとに戻す。

チ「はくい、おふぎけはそこまでー。不本意だがもう十分（茶番が）盛り上がっただろ？」

と、どこぞの無刀の剣士が言いそうな台詞を添えて、あたいは本題を進めることにした。

チ「あ、あとその千切りされた野菜は調理するなり、自分たちで責任を持って食すなりで処理してどうぞ」

文・ク「あ、ああく〜んまりだあく〜」

っ!!」

チ「いや、当たり前だろ……」

その一言をかなりの凄み（マジじゃない奴）を混ぜながら言い放つとその二人は（〜・ω・〜）

とした顔をしながら大人しくそれを了承した。

チ「それじゃ、始めて行くよ〜。まずみんなに作ってもらうのは親子丼です……材料

は既に用意してあるので、今から言う材料を隣の部屋から各自取って来てください。

それでは材料を言うので、材料は……

鶏肉（もも肉）卵 玉ねぎ しょうゆ みり

ん 酒 砂糖……です。あと、一人

分を作る場合のそれぞれの配分は……鶏肉は

1／2枚、卵2個、玉ねぎ1／4個、しょうゆ大

さじ1、みりん大さじ1、酒大さじ1／2、砂糖

大さじ1／2、で、水80ccはここに用意して

あるものを使用してください。それと……今言

った材料は紙を前に貼り出して置くので分からなくなったら前に来て確認するように。で

は始め！」

あたいがそう言って手を叩くと、一斉に材

料を取りに行く妖精たち。

始めに大ちゃん、それからサニー、ルナチャ、スターの三妖精、次いでピース、ラルバ、リリーが材料を取りに向かう。

そこで、なぜか文が、

文「すみません！ちよつと私もやってみてもいいですか？」

チ「…………別に良いけど、なんでまた…………？」

文「いや、実際妖精とふつうの妖怪では作る料理にどれほどの差ができるかとちよつと気になります…………」

すると、それを聞いていたクラウンピースが悪戯っぽい笑みを浮かべながら、文に対して宣戦布告した。

ク「ふっふっくん！それじゃ、あたいとどつちがうまいかで勝負しようよ！そつちの方が面白そうでしょ？ま、あたいはそこらへんの妖精とは出来が違うだろうし、基準にはならないかもだけど…………それにあんたに勝つちやうかもしれないしね♪」

文「ほう…………これはまた・・・一線を画すとはいえ妖精風情が天狗相手に大きくできましたねえ…………良いでしょう、分かりました…………ただ負けるのはあなたの方ですけどね？」

その場でしばらく二人は互いに睨み合い、火花を散らしていた。

まったく、なんでこう毎回毎回厄介なことに…………とそこで突如、二人は睨み合いを止め、残りの者たちと食材を取りに行った。そこでの去り際、居間にいる霊夢と魔理沙に向かつて、

ク・文「それじゃ、判定の方お願いね〜  
〜!」しますね!

と言いつつ残してその場を後にした。

一方の魔理沙たちはというと・・・

霊「ま、そのくらいはしましよかね。純粹

に食事だけを楽しめないのは余り頂けないけ

ど、食べれるだけましだわ」

魔「そうだな、下手なもん食わされなきや正

直何でもいいぜ」

まさか、料理教室の中に料理対決まで発生

するとは・・・

小競り合いにならなければいいけど・・・

・まあそうなりかけたら実力行使で止める

か、若しくは・・・まっ、その時考え

よう……

そんなことを考えていると、そろそろと食

材を手に数人が戻ってき始めた。

食材がなんだったか忘れてしまっている子た

ちは前にある貼り付けてある紙を見に来て、

再度確認したりしている。

そのなかで、既に食材を覚えていたのか文と

クラウンピースは全部の食材を取り終えてい

た。

その間何故か二人の間からただならぬ謎のや

る気のような何かが炎のように広がっていた。

それを眺めている間に他の子たちもどうやら

食材をは土間の中に運び終えていたようだ。

因みに食材たちはあたいが簡易的に作り出し

た氷の机に置いている。

あと鍋やその他の食器は一時的にお世話にな

っている人里の農家の方々から借りていて人

「数分存在するが当然、これが終わったら返しに行かなければならない。」

チ「それじゃ、始めていくよ。まず、鍋の中に玉ねぎと調味料と水をさっきの分量だけ入れてください」

あたいがそう言うと、皆が各々のタイミングで鍋の中に材料を入れる。

皆がすべて入れ終わるのを見計らって、次に移る。

チ「それじゃあ次は鍋を強めの中火にかけて貰うのですが、火はこのくらいが良いでしょうパチンツ」

そう言いつつ指を鳴らすと机にあらかじめ作っておいたくぼみに火が起こる。

それを見た全員からおおっ！と感心の声上がるが冷気を通して温度を操れるあたいはこのくらいは造作もないことだ。

チ「ではその火に鍋を掛けて貰って2分ほど煮ます」

皆が指示通り鍋を火に掛けるのを見渡すと、周りを見てメモを取る者、他の者の鍋が気になる者、自分の鍋を見る者など様々なものがある。

チ「この待っている間に鶏肉を一口大の大きさに切っておいてください」

そして皆が前もってあたいが氷で作っておいた包丁でそれぞれの思う一口大の大きさに鶏肉を刻みだした。

そのうちに2分がたち、皆も鶏肉を切り終わったようなので、それを鍋に入れてもらい、さらに2〜3分の間煮て、鶏肉に火を通す。

チ「はい、この間に今度は卵を溶いてもらいます。ここで卵をあまり混ぜ過ぎるとすぐに固まりやすくなってしまうので注意してください」

その指示通りに皆が卵を割ろうという中で、こういう場に一人はいるのであろう気取った卵の割り方をする者がいたので注意しておくことにした。

因みに、割った卵はこれもあたいが氷であらかじめ作っておいた器ボウルの中に入れて、卵を混ぜる菜箸も氷で作られている。

チ「ちよつと！……サニーとピース、卵を片手で割ろうとすると失敗しやすいからやめたほうがいいよ？」

サニー「大丈夫だって！確かに、家でもあんまり成功したことないけど……今日はできさうな気がする！」

ク「ふふっ……あたいがそんなミスするわけではないじゃくん!!」

一体どこからそんな自信が湧いてくるのか、あたいの忠告を二人は聞く気がないようだ。そして案の定、サニーは失敗し、卵の黄身をつぶしてしまい、殻がその中に入ってしまった。

それを他の二人の三妖精に笑われている。

(特にスター) 一方のピースはというと、両方の手で卵を一つずつ持ち、同時に割って成功していた。

それを見て素直に凄いとは思うが、料理の出来には関係しないだろう。

サニー「ううくくっ……しまったあ……」

ルナチャ「まったく……素直に言う事をきいていけばいいものを……」

スター「くくくつ……サニーったら家でもそれでやらかしてるのによくやる気になったわねw」

サニー「う、うるさいなあー！今やってみたら案外出来るかもって思っちゃったのよ！」

ク「♪♪くく」

そして各々、割った卵を混ぜ終わっていく。

そこで2、3分がたち、溶き卵を2／3ほど鍋に入れてもらうのだがその前に、

チ「いまから、溶いた卵を鍋に入れてもらいますが、その前に各自味見をして煮汁の味を調べておきましょう。そのあと溶いた卵を2／3ほど鍋に入れて蓋をしてください」

皆の作業が終わるを待って、ここで火を弱火にすると伝えて火力を弱める。

チ「このまま2分ほどしたら残りの溶き卵を加え、蓋をして強めの中火で十秒煮れば完成となります。あとはかまどで炊いてあるご飯をどんぶりによそってその上に盛り付けるだけですよ」

素晴らしいながら、この教室が始まってから同時進行で炊いておいたかまどの白米を皆に見せる。

これからしばらくして料理が出来上がった時の皆の反応は出来上がりの達成感に喜ぶ者、相手のと自分の料理を見比べる者、案外悪くない仕上がりで胸をなでおろす者、他の者の料理を見回りながらメモを取る者など様々だ。

大「チルノちゃん！お疲れ様！……それとこれ  
味見してもらってもいいかな？」

大ちゃん「今しがた作った親子丼をあたい  
に持ってきてくれた。」

チ「いいの？大ちゃん……」

大「うん!!というか食べて感想を聞かせて  
欲しいかな……なんて……」

チ「うん、わかった、ありがとう……それじ  
ゃあ、いただきます！」

大「召し上がれ♪」

あたいは氷でレンゲを作り、大ちゃんの作  
ってくれた親子丼を試食する。

チ「モグモグモグ……うん、鶏肉に火がちゃん  
と通っていてほどよく柔らかいし、卵もふわ  
とろでご飯と相性がいいね!……さすが大ち  
ゃん、満点だよ！」

大「良かった!!ありがとう!チルノちゃん  
!!」

そんなあたいたちを遠巻きに霊夢、魔理沙  
、ピース、文が見ているのをあたいは知らな  
かった。

文「あややややくく!なんだか向こうは甘々  
な感じですねくくつ!!」

ク「まあ、こっちは今からアツアツ（バトル  
的）になるところだけどね!!」

霊「ほんとねくく……ふっ……室温が上昇す  
るから勘弁してほしいわw……」

魔「全く……暑苦しいぜ……見てるこっちの  
ことも少しは考えて行動して欲しいもんだ

……! (笑)」

文「まあ……それはそうと……」

ク「ちゃんと味わって食べてよねっ!!」

魔「よっ待ってたぜ!!」

霊「安心しなさい……ちゃんと感想も交えて判定してあげるわ!」

それから天麩羅やうどん、味噌汁や炊き込みご飯、果ては団子などの甘味も作ったりして場は大いに盛り上がった。

更にその中でも文とクラウンピースの対決も中々の盛り上がりを見せ、賭け事の対象になるレベルだった。

しかし、結果は引き分けでこれではらちが明かないと部屋で弾幕勝負が発生しそうになったのには若干焦ったが、それらも含めてなかなか楽しめたと思う。

これからも、この風景が続けばいいなと思うほどには良い時間だった。

(因みに、借りた道具類は洗って乾かし元

の持ち主にすべて返し終えた)

しかし………まさかこの後あんな事になるとは夢にも思わなかったのだが。

〜後戸の国〜

隠岐奈side

薄暗い空間に緑色の木質の扉が多数浮かぶ空間、そこは嘗て……自身が起こした異変の際に迎撃や実践テスト等を行っていた空間である。

その自身の支配する空間の中で、顔を全面、



黒づくめの兜で隠した機械人形のような見た目の兵どもと、私は一人で向かい合っていた。先に言っておくが私に不可能はない。

私には新たな世界の創造や破壊（既存でも可）、後戸を開き、問答無用で生者を死に誘うことすら可能、というよりも世界の真理

（ブラフマン）であるため、世の理を書き換

えることで、初めから存在していなかった事すら可能である。

更には利用価値を見出したものには洗脳を施し、手駒にすることすらできる。

よって目の前の者どもなど取るに足らないのだが、私の部下二人（舞と里乃）が居る状態では若干面倒なので、あえて危機的状況を演出し紫を呼びに行かせるという体を取ってこの場から去らせることにした。

ついでに私への好感度も上げておいた。

まさに、お前たちだけでもここから逃げるのです！という体をとったので間違いなく上がっていることだろう。

そして紫のところに寄越すことであの二人は匿われるだろう。

そうなれば仕事がやりやすい。

さて、ではそろそろいきなり現れて（手の先に付いたかぎ爪状の武器で）切りかかってきて以来、微動だにしない人形どもをその主もろとも消し去るとするか。

摩多羅隱岐奈Ⅱ 隠

隠「この絶対秘神にたて付いたことをその存在ごと消え行かせながら後悔するがいい!!」  
？「お待ちください……」

そして、今まさにこの駒共とそれを差し向けた者を己が権能でこの世から削除しようとしたその時、私だけが支配するはずの空間でそれも、私しか居ないはずの場で、私以外の声<sup>・</sup>が辺りに響いた。

隠「誰だ？ここは私の支配する空間で……誰の入室も認めていないはずなのだが………にも関わらず私に話しかけることができるとは………どうやってこの場に干渉している？」

突如として響いてきた声に対して、そこそこの警戒心を保ちながら言葉を返すが、改めて見てみれば何のこともない私から見ればちっぽけな存在と力だったが、それでも、この場に干渉出来ているという点に於いて、気を付けておくだけの価値はあると考えた。

？「どうやってと言われましてもアナタ様のような絶対神から見てもその他大勢と変わらなような民草ができる事など、まさにカミ頼みくらいのものでございます……その絶対秘神でありあらゆる神格……それも、古今東西のあらゆる神……シヴァ、アメノミナカヌシ、ヤハウエ、天帝、盤古、ブラフマー、阿弥陀如来、ミトラなどの最高クラスの神格を側面として取り入れた真正銘の究極の秘神であるアナタ様に直接面会をネガイ出ただけです……そしてそれは聞き入れられ、こうしてお目通りが叶った次第です」

この暗い空間に響くその声とともに、目の前に淡い光円状の光が浮かび上がり、その中にどこか憂いを帯びた表情をした女性の顔がその映像の側の景色とともに現れた。

隠「お前：一体どこまで識<sup>し</sup>っている……それに、面会を願<sup>ねが</sup>っただと？面会を願<sup>ねが</sup>われたような覚えなどまるで……」

ない……とそう言おうとしたところで、記憶の隅に何か引<sup>ひ</sup>つかかった。

それは、先ほど人形どもをその送り主もろとも消し去ろうとしたその時に、数多ある扉の内の一つから、今見ているような景色のところがあつたことを思い出し、さらにはその中で今の目の前の人物が目をつむり手を合わせてまるで神頼みのような姿勢を取っていたことを思い出した。

ふん、そういうことか。

？「その様子ですと、もう思い出されたようですね」

隠「まったく……なにが『神頼み』だ……然るべき手順を踏み、私のところまで繋げたあとはその膨大な魔力と独自の解釈でこちらの空間にねじ込んできただけではないか……大方、返答がないことを承諾と強引に捉えることで、

この空間への干渉を可能にしたのだろう……そして、このタイミングなのは私の注意が目の前の人形どもに向いたその隙を狙ったからだ。それと……確かに私から見れば取るに足らないが、常人のからすれば、遥かに膨大なその魔力、よく視ればお前……次元の魔女だな」

しかもこれはその絶妙なタイミングを知っていないければまず間違はなく失敗するだろう。どのような手法か知らないが私があ<sup>あ</sup>の瞬間に人形どもに意識を向けることを知っていたのだらう……と私が密かに感心していると私の

さっきの言葉にその者は深々と頭こゝろを垂れていた。

？「その通りでございます。わたくしめは他の者から次元の魔女と呼ばれ、また自らも壺原侑子という仮の名を名乗っている者です。そして他の者達はどちらでも好きに私のことを呼びます」

まあ……こいつにならばいいか。

壺原侑子Ⅱ侑

隠「なるほど、じゃあ私は侑子って呼ぶことにするよ!!」

私の態度の急な変遷に目を丸くする魔女。

うん、やはり素はやりやすいな。

こいつはいろいろと弁えているようだし、実力もあるから問題ないだろう。

くくくつ……それに、こやつのが驚いた顔……その澄まし顔を崩せたのは気分が良い！いくらこいつでも私の素の顔は知らなかったようね。

隠「それで、私に何か用かな？なにか下らない用事だったら即この接続切っちゃうからよろしく……」

侑「意外とフランクなのですね……いや、まあそういう事もあるので……相手が相手なわけですし……それはともかくこれはとても重要な話なので、できれば切らずに……」  
隠「ああ……いいよいよw wそんな硬くならなくても！普段通りにしてもらって。その方がこつちもやりやすいからさ」

侑「ではお言葉に甘えて……そうさせてもらうわ……」

そうして相手の表情が若干柔らかくなつたのと言葉遣いが変わったのを見て、満足する。

そこで相手が改めて本題に入る。

侑「それで……話というのは今まさにアナタが葬り去ろうとしたその兵たちとその作り主に関することよ」

隠「ああ……それってあの飛王・リードとかいうこそこそした奴でしょ？ 大丈夫だつてく〜！あのくらいなら片手どころか小指の先で料理できるし、ていうか下手したら手も使わずにできるレベルwwいや、マジでww」

侑「悪いのだけれどそれは止めておいた方がいいわね」

隠「え？どうして？」

侑「その者のことをよく視てみれば、アナタならわかるでしょう」

隠「うん？……はっ……これってまさか」

侑「ええ、そのまさかよ」

侑子がうつむき加減の顔でそう肯定する。

そうか、確かにこれは厄介だ。

隠「存在が希薄……いや、曖昧か……こいつを知っている奴が少ないからか……今こいつが利用しているとある旅の一行もこいつのことは知らないみたいだしなあ……でも、一人だけ確実に知っているものがあるし、もう一人は過去にそれに被害を受けたことを覚えてい  
るし、……しかし、それにしたって少ないなあ  
……」

侑「そう、認識しているものが少なく、その存在が曖昧だから、例えばこの世から消しても

それはこの次元に於いてのこと。更に彼は『この世のどこでもないような』場に身を置いている。だから、アナタが力を使って消してしまうと、逆に：飛王フエイワンに安住の地を与えてしまうことになる」

隠「そうなたらいいよもって、奴の思う壺ってことか……これはいわば、相手が重量の軽い羽根でこちらは爆炎しか出せず、そのまま手の届かないところまで爆風で飛んでかれるようなもの……でもさ、消滅がダメなら精神を抜きとったり、力を奪ったりするのはどう？」

侑「それも、アナタが手を下すという時点で『存在の消滅』に繋がるからダメね……彼を

完全に倒すには対峙して勝つ以外にないわ」  
隠「それなら私が直接出向いて……」

侑「……ふう、それも世界の理や対価の關係が複雑に絡みあつていてもう決められた相手が彼を打倒するしかなくなっているわ」

隠「そんな理なんて私が一発で……」  
侑「書き換えようとしても、それはこの世界の前提条件を根底から覆えさなければならぬいほどに複雑……もし書き換えれば、各次元やセカイも一緒に崩壊する……それは今の幻想郷も同じ……それはアナタの望むところではないでしょう」

隠「くう……確かに、今の幻想郷を再び作れる保証はない……し、この幻想郷を失うのは惜しいか……面白い奴もいるし……」

今にして思えば、確かに奴の兵が最初に斬りかかって来てから微動だにせず突っ立つて

いたのも妙だった。

そのときは抵抗は無意味と悟って動かないのかと思っていたが、そもそも私に認識させた時点で既に細工は終わっていたとは……

それに、その時偶々、玉座でうたた寝しているところを狙われていたとはいえ、ほぼ直前になるまで出現に気付かないというところもおかしかった。

直ぐに気付いて、防げたからよかったものの、あれは存在の曖昧さ不確かさが原因だったのか。

いつもならすぐに見つけられただろうに、どうやら少し……油断してしまったらしい。

侑「でも、アナタの使いをここから逃がしたのはよかったわ。アレのおかげでこちらも手が打ち易くなった」

隠「アレが良かったの？私としてはただ面倒を避けるためだけの……ああそうか、紫の所にやっつたんだっけ」

部下二人の自身への印象を良くしようと危機を演出して、紫の元にその部下たちを送り出したのを思い出す。

確か演出に凝りすぎて、その空間から出すことしかせずに、紫の元へ直接送らなかつたんだった。

隠「それで、ソイツは……ああ、なるほどこれじゃあ、私や紫は手を出せないか……でも紫のことだから、できる奴らを集めてでもなんとかするでしょうね……ってことは、なに？私やることないじゃない……」

侑「……話が早くて助かるわ」

隠「……で、でも侑子？……あなたが私に情報  
を渡してそれで終わりってわけじゃない  
でしょう？……知ってるわよ。あなたは相手  
のネガイを叶える代わりに対価を要求する……  
……確かに今回私は願っていないけれど、  
か自分でやろうとしていたところけれど、  
うしてしまえば最後、幻想郷に仇名す敵に塩  
を送ってしまうところだった……それだけは  
避けたかった事だからね！ さあなんでもい  
くよ……ほらほら！なんかないの？」

そう、目の前の魔女は相手のネガイを対価  
を受け取ることでカナエる。

だから今回も……と思ったのだが。

侑「ええ、確かにアナタにとってはそうだし  
よね自身の大切なものに手を掛けようとす  
る者に対して、さらに何かを与えてしまうと  
ころだった……けれど、アナタ自身がさつき  
言ったように、アナタはネガイを言っていない  
かったし、それに今回のことはアタシに落ち  
度があつて、そのの收拾のために動いたに過  
ぎないから……」

隠「それでも、情報の対価は発生する……そ  
してこの場合は……私が動かないことか」

侑「ええ、その通りよ。あなたは強大無比と  
いう言葉では言い表せないほど強大だからあ  
なたが動かないことが最善……問題の解決す  
るための実力行使権が対価となる」

隠「はあく……面倒がなくていいけど……  
それじゃ、蚊帳の外でつまなく……い!!

……なんか一つでも良いから関わらせてよ……

あ、じゃあそ<sup>異変に対する関係性</sup>れをネガうから対価を教



えて！」

侑「それでは、こちらが貰いすぎる……ナニカをさせたばかりでなくその上対価まで貰うことはできない……でも、それがアタタのネガイならば……今回はそのままその役割の内容だけ教えさせてもらうわ………それにこれはアタタにとつては敵打ちにもなる………むしろそっちのほうがアタタへの対価で、これからやって貰うことのほうがアタタのネガイになるかしらね」

隠「ああ………確かに………で！ それって何々！！」

それから、侑子から私の役目について聞かせてもらった。

隠「………ふくん………そんなことかい………お安い御用だ。ありがとう！じやあそうさせてもらうね！」

侑「ええ、こんなことを言うのも変でしょうけれど、よろしくお願いするわ………でも、この程度の関わりで十分なの？」

隠「うん！ だってさあ………メタイこと言うようだけど、せっかく登場したのにやることか不思議空間で話すだけとか地味すぎいだからせめて、何か決定的なところで関わりたかったんよ………ほんとありがと………♪」  
侑「それは良かったわ………それじゃ私はこれで………」

隠「うん、ばいちゃ………」

と侑子に私が手を振り、そこで侑子と私の支配空間との通信は切れ、それと入れ替わるかのように、紫たちがやってきた。

紫「……………つ隠岐奈！大丈夫……………なんか、ずいぶんと元気そうね……………」

藍「ゆ、紫様……………これは一体……………？」

橙「て、敵は？敵はどこに……………」

隠「ああ〜！！紫〜！！ヤツホ〜！！」

心配してた風の相手に笑顔全開で話しかける。それにしても……………Ψ（、▽、）Ψケケケ

私がやられるわけ無いじゃ〜んっつ！！  
アホだなお前。

紫「あ、あなた…ヤツホ〜って、……………あなたのところの二童子が命からがら私のところに駆け込んで来て、あなたが危ないって言うものだから来てみれば……………」

藍「本人は至って無傷……………どころか……………」

橙「もしかして、普段よりも元気？」

ホクホク顔の私を見て、三人はそれぞれの感想を漏らす。

隠「いや〜〜よく来たね。三人とも！疲れただろう……………ゆつくり休んでいってくれタマエ！」

紫「いえ……………ゆつくり休んでいる暇はないのだけれど……………でも確か、あなた敵に攻められてたはずよね？……………あの二人があんな状態で嘘を言うわけがないし……………」

隠「敵？……………ああ、あまりにもしよぼすぎて、忘れてたわ……………それなら、ほら、あそこで突っ立ってるわよ？」

そういいながら私は自分の後ろを親指で指す。

紫たちからは私が影になって見えなかったよ  
うなのでついでに自身の体もどける。

すると、顔面を黒づくめの兜で覆った機械人形のような兵隊たちがそこにこじんまりと佇んでいるのが見える。

紫「あれが……でも、あれだけ？」

藍「橙、下がっていなさい！……いつ動きだすかわからない……！」

橙「はいっ!!でも大丈夫です!私も戦えます!」

隠「お二人さん、警戒しているところ悪いけど……あれ、もうずっと動いてないから、もう動かないと思うよ?まあ動きだしたところで問題にもならない。直ぐに始末できる。ましてやこの空間で私に勝とうなんて無謀もいいところだ」

藍「た、確かにそうかもしれない……では、窮地に陥っていたという話は……」

隠「ああ!あれ嘘!ちよつとあの二人に対する好感度を上げておこうかなって思ったただだから!危険を省みず、部下を逃がす上司っつ!!!一度やって見たかったのよねえくくく!!」

紫「のよねえー!じゃ、ない!!こっちがどれだけ心配したと……」

隠「あれっ?それにしてはなんか来るのが少し遅くない(笑)?」

私がからかうようにそのことに触れると紫は言葉を濁した。

紫「それは……その……やっておくべきことも出来てしまったし、あなたなら簡単にはやられないだろうと思って……でも、遅れたことは……一応謝るわ……本当に窮地に陥っていたら

助からないところだったわね…ごめんなさい」

隠「はっはっは！良いってことよ！私とあなたの中じゃん！それに、現にどうもなっていないっていうかそもそもなるわけないっていうか…いやあ…こつちこそ悪かったねえ（笑）…くくつ…」

紫「隠岐奈…あなた…全然反省してないでしよう…」

諦めの入った呆れのようなため息を吐くと

紫は本題に入った。

紫「…でも、あなたが無事だったのは大きいわ…あなたが居れば解決できないことはない…なんとと言っても究極の絶対秘神なのだから…今、幻想郷に起きている異変はこれまでのもとは違う…でもあなたの手があれば簡いち早く解決でき…」

私はその希望に満ちた紫の言葉を遮るよ

うに宣告する。

隠「ああ…そのこと、何だけど…ごめん、無理」

その言葉を聞いた紫は目を丸くして信じられないものを見るような目で呟く。

紫「え？…それは…一体、どういう…」  
隠「今幻想郷で起こってる異変ってあれでしょ？幻想郷の人妖に変な影みたいなのが憑いてるっていう…」

紫「え、ええ！…そうよ！だから、あなたにそれを…」

消してもらいたいとそう続けようとしたのであるう紫の言葉を遮り、理由を話す。

今幻想郷に起きている異変もその黒幕も私へ

の対策を講じていたこと、それにより私は今  
回動くことが出来ないということを率直に告  
げた。

隠「……………というわけで、私が何かしようと  
した瞬間、相手の存在が、私すら手の届かな  
いような別の次元に移る、ような仕掛けがさ  
れていて相手に安住の地を与えてしまうとい  
うわけ。だから私が出すと却って状況が  
悪くなる。だって、私から見て存在しないと  
なったら、誰の手にも届かないわけだからね  
……………私が何かしようとしたら即『存在の消滅』  
につながるようになってる。だから今回私  
は動かない……………なんでもできるつても考え  
もんだよねえ……………それだけ相手に警戒さ  
れちゃうし」

説明を終えると紫は、先ほどの取り乱した  
ような様子は無く、代わりに何かを考え込ん  
でいるようだった。

しばらくそうしているかと思うと徐に話し始  
めた。

紫「そう、それなら仕方がないわね……………何か  
別の手を講じるしかない……………そういう事なら、  
あとはこつちで何とかするから心配しないで  
頂戴」

隠「うん、よろしくねえ……………ま、はなから  
神頼みするなんて、良くないってことさ！あ  
！それとあの二人はどうしてる？なんかさつ  
き命からがらそっちに駆け込んだとか言っ  
たけど？あの二人に……………なんかあったの？」  
二人の安否を問うときに若干声のトーンを  
落としながら問いかける。

紫「ええ、今は命に別状はないものの、最初に見たときはかなり危険な状態だったわ。：：：そんな中でも、一人残してきたあなたのことを最後まで気にかけていたというのにあなたときたら：：：」

紫がそこで言葉を切った。

恐らく私から発せられている気に気付いたからだろう。

その傍にいただけで、死んでしまいそうになるほどの圧力をもった殺気を。

：：～  
：：：：：：：：：：：：：：～  
：：～  
たのか：～

隠「紫：～その二人を傷つけた相手に会うことができたなら伝えといてくれる？～：～『よくも、私の部下に手をかけたな～：～その報いは必ず受けさせてやる～：～それなりの苦痛を力クゴしておくことだ』ってね　～：～」

それを受けても紫は平然と立っているように見えたが、額にうつすらと汗が浮かんでいた、紫の式の藍はというと恐怖におののいて目を見開き頭を抱え、顔のみならず全身から冷や汗を流し、目からは涙を流し、歯をガチガチと鳴らし、全身をガタガタと震えさせながらハア、ハア、と苦しそうに息をしている。その藍の式である橙はというととつくに気絶してその場に倒れていた。

彼女はまだ幸せな方だろう。

耐えられる方が却って苦しいものだ。

私が相手なら尚更。

その言葉を受けて紫は

紫「ふふっ～：～あの二人のことはまだ大切なよ

うで……安心、したわ。任せておいて、必ず伝えるわ……」

と約束してくれた。

そこで出していた殺気を納め、代わりに不敵な笑みを浮かべる。

すると、藍はホツとした表情を浮かべ、その場に座り込み、橙は今気が付いたようで、体を起こし始めた。

隠「さてと、それじゃ、手を使わずに（敵を

）料理するとしますか……あ、それはそうと

紫……今幻想郷にいる氷精の件なんだけど……

……」

それから、紫たちと少し話をしてその場は解散となった。

これは、紫が霊夢たちと合流して、異変に立ち向かうちよつと前の話。







## 第十三話 氷争（序）

周りの風景が静止して見える：と言っても今はそのことが分かるような物と言えば神社の境内に立っている木から落ちる木の葉ぐらいのものだが……その中であたいと目の前のあたいそつくりの奴だけが、普段よりも早いくらいの速度で動いている。

と言っても、時間を止めているわけではない。周りのものよりも格段に速く行動し、戦っているだけだ。

だから、静止して見えると言ったし、静止して見えるそれらも僅かにではあるが確実に動いているだろう。

その中で、視界の隅に霊夢達が映った。どうやら、呆気に取られているようだ、無理もないか……自分で言うのもなんだが、これについてこられるとは到底思えない……だが、何かしらの策を練って貰わないと、こっちは相手を抑えるので精一杯なので、何も考えられない。

しかも抑えているだけでは何も解決しないばかりか、今この瞬間にも影が、幻想郷の実力者から徐々に力を抜き取ろうとしているか乗っ取ろうとしているだろう。

そして、今のあたいに考えられることがあるとすれば、相手の次の動き、さつき迄のような事実確認ぐらいである。

更にさつきから戦場がこじんまりと球の形を成すように相手の動きに対応して動くように

しているのだが、これが中々厳しい：から、突っ込むようにして長刀による正面突きがあたいに向けて飛んできた。

チ「……くっそ……つつ!!」

咄嗟に大剣で横に受け流す。

すると今度は横薙ぎが後ろから飛んできた。

それを先に読んで、振り向きざまに大剣で対応する。

その次の瞬間には相手は手の長刀を消し、代わりに足払いを掛けてきた。

それに少し態勢を崩しかけるがここは空中、足払いには逆らわずその場で回転し、上下回転すると今度は氷のナイフが目の前に来た。

それを大剣を目の前に持つてくることで再びガードする。

恐らく相手も足払いの勢いそのままに回転し手に氷のナイフを握り、突きつけてきたのだろう。

チ「……つつ!!」

そのことに若干焦りつつも、上下逆さまの体勢で氷の大剣を氷を操る能力で空中に固定、その逆さになった大剣の鏢部分、刀身と柄の差の部分に足を掛けて蹴り、上に離脱する。そして、相手もその大剣に乗り、蹴ることであたいに追いついてきた。

しかしあたいは少しの差を利用して、今度はあたいの目の前に氷の壁を作り、体を反転させてそれを蹴ることで、相手に向かって行った。

手には片手剣ほどの長さの双刀が握られてい



狂ったような笑い声をあげる影チルノ。

チ「……何が可笑しい!!」

歯を食いしばりながら問うと相手も言葉を返す。

影<sup>チルノ</sup>「お前に焦りが見える……アタイには分か

る……ククツ……お前は今ほぼ防戦一方だが

、その実、この場を早く切り抜け無ければと

焦っているということが……!!」

チ「ツツ……!!」

影のあたいが言葉を片言ではなく、流暢に

話せるようになったことにも驚いたが、それ

以上に考えを読まれたことに驚かされた。

——成長している!

影<sup>チルノ</sup>「わかる……わかるぞ……お前のその太刀

筋、動きかた……それらの機微がアタイに教

えてくる……今のこの状況はアタイの優勢だ

と!!!」

そういう終わるや否や、鎌にさらに力を入

れたかと思うと、ふつと力を抜き、あたいの

方へ足を踏み込み、後ろの足を前に出しなが

ら回転し鎌を逆袈裟に下から上に振り上げて

きた。

それに対し槍で防ぐが勢いが強く、吹っ飛ば

される。

チ「ぐっ……!!」

その際の衝撃で槍は粉々に砕け散った。

しかし、その破片を直ぐに別の武器に作り変

えて空中で体勢を変えて相手に向かう……今の

武器は手甲で手に嵌めている。

が、それは悪手だった。

相手は既に武器を鎌から鞭に変えており、あ

たいがさつき弓でやったように絶妙な制御で氷を撓しならせてそれをあたいに振りかざしてきた。

……避けようと空中で一旦静止し半身になるが、片手を鞭に絡め取られ、振り回される。

―ヒュンツツ！……パシィツ！！

影チル「……………つっりやアツツツ！！」

チ「うああっつ……………！！」

そして遠心力によって一番勢いの強いところで、鞭を消失され、そのまま投げ出される。何とか自身の後ろに氷で壁を張り、自身で線を引いた球の外には出ずに済んだが、急場しのぎに自分で作った壁に背中を強打した。

チ「があっ……は……！！」

肺の中の空気が一気に外に押し出される。

それにせき込む間に敵が目の前に迫っていた。

チ「がはっ……けほっ……ツ！！

……しまっ……」

敵は最初の長刀であたいの左肩を後ろの壁ごと突き刺した。

同時に肩を激しい痛みが襲い、目に涙が滲む。

チ「ぐっ……………ああああっつう！！」

激痛に叫び呻くあたいに、影のあたいが歪

んだ黒い笑みを湛え話しかけてきた。

影チル「どうだ……………痛いか？あぁ……………どうな

んだ……よ！！」

チ「……………つっ！！」

台詞の途中で刀を食い込ませるように動かし、痛がるあたいを愉しむ影チルノ。

その反応を悦ぶように、クヒヒツ！と卑屈に嗤うと更に話しかけてきた。

影<sup>チル</sup> 「痛いだろう？なア……だが、アタイはもつと痛かった……知ってるだろ？一緒にアレを耐えたんだからさあ!!」

こいつの言うアレとは自身を妖力として結晶に込め続けたあの日々のことを言っているということとは理解できた。

だが……

チ「……ふぎ……けるなっつ!!あの日々に耐えたのはあたいだけだ……お前はそれをただ、読み取っただけに……過ぎない!!」

影<sup>チル</sup> 「確かにねえ……、だがお前は痛みが気にならないほどに高めることに夢中になって……そしてその一方で何故こんなことをしなければならぬのかとも思っていたんだ……アタイは……その、疑問に思っていた方の人格そのものだ!!」

チ「……」

影<sup>チル</sup> 「もう十分、力は貯まったはずだ……これ以上は余り意味がない……だが

そう思っついてもお前は断行した!!」

影<sup>チル</sup> 『この先が見たい』という身勝手な好奇心で!!……それにアタイは付き合わされた!!否応なくだ!!」

こいつの主張はこちらからすれば理不尽なことを捲し立てているだけ……だが同時に、それがこの世に生み出された、影<sup>チル</sup>の全てなのだろうということも何故か理解できた。だから、こいつの中にはあたいに対する激しい恨みや憎悪の念しかない。

光と影のように切っても切り離せないが、同時に、決して相容れないのだと悟った。

ましてや相手は敵の駒から生まれている。

でも、それでもあたいは………

影<sup>チル</sup> 「だから………さア………あんたにも………味  
わって貰うよ？アタイと同じ、理不尽<sup>さいじゆう</sup>な痛み  
を……!!」

今にも泣きだしそうな顔であるにも関わらず、卑屈に歪んだ笑いを堪えるような形容し難い歪な顔で相手がそう叫ぶと同時にあたいは、刀を横から右手で叩き折った。

痛みに耐えるときに右手を傷にあてがったときに、まだ手甲が付いたままなのを見て、隙を見て刀を折ろうと伺っていたが、その瞬間がさつき訪れた。

もしかしたらワザとかもしれないがそんなことは今はどうでもいい。

折ると同時に刀の折れた方を右手でつかみ、妖力を後ろの壁ごと吸収する。

相手は刀を折られた勢いのままにその場で一回転しそのまま折れた長刀を鎌に作り変え、そのまま横に振ってくる。

まだ吸収途中だが、かまわず右手を伸ばし氷で盾を作り、防ぐ。

防いでいる間に吸収が完了し、一旦その場から離れるべく、相手が鎌で横薙ぎにして来た方とは逆の相手の内側に入りながら脇を通り抜ける。

そのすれ違い様に相手がこちらに近い方の手を鎌から離し、その手に小太刀を作り切り付けてくるが、盾で身を守る。

影<sup>チル</sup> 「!!チツ………」

また、いったん自分で決めた球の中心に向か



う。

そこで相手から挑発が飛ぶ。

影<sup>チルノ</sup>「どうしたっつ!!逃げてばっかりか

w!!………逃がすかよッ………!!」

挑発するとともに、あたいの方目掛けて、

退路を断つように、下から周り込むように後

追うあたいの姿の影。

それに向けてあたいのも迎撃する。

チ「氷符!」「アイシクルガトリング・トライ

デント」!!」

その宣言と同時にあたいの手元に氷で作ら

れたマシンガンが三つ出現する。

それらはあたいの妖力で発砲できる仕組みと

なっており、空中に浮かせて離れたところか

ら狙う事もできる。

弾はあたいの妖力で作られた氷の弾丸なので

、あたいの妖力の限り撃つことが可能。

そしてしつこい ようだが言わせてもらおうと

、弾幕ごっこにおいては当たっても相手は被

弾箇所が凍るだけだが、これはそうではなく

、被弾すると通常の銃弾のように貫通する。

しかも貫通した後は傷口から徐々に凍って行

き、凍っていく間は激痛が走る。

大体、直径にして1cmは凍る。

だが、相手は氷精<sup>あたいの</sup>と同じなので、貫通するだ

けだ。

そのガトリングガンを影チルノよりはあたいの

寄りの斜め真上と左右に展開し、三方向から

相手を狙う。

その狙いはあえて正確にはせず、ばらけさせ

、一斉掃射する。

チ「掃射!!」

掛け声とともに手を上にあげると銃軸が回転し、銃身から無数の氷の銃弾が放たれる。

……これが決まれば相手はハチの巣になるはずだが……

影<sup>チルノ</sup>「そうはいくか!!あんたにできるこ」

とは!アタイにもできるんだよツツ!!!冷

防「絶対冷域」!!」

そう叫ぶや否や、そいつの周りを氷の壁が包囲していく。

更に包囲が間に合わず、入った弾丸も全て、鎌で跳弾された。

しかし今度は、ばらけさせず一点目掛けて集中砲火し、突破を狙う……が、相手も馬鹿ではない、全て氷球に吸収され、突破するどころかこれでは相手に弾薬を与えるようなものだった。

更に氷球の中から銃口を突き出し、そこから同じように掃射を全方位に向かって撃つてきた。

影チルノ side

ふん……馬鹿な奴め、そんな豆鉄砲をいくら撃つたところで、アタイの鉛玉の糧になるだけだろうに……アタイは余裕の表情でいた。このままここに籠っていれば、あいつはさらに焦り、足元を掬いやすくなる。

そう、アタイは焦らず慌てず、じつくりと舐

めるようにあいつをいたぶっていれば、勝手に倒れてくれるのだ。

そうすれば、もっと最高の痛みを味わってもらえる……。

アタイと同じ苦しみをあいつにも……とそこまで考えて、何か違和感を感じた。

なんだ？……まあ、いい。

このまま押し切ってあいつにはここで倒れて貰うことにしよう。

……しかし、それが間違いだと気づくのにそう時間はかからなかった。

尤も気付いた時にはもう遅かったが。

いや完全敗北を免れたという意味では間に合ったが、ただそれだけだ。

影<sup>チル</sup>「!?……なんだ、この巨大

な妖力の塊は!!……下からも！」

よく感知して見ると巨大な妖力の塊が自身の氷球を挟むようにして上と下に二つあった。

上は遥か上空、下は少し離れた位置だ。

そしてそれらは成長していた。

何故だと感覚を研ぎ澄ますと直ぐに答えが分かる。

自身の放っていた、銃弾が上と下に跳弾されていた。

……まさか!!

影<sup>チル</sup>「くそツツ!!……やられた!!」

!!

そう思った次の瞬間には妖力の塊……チル

ノの氷塊が上空から落下、下からも氷塊が迫って来るところだった。

あたいはもう機銃掃射を止め、相手が周囲にまき散らしている無数の氷の弾幕を全て上と下に跳弾するように、氷の壁を張っていた。無数の弾丸の向かう先には、一つの大きな氷塊があり、その反対の真下にもあたいの何倍もの大きさの氷塊があった。

だがそつちはまるで、片方の先端が尖ったタイプのハンマーのような見た目をしていた。

そのどちらの方向にもあたいは手を向けている…右手を下に左手を上にそれぞれ向けていた。

そして、もう十分だと思つたあたいは、左手を下に振り下ろす……

それを受けて氷球の真上の超特大な氷塊が落下を始め、徐々にその落下スピードを上げる。そして最早隕石の如き速度と威力を纏いだした。

更に左手を振り下ろしたときに、同時に氷の柄を下の氷塊に伸ばして接着し、柄を両手で持ち全力で振り上げる。

ここであたいはスペルを宣言する。

チ「スペル同時発動!!氷塊!」メテオライ  
トクラツシャー!!+氷鎚「スレジハンマ  
ー」アアー!!!」

あたいは自身に来る銃弾をすべて氷壁で防ぎながら、下から氷鎚を振り上げる。

上からは隕石と化した氷塊が氷球に向かって、凄まじい勢いとスピードで落下する。

その二つからの逃げ場のない、凄まじい衝撃が氷球を襲い、木っ端微塵に砕け散った。

そう、あたいが掃射の始めに手を上げていたのはこの為だった。

最初は氷球の中に追い込んで上から普通の大きさの「グレートクラッシュ」を落とすつもりだったが、相手が全方位に撃ってきたので、それを利用して、塊を成長させる方に切り替えた。

これにより、対して力を消費せずに絶大な威力を発揮できたと思うのだが、如何せんこの程度では止まってはくれないだろう。

氷球は砕け散ったが、中の者は恐らくまだ生きているし、意識もあるはずだ。

ここで止まってくれれば

御の字なのだが……やはり、まだ止まってはくれないようだ。

影<sup>チル</sup>「やあ……アタイの複製<sup>オリジナル</sup>二元……

……上と下から氷塊でサンドイッチとはやってくれるじゃん……!!」

砕け散った氷球の真ん中で、平然と佇むようにそいつは浮かんでいた。

また振り出しに戻ってしまった。

いや、そもそも進展など最初からしていない。最初から今まで、押しては返すのシーソーゲームを続けているに過ぎ無い。

だが、それでも諦めるといふ選択肢だけは絶対に無い。

あたいはそこら中に散らばっているあたいが

だした氷塊や砕け散った氷球の破片を吸収の結晶片手に集め始めた。

相手もそれに倣うように集め始めた。

そして全て集め終わったころ、また互いの刃が交わる。

相手は手斧で、こちらは杖だ相手が上から飛び込んできたので、杖で受けるが後ろから何かが来る気配がしたので、そのまま下に落下すると、二人目の影チルノが後ろから大鎌で横に刈取る所だった。

影<sup>チルノ</sup> 「チイツ!!……おしい」

今度は分身<sup>それ</sup>も使うのか……、相手に合わせこちらでも氷で分身を作り対抗する。それぞれの分身は、あたいのほうが日本刀、相手方は長刀で先に分身<sup>あたい</sup>が仕掛け、右から袈裟懸けに斬り、それを分身<sup>あいて</sup>が長刀で流し、分身<sup>あたい</sup>はそれに対してそのまま回転し、相手の長刀を抑えつつ、相手の脳天から踵落としを見舞うがそれを見切られ、左手で捕まれ、そのまま後方に飛ばされた。

あたいたちの方は、あたいがナイフで素早く相手の懐に入りこみ、喉元に突きつけようとするが、後ろに少し下がったり、横に少しよけたりなどして躲され、逆に槍を突き入れられようとしたところをナイフで流し、再び距離を取った……

とそれと入れ替わるようにあたいの分身が空中で前転しながら投げ入れられてきて、その勢いのままに足に氷でブレードを履くように作りながらそのまま足で影チルノ<sup>ほんたい</sup>に斬りかかった。

一方あたいのほうには分身の方のあいつが現れ、長刀で上段から切り込まれた。

それをナイフで流し、右に飛ぶが相手はそのまま自分の刀を流し、自身が回転してあたいの右から真横に剣を薙ぐ、それをもう片方のナイフで上に跳ね上げ、そのナイフをそのまま相手に投擲する。

相手がそれを避ける間に相手の懐に入りこみ、もう一つのナイフで相手に切り付けようとするも相手から横薙ぎに回し蹴りを貰い、それを足でガードしつつ飛ばされるのに任せて再び距離を取る。

それからはお互いに相手と距離を取っては接近し、少しの近接戦闘の後また距離を取り、互いに飛び込みあつて切り付けながらすれ違ふの繰り返し……それらを、何百と続けた。

更には互いの分身の数も五体が増えたことで切り結ぶ回数も格段に増えた、使った武器も多岐に渡る。

弓矢、大剣、長刀、短刀、片手剣、双剣、手甲、斧、手斧、鎌、大鎌、鎖鎌、鞭、槍、鎚、……etc中には大振りのブーメランまである。

そんな打ち合いを何百と続けていると、ある時、球の外側が計六点もの気配にいつの間にか囲まれていた。

そのどれも覚えのある気配だったので安心する。

霊夢たちが何か考えてくれたようだ。

囲っている六つの点とは霊夢たちのものよ  
うだ。

そして、最初の方とは逆にあたいが鞭で相手

(本体)の大鎌を絡めとって奪ったとき、事態は動いた。

霊夢たちの弾幕があたいが決めた球せんじょうの方へ、(あたいたちの速さに比例して)スロー再生のようにこちらに向かって撃ち出されて来ている。

こんなスピードじゃ、逆に相手に力を与えるようなもの……とそこまで考えてハツとする。あたいには霊夢たちの意図するところを察することができた。

なるほど、そういう事か！

チ「有難う：!!後はあたいに任せろ!!」

そのセリフの言い終わらないうちに、あたい

いは弾幕の方へ高速飛行する。

影チル「?……!!!」

それを受けて、影チルノも事態を察したのかあたいに倣って、弾幕の方へ飛ぶ。

あたいたちのそれぞれの分身(あたいと影のを合わせて十体)も弾幕を吸収するべく球の外殻へ飛ぶ。

そのラインでから外に相手を出さないように牽制しつつ、弾幕をエネルギーとして吸収するようあたいとその分身は動いていた。

魔理沙 side

私は今驚くべきものを見ている。

私はレーザー型の弾幕、藍は十二もの魔法陣からの弾幕、霊夢は陰陽玉の形をした霊弾、紫は大玉と周囲に小弾をまき散らす使い魔、



橙は自身の周りに出した魔法陣から楔型の弾、大妖精は自身を中心に矢の先端のような弾幕を展開し、

目の前の球状の空白に向けて撃っているのだが、さつきからその空白が弾幕で埋まることが無いどころか、ただの一つもどんなに小さい弾幕でさえもその空間の中に入って行かず、すべて球状の空白の中に吸い込まれるように消え、その球状の場所だけが空白でそれ以外でしか弾幕が飛んでいないという異様な光景が広がっていた。

つまりは、私たちの放った弾幕を二人が全て吸収しているという事だろう。

先ほどから、スペカ以外にも通常弾幕も撃っているというのに、それらも全て<sup>と</sup>摂っているのだろうか。

空白の球のなかには、弾幕のどの字も見当たらない。

……………それほどに何も無かった

魔「おいおい、マジか……弾幕を全部当たりに行つて吸収するとか、避けるより難しいんじゃないの？ ていうか、そもそも弾幕は当たりに行くもんじゃねえけど……」

ここで三十秒が経過し、皆が新たなスペカを発動する。

今はスペカ戦じゃないけどこれはもう癖のようなものなので仕方がない、とここで勢いがついたので、藍と紫がスペカを同時に二枚発動させた。

なのでそれだけで四枚発動したことになる。飛ばしてんなあ……。

まあ、私も同じようなものだが!!

藍「スペカ同時発動 式輝「四面楚歌チャ-

ミング」、式輝「狐狸妖怪レーザー」!!」

紫「同時発動……、魍魎「二重黒死蝶」、紫奥

義「弾幕結界」

魔「私も続くぜ! 魔符「スターダストレヴア

リエ」!! 魔空「アステロイドベルト」!!」

霊「ああもう……だから……飛ばすなつての!!

夢符「封魔陣」、符の壺「夢想妙珠連」!」

橙「おおおおおーりーりやーりーりーっ

っ!! 仙符「屍解永遠」!! 陰陽「清明大紋」

!!」

大「風符「妖精歡喜弾」! 怪符「グレムリン

光架」!!」

まさかの全員スペカ二枚同時発動で、合計

12枚のスペカが同時に発動された。

しかも、大妖精が最後に発動したものは、瞬

間移動で自身のものを含めた弾幕

を跳弾するものだったようで、全員の球から

外れた弾をはじき返し、全ての弾を球の中心

へと集めていた。よし、あとは頼むぜ! チル

ノ!!

く異界某所く

薄暗い空間のなか一人で座するには少々大き

い椅子に腰かけ、肘をつく男が目の前のカガ

ミの中の映像を見ている。

その男の口元は自身の筋書き通りに事が運び

、満足げな笑みが浮かんでいる……………

かのように思われた。

が、実際はそうではなかった。

男の額には汗が浮かび、無表情の中にも苦悶が見て取れる。

その答えは単純明快だった。

あのチル<sup>水</sup>ノ<sup>精</sup>の姿を模した影は今、この男の思惑通りには動いていないからだ。

それもそのはず、あれは操るには少々力が大きすぎ、自我も強い。

せめて自我……意識の方だけでも、弱まらない限り、この男でも操るのは至難の業だった。

飛「くっ……やはり、あれほどの力は、そうそう思い通りにはならないか……

・・ならば、今は待つしかあるまい」  
今はまだ、時を待つしかない、対象が御し

やすくなるその時を……  
様々な策を弄するその男は虎視眈々とその時  
が来るのを待っていた。

チルノ side

あたいは今、手を応え感じていた。

みんなの力が弾幕を通じてあたいの中に流れ込んでくる。

今、みんなの弾幕を多く吸収できているのは、あたいとその分身たちだ。

あたいはなるべく相手が外に出ないよう外を背にしながら戦っているので、弾幕に近い。

それは分身もそうだった。

だから必然的にあたいたちが多く獲得するの

は、当然の理と言える………  
だが相手も負けてはいなかった。  
うまく弾幕を得られるように立ち回り、あた  
いたちに追いつこうとする。

リーチの大きい武器を振り回し弾幕を少しで  
も多く吸収したり、先ほど言った大振りのブ  
ーメランを投げるなどして回収しつつ攻撃す  
る、あたいの分身一体に対して、複数体で攻  
める、など工夫を凝らす、そのどれもがあ  
たいにもできる事なので、弾幕集めは、上が  
り下がりはあるものの総合的にあたいが頭一  
つ出た状態で平行線をたどっていた。

その時、あたいが球のラインぎりぎりを陣取  
って弾幕を回収していると、影チルノとその  
分身が二体であたいに向かって飛来してきた。

分身Ⅱ分

影・分チルノ「おおおおおーおーおーツツ！」

！  
！

一方は太刀、もう一方は大ブーメランで、ブ  
ーメランを持った方が先にあたいに向けて投  
擲する。

それを難なくよけるが、あたいのすぐ後ろに  
来ていた（妖・霊・魔）弾を回収されてしまっ  
た。

その間に太刀を持ったほうがあたいに迫る。  
それをあたいは大鎚で迎え撃つ。

あたいが大鎚を振り下ろし相手はそれを躲し  
て背後を取ろうとするが、あたいは振りおろ  
した。

大鎚の柄をそのまま立てて固定し、その柄を  
軸に両手で回転して、相手の脇に蹴りを見舞

って吹っ飛ばす。

影チルor分「!!!……っ」

武器を大剣に変え相手の吹っ飛んだ方向に自身も飛んで追撃する。

相手に対して横薙ぎに大剣を振り盾で防がれるが構わずそのまま球の中心へ吹っ飛ばす。

そしてそれはどうやら本体だったようだ。

影チル「ぐあっ!!」

とそこへ大ブーメランを持った分身がそれを投げずに、そのままそれを打ち下ろしてきた。そのブーメランの凸面の方は刃になっていて、まともに食らうと斬り裂かれる。

あたいは長刀を作って受け流し、それから応戦する。

一方吹っ飛ばした本体の方もあたいの分身と交戦しつつ、弾幕を集め始めた。

あたいたちの所以外にも各二〜五か所で戦闘があり、場は混戦状態だった。

(分身が二か所に固まることもあるため)

何度も相手が入れ替わり、奇襲や不意打ち、

共闘や離脱が相次ぐ中事態は急変した。

突如弾幕の雨が止んだのだ。

恐らくスペカの時間制限である三十秒が経過したんだろう。

その時、気を配るものが互いに一つ減ったことで、再び純粋な戦闘が再開される。

互いの攻撃目標は互いの分身。

あたいは傍に居たあいつの分身に槍で突きを入れるが躲され、鎖鎌で反撃される。

一旦距離を取るが、相手はこちらに飛びながら何回も前転し勢いをつけて鎌で上からあた

いに切りかかった。

それを後ろに飛んで躲すが、回転の勢いのままに投げつけられた鎖に体を絡め取られた。

その間に他の分身があたいの元に殺到する。

だが逆に鎖を掴んで鎖鎌の分身を振り回し、

あたいの所に来た分身たちにぶち当てると同時に鎖をほどき槍を長刀に変えその場で前に

出した足を軸に回転し、そのまま横に振り抜

いた。

すると刀が分身全員を一刀両断し、カイイン

ツ!!という軽やかな音ともに分身の断面が

露わになる。

果たして断面は鏡面のように綺麗な氷の断面

をしていた。

それを見た後すかさず分身を自分の元に吸収

した。

一方その頃……………

影チルノの本体の方も、あたいの分身と戦っ

ていた。

分身の一人が影のあたいに大剣で切りかかる

も躲され、その隙をついてもう一体の分身が

槍で突こうとするも躲される。

次に大ブーメランを持った分身が投擲するも

、逆にそれを取られる。

相手は取った時にその勢いを殺さず左足を軸

に回転し、すぐそばに来ていた手斧の分身を

ブーメランを回転の勢いを載せて振ることで

一刀両断した。

更にそのまま回転を止めず、三回転目でまた

近くに来ていた槍の分身を袈裟斬りにし槍ご

と切断、その勢いのままに四回転目でブーメ

ランを振り抜いた。

ランを投擲し、その元々の持ち主を既に持っていた鎌ごと切断、その手元に武器の無い状態を大剣持ちの分身に狙われるも鎖を作つて防ぎ、逆に絡めとつて簀巻き状に拘束してブーメランの射線上に投げ出し切断、その全てを吸収した。

そして、相手は槍、こちらは大剣を構え再び一対一で対峙する。

先にあたいの方から動こうとしたその時、また外から（魔、妖、霊）力の高まる気配を感じた。

弾幕が外から中に注がれてくる。

今度は……先ほどの二倍もの量だ！

影<sup>チル</sup>「来たか……！」

その言葉を合図にまた影との弾取り合戦が始まる。

今度はお互い分身を二倍の十体に増やしての再戦。場は先ほどよりも更に混戦する。

もはや誰が分身<sup>こおり</sup>で誰が本体かなど、気にしていられないほどの混沌ぶりだ。

だが、それも終わりを迎えることになる。

相手は弾幕を拾うことに意識を傾けすぎたのか、ほんの少し隙が生まれたのだ。

その隙を見逃さず、あたいとその分身が次々と相手の分身を倒していく。

目の前とそこかしこから、キインツ、バキヤツ、バリインツ、シャリインツ！

などの氷の壊れる音が聞こえてくる。

そうして十体が消え、残る一体が本体<sup>かけチル</sup>だと

判明した。

辺りに相手の氷の欠片が散らばるなかあたい





上を見ると、辺りに散らばっていたあいつの分身の氷片が全て集まり切らないうちに、真上から影チルノが飛ぶような勢いで落下もとい突撃してきた。

つまり、奴は分身ではなく分裂していたのだ………

その顔は凄まじい形相の中に何故か少し愉しむかのような笑みを湛<sup>た</sup>えて、怨嗟の叫びを上げながら手には大剣が握られている。

それに対し、あたかも大剣を振りかぶり………  
…両者は激突した。

チ「うあああああああ——————  
つつつつ!!!」

影<sup>チルノ</sup>「オオオオオオ——————ツツツ!!」

辺り一帯に強烈な音と衝撃が広がっていく。

その中であたいは左から右に大剣を横に構え、相手は縦に構えている。

勿論柄が下で切つ先が上だ。

その状態からあたいは自身の切つ先側に体をずらし、そのまま背負い投げの要領で、相手を大剣ごと投げた。

チ「………!!らあつつ!!」

影<sup>チルノ</sup>「!!!」

相手がそれに面食らっていらいながらも受ける間に、空中にある大剣の柄を握り切つ先を相手に向けて突撃する——

相手もそれを大剣の平面で受けるが、そのまま押されていく。

そして適当なところで下から上に打ち上げつつ自分も上がり、相手より上に位置を取って

そのまま大剣を相手に突き刺した。

影チルノ「……!!があっ……!!!」

そのまま空かさず自身の氷で相手を拘束し、空中に固定した。

そこで自身の速度をもとに戻し、霊夢たちに叫ぶ。

チ「今だ、みんな!!誰でもいい!!あた

いに向けて高出力の攻撃を!!」  
その声を受けて、なんと全員があたいに力をくれた。

まずは霊夢

霊「霊符「夢想封印」!!!やっちやいなさい!!!」

次に魔理沙。

魔「受け取れ!!恋符「マスタアアアース  
パーーーーーク」!!!」

大ちゃん。

大「お願い!チルノちゃん!!妖符「ルーネ  
イトタイフーン」!!!」

紫。

紫「ふふっ……廃線「ぶらり廃駅下車の旅」  
」

藍。

藍「幻神……飯綱権現降臨」!!!」  
橙。

橙「鬼神「鳴動持国天」!!!」  
皆の力を全て氷の壁で吸収し、自身の前に  
長筒の大砲を氷で精製する。

皆との絆があたいに力をくれる……この繋が  
りが何よりの宝だ。

これがあったから、今まで楽しく幸せだった

……だから……

チ「だから……あんたにも味わつても  
らうよ!! 最高の 幻想郷あわの日々せつてやつを

!!! 氷砲!! 「グレートアイシクルカノン

「!!!」

あたいのスペル宣言が号令となり、大砲か  
ら氷弾が発射される。

それは着弾とともに辺り一帯と轟音とそれに見合つた大爆発と、爆風と衝撃波を生み、空中に居たものはあたいを含め衝撃による反動で後方に吹き飛ばされた。

影チルノ「う……ぐっ……あああああー」

「ーッッッ!!!」

爆発による発光が夜空を照らす。

その後、爆発による爆風と衝撃が収まるとそこには、満身創痍の状態の影チルノが空中で横たわる形で漂っていた。あたいたちが近づくと、誰にともなく言葉を発する。

影チルノ「認めない……こんな……絶対にいッ……!!!」

……そして、アタイも……誰からも……認められるわけが……ない……」

あたいは、何故か……こいつのことも助けたいと思つた……何故かはわからない。

あたいから生まれたものだからかも知れないし、同じ境遇と記憶を分かち合つたからかもしれない、敵の策略から生まれたものであつても何故か、そこだけは変わらなかつた。

紫「いいえ、幻想郷は全てを受け入れますわ……もちろん、あなたのことも。それに、もう勝負はついているわ……」

チ「そうだ……勝負はついた……もう終わった

んだよ。あんたはもう、苦しまなくてもいい  
……さあ、あたいたちと一緒にいこう」

影「ツツ!!……ぐ……誰が……お前たち……」

なん……か……と……!!! うっ……あああっ!!」

影のあたいが拒絶の言葉を口にすると同時に何故か急に苦しみだした。

両手で頭を抱えている。

魔「お、おいつ!! 大丈夫か!？」

心配して魔理沙が声をかける。

大ちゃんもその様子を心配そうに見守る。

影「ク……あ『アっ……や、ヤメ……口!!……」

アタ……イに……命令……する、ナア……!!」

そう苦しげに呻いた次の瞬間には、糸が切れた人形のように項垂れて動かなくなった。

何もしてやれない無力感を味わいながらも、いつか見たその光景に緊張が走り、霊夢を見るが既にお札を構えていた。

しかし、一歩遅かったようで、意識を回復した影チルノに氷でお札を氷のナイフで射抜かれた。

お札は小さい電気火花のようなものがパリツ……という音を出し、散っている……

そう、大ちゃんたちの時と同じだ……

霊「クツ……」

再び上がったそいつの顔は先ほどの憎しみに満ちたものとは打って変わってどこまでも無機質な無表情だった。

そいつは刀を振りかぶるような構えを取ったあと、氷で長刀を作り振るってきた。

それに対し、あたいは皆を庇うように大剣を打ち下ろす。

互いの刃がぶつかり、鏝迫り合いになるかと思つたが急に相手が力を抜き、というよりあたいの押す力を利用して後ろに飛んだ。

「そしてそのまま逃走する。」  
チ「なっ!!? ……ま、待て!!」  
急いで後を追うが、先手を打たれてしまつた。

影<sup>チルノ</sup>「……………冷崖……………」

その宣言とともに、何かを空中に放る影チルノ。

それはあたいの前に氷の巨壁となつて行く手を塞いだ。

しかもこの壁……………ただの氷の壁じゃない……………逃げられたか。

霊「……………何やってんのよ!!」

魔「どかないと巻き添えを食うぜ!!」

見ると後ろからみんなが、目の前の壁を壊そうとスペルを放とうとしている所だった。急いでそれを皆に叫び、止めさせる。

チ「……………ダメだ!!!これはただの壁じゃない!!!妖力や霊力で破ろうとすれば、それを吸収してどこまでも成長する!!!」

魔「なあッ!?!…ク、クツソ……………」

霊「本当、どこまでも厄介ね……………」

紫「……………」

藍「……………力及ばず、申し訳ない……………」

大「大丈夫!?!チルノちゃん!!!」

橙「うにゃくくくくくあ……………」

チ「うん、あたいは大丈夫だよ、大ちゃん……………それより……………」

紫「この異変を解決することが先……………でしょ

う?」

あたいが言おうとした言葉の先を紫が引き  
継いだ……その通りだ。

今は何よりそれを先に解決しなければならな  
い。

影チル<sup>あ</sup>の行方も気になるが、当面の脅威が  
去った以上。

ここは当初の予定通り、異変に専念すべきな  
のだろう。

それに何故か、この異変を追っていればまた  
会えるようなそんな気がする。

チ「うん、そうだね……だから最初にみんな  
で話した通り、各勢力を回る側と、神社で待  
機する側に分かれた方が良いね」

紫「そうね……それじゃあ、確認も兼ねて改  
めて組み分けと行こうかしら」

何故ここで、改めて組み分けなのだろうか

?もう、あたいと大ちゃんに紫たちが付いて  
行って影を剥がしに行き、霊夢と魔理沙は神  
社で待機じゃないのか?

紫「まず、霊夢と魔理沙は博麗神社で捕まえ  
た影の見張り」

霊「しゃーないわね……まあ、気長に待っ  
てるから行って来なさい」

魔「ああ!!こっちは任せろ!!」

紫「次に、大妖精とチルノは影を捕まえる役」

大「頑張ろうね!チルノちゃん!!」

チ「……うん!」

紫「それについていくのが橙と藍」

藍「承りました」

橙「張り切って参ります!!!」

紫がそこまで言ったところで疑問が浮かぶ、それを霊夢が口に出して紫に問いかけた。

霊「？ちよつと……あんたはどうするのよ……」

紫「ああ……それなんだけれど、彼女……リグルを見つけた後は私も基本神社に居ようかと思うのよね……勿論彼女は能力強化した後に藍達に同行させるけど」

魔「……どうしてだぜ？」

紫「考えても見なさい、対象となる影を引き剥がせる条件が整うまで私はその場には要らないのよ？だったらその間、あなたたちに助力した方が有意義だと思っただけれど？」

霊「……私たちだけじゃ不安だっって言いたいわけ？」

紫「そうじゃないわ……極力無駄は出したくないと思っただけ」

紫「それに、いつでもそばに居れるわけじゃないし……私の居ない間に何かあることは十分考えられる……そこはあなたたちの出番よね」

霊「……ふうつ……わかったわよ……まつ味方は多いに越したことはないしね」

そういう事か……それで確認を……

魔「でも、そういう事ならなんでその式神コンビはチルノたちと一緒になんだ？」

魔理沙のその質問は来ると思っていたのか

藍がそれに答える。

藍「そのことなのだが、詳細は省くが私と橙は影を探知しやすい性質にあるらしい。それを生かしてチルノたちを先導し、影を分離できる条件を整えばその時点で式としての繋がりを利用して、紫様にお知らせし、境界操作

でお越しいただくという算段になっている」

紫「そういう事」

チ「……なるほど」

確かにそれなら無駄が生まれません。

ならこれで準備は整ったわけだ。

そして、紫がこの異変解決を行うに当たって

、開始を宣言する。

紫「それではこれより、この異変を影蟲かげむし異変

と命名し、解決に向けて動きます。それでは

、それぞれの役割を果たしに行くとしましょ

う……」

魔・霊・藍・橙・大・チ

「ああ！ やってやんぜ!!」「やっつと反撃？ 待

ちくたびれたわ」「このお役目、必ずや全うし

て御覧に入れます！」「私もお供いたします！

！」「絶対に……奪わせたりなんかしない！」「あ

あ、そしてまたのんびりとした毎日に戻ろう

……皆で」「」

く異界某所く

その仄かな明かりを発しながら、カガミは

今、一匹の手負いの氷精を映している。

その場所に計画を次段階へと進めるものがあるのだ。

その手駒かぎチルの背景には、血のような赤色をした洋館が静かに聳え立っていた。

その洋館の前まで、自身の手駒が歩を進める。

その様子を静かに笑みを湛えながら見るその男の顔には先ほどとは違い、余裕が伺える。



先ほどまで、複製元としての氷精とその仲間が自身の『ゴ』を器とした、氷精を弱らせるまで、制御することはできなかった。

しかしあの者たちが暴走を止めてくれたことによつて、非常にこちらが御しやすい状態になつてくれた。

その原理としては……例えるなら、『ゴ』を貯水槽とするなら、そこに貯めた水があつた氷精から得た妖力、そこに自我という名の荒波が起こつたせいで、作り主である彼であつても操れないほどに暴走した。

だが皮肉なことに、その暴走の波をあつた者たちが鎮めたので、今再びこの男の支配下に置くことが出来たというわけだ。

飛「そして、これからその地で発する『異変』……お前には、その役者として働いて貰おう。……その為には、まずはその手負いの状態から解消するでしょう……」

彼がその言葉を発すると、カガミの中の氷精は門番の前まで歩みよる。

それに対し、先ほどまで眠っていたのにも関わらず、はつと目を覚まし、侵入を試みようとする者に警告を発する。

しかしそれを意に介さず、そのまま歩みを進めようとする影の氷精に侵入者を排除せんと、極め抜かれたかの大陸の拳法と本人の「気を使う程度の能力」で、戦闘に入るも、余りの力量の差に呆気無く敗れ去つた。

その間なんと、0.1秒である。

そして悠々、屋敷内へ侵入に成功する。

そのまま歩いていけると今度は足元に、それ以

上入るな！と言わんばかりの刺さり方をしたナイフが地面に刺さっているのが目に入る。先ほどまで刺さっていなかったのに、あ·た·か·も·最·初·か·ら·そ·こ·に·刺·さ·っ·て·い·た·か·の·よ·う·な·刺·さり方だった。

ふと気配を感じて手駒が上を見るとそのナイフの送り主であろう人物が他にも数本ナイフを手に持ち、その侵入者を睨みつけていた。そこで互いの視線が交錯する。

飛「まずは、紅き悪魔の巢……」

薄暗い空間の中、その声だけが辺りに不気味に響いた。



## 第十三話 氷争（紅魔 其の壺

美鈴 side

私、紅美鈴は何時ものように、外敵という外敵の来ない門の見張りをサボり、寝ていた。この幻想郷に於いては害のある敵……というよりも困った来訪者と言ったら、パチュリィ様の図書館に忍び込んで、「借りてくぜ〜」！死ぬまでなあー!!はっはっは!」とか言いながら図書館の魔導書を盗んでいく黒白の魔法使いぐらいのもので、あとは妖精などがたまに来るくらいなのだ。

（それも只単に遊びたいだけである）なので、それほど気を張って見張りをする必要はないのだけれど、サボっているのを咲夜さんに見つかりとナイフを投げられ、サボるな！寝るな！と大目玉を食らうので、ちゃんと起きていなければならぬ（あのナイフは本当に痛い）……ので、頑張つて起きてはいるのだが睡魔に抗えずにこうして時々眠ってしまうのだ。（そこを運悪く見つかってしまったりもする）だが、だからといって門番として機能していかないということはないのだ。なぜなら、紅魔館に害意のある敵が現れた場合は即座に目を覚まし、紅魔館のどこから侵入しようとしても分かるからだ。それは私の「気を使う程度の能力」によるもので、紅魔館全方位の侵入してくる者の気を読むことよって、その者がどこから入ろうとしているか、またこちらに害意や敵意があるかが分かるのである。

そして無論、その時にはすぐさま目を覚ます  
……そう、たった今の私のように。

それに今は夜であり、そんな時間に訪ねてくる人などそうはいないはず。

まあ、この館の主は吸血鬼であり、夜の時間帯こそが活動時間（大抵の妖怪はそうだが）であることを考えれば、この時間に来るのは、正解なのだが……しかしそもそも目の前の人物は何か良からぬ用事がこの後ろの館にあるようなのだっし、人ではない気がもろに伝わって来ていた。

そして、その気には少し覚えのあるものが混じっていた。

以前はよく紅魔館に遊びに来ていて、この頃はめつきり来なくなつた者の気だ。

まあ、一度良く遊んだ者のよしみで一度くらいは顔を見せに来ていたが……

紅美鈴Ⅱ美

美「!!……?…チル…ノ?……いや、

あなたはチルノではありませんね……あの人はこんな気を……こんな異様に、恐ろしい、冷酷な気を放つような人ではありませんでした!それは、今のあなたのような容姿になり、そのことの詳細を告げに来てくれた時もそうです……あなたは一体何者ですか!？」

今は夜であり、満月が「今は私が主役だ」と言わんばかりに輝いている。

そして、どこからともなく吹いた風によって草木が不気味にざわざわと音を立てる。

まるでこれから起こることに対して、何者かが陰口を囁いているかのようだ。そんな中で、私の声など届いていないかのようには、また、私がそこに居ないかのようには、目の前のチルノの気と姿をした影は、私が門を守る紅魔館へと向かうべく私に向けて足を進めてきた。美「!!!：止まりなさい!!!これは警告です！それ以上近づけば、問答無用で排除します!!」

その台詞とともに構え、臨戦態勢を取る。だが、さきほどから歩みを止める気配が一切ない。

まるで私のことなど眼中になく、地を這う虫に大抵の者が無関心であるのと同じようなそれだった。

そのことに憤る自分が居たが、それ以上に、目の前の者からはとても推し量ることのできない力と機械のように無機質な冷酷さ、それに、自分の動きなど既に見透かされているような感覚が伝わってきており、無視された怒りなどよりも恐怖が圧倒的に勝っていた。

現に今も、相手はこちらを見ていないにも関わらず、私は蛇に睨まれた蛙のように身動きができないでいたし、先ほどから正体不明プレッシャーが私を襲い、冷や汗が止まらない。その間にもその者はザッザッ、と足元の草を踏みしめ近づいてくる。

影<sup>チルノ</sup>「.....」

その者の姿が月光の下に晒され、露わになる。

やはり、見た目には前に自身に起きた事の報

告をしに来てくれたチルノのように、白と青のラインの左腕の袖だけ長い着物姿だった。しかしよく見るとその色は若干黒くくすんだ色をしており、髪の色も黒みがかつていて：現在のチルノをそのまま陰いまらせたような見た目をしていた。

そして、そのチルノの姿をした何者かがもうすぐ、私の間合いまで歩を進める。

相手との圧倒的な戦力差に自然と足が竦むが、ここで食い止めなければ館の者にも被害が及ぶ。

それだけはなんとしても避けなければならぬ。い。

そこでついに相手が間合いに入ってきた。

私は意を決し、左脚を踏み込んで右の拳を突き出す。

美「……………っ!!」

私は一瞬、何が起こったのか分からなかった。

気が付くと相手は門を開けてくぐり、館の敷地内へと進入していた。

私と言えば、地面に横たえられ、ご丁寧に氷で地面に縫い止められていた。

私の華人服とチャイナドレスを足して2で割ったような淡い緑色を主体とした衣装と腰まであるストレートの赤髪が月光に照らされる。その私の手や足には氷で出来た枷がついており、その両手の間から延びる杭が地面に刺さり、完全に動きを封じている。

それは足も同様だった。

しかも、杭を抜こうにも返しても付いている

のか、それとも無理な体勢だからなのか、一向に抜ける気配がない。

氷を砕こうにもかなり頑丈でびくともしない。つまり、今の私の体勢を説明すると地面に対して横に向いて目の前に自分の手があり、その両手は向い合せにされその中央に杭が直接伸びて地面に刺さっており、足の方を見ると少し足首をずらされた状態で手と同じような物で拘束されているのだった。

そこで気が付き私は相手に向かって叫んでいた。

美「まつ待ちなさい!!!……くっ……!!」

叫びながら私は、無駄だと分かっているでも手錠を解こうと必死に動かす。

すると相手はこちらに気付いたようで、門の向こうから私を振り返り、その氷のように冷たい目で私を一瞥した後、何事もなかったかのように、紅き悪魔の住む館へと歩みを進めて行った。

美「……っ!!!……すみません、咲夜さ

ん……後を頼みます……申し訳……ありません

!!!……お嬢様……!!」

相手に一瞥されたときに途轍もない寒気が私を襲った。

余りに次元が違いすぎる……自身の手に残る嫌でも理解するしか無かった。

それを自覚すると途端に情けなさが入り込んできたが、私はそれをどうすることも出来ずただ地面を転がったことしか出来なかった……

自分はこの紅魔館の門番を任されているにも



拘わらず、力量に天と地の差があるとは言え……こうも怖じ気づくとは……!!

この頑丈な手枷足枷のせいでどの道動けないが、例え枷これがなくとも私は動くことなど出来なかつたことだろう。

その事実には、悔しさと主に対しての申し訳なさややるせない気持ちで涙が込み上げるが、それで状況が変わるわけでもなくただ無情に時が過ぎていた。

だが、あのお嬢様と咲夜さんが負けるはずは無い……無いはずだと、信じるしかなかつた。

咲夜 side

カチューシャ（ホワイトブリム）と銀髪のリボカット、その髪をもみあげ辺りから三つ編みにし、その先には緑のリボンが結わえられている。

その瞳は青みがかっており、服装は青と白の二色からなるメイド服で

裾は膝丈、詳細は襟や肩にひらひらがあり、カチューシャ、帯、前掛け（エプロン）は白で、下に青い服を着ている。

そんな自分の姿が廊下に飾られた鏡の前を横切った拍子に一瞬だけ写る。

私、十六夜咲夜は今日一日の仕事を終え、最後に館の中を巡回している最中だ。

そんな私の顔には一日の業務を終えてホッと一息つくような弛緩したものではなく、代わりに、不安で憂鬱な表情が浮かんでいた。

それというのも、何故かこの頃お嬢様の体調が優れず、原因不明なことが主な理由だった。今朝もまだ体調が優れないようで、体の怠さや能力の不調などを訴えて居られた。

(近頃はたまに朝に起きて来られることもあ

る) 因みにお嬢様とはこの館の主にして、紅い悪魔の二つ名をもつ吸血鬼であられる、レミア・スカーレットお嬢様のことである。この方の下で身の回りのお世話をさせていただき、仕えるのが私の仕事であり、生き甲斐………なのだが………

## 十六夜咲夜Ⅱ夜

夜「お嬢様……本当に、大事なといいのだけれど………それにしても、一体なにが原因なのかしら……パチュリー様も手を尽くして調べておられるというのに一切分からないだなんて……」

その仕えるべき主の原因不明の不調が続いていることで、不安な日々が続いている。

と私がお嬢様の不調の原因のことを考えながら歩いているとふと窓の外に目が行った。

夜「………美鈴あのこまた門番サボったのかしら………まったく、こんな時に………」

今、私が見た窓の外の景色には紅魔館の庭

と門が見渡せる位置にある窓だった。

つまり、この館の正面の窓である。

そこから見える門からこの館へと続く道を誰かが歩いてきているのが見える。

今までも門番メイリンが仕事をサボって、何者かの侵

入を許してしまうことはあつたし、今は夜なので眠いのは分かるが、それにしても……である。

全く、今はただでさえ、お嬢様の体調不良のことで悩んでいるというのに、これ以上仕事を増やさないで欲しいものだ。

夜「はあ………さて………と……最後の仕事はゴミ掃除になるか、それとも単なる道案内か………どちらかしらね………」

前者なら、この紅魔館に仇なす者なので抹殺か排除。

後者なら、ただここに迷い込んできただけの者なので、そのままお引き取り頂くか、私が道案内を少しするだけとなる。

正直、今は後者の方であつて欲しい。

それというのも後者の場合、美鈴がすんなり門を通した（もとい寝ていた）ということはこの紅魔館に害意が無いものである場合がほとんどであるからだ。

それは彼女の能力が関係している。

そして最悪なのが、もう一方の害意や敵意があるにもかかわらず、それでも尚ここに侵入できている………というパターンである。

それも正門から堂々と進入できているということは、かなりの強者ということになるからである。

何故なら、弾幕勝負なら光や音等で分かるはずなのにそれが無かった。

それにも関わらず、ただ歩いて行って、正面から彼女を打ち破つたとなれば、相当の実力があると思われるべきだ。

弾幕勝負等ならともかく、対格闘で正面からとなるとかなり厳しいはずであるが、ここから見た限り、余裕を持って歩いているように見える。

しかしどちらにしても、相手の前に姿を現さないことには始まらないので「客人」を出迎えることにする。

自身の「時を操る程度の能力」で時を止め、窓を開けて外に浮かぶように飛び、再び窓を閉め空中で相手に向き直る。

その時に、窓越しでは見えなかった門の外が、空を飛び角度が変わった事で視界に入る。

依然、周りの時は止まっていて全てのものは私以外、静止している。

その中に門から離れたところで、横たわる美鈴の姿が眼に映る。

そこまで飛んでいってみるとそこには、地面に氷の錠で磔にされた紅魔館の門番が悔し涙を流していることが分かる表情のままに静止していた。

そして、後ろを振り返るとそこには門を抜けて道の中ほどまで悠々進入している侵入者の立体静止画の後ろ姿がある。

夜「ちよつと……冗談でしょ……？よりもよって、最悪な方なの？……面倒なことこの上無いわね……」

しかし、これで美鈴のサボタージュの疑いはとりあえず晴れたわけだ（この手の敵には例え寝ていても気付くので完全ではないが）……代わりに面倒事を片付けなければならなくなってしまった。

これなら寝ていた美鈴に説教するほうがよっぽどマシである。

どうやら、本日最後の仕事はゴミ掃除に決定したようだ。

そこで侵入者の斜め前方まで飛んで移動する。そこで誰にもとなく呟く。

夜「ふう……なんにしてもさっさと終わらせて、早く休みましょう」

挨拶代わりに相手の足元にナイフを放ち、それが相手のつま先の数センチ先の地面に刺さる。

そこで指を鳴らし、それを合図に時が再び動き始める。

そこで相手が地面のナイフに気づき、その出所にあたりを付け前方を見上げる。

するとナイフを手に構える私と目が合う。

数秒間は睨み合いが続いたが、私が先に言葉を掛けた。

夜「こんな月が綺麗な夜に人の家に押しかけてくるなんて無粋の極みね……そうは思わない

? 侵入者さん？」

影<sup>チル</sup>

「……………」

言葉が通じれば、そのまま回れ右してもら

おうかとも思ったが、あいにくと相手は無言を貫き通し、こちらの呼び掛けに答える様子が無い。

言葉が通じないのか、それか聞く耳を持たないと言ったところだろう。

夜「そう……あくまでここを通りたい……と。なら、こちらとて容赦はしないわ！」

その言葉と共に自身に対する周りの時間を遅くして、高速で相手に近づいてナイフを振るう。

が、それはいとも簡単に相手に片手で止められてしまった。

夜「!!!（なっそんな……!!これを受け止められるとは……!!）」

そしてそのまま空中に放り投げられてしまった。

だが直ちに空中で体勢を立て直す。

夜「……なるほど……美鈴が倒されるわけだわ……久々に手ごたえのある……っ！」

ある、と言い終わるや否や相手が氷の長刀をこちらに飛びこみつつ振るう。

相手は既にもう目前にまで迫っていた。

夜「くっ……!間に合わないか……」

相手の間合いから間に合わないと判断して、即座に時を止める。

相手の長刀は自身の首から約1センチのところで急に静止した。

目の前には、こちらをじっと見つめる相手の姿が空中で固定されている。

そこで大量のナイフを相手の周りに逃げ道をふさぐように配置し、再び時を戻す。

その際相手から距離を取り、背後に回るのも忘れない。

夜「スperlカード、幻世「ザ・ワールド」!  
影「……っ!!」

相手は突如現れたナイフに驚きつつも、その剣技と常人離れた素早さで、ナイフを刃で弾いたり、避けたりして捌くが、あまりの

数にさばき切れなかったナイフが次々とその身に突き刺さっていく。

影<sup>チル</sup>「……………っっ!!」

苦痛に歪み歯を食い縛る相手の顔が見えたときに勝利を確信し、念のため最後の詰めにとナイフを構える……だが、同時に違和感も覚えた。

何か見落としているような……そう考えたときに、不意に相手の口角が上がる。

夜「……………何っ!!」

途端に、相手から流れ出る血が透明の水に変わり、相手の体も氷に変わって行く……ナイフの刺さった氷には罅が入っていた。

その時、自身の頭上に気配を感じ、体を上に向けて同時に……相手から前転の勢いの乗った踏み蹴りを食らった。

そのまま姿勢で敵を見ると、さっきまで私がいたであろう位置で足を下に突き出して地を蹴るかのように構えていた。

どうやら今、空中で蹴落とされたらしい。

夜「があっ……………はっ……………(分……身……………? 一体いつの間に……………いや、まさか上に投げ飛ばされたあの時にはもう!!?)」

そう、私を投げ飛ばしたあの時にはもう相手は氷の分身を私に頭上辺りに飛ばして、下から隙を伺っていたのだろう。

つまりさつき感じた違和感の正体は私のところに来るまでの時間差だったのだ。

蹴りの勢いがことのほか強く、地面に落ちるのは免れなかったが何とか受け身で衝撃は和らげた。

しかし、その時にはもう敵は目の前にまで飛んできていた。

それに対し、再び時間操作を発動させようとするがそれよりも先に顔面に蹴り上げられ、仰向けに倒されるとすかさず氷のナイフで手を貫かれてしまった。

夜「っ!!……っ!!ぐっ……あああっ!!」

最初に冷たい感覚が伝わり、その直後に痛覚がやってくる。

貫かれた右手からは血が流れ出し、痛々しさを演出する。

更に氷のナイフはそれ自体が冷気を発しているからか、触れている傷口の周辺の血や血管などを凍らせて行き、冷気が浸食していく……見ると流血が傷に近いところから血の赤を湛えた氷となっていく所だった。

夜「……あああっ!!ぐうう、うあっ……!!」

想像を絶する痛み能力発動の集中力がみだされ、とてもそれどころではなかった。

そのあまりの激痛に涙が流れ、思わずその手を庇おうと左手を伸ばそうとするが、既に馬乗りになつていた相手にその手を地面に押さえつけられる。

そのことに相手を睨みつけようと顔をそちらに向けると何故か相手の顔が鼻と鼻が突き合う程の距離にあつた。そして……

夜「え?……っんっんむう……」

一瞬なにがなんだかわからなかった。

何故か相手は私の口に自らの口を重ね……っ



まるところ、接吻キスをしてきた。

それも舌同士を絡ませる深いもので、いわゆる  
デーブキスという奴である……………

よって相手と自身の唾液が混ざり合い、交換  
される。

何故そんなことをしてきたのかわからずに混  
乱する上にその扇情的な行為にも関わらず、  
そんな風を感じる余裕などは微塵もなく、手  
の痛みと混乱とそして、力が抜けていくこと  
に恐怖すら感じ、混乱は増す一方だった……  
そうしてしばらくの間、私の舌を弄び体を密  
着させていたかと思うと、徐おもむろに私の口から  
口を離した。

その時、ぷはあっと息が漏れる……立ち上が  
り様に舌なめずりをするその様子に背筋を悪  
寒がなぞるゾワツとした感覚と右手の痛みを  
気合いで押し退け、何とか時を止めた。

そうしてまずは自身の右手に刺さったナイフ  
を引き抜く。

夜「……………!!くっ……………」

その時、激痛が走り、血が流れるが構わずそ  
のナイフを相手に向けて投げる。(無論さつ  
きの密接した状態から間合いはとっている)  
すると、そのナイフが相手のすぐそばで静止  
し、配置された。

更に時間を圧縮で、未来や過去のナイフを大  
量に相手の周りに配置する。

夜「スperlカード! 「咲夜の世界」!!……………」

…そして、再び時は動き……………っ!!」

再び時間停止を解除し、ナイフを相手にけ  
しかけようとした……………その時、信じられない

ものを目にしてしまったことで動きを止めてしまった。

夜「なっ……なんで………どうして動けるッ！？」

なんと目の前の敵は私の能力「時間を操る程度の能力」による時間停止中に、さもそれが普通であるとも言うかのように動き出したのである。

この空間の中で動けるのは私だけのはず……そんなことを考える間にも敵は空間に配置されたナイフをいつの間にか作っていた氷の双剣で次々と弾き、双剣を消し、代わりに配置されていた幾つかのナイフを手にとるとそれを私に対して投げ、それが空中で静止するのを見届けると指を鳴らし、時間停止を解除した……解除されると同時に、数本のナイフが私に一斉に襲いかかり、月の輝く静かな夜に一人のメイドの悲鳴が響き渡った。

パチユリー side

パチユリー・ノーレッジⅡパ

私はふと外が気になり、その方角を見るが何もないのを確認するとすぐに読んでいた魔導書に目を戻す。

このヴワル魔法図書館は紅魔館の地下に存在するのだが、そんな地下にも月明かりが差し込むような仕掛けがこの図書館には施されており、今宵はその月光の明かりで、私は魔導書を読みふけていた。

(曇つて月明かりのないときは燭台が魔法の明かりで読む)

そんな私の恰好は月明かりに照らされて闇から浮かび上がっていた。

先がリボンでまとめられた長い紫髪と、紫と薄紫の縦縞の入ったゆつたりとした服やその上の薄紫の服、ドアキャップのような帽子には三日月の装飾、服の各所には青と黄と赤のリボンのついた寝間着姿のようなそれが月の光を受け、まるでそれ自体が光を発しているかのようにだった。

パ「(それにしてもさつきのはなんだったのかしら……外から何か声のようなものが聞こえたような気がしたのだけれど……まあ、また妖精が悪戯をやらかそうとして咲夜に撃ち落とされたんでしよう……)」  
そういう事は往々にしてあった。

ついこの間も妖精がこの紅魔館に入ろうとして咲夜に見つかり弾幕で撃ち落とされたらしいことをレミイから聞いたのだ。

実際、妖精などどこにでもいるし現にこの紅魔館も妖精メイドを大量に雇っている(質より量で兎に角大勢いるがあまり役には立ってはいない)。

そんなことよりも今はレミイ、この紅魔館の主人であり私の友人、レミア・スカーレットを助けるための調べものをする手を止めるわけにはいかない……

そう……先ほど(というより、ほぼ一週間前ほど前からだが)魔導書を読み漁っているのは、どういうわけか体調を崩し、能力も上手く

使えなくなっているその友人をどうにか回復させる手立てを模索する為であった。

と、魔導書をいくらか読み進めたところで、小悪魔が、頼んでおいた本をいくつか抱え、パタパタと蝙蝠羽を忙しなく羽ばたかせながら飛んで戻ってきた。

その姿は紅い長髪に頭と背中に悪魔然とした蝙蝠の羽が付いており、服は白いシャツに黒のベストとベストと同色のロングスカート、シャツには赤いネクタイを締めている。

そして、今はその両手に一杯の本を若干、重たそうに抱えてこちらに飛んできていた。

小悪魔Ⅱ小

パ「ああ……こあ、ご苦労様。そこに置いて頂戴……」

小「はい、了解です……つと、ふう……あの、パチュリー様？」

パ「なにかしら？お茶なら、今はいいわよ？」

小「いえ、それもですが……少し休まれてはいかがですか？もう、五日も休まれていらつしやらないじゃないですか……」

パ「そうね……休みたいところなのだけれど、友人が謎の症状に苦しんでいるときに呑気に休んでいられるほど薄情でもないのよね……」

小「それなら、永遠亭の医者に診せに行かれていますか？」

パ「相談を受けた時点でそうレミイにもそう言ったのだけれど……『こちらで手の施しようがなくなったらそれも考えるけど、自己解

決も凶らない内から頼るのはプライドが許さない』らしいわ」

小「ええーっつとー……それってもしかして……」

パ「ええ。確かにプライド云々というのもあるのでしようけど……単に医者に掛かるのが嫌というのも多分にあるんでしようね……」  
言いながら私は遠い目をする。

そうなのだ、確かに紅魔館の主としてのカリスマ性溢れる、良き支配者あゑるじなのだが、どこか見た目通りの幼さもあるというのがこの友人の困ったところであり、その為によく周りを振り回すのも日常茶飯事だ。

まあしかし、そこが憎めない可愛いところでもあるのだが……今回のような場合には困ったものである。

おかげで、この図書館中の本を調べなければならなくなってしまった。

といつても、

大抵の本の内容は覚えているので、タイトルをただただほぼ全ての内容を思い出せることも考えれば、それほど大変ではないかもしれないが、ここの蔵書は幻想郷一であり、さらに弾幕勝負もできるほどに広大なので、全て調べるにはやはり日数がかかってしまうのは仕方のないことだった。

小「それでも、いや、だからこそ、パチユリ様まで倒れられては、それこそ元も子も無いじゃないですか！調べられる方が居くなります！」

パ「その時はもう、私もレミイもまとめあ

の竹林の医者に世話になることにするわ……」  
小「でも：それじゃあ、手を尽くしたことに  
はならないですよね？」

パ「……うーん、そうかもしれないわね：  
じゃあ、少しだけ休ませて貰おうかしら」

小「そうですよ！やっぱりそれがいいですよ  
！……じゃあ、私はベッドの用意をしてきま  
すね！」

パ「ええ、お願い」

小悪魔あの説得に応じ、少し休眠を取ること  
にした。

あそこまで私を説得したのは私の為もあるの  
だろうが、自身も休みたかったのだろう。

用意しにいった時の顔がホツとしたものだっ  
たので恐らくそうだと思われる。(まあ、私  
は病弱とは言ってもそこは膨大な魔力で補え  
るので問題は無いのだが) 思えば、私に付き  
合わせて小悪魔あにも大分無理をさせてしまっ  
ていたかもしれない。

……まあ、私の使い魔なのだし、私に聞き  
従うのは当然なのだ……

それにしても、ここ五日ほどは休みなくこの  
大図書館中から本を取って来てもらっては読  
み終わった本を棚に返して貰うという作業を  
延々繰り返しさせたので無理もないと思う。

……では私も束の間の休息を取ることにしよ  
う。

そう思って、私は大図書館を後にし、自室へ  
と向かった。

レミリアside

おかしい……何かがおかしい……。

私、この紅魔館の主であり、スカーレットデビル紅い悪魔こと

レミリア・スカーレットある悩みを抱えていた。

何故かつい一週間も前から体調が優れず、体が重く、力を思うように出すことができない。持前の身体能力や脅威的な回復力、魔法力なども落ちていく。

片手で持ち上げられるのはせいぜい樹齢百年の大木でしかできなくなり、人里ほどの距離を駆け抜けるにも八秒台はかかり、一声で召還できる悪魔も以前の半分ほどになって、その悪魔も満足に操ることができ無いと来ている。

極めつけは自身の能力……「運命を操る程度の能力」が弱まっていることが判明した。

その能力自体は不確定要素が高く、自力での行使があまりできないのだが、その影響はよく周りで見受けられたので、存在は確かなものだと言える……しかし最近、よくよく思い返してみれば体調が崩れだした一週間ほど前からその能力の影響が周りに現れていなかったように思う。

普段は些細なことながら現れていたと言うのに、ここ最近は今全くその影響が見られなかった。

パチエに調べさせても、いまだに原因が分からないし、(そもそも、得意分野ではない)しかしかったので駄目元だったが)これはいよいよ

よ、あの竹林マッドサイエンティストの医者に診てもらおうしかないかもしれない。

そろそろあの友人も、関連した文献や書物はあらかた調べ終わるだろうし、それでも駄目なら、諦めて行くしかない。

そんなことを考えながら自身の青みがかつた銀髪を弄り、時折自身の衣服に目を落とす。

帽子のナイトキャップと同じピンク色であり、太い赤線が入りレースの付いた襟、両袖はふつくらと膨らみその袖口は赤いリボンで蝶々結びにされている。

レースの服は真ん中をボタンでつなぎ止め、一番上にはS字状の装飾が施されている。

踝まで届くスカートには赤い紐が通っており、更に腰と帽子にも白い線の入った赤い紐が通っていた……そんな自分の姿を確認し終えると、柄にもなく溜息を吐いた。

そこで、ふと窓から月を見上げる。

悩みのある自分とは裏腹に、今宵は満月フルムーンらしい。

レミリア・スカーレットⅡレ

レ「それにしても、一体どうしちゃったのかしら………」

とそんなことを呟いていると、そこからコンコンとノックの音が聞こえた。

次いで、お姉さま？という声が聞こえる。

その声に対し、開いてるわよと答えると、徐々にそのドアが開き始めた。



フランドール・スカーレットIIフ

フ「お姉さま、今、大丈夫？」

そうして、扉から現れたのは我が愛しき妹、フランドール・スカーレットだ。

ちやんと一度、相手にたずねてから何かをするあたり、常日頃からの立ち振る舞いの良さが伺える。

以前は何か物をたずねる前に狂気に任せてそこら中のものを壊していたものだがとある異変を経て以来、その狂気は鳴りを潜めているので、こうして外にも出している。

前は狂気が全面に出ていたため、地下に幽閉せざるを得ず、心苦しい日々を過ごしていたが、今はこうして普通に会話できていることを幸せに思う。

それが、あの黒白の魔法使いのおかげもあるということが少々複雑だが……それは贅沢というものかもしれない、しかし、あの手癖の悪さはどうにかならないのだろうか。

パチエもいい加減にして欲しいと泣きついて来るほどなのに加え、当の本人は「これは盗みじゃない。死ぬまで借りてるだけだぜ!!」と開き直る始末……

全く、どうしたものか……対策を立てても警備を強化してもまるで……と、自身のこととは別の悩みに気を取られているとフランから声がかかった。

フ「あの……お姉さま？」

レ「…あ、ああ！……なにかしら、フラン？言っておくけれど、今日の分のお菓子ならもう

さつき食べたあれで最後よ？また咲夜に言えば作ってくれるとは思うけど……」

フ「いや、そうじゃなくて……最近のお姉さま、すごく具合が悪いみたいだから少し、心配になつて……大丈夫？」

なるほど、私のことが心配で様子を見に来てくれたのか……なんて優しい子なのか……これで、あの人格さえ出てこなければ、と思わずには居られないが、この子自身もアレを出したくて出しているのでは無い、それにアレも紛れも無いこの子の一面なのだ……それを考えると、実に複雑だった。

レ「ええ、大丈夫よ……このくらい、大したことはないわ……だから安心して頂戴。直ぐに良くなるわ」

そう（どこか不敵さを交えて）微笑みかけると、安心したようにうなづくフラン。

フ「うん、そうだよね……うん、お姉さまがそんな簡単にくたばるわけ無いよね！」

輝かしい笑顔を私に向けてくれた。

それに笑顔のまま頷いて答えると、とても言いにくそうに私にお願いしてきた。

フ「あの、それで……その……よかつたら、このまま一緒に居てもいいかな……なんだか嫌な予感がして、不安で……だから朝は一緒に寝て欲しいな……なんて……だめ？」

レ「ええ！いいわよ！……こつちにいらつしやい……一緒に寝ましょ♪」

まったく、末恐ろしい妹である。

いつの間にこんなに相手の懐に入るのが（甘え）上手になつたのだろうか。

しかも余りに可愛いので、つい、頬が緩みきりそうになってしまったではないか！

しかし、ここはたとえ肉親とはいえ姉としての最低限の威厳は保たねば……ふっ、まさにこれは、姉<sup>へ</sup>としての威厳<sup>メッ</sup>が無ければキユン<sup>即死</sup>死<sup>死</sup>だった……というやつだろか……何を言っているのかわからないだろうが、私にもわけがわからない……もう頭がどうにかなりそうよ。

(現在進行形)

妹だとか萌えだとかそんなちやちなものじゃあ断じて無い！もつと恐ろしいものの片鱗を味わったわ……

さて、ここからは悩みも忘れてお楽しみ<sup>の</sup>時間と行こう。

ここからの描写は無いが、<sup>見</sup>ている者は好きに想像するがいい……(読者、妄想<sup>み</sup>しているな！)

だが、この時はまだ分かっていなかった……私たちの幸せを壊そうとする影の存在に……

## 第十三話 氷争（紅魔） 其の弐

その後、みんなで異変解決を誓って直ぐに、皆それぞれの役割を果たす為に散会した。

紫は単独でリグルを探し、霊夢と魔理沙は神社に残って結界で封印中の影を見張り、あたいと大ちゃん、藍と橙は境内に寝かせていた七人（妖精6＋天狗1）を神社の中の部屋へと運び寝かせた後、藍と橙の影に対する嗅覚を頼りに、二人に案内してもらい、それにあたいと大ちゃんが付いていく形で、影の元へと飛び立った。

紫「じゃあ霊夢、魔理沙。ここは頼んだわ……藍と橙、それにチルノに大妖精……お願いね……」

霊「そう、何回も言われなくなっちゃってわかってるわよ……早く行って来なさい」

魔「ああ！早くしないと、勢い余って私たちが解決しちまうぜ？」

藍「私にお任せを！紫様！」

橙「私も準備万端です!!」

チ「まあ、こっちの心配は要らないかな」

そう言いつつ大ちゃんの方を見ると、大ちゃんも

大「はい！心配して頂いてありがとうごさいます！でも、私たちなら大丈夫ですから！」

紫は自分の言葉に返ってきた言葉たちを耳に入れると底知れぬ微笑みを浮かべ、スキマの中に消えていった。

その顔はどこか、頼もしさを感じているよう

な雰囲気も同時に感じさせた。

霊「じゃあ、あんたたちも行って来なさい！  
！ここは引き受けたわ！せいぜい気をつけな  
さいよ！」

藍「ああ、そつちも気をつけてな」

その藍と霊夢のやり取りを最後に私たち四  
人は気配を辿って進み始めた。

まだ夜は始まったばかりだ。

それを示すかのように山は黒く陰り、星は瞬  
き、月は浮かんでいる……これからの暗く長  
い夜の訪れを予感させるように。

レミリアside

突如、爆発音とともにこの館全体が軽く揺  
れた。

その音を聞き、先ほどまでの弛緩していた雰  
囲気は急に張り詰め、私が頭を撫でてあげて  
いたフランのその顔にも怯えとともに緊張が  
走る。

私はフランを胸元に抱き寄せ、すぐさま思考  
を巡らせた。

レ「!!(何!?!敵襲?規模や人数は……分  
からないか。でも、この方向には確か、パチ  
エの部屋があつたはず……)」

あの魔法使いの部屋から爆発があつたとい  
う事から、考えられるのは二つ……一つは何  
かの魔法実験の失敗で起きたというもの。

あの友人はとても優秀な魔法使いではあるの  
だが、ごく稀に実験が失敗し、事故が起こる

ということが過去にもあったので、今回もそんななんてことのない日常の一コマであるという可能性。

もう一つは考えたくないが、自室で休んでいたあの子が何者かによつて襲われ、戦闘に入り、今なお苦戦を強いられているのか、それとももう敵を倒したのか、優勢だが戦闘は続いているかのいずれかである。

この場合は私としては敵が倒れていて欲しいと願いたい、最悪を想定しておくべきだろうと考える。(本当の最悪は友人が倒されていることだったがそれは考えられなかった)よつて敵が侵入し、かの友が劣勢に立たされていると見て、加勢に行くべきと判断し、フランをその場に残して私は現場へと向かうことにした。

フ「お、お姉さま……今の音は……」

レ「大丈夫よフラン……何も心配しなくていいわ……だから、少しここで待っていてくれるかしら……すぐに用事を済ませてくるから」そのままその場から去ろうとする私の腕を掴み、フランが問いかける。

フ「嘘よ……お姉さまは今、万全の状態じゃ無いでしょう？私も一緒に……(ドゴオツ!!)……っ!!」

フランが自分も一緒に行くと言おうとしたところで、二度目の爆発が生じた。

これにより、ますます事態が最悪のものであることを確信する。

最早一刻の猶予も無いと思われたのでフランに掴まれていた手を静かに解き、再度断りを

いれ、その場を後に爆発のあつた方へと向かう。

レ「(ここまで入って来ているとなると、既に咲夜と美鈴も……!)」

状況は最悪と思われた。

しかし、これ以上敵に好き勝手させてなるものか……!!

私は全速力で廊下を飛行した。

パチユリースide

全く！一体なんなのよこいつは!!

私、パチユリー・ノーレッジは今、敵と交戦中だ。

その経緯は以下のとおりである。

まず私が調べ物の疲れを取るために自室で休んでいた所、部屋の前に仕掛けておいた対侵入者の魔法に敵がかかり、目覚め、辺りを警戒する。

それとほぼ同時に部屋の扉が吹き飛ばされ、その粉塵の中から白い着物姿の者が現れ、いきなり攻撃してきた。

索敵にも引つかかっている事からこれは敵だと判断し、今に至る。

パ「もう！せつかく休めると思ったのに……!!」

く回想く

パ「すうくく……すうくく……、むきゆくく……」

…っ!!誰!?バツ!!」

その自身の声とともに布団を剥がして飛び起きる。

それとほぼ同時に扉も真つ二つに斬り裂かれて、こちらに吹っ飛んだ。

だがこちらにぶつかる前にその扉自体が粉々になったようで、辺りに元扉の粉塵が舞う。

その煙の中から全体的に少し翳りを持った白い着物をきた少女が敵意を向けていた。

その少女の手から多数の氷の槍が放たれるのに対応し、こちらもスペルを唱える。

パ「土符「レイジイトリトン」！」

すぐさま自身の周りを六角の黄色い水晶が取り囲み、自身に降りかかるはずの氷結の槍から己の身を守ってくれた。

パ「……………っ!!」

しかし、それは水晶に取り付き、徐々に水晶を侵食していった。

そして、気付いた私を逃がすかとばかりにその氷が私に先の尖った氷柱つららを伸ばして突き立てて来た。

その前にで空中に逃げることで回避する。

先ほど私が居たところには何本もの氷柱が通り過ぎていた。

そこで自身を見る相手に気づき、その者と対峙した。

く回想終了く

パ「火符「アグニシャイン」！」

唱えるとともに目の前の敵に炎の渦が襲い



かかる。

だが相手は事もなげにそれらを躲し、自身にかかりそうな炎は氷剣でいなしていく。

——今私と相手は自室よりも広い、廊下に出ている——と、相手が壁を蹴り、私の弾幕のない空間に出ると、氷で作ったナイフをこちらに投げてきた。

それは真つ直ぐ私の元へ飛んでくるが、魔法で障壁を作りだして対処した。

そのナイフが勢いを失って地面したに落ちて、刺さる……と柄の部分が急成長し、上に向かって突きあがってきた。

パ「っ!?!」

咄嗟に後退し、躲す……が、そこにナイフほどの幅の氷の長い針が聳えていた。

更に敵が別の角度から二本、三本のナイフを放ってくる。

それに対し、こちらもスペルを唱えて対処。パ「火金符「セントエルモピラー」！」

したから電気を纏った強大な火柱が私とそのナイフを隔てるようになり、その氷のナイフと、先の氷の針をも溶かし、蒸発させる。更に、相手の方へ向かって火柱は次々と上がり続けた。

相手はその火柱を躲すが、そこに私が追撃を加える。

パ「金木符！「エレメンタルハーベスター」！」

幾つもの歯車の形をした刃が相手に向かって飛んでいく。

それらは相手と同様に火柱を避けながら相手

に迫る。

相手はその刃を凍らせて止めようとするが、周りにある火柱が氷を溶かし、刃自身も炎で熱され、燃えているので、上手くいかない。止むを得ず相手は氷で作りだした武器で歯車を弾くことにしたようだが……それも計算済みだ！

パ「捉えた……！」

相手が氷で大鎚を作り出したのと同時に、歯車に火柱を纏わせて、相手の周りを囲ませる。

すると、火柱を纏った歯車が火の尾を引きながら相手の周囲を回り、ただ一部だけを除いて退路を断つ。

その開いた穴の部分に自身の中でも高火力を誇るスペルを叩き込む。

パ「これでとどめ！日符：「ロイヤルフレア」  
！！」

叫ぶと同時に目の前に展開された魔法陣から全てを焼き尽くす高熱を伴った光の砲撃が相手に向かって複数殺到する。

それらが着弾すると館を揺るがすほどの大爆発を起こし、その爆風が私の服をこれでもかとばかりにはためかせる。

これで終わった……かのように思われたが……  
パ「う、嘘でしょ？まさか……あの攻撃を耐えたというの……？」

爆発の煙が晴れるとそこには、直径が私の身の丈の二倍ほどの氷の球がその空間に固定されたように浮かんでいた。

と思えばそれは真ん中から溶けるように消失

し、中から例の白装束の少女が現れる。

影<sup>チル</sup> 「冷防「絶対冷域」……………」

とだけポツリと相手が呟いた。

恐らくそれが技の名前なのだろう。

それにしても、あれだけの規模の爆発を受けて無傷とは……一応、建物に被害が及ばないようにと威力を相手のところに集中させるのも兼ねて相手の周りを歯車で囲ったのだが……それでも、倒れるどころか無傷？この敵は未だに未知数で限界が見えない……そんなことを考えていると相手の方からこちらに突っ込んできた。

遠距離戦では罅が明かないと思ったのだろうか、相手は手に氷の鎌を持ちながらこちらに迫ってくる。

パ「はっ、速い!!」

今までののは小手調べだったのだろうか、急に動きが段違いに速くなった。

その余りの速さに私は反応することが出来無かった。

影<sup>チル</sup> 「……………」

そこで、無情にも相手が私を間合いに入れて鎌を振り被ったその時、その足元から魔法陣が展開した。

影<sup>チル</sup> 「……………!!」

パ「勝ちを急いだわね……もう逃がさない……」  
そう、相手が接近してくることを読んで、その対策に自身の周りまで敵が来ると発動するように、既に魔法を仕込んであった。

目標の少女が罨に気を取られた隙に距離を取ると魔法陣から大量の水が噴き出て、対象を

拘束するべく覆いかぶさる。

ザザア…と水音が廊下に響いたかと思うと、  
相手を中心に据えた大きい水の球が出来上が  
っていた。

それを確認すると相手からゆっくり距離を取  
る。

パ「水符「ベリーインレイク・バインド」、  
成功……」

これは水の属性魔法…つまり静寂と浄化の  
働きがある。

これは本来は拘束には向かないかもしれない。  
しかし、今回に限ってはこれで問題無いはず  
だ。

何故かというと、冷気に対応できるはずの火  
が全く意味を成さ無かった上、火を燃え盛ら  
せる木と火の影響を受けやすい金で、相手の  
周りを囲み拘束して、能動と攻撃の目を叩き  
込んでも、無傷だったことや、水を吸収する  
効果の土の結晶に対して氷が成長していた事  
——これは、土は水を吸収するが冷気が水を  
凍らせるので吸収率を上回ったのだろう（現  
に取り付いた表面から周り込むように成長し  
ていた）——から後は防御と受動の月か静寂  
と浄化の水だけしか無くなったのである。  
月は防御と受動なので発動の式には組み込ん  
だが、これは水だけである。

でも、十分のはずだ。  
なぜなら……

影<sup>チル</sup>「……………。○○!!」

相手は少し首を傾げたあと、すぐに氷を作  
ろうとし始めた……それはそうだろう。

それがただの水であれば、敵に塩を送るようなものだ。

氷は水が凍ることによって生まれる。

だが、それはただの水ならという話で、もちろんそんなわけではない……

その水には静寂の効果がある。

その水球の中は水分子同士が氷に成るほどの結合も蒸発するほどの運動もさせない一定値になるよう、術式が組まれている。

よって、その水中で氷を作ろうとした相手は水を凍らせることができずに、泡だけが生じた手のひらを見てその無表情が一瞬、驚愕に染まり、次いでこちらを睨みつけてきた。

そしてまた自らの手のひらを見て今度は、先ほどよりも強く力を注いで氷を作ろうとした。そのことにより小さな手のひらサイズの二分の一ほどの氷の結晶ができるが、直ぐに水に

解<sup>ほく</sup>される。

次はその手にブクブクと気泡が生じ始めるが、すぐに収まり、静かになる——やっぱり

……

パ「無駄よ……？その水は蒸発も凝固もしない

……凝固しようとする限り分子は動き続け、蒸発させようとすれば、静まるようになってくる。先ほどの強烈な熱に耐えた時、まさかとは思ったけど……冷気を操る能力を通して熱まで操れるとはね……」

それならば囲まれる前に熱をある程度制御して逃げられたのではとも思ったが、手札を少しでも隠して置きたいならそれも不自然ではない。

武器で刃を弾けばいいだけの話だったからだ。まあ、確信したのはさつきスピードを出し惜しみしていたことがわかった時だが……保険をかけておいて正解だった……という訳だ。次に相手は動くことでそこから抜け出そうと試みたが、無駄に終わる。

その水球は相手を核として形成されているので相手がどこに動こうと、それに合わせて水も動く。

ならばと相手は私に向かって水球ごと接近して来る。冷気はコントロール次第では水も生み出せるので、その関係で水を操り、逆に私を閉じ込めるつもりなのだろう……

しかし、それも無為に終わる。

相手がある一定のところまで近づいた時に私が右手を前に出すと、その水球は動きを止めた。

影<sup>チル</sup>「——ッ!？」

相手はまた少しの驚愕の後こちらを見つめてくる……もう気付いたようだ。

そう、当然、水球<sup>コル</sup>は私が生み出したものなのだから私に主導権があるので自在に操れる。

水と自身を反発させて距離を取ることもし、今のように水とその中の相手を進ませないこともできる（敵が水球の核であるのに対し、水球の方も敵を核としている為だ）つまりは距離を一定に保つよう調整できるという事だ。

さて、ではそろそろこの戦いに幕を引くことにしよう。

実は先ほどの高火力を無傷で凌いだこの侵入者に研究者として深く興味が湧いていたところだったので少し惜しい気もするが、これ以上放つて置くとこちらに害を及ぼす事が明白なので、流石に手に終えない判断して片付けることにした。

パ「じゃあ、そろそろ決めさせてもらっ  
っ!？」

私は言いかけた言葉を飲み込み咄嗟に後ろへ飛んだ。

その私の目の前の相手が水球に囚われながらも手を身体を抜刀の形に構えていたからだ。何故そうしたのか自分でも分からなかったが、とりあえずそうしなければならぬと己の中の危険信号という名の本能が全力で警鐘を鳴らしていたのでそれに従った形だ。

そして、それは正解だった。

後ろに大きく飛び退いた後、前を見ると、相手が刀を抜き放った後のようなポーズを取る。その手に氷の長刀が握られている。

刃渡りが6mはあろうかという実際にはありえないであろう超長物だ。

無論水球からは刃が飛び出している。

(大太刀は最高で90cmとその手の本で読んだことがあるのを記憶しているので絶対にはありえない)

鞘に納めようとしたら確実に四苦八苦するにとだろう。

尤も、その得物は持ち主の氷で、自在に生成も消滅もできるので、関係ないのだが……故に存在している代物だった。

何故？どうして……そう考えるうち一つの答えが頭に浮かんだ。

そうか……盲点だった。

そこまで考えて、遅れたように今頃、自身の服のスカートが膝より少し上のところで、はらりと重力に従う。

辛うじて無事だった後ろの布も重さで破れたのかビリッと裂ける音がした。

そして、少しかすってしまったのか、太ももの切れた部分から血が流れている。

パ「油断した……それに、今のは惜しかったわね……まさかその水の性質を逆手に取るなんて……そんなことまでできるなんてね……

今ので更に興味が湧いたわ……でも、勿体無いけど、ここまでよ」

今起きた事を説明すると、次のようになる。まず熱を発生させ、それを鎮静化させようとする反動を利用し、熱を直ぐに冷気に変換して氷の長刀を生み出す。

先ほど、強く冷気を込めればほんの少しなら氷にできたことと、氷を散らすのにタイムラグがあったことから、思いついたのだろう。しかも、近づこうとしてすぐに止められることも計算づくで、ただ闇雲に近づこうとしていると見せかけるためのフェイクだった可能性まである。

そのことに冷や汗を流しつつ、先程よりも距離を取って止めを刺しにかかる。

その距離を取る間際、相手の刀が手元の柄の先から水球の淵までの部分が解けてなくなる。それに伴い支えを失った残りの刃が地に落ち



て刺さり、虚しくも儂く、割れるように消えた。

相手から充分に距離を取り、相手がたとえ詰め寄ろうとしても、距離を保てるように調整すると、相手の水球の中に五つの本が設置される。

パ「さようなら……。火水木金土符「賢者の石」！」

宣言と同時にそれぞれの本から、属性に合わせた五色の結晶弾が放たれる。

それらは普通の弾幕ごっこならば只の脆い石だが、今は頑丈なだけでなく、それぞれに属性も併せ持っている。

火の石に当たれば焼け、水の石に当たれば削れ、木の石に当たれば力を吸われ、金の石に当たれば鋭く斬られ、土の石に当たれば余りの硬さに骨を砕かれる。

しかも水の石に至っては水中なので威力が増す。

更にあの水球の中から外に出ることはなく、淵まで行くと内側に跳ね返り、どんどん埋め尽くされ、最終的には……………

ドドドドツブオオオンツツツ

……………!!

と、またも館中に響くほどの爆音を伴い、水球が爆散……………一滴残らず蒸発した。

これには、流星に水の静の作用も間に合うわけが無い（というか吹き飛んでいる）し相手も一溜まりもないだろう。

だが、許されるならあの者を使って、もつと色々と実験や研究を試してみたかったものだが……それが許されない理由が一つ、存在していた。

この紅魔館に仇なす強敵であるという、そのただ一点だ。

その、一点のみだが理由としては十分過ぎる。困って手元に置くにしても、あれは手に負えない……余りに強すぎる。

今も平静を装ってはいるが正直魔力も——  
ギリギリだった。

——そう、ギリギリ

だったのだ。

そのことに気付いてさえいれば、もう少しくらしいはマシな結末に辿り着いていたかもしれない……

チルノ side

搜索を始めてからどれくらい経っただろうか……あたいたちは、煌めく星空のもと、妖怪の山の麓を飛行中だった。

チ「あのさ……疑うわけじゃないんだけど……あとの位で着くの？」

あたいは前に行く藍にそう問いかける。

藍「まあ、そう思うのも無理はないか……

実際、私も歯がゆい思いをしているしな。や

はり、その場を離れてから時間が経つと気配は薄れていくようだな。確かにここを通つたようなのだが、それが散漫になつていて、どうにも辿りにくい…なので、注意深く探つていかないと、見失つてしまう……さつきまで  
はな」

あたいはその言い回しに違和感を覚える。

チ「さつきまで……つてことは……」

藍「ああ、待たせたな！今、漸く捉えた！…

橙、お前もだろうか？」

そういつて隣で飛んでいる橙を見やる藍。

それに橙も元氣よく答えた。

橙「はい!!ええーつと…この方角は…紅魔館です!」

チ「よし!急ごう!…大ちゃん」

あたいは大ちゃんに手を差しだす。

大「うん、行こう!チルノちゃん」

それに大ちゃんもあたいの手を取つて答えてくれた。

そこからあたいたちは一直線に紅魔館へと向かった。

レミリアside

レ「——!!パチエ!!大丈夫!」

遠くにこの館の居候兼司書の友人の姿を見止めると、声を掛けながら近づいていく。

パ「あら、レミイ……まあ、なんとかね……さ

つき迄はそうでもなかったけど、今は、まあ

…見ての通り……——ツ!」

こちらに気付いて顔を向けた友人は幸い、見たところ左太もものところが少し浅く切れているぐらいで、大したことは無いようだ。

(あと、これは関係無いが、スカートが短くなつて少し艶めかしい)

このくらいなら軽傷だろう。

しかし、心配だったから急いで見に来たものの、どうやら杞憂に終わったようだ……そう思ったが、ついさつき視線を元に戻してからパチエの様子がおかしい……思わずその友人の視線を辿る……そこに何かあるのか、まさか、まだ終わっていないのか……と緊張と共に友人の見ている方を見たが……そこには別に何も無かった。

レ「なに？どうしたの、パチエ……って何もないじゃない……脅かさないですよ」

パ「違うのよレミイ……だって、おかしいわ……こんな、何もないなんて……」

レ「だから、あなたがさつき跡形もなく吹っ飛ばしたんでしよう？」

パ「そんなはずない……あの敵はあの程度で消滅までするような敵じゃない!!……レ

ミイ、気を付けて！きつとまだどこかに！」そのパチエゆうじんの言葉はズバリ的中した。

何とかその言葉のおかげで最悪は避けられたと言つても過言ではないだろう。

私は目の前の友人を抱きつくような形で全力でその場からずらすことで、敵の攻撃からその命を守ることに何とか成功した。

パ「っ!!レミイ……!!」

レ「くッ……」

相手の凶刃がパチエの顔をギリギリで空振りするも髪の毛を何房か切り裂き持つて行くのがスロー再生さながらに自身の目に映る。そしてそのスロー再生は、現実に追いついて通常の速度に戻る。

私は彼女を抱えながらその場から急いで距離を取って後ろを振り返るとそこには、今抱えているこの子から今さつき切った髪を握ったままこちらを見る白い着物をきた、髪も服も肌も全体的に鬩りのある少女の姿がそこにあった。

レ「ねえ、パチエ……敵ってあいつ？」

パ「ええ、そうよ……やっぱ生きてたわね」

レ「あなたの言葉でまさかと思いつつも周りの気配に探りを入れてて良かったわ……これは感謝しないとね」

パ「それはこっちの台詞よ。とにかくこれからどうするか………ね」

レ「そんなの決まっているじゃない……この紅魔館は私の所有物。それに手を出す輩は誰であつても容赦しない……！」

パ「まさか、倒すつもり!?今、あなた本調子じゃないし、あいつはやばいわ………どうにか逃げて、助けを呼びましょう」

そう言う彼女の体はぐったりとしていて、とても逃げられるだけの魔力が残っているとはい難かった。

こんな様子では逃げたところですぐに捕まってしまうだろう。

それに敵前逃亡は自身のプライドの高さ故に激しく抵抗のある行為だし、先ほどの動きを

見る限り、敵は相当の手練れで動きも速い。それに、気になるのはさつき感じたあの感覚……こいつは……もしかして……そこでふと相手の方を見ると、そいつは先ほどのパチエの髪をむしやむしやと食べているところだった。

レ「……………っ!!……………」

その行為に怖気が走ると同時に、なにか今一瞬、私に抱かれているこの魔女と同じような気配を目の前のそいつから感じた。

その気配に疑問を抱いていると、そいつは髪を食べ終わり……………

そこからは全ての事が瞬く間に終わった。

チルノ side

目的地が定まり、急いでみんなと紅魔館に向かっているとその問題の建物が前方に見えてきた。

その館は全体が血のように赤く、湖を背に聳え立っており、時計塔の先端付近には満月が浮かび、それが異様な迫力を演出している。

そして、近づいていくとその館の門は一人が入れる分だけの隙間が開けられ、その横にいつもいるはずの門番の姿が無かった。

チ「あれ？ここでいつも美鈴が門番をしているはず……もしかして、やられたのか……？」

藍「その可能性は大いにあるだろうな、なぜなら気配はもう、館の中からするのだから」

そう言いつつ館の方を睨みつける藍。

大「そんなっ……!!」

チ「くそっつ!!」

美「あのくくく………」

一同「「……!?!?」」

さっそく出してしまった一人目の被害者が  
出たことについて全員で嘆いていると、後ろ  
の方から声が聞こえた。

それは幻想郷まにいた当初のあたいと馴染みの  
深い、そして、つい最近も聞いたことのある  
声だった。

美「助けに来て頂いたのは有難いのですが、  
勝手に殺さないでいただけますか？」

若干、呆れの入ったようなその声は、あた  
いたちのいるところから少しだけ離れたとこ  
ろに横たわる「華人小娘」紅美鈴、その人か  
ら発せられていた。(その声にはまあ、無理  
もないかというような響きも持っていた)

藍「そうか、そんなことが……」

美「はい……ですから、ここで援軍として来  
て下さるのは心強いです」

美鈴に付けられていた枷を解除し、ある程  
度の事情を聞いたあたいたちは、館の方へ駆  
け出していた。

話の中で美鈴は、自嘲気味に自分の不甲斐な  
さを嘆いていた。

全くなんの足止めにもならなかった……どこ  
ろか、自分のせいで敵を勢い付かせてしまっ  
たかもしれないぐらいだと。

だがそんなことはあろうはずがない。

彼女はこの紅魔館にとって必要な者のはずだ。

誰がなんと言おうとそれだけは絶対に揺るぎない、そう伝えるところ少し元気づけられたように微笑み、ありがとうございます。

とだけ言って、その瞳に光を取り戻した。

大「……………っ!?みんなっ!あそこに誰か倒れてるよ!」

チ「えっ!?!」

皆で広い庭の真ん中に一本通った道を駆けている途中、大ちゃんが誰かが倒れているのを庭園の中に見つけた。

それを見て、最初に叫んだのは美鈴だった。

美「咲夜さんっ!!!」

そこには、体中にナイフが刺さった状態で倒れる、「紅魔館のメイド」十六夜咲夜の姿があった。

最初に叫んだ彼女に続き、全員がそこへ駆け寄る。

またも、最初に彼女の元へ付いた美鈴が上半身を抱き起こし必死に呼びかける。

その目尻には涙が浮かんでいた……………次いで藍が咲夜の体を診る。

美「咲夜さんっ!…咲夜さんツツ!!しっかりしてください!!咲夜さん……………っ!!」

藍「待て…まだ息はある。気持ちは分かるが、今は下手に動かさない方がいい」

大「……………ツ!!ひどい……………!!」

橙「ひ、ひええーっ!!」

チ「……………」

藍が焦る気持ちを抑え、冷静に咲夜の体を診ていく。

咲夜の状態を見た面々も各々の反応を示した。



すると、一通り診終わった藍が皆の方を向いた。

藍「ふう……どうやら、幸い、どれも急所を外れている。これなら応急処置をして休ませれば問題はないだろう……だが、それにはまず、体中に刺さったナイフを抜く必要がある。それとここに何か治療に使えるようなものはないか？無いならそれで、持って来ているから別に良いのだが……」

美「それなら……咲夜さんは人間だからと、もしもの時の為に自室に備えがあると、聞いたことがあります！」

藍「うむ、それなら丁度良い……そこから物を持ってきて処置した後、本人の部屋に寝かせよう」

それを聞いて全員が胸をなで下ろした。

特に美鈴は、良かったあ……と、心底安心した様子だ。

彼女：咲夜の体はナイフによる出血こそあるものの、全て急所を外れており、急激な痛みとショックで一時的に気絶しただけのよう  
で、幸い大事には至っていなかった。

そこで、藍からあたいに向けて提案があつた。  
藍「チルノ、すまないがここからは大妖精と二人で行ってくれないか？」

チ「それは別にいいけど……何で？（まあ、大体辺りはついてるけど……一応ね）」

藍「ああ、実はここは例の影の気配が一段と強い。強すぎて逆にわからない程にな……だから私と橙はもうここまでだろう……それに、咲夜の手当てもしなければならぬから

な……ついでにそのまま見張りもしようかと思  
う。怪我人を放つては置けないからな……  
そういうわけだ。では、大妖精！チルノ！  
後は頼む」

大「はい！」

チ「うん、頼まれた」

大ちゃんが頷くのに合わせてあたいも返事  
を返す、とそこで館の方から誰かの悲鳴が聞  
こえてきた。

橙「い、今の悲鳴は？」

チ「……急ごう、大ちゃん!!」

大「：うんっ!!」

あたいと大ちゃんは館の方へと急いで入り  
、橙も咲夜の部屋へと応急用の道具を取りに  
入ったがすぐに別れ、あたいと大ちゃんは悲  
鳴が聞こえた方へと廊下を飛んで行った。

フ ラ ン s i d e

……お姉さまには、ここに居なさいって言  
われたけど、やっぱり心配だな……行こう。

私は、二度目の爆発のが聞こえた方向へと飛  
んで行ったお姉さまを追いかけて、紅魔館の  
広い廊下を飛んでいた。

そして、しばらく進むとパチエと話すお姉さ  
まの姿が見えた。

なにやら話しているが、パチエの顔を見る限  
り、どうやら終わったようだ。

そのことにホツとする反面……なんだか物足

りない、ツマラナイと感じている自分がいることに驚く。

そんな考えを振り払うように私は激しく頭を横に振った。

フ「っ!! (こんな時につ!! ……変なコト考えちやダメ!!)」

その不謹慎極まりない思考を頭から追い出そうと必死に目を瞑り、頭を抱える。

そうだ、もう終わったなら良いじゃない。

これで、騒動は終わり………しかし、何故か今日はその物足りなさが纏わりつく虫のように中々頭を離れてくれない。

フ「(お姉さまにはそう言ったけど、最初に感じていた不安のようなものは本当にそうだったの……? 本当は何かが起きることを………期待していたんじゃない?)」

そうして、少しの間うずくまり、ふと顔を上げると事態は急展開を見せていた。

先ほどまで誰もいなかった空間に白い着物の少女が現れ、その少女がパチエに切りかかっているのをお姉さまがその身を挺して、躲させているところだった。

不意にパチエの声が響いた気がしてそつちを見たら今の光景が広がっていたのである。

それを見た私は、助けなければ!と思うと同時にもう一つの感情が首をもたげているのも確かに感じていた。

……ダメだと思いつつも、口の端が釣り上がって行くのを止められない。顔が凄惨性を帯びて行く。………やったあ! これで壊せるっ!! 心ゆくまで!!”

今、私は己の中の破壊願望と必死に戦っていた。

影チルノside

眼前の魔女の姿が水中の乱反射により絶えず歪曲するのを視覚により認識。

敵戦力を誤認するが誤差の範囲であり、問題は皆無。

この対象者の能力の最大値の見極めには好都合であると判断。

命令内容の確認。

出来る限り効率的に動き、敵の能力が有効的且つ、取得可能であれば直ちに実行する。

尚、行程は予定通り進行中。

この水の球体からの脱出を試行するが失敗。

原因はこの身体が核とされていることが要因であると思われる。

手法を変え、対象への接近を試行。失敗。

既に予測済みの事象を確認。

即座に次の行動に移行する。

身を左に捻り抜刀の構え。

……その体勢から、抜刀のモーションを取り、寸前に氷による規格外の長刀を精製しつつ振り抜くも対象は衣服及び薄く肌を切られたのみで回避。

想定内事項。

その時点で殺害できた場合の予定を破棄。

対象は自身の刀の切っ先外の位置まで後退し

、（範囲よりも推定3 m外の位置）この水球内に弾幕の発生点を合計五ヶ所に設置後、それぞれが発生元に対応した属性の結晶型弾幕を展開。

弾幕はこの水球内に蓄積、反射し水球内部の者に壊滅的ダメージを与えるのが目的と思われる。

よって、この場は先の戦闘により獲得した――たいししょう「メイドの「時間操作」――能力を行使。

時間停止後、結晶弾の一つを取得。

当物体の時間の進行を確認。

前回の戦闘記録から自身が触れている物体及び人物（推定）に対し、能力は解除される模様。

極めて自然であると認識。（触れたものを動かせないのであれば時間停止中は移動しか行えないため）同時に能力の欠点を確認。

同時に、同系統の術者を破るのに有効であると思われる。

続いて自身の周辺の結晶を全て氷の刀で切断。この空間内においては、氷の精製が可能。

水分子自体も時が止まることによつて停止しているからであると予測。

以降、氷による武器の不滅も確認。

さらに切断した結晶を誘爆可能な位置へ再配置し、自身を氷の球体で、包囲し氷級内の水を全て吸収し、妖力へと変換。

時間停止を解除。

爆発による氷球の粉壊を確認。

再度時間停止、脱出口を確保し脱出後、廊下の窓より館外へと離脱。

離脱後、再度解除。

自身への能力の順応を確認。

未使用の能力の試行を開始。

自身の時の速度の上昇、それに伴う周囲の時の速度の下降による行動の高速化。

対象目標の咽頭部へと高速化した状態での氷刃による斬撃。

失敗。

新たに出現した別の対象者によって阻害された模様。

(便宜上、対象Aとする) 代替として対象の

毛髪を数本入手。摂取することで自身の体内に取り込み能力を取得。

……新たに出現した対象<sup>吸血鬼</sup>Aについては、既に影内部に蟲が付いているのを認識。

能力の取得可能条件を満たしていることを確認。

ただし、それは禁則事項であり、その場合「蟲の支配力強化」が最優先課題。

実施するには対象Aの影に直接接触れる必要性があるため、効率を優先し、対象Aを誘引する手法が最適と判断。

その行動に必要と見られる要素を自身の後方4 m地点の廊下の曲がり角にて発見。

潜伏中の新たな対象<sup>吸血鬼</sup>を誘引に使用し、同時にその対象(便宜上対象Bとする)の能力を取得することに決定。

目標を詳細に認識する為、対象Bの容姿を以下にまとめ、参照とする。

肩程まである金色の毛髪を側部に纏め枝のような物体に多彩な色の宝石が接着した翼のよ











た。

フ「マったク!!!ヨクもマあワタシの子を  
ちゅウちゅーと吸ってクレちやツテ!!蚊か  
ナに力かよ!!オかげで、首すジにアトガノ  
こツちやツタじやナイかつ!!マアすぐにな  
オるんだケドサア……」

そこにあるのは遊びに餓えた子供が玩具を  
見つけたような残酷かつ残虐な無邪気さと、  
破壊衝動に身を任せる本性を?き出しにした  
憐れな悪魔の姿だ。

フ「アハハツツ!!ホントサあ、キユウケつ  
きが、吸血サレルなんて、ワラいばなしニモ  
ならナイヨオツ!伽きやハハハツ★!!」

そんなことを楽しそうに、狂おしそうに、  
実際狂ったように喚き散らしながら、子供が  
そうするように乱暴に力任せに相手に炎剣を  
叩きつける。

ただの子供と圧倒的に違うところはそれが途  
轍もない怪力であるということ。

一体その細腕のどこにそんな力があるのかと  
疑問を抱かずには居られないが、莫大な妖力  
と吸血鬼という種族としての特性がそれを可  
能にしていた。

影ぶんしん 『ダまつてきいてレバ、イイき二なりヤ  
がつて……そんなナにコわされタイノか。コワ  
されナキやだマレナイの力?アア?』

影チル 「——!!!」  
パ「えっ!?!」

突如、炎剣を受け止めていた背中の分身が  
喋りだしたと思つたら、本体が急に頭を押さ  
えて苦しみ出した。

だが、それも数秒で収まり、それに伴って分身が本体からズルズルと抜け出てきて、完全に自分の足で立っていた。

その見た目は本体であるそいつを多角形の物体で表したような見た目で無色透明だった。

——まるで硝子細工の人形のようなだ——

そして、今度こそそいつはこの場から去って行った。

影<sup>ぶんしん</sup> 『ホラホラホラツツ!! どうしタつ!!』

モウおワリか?』

そこで、私の視線は再び、そこで争う二人に向き、次にはつと我に帰ったように、敵に何かをされたレミイの元へ飛ぶ。

そこで見た光景に思わず息を飲んだ。

パ———っ!!!」

そこには、レミイの形をした黒い何かが横たわっていた。

いや、本当は分かっている…それは黒い影がレミイを覆っているだけで、紛れも無くレミア本人だ。

そう頭では理解していても、最早別の生き物に見えるほどに、変り果てた友人の姿に絶望せずにはいられなかった。

そうして、しばらく声もかけられずにいると、突然その友人が起き出し、直後にこちらに火の魔法を放ってきた。

パ「っ!!!」

既に身構えていたので何とか躲せたが、その隙に友人の姿をしたそれは玉座のある部屋へと一瞬で飛び去って行った。

フ「イイね！イイネっ!! さイツコーだねエ

影<sup>ぶんしん</sup>!!!」

『はアWwW?!いつて口よカスがツ！

!!……………でモ、コレはスコしおもシロいかも  
ナア…………ナンせ、ワたしが目ノ前にイテシカ  
も、わたシはベツの스가タにカわつてイル：  
：コンナにおもしろいコトもホかにナイだ口  
ウさ……………あハハハっ!』

見ると、まだフランと奴の分身が戦闘中だ  
った。

加勢したいが、生憎先ほどの戦闘で使い果た  
してしまつて魔力は残っていない……………いつも  
のスペカ戦ならば力をそんなに使わないので  
余裕なのだが、今回は相手が相手だったので  
、それぞれのスペルに全力を投じてしまった  
ことで、魔力が底をついていた。

まあ、結局、それでも相手には傷一つ付かな  
かつたわけだが……………今の私には、この状況  
を打破してくれる者の存在を待ち望むことし  
かできなかつた。

———それにしても、あの分身が語つた  
、「目の前に私がいる」とはどういう意味だ  
ろうか……………あれは、あの白い着物の少女の分  
身であつて、フランの分身ではないはずなの  
に……………。

そして、フランも分身を作り出し始めた。

本体のフランの他に三体のフランを作り出し  
て、計四人での攻撃を行うスペル。

禁忌「フォーオブアカインド」である。

フ「「「ホラホラあ……………っ!!スコしでモ

ユダンシたらつぶレちやうヨ……………っ?ア  
ハハっ!!」」」

影<sup>ぶんしん</sup> 『まったく……ムレなキャコウげキデキ

ないノか？……ソンなんじヤイツまでタつてもカスリキず一つつカナイよっ!!』

戦いは激しさを増していき、館に被害が出始める。

そこで最早、祈るような心境になり、二人が何合目かわからない打ち合いになろうとしたところで唐突に救いの手が舞い降りた。

? 「冷体「スーパーアイスキツク」!!」

影<sup>ぶんしん</sup> 『つつつつ!?!』

フ「二「うわツ!!」二」

突如として現れた何者かの乱入によって、自分たちの間に割って入られたフランド、奴の分身が呻きを上げる。

乱入者は戦闘の中心で激しく回転した後、徐々に回転を弱めていき、止まった。

そして、辺りを見回した後こう尋ねた。

パ「ツ!?!」

? 「ねえ……そのあんた、これってもしかして、そのお嬢さんは暴走中で……そのあたりに似てる奴がぶっ飛ばすべき敵……ってことでOK?」

確かに似ている。瓜二つとみてもいいほどに……だからこそ最初はまた奴が戻って来たのかと身構えたが、奴はほとんど一切喋らなかつたし、何より色も雰囲気も違う……なんというか、冷たさの中にある暖かさのような気配を感じる、寒いのではなく涼しいといった印象だ。それに比べ奴の方は身が凍てつきそうになるほど冷たく、どこまでも極寒の土地が続いているかのような力の波動だった。

なので最初こそ戸惑ったものの、その質問に答えることにした。

パ「ええ、そうよ……私は今、魔力が尽きているから、手を貸してくれるととても有難いのだけれど……」

？「ああ、もちろんそのつも……（チルノちゃーー！  
ーっん……!!）」

チ「あつ大ちゃんだ……大ちゃーっんっ！  
!!……つとと!!」

フ「「あハハハハッ!!」こんどはおねえ

さんガアイあそんてシテ くれるノ?」

ぶんしん影 『オまえハ何モノだあッ……!!なぜわ

たシと同質ノよウリヨクを……ハッツ……!  
ソウか……おマエが!ワたしのフクセイもとカ  
!!』

廊下の奥から連れの者と思しきこちらに飛  
んできながら目の前の人物の名を呼び、それ  
が遠くから響く。

その呼びかけに目の前の者が応えて手を振ろ  
うとしたときに、思い出したかのようにフラ  
ン（とその分身を合わせた四人）と奴の分身  
が、乱入してきた彼女に一齐に挑みかかった。  
四人のフランの声と、まるでエコー（反響）  
がかかったかのような氷の分身（以下氷身）の  
声が廊下に響く。

フラン四人分の炎剣が、氷身の大剣が、彼女  
の元に殺到する……が、それは難なく空を切つ  
た。

チ「……つと……ふう……まずそのあんた……協  
力はするよ?その為に来たからね……あとそ  
このあたいの氷像みたいな奴、正解だよ……」

正確にはあんたの本体の、だけどね。それからお嬢さん、今はあんまり遊んでる暇はないかな」

影<sup>ぶんしん</sup> 『(いッシユんでイドウした!?)』

フ「(ふふふ、オモしろソウ……!!!)」

フ「だったラ!」「いやデモ!」「あイテセザるをエナイよウに……」「シテアゲルまデだヨツツ!!」

影<sup>ぶんしん</sup> 『キサまは、コロす!!』

フランは四人のリレーでそう叫ぶと、チルノに手のひらを向けてだした。

一方氷身は機会を伺っている。

パ「逃げてツ!!フランの破壊の能力よ!!」

チ「イツ!?うそっ……!!」

フ「!!「キュっとして……ドカーンツツ!!」  
!」

実に四人分のフランの「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」が彼女、チルノと呼ばれていた少女を爆散させるかと思われた……その時、突如彼女の姿が忽然と消え、フランの能力は彼女の後ろにあった天井と壁の取り合いを代わりに爆発させた。

急ぎ、空間に浮遊することで飛び散った瓦礫を回避する。

氷身は大剣で難なく弾いて見せていた。

大「もうっ!!チルノちゃん!無理しちゃダメだつてば!!」

チ「ごめん……大ちゃん、分身も用意しなかつたや……」

声が聞こえたところを見るとそこには彼女が”大ちゃん”と呼ぶ少女が増えていた。



恐らく先ほどの声の主だろう。

そういえば、彼女が消える瞬間：隣に緑髪の少女が一瞬見えていたような気がする。

チ「……って!!大ちゃん、ヤバイよ!!あれあれっ!!」

フ「「あッハハハハハハハ!!ふつとべえ!!」」

大「う、うわあッッ!!」

フランが二人に向けて能力を乱発していた。

それを先ほどのように瞬間移動で避けていく。すると突如、二人の背後に例の氷身が現れ、

切りかかった。

<sup>ぶんしん</sup>影 『チヨツとチヨツとオ……なに、そつち

だけデあそんでルンダヨ……わたしもまぜな

よおWW!!ハハッ!!☆』

チ「っ!!つたく……邪魔っ!!（今、一瞬で

移動したよね……何て言うか、一コマで……

ああ……そういうこと）」

しかし、それにチルノが反応して相手の大

剣を同じ大剣でいなし、大妖精が（恐らく彼

女のものと思われる）能力で瞬間移動してフ

ランの破壊の能力を免れる。

そこで、躲され続けて痺れを切らしたフラン

が勝負に打って出た。

フ「もオ……ジレったイナあつ……!!わたし

がちヨクセツコわシニいつチャお……!!」

「ソウダね……」「ソウシよウ……」「それに

ケツてーーいッ!!」

四人のフランが互いにそれぞれ相槌を打ち

、全力で二人を潰しに掛かる。

フ「オフタリさん!タのシかつタよっ!デモ

……「コレで」「おしマイ!」「禁忌」「レー  
ヴァツイン」ツツ!!」

フランがスペルを叫ぶと同時に、四人のフ  
ランの持つている炎剣が二つに増える。

そして、合計八本のレーヴァテインが今まで  
と段違いのスピードで二人に襲いかかった。

チ「終わり、か…それはコツチの台詞だよ、  
お嬢さん…これで、遊びは終わりだ!!」

その言葉の直後、一瞬で勝負は決した。

見るとそこには、楽しそうな表情のまま氷漬  
けになったフランが氷塊の中で固まっている。  
全く何が起きたのか分からなかった。

一体今の一瞬に何が…と混乱にしばらく固  
まっていると、下から驚愕したような声が聞  
こえてきた。

影<sup>ぶんしん</sup> 『ナ、なぜだっ!? ナんでウゴケル!!』

チ「…あんだ、時間を操ってたんだろ? そ  
れはあんたのさっきの動きで分かったんだ。

あたいにも見えないような速さで、何の予備

動作も無く、始めからそうだったかのように  
移動してたんだから分からないほうがおかし  
いよ。それに、それを利用した攻撃方法も直  
ぐに想像できたよ…水の緒をお嬢さんと

その分身たちにつけておいて、時間停止の影  
響を受けないようにして時間を止める…

そして、そのまま切りかかるとあたいたちは  
まとめてズバツ!!…如何にも面倒臭がり  
なあたいの考えそうな事だ。でも、それを読  
ん出たあたいは影響を受けていないお嬢さん  
の分身の一人にあんだと同じように水の緒を  
付けておいたのさ…まあ、あんに直接つ

けても良かったけど……それだと勘づかれそ  
うだしね」

影 『つつつ!!!ぐう……だガっ!!ナゼ』

、わたしが触れてイルとエイきよウをウケな  
イとワかつた……!!』

チ 「それはだつて……そうじゃなきや、  
あんたが持っている大剣、どうやって  
持つて動くのさ?」

影 『……ツツ!!』

チ 「それじゃ、説明も終わったことだし……行  
くよっ!!!」

影 『くつ……くソオオオオつ!!』

そして、またも私の目から見て戦いは直ぐ  
に決着した。

く時間停止の空間く

チルノside

影 『な!?!コンどはナンデうゴケるツツ!

!サッキノヨウな繋がりなド……ドコにもナイ  
とイウノにいツツ……!!!』

チ 「悪いんだけどさ……さっきのでもう学習し  
ちやつたから、あたいにも時間停止使えるん  
だよね……それに……大ちゃんツツ!」

大 「うん!行くよっ!チルノちゃんツツ!!」

影 『……ハツ……!!?』

チ 「あたいは……一人じゃないツツ!!」

影 『ツツ!!しまツ……!!グああああアアア  
!!!』

それがそいつの断末魔の叫びとなった。

大ちゃんの能力で相手の背後まで瞬間で座標移動し、相手の胴を太刀で真つ二つにした。その直後、相手の体が瓦解し粉々になってあたいに吸収された。

氷の微細な結晶があたいの周囲を舞う。

チ「これで、ゲームオーバーだ……聞こえてないか……」

そして、静かに時間停止を解除した。

パチユリーside

本で読んだのだが、映写機というものが外の世界にはあるらしく、それはフィルムと呼ばれる光を通す素材に絵を写して、裏から光を当てることで、スクリーンとよばれる幕に映像を映す機械なのだが、そのフィルムは同じようで少しだけ違う絵が何枚も連なっており、それを回すことで動いているかのように見せるのだ。

それをコマ送りというのだが、今日の前にある光景はまさにその、コマ送りのコマを何枚か飛ばしたような、そんな光景だった。

その手品か何かのようなそれは咲夜がやっていたので見慣れているはずだったのだが……他のものがやっているのを見るのではわけが違う。

確かに最初に出会った時には咲夜にも驚いたが、それを当然の様にできる人間がやっているのを毎回見ると時間停止を出来ないはずの氷精がやっているのを見るのでは、同じ見るのでも衝撃が段違いだ。

本来できるはずのない者がやってのけているという事と、他にもできるものが居たという二つが重なったことで驚きは二倍になった。今にして思えば幻想郷はそんな者ばかりが居るところであるし、不思議はないのかもしれないが、それでも幻想郷でも珍しいはずの深夜の時間操作をあつた氷精がやったということに驚きを隠せなかった。

そう、「チルノ」という名前を聞いて漸く私は思い出した。

それは確か、門番である美鈴によく相手をして貰っていた氷の妖精の名前——だったはずだ。

——その氷精はそんなに力もなく、頭も良くなかったはずなのだが——

そして、隣にいる妖精はそのチルノの親友で、大妖精だったと記憶していた(廊下を通り掛かった時に仲良く遊ぶ様子を窓から見たことがあったので間違いない)。

親友：私とレミイの関係と同じ……そこまで考えて、現在自分の親友が置かれている状況のことを思い出す……その直前に相手が話しかけてきた。

チ「……つと、ふう……ここは何とか片付いたね……で、えーっつとお……確か、あんたがパチュリー？」

パ「!!……どうして私の名前を？」  
チ「ああ、それは……幻想郷縁起に名前とか容姿とかが載ってたからね」

パ「あれを読んでいるのね……ええ、私がパチュリーよ。パチュリー・ノーレッジ」

チ「そう…あたいはチルノ。それでこつちが大妖精の大ちゃんだよ」

大「初めまして！パチュリーさん！」

パ「ええ、初めまして。大妖精」

チ「それで、この子がフラン…：だよね」

言いながら、氷塊のなかに閉じ込められているフランを見やるチルノ。

パ「ええ、その通りよ…：それと、さつきは危ないところを助けてくれてありがとう…：

感謝するわ。その、助けてもらっておいて何なんだけれど…：もう一人助けて欲しいとか、急いで欲しいというか…：」

チ「うん、この紅魔館の主人…：レミリア・スカーレットだよ。正直、影と出くわさなかったし、（まあ、分身は居たけど）あとこゝでそれが憑いているとすれば、その人しかないからね」

パ「影？」

チ「ああ…：その辺の事情は後で説明があると思うからその時にして、まずはその人のところに案内してもらおうかな」

パ「え、ええ…：わかったわ。…：こつちよ」

そして、あたいたちはパチュリーを先頭にだだっ広い館の廊下を暗がりの方へと飛んでいった。











## 第十三話 氷争（紅魔 其の参

レミリア side

とても不可思議な感覚が今の私を支配していた。

玉座に腰かけひじ掛けに肘をつき、頬をその片手に預けながらそのことについて考える。

それは、力の湖の中に浸っているかのような感覚で、とても心地よく、気分が良いが意識が朦朧として、喋ることすら億劫になるような無気力感だった。

それが全身を支配している。

しかし、そこに一度命令を投げ込まればそれを何が何でも遂行しようとする謎の意思力に満ちていた。

そう…待っているのだ、その時を。

そして…それはやって来た。

今まさに自身に下された指令は目の前に現れた者たちの抹殺だ。

正直、これほどの力があれば容易いだろうと思う。

私は宙に浮かび、現れたものたちと対峙する。そして、その抹殺対象のうちの一人が前に進み出て、必死の形相で、どこかで聞いたことのあるような声で叫んできた。

そう、あれはどこだったろう…:…:…:

しかし、すぐにそんなことはどうでも良くなつた。

? 「レミィ!!! 私よ!! 分からないの!?!」

今の私に届くのは、自身を支配する者の声のみだ。

よって、どこかで聞いたことのあるようなその声の主が誰なのか思い出すことは無かった。

チルノ side

パチュリーの先導で、レミアアのいる部屋まであたいたちは辿り着いた。

チ「ありがとう…パチュリー。ここからはあたいと大ちゃんに任せて、あんたは咲夜の部屋へ行つて咲夜と藍、橙と合流して避難してよ」

大「案内、助かりました！ありがとうございます！まず！安心してください！必ずレミアアさんを助け出して見せます！」

パ「そのことなただけけど……」

チ大「？」

パ「……今の私が行つても足手纏いなのは重々承知しているわ…でも、私も同行させて貰う事は出来ないかしら」

パチュリーは、あたいの目を真っ直ぐに見つめてそう願ひ出て来た。

チ「……危険だよ？それでも行くの？」

大「そうですね！！そんな……っ」

パ「危険は承知の上よ……でも、私はもう後悔したくない。あの子があの子の影のようなものに飲み込まれた時に、私は近づくことさえ出来なかった、ううん近づくのを躊躇ってしまつたの…もちろん、だからと言ってその後

の結果に変化があったとは思わないし、そう  
することで最悪私も取り込まれていたかもしれ  
ない……それでも」

大「……………」

パ「それでも私は例え一時でも保身に走った  
…それが正しい選択だったとしても、私は自  
分を許せ無いの…少しでもあの子の助けにな  
りたいの…親友…だからね。…だから、今  
度はその手を掴んで離さない…呼びかけて  
少しでもあの子が戻ってこられるようにした  
いの…駄目かしら？」

そう語るパチュリーの目は非常に真剣なそ  
れだった。

友を救いたいという切実な思いが伝わって  
くる。

だから………あたいの答えは一つだ。

チ「まったく…そう言われたら弱いね…そ  
の気持ちは良くわかるしね……」

言いながら大ちゃんを見る。  
あたいだって大ちゃんが同じ様な目にあつた  
のだ。

例えこんな力が無くたってあたいは大ちゃん  
のことを……

大「……うん、私にもわかる……パチュリーさん  
！…さつきはすみませんでした……私にも  
親友を危険に飛び込んででも助けたい気持ち  
があつたのに……だから、私、全力でお手伝  
いします!!」

どうやら大ちゃんも同じ気持ちのようだ。

パ「いいえ、無理を言っているのはこちらな  
のだし、さつきの事も私を守る為に言ってく

れた事だから……感謝こそすれ、文句なんてあるわけないわ……でも、ありがとう」

チ「どういたしまして」

大「必ず取り戻しましょう!! 私たちのところへ!!」

パ「ええ、そうね……必ず……!」

チ「それじゃあ、これが今回のラストターンだね……」

言いながら扉を開けるあたい。

その先には若干想像とは外れた、しかし概ねその通りで、全くの予想通りの人物が玉座に鎮座していた。

大妖精 side

チルノちゃんが扉を開け、その部屋の中に入って行くのに私とパチュリーさんもついていく。

そして、その部屋の中のいわゆる玉座と呼ばれるその椅子には一人の、背中に蝙蝠の羽を生やした人が、まるでレミア本人の輪郭を真っ黒に塗りつぶしたようなシルエットのような姿でそこに腰掛けていた。

その人は入ってきた私たちをまるでなんとも思っていないかのように、肘掛けに肘をついてその手に頭を乗せて尊大な態度を取っている。

かと思えば、彼女は椅子から立ち上がり、宙に浮かび上がった。

恐らく戦意を表しているのだろう。

……わかっていたことだが、どうやらやるしかないようだ。

そんなことを考えていると、パチュリーさんがその影の人に必死に、かけがえのない人を取り戻さんと懸命に呼びかける。

パ「レミイ、お願いよ!! 気付いて!!!」

しかし、その呼び声虚しく……この紅魔館の主にして、誇り高き「紅い悪魔」レミリア・スカーレットは、只の傀儡かいらいとしての行動を私たちに取るのだった。

ミ「……………」

天罰「スターオブダビデ」

彼女が手を広げると同時に弾幕が展開される、部屋全体にレーザーが展開、丸弾、リング型の弾幕が打ち込まれてくる。

私はそれらがパチュリーさんに当たる前に座標移動で二人一緒に移動する。

前ではすでにチルノちゃんがレミリアさんと戦っている。

そこでふとパチュリーさんを見ると悲痛な面持ちで私に抱いだかれていた。

それはそうだろう……自分の声が親友に届かなかったのだから。

大「パチュリーさん……諦めないでくださいー!」

パ「え……?」

大「一回でダメなら二回、二回でダメなら三回……何度でも何回でも呼びかけましょう! その為なら私もギリギリまで近づきます! ！力になりますから!」

パ「でも、そんなことをすればあなたまで……」

…!!」

大「私は大丈夫ですから！それよりもあなたを守るかが心配ですが…でも、私、頑張りますから!!さあ…もう一度！」

パ「ええ、そうね…お願いできるかしら！」

大「はい！喜んで!!」

彼女は私の励ましに応えて元気を出してくれた。(もちろん会話中も弾幕を避けている)それから、私は自身の座標移動を駆使して何とかギリギリまで近づきつつ、弾幕を躲す。すると、チルノちゃんから声が上がった。

チ「バカなっ!?!なんで躲されるっ!!?!」

見ると確かに、チルノちゃんの攻撃は躲され続けているようだ。

私の目には最早、何も見えなくらいに速い攻撃なのだが、それらを避けれているということは分かる。

なぜなら相手が止まっていないからだ、何らかの攻撃が当たっているのならその分動きが止まるはずなのにそれが一向に無い。

私の目では捉えられないので、もしかしたら掠ったりくらいはしているのかもしれないが、少なくとも決定打にはなるような攻撃は受けていない。

大「(おかしい…確かに、凄い力を感じるけど…チルノちゃんほどじゃないはずなのに…:…)」

それにおかしなことはまだあった。さつきからちゃんと弾幕の射線を見て躲してはるはずなのにどういうわけか、気付くと躲した先に弾幕が待ち構えているのだ。



酷い時には躲して移動した先に弾幕が飛んで来ていて危うく被弾しそうになつてしまったこともある。(私が、見切れていないといえればそれまで何だけれど……………)

しかも、チルノちゃんはその弾幕をエネルギーとして吸収しようとしても、弾のほうが微妙にチルノちゃんを避けて行つてしまう……これは流石におかしい……とそんなことを考えていると、レミリアさんから放たれる弾幕が変化した。

ミ「……………」

紅符「スカーレットマイスタ」

大「う、うわわっ……………」

突如、弾幕のパターンが変わつたことでまとも被弾しそうになり、弾幕がすぐ横を掠めていった。

更に彼女はチルノちゃんへの反撃をも開始する……そこで私はとんでもないものを目撃した。

なんと、レミリアさんの攻撃がチルノちゃんに直撃したのである。

チ「ツツツツ!?!」

横回し蹴りを脇腹に受けてチルノちゃんは部屋の壁まで吹っ飛ばされてしまった。

……そこからは、なんとか受けやガード等で凌いでいるものの、チルノちゃんは防戦を強いられ、躲そうとすればそれはもれなくチルノちゃんへのクリーンヒットになつてしまう。チ「……………があっ……………!!つつ……………でやあ!!……………!?!」

そして、相手の打撃後の硬直を狙つてカウ

ンターを放つても何故か軽々と躲されてしま  
う。

チ「ならばっ!!」

その言葉の直後にチルノちゃんとレミリア  
さんは、一瞬で部屋の端から端へ移動してい  
た。

それは、弾幕がレミリアさんがさつき迄いた  
ところから移動したところまでの間の弾幕が  
一瞬で消えていたので時間停止だと分かった。

(妖力弾は時間停止中に止まっている間に吸  
収したのだろう)

つまり、さつきの戦いでチルノちゃんが学習  
した時間操作である。

しかし……それでも、レミリアさんには攻撃  
が当たっていなかった……それどころかチル  
ノちゃんが攻撃を受けていた。

チ「あの空間の中で動いた!?!……というこ  
とはまさか!!」

そう、だとすればその答えは一つ。

驚くべきことに今の彼女も時間操作が使える  
のである。

そこで、レミリアさんに絶えず呼びかけてい  
たパチュリーさんがそれを一時中断して、チ  
ルノちゃんに話しかける。

パ「気を付けてっ!!今思い出したのだけど  
、今のレミィは恐らく、私の精霊魔法も操れ  
るわ!!」

チ「なっ!?!」

パ「それと、さつきからこちらが一方的に攻  
撃を受けているのは……レミィの「運命を操  
る程度の能力」によるものよ!!」



もスペルを二つも重ねることで、密度を高め  
て避けにくくするつもりらしい。

何とか、パチュリーさんの指示と自身の能力  
と反射神経で躲していくが、いつまで持つか  
分からない。

そして、ついに相手の目論見は功を奏するこ  
とになる。

こちらに向かってきた妖力弾の射線を避けら  
れずに弾が目の前まで来ていた。

大「きやあつつつ!!……………?」

その時、光弾による熱と衝撃を覚悟したの  
だが、一向にそれが来ない。

恐る恐る目を開けると、この部屋に入る前に  
チルノちゃんから渡された翡翠色の結晶が淡  
く静かに輝いていた。

それを見て、この部屋に入る前のチルノち  
ゃんの会話を思い出す。

それは、パチュリーさんとお話をする前のこ  
と……

チ「大ちゃん、これ……」

大「……………?なに……………?これ……なんか凄く、綺麗  
だけど……」

チルノちゃんはどこからともなく翡翠色に  
淡く光る結晶を取り出して、私に手渡した。  
私がそれをしげしげと眺めているとチルノち  
ゃんが説明を始めた。

チ「一応……心配だから、それを渡しておくよ。  
……それを持っていると熱と衝撃から守って  
くれるようになってるから、持っていれば例え  
攻撃を受けても少しくらいは大丈夫なはずだ  
よ」

大「へえくく……あつ！これってもしかして、他にも人を探したり涼んだりできるのもある……あれ？」

チ「うん、あたいが持っている十の結晶のうちの一つだよ」

それには覚えがあった。

みすちーと一緒に探したり、リリーちゃんが涼むのに貸してあげていたものとはそれぞれの色と役割が違うものと同じ結晶なのだろう。そこまで思い浮かべるとチルノちゃんが先を続ける。

チ「でもまあ、絶対つてわけでもないし、あんまり頼りすぎると危ないと思うからお守り程度に思ってくれたらいいよ。だから……あんまりあてにし過ぎないように忘れててくれても構わないから……」

大「うん、わかった。ありがとね、チルノちゃん!!」

そして、笑顔でそう答えたのだった。

その時、パチュリーさんはそんな私たちのやり取りを温かく見守るような、それでいて自分と同じものをみるような目で私を見ていた。

………。

チルノちゃんはお守り程度に思っておいてなんて言っていたけれどとんでもない。

結晶こくれはそれ以上の効果をしつかりと発揮していた。

はつきり言って、単なるお守り以上だ、その効果は靦面だった。

私もチルノちゃんの言葉を真に受けて、必死

に逃げ回っていたのだが、この結晶の効果を  
見て、これなら多少突っ込んで行っても問題  
はなさそうだと確信する。

しかし、頼りすぎるのも良くないというのは  
分かる気がする。

確かに熱と衝撃からは完璧すぎるほどに守っ  
てくれたが、その他に関してはまだ何とも言  
えないのだ。

だから、そこは気を付けるべきだろう。  
でもこれで、弾幕の嵐を気にせずチルノちゃ  
んに加勢できる。

そう思うと手のひらで輝く、私の髪の色に似  
た翡翠色の結晶がそれに応えるかのように微  
かに瞬いたような気がした。

大「チルノちゃんてば……心配しすぎだよ……  
でも、これで私も……君の隣に行ける!!」  
因みに私に傍観するという選択肢はない。

パチュリーさんには悪いけど、私は少しでも  
親友の扶けになりたい。

それに、今私のもとに耐熱耐衝こ撃結晶がある  
ということはチルノちゃんの熱と衝撃に対す  
る耐性が落ちているということになる。

今は熱はともかく衝撃をもろに受けるような  
状況で——レミアさんは今、背後で操る、

飛フエイワン王の指示なのか、チルノちゃんに対して

は接近戦や格闘などの肉弾戦しかしてこない  
——それは拙いし、親友がそんな状態なのに  
離れたところで見ていることなど出来るわけ  
ない——さつき壁まで吹っ飛ばされた攻撃

だって、この結晶があればなんてことはなか  
ったはずなのに、私に渡したままで………だか

ら、できることなら、側に行つて力になりたい！そんな思いを察してか、パチュリーさんが私の背中を押してくれた。

パ「……私のことはいいから、行つてきなさい！……あの子のこと……大切なんでしょう？」

パ「私は外で待つているわ……今……私の声はレミイにはどうやって届かないみたいだから……」

そんな風に悲愴感を漂わせながら言う彼女に私は反論の声を上げる。

大「……っ!! そんな……諦めないでください

!!……それに、私から離れたらパチュリー

さんは弾幕に晒されることに……つて……あれ？」

パ「そう、今は弾幕は止んでいるわ。恐らく、さつきあなたに弾幕が効かなかつたのを見て無駄と判断したんでしよう……だから、私は弾幕の雨に晒されることなくこの部屋から出られるわ」

大「でもっ！それじゃレミアさんのことはどうするんですか!!」

パ「別に諦めるわけじゃないわ……それをするのが今は私の役目ではないというだけ……それならいつそあなたたちに託して、私はレミイが帰つてきたときの為に備えておく方がいいと思っただけよ」

パ「私は居なくなるけどその代わり……一応、精霊魔法の一通りの知識をあなたに託しておくわ。使う事があるか、わからないけれど……今の私にできることはこのくらい……でも、

私は絶対に諦めない！だから、あなたも……

あ<sup>チ</sup>の子<sup>ル</sup>を傍で支えてあげなさい

。そして、必ずレミイを連れ戻してきて」

大「パチユリーさん……」

パ「ふふっ……それに、私に諦めるなって言  
っただけで自分はやらないなんて……そんな  
こと……もちろんないわよね？」

大「……!!はいっ!もちろん!!……パチ  
ユリーさん……ありがとうございますっ!!!」

そこで私は彼女から直接頭の中へ知識を与  
えてもらおうと、その場にパチユリーさんを置  
いて急ぎ、チルノちゃんの元へと飛んだ。

パ「レミイ……今の私ではあなたに声を届か  
せられなかったけれど、あなたに私の声が届  
くようになったら、私が最初に声を掛けるか  
ら……それで許して頂戴……」

部屋の中の戦場で踊る友を振り返りながら  
、切に祈るような謝罪の言葉は誰にも拾われ  
ることなく虚空に消えていった。

チルノ side

相変わらずこちらの攻撃がすべて躲される  
かいなされて、一向に相手に対して攻撃が入  
らない。

それどころか、相手の攻撃はほぼ確実に自分  
に入ってくるので、避けるに転じればそのまま  
相手からダメージを受けることになる。

なので、防戦一方ならぬ攻戦一方での戦いを  
強いられ続けていた。

少しでも攻撃の手を緩めれば相手からの反撃  
が飛んでくるという、とても際どい状況であ



る。

そんな、状況を耐え忍びながら戦闘していると、覚えのある気配が近づいてきた。

大「チルノちゃん！」

チ「…大ちゃん！…つく!!」

大ちゃんが危険を冒してまであたいに会いに来てくれた。

それに応えようとしたが、どうやらその暇すら与えて貰えないらしい。

攻撃の手を緩めれば忽ち反撃が飛んでくる。

しかし、何とか相手に攻撃を繰り返しつつ、大ちゃんに向けて声を張り上げる。

チ「大ちゃん!!来てくれたのは嬉しいけど

…ここは危険だから早く下がって!!」

大「そんなことできないよ…!私も一緒に…!!」

そんなやり取りを聴いてなのかは分からな

いが、相手はあたいを罅迫り合いの末に遠くまであたいを押しのけると、大ちゃんに向けて手を出した。

そう、まるで自身の手の中にある相手の最も緊張した部分目を握りつぶそうとするかのように。

チ「(こ、これはまさか…!-)大ちゃんっ!

!離れて!!」

大「え?…!!」

大ちゃんは…一瞬遅れてそれに気が付いたようだ。

だが、その間にもレミリアのその手は閉じられてゆく。

最早迷っている暇はなかった。

チ「(…大丈夫だ、あの能力はちやんと見

たじやないか！いまならできるはず）……………  
！！」

大丈夫だと自分を奮い立たせ、あたいは目の前の敵の手を見据えた。

大「つ……………！！……………？……………！」

大ちゃんは自身に襲いかかるはずの破壊の能力を目を瞑りながらじっと待っていた。

……………が一向にそれが来ないことを不思議に思ってたか、目を開けて様子を見る。

……………その瞳には、あたいが映っている。

あたいは、レミアアがフランの「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」を発動させる前にフランから見ていた、その破壊の能力の本質である、その物体の最も緊張した部分である「目」を自分の手に移動させて握り潰すことができる力を使って、既にレミアアに移動していた大ちゃんの「目」をあたいの手に移動させ、レミアアが大ちゃんを破壊するのを防いだ。

そして、相手が手を握る瞬間にそれを発動して同時に相手に突撃し、相手を壁まで弾き飛ばしたのだ。

レミアアが能力を発動させようとしてるのはなんとなく勘で分かった。

嫌な予感がしたし、何よりフランがそうしていたのと全く同じだったので、すぐに直感した。

大「チルノちゃん……………」

チ「大丈夫？ケガはない？」

一応、そう訊ねてから自身の手に移っていた大ちゃんの「目」を大ちゃんに戻す。

その時、まるで思い出したかのように敵が壁が崩れた瓦礫を吹き飛ばして再び目の前に現れた。

そこであたいは頭の中で一つの作戦を思いついたのでそれを大ちゃんに告げる。

チ「ねえ大ちゃん：ちよつと手伝つて欲しいことがあるんだけどいいかな：」

大「！なに？なんでも言つて？チルノちゃん！」

チ「あのね・・・」

そこであたいが大ちゃんに耳打ちすると、大ちゃんはうん！わかつた！と力強く頷いてくれた・・・そしてあたいと大ちゃんが話していると、相手が紅い槍をこちらに構え、そして投げた。

チ「・・・ありがとう。・・・！！来るよ！大ちゃん！」

そして、相手の放った槍が届く前に大ちゃんの座標移動で躲す。

あたいは大ちゃんと一緒に移動した後、相手の背後に回り込んで大ちゃんと挟み撃ちにするように陣取った。

そこで相手があたいに向き直り、槍を手元に出現させて構え、そのままこちらに突っ込んできた。

チ「っ！！（まただ・・・「運命」の所為か反応が遅れて、どちらに避けるかを迷ってしまった！！）」

その一瞬の隙を突くように：正確にはその隙が現れるのを確信した上での突撃だった。つまり、相手はただ突っ込んでいればそれで

隙が生じるように運命を操作したのである。

大「：っ!! やあああああーっツツ!

!!」

ミ「——!!……?」

しかし、そこで大ちゃんの全力の飛び蹴りが背後からレミリアに炸裂する。

蹴り飛ばされつつもそのことに驚くように全身が真っ黒な影に覆われたレミリアは振り向いた。

それもそのはず、あたかも正直なところ、上手くいったことに胸を撫で下ろしている所なのだから、、

あたいは大ちゃんにレミリアを倒す為にあることを提案した。

大「なんでも言っつて! チルノちゃん!」

チ「それじゃあ大ちゃんは、レミリアの背後、または正面に行つて、あたいと挟み撃ちの形をとつて欲しい!」

大「うん! 分かつた! ……けど、なんで?」

チ「それはやったら大体分かると思う。それで、あたいとその形になったら、相手は多分あたいを狙ってくるだろうから、そこを突いてレミリアに攻撃を入れて欲しいんだ!」

大「ええ!?! でも、運命力で躲されてしまうんじゃない……!」

チ「そのことも、やって見れば結果はわかると思う。だから、取り敢えずその二つをお願いするね?」

大「う、うん! わかつた! 任せて!」

チ「問題は精霊魔法なんだけど、あたいはその手のエネルギーを吸収できるから関係ない

けど、その力だけはまだ持つてないから相殺できないんだよね……どうしようかな……」

大「それなら……！私はパチュリーさんから精霊魔法の知識を貰ってるからちちゃんと躲せるし、対応できるよ！」

チ「！そうなの？それなら……でも、気を付けてね。大ちゃん……」

大「うん！チルノちゃんもね！」

以上が先ほどの会話の内容である。

破壊の能力はあたいが何とかできるし、時間操作は相手も使えるから意味がない。

後は運命と魔法をどうにかしなければならぬが、それもこれで解消された。

何故かと言うと、精霊魔法に関して大ちゃんがパチュリーから知識を貰っているし、運命の方は今さつき、大ちゃんがレミアに一撃入れられたことで確信に変わった。

……あの運命操作は対面している相手、若しくは認識している相手に最も効果があり、その他では効果が薄いのだ。

その根拠は、相対していた自分がここまで追い詰められたのに対して大ちゃんはちちゃんと躲してこれたことだ……とそこまで考えた時、相手が大ちゃんに弾幕でない魔法を撃ち込み始めた。

それも相克と相生等の関係をうまく使って攻撃している。

まず、金属性の魔法を放ち、次に金と相性の良い土の属性で攻撃するなど、考えて攻撃している。

しかし、大ちゃんも座標移動を駆使して躲し

続ける……そのうちに、放たれる属性が一巡し、全ての属性が場に出てきた。

一向に攻撃が当たらないのを受けて相手が大ちゃんの周りを囲みに掛かる。

大「う、うわっ！」

そこで、一つの水属性の魔弾が大ちゃんのギリギリ横を通り抜けて行って肝が冷えたがなんとか躲したのを見て安堵する。

そこで、また今度は火の弾が彼女を襲うが、ここで戦局が変わり始める。

火の弾に追いかけられていた大ちゃんは水属性の魔法の近くに来てギリギリで瞬間移動し、火の弾幕を水属性の魔法で相殺した。

・・・その後も、木属性なら金で、水属性なら土と次々と躲しながら逆属性で相殺し、対応していく。

その、まるで草が風に煽られるだけで一向に抜けずそこにあるかのような埒の明かない展開にレミアは運命操作を強くかけて大ちゃんに弾幕を当てに掛かる。

チ「——はああああっ!!そこだっ!!!」

ミ「——ッ!!!」

キインツ!

その瞬間を狙って、あたいはレミアに突撃を仕掛けるも、寸前で、運命の能力の対象をあたいに変更した上で、紅槍で受け流されてしまった。

大「——ああっ!惜しい!!……つと、うわわ」

チ「大ちゃんっ!!」

大「大丈夫っ!!…これ、くらい、どうってことは……!!」

大ちゃんがあたいに心配かけまいと弾幕を躲しながら、こつちに返答する。

そこで、レミリアがあたいと大ちゃんの包囲から離脱し、壁を背にして戦い始めた。

そして今度は、精霊魔法以外の時間操作、破壊の能力、運命操作、の三つをフルに活用して、あたいと大ちゃんに攻撃を仕掛けてきた。…しかし、これを目にしたとき、あたいは悟った……。もう、終わりが近いということ。

チ「大ちゃん!ついに、追い込んだよ!」

大「え!?!…チルノちゃん、それはどういう……」

チ「……言葉通りの意味だよ。相手はあたいたちをまとめて相手しなきゃいけなくなつたし、精霊魔法は意味をなさないと知って使つてこない…だから、既に見切られていると分かっていても他の運命操作と時間操作、破壊の能力を使うしかなかった。大ちゃんに魔法は当たらないし、あたいには吸収されてしまうからだ……。だから、相手はもう手詰まりなんだよ」

大「な、なるほど…それじゃあ、あとは……」

チ「うん!ここから畳み掛けるよ!!合わせ  
て!大ちゃん!」

大「了解!!」

だがここで、相手はあたいたち二人を認識することで運命の能力を平均的にあたいたち

に掛けて対応しようとしているようだ。  
その証拠に攻撃は躲され、こちらに攻撃が掠  
めて行く。

だがそれは個別に離れた所から攻撃した場合  
であり、これからする攻撃に対しては意味を  
なさないだろう。なぜなら……

チ「あたいの進行方向に先に転移して、あた  
いと一緒に転移してから離れるのを繰り返し  
て！それで相手の攪乱と包囲を同時にする！」

大「はい！」

そのあたいの指示に大ちゃんは身構える。

あたいは大ちゃんがギリギリ反応できる程度  
のスピードで、相手の周りを飛ぶ。

そして、大ちゃんがあたいの移動先に先に転  
移し、そこであたいと合流すると同時に別の  
場所に転移する。

そこでまた分かれて同じことをする……これ  
を繰り返し、レミリアを<sup>ひょうてき</sup>囲み、攪乱する。

すると、目論見通り相手は混乱しているのか  
あたいたちを目で追おうと必死に体の向きを  
四方八方に向かせ、首を忙しなく動かしてい  
る。

——因みに時間操作は発動させた場合、大  
ちゃんに持たせて

いる結晶とあたいを繋げて、あたいの時間停  
止の発動に連動して発動して大ちゃんにも時  
間停止の空間で動けるよう術式を組んでおい  
た——

………そして、相手があたいたちを捉え切れ  
なくなった瞬間!!

チ「よしっ!!ここだあっ!!」



大「うん！」

レミリアはあたいたちを捉え切れず、それ故、あたいたち二人に均等に掛けていた「運命」が、効力を失う……その隙を突いて、あたいが大ちゃんが合図を送り、二人でレミアに向けて突撃した。

しかし、そのままではレミアの運命操作の影響をまた、もろに受けてしまう……だが、ここで大ちゃんがレミアの前まで転移した。そのことに驚いたような素振りを見せるも、すぐに大ちゃんに自身の能力を掛け、更に紅槍で貫こうとした……その瞬間にはもう大ちゃんも移動しており、あたいはその後ろから大ちゃんが移動するのと同時に突っ込み、相手の紅槍を避けて自分の槍を相手に届かせる。

チ「いつけえええええええつ!!!」

相手はそれに気付いたが、その時にはもうあたいの槍が届いていた。

もちろん、それは相手を貫くことはなく、周りを凍らせて意識を奪うだけの槍だ。

——それが届いた瞬間、パキツペキツなどの大気のひび割れるような音が広い部屋全体に響く——

そして……影の傀儡となっていたレミア・スカーレットはその姿のまま氷漬けとなり……沈黙した。

大「はあ……はあ……っ！ど、どうなったの？……勝った、の……？」

チ「うん、勝ったよ……大ちゃん……お疲れ様」  
大「はあ……はあ……よ、よかったあ……！」

一気に緊張が解け、その場にへたこむ大ちゃん。

その姿を見届けて、あたいは部屋の入口へと歩き出す。

大「……あれ？チルノちゃん、どこ行くの？」

チ「大ちゃん……忘れたの？……一緒に来た藍に終わったことを報告に行かなきゃでしょ？」

大「あっ!!すっかり忘れてた!……私も行くよ!」

チ「大ちゃんは休んでも……って言ってもついて来るんだよね……うん、いいよ。一緒に来てもらった方が安心だし……」

そうして、あたいたちは激しい戦いのあったその部屋を後にして藍達のいる部屋へと向かったのだった。



## 第十三話 氷争（紅魔） 完結

八雲藍 side

部屋の中にはもう既に窓からの月明かりが  
差さなくなっている。

その代わりに、窓の外の空はいつも通りに夜  
明けを知らせるべく、その身を白く染め始め  
ていた。

その様子を見る限りに於いても、チルノたち  
と共に解決に向かってから、ずいぶんと時間  
が経過したことが伺える。

……私はその景色を見ながら、逸る気持ちを  
抑えつつ部屋の見張りと言怪我人である十六夜  
咲夜の看病を美鈴と共にしていた。

と、言ってもあととは容態が急変しないかどう  
かを見ているだけなのだ……

パ「そんなに焦っていてもしょうがないわよ  
？八雲藍……」

するとそんな私の心情を察してか、先ほど  
この部屋に入って来た彼女……パチュリー  
・ノーレツジが声を掛けてきた。

藍「しかしだな：私は一刻も早く事態を収束  
に向かわせたいのだ。紫様とて、それは同じ  
はずで：だから、出来る限り早く決着がつい  
て欲しいと願うのは無理もないというか……」

パ「：そうだとしても、今は彼女たちを信じ  
るしかないでしょう？今私たちが行っても足  
手纏いだろうし、咲夜のことにも気になるし  
……」

美「確かに、お力になれないのは大変心苦し

いですけどね…今は、信じて待つほかありませんか……」

そう言つてパチュリーはベッドの上に寝かされてる咲夜を心配そうに見やる。

美鈴はそれを受けて私と同様に己の無力を歯痒く感じているのか、拳を握る手に力を込めつつも、今は待つしかないと判断したようだ。しかし、ここにこれだけの者が集まっていれば確かに並大抵の敵は怖くもなるともないだろう。

並大抵で無い敵は今チルノたちが相手をしていゝるし、それなら後は滅多なことが無い限り、私たちが対処出来るはずだ。

——とそんなことを考えていると、部屋の中のドアをコンコン！とノックする音が部屋の中に響いた。

橙「ひ、ひええっええええっ!!…ま、またあ!？」

いきなりのノックに橙がこの部屋に来て初めに遭遇したの出来事を思い出してか怯えて飛び跳ねる。

加えて私や美鈴、パチュリーも突然の来訪者に対して警戒を強めた。

藍「何者だ!!何の目的でこの部屋を訪れた?」

全員が扉に目を向けながら構える中で、外にいる者の気の抜けたような声が部屋に入ってきた。

チ「……あたいはチルノ……目的は敵を打倒したことの報告。これでいいかな?大妖怪の式神さん?」

その声と気配に部屋の皆は安堵の溜息をこぼす。

同時に私も、仲間の帰還とその結果を心の内で称えた。

藍「なんだ、お前だったのか：驚かせないでくれ……ノックなどしなくともただ声を掛けてくれるだけで良いと言うのに……」

チ「いやあ、一度こういうドアの前でやって見たかったんだよ。それに……万が一着替え中とかだつたら悪いしね」

美「き、き、着替えつてえ!!…な、なんでそんなところに遭遇すると思ってるですか！  
? / / /」

チ「そりやまあ、咲夜の寝汗を拭いてあげたりするかなあ〜とか……」

美「——っ!!」

チルノの何気ない一言に過剰に反応した美鈴がそのチルノに一言反論され、地雷を踏んでしまったことに気付き更に周囲から集まった視線に顔を真っ赤にして俯いてしまった。……まったく、こんな時に何を考えているのやら……それはともかく、私たちはチルノたちを部屋に招きいれ、事の詳細を聞くことにした。

ドアを開けるとそこにはチルノが大妖精をおぶってドアの外に立っていた。

藍「!!大妖精っ!どうした!?!まさか、敵に……」

チ「いや、これは単に疲れと緊張の糸が緩んで眠ってるだけ。ここに来る途中で飛びながら船漕いでて危ないから、あたいが背負って

ここまで来たんだよ。……それにしても、やられた、だなんて縁起でもない……ちよつと神経質やしない？」

藍「ん……そうか？……しかしだな……」

チ「うくん……でもまあ、無理もないか……と、そんなことより、咲夜の方は大丈夫なの？」

藍「ああ……今は応急処置も済んで、よく眠っている……いや、それは最初からだかな」

大妖精が敵にやられたのかと心配したが、どうやら杞憂だったようだ。

次いで咲夜の容態について訊ねられたが、こちらも幸い大したことは無かった旨を伝えたと、二人して部屋の入口で話していると、それを見かねたパチュリーが私たちに声を掛ける。

パ「いい加減、そんなところで立ち話してないで入ったら？部屋の主は私じゃないけれど……咲夜に代わって言っておくわ」

美「そうですよ！お二人とも！話の続きは部屋で休みながらも出来るのですからっ!! ささ、どうぞこちらへ！」

言いながらそそくさと二人分の椅子をどこかから引つ張り出してパチュリーと向かい合えるように置いてくれた。

それにはどこか、なにか照れくさい物を誤魔化そうとするような他意が見え隠れしたが、それはひとまず置いて、私はチルノから、事の詳細を聞くことにした。

——尚、チルノがおぶっていた大妖精は咲夜の隣に寝かせてある——

チ「——とまあ、大まかに言うとこんな

感じかな？」

チルノから話を聞いて、その場に途中まで居たというパチュリーの方を見やる。

パ「ええ…間違いないわ。…でも、そう…：…やったのね…ありがとう。恩に着るわ」

チ「どういたしまして。それじゃ早速、現場の方に行きますか…」

パチュリーの無表情かつ退屈そうな顔が心の底からの感謝と安心に染まったどこか優しい面持ちでチルノに礼を言った。

まあ、疑っていたわけでもないが、どうやら話は本当らしい。

というわけで私は大妖精と咲夜の見張りを橙と美鈴とパチュリーに任せ、チルノと共にその場へと向かった。

---

数分後、その部屋

を見た私の感想は一言でいうなら、”しつちやかめつちやか”という表現が一番しつくり来るだろう。

その広間はそこらじゅうの壁と言う壁に金や鉱石が張り付いているかと思えば、樹木が見え隠れしており、更にはそれと他のものが燃え盛っていたり、かと思えば濡れている所や水溜まりがあるなど、壁もいくらか崩れていたりと散々な状況だった。

その部屋の奥の壁の中央辺りに件くだんの人物、レミア・スカーレットその人が氷漬けになり壁に貼り付けられていた。

チ「ほら、あそこだよ。早いとこ紫を呼んで剥剥がしてもらおうよ」



藍「ああ……そうだな、そうしよう……」  
私はその一言に賛成し、紫様への交信を始めた。

### 紫 s i d e

私は一人、魔法の森を探索していた。

それは、探しものである彼女、リグル・

ナイトバグの活動範囲であるからだった。

しかし、いくら探しても一向に出てくる様子がない。

先ほどからスキマを使つてあちらこちらへとつないで、風潰しに搜索しているのだが一向に見つからない……これは流石におかしい……まさか………

紫「……もう既に影に支配されて蟲による察知能力が上がっている？」

ここで言う蟲とは自然界の昆虫等の方だ。  
この魔法の森に居る蟲たちを通じて私の来訪を事前に察知し、どこか別の場に逃避しているのだとすれば、蟲たちの感覚も鋭敏なばかりか、それらと繋がっているリグル本人にも精神的なストレスが尋常ならざるはずである。しかし、それをものともしないという事はもはや意識そのものが乗っ取られていると推察できる。

能力の強化は恐らく蟲を通じてなんらかの力が送られているのだろう。

それか若しくは能力を効率良く運用させてい

るのか：いずれにしても、もうこれは敵の手に落ちていると見て間違いはなさそうだ。

早合点は禁物だが、こちらも時間が無いのである程度は決めてかかる他ない。

：そして確認の意味も込めて彼女を探す為の最後の手段に出る。

紫「：妖力を結構もつていかれるからできればこれはあまり使いたくないのだけれど：

止むを得ませんわね……」

その眩きののち、即座に瞼を閉じ、全神経を集中して己の中の意識を研ぎ澄ませる。

——そこで聞こえてくるのは森の木々の葉の擦れ合う音、虫たちの鳴き声、羽音、イノシシや鹿などの動物の動く気配、森の茸が噴き出す魔法の孢子、森を吹き抜ける風の音……その音から導かれる風の行く手、その風は天高く舞い上がり、幻想郷全体を俯瞰した。

そこで目を見開いた私は、幻想郷と一つとなっていた。

そして、その幻想郷わたしのなかでやたらと動き回る異分子の存在を確かに感じ取った。

故に、そののいる場所も判明した。

その者は幻想郷の中で太陽の畑と呼ばれる場所にいた——とそこまで視て、すぐさまその座標へとスキマを繋ぎ、移動する。

：先ほどの手段と言うのは、自身の意識と幻想郷全体との境界を取り払って幻想郷の異変を見つける為の言わば監視システムなのだがこの方法を取ると妖力をかなり持つて行かれる上、出来ることは異変の有無を確かめる事

だけなので、普段はあまり使わない手法だ。しかし、それが今回はリグルが影に憑かれていると仮定し、更に動き回っていると読むことによって捜索に利用した。

そして、その推測と仮定は正しかったことが今、目の前の光景によって証明されている。

……私の目には今まさに私から逃げようと飛行する「リグル・ナイトバグ」の姿が映っていた。

紫「……………——ッ!!」

私は無言で相手をスキマに掛けて捕まえようとした。

……しかし、何故か寸前で避けられてしまった。

その後何度も同じことを試みるも、一向に捕まらず、相手との距離は伸びていく一方だった。

そこで、相手の前にスキマで先回りして捕まえようとするも、またもや躲されてしまう。

——辺りにいる蟲だけでここまで読まれるわけ……そこまで考えて一つ忘れていたことを思い出した——

紫「……………そうだったわ…確か、あの影には私への対策が施されてるんだったわね……………」

そう、相手が意識の無い状態…つまり、気絶か睡眠の最中ならばその限りではないが、今の状態に於いては影は私の存在に対して、また、能力や妖力を敏感に察知して動くことが可能なのだ。

そして、それらをもとに自身が取り憑いている宿主を操っているのである……………ならば……………!



瞥して、自身の能力でリグルの影を引き剥がしに掛かった。

——数分後、彼女の影の中から黒い影のような何かが蠢きながら這い出てきた。

それを境界の中に閉じ込めて手に持ったまま、自分の上半身を今も博麗神社の境内で見張りをしているであろう巫女の数メートル前にスキマで送ったのだった。

霊夢 side

霊「……暇ねえ……はあく……」

魔「そ、それを言うなよ！……はあく……  
——ってというか、今暇なのはむしろ良い事だろ？なんせこれから敵さんを手厚く歓迎しないとなんだぜ？今の内に休んどかねえと……」

霊「そりや、あんたにはそうなんでしょうけど……私はこの境界の維持に気を取られてビミョーに休めないし、敵が押し寄せたら対応するのはあんたじゃない……それらコミでつまんないのよ……」

魔「ま、まあ……私一人で対処できなくなつて来たらお前にもお鉢が回つて来るかも知れないぜ？」

霊「それもそれで勘弁して欲しいのよね……  
……後半に入るほどに閉じ込める影も増えるっていうのに更に負担が増えるなんて冗談じゃないわ……」

紫「あら、博麗の巫女ともあろうものが、それも歴代の中でも飛びぬけた才能を持ったあなたの言葉とは思えないわね……」

とそんな、いつもの胡散臭くもウザつたい  
声がどこからともなく聞こえてきたかと思え  
ば、目の前数メートル先の何もないはずの空  
間にすうーと……と線が引かれ、その真ん中  
が開いてスキマが展開され、その中から厄介  
事しか運んでこない私にとっては文字通り疫  
病神な幻想郷の賢者が上半身だけを出してこ  
ちらをムカつく笑顔で見ていた。

霊「紫……」

紫「あつ！あと、良いものを持って来てあげ  
たわよ？」

霊「なによ……どうせあれでしょ？例の影の  
蟲かなんかを持って来っただけでしょ？」

魔「まあ……ろくでも無い物なのは確かだろ  
うな」

己の勘に任せて決めつけて掛かる私に便乗  
するように魔理沙もそれに賛同する。

その反応に溜め息を吐きながら、見せかけだ  
けの凹むような仕草を見せる紫。ほんとにう  
つとおしい。

紫「そんなに言う事ないじゃない……!!

；つ皿、）……それに、影蟲だけじゃないんだか  
ら！」

魔「当たっては居たのか……」

紫「……でも、半分正解で半分未回答ってどこ  
ろね……つまり不正解……」

霊「そんなことはどうでもいいから、一体な  
んの用なのか言いなさいよ！……あと、その  
蟲寄越しなさいよ」

紫「……まあいいわ……はい、これ。よろしく  
ね♪」

少し語気を強めて言うと、流石に今そんなことをしている場合ではないと気付いたのか、素直に例のモノを渡す紫。

そして、渡されたそれに結界を施し、それと同時にソレに掛けられていた境界による結界が解かれた。

紫「それじゃ、次の用件に移ろうかしらね……手早くするに越したことは無いし……と言ってもこれに関してはあなたたちは何もしなくて良いわ」

そう私たちに告げた後、自身のスキマに手を入れて、中から何かを引つ張りだした。

その手に掴まれていたのは八雲紫が探していた、「蟲を操る程度の能力」を持つ、「闇に蠢く光の蟲」こと、リグル・ナイトバグだった。

魔「…なるほど、見つけたんだな……という事はそいつを強化して……」

霊「藍達について行かせれば、あんたは影を引つpegすのにその現場に行くだけで、あとの時間はここに常駐できるというわけね」

紫「まあ、そうなるわね……どう？朗報でしょ？」

霊「うん、そうね……そうだわ。……なによ、紫！あんたもたまには役に立つじゃない！」

紫「たまに」は余計よ」

魔「ま、普段は畑に突っ立ってる案山子みたいにただ成り行きを見てるだけだもんな！」

紫「あら、案山子だって畑を荒らす鳥除けになるじゃない……それも立ってるだけで」

霊「まあ…それでも入って来る奴は入って来るけど」

しかし、これなら結界の維持に集中できるし、ここで共に戦うというのなら久しぶりに紫の本気も見られるかもしれない。

なるほど、確かに朗報だ…とそこまで考えて、ふと紫のいる方を見ると、紫がリグルを起こしている所だった。

恐らく協力を要請する為だろう。

紫「ほら、いい加減起きなさい？」ペチペチツ

リ「——ん…んう…?…?…ハツ…!——こ、ここは!?!」

紫「やつと起きたわね…それじゃ、次は状況説明を……」

リ「——え?…いやいやいややつ!!?何が何だか全然分から

ないんだけど?」

紫「だから、それを今から説明するのよ」

紫が頬を軽く叩いて気絶から覚めたリグルが身に覚えのない場所に驚き、そして目覚めていきなり説明を始める紫に、焦ったリグルがストップをかけるが、これまでのことを全て説明するとの紫の言葉で、多少の落ち着きを取り戻した彼女は…取り敢えず紫の説明に耳を傾ける気になったらしい。

リ「まあ…、それじゃあ…ひとまず事情を聞こうかな…」

紫「ええ、助かるわ。最初は…そうね、今幻想郷に訪れている危機についてからかしら—

—…」

それから、紫の説明を聞いた彼女は驚きの



あまり叫び声を上げた。

リ「うええええええーっ!!!!……そ  
んなことになってたの? ……確かに、なん  
かここ最近体にあつた倦怠感が、無くなつて  
はいるけど……」

紫「そう…それに証拠なら…ホラ、そこに転  
がってるじゃない」

紫が指して見せたその先には私が結界で抑  
えている蟲たちが気色悪く蠢いていた。

リ「えっ……うわっ…キモっ……!!」

紫が指差すその先に目をやったリグルはと  
言うと、目の前でのたうつ気色悪い影がうね  
うね動く様とそいつらが苦し気に発する不快  
なキイキイと鳴く声に顔を顰め、嫌悪感を露  
わにする。

リ「こんなのが私に取り憑いてたつて言うの  
!?!…ううっ…考えただけで寒気が……!」

紫「信じて頂けたかしら? ……まあ尤も、あな  
たには協力して貰う以外に選択肢なんて無い  
わけだけれど」

リ「?…それはどういふ……」

紫「あなたにはこいつらを操つてここに運ん  
でもらいたいからよ」

リ「………つえええええ!!?!…わ、  
私が?…で、でも私はこいつらなんか操れな  
いわよ?」

紫「そこは私がなんとかするわ……私が境  
界を弄ることでああなたの能力を拡張してそこ  
で這いずっている蟲にも適応できるようにす  
る……」

リ「な、なるほど……」

そこで紫は先にリグルに釘を刺すようにして言った。

紫「わかっているとは思うけれど、妙な真似は考えないことね。その力はあくまで幻想郷の異変を解決するために必要なものであって、もしも悪用しようものなら命はないものと思いなさい……いや、命が無いだけならまだ、マシ……と思えるような目にあって貰いますわ」  
リ「ひ、ひえええーっ！わ、分かりました!!」

紫がリグルにそう釘を刺すとを間もなく、紫によるリグルの能力強化が始まった。

リグルはただ目を閉じて、静かにじっと動かず紫に身を任せている。

私と魔理沙はそれに口を挟む事無く、ただ二人のやり取りを眺めていた。

私はさして興味なさそうに、魔理沙は逆に興味津々でその様子を見守る。

……すると、やがて紫がリグルに向けていた扇子の先がほんの少し発光したかと思うと、リグルの周りの空間も彼女の輪郭に沿うように一瞬歪み、彼女自身も一瞬発光した。

そこで紫は目を開き、リグルに「もういいわよ……」と語りかける。

その声に応じリグルも目を開いて自身の体を見ているが特に変化が無かったせいもかキョトンとした表情を浮かべていた。

リ「ええーっつと……これで……?」

紫「ええ、できるようになっているはずよ」  
それだけ言って、紫は自身もいつでも動け

るように身構えつ、私に蟲たちの中の一匹の結界を解くように言った。

……どうやら、本当に操れるかどうか試験をするつもりらしい。

紫「今、霊夢に蟲共の内の一匹の結界を解くように言ったわ。……これで、あなたがこいつらを操り、統制できるかどうかを見極めることができる。わたしが合図したら霊夢が結界を解くから……気を引き締めて掛かりなさい」  
り「……ふう……わかりました。お願いします！」

一度深呼吸をして、覚悟を決めたリグル。

一応私も紫もいつでも動けるようにはしているけれど、何が起こるか分からない以上、油断は禁物だ。

——そして、紫から、「よーい……始め！」という合図とともに私は一つの結界を解いた。

影「キ……キキイ……キ……ッ!!」

突然、自身を苦しく束縛していた結界が解かれた途端、その蟲は獲物の影に向かって勢いよく且つ、胸糞悪く地面を泳ぎ始めた……その向かう先は……魔理沙だ！

魔「……つて、うおっ！私か！」  
今まで、高みの見物を決め込んでいた者の内、私で無く魔理沙に的が絞られた。

そのことに若干狼狽えつつも、おどけたような飄々とした態度で声を発する魔理沙。

その魔理沙から見て向かってくる蟲を挟んだ向こう側でリグルは気弾でも放つかのように右手を前に出してそれに左手を添えていた。

…そして、一言、良く通るはつきりした声でその影蟲に命ずる。

リ「止まれ!!」

一瞬だった。

そのリグルの声に果たして蟲は…その体をくねらせた状態のまま、静止した。

更にそれはあと一瞬遅かったら、魔理沙が乗っ取られていた、という…そういうタイミン  
グでもあった。

もし、そうなっていた場合、紫と私とで魔理沙を抑え、紫が魔理沙の影から蟲を引っ張り出さなければならぬというとても無く面倒な工程が追加される羽目になっていたが、この結果を見る限り、その心配はないようだ。

魔「…つたく、冷や冷やさせやがるぜ。あまりの冷えっぷりに、凍り付くかと…」

霊「安心しなさい、魔理沙…もし、そうなつていても私があんたを引っ叩いてでも気絶させたあとに紫にゆっくり影回収してもらおうから…：…まあ、多少顔面が百八十度回転してるかもだけど」

魔「…：…それが嫌だから、ひやひやし…：…つて、それじゃ、元も子も無いぜ!?!死んでるじゃねえか…：…」

霊「大丈夫よお…：…元はとるわ!」

魔「一体何のだ!…：…つていうか、そのガッツポーズをやめろ!縁起でも無い…：…」

紫「まあ、なにはともあれ成功ね」

リ「ふう、よかったあ〜…：…」

そこで、一同は取り敢えずの成功を各々喜んだ後、リグルの命令

によって止まったままの影を再び封印した。

魔「しかし…今、ふと思っただんだが…」

紫「何かしら？」

魔「ついさつき、恐らくリグルのだと思うんだが、影の奴を結界に閉じ込めて、ここまで持ってきてたじゃないか。それなら、リグルにやらせる意味、あんまりないか？」

紫「それは、小振りの奴だったからよ…何故かこいつら、私の境界の結界をすり抜けようとしたり、飛び越えようとしたりするのよね…それが大きくなってくると私では閉じ込めて置けないから滅するしかなくなる…でも、滅したら…」

霊「作り主のところに行かれてしまう…か、ホント厄介だったらないわ」

魔「それじゃ、リグルに憑いてた奴がデカかったら…」

紫「それはそれで、仕方なく滅していたでしょうね。それ程にこの子は重要だから」

魔「でもよ、少しくらい大きいか強くても一瞬くらいは持つんじゃないのか？事実、お前から聞いた話の中で永琳に憑いた影は大きかったって言っていたじゃないか」

紫「あの時は、剥がしてから直ぐに滅したから良かったの…それに…その子が持つてくるモノがそれより小さいとは限らないじゃない。…もしかしなくても、引き剥がすだけで精一杯になるのは目に見えてるわ」

魔「ふーん…なるほどなあ…」

魔理沙は一応、紫の説明に納得したようだ。

でも、作業の終わった後にそれそのものの必

要性に対しての質問をするのは如何なものか。  
そんな会話の最中、紫がふと、自身の頭に  
手を触れて何かに対して耳を澄ますような素  
振りを見せた。

紫「……噂をすれば……ね……リグル……早くも出番  
が回って来たわ……行きましようか」

霊「もしかして……」

魔「やったのか？」

紫「ええ……今しがた、藍から交信があつたわ。  
……影に操られた者を気絶させ、捕縛した……  
……つてね」

リ「それじゃあ……？」

紫「ええ、チルノの影……ではないけれども、  
それに操られていたらしき者を倒した……と  
……そして、その者の影をここまで運ぶにはあ  
なたの協力が不可欠……手伝ってくれるかしら  
？」

リ「……選択権なんてないんじゃないやなかつたっ  
け？」

紫「モチロンツ♪……それでも、一応ね？」

リ「わかりました！行きますよう！私にも……  
幻想郷を守る為に出来ることがあるのなら

やらないと……後で後悔しそうですから  
ね！」

紫「そう言うと思じていたわ……有難う……」

紫は改めてリグルの決意を確認すると、ら  
しくも無く素直にお礼を述べた。

力づくで従わせておいて、感謝も何も無いだ  
ろうに……と思つたあとに……もしかすると、  
謝罪の意だったのかも知れないと思ひ、少し  
可笑しかった。それにしても……

魔「倒されたのつて一体誰だ？そりやあ幻想郷の誰かだろが……」

紫「ああ…それは……」

紫は思わせぶりに間をおいてから、その者が誰かを告げた。

霊「どうせ、レミリアとかでしょ？」

紫「っ!?!…なぜみやぶった…?」

霊「ただの勘です☆」

紫「なん……だと……!」

魔「毎度の事だからもう全然吃驚しねえ……何の感慨も沸かねえ……」

と、ひとしきりの茶番が終わると紫は改めてその者の名を呼ぶ……

紫「そう、紅魔館の主にして、「紅い悪魔」

と称される…レミリア・スカーレットよ……」

その後、紫とリグルは直接その館へと作業の為に向かい（スキマで）、境内には私たちだけが取り残された。

魔「けど…！影チャチルノじゃなかったか……っ!!……そりや、一筋縄ではいかないだろうとは思ってたけどさあ……」

霊「もし、そうだったら早く異変も解決して万々歳だったんだけどねえ……これが現実って奴か……」

私は比較的平然と受け止めていたし、魔理沙も口では残念そうに言いながら、その実、駄菓子屋でハズレくじを引いてちよつと残念……くらいのノリだ。

魔理沙のそんな様子をよそに、私は今回敵の手に落ちていたレミリアのことを考えていた。

まさか、あの吸血鬼が落とされるとは……ね……

……

……

いや、それも仕方が無いと思える程に強大な力を目の当たりにしたので何も不思議ではないはずなのだが、それにしたって間違いなく本気だったであろうレミリアを… たった一晩… いや、恐らく少なくとも数時間以内に仕留めるなど、完全に常軌を逸していて、未だに信じられない。

魔「まさか… あのレミリアでもダメとはなあ…」

霊「そうね、普段は何かとやらかしたり、たまにお子ちやまみみたいな態度を取ったりすることはあっても、それでもあいつ、この幻想郷のパワーバランスの一角なのよねえ…」  
魔「いやむしろ、その幼稚さすら演技といかわざとやってるまであるぜ」

そう、あいつがやられるな余程の事だ。

今まさにその時だと言えばそれまでだがやはりにわかには信じ難い… ああ… それにしても…

霊「これはまた… 面倒臭くなりそうね…」  
しかしまあ、結界の維持のこともあるので、そこは魔理沙や紫が相手をしてくれるだろう。(尤も、最初の方は手伝えるが…)

藍 s i d e

私が紫様に式とその主としての繋がりを利用してこの次第を大まかに報告してから約数分後、空間にスキマが開き、紫様ご自身ともう一人… 頭から触覚を生やし、白シャツに



紺のキュロット、背には甲虫の外羽を模したような燕尾状のマント姿の者が、共に現れた。もしかして…あの姿は、縁起の中の絵にもあった……………

藍「紫様…もしや、その者が件の…？」

紫「…そうよ、リグル・ナイトバグを連れて来たわ。これで、霊夢の元へ蟲を運んでもらって、封印できるわね」

藍「ありがとうございます！これなら何とか成りそうですね!!」

紫「喜ぶのはまだ早いわ…まだ、危機が完全に去ったわけでも無いのだし…」

藍「そ、そうですね…申し訳ありません」  
私はその紫様のお言葉で気を引き締め直した。

そうだ、まだ何も終わっていない。

今回倒した相手も、操られていただけの者で、本丸はまだここで活動が続いているのだから……………

しかし、そうか……………!

紫「ふふ…でも、確かにこちらも進展しているみたいね…そう、やられてばかりでは無いのよ…」

そう、一言仰られてから、紫様はチルノの方に目を向けられた。

チ「…なんの事かな」

チルノはそのお言葉にとぼけたように流そうとする……………

私 は て つ き り 進 展 と は リ グ ル の 事 と ば か り ……

……………

紫「とぼけなくても良いわ…先の戦いで、

幾らか能力を身に付けたでしょう?」

紫様のその妖艶な笑顔の中の射抜くような視線に、チルノは溜め息を吐きながら、諦めたように答える。

チ「……、まあ確かに幾らか持つてるけどさあ……やっぱりあんたには隠せ無い、か……

紫」

藍「……!!」

私は驚いていた。

まさか先程の戦いで、更に能力を身に付けたというのか!?

……しかし、彼女のから能力ちからの事を考えれば、むしろ当然なのか?……などと私が戦慄していると、紫様からお声が上がった。

紫「まあ、ただ単に予想しただけなんだからどね♪……あなたならそのくらい出来てもおかしく無いかな?」

チ「……って!カマかけただけかよっ!!」

……戦慄はしたが、それはそれとして何とも抜けたところがあるというか……

すると、流星にしびれを切らしたらしきリグルが本題に入るように促す。

リ「お取込み中のところ悪いんだけどさあ……あれ、どうにかしなくていいの?そのため私連れて来られたんでしょ?……合ってるよね?あの人に憑いてるんだ……よね?」

そう言いつつリグルが指差す先にはこの紅魔館の主の姿が、氷漬けになったまま彼女を包む氷が壁に刺さったような状態でそこに在った。

確かに、今はレミリアに取り憑かせられた蟲

を切り離して霊夢の元へ持って行かせるのが先決だ……、そして今わかったことだが、リグルには蟲を感知したりすることはできないらしく、レミリアがその対象だということはある状態からの単なる予測でしか無いようだ。

(まあ、説明を聞いた後にあんな状態の者を

見れば誰でもそうではないかと疑うだろうが……)

チ「うん。合ってるから大丈夫だよリグル：

……じゃあ、紫：お喋りはこれくらいにして、早いとこ始めてよ」

紫「ええ、そうね……」

チルノのその催促に応じた紫様が、レミリア

アの方を見上げ、それにしても……と呟かれた。

紫「全く……なんてモノを憑かせてるのよ……！私でも切り離すのが精一杯の……いえ、それすらも怪しいくらいよ……」

そのように驚かれる紫様のお顔はそのお顔の中に若干の焦りが混じっているようだった。

——そこからの作業は、意外にも難航した。

まず、紫様の境界操作による切り離しが中々上手く行かず、切り離す際には今まで見たこともなかったスパークが見られ、当の紫様も涼しいようでいて堪えるような表情で額には少しだけ汗を浮かべられながらの作業だった。紫様の仰られるには今の作業が難航したのは、影の蟲の強さとその宿主との癒着率が関係しているとのことだ。

その両方の強さに比例して、分離し易いか否かが左右されるのだろう。

そして・・・ようやく宿主<sup>レミリア</sup>から、影蟲を取り  
払うことができたその瞬間に影は次なる獲物  
を求め・・・なんと・・・私に飛びかかってきた  
……！

藍「——…っ!!？」

リ「止まれっ！」

部屋から差し込む月光の下、あと数ミリ程  
で私にできた影と重なり、そこから取り憑く  
ことができるという寸前のところで、その大  
きい何か不定形なモノの姿をした影の蟲<sup>ク</sup>はそ  
の身をうねらせた状態のままそこで一ミリも  
動けずに佇んで静止していた。

それも、リグルが命令を下してから数秒の間  
も空けずに一瞬で止まった。

更に”止まれ”と言われてから全く微動だにし  
ないところからも、その命令の強さが伺える。  
そのことに私はただただ息を呑んでいた。

まさかここまでとは……その後も彼女の蟲の  
操作は続いた。

リ「よーし…そこからゆつくりとこつちに  
戻って、私の前で止まりなさい」

彼女の指令通りに巨大な影が動いて行く…

…と、彼女の前まで来た時点で動きを止めた。

紫「これで、取り敢えず一つ片付いたわね……

後は影蟲<sup>こいっ</sup>を霊夢の所に持って行くだけ……

——と言うわけで、リグル、あなたこれ連れ  
て一旦に戻りなさい」

リ「……えッ？なんで私が!?!あなたのスキ  
マで運ばばいいじゃない！」

紫「それはそうなんだけど…そいつら、私  
の能力とどこまでも相性が悪いのか、運ぶと

その分消耗するのよね……だから、もしも  
の時に備えて体力を温存しときたいというか  
……それに私は霊夢たちの所にできる限り  
常駐して、敵が現れたら加勢するつもりだ  
のよね……」

リ「う……、そうかあ……なら、しようがな  
いかあ……」

紫「取り敢えず、私も付いて行って、神社に  
着いたらあなただけを藍達の所にスキマで送  
るから……」

リ「わ、わかったわよ……」

紫様から説得され、渋々と言った風にそれ  
に従うリグル。

チ「それじゃ、仕事も一応済んだことだし一  
日さっきの部屋に戻ろうか」

藍「そうだな、戻ろう」

チルノの提案に私は賛成してこの部屋をで  
ることにし、紫様たちは博麗神社へ引き返し  
、チルノはこの部屋を出る前にレミリアの氷  
結を解いて自らの背におぶると、出口に向か  
って飛び始めた。

私も、それに倣いこの部屋を後にした。

……そのあとこの場には惨憺たる戦の爪痕が  
残るのみとなっているのをみてなんとも言え  
ない気持ちになった。

それから、部屋に戻る途中の廊下で、今チル  
ノが背負っている、レミリアの妹のフランド  
ール・スカーレットが氷漬けの状態になっ  
ているのを発見した。

その凍らされている者の約1.5倍程の六角の  
氷柱のなかで、その瞬間を切り取られたかの

ように凍らされているその姿は、どこか一種の作品のようにも見える程に見事だった……とそんな不謹慎な思考に囚われていた一瞬の間にチルノがその氷結を解いて、私を呼んだ。

チ「ねえ、藍。この子運んでくれない？…あたいはレミリアをおぶってて、両手が塞がってるからさ」

藍「……ん？あ、ああつ！…分かった」

チルノに呼ばれて我に返った私はその要請に従い、さつき迄凍っていたフランを自身の背に負うと、再び進み始めたチルノの後を追って他の皆がいる部屋を目指した。

パチユリーside

藍とチルノが部屋を出て行ってから数十分ほどが経過していた。

私はベッドに横たわり眠る友人の従者とその隣に寝ている大妖精を時折見比べつつ様子を見ながら、二人の帰りを、同じく部屋に居る紅魔館の門番である美鈴や藍の式神である橙と共に待っていた。

パ「……（まだかしらね……あの

二人は……）」

そんなことをふと思いつつ、私がふう…と小さく一つ溜め息を吐く…のと、大妖精が目を覚ますのは奇しくも同じタイミングだった。

大「ん…んう………つ！………ここは………」

パ「ようやくお目覚め？」

大「あつ！パチュリーさん！・・・ええと、ここは？...つてうわあ！」

大妖精は私に気が付くと次に隣で寝ている咲夜を見て驚いたが、次第に落ち着きを取り戻した。

大方、咲夜を見てここがどこなのかおおよそ見当が付いたか、朧気ながら戦いの前のやり取りを思い出したといったところだろう。

大「そっか...ここは咲夜さんの部屋...ですね。でも、なんで私ここに...」

パ「あなたの友人がとても大事そうにあなたを背負ってこの部屋に現れたわ...あとで礼を言っておいたら？親しき仲間にもなんとやら...でしょ？」

それを言う私の顔は若干微笑んでいた...と思う。

なにせ、こういうものは普段は他愛のないものと思っけていても微笑ましく感じるものだからだ——こういうのも、悪く無い...

大「くくくっ!!／／は、はいい...」

顔を赤らめ、背を縮こませて指を体の前で組みもじもじとしながら消え入りそうな声で返事をする大妖精が思いの外可愛らしく、それが私の嗜虐心を刺激した。

パ「とつても幸せそうにぐっすり眠っていたわよ?...全身を大好きなチルかのじよノの背に預けて、もたれ掛かって...そう、特に背中の中真ん中辺りなんて...あなたのそのみかけに寄らず豊かな...」

大「そ、それ以上はやメテエ...／／!!...」

うう…なんでそんなイジワル言うんですかあ  
…(泣)……ひどいですよう…」

顔を赤らめ、涙まで目に滲ませて眉をハの  
字にさせている大妖精に更なる嗜虐心と悪戯  
心が湧いてきてしまうが、ここは堪えて謝罪  
に入る。

パ「…ふふっ…ごめんなさい…あなたの反応  
が可愛かったからつい…」

大「もう……あ、そうだ！その…チルノちや  
んたちは？」

美「ああ、それならレミアお嬢様の影？を  
離すと出て行かれてからかれこれもう40分  
くらい経つので……そろそろではないでし  
ょうか？」

大妖精は辺りを見回し、礼を言うべきその  
相手を探してからその者の居場所を聞き、そ  
の問いには美鈴が代わりに答えた。

そして、それを肯定するかにこの部屋  
にいた藍の式、橙が嬌声を上げる。

橙「…？…ああっ！なんとなくだけど、藍様  
の気配がする!!」

それはつまり、彼女と一緒にいたチルノも  
この部屋に帰って来るだろう事を意味する。

大「えっ！…それじゃあ…!」

自然、大妖精の顔も綻び、私と美鈴も表に  
は出さずとも安堵する。

そして、扉が開かれ、果たして部屋にはレミ  
ィを背負ったチルノとフランを背負った藍が  
入室した。

大「チルノちゃんっ!!」

チルノの名前を呼ぶや否やチルノに駆け寄



る大妖精。

美「お嬢様！……それに妹様っ！」

藍「大丈夫だ……今は少し気を失って眠っているだけだよ」

美「……そうですか……良かったあ……」

レミイとフランの様子を見て駆け付けた美

鈴も藍のその一言でホッと胸をなで下ろした。かくいう私もそのことに改めてチルノと大妖精に感謝する。

……そしてふとレミイを見やると彼女はさつき迄のことが嘘のように安らかに寝息を立てている。

そのことに安心し、私は本題を進めることにした。

パ「それで……これからどうするの？敵は待つてはくれないのでしょうか？それなら、早めに動いたほうが良いんじゃない？」

その私の言葉にその場の全員の空気が変わるのを感じる。

と藍がそのことについて提案を持ち掛ける。

藍「そのことなのだが、私たち四人……リグルを入れた五人はこれから奴を追う……これは変わらないが、レミア・スカーレットにフランドール・スカーレット、そして十六夜咲夜も倒れている今、紅魔館の守りはあなたとこの門番だけ……ならばいつそ皆博麗神社に行つたほうが安全なのではないかと思うのだが……どうだろうか？それなら互いに協力合えるし、守り合える……こちらとしても霊夢たちの方に助力が増えるのはありがたいし合理的だと思うのだが……どうだろうか」

パ「……確かに合理的ね……それに願ってもない話だわ……でも、そうやって私たちが紅魔館を離れている間、誰がここを守るのかしら？」

藍「そ、それはそうだが……」

パ「確かに、これははただの建物だし、壊れても作り直せるわ……でも、出来ることなら壊されたくはない……ここは、私たちの家だから……」

藍「……」

パ「だから私たちはこの場とその主であるあなたの子たちを守る……！この場所も、互いも、無くてはならない存在だから」

美「……パチュリー様……」

パ「なにより、レミイが目覚めた時に紅魔館を放って行ったなんてどんな顔をして言えるかわからないわ……だから、あなたの提案は嬉しいけれどここは断らせてもらおうわ。それと……力になれなくてごめんなさい」

藍「いや、こちらこそ無理を言ったな……」

確かに、私も……マヨヒガを捨てて逃げろと言われれば恐らくできないだろう……それが紫様からのご命令ならばともかくな……」

パ「ええ、だから紅魔館は私たちに任せて頂戴……」

藍「わかった！そういうことなら是非もない……お言葉に甘えましょう」

藍がそう言うと、他の皆も納得したように頷いた。

それからは、チルノがせめて少しでも早く三人が回復するようにと即席で回復用の結晶を

作ってその場に置いて行き、その場の四人：  
：八雲藍、橙、チルノ、大妖精はこの紅魔館  
をつい数時間前ほどに後にした。

美「パチュリー様……必ず、ここを守り抜き  
ましょう！ 私たちの帰るべき……この紅魔館  
を！」

パ「……言われるまでも無いわ……そんな、  
当たり前の事を今更言われても……」

美「つて！ 今、そういう流れだったじゃ  
ないですかあ！」

パ「ふっ……そうね……ええ……何として  
も……ね……」

私も、そして美鈴も、吸血鬼としては眠り  
の時間に入る朝の……その陽射しを、私はい  
つもの眠そうな顔の中に……美鈴はいつ  
もより凜とした顔の中に……それぞれ決  
意を秘めながら、山の端からゆっくりと昇  
る朝日を見つめた……

## 第十三話 氷争（白楼 其の壺

影チルノside

指令に従い、次の目標地点まで指定の速度にて巡行中、自身と酷似した妖力反応を持つ個体と接触。

しかし、性質は異なる模様。

……指令を確認。

脅威では無いと判断した場合、これを無視し、通過。

また、蟲が寄生済みの場合、これを強化しこの場に待機させるものとする。

……当面の脅威、皆無。蟲の不在も確認——  
——このまま無視通過を実行に決定……

レテイside

はあ……、季節は移り変わりが激しい……冬が続くと思ったらあつという間に春が来て、次に夏が来る……夏は寒気が無いので、私にとっては最も力の弱まる季節だ。

よって今私は、暑い夏の間中涼しい洞窟の中でゴロゴロして過ごしていなければならぬのだが……

レテイ・ホワイトロックレテイ

レテイ「でも……もういい加減、洞窟の中は

飽きたわあ……」

私は、夏の間ずっと続く引きこもり生活が

退屈になり、気分転換の為、外に出ていたの  
であった。

レテイ「あくくく…たいくつ……ん？」  
そんな時だった。

私がいるとよく見かける氷の妖精と同じよう  
な気配を纏ったものが飛んでいくのが見えた  
のは——それになにやらいつもとは違う見  
てくれに、これまたいつもと違う様子で飛ん  
で行くその氷精をみて、何かが起こりそうな  
予感を感じ、好奇心に駆られてそちらへ行っ  
てみることにした。

レテイ「…ふくくん…なんだか面白そうねえ  
…ちよつと邪魔でもしてみようかし  
ら…」

我ながら悪戯っぽい笑みを浮かべていたと  
思う。

なによりこれはいつも何かと一緒にたにされ  
ることへの意趣返しの意味もあり、自分より  
も下の者を弄りたいという欲求からくるもの  
でもあった。

更に、これまで退屈だったこともあり、実行  
に移したのだ。

まあ、いつもは妖精の方が悪戯をしているの  
だから少しくらい良いはず……

彼女の進行方向、——白玉楼<sup>めいかい</sup>への道を相手  
よりも早く飛んで、先回りをし、相手の進路  
をあからさまに塞ぐ——

レテイ「ちよつと、その妖精さん…私と遊  
んで可なり？」

その私の言葉に、反応した目の前の氷精が  
その属性<sup>こおり</sup>の如く冷ややかで、無機質な目をこ

ちらに向けてきた。  
しかし、それがまさか私を破滅に導くとはこの時の私は知りもしなかったのである。

影チルノside

無視通過の決定と同時に、対象の明らかな妨害を確認。

明確な害意によるものであると判断。

対象から攻撃性の高い妖力反応を感知。

迂回し、避けるよりも排除する方がより効率的且つ適正であると判定——よって、これより対象の殲滅を開始します。

影<sup>チル</sup>「……………!!」

直ちに抜刀——自身の製氷能力により刃渡り三尺(約90cm)の氷の太刀を精製。

対象に向け、戦闘態勢に移行。

直後、対象——薄紫の肩までの頭髮に白いターバンのようなものを着用し、ゆとりのある服装の何者か——が、衣服の胸部よりカードらしきものをその場で提示、その後、自身の名を宣言。

対象「ああ：一応名乗っておくわね：私はレ

テイ・ホワイトロック：雪女、のよう

なものよ：よろしくね♪」

ここで対象の名称と種族が判明。

名称、レテイ・ホワイトロック。

種族、雪女の亜種。

それと同時に雪女<sup>たいしやう</sup>は提示済みのカードのスペル宣言と思しきものを実行し、これを行使——

レテイ・ホワイトロック  
対 象 「スペル！寒符「リングリングコ

ールド」！」

レテイ・ホワイトロック  
宣言後、 対 象の周囲から自身への追  
尾性能のある緑色の弾幕と、青色の乱数の弾  
幕が多数出現。

総数、配置及び方向性から回避ルートを算出  
——棄却、自身に内在するエネルギー吸収能  
力の存在、更に吸収するエネルギーは同属性  
によるもので親和性が高：以上の理由から回  
避の必要性は皆無と判断。

よって、周囲の弾幕を吸収し、相対する敵へ  
の突撃を実行する。

チルノ  
影 「……！！ニイツ」

レテイ・ホワイトロック

対 象 「そんなんっ！！そのまま突っ込  
んでくるなんて！！……っつて、

弾幕を吸収してる……？」

こちらのエネルギー吸収を目撃したことに  
よる、雪女の軽微な精神異常を確認。

距離、間合い共に適正。

現在、装備掌握している太刀で対象の急所を  
貫通。

レテイ・ホワイトロック

対 象 「え？うそ……ゴプツ……！！」

……あッ……！！」

対象の出血及び力の消失、脱力を確認。

貫通した太刀ごとその存在を放棄、放棄後、  
目測およそ地上300mを自由落下：排除を確  
認。

障害の排除に成功。

本来の任務を再開。

何なんだ……！こいつらは！——妖怪の  
山の上空、その冥界の更に奥の白玉楼へと続  
く階段で金属同士のぶつかり合う音、擦れる  
音、また刃が何かの金属を叩き斬る音などが  
辺りにこだまする。

その中で私、魂魄妖夢は八雲紫のスキマに似  
た何かから続々と湧いて出てくる謎の機械人  
形兵たちと攻防を繰り返していった。

先ほどから斬っても斬っても際限なく湧いて  
出てくるこいつらを相手にするうち私の中で  
一つの疑念が渦を巻いていた。

魂魄妖夢Ⅱ妖

妖「まさか……紫様が……裏切った？」

しかし、そんな疑惑が首をもたげた直後、  
次なる疑問が湧き上がる。

それは何故我々を狙うのかということ……  
ここ、冥界は幻想郷のバランスを保つのに最  
も重要と言っても過言ではないほどの場であ  
る。

幻想郷で転生を待つ、死んだ魂たちを管理す  
る、いわば魂たちの安息の地なのだ。

(まあ、それを言い出したら他にもパワーバ  
ランスを担うところはあるし重要ではあるの  
だが) ここから、霊魂は成仏するか、転生し  
て行くのである。

そんな場所であるにも関わらず、あの何より  
も幻想郷を重んじる彼の賢者がここを攻撃す



る理由が何なのか見当もつかないし、何よりこの人形兵どもに全く見覚えが無さ過ぎる……それに紫様が差し向けたにしては無骨過ぎる。……それに、他にもみよん……妙なところはあ……紫様のスキマと言えば切れ目の中に大量の目が浮かび、端の部分にはリボンが付いているのだが、こいつらが運ばれてくるスキマのような裂けめにはそれらが無く、その向こうは得体の知れない（紫様のスキマもだが）世界につながっているかのような感じがするのだ。

と、そんな思考の合間にも人形兵どもは手を休めてはくれない。

次から次へとその見た目通り、機械のように遠慮なく躍りかかってくる。

まあ、倒した時の金属音からして本当に機械なのだろう。

なにが動力源なのかは知らないが……

妖「この地を侵そうと……そしてもしも幽々子様に出そうというのなら容赦はしな

い……覚悟するがいい!!ここから先は——  
——一步も通さないッ!!——獄界剣

「二百由旬の一閃」!!」

その宣言と同時に刀を横薙ぎに一閃するとその剣圧が一気に広がり周囲の敵とその後ろの敵をも掃討する……と、その後ろから新たな兵が大きいかぎ爪を付けた手で飛びかかって来る。

それを敢えて紙一重で躲し、相手の横合いから斬り伏せ、背後の敵には鞘打ちで瞬間的に動きを止めてから振り向きざまに斬り、斜め

横からの敵に対しては、相手の攻撃を潜るとともに胴に一太刀入れる。

恐らく機械で出来ているであろう人形兵共が一体また一体と、断末魔の代わりに金属の軋む音を響かせて倒れては落ちて行く……

と、今度は自身の斜め上と後ろ斜め後方からの敵をそれぞれ、二刀の刀で一体に付き一刀で始末すると、今度はかぎ爪とは違った多種多様な武器を持った敵が目の前に開かれた幾つものスキマのよう裂け目から次々に送り込まれて来る。

妖「くっ……！きりが……！！」

しかし、その後も大剣のような武器を持った敵を一太刀で葬り、回し蹴りで蹴り飛ばすことでその背後にいた敵の動きを止めてその隙に斬り捨てる。

そうやって斬り刻むごとに機械兵から金属音と何かがショートしたような電気火花が散る——そんなことが数十回と続いた時、何かがちららに向かつて近づいてくるような気配を感じた。

それに相手方も気付いたのか、大量の兵たちも一斉にそちらを見遣る。

——白玉楼へと続いたただ一つの道である長い階段のその入り口にその階段の中間辺りから上に咲いている桜の花びらがここまでひとひら舞い落ちる……かと思えばそれが更に一つ二つ、はらはらと舞い降り、目の前の無粋な敵兵には不釣り合いな風景を作り出す。

互いに、気配の方を向いたことで戦闘が一時中断し、少しの間、敵との睨み合い（相手に

目があるのかわからないが）が続き、人形兵の一体が武器である力ギ爪を私に向けたことで再び戦いの幕が上がった。

敵が放ってきたクナイのような武器を刀で弾いてそれが別の敵に当り、正面から乗り込んできた敵の大鎚を寸前で躲して、相手の懐に入り込んで斬る……押し寄せる敵を次々に斬り祓いながら私は、近づいてくる気配が味方であることを期待する。

……それほどまでに体力が削られつつあった。まあ敵であったとしてもそれならそれで真つ向からぶつかるとは話だが……

妖「——っ！人鬼ツ!!「未来永劫斬」！  
!!」

その少しの期待と覚悟を胸に、私は二つ目のスペルを発動した。

アリス side

家の柱時計が現在の時刻が夜明け前であるということ静かに指し、下にある振り子がコツチコツチ……と一定のリズムで時を刻んでいる。

窓から入ってくる薄らとした明りもそのことを裏付ける。

既に朝食の準備が済んでいることの証に、火にかけられた鍋がコトコトと鳴り、そこにどこからともなく可愛らしい見た目の人形が宙を浮かんで鍋の火を見にくる。

また別の所では、その何も掴めなさそうな手

で編み棒を持って編み物をしている人形もいる。

他にも紅茶を入れている人形に、花壇に水をやっている人形、紅茶に合いそうな茶菓子を作ってくれている人形など……他にも複数の人形が、この私——アリス・マーガトロイドの住むこの家で働いていた。

アリス・マーガトロイドⅡア

ア「……といっても、全部自分で操ってるんだけどね……」

などと、誰にともなく呟いてみたところで

、ここには私と自分が手掛けた人形たちしか居ないのだが……

そう、彼女たちは私が作った人形……上海人形

(と蓬莱人形である) その上海と蓬莱の違い

だけけれど、これは返事をしてくれる時の鳴き声が「シャンハイ」か「ホラーイ」なと服の色ぐらいいしの違いが無い。

(因みに上海が青で蓬莱が赤) そんなことを

考えていると、ふと一体の上海が私の方に緩やかに飛んで来た。

——そんな風に言うとな私が操っていないかのようにだが実は半自動であり、今のように意志を持っているかのように来る時があるのだが、まだまだ完全自律をするには至らない——そのシャンハイが目の前まで来たところで両手でその人形の体の脇のあたりに手をやって捕まえる。

そして、何の気なしにその人形をつぶらな瞳

を見つめると、その瞳に「七色の人形遣い」  
ことこの私、アリス・マーガトロイドのその  
姿が映し出された。

その容姿は家に溢れかえる人形たちに負けず  
劣らず人形然とした見た目をしていて、金髪  
に眼は金褐色、青のワンピースのようなノー  
スリーブにロングスカートで、肩にケープを  
羽織り、頭にはヘアバンドのように赤いリボ  
ンが巻かれている。

ア「……………ん？」

となんとなく自身の人形を見たついでに自  
分の姿を確認していると、その人形シヤンハイに何か違  
和感を感じる。

ア「あら、この服の所、取れかかってるわね  
……………」

よく見て見ると服のエプロンの肩にかける  
帯部分のところが解れていた。

それを見つけると、気付いてくれたことが嬉  
しいのか眼を＼への形に瞑り、シャンハイ  
！と同意の鳴き声を上げてコクコクと頷く。

(可愛い) つまりその服を直してもらおうこと  
が私の所にきた目的のようだ。

ア「しようがないわね……………それじゃあ、直して  
あげるからそk……………!!？」

なんだろう、何か胸騒ぎがする。

しかも何かの嫌な気配をすぐそこに感じる。  
とりあえず、直すのは後回しにして、作って  
おいた予備のエプロンを柵の引き出しから出  
してその子に着せる。

ア「後でちゃんと直してあげるから、今はこ  
れで……………!!？」

エプロンを着換えさせたのとほぼ同時に何か地面に降り立つような微かな音がしたかと思うと、こちらに歩いてくる音がする。それも、明らかにこちらに対して害意があるかのような、それでいて無機質な感触をこれでもかと伝えてくる。

机に置かれている紅茶にお茶受けのケーキ、台所の流しや先ほど見た柱時計、戸棚や部屋の四隅に至るまで……まるで自分の家では無いかのような感覚に陥り、思わず身を固くする。……しかし、このままでは埒が明かない上に、いつかはこの家に入りこまれるだろう。

そうなる前に……

ア「こつちから打って出るしかないみたいね

……まあ、その方が分かりやすくていい

けれど……」

最初は突然のことで驚き、その顔にも冷や汗が浮かんでいたが、次第に落ち着きを取り戻して来ると、自身の好戦的な性分が首をもたげてくる。

気配がしてからさつきまでは不安そうな顔を浮かべていた人形たちも打って変わって緊張感と決起に溢れた顔をしている。

家の中の私の人形たちけっさくが今はその手から家事道具を手放し、各々武器を携えて静かにその時を待っている。

そして、外からは何者かが近づいてくる足音が聞こえてくる。

ザツザツ……と幾つもの足音が聞こえ、相当な数の敵がいることが窺える。

ア「これは……久々に暴れ甲斐がありそうね……」

！」

その事実 naturally 口元が歪み、好戦的な鋭い顔付きとなる。

相手がドアの前迄来るのを待って、3歩：2歩：1歩：——その瞬間！ドアを開けて人形たちを差し向ける！武器を手にしたシャンハイ、ホーライたちがドアの向この敵に殺到していく……その時に明らかかな機械の軋むような金属に何かがぶつかるような音が辺りに響いた。

その音を聞き、私も外に飛び出す——  
ア「な、なんなの……コイツラ……」

そこで私が見たのは、今までに見たことのない外観をした無骨な見た目の機械の人形のような奴らがシャンハイたちの攻撃を受けて戦闘不能になつていいる姿だった。

倒れている一体を除いて皆私の家を囲むように横一線に並んでいる。

それによくよく見てみれば、私の人形たち以上に多種多様な武器をそれぞれ手にしている。それにしても気にかかるのが倒れているのが目の前のこの一体だけだと言ふことだ。

先ほどは（気配からして）一斉に何体も迫ってきていたはずなのにこの一体だけというのはおかしい——とそう思つて、ふと地面を見ると、何かが地面を蹴つて地を抉つたようなああとが見られた——つまり、とつさに回避行動を取り、事そこで倒れている一体以外は無きを得た、ということのようだ。

尤もこちらもそのおかげか否かこちらも損害は0だけど……

ア「なるほど……そう簡単にやられてはくれな  
いってことね……」

するとそのセリフが合図になったのか、相  
手方の兵の中では数が多いカギ爪を武器にし  
た者が私に上からその武器を振り向けた・  
・恐らくそれが指示だったのだろう。

他の人形兵たちも私に対して殺到してきた。

ア「ふうん……人形対決してわけ……?……負  
ける気がしないわ!……さあ、私と一

曲戦おとしりいましょう?」

その一言と共に私の指揮の下、シャンハイ  
たちが手に手に武器を持ち、一斉蜂起する。  
家の裏で待機させていた（花壇に水をあげて  
いた子たちだ）子たちに、家の中にいた子も  
全員、口々に「シャンハイッ!」と戦意を露  
わに敵めがけて突っ込んで行く。

ア「戦操「ドールズウォー」!!」

そこで私もスペルを宣言し、十二体の人形  
たちを全面に配置して相手に対応する。

あるものはシャンハイの持つ槍に喉を突かれ  
スパークを起こし、またあるものは大剣（シ  
ャンハイたちにとっては）で胴を真つ二つに  
されている。

——しかし、こちらも相手のカギ爪を持つ  
敵から攻撃を受けたり、鎖や棒の先に棘のつ  
いた鉄球のある——あれはモーニングスタ  
ーね……——武器を当てられる人形たちが出  
始めた。

その子たちは何とか武器で防ぐもののパワー  
に差があるのか、若干押され始めている。

そうした人形たちの中から「シャ、シャンハイ



イ……！”と苦しそうな鳴き声も聞こえる。

ア「くッ……——!?」

しかもそのこう着状態の人形兵どもの背後から新たな兵が飛びかかってきた！——その手に槍を持ち、それを複数人の兵がこちらめがけて擲ってくる。

ア「……！！」

だがそれは盾を装備した他の人形たちをによつて防がせることで全て弾き返した。

槍を投げ、相手が丸腰になったところで新たに技を発動した。

もちろん力が拮抗している今の敵ごとふつ飛ばすのが狙いなので、シャンハイたち全員を一旦後ろに下がらせる。

ア「魔光「デヴィリーライトレイ」！」

——宣言の後、空間に浮かんだ魔法陣と

シャンハイやホーライなどの人形達の武器の先から——幅がシャンハイたちほどもある——

——レーザーが敵に向けて幾筋も照射された。

……その凶暴な光は光熱によつて辺りに少しの熱風を生み、地面をも削り焼いて目の前の敵を一掃した。

ア「ふうっ……！なんとか片付いたかしら？」

……あまりこういった圧倒的な勝利は好まないのだが、あまりに埒が明かなそうだったので、纏めて消すことにした。

でも、これでとりあえず一件落着………と思つたのも束の間、そう簡単では無いようだ。

目の前の空間に謎の裂け目が出来、そこから先ほどの機械人形共が各々のポーズで再び私の前に現れたのだ。

(およそ一体に付き裂け目が一つ)

ア「——・・・ッ!!」

相手が掛ってくるかとおつきに身構えたが

、敵はこちらに向かつて来るどころか——

何故か私に背を向けてどこかに飛んで行ってしまう。

ア「……てつきり向かって来るかと思っただのに  
……………」

一時は相手がまた攻めてくるかと身構えた

がそれも無く、自分に背を向けて飛び去った

敵に拍子抜けしながらもそれならそれで深く

追うことも無い……という考えに至りそうにな

ったところで、またも妙な胸騒ぎを覚える。

——なにか、これは放っておいてはいけない

ような……………」

・それに、先ほどの裂け目がどこか……この幻

想郷の妖怪の賢者……八雲紫のスキマを彷彿と

させるのも引つかかった。

ア「もしかして……私の知らないところで

何か異変が起きてる？」

この幻想郷に何か異変が起こっているのは

さっきの出来事やあの妙な連中を見ても明らかだ

……となれば当然自身も動かざるを得なくなる。

だが一応、幻想郷には異変解決を生業として

いるものたちがいるので別にその者たちに丸

投げしてしまってもいいのだが、やはり胸騒

ぎが止まらないのと、私自身も腕に覚えがあ

るので解決の助けになりたいという気持ち、

それに久々に暴れられる口実にもなることや

人任せにしておけない等、理由が重なり、結

「局私は今さつき逃げて行った奴らの後を追うことに決めた。」

ア「ここで迷って……というか後に退いたら後

悔しそうだしね！」

かくして私は大量の私のシヤンハイ・ホーライ作品たちと共に、異変の元凶がいるのであろう場所へと飛んで行った。

リグルside

——私は今、八雲紫の護衛の下、その八雲紫の能力によって底上げされた自身の能力「蟲を操る程度の能力」を使い、この幻想郷に今、広がっている……蟲とやらを能力で従えながら、博麗神社へ向かっていた。

リ「——（まあ、事情が事情だけに仕方ないとは言え、あの八雲紫を護衛にしてるなんてね……）」

そう……彼の妖怪の賢者はその並々ならぬ事情の故に（神社に付くまでの間だけだが）私の護衛に徹して身辺の警護に付いてくれているのだ。

本来なら、天地がひっくり返ろうともあり得ないことだが、事態は急を要すると、今だけは例外と言う措置が取られている。

当初はまた神社まで戻るのが面倒だったりしたが、今こうして八雲紫が自分を守っていると言うこの状況は、案外悪くない気分であり、事の珍しさも相まって、初めにあった面倒臭さなどはどこかへ飛んでいき、中々に良い気

分に浸れていた。

リ「人間、生きていけば珍しいこともある  
もんだって言うけれど……案外、妖怪もそ  
れは変わらないのかな？」

まあ、そんなわけで浮かれるなという方が  
無理な話である。(尤も、私を守ってくれて  
いると言うよりは私が従えている影が逃げな  
いようにと、私を監視するという意味合いのほ  
うが強いのだろうが……)——そして、そんな  
私の胸中を察してなのか、八雲紫がまたして  
も私に釘をさした。

紫「……わかつているとは思うけど  
、今こうしてあなたを守っているのは異  
変の解決に必要なからであるということ  
を忘れないでね……」

リ「わ、わかつてるよ……これは事態が事態だ  
から仕方のないことだってことくらい……」

紫「わかっているなら良いのよ、わかっ  
てるなら……さて、そろそろ着きそうね」

紫のその言葉に私もやや下の方へ目を遣る  
と確かに、神社の本殿とその前にある鳥居が  
山から顔を出しているのが見えた。

リ「(それにしても、さっきの注意……私の心  
が読めているんじゃないかってくらいに  
的確だったなあ……というか、丁度思っ  
てることだったし……心が読めるような奴が

二人も居ちやたまないよ……)」

紫「それじゃ、さっさと行きましようか」

リ「は、はいっ!」

そう言うや否や、それまでよりも一段とス  
ピードをあげて、神社へと降下していく紫……

それに追い続けるように私もスピードを上げ、私の後ろに付いてきている影<sup>カ</sup>を従えさせながら付いていく。

それにしても、大分と口数が少ないというか、あの八雲紫が、まるで絡んで来ずに、真面目に仕事をしているのがなんとも奇妙な感じだけど……でも、それも、この異変の深刻度を表していると思うと……などと、一人今後の展開を憂いている内に神社の境内がすぐそこに迫り、私は慌てて着陸の姿勢に入った。

紫「……………」

リ「うわっ……とと……」

直前まで考え事をしていて慌てて着地したためか、危なげなく地に舞い降りた紫と違って、私は危うくこけそうになりながら地面に降り立つ。

次いで、私が操っている影も私の横に控えるように降り立ち、私に対する従順さを行動で示している。

霊「なあんだ……紫と……ゴk、いや……」

グルじゃない」

リ「……ねえ、今——」

魔「いいや？ 霊<sup>コイツ</sup>夢は別にお前さんが想像しているようなことなんか口走りそうになんてなっていないぜ？」

リ「……って、いやいやいや！ もう怪しいを通り越して、もはや確信の域なんだけど！？」

霊「四の五のうるさいわね……なんか文句でもあるっての？ 言っていないつつつてるじゃない！」

リ「ひいつ・・・！」

あくまで失言を認めようとしなない鬼巫女が  
実力行使で黙らせようと懐から何枚かのお札  
を取り出して私に対して威嚇する。

：でも、まあ確かに言いかけただけで言つて  
はいないけれど、（というか、私の顔色で判  
断してやめたんだらうけど・・・）私としてはと  
ても引つかかるといふか・・・でもまあいいか。  
リ「わ、わかった！わかった！（あんたが鬼  
なのは今ので）・・・それよりも、連れて来  
たコイツ：早いとこなんとかしちやって  
よ。さつきから気持ち悪くてさあ」

霊「そ：わかればいいのよ。わかれば・・・」  
リ「（なんかデジャヴ）」

霊「それじゃ、始めるわよ」

魔「・・・ふう、まったく：一々会うたびに突つ  
かかってて良く疲れないなお前・・・」

霊「あんたにだけは言われたくないわ・・・」  
そして、霊夢による影蟲の封印は始まって  
、ものの数十秒程で完了した。

何せ、ただお札を貼って周りに結界を張るだ  
けだし、それに施行をするのは博麗の巫女の  
中でも歴代最強と唄われる霊夢である。

どんなに強大な影、異形であろうと封じる程  
度のこと造作もないだろう。

その封じられた影はというと、ありがたいお  
言葉がびつしり書かれたお札の強力で非常に  
霊験あらたかな力の前に、ただ鈍く地面をの  
たうつぐらいしか術がなく、そしてその行為  
空しくその場から1cmどころか1mmた  
りともずれることを許されなかった。

私はその光景を見て、他にも封じている影共もいるのによくそんなに軽々と封印できるものだと改めて巫女の凄さに驚嘆していた。

そんなことを考えながらまたも地面をのたうつ影の気持ち悪さに目をひかれていると、不意に霊夢が紫に声をかけた。

霊「ちよつとあんた…さつきからなに黙り込んでるのよ…らしく無いじゃない。紫」

この妖怪の賢者にして大妖怪である八雲紫を前にしても決して物怖じすることなく、かといって油断もしないような態度の霊夢から掛けられたその声に対して紫も先ほどから閉ざしていた口を徐に開き始めた。

紫「あら、私だって考えごとの一つや二つするのに口を閉ざすことぐらいあるわよ？  
というより、この現状、あまりにも解決すべき問題が山積していて流石の私も閉口せざるをえないの…考え無しのあなたたちとは違つてね？」

霊「へえ…やつと喋るようになったと思つたら、喧嘩を売ってくるとは良い度胸してるじゃない…！」

魔「ああ、確かにな…私たちが何も考えていない木偶の坊発言はただちに撤回してもらおうとするぜ！」

紫「あら？事実をありのまま言つて何が悪いのかしら…というより自覚が無かつたのは驚きですわ」

私の胃はこの急な一触即発の展開に悲鳴を上げようとしていた。

何故？先ほどまで何事もなく順調だったのに

……！霊夢が変に煽ったせいでそれが原因で売り言葉に買い言葉な状況となり、それに魔理沙が乗って状況が悪化した。  
もう、私が何を言っても止まりそうにない……  
つていうか私にどうこう出来るはずが無い！  
片や異変の解決者二人、そして片や、この幻想郷の賢者であり大妖怪の八雲紫では、分が悪すぎる。

霊「ふくくん…ねえ魔理沙、これからここにやってくる敵さんを歓迎する前にちよつと準備体操しとかない？」

リ「あ、あの……ち、ちよつと？」

魔「奇遇だな……丁度私もそう考えていた所だぜ……どのくらい奇遇かと言えば、離れたところにいると思っていた恋人とばったり街中で偶然出会えたくらいの奇遇さだ」

リ「いやいや、喻えがかわいいな……」

紫「あらあら……あなたたちにはあまり消耗して欲しくは無いのだけれど……その体に身の程を教える分くらいは仕方が無いかしらね……」

もうまさにどちらが口火を切るのが先か……  
というところで、どちらともなく不意に溜息が洩れた。

そのことに呆気にとられていると、紫の方が

ら——

紫「いえ…やはり今はやめておきましょう……  
こういうことは全ての決着がついた後に  
するべきよね」

すると霊夢も、

霊「……そうね。この異変の後でも好きなだけ



弾幕ごっこは出来るんだし、それを今や  
って消耗した分足りなくて負けましたじ  
や話にならないわ」

次いで魔理沙。

魔「ま、言われてみりや、そうだな。単なる  
小競り合いで勝手に倒れてたら敵の方々  
に爆笑されるぜ」

なにはともあれ、この場がなんとか収まっ  
たことに安堵のめ息を吐く。

本当に収まってくれて良かった…何故ならもう  
あと少しの所で、霊夢はお札や封魔針を取り  
出し、魔理沙は相棒のミニ八卦炉を懐から取  
り出して、紫は紫でスキマから弾幕の類を放  
ちそうな雰囲気だったからだ。

故に、三人とも冷静になってくれて本当に助  
かった……と思うと同時に、今回のこの異変は  
そんな予断も許されないほどのことなのかと  
改めて自分の中の危機感を募らせる原因にも  
なった。

紫「…：それじゃあ、リグル。あなたを藍たち  
の所へスキマで送るから…：…」

リ「あ、あのさあ…：…」

紫「…：? なにかしら?」

リ「私もここにいたら駄目なの? だって、あ  
なたと同じでわたしも影を剥がせる段階  
でない役には立たないだろうし、足手

まといになるだけじゃないかな…：それに  
一緒に行った方がスキマを使う回数も一  
回で良いわけだよね?…：それなら、ここ  
であなたたちに加勢した方がいいんじゃない?  
ない?」

その私の提案に一瞬逡巡した後、八雲紫は顔をあげて言った。

紫「確かに、その方がいいかもね……」

リ「でしょ？ だったら……」

紫「でも、あなたはここで待機なさい。まちがっても戦おうとはしないこと」

リ「え？ ……それって」

紫「言わなかったかしら？ あなたはこの異変解決の要よ？ ……まあそれを言い出したら全員そうなだけけれど……でも中でもあなたは敵から目を付けられるわけにはいかないのよ」

リ「それなら！ 離れたところから攻撃すれば……」

紫「いいえ……それも避けた方がいいわ。敵がどこから見ているかわかったものではないのだから」

リ「う、ううん……でも、役目があるまで、ただ待つだけって言うのは……」

紫「もちろん気持ちは嬉しいし、わかるのだけれど……ここは私達の庇護下で大人しくしておいて頂戴……」

紫の言うことも尤もだと思う。悔しいけど私ではこのメンバーに付いていくには役不足だろう。

何故なら私は「能力」を買われてここにいるのであって、実際の戦闘に於いては足を引っ張るだろうことが明白だからだ。

それに……まだ、そういう立場や役回りの者が他にいないとも限らない。

だが、だからと言って全くの頼りきって何も

しないなどということはやはり出来ない――  
―だから、霊夢たちにもしもの事があればその時は私が動こう！――私は一人、密かに  
そう決意を固めると、ひとまずは紫の言葉に  
頷いた。

リ「わかった……なるべく敵に見つかからないよ  
うにどこかに身を潜めとくよ」

紫「悪いわね……でもその代わり、あなたの身  
柄は私達三人が保証するわ」

私が了解の意を伝えると、この大妖怪には  
珍しく、とても申し訳なさそうな空気を滲ま  
せながら私に対して誓いにも似た約束を結ぶ  
。

一方私はそのことは別に気にしなくても良い  
と伝え、その後私はどこか見つかりにくく、  
且つ霊夢達を見渡せるような場所を選んで潜  
伏することにした。

その際に八雲紫がなにかを呟いたような気が  
したが、気にすることなくその場を後にした。

紫「……あなたは無事なのかしら……？私の勘が  
正しければ恐らく次は……いや、駄目ね。

下手な憶測や予想で動けば余計に状況を

悪化させかねないわ……ならせめて、祈る

しかないのかしらね……あなたの無事

を――幽々子……」

幽々子 side

今宵も主客殿の縁側から見渡せる二百由旬

もの桜がはらはらとその花びらを儂い命と共に散らしながら見る者の目に楽しみと切なさ  
と寂しさと……そして、美しさを覚えさせては  
忘れさせるといふ輪廻を繰り返している。

更に、ここ冥界では既に判決を受けた罪のな  
い多くの魂たちが幽霊となつて、成仏するか  
転生する迄の時間を過ごしている。

その為そこに住む虫も鳥も獣も死者であり、  
鳴き声も無く静かに華麗に飛ぶその様はここ  
で成仏か転生を待つ魂たちにそのことを忘れ  
させ留まらせる程に美しい。

しかし、そんな冥界も、最近は死者だけでな  
く生者の姿も良く見るようになった。

その原因は冥界と顕界を隔てる結界に穴が空  
き行き来が容易になったことにあり、ここ冥  
界が桜の名所で知られていることが主要因  
である。

(他の四季の時も美しいが)

そして桜の見える場所は主客殿縁側、桜は北  
庭のその奥に二百由旬もの広きに渡って咲き  
誇っている。

その、広大な土地に所せましと植わっている  
桜の庭の中で、一つの道が存在している。

その道には来るものを拒むかのように門が閉  
められており、何者も入ることが許されてな  
どいなことをそのあり方で示している。

それもそのはず、その道を通つた先にあるの  
は、この世のどんな桜よりも魅惑的で、そし  
ておぞましい……そんな妖怪桜が植わっている  
のだから……その桜に魅入られたものは死に、  
例え、一度封印が解かれれば多くの命を喰ら

うことになるだろうことは目に見えている。  
しかし、中にはだからこそ惹かれるという輩  
もいるし、そうでなくともつい魔が差して……  
と言うことも世の中にはるものだ。

だからこそ、ここを管理するものが厳格にそ  
の場所を見はり、何人たりとも、その道を通  
さないという鉄の意志を感じさせる厳重な扉  
が門を閉ざしているのだが……

とそんな思考に囚われている間も桜の木から  
はその儂くも刹那い命の輝きが空を舞い降り  
ては枯山水の庭の玉砂利の上に落ちていく――  
――と、その時、表門の方の中有の道の方  
から誰かが上ってくるような気配を感じた。  
いつものように従者の孫娘に当る可愛くも頑  
張りやな妖夢が私の為にお茶菓子を持ってく  
るのを桜の見える縁側でのんびりと待ちなが  
ら物思いに耽っている時にその気配を感じた。

#### 西行寺幽々子Ⅱ幽

幽「あら、妖夢あのこが帰ってきたのかしら……いえ  
、違うわね……それに紫でもない……あの子  
なら階段をわざわざ上がってくるなんて  
面倒なことせずに其処ら辺から出てくる  
はずだし……」

最初は自身の可愛く自慢の従者が帰ったの  
かと思ったがどうも気配というか気質が違う。  
なので、恐らくは侵入者ではないか？と思っ  
た私は今いる大広間から見て北側の縁側から  
その真反対の表玄関まで飛んで行くことにし  
た。

もし侵入者ではないのなら良いのだが、どうも気配からそうとは感じられない。

故にこの冥界に害を為そうと言うのならば従者ようむの代わりにこの私が直々に迎え撃たねばならない。

——というよりも、相手も全く隠す気が無いのか、はたまた敢えて誘っているかのよう  
に敵意や害意と言った負の気配を辺りに撒き  
散らしながら、上ってきている。

幽「何処のどなたかは知らないけれど、ここにそんな邪気のような物を持ちこむような輩を受け入れるわけにはいかないわね

えくく……」

誘いに乗るのは癪だけど、そんなことを言っている場合ではなさそうなので、お望み通りに迎えに行く。

その途上で大広間のある主客殿の屋根や西庭に南庭、厩舎が目に入り、最後に表玄関が姿を現した。

そしてその先にある表門の前に優雅に舞い降りると、いつものようなおっとりとした雰囲気の中に今からこの階段を上がり切ろうとしている者に対して拒絶の意を織り交ぜながら、その細めた目を薄く開いて門の向こうを値踏みするかのように眺め、招かれざる訪問者を静かに待った。

影チルノside

現在、冥界へと続く石階段を行進中。残り、数メートル程で目的地に到着——!!前

方に高密度な霊エネルギー反応。  
門前に到着。

数メートル先に先ほどの高密度な霊エネルギーの発信源を目視。

対象の見なり、服装等から当初の目標、「華胥の亡霊」「西行寺幽々子」であると認定――

――ここでの、服装や見なりとは、ピンク髪のみディアムヘアーに水色と白の着物、モブキャップ、その帽子には幽霊を想起させるマークの付いた三角布を巻き、履物はぽっくり下駄のような物を着用している容姿のことを言う――これより、指令に基づき行動を開始する。

自身の影の中から先程、奪取に成功した刀剣――「楼観剣」を取り出し、抜刀――中絶。作戦対象の急接近に付き戦闘行動を確認。

対象の目的はこの「楼観剣」であると認識。その後、刀剣獲得の為、双方ともに戦闘に突入――……相互に格闘を継続……結果――最終的に対象からの蹴撃により「楼観剣」を中空に投げ出してしまったことにより、奪還阻止に失敗。

やむなく次行程に移行。

対象

「あら、ごめんなさい？ どうにも

足癖が悪くってえく……ふふふっ……

――でも、楼観剣は返してもら

うわよ……？」

対象は虚空に投げ出された刀剣を自身の片手を上に掲げ、目標物をその片手で掴み確保。そのまま腰の帯に帯刀、抜刀術と思しき構えを取る。

対象 「私って、あの子から剣術を習う立

場にあるのだけれど……そのおかげな  
のかしら……腕には自信があるのよね  
え……」

影 「……」

対象 「……途中で、出くわしたであろう妖夢

には目もくれず、ただ刀を奪って行  
っただけなどところを見るに……最初か  
ら私が目当てだったのかしら？……」

——痛い目を見る前に洗いざらい目  
的を吐いて出て行った方が賢明だと  
思うのだけれど……？」

影 「……」

対象 「……主人の私がこんな事を言うのも

あれだし、あの子に？れられそうだ  
けど……もしかしてここへは妖夢のこ  
とをちやんと片付けてから来てしまっ  
たのかしら？」

対象の発言後、その本体から高エネルギー反  
応。

戦闘開始の前触れと予測。

高濃度の霊エネルギーを検知。

その戦闘に対応するため、即座に構えの姿勢に  
移行。

影 「……っ!!」

対象 「もしもそうなら……わかってい  
るわよね？」

作戦目標は着物、胸部の懐より一つの扇を

取り出し、その扇を目の前の人物……私に向  
けて戦線布告を実施。

対象 「まあ、本当にあの子をやったのな



らだけれど…それ相応のものを覚  
悟して貰いましょうか……！」

その宣言を合図と判断。敵対象が扇を広げ  
て宙に掲げ、スペルを唱えたことにより戦闘  
行動に移る。

さいぎやうじゆこ  
対象 象 「それじゃあ、そろそろ始めましょ

うか……その命……この庭の桜の如  
く儂く散らさない……！楼符「

完全なる墨染の桜」……」

対象のスペル宣言と共に、視覚を埋め尽く  
すほどの弾幕が展開。

——これより、計画を実行に移します。



## 第十三話 氷争（白楼 其の式

冥界に舞う桜の花びらがその中で今まさに  
激闘を繰り広げる者たち二人の様を華麗に儂  
く彩る。

—ギイン…ドツ…ドカツ！

—ヒユウ…ンツ…ドオー…ツツン！！

—バキツ…ピキパキパキキキ…

—ギインツ……ギリリ…

弾幕が飛び交い、時折誰かが吹っ飛び激突  
する音や鏝迫り合いや刀の打ち合う音、大気  
のひび割れるような何かが凍り付く音などが  
辺りに響く。

ある者の抜刀術は風に舞う花びらを幾枚も両  
断しながら相手に迫り、己の放つ弾幕と共に  
敵に追い縋る… — その相手の攻撃はそ  
己が敵を…その場の空気や花びら同様…凍て  
つかせ、打ち砕かんと襲い掛かる —

双方が攻撃を次々に繰り出す中、ふと互いに  
距離を取ったタイミングで青い衣を纏った者  
が不意に刀を完全に抜き放ったままにし、霞  
の構え — つまり、刀の切っ先を相手に向け、  
刀身の反った峰の方を下にする構え — を取り  
、ほんのわずかに息を切らしながら響いた。

「…これじゃあ、罅が明かないわあ…」  
のままだと徐々に追い詰められそうだし…奥  
の手を使わせてもらおうわあ」

——数時間前……

幽々子 s i d e

——おかしいわね……

私は先ほど——戦闘が始まってすぐ——から自身の持つ「死を操る程度の能力」で相手を死に追いやっているはずなのだけれど、その効果を持った弾幕をも躲されるばかりか、その能力自体が何故か、あまり効いていないように感じる……まるで言うなれば途轍もなく広大な湖の水を手元の桶で掬い、掻きだそうとしているかのよう……そんな途方も無さ……それに、確かに手応えはあるのだけれどその能力自体も中々通りにくい……

しかし、幾度も刃を交える中で相手が——何で出来ているのかが次第にわかるようになって来た。

幽「あなた……何かの生物が元に成っているのねえ……それが、人工物かどうかは知らないけれど……でも、少なくともあなた元の元になっているような自然の生き物を見たことはないわ……つまり、誰かに作られたってことよねえ……？」

相変わらず相手は何も答えようとしなないけれど、凶星を突かれたとでも言うような気配が一瞬だけどしたので恐らく当たっているよ  
うね……

幽「成程……だから、私の能力、『死を操る程度の能力』が効き辛かったのねえ……」

何故か相手は妖力が無尽蔵にあり、しかも人工の生命体であるが故に『死』から遠い存在だったからだろうか……それだけならただ

死に導いてそれで終わりなのだけれど、厄介な事に…何度死なせても、”復活”されてしまふ…それも、死んだ次の瞬間には……という事は……

幽「あなた、もしかして”妖精”をも元にしているのかしら？でも…こんなに早く復活する妖精なんて知らないのだけど…それも、その膨大な妖力のおかげというよりはあなたの中にあるその力を制御する術式の方にあるわね…」

——でも、何にせよ…まるで効いていないってわけじゃないのよね…それなら…例えばキリが無くとも、地道に削っていくしか方法は無いし…それが良いでしょうね。

下手な方法を試すよりは、一步一步確実に追い詰めるべきだという考えたの下に私はまた戦闘を再開する。

まずは死の力の無い弾幕を展開し——

幽「桜符!!」完全なる墨染めの桜——開花——

次にそれ（弾幕）を吸収しながら私に向かって突撃してくるのを腰に佩いた刀でいなして横合いから叩く。

この刀の一閃には私の死の能力が付与されているので、相手は受けるだけでも死を余儀なくされる…まさに必殺の刃である。

しかし、敵も只で殺されてくれるわけも無く、私の剣を受けたその時に刀の柄とそれを握る手を氷で接着してくる。

…最初はこちらの放った弾幕を相手が自身の妖力として吸収していると知った時は驚

いたが、それも私の場合は対抗できるし、今のように餌として使うこともできる。

敵は出来るだけ多くの力を集めたいんでしようけど、そうすることによって隙が生まれ、そこを突かれると知っている——先ほどそうした——ので直接私の所へ一直線に突撃してくるところを逆に撃つ。

そして…対策としては——

幽「弾幕の一つ一つに私の能力死が付いていればあなたは避けるしなくなる！死符「ギャストリドリーム」！」

案の定、相手は私の弾幕を躲して対処してきた。

今はこの死の弾を躲すのであの子は必死になっっている——そこを——！

幽「：背中が、がらあきよっ！」  
影「——ッ!!?」

私は弾幕を避けて背を向けている瞬間を狙って刀を横一線に抜き放つ。

相手は慌てて振り向くと同時に既に精製していた氷剣で防ごうと反射的に構えてしまうがそこに私の死刃が直撃する。

相手は十尺ほど吹っ飛んだ後に、光の粒となり消滅した。

しかし、直ぐに同じ場所に復活してしまう。

……確実に削っているとはいえ、これが延々繰り返されるとこちらの動きが読み切られてぼろが出るのも時間の問題……と感じた私は……これだけは使うまいと思っていた最後の手段に出ることにした。

——そして、場面は最初に戻る。

影チルノside

対象たいしょう象しょう 「このままだと埒が明かなそうだし……

し……追い詰められてしまう前に奥の手を使わせてもらおうわあ……」

眼前に存在する対象から高エネルギー反応。

再びこちらに対して刀剣の切っ先を向け待機。

……その後、こちらから見て二時の方角へ向けて飛行。

その行動を追跡……途中、その区画を封鎖していたと思われる門を通過。

前方の対象とは別にもう一つの高エネルギー反応を持つ樹木を確認。

エネルギーの種類を妖力と断定——……!?!  
——突発的な自己の死亡を確認。

原因不明。

……更に謎の引力を観測……僅かながら徐々に樹木へと接近。

後退不可…………!?!……先の原因不明の死因と謎の引力の関連性の有無、また、その内容について検討………判明。

……死因……自殺。

引力………引きにより吸引されているのではなく、妖力を発するの樹木（以後便宜上妖樹と呼称）へと自ら接近している。

現在、自身の能力により精製した氷刃での自害の実行に抵抗中………その行動の選択理由は不明。

尚、自身の視線も妖樹に向けられたまま固定され、不可動状態。

尚、妖樹への接近は継続中……抵抗中の左手の力の減少、自刃する右手の力の増加を確認……？……原因不明……尚、抵抗を継続……

自殺実行……中止……

自殺実行……中止……

自殺実行……中止……

自殺実行……中止……

自殺実行……中止……

自殺実行……中止……

自……中止……殺……中

……自……殺……

中……中……

対象象「うふふ……安心したわあ……

何も喋らないから不安だったのだけれど……妖樹に魅入られるくらいの感情は持ち合わせ

ているみたいね……」

影「……っ!!……ツッ……？」

……自身の腹部に氷刃の刺入が先端から三寸程であることを確認。

目視不可……よって感覚からの判断。

対象からの説明が再開。

静聴し、情報収集に徹する。

対象象「この桜は西行妖と言って、これ

に魅入られたものの精気を吸う……つまり、命を奪い、その魂を取り込む妖怪桜……これに魅入られたあなたは、自分の中の力を取られると知りつつも、この桜に近づくのを止めることも、自死を止めることもできない」

——対象からの説明により新たなる事実が



浮上。

この自発的な接近及び、自害は眼前の妖樹の能力によってもたらされていると判明……自身を目視した観測者に対して潜在意識に呼びかけ、その観測者に破滅もたらず行動を取らせる能力。

よって、精神感能力であると断定

—— ツツ!!!

—— 自己の破壊を確認。

—— 並びに、妖樹への接近を認識。

対象 「……それにしても凄いわね……まだ精気や力を数回分くらいしか西行妖にあげて無いはずなのに……もう六分咲きだなんて……」

影チル 「……ツツ!!!—— つつ!!」

対象 「……? ああ……懸命に離れよ

うとあがいているみたいだけれど……無駄よ? この樹の縛る力は近づけば近づく程強くなるし、一度死ぬごとに近づく距離は一気に増えて益々離れられなくなるわ……というよりあなたが自分で近付いてるだけなんだけどね」

「事実が対象の供述と一致。死亡を確認することに妖樹に対する急接近を確認。」

尚、回避する方法、手段について模索……

—— 不明。検出不可。

樹木に対する接近を継続中の自己への抑制、抵抗、阻害……全て不可。

……し……又……?

……キ……え……



腹を切り裂こうとしているのを見て、勝利を  
確信し、自身の扇子で口を覆おうとした、そ  
の時

――不意に、彼女自身へと  
向かっていた刃が止まった。

幽「……………っ！」

なにか、よくわからないけれど……………ものす  
ごく嫌な予感がする……………!!

急いで、私自ら止めを刺す為に若干黒にくす  
んだ白い着物の彼女の下へと飛んでいく。

幽「頑張つて堪えた所悪いけれど、ここで終  
わらせてもらおうわっ!!」

そう叫びながら自分でも凄まじいと思うほ  
どの速度で飛んで、彼女へと距離を詰めて行  
く……………と、また不意に彼女の刃が彼女自身に  
向かっていった……………それを見て、もしかして  
杞憂だったのか……………と思い、スピードを緩めた  
……………その時！彼女はその氷の短刀の持ち手を  
自刃するための逆手から順手に持変えていた  
のだから……………そして、飛行する速度を緩めたこ  
とを後悔した時にはもう、彼女は――  
己ごと西行妖を横一文字に一閃していた――

――西行妖は弾幕を放つ間すら与えられず、  
一瞬の内に木の根に近い所から斬られ、斬ら  
れたその切り口から徐々に黒みを帯びた氷に  
侵食され、凍っていく……………

――辺りに氷が出来るとき特有のピキキ、  
パキ、パキキつというような大気のひび割れ  
る音と樹木が切り倒されたときのギギギ……………  
という、音が鳴り響く。

……あの桜（桜からして見れば、瀕死の相手から致命傷を与えられるなど全くの予想外だったことでしょうね……）

一方、西行妖をまんまと切り倒した相手は光の粒となった後にあっけなく蘇り、氷漬けになっていく西行妖を眺めている……と、おもむろに手を倒れそうになっている幹に翳す……

（因みに樹は彼女の反対側に倒れて行っている）と凍結が加速し、限界を超えたかのようにパキキツ……とひび割れ、パアン——ツ……と粉々に砕け散った。

……その細かな破片が光を反射して輝き、幻想的かつ儂情景を生み出す……その桜の散る様より儂く美しい情景に不覚にも一瞬だが、見入ってしまった……が、……しかし、今はそんなことを気にしている場合じゃない！

——彼女が砕け散った氷片を吸収している今のうちに……!!

私は、未だ自分の奪われた分の妖力と西行妖の妖力が結晶化した氷を回収していて後ろを向いている相手にとどめの一撃を加えるべく、今まで出したことの無いほどの飛行速度で彼女との距離を一気に詰める。

……正直なところ、自分でもかなり卑怯な手だとは思うけれど、この機を逃せばもう後は無い。だから、なりふり構ってなどいられなかった。

影（チル）「……………!!——、……………」

よく見ると、目の前の相手は肩で息をしており、かなりぎりぎりの状態ではあるようだ。それならやっぱり、今しか倒せる機会はない！

——そして、私が標的の背後を取って楼観  
剣に『死を操る程度の能力』を乗せた死刃を  
鞘から抜き放ち、首元へとそのまま横一閃に  
振り抜く——……お願い！間に合っ  
て！！

………果たして、私の焦燥とは裏腹に楼観  
剣はすんなりと何の抵抗も無く彼女の首を斬  
り飛ばした。

幽「……………え？」

正直、拍子抜けだった。

もつと抵抗らしい抵抗をされると思っていた  
から。

相手もこちらの接近に気付いていただろうし  
、もしかしたらこちらの切っ先が届かないか  
も知れないとさえ思っていただけに、あまり  
のあっけなさに戸惑いを隠せ無かった。

………確かに、如何に攻撃を受け止めようとこ  
の私の能力の乗った刃が当たった時点で死ぬ  
ことは免れないのだけれど、それにしても…

……………ツツ!?

幽「なっ……………し、しまっ……………そう、ゆう  
こと、だったのね……………!!……………なんで、こ  
ん…な、…カハっ……………！簡単な事に……………！」

不意に空気の塊が口から吐き出される…

(まあ、尤もそもそもが亡霊なので呼吸も何

も無いのだが——) 私が下に目を向けると  
、背後から相手の…敵の氷刃に胸を貫かれ  
ているのが見えた。

自分でも若干、豊かな方ではないかと思う乳  
房の谷間から着物を突き破って、青く透き通  
った暗い色の抜き身の刀身が生え、切っ先が

自身の前方を向いている…（霊体だから、私には物理攻撃が通じないはずなのだけど、霊夢の霊弾やお札や針、魔理沙の魔法等の特殊な攻撃なら効果があるから…恐らく、この氷刃も同じようなもの…なのでしようね…  
…）…そして、目の前の首なし死体はいつの間にか…黒ずみ透き通った氷人形に変わっていた…

その人形も粉々に砕け散り、私の後ろで静かに佇む氷の妖精に吸収されていった…

妖「……………っ!! 幽々子様あっつ!!」

ああ…妖夢…生きていたのね…良かつ…  
…たあ…でも、なんて間が悪いのかしら…  
…こんな…カツコ悪い所…

……………ごめんなさいね…妖夢……………

私は、最後の力で妖夢の方を向いて、そつと  
呟いた。

幽「ごめんなさい…妖夢…かつこ、  
悪いところ…みせちやつ……………」

その台詞を最後まで言い終わることなく、  
私の意識は刈り取られてしまった。

——その直前、ふと、再び自分の体が  
目に入る。

貫かれた所を中心に氷塊が広がってきている。  
…ああ、これが全身を覆いつくした時、私  
は……………

妖「ゆ、幽々子様ああああ……………  
……………ツツ……………い…イヤアア  
アアアアア!……………つっ!!

!？」  
私の可愛い従者が頭を抱え、悲鳴を上げて

目の前で蹲る——その従者の眼に映る氷の塊に覆われた自身の姿、その氷塊が砕け散り、中から現れた全身が真っ黒に塗りつぶされたシルエツトのような自身の姿を私を知ることは無かった……

チルノ side

遅かった……また…犠牲者を増やしてしまつた……くそっ……！

思わず、自分の無力さを呪い、強く拳を握りしめる。

……今回も間に合わなかつた。元に戻すことができないとはいえ、戦わずに済むならそれに越したことはない。

あたいがこの白玉楼に上り詰め、如何にも嚴重そうな扉が隔てる門がくぐり、桜の木が所せましと咲き乱れるその石畳の道の先に、もとは巨大な樹木があつたのだらう切り株のある開けた場所に出ると、もう……妖夢は悲痛に満ち満ちた叫び声を上げ、その視線を向けていたであろうその妖夢の前には——あたいから出てきた影……あたいの分身ともいえるそいつが、白玉楼の主人であり、妖夢の大切な、守るべきひと……西行寺幽々子を背後から刺し貫いている光景が目に入った。

——わかつてはいる。

これは奥にいる奴の命令でやらされているに過ぎないことであると……でも、あたいは目の前の光景に怒りを感じずにいることは出

来なかったし、ただ後ろでコソコソと操つて  
るだけの奴に対しては……より一層、腹が  
立った。

大「あ、チルノちゃん!!」

藍「……ふう……やつと、追いついたか……」

橙「ら、藍様あくく……はあ……はあ……  
まっってくださいい……」

あたいがそうして一人、目の前の光景に怒  
りとやるせなさを感じていると大ちやんたち  
があたいたちに追いついてきた。

それと同時に目の前のあたいの影も幽々子が  
完全に影に取り込まれたのを確認すると、ま  
たどこかへ飛び去って行こうとする。

——さて……! やつと追いついたって言  
うのにこんな……

チ「待てっ!! 逃がすかッッ!!」

幽「……」

チ「っ!?!……クッ……!!」

あいつを追おうとした瞬間、それに立ち塞  
がるようにあたいの前まで飛んで来る幽々子。  
……その姿は全身を真っ黒に塗りつぶされ、輪  
郭だけでのみ本人と分かる容姿となっている。  
あたいがそんな変り果てた姿の幽々子に足止  
めを食らっている間に、妖夢が凄まじいスピ  
ードと剣幕であたいの影に向かって行った。

妖「……絶っつ対に逃がさないッッッ!!!」

よくも……よくも、幽々子様をオオオッッ  
ー!!!」

その姿を遠目に見て、自分も早く行かなけ  
ればという焦り、目の前の人に対しては間に  
合わなかったことによる自責の念が渦巻き、



戦うしかないのかという思いから自然と相手に語り掛けていた。

……そんなことをしても……無駄と分かっているのに。

チ「やつぱり、行かせちゃくれないか……」  
もう、こうやってにらみ合っけていても始まらない。

こうしている間にも妖夢は影の奴あたいと戦っている。

——それに、……もう既に押され始めている。

大「チルノちゃん!!」

藍「……! : 貴女は……そうか……敵の手に落ちたか……」

大「チルノちゃん、やろう!! 早く助けなくちゃ!!」

チ「うん、力を貸して! みんな!!」

藍大橙（同時）「ああ!!」「もちろん!」「行つきますよオー!!」

あたいには心強い仲間がいる。

申し訳ないけど……目の前の人にも加わって貰うことにしよう!

あたいはその決意と共に自分の後ろに氷の壁を展開して手を当てる。

あたいの仲間たちもをの意図を察して弾幕を展開して、あたいの壁に充てる。

藍「式揮「狐狸妖怪レーザー」!」

橙「仙符「屍解永遠」!」

大「妖符「ルーネイトタイフーン」っ!」

皆の弾幕があたいの氷壁に当たり、それを壁が吸収してその妖力を自身のものにしてい

く。——そこで相手の力の高まりを感じ取ったのか、相手も持っていた刀を構える。

妖「——っツツ！……うああああ——  
——っ！！！！」

——ドオオオンツ！

互いに戦闘態勢に入った所で、奴にここま  
で飛ばされて来た妖夢があたいたちの横を、  
突っ込んだ時とあまり変わらないほどのスピ  
ードで地面に背中から叩きつけられその衝撃  
が半径3m程のクレーターを形作り、その一  
帯を土煙が覆った。

一方、妖夢を難なく退けた様子ししぞのあいつは  
妖夢に一瞥だけくれると、そのままどこかへ  
飛んで行ってしまった。

——そこでまた妖夢が心配になり、下に目  
を向けようとしたその瞬間、敵がほぼ一瞬で  
距離を詰めて攻撃してきた！あたいは咄嗟に  
ガードの姿勢を取り、腕に氷の盾を精製して  
その腕で防御する……が、あまりの勢いに  
吹っ飛ばされ、後ろのあたい氷壁を叩き割っ  
て地面に対して鋭角（およそ45度）に叩きつ  
けられた。

当然、後ろで支援してくれていた仲間たちも  
その場から距離を取らざるを得ない。

「っ！！ うああっ……くっ！！カハ

アっ！（ドクンツ！）……ツ!?ぐっ……！」

あたいは壁で勢いが殺されたのかクレータ  
ーを作るほどではなかったものの強かに地面  
に叩きつけられ、肺の中の空気が押し出され  
た……その直後、自身の体に激痛が走り  
……体が光の粒になって消えた。

——そして、その場ですぐに復活した。  
チ「……………つえ？」

……………そう、氷精<sup>あたい</sup>は一度死んで、結晶に組  
まれた自身の術式で即座に復活したのだった。

——西行寺幽々子が西行妖の封印を解く30  
分前……………

紫 s i d e

……………胸騒ぎがする。

何か起きて欲しく無い事が起きてしまう予感  
が。

何がどうであるとか具体的なことは何も言え  
ないのだけれど、何かが引つかかるとい  
うか……………そんな至極曖昧な虫の知らせを私は一  
人感じていた。

因みにこの神社の中には霊夢の部屋が本殿の  
奥にあり、そこに今まで影に取り憑かれてい  
た七名が静かに眠っている。

そこでリグルが身を隠しながら眠っている者  
たちを看病している。

私はと言えば、神社の拝殿という、かなり手  
前の部屋に位置するここで軽く敵感知の結界  
を張りながら静かにその時がくるのを待つて  
いた……………と、どうやら来客をもてな  
さなければならぬらしい。

紫「来たわね……………」

その時、外で戦闘が始まったらしい爆発音  
や金属音、それと……………これは……………妖力と魔力  
と霊力の力のぶつかり合いが感じられる。

それが感じられた瞬間、目の前の扉を開けるのすらもどかしく、自身の能力を使用してスキマを開き、直接出向く……さて、それでは、この私の能力に対策を立てるなどと言う小賢しい真似をしてくれた敵かたに一泡吹かせにくとしましょうか。

スキマを通った瞬間、目に入ったのは摩多羅隱岐奈を助けに行った時にも見た機械人形の兵たちだった。

そいつらは奥の方、(つまり、社殿から見ると鳥居の方)で魔理沙が、それより手前の賽銭箱付近では霊夢がその魔理沙を支援する形で既に交戦中だった。

そこでふと振り返り、私の姿を見止めるなり  
霊夢が……

霊「あら、遅かったじゃない紫……もうとつくに始まつてるわよ？ ああ……もしかして、呆けた？ 年相応に？」

いつも通りの感じで煽ってくる霊夢。

しかし、そんなことよりも引つかかる所があり、そこはあえてスルーした。

紫「……とつくに？ ついさつきじゃない

の？ 私は敵感知の結界が反応してから霊夢……：貴方たちの戦闘音が聞こえてすぐに目の前の扉を開けるのも焦れつたくてスキマで直ぐにここに来たんだけど……：……：霊夢、戦いが始まってからのくらのくらいだった？」

霊「あら……てつきり噛みついてくるかと思つてたのに……：つまんないわ」紫「それについては戦いのあとでゆつくりお話をしましょうね」  
# 霊夢……でも、今はそれどころじゃ

ないわ………答えて頂戴」

まったく、会うたび会うたび私を煽らないと気が済まないのかしら………それはそれとして、霊夢が少し溜め息を吐きながら質問に答える。

霊「……しつかり聞こえてんじやない……まあそうね……だいたい十五分くらいかしら……もう、てつきり寝てるんじや無いかと思っただけど起こしに行くのはめんどいから敵さんに素敵なお賽銭を勧めつつ適当に相手してたわ………まあ、あの見た目だから期待は全然できなかつたけど………」

それは相手としてかしら？それとも参拝客としてかしら？……いや、これは両方ね。

……お賽銭のくだりで霊夢がほんの一瞬だけけれど、悲しそうな顔になったのを見逃さなかつた。

紫「………霊夢……貴方……見境が無いにも程があるでしょう……？あの見た目でなんでお賽銭を払えるなんて思えるの？」

霊「………っ！そんなの！言ってみなければ分からないじやないっ！………っというかそう思うならちよつとは神社（うち）の経済状況を改善してよっ！………まともなご飯食べたのなんてチルノ達が出来たときがホントに久しぶりなんだからあつ！」

紫「………うう………切実ね………それにしても、そんなに経っていたとはね………私としては一瞬で来たつもりだったんだけど………」

私が霊夢の貧乏巫女ぶりにひきつった苦笑いを浮かべた後、表情を真剣なものに切り替

えて、先ほど起こった現象について考えていると、霊夢が目尻の涙の粒を指でしおらしく拭いながら答える。

霊「……ぐすツ……どうせ、例の紫対策でしょ……あんた、結構大雑把にしか結界組んで無かったじゃない……だから、結界の外からくる奴らの感知の方には引つかからなかったんじゃない？引つかかったのは結界の内部のほうね……紫は直ぐあんたに来たって自分で言ってたし……魔理沙が境内の方に押され始めたのも戦闘が始まってから十五分後くらいだったからまず間違いがないわ」

なるほど、そういう事ね……ああ、毎度ながら腹立たしいことこの上ない……恐らく、私で施してある結界に対して反応するようにあの人形共にも全体に術が組まれているのよね……そうして通り抜けられる隙間のある方が突破されて、入って来た敵を魔理沙が迎撃、そこから大群に押され始めて通り抜ける隙間の無い方に引つかかり、私に気付かれた……ということらしいわね。

霊夢が私にすぐに知らせなかったのは霊夢の性格上、直ぐに助けを求めるなんてプライドが許さなかったか、さつき本人が言った通り本当に面倒くさいと感じたかのどちらかでしょう。

それでもなければすぐ後ろの戸を開けるくらいするでしょうし……他の者ならともかく霊夢ならすぐに開けられるくらいには緩い結界なのだし——そんなことを考えていると、交戦中の魔理沙からこちらを呼び叫ぶ声

が聞こえてきた。

魔「なあつ!!そのお二人さんっ!!お取り込み中のところ悪いんだが、ちよつとはこつちを手伝ってくれても罰ばちは当たらないぜ!」

霊「ああ、今行くわ……っていうか。そいつらくらいあんた一人で充分じゃなかったの?」

魔「それは他の雑魚共を指して言ってたんだ!!こんな奴は聞いてな……ってうわっ……  
……!!」

私たちに呼びかけながら戦う魔理沙の側を敵の攻撃が掠めそうになった。

……確かに、何の変哲もない……というもおかしいけれど皆同じような姿の兵が居る中で毛色の違うような者たちが居るのを確認できた……それに、そいつらは何か特別な力を宿してもいるようね——確かに、これは魔理沙一人では荷が重そうだわ。

霊「……しよくがないわねえく!それなら、その厄介そうな奴とやらは私に任せて、あんたはその雑魚共でも片付けてなさい」

言いながら札を構える霊夢。

魔「はあつ!!?そつちこそつ……おつ……この雑魚掃除してろよツと……!私は雑魚とこいつらがあつ……一緒に来るからややこしかつたんであつて、少数精鋭だけが相手なら話は別だぜ!」

霊「……はあ?なんで私がそんな面倒且つ面白くもないことをしなきゃなんないのよ?」

魔「いや、霊夢……考えてもみろよ……つと!

……雑魚の方がサクサク倒されるんだから、むしろ面倒が少ないんじゃないか？」

霊「いや大群の方がめんどいし、ちつとも面白くないじゃない……」

紫「ちよつと貴方たち……こんな時になに敵を選び好みしてるのよ!? ふざけてるの?」

敵が攻めて来ているというのに深刻さの欠片もない二人を叱りながら自身のスキマを展開して魔理沙をサポートする。

具体的に言うと、魔理沙の死角となっている所にスキマを展開し、相手が私の『境界を操る程度の能力』にしている対策、私の能力を感知すると避ける性質を逆に利用して追いつくというもの。

……そう、警戒され、避けられるというのなら牽制に利用すれば良い……案の定、魔理沙の死角の部分に相手は手だしできなくなつたことで魔理沙も自身の視界の及ぶ範囲だけに集中できるようになった。

魔理沙から「サンキュー紫!」と感謝の声が届くとほぼ同時に、私のスキマの間隙——言い得て妙だが——をくぐり抜けて魔理沙の背後に迫ろうとしていた人形兵の頭部を霊夢の封魔針が貫き撃ち落とした。

直後、自由落下に従い、地に落ちる金属のガシャンという音が辺りに派手に響く。

霊「だから紫……通り抜けられてちゃ意味ないんだけど? 私たちに注意を促しておいてその程度?」

魔「だよなあ!! 全く、霊夢の言う通りだぜ」

つ……前言撤回だ……つ! 恋風「スターライト



タイフーン」！……………しやあつ!!」

紫「……………くっ!」

何も言い返せない……………もしかしたら抜け穴があつたのかも知れないし……………でも、計算是完璧だつたはず…それに、何か違和感が……………私が自身のミスを引きずりながらも魔理沙をスキマでガードしていると、魔理沙の放つたレーザー型の弾幕が敵の人形兵を次々に撃ち落とし、その数はおよそ十体にも上つた。そして、私がスキマで阻害し霊夢が魔理沙に迫ろうとする敵や、隙の生じた敵を処理し、事は順調に進んでいた……………しかし、先ほどの違和感の正体が事態を暗転させる。

魔「お、おい……………攻撃が全く当たらなくなつたんだが……………こりや、一体……………」

霊「それどころか、逆に相手から打ち込まれ始めたわね」

紫「……………」

突然、こちら側の攻撃が敵に全く当たらなくなつた……………でも、これは……………

霊「なんか、この感じ…似たようなのを知つてるわ……………」

紫「奇遇ね霊夢…私もよ」

思い当たる節があるような霊夢の言葉に同意する。

その時、どこからともなく忍者が使うとされる苦無だか手裏剣だかが何も無かつた空間から突如現れてこちらに飛んできた。

——この、何もかも瞬間で行つたような攻撃方法に移動方法は……………まさか!

霊「この感じ、咲夜の『時間操作』よね……」  
紫「ええ、間違いないわ……」  
辺りに注意を配りながら霊夢の言葉を肯定する。

見間違えようが無い、これは明らかに十六夜咲夜の『時を操る程度の能力』だ。

先ほど私のスキマを通り抜けられたのも、その空間にスキマの牽制をする前に時間操作で仲間をねじ込んだからだろう。

更には、こちらの攻撃が通じなくなったことやこちらに攻撃が当たるようになってきたこと、何も無い空間から突然現れたように見えただのも全てこの能力ちからによるものだ。

魔「あっ……！あいつだ!! やつと見つけたぜ！」

先ほどの違和感の正体を考察していると魔理沙の声が不意に聞こえ、目の前に他の人形兵よりも明らかに格が上に見える個体が右手と左手にそれぞれどこか見おぼえのあるような持ち方で苦無と苦無型の手裏剣を構えていた。

霊「さっきの武器……もう、ほぼ間違いなく……」

紫「こいつが時間操作の能力持ちね」

その眩きに応えるかのように相手が不意に手の得物を投擲してくる……そして、その速度が急激に上がり、自身や霊夢、魔理沙に迫ってくる。

更に間の悪いことに、相手がこちらに武器を投擲しようというタイミングで魔理沙が突撃系のスペルを唱えて特攻しようとしていた。

魔「彗星「ブレイジングスター」……あ、やばっ……」

霊「魔理沙っ!!何も考えずに、そのまま突っ込みなさいっ!!……くっ!!間に合え!!」

紫「………ツ!!——喰らいなさい!」

その状況を逆に利用しようと霊夢が封魔針で相手の武器を弾いて魔理沙が敵に突撃できるように凶る……が、敵の時間操作により、苦無や手裏剣の進む時間だけを早められたことにより、それは紙一重で無意味に終わる。無理もない……相手の時間操作の精度がわからず、且かつ影を押さえつつ他の敵も処理しているのだから……しかしなんとか私が、霊夢、魔理沙、私の方へ飛んできた武器をスキマで飛ばし、ついでに霊夢の封魔針もスキマを開いて回収し、敵の背後のすぐそば（ゼロ距離）から封魔針と三人分の苦無や手裏剣を喰らわせようとスキマを展開——しかし、敵には直ぐに察知され、その場にいたはずなのにまたしても瞬間移動のようにその場から離脱されてしまい、見失った。

……的がいなくなったことで、魔理沙の特攻スペルが空を切る。

魔「ツツ!……クツソ……!見失った……!!」

霊「………」

紫「………（このままでは……!）」

これはかなり厄介なことになった……あちらは私の攻撃を余裕で躲せるし、こちらはどこから攻撃が来るかわからない。

……そして、不意打ちがまた飛んで来る……今度は武器の投擲では無く、格闘による肉弾戦

……しかも攻撃ヒットしたら逃ドげるは継続中だ。

霊「：！！魔理沙！後ろ！！」

魔「な……！！——くっ……があっ……」

相手の戦術はこちらに攻撃を当てるとともに直ぐに逃げるといふ如何にもな戦い方だ……私と霊夢が敵を探していると霊夢が先に勘づき、魔理沙に指示を飛ばす、しかし霊夢の警告が間に合わず、魔理沙が敵から蹴りを喰らった……そこで私は現状の把握と分析に取り掛かる——今はこちらの攻撃が相手に当たらない……霊夢は影を押さえるのに力を割いているので戦闘に本来の力を発揮しきれず、雑魚とはいえ大群の人形兵とそれより強い人形兵を同時には相手に出来ないし、魔理沙の能力では、火力は申し分ないものの、相手に当たらないと意味が無い……私は私で敵に能力除けをされているのでやはり当たらず、このままではジリ貧……徐々に追い詰められるという……状況としては最悪だった。

しかも、事態はそれだけに留まらない。

霊「……！！ 魔理沙っ！！……そこから離れなさい！！早くっ！！」

魔「……ツ!?……つたく、次から次へと！！」

次はちゃんと指示が間に合い、魔理沙は攻撃を躲す……またも、どこからともなく飛んできた属性魔法が魔理沙の居た位置で爆発する……属性魔法？……これは……！！

霊「ねえ……嘘でしょ？……これって……」

紫「ええ……そのまさか、でしょうね」

魔「おいおい……マジかよ……！！」

爆発による煙が晴れると、そこには格上の人形兵が更に三体、加わっていた。

——こいつら：明らかに、他の奴とは違う：しかも、そいつらは個別に能力が備わっており、外見からみても違いがよくわかる。

——まず、一番左端にいる奴が手に魔導書のような黒い表紙の本を片手に持っており先ほどの魔法はこいつが撃つたのだと分かる。

次に、背中にかなり見覚えがある枯れ枝に寶石がついたような翼を生やした個体、次はそのまま蝙蝠の羽のような者を背から生やし、右手に紅く光る深紅の槍を構えた個体……？……

魔「こいつら：明らかに、もしかしくなくても」

霊「ええ、そうね。もう間違えようがないわ」

紫「特にフランとレミアがまるわかりね：

：吸血鬼姉妹の翼、時間操作、魔法：明らかに紅魔勢ね」

そう：魔導書の奴に、武器を投げってくる奴はともかく、あの姉妹の翼はもはや見間違いようが無い……まあ、敢えて分かりやすくしているのだろうか……：しかし、それにしても……

魔「まいったぜ……そんなことをされたら……：っ!!」

紫「ええ、もうほんと……」

霊「うん……もう本当に……」

霊魔紫（同時）「「俄然！やる気しかでない（わ）！」わね！」んだぜ!!」

私は毎回騒ぎを起こして、振り回してくれているお礼、霊夢もやはり：毎回毎回騒動を

起こされることに対して、魔理沙はその場の勢いもあるけれど日々紅魔館のヴワル図書館の警備が厳しくなっていていることに対する逆ギレというか憂さ晴らしで、それぞれのやる気……もとい殺ル気度合いが跳ね上がった。

そう……それが仲間の姿を模していれば本来は若干の躊躇いや戦意の喪失に繋がる所なのだろう……しかし、似せ方が中途半端と言うか、ある特徴や能力を除いて他の人形兵と似たり寄ったりである事が本人をイメージさせない上、これはあくまで作り物であることもあり……もはや、いつもの鬱憤をたつぷり晴らすためのサンドバッグでしかなかった。

……さて、そちらがそのつもりならば——  
ありがたく使わせて頂くとしよう。

紫「……ッ!! 霊夢!!」

霊「わかってるわよっ!!」

魔「ここからは一方的なフルボッコタイムだぜ!」

敵が不意に攻撃を再開し、敵の中で宝石の羽の人形兵が自身の手のひらにその者の弱点である『目』を出現させ握りつぶすことで対象を破壊しようとする……が、私の境界の能力でその対象から全員を外し、全員がその場から散開したその空間だけが突如として爆ぜた。

「おいっ! 次が来るぜ!……今度はパチユリ

ーの魔法攻撃だ! 気を付けろ!!」

「分かってるってのっ!!」

「……………ッ!」

紅魔館の『パチュリィ・ノーレツジ動かない大図書館』の精霊魔

法が火、木、金、土、水のあらゆる属性で攻撃を仕掛けてくる。

それは、木と火で来ていたかと思えば、突然水と土が襲うなどよく属性の相性や狙いどころ、相手の裏をかく等計算された上での攻撃だった。

火の柱が上がり、水球が迫り、木の根が突き出し、石礫が降りかかり、金の刃が飛び交う……が……

紫「甘い！」

私がそれらをスキマで防ぎ、逆に相手の所へとスキマを繋げてそのまま反撃とする。

更にそこへ魔理沙の弾幕が敵に襲いかかる。

魔「星符「エキセントリックアステロイド」！」

そして、敵が逃げられないように私がスキマで相手の足を拘束する。……これで――

紫「捕らえた!!」

魔「もう、逃げられないぜ!!」

霊「ついでよ!これも貰つときなさい!!」

そこへ霊夢がお札を投げて追撃し、動きを封じに掛かった……!

しかし、そこへ紅の光槍が飛び込んで着弾寸前の弾幕を私のスキマ……に囚われていた人形兵の足ごとスキマを消し飛ばし、更に別の方向からスキマで送り込んでいた相手の属性攻撃を破壊の能力で全て消滅させられてしまった。

それでも、相手にはまだ霊夢のお札がまだ残っているはずだが……お札は空を切り、相手

は既にその場に居なかった——…逃げられたか…：辺りを見回すと敵方はその機械人形の見た目に自分たちのよく知る四人の特徴をくっ付けた姿で全員揃っていた。

霊「ちよつと…：ぼつこぼこにするんじゃないのかったの？」

魔「うーん…：チョットカリヨクガタリナインジンヤナイカゼー…」

紫「二人とも…：ふざけるのは後にしてくれるかしら？今は目の前の敵に集中しなさい」

霊「あんたに言われたくない…：つて言いたい所だけど、それも行かないわね…：気合いを入れなおしますか！」

魔「ま、本番はここからだがな！魔符！「スターダストレヴアリエ」!!」

霊「…：つ！フオローする方の身にもなりなさいよっ！」

紫「不思議ね…：今あなたが一番まともに見えるわっ!!」

霊「どういう意味よ!!」

紫「そのままズバリよ!…：——霊夢！前！」

霊「…：つ!!るっさいわね!!…：つと、あつぶな…：やるじゃない!!」

全く…：なんで幻想郷の連中は揃いも揃ってこども緊張感がないのか…：あ、もしかして私のせいだったか…：…：まあ…：細かいことはともかく、私達は互いに軽口を叩き合いながらも連携、戦っていた——そこには、士気を高めあうという目的、連携を取りやすく互いに呼びかけ合う意味もあつだろう——  
—そうして、相手が時止めと魔法を駆使して



きたときも私が先を読むか霊夢が勘で結界を張って防ぎ、魔理沙が速度のある弾幕でカウンターを仕掛けたり、逆にこちらが霊夢の封魔針と私のスキマで下級の敵を掃討しつつ魔理沙が大火力の弾幕で敵の大群ごと格上の兵を巻き込もうとするも、私のスキマを躲され霊夢の針やお札も弾かれる、また…例え雑魚であっても、割り込まれたり、前に躍り出られたりして、本命への攻撃が中断される…など混戦が続いた———その中で、私にはある仮説が浮かんでいた…：…：…これなら、或いは———

紫「霊夢、魔理沙…：…作戦があるのだけど少し良いかしら…：…」

霊「なによ…：…しようもないことだったら承知しないわよ？今忙しい…：…んだからっ！」

魔「だが、安心しろよ紫…：…私は霊夢と違って笑いの分かる奴だからな…：…もしもしようもない事だったらちやんと笑ってやるぜ？…鼻でだが」

紫「…：…もう、なんでもいいからちやんと聞いて頂戴…：…はあ…：…じゃあ、伝えるわ。二人とも傍に…：…」

二人に作戦を伝える間は例え瞬間の事だとしてもスキマを私達の周りに展開し、邪魔されないようにした———作戦を伝え

終わると霊夢は不敵に笑い、

霊「なるほどね…：…やってやろうじやない」

魔理沙は笑顔を全開にして快活に、

魔「…よし！任されたのぜ!!」

そして、私は…：…：…いつものように…：…

紫「それじゃ、そろそろ幕引きにしまし  
か……」

始めに言っておくと相手の能力は全てオリ  
ジナルのスペックの半分以下と言つていいで  
しょう……それは、本人ならば容易くできた  
ことがこいつらには出来なかったからだ。

例えば時間操作を行う人形は咲夜本人ならば  
出来たはずの自身の未来や過去のナイフ（こ  
いつの場合は苦無だが）を出現させて攻撃し  
たり、時間を巻き戻したりという事が出来て  
いなかった。

他には破壊能力を持った人形はフランなら作  
れるレーヴァテインを作り出せず、逆に運命  
操作の人形兵はレミリアが作り出すグングニ  
ルを生成出来るものの運命操作は自身の周囲  
の身近な部分のみで、槍の威力はオリジナル  
比べて劣り、魔法を使役する人形に至っては  
、一つ一つの魔法はごく小規模で種類も少な  
い……だが、その分オリジナル達にはない長  
所がある……、咲夜の能力を持った人形は格  
闘や単純な戦闘力が本人よりも高く、単なる  
操り人形なのでスタミナもほぼ無尽蔵で、破  
壊の人形兵はフランが持っている多重人格、  
破壊衝動がないので暴走はあり得ず、運命操  
作の機械人形は操作範囲こそ狭いもののその  
強制力はほぼ絶対で戦闘に特化され、魔法使  
いの機械兵はオリジナルは病弱なものに対し、  
そんなことは一切ないどころか他の人形共と  
同じかそれ以上に強化され、格闘と魔法を組  
み合わせて攻撃してくる——つまり、制御力  
に長けている……気付けば、周りはその四体

の人形と私たちだけになっていた……先ほどからの魔理沙のレーザー砲と霊夢の的確な封魔針の投擲、あとは格上の兵の流れ弾もあり、殲滅させられたらしい。

(恐らく敵もこれ以上は無駄と判断し、送り

込むのを止めたのもあるが……いずれにしても油断は禁物だ)

霊「さてと……じゃあ、いくわよ！魔理沙！」

魔「いつでもいいぜ!!」

霊「よーい……」

紫魔「ドンツ!!」

私が扇子を振り下ろすと同時に二人で掛け声を出し、魔理沙が敵に突っ込んで行く。

魔「彗星「ブレイジングスター」アアア!!」

魔理沙がマスタースパークに匹敵するほどの極光を纏いながら敵に突進する。

……しかし、それで敵が大人しくやられるわけは無く、時間停止しその攻撃から難なく逃れる。

そう、そんなことで勝てていれば苦労はしない。

……ならばどうするか？

私は敵が逃げた先へとスキマを開き、魔理沙の進行方向へと開いたスキマと直結させる。

そこで、既に敵は私の『境界を操る程度の能力』を感じ取りそこから逃れようとするが……

霊「遅い!!」

既に敵の退路には霊夢のお札による結界が張られており逃げ道を塞いでいた。

敵がそれに気づき、霊夢の結界を破ろうとす

るも間に合うわけも無く……

魔「これで終わりだああーっつっ!!」

その一瞬の判断の遅れが致命的になり、魔理沙の圧倒的なスピードとパワーを持ったスベルの……その極光の前に、灰燼と化す――首のない一体とその他の三体の体躯が影となりその影も光の中に溶けていった――

魔「よし！決まったな！」

紫「ふう……」

霊「それにしてもあれよね……」

紫「ええ……まあ、なんと言っても……」

霊紫魔「「あいつらを愚弄した罪は重かつた」と……」わ「ぜ」

――激闘を終えた後、博麗神社の縁側にて……束の間の休息を得ていた私たちの中でふと霊夢が問いかけて来た。

霊「それにしても紫……」

紫「なに？霊夢」

霊「あんたの作戦……うまく行ってよかつたけど……あれ、どうやって思いついたのよ」

そんなことを問いかけながらも霊夢は既に辺りについていそうな様子を隠そうともしていなかった。

紫「ああ、それね……まずは敵の能力と戦闘力……私たちの能力と戦闘力……つまり彼我の戦力差から考えたってというのが一つと、もう一つは私の『境界を操る程度の能力』に対する反応速度と欠点を利用したって所ね」

そこまで説明したところで霊夢は目を細め

……

霊「ふくくん……やっぱそうなのね……」

と一人納得し……魔理沙は……

魔「は？それがなんでさっきの作戦につながるんだ？」

と疑問を露わにした。

紫「ああ……それね……まず、運命操作の能力の人形だけど、あれのは範囲は狭いものの強い強制力があるけれど、回避しようのない状況を作られたらどうしようも無いから、困ってしまえばそれで終わり……次に、例えば困ってもフランドール・スカーレットの破壊の能力で破壊されてしまわないように退路を塞いで隙を作り、空かさず一撃で葬る……それには私がスキマで空間を繋げて貴方の攻撃を相手に直接ぶつけないといけないのだけど、まあそれは私が何とかすればいい話だから……そこで尤も厄介なのが時間停止の十六夜咲夜の能力だけど……これは私の能力への異様な感知速度と欠点を利用させてもらったわ」

魔「……ツ!!まさか……!!」

ここまで説明すれば流石に魔理沙にも理解が追いついたようで、疑問が晴れてスッキリとした顔になると同時に驚愕していた。

紫「そう、そのまさかよ」

魔「……確か、戦ってる最中にちよつと見たんだが……お前がそこにスキマを発生させるのを事前に察知して敵は動いてたよな？」

紫「……フフ……その通りよ……その腹の立つ性質を逆に利用させてもらったわ……つまり、まず私がスキマで相手を誘導……その間に霊夢にその誘導先にお札で結界を展開する準備だけしてもらって、相手がその位置に誘導され

た瞬間に霊夢が発動……それに気を取られた隙に時間操作の人形の首を私が境界を作り出し、刎ねて行動不能にして……あとは境界の唯一の出口にスキマを開いて貴方に突っ込んでもらうだけ」

魔「なるほどなあ……」

紫「ま、相手もかなり対処というか反応が早かったから、霊夢が境界を発動させるのとはほぼ同時に人形兵の首をちよんぱしなきやいけなかったところは相手の位置把握と計算を即座にしなきやならなくてちよつと骨が折れたわね」

霊「つまり、敵の弱点って紫のスキマに対して、軽く予知とも言える速度で反応できる割に、他の事象に目を囚われてる時はその反応が遅れる上、異常にスキマを警戒するってところでしょ？」

紫「さっすが、霊夢♥?……理解が早くて助かるわ」

霊「いや、キモイから……ハートとかっけんな」

紫「発言がメタい!？」

思えば、戦いの一番始めの方にヒントはあった。

霊夢から、魔理沙が押され始め、私が張った隙のない方の感知結界に敵が引つかかったと聞かされた時だ。

そこから、敵は一つに注力している時や注意を集中させている時に私の能力に対する反応に神経を割きにくくなるという事が分かったはずだった……が、私はそこでふと違和感を覚えた。

——いや、違和感だけでなく、得体のしれない不安感も……

……本当に、仕方なく私の感知に引つかかったのかしら？なら、あの異様な警戒と察知能力は一体……まさか、わざとだった？……でも、何のために？……その感覚は明確な言葉となつて頭の中に浮かんできた。

そう、どこかわざとらしかったのだ……でもなぜ……もしも注意が散漫になつていて引つかつたのであれば目の粗い方で引つかつてもおかしく無かつたはずでは無いか？逆にそれで引つかからないのなら、気付かれずには通れないほど目の小さい方へは近づかない……ということも出来たはずだ。

なぜなら、内側に張つた方が密度が濃いため、その分私の力をより感じるはずだからだ。

——となれば、わざとかかつたと考えるのが自然なのだが……しかし、そんなことをわざわざする理由が分からない。

今回の敵は能力こそ低かつたものの、私の力を事前に察知するという点において途轍もなく厄介だった。

ただそれだけで私の能力がほぼ無力化されたも同然であり、霊夢と魔理沙に多少なりともダメージを与えることも、あわよくば私の懐へと潜り込むことも出来るはずだ。

……だが、そうはしなかつた。

敵は感知に引つかかり、事前に襲来を察知、戦闘に至つた……

——なにか、嫌な予感がする……

チルノside

拙い……全く近づけない……！！

今、状況は正直に言つて最悪だ……

相手からはほぼ無尽蔵に死の弾幕が飛んで来るのに、こちらからは一切の攻撃が通じないという、まさに崖っぷちに立たされていた。

妖「幽々子様……ッ!!もうお止め下さい!

!幽々子様あつ………!!」

そんな中、妖夢の悲痛な涙声がこの白玉楼にこだまする——だが、そんな必死な呼びかけも本当に届いて欲しい者には届く事はない……それもそのはず、今の白玉楼さいぎようじゆこの主は、蟲に取り憑かれ、その作り主の言うがままに動く操り人形に過ぎないのだから……



## 第十三話 氷争（白楼 其の参

藍 side

冥界の桜吹雪が舞い散る中、繰り広げられる激闘……その様子を眺めながら、ここに至るまでの経緯を私は思い返していた……

橙「・・・藍さま？」

物思いに耽っていた私の顔を見て橙が心配

して声をかけてくれる……その声に応え、橙の髪を撫でる……私たちに出来ることはもう

無くなってしまった……だからあとは……

藍「大丈夫だ……きつとなんとかなる……

いや、何とかしなければ！」

目の前の不安げな瞳に向かって……或いは己自身に課すようにそう言葉を吐き出す。

藍「頼んだぞ……チルノ」

大「チルノちゃん……」

チ「ぐ……っっ!!絶対！に助けだすっっっ！

！」

私の問いに関係の無く氷精の咆哮が辺りに  
訝する……

藍「くっ!!……本当に私たちにはもう何も出来ないのか？」

何故私たちがこの場で何も出来ずに居るの

か……それは……相手の「能力」にあった……

今、チルノが相対しているのは、この白玉楼の主……西行寺幽々子様……あの方の力は「死を

操る程度の能力」……そしてそれは今、チルノ

に対して向けられている……それはつまり、

幾度となく殺され、徐々に力が削がれて行く

ことを意味する……つまりどれだけ力を渡そ

うと無駄なのだ。

しかも、かなり強化されてしまっているのか、あのチルノでさえ相對するのがやつとのおうだった。

戦闘に於いても足手纏いになる可能性が高い以上、近くで見ていることしか出来ない……しかも、こんな時に限って紫様への連絡が通じ無いとは……!!!

無論、齒痒い思いをしているのは私だけでは無かった——この場に居合わせている誰もが己が至らなさを、非力さを、無力さを呪うそして——だが必ず勝機を見いだしてやる……!

大「ごめん……!!……ごめん……!!……  
……チルノちゃん……!!……っつ!!」

私の目には、大妖精が、親友の危機に隣で共に戦うことが出来ずに居ることをこの場の誰より悔やんでいるように見えてならなかった——……いや、まだだ!まだ何かあるはずだ……!今の所、チルノは気力も体力も持つてはいるが、しかし敵の能力、『死を操る程度の能力』をどうにかしないとチルノの力と命が削られて終わる——

ざっ……ざっ……ざっ……

藍「!?」

どうにか現状を打開する術すべがないかと頭を悩ませる私の耳に、白玉楼の玉砂利を踏む音が滑り込んできた……自然、その方向に顔を向ける……

すると相手の方から声をかけてきた。

妖「八雲藍……さん……でしたよね……?」

藍「……………あ、ああ……………如何にも。私が八雲  
藍だ。魂魄妖夢」

妖「……………」

……………私が妖怪だからなのかそれとも、私の  
力が大きいせいなのかはわからないがいずれ  
にせよ警戒されていることに変わりはない：  
……………

そこで、私は諦め悪くもここに至るまでの経  
緯を思い返すことにした。

そう……………それこそ、目の前の半人半霊こんぱくようむに出  
会う少し前ぐらいまで……………

### ——数時間程前

朝焼けの空が広がる中を、私は橙と共に影  
の気配を追いつつ、後ろの二人を先頭しなが  
ら進んでいた。

何故そんなことが可能なかを説明すると、  
紫様曰く影カクの気配というのは獣には不快で気  
持ちの悪いものであり、私や橙はその獣が変  
化した妖獣であるが為に、影カクの気配を敏感に  
察知出来るからだという。

実際、確かに影カクが側にあるとかなり不快で気  
分が悪くなるので、今はそれを利用して影カクを  
素材に造られた存在である影チルノの気配を  
追っているというわけだ。

この影の気配はその場にしばらくとどまり続  
けるので、滴り落ちた水滴を辿るようにして  
追跡する事が可能だが、時間が経つごとに気  
配は薄まり最後には消えてしまうので、急が

なくてはならない。

そうして、橙と二人で捜索しながら進んでいると、前方になにやら細い柱のようなものが建っているのが見えてきた。

藍「……………？　なんだ、あれは？」

妖怪としての視力で目を凝らして前方を見る——近付いていっけることもあつてか、目を凝らして間もなくその正体が判明した……………

藍「な……………なんだあれは!？」

橙「え……………藍様、どうかしまし……………ん……………?!？」

橙が私の様子に疑問を抱き、私の視線を追い、その先を見て私と同じく驚いた。

チ「ん？　どうかした？……………っ！　あれは!？」

大「え、何々？　どうしたの？　チルノちゃん……………え、何……………あれ？」

後ろの二人も即座に私たちの様子に気付き飛行速度を上げて私たちに並び、前方の柱を見て各々感想を漏らす。

その反応を見るにチルノは何か気付いたみたいだが、大妖精は私たちと同じ感想を抱いたようだ。

しかし、それが近づくとつれ私にも、その柱が黒く透き通った氷なことがわかるとチルノの反応の意味を理解した。

——いや、そのチルノの反応を見て感じた直感が当たったと言った方が正しいかも知れない……………何故なら、その天を貫かんとばかりに聳え建つ氷柱から、先程説明した影の気配をこれでもかというほど感じるからだ。

橙<sup>ちえん</sup>「う、うう……、こわいです……よ……藍

様……」

藍「……っ!! ……ん? ……あ、あ  
あ……すまない、橙……怖がらせてしまったな」  
自分でも気付かないうちに表情が険しくな  
っていたらしく、ちえんを怖がらせてしまっ  
た（怖がった顔も可愛い。今度やってみよう）  
。やはり、何度味わっても中々慣れないもの  
だ……と、隣の橙をふと見遣ると、先程ま  
での怖がった様子が消え、代わりに不快感を  
顕にしていた。

顔を顰め、如何にも機嫌が悪く、怒っている  
ようだ。（うん、アリだな）

やはり、橙もこの色濃い影の気配にかなり気  
分を害しているらしい……

……そうこうするうちに件の柱の周囲5メー  
トル（およそ十三尺）くらいまで近づいてい  
た。

そこまで近づくまでには流石に全員、目の前  
のものがなんなのか理解しており、これをど  
うするかという話になるも、当然、大して支  
障が無いのなら無視して先に進むべきでは無  
いかという話の流れになった。（正直、私も  
その場を離れたかった）

チ「いや、ちよつと待つて……」

そしていざ皆がこの場を後にしようとした  
その時、チルノから制止の声が掛かる。  
その待ったに対し、今もある不快感と、そこ  
から解放され損なった苛立ちと焦りから、少  
々荒っぽい返しをってしまった。

藍「つつ……!! ……どうした! チル

ノ！我々はこんな所で油を売っている暇は無  
いはずだが？」

チ「……………？ごめん。ちよつと誰かがこつちに  
やって来る気配を感じてさ」

「言われて周囲を見回すと共に辺りに気を巡  
らす……………と、確かに誰かがこつちに向かっ  
ているようだ。」

やがて、その者は肉眼でもわかるほどまで、  
接近して来たかと思うと、あつという間にす  
ぐ側まで飛んできた。

大「……………つて！アリスさん!?なんでここ  
に？」

チ「……………」

ア「……………いや、それはこつちの台詞よ……  
あんたたちこそ、なんでここに？……………つて  
いうか、なんか珍しい組み合わせね……………」

普段魔法の森に住む人形使いであるはずの  
彼女が何故こんな所に居るのか……………疑問が  
浮かぶ——まさか、散歩というわけでもある  
まい——そしてそれは向こうも同じらしく、  
こちらに質問を投げ掛けてきた。

ア「それで？あんたたちはこんな所に何の用  
なの？まさか、皆してお散歩つてわけでも無  
いでしょう？」

……………考えが被った。

……………まあとにかく事態がややこしくなる前  
にお引き取り願おう。

と、内心で思考が被ったことを若干気にしつ  
つ、門前払いの決まり文句のような台詞を口  
にしようとした所で如何にも不機嫌さを隠  
そうともしない橙の声が被さってきた。

藍「それをおm「ちよつと！相手に事情を聞く前にまずは自分から話したらどうなのさあ！！」

それにより、〃それをお前に話す筋合いは無い〃という私の言葉は見事、空中で霧散した。

——私の九本の尾が儂く風に揺れる——  
相手はその変な勢いに押されたのか全くその通りだと納得したのかは定かでは無いが自身のここに至るまでの経緯を説明するつもりのようなのだ。

ア「えっ？え、ええ………わ、わかったわ……じやあまらずは——」

話しを聞き終わった感想は、一言で言うと

〃訳がわからない〃だった。

話を聞く限りだと敵は彼女を誘い出したかったという印象があるし、実際に彼女：アリス・マーガトロイドはこうして出てきては居るものの、一度は家に戻ろうと思つた所で考え直して出てきているに過ぎ無い。

となると、誘い出し方が甘い気がするし、倒そうとして止めたにしても不自然な点が見られるなど不可解な点が散見される。

しかし、いずれにせよ、敵の狙いがアリスを誘い出す事にあるのは間違い無い以上、このまま彼女を関わらせるのは拙い。

最終的にそう結論付け、私はアリスに帰宅を促すべく言葉を紡ぐ。

藍「話はわかった。だが、聞いた限りでは敵の狙いはアリス……貴方を誘い出すことにあると結論せざるを得ない。だから、後のこと

は私たちに任せて、家に戻り、警戒しつつ、なるべく普段通りに過ごしてくれ」

ア「ちよつと待ちなさいよ！ここまで来て、おめおめ引き下がれっていうの!？」

藍「ああその通りだ。悪いが、大人しくしていてくれ！」

最後は少し語気が強くなったことが癪に障ったのか、あちらからも強い口調で反論が返ってきた。

当然、こちらも引き下がるわけにはいかず、口論になる。

そうして議論に熱を入れている間にチルノは一人、氷柱に近づき、調べるとあることに気が付いた。

チ「あれ……?!?これはっ！」

ア「それにそもそも、警戒しながらって時点でいつも通りじゃな——……?!？」

そこで突然、何かを見つけたかのように言葉を切るアリス。

私たち二人の言い争いをどうして良いかわからず、あわあわと成り行きを見守っていた大妖精もアリスの様子に小首を傾げる。

……私は何事か問い質そうと口を開いた。

藍「なんだ?どうした、何かあったのか？」

ア「あの……この氷柱の根元で、雪女……のレテイが、この柱に貫かれてるんだけど……」

藍「……は？」

彼女の台詞を聞いた瞬間に私は自身の耳を疑わざるを得なかった。

レテイ?……レテイとは、あのレテイ・ホワ



イトロックか？（そいつしかいないが）なんで彼女が？……等と俊巡していると、先に硬直から回復した大妖精が口を開く。

大「た、たつ……たす、助けに、行きましよう！」

ア「……つていつても……どうするのよ？」

大「そっ……それは……」

橙「は、はわわわわわわ……わわわわあああ……」

藍「……」

大「えくくく……つとくく……」

「たの？」ぽんつ えつ……きやあ……！……チ、チルノちゃん……」

どうにか、雪女<sup>レテイ</sup>を助ける為の案を考え出そうとしていた大妖精に、氷柱を見終わったチルノが、こちらにやって来て大妖精の肩を叩いた。そして当の大妖精の方は、軽くとはいえないきなり肩を叩かれたことで吃驚したが、相手がチルノだと分かり、安心したようだ。

そこでチルノが“それで、どうしたの？”と再度問い掛け、それに対しては私がこの柱の根元でレテイ・ホワイトロックがこの柱に貫かれているのをアリスが発見したことを告げた。チ「それなら、あたいが何とか出来るかも知れない……とにかく行ってみよう」

その言葉に一同は驚きを隠せないでいたがこいつに關してはそれこそ今さらだと、ここまで共に行動して来た私を含む者たちは気付く……が、アリスは初見であるが故に無理も無いがかなり驚いていたようで“えっ！嘘………何とか出来るの？”と口走っていた。

そんな彼女の驚きをよそに、取り敢えず現場へと向かうこととなった………といつても、まあ、ただ下に降りていただけなのだが………そうして、下へ下へと降りて行くと、ものの見事というか、聞いていた通りというか、想像通りの状態で………

冬の妖怪ことレテイ・ホワイトロックは目の前の柱にその身を貫かれていた。

その姿を改めて良く見てみると、やはりというべきか、冬の妖怪らしく寒色系の服にスカートにエプロンのような装飾と背中に羽のようなものがあり、ウェーブのかかった髪型は自身の主である紫様のご友人である所の幽々子様を彷彿とさせる。

うむ、稗田家当主の幻想郷縁起で見た通りの見た目だな。

私がそう一人で納得していると目の前の冬の妖怪が目にしなながら——これは予想外だった。主に、状況の割りにはあまりダメージを受けていなさそうな所が——声を発した。  
レテイ「ぐ……く、く……ろ……ま……く……く……」

一同「「「「………」」」」

チ「なわけないでしょ」

藍「そうだぞ、無理をするな」

大「だ、大丈夫です！皆わかってくれます！」

ア「………何をさ」

橙「まさかの最終章!？」

レテイ「ち、ち………がうわよく………私、は、それっ………ほい奴、………を見たって、言おう、と………／／／」

チ「ハイハイ、わかったからあまり喋らずに  
じっとしててねー」

……そこはかたなく微妙な空気になった所  
でチルノがレテイを窘め、施術に入る……と  
そこで初めてあることに気付く。

——これは……太刀か？

レテイの体のちょうど中心部に氷柱と同じ氷  
で出来た太刀が刺さっており、そこを中心に  
柱は広がっていた。

しかも、柱はどんどんに伸び、まるで……

彼女から力を吸い上げようとするかのように

せり上がっていた。

レテイ「う、うああ……ッ！」

氷柱それが上にせり上がるごとに、冗談染みた  
情報提供する程の余裕もなくなった彼女が苦  
悶の声を上げる。

しかし、チルノがいとも簡単に彼女にかけら  
れた術を解いたことで、その苦しみから解放  
されることとなった。

チ「……よし、あとはこうして……よ  
っと」

そんな風に一人納得したような呟きが聞こ  
えたかと思うと、チルノが手を翳している氷  
柱の部分からちようどチルノの手のひら大の  
方陣が展開し、パリッ！と言う破裂音ととも  
にさつきまであった影の不快感が嘘のように  
消え、レテイホワイトロックに刺さっていた  
太刀から広がり伸びていた氷柱が下がり始め  
た。

……つまり、柱が縮みだした。  
これに関しては（他のことに関してもだが）

本当に脱帽せざるを得なかった。

私でも解くのに数時間は要するであろう術式をもの数秒で解除せしめるなど、まったく以て尋常ではない。

——流石は紫様が：「霊夢に圧勝出来る」と太鼓判を押されただけのことはある……………

——しかし……………

……………と、私がチルノの実力に舌を巻いている間に、更なる進展があつた。

……………先程、氷柱が収縮していると述べたが、それはまるで柱が刺さっているレ・テイに吸収されるかのように、縮んでいつており、ついには柱の中心にあつた太刀さえも彼女の中に吸収されていた。

つまり、さつきまでは彼女から吸い上げんと伸びていたものが、今度は逆に力を吸収とりかえされ、みるみるうちに縮み、最終的に完全にレ・テイ・ホワイトロツクの中に戻つていった。

尚、今は苦痛から解放され、力も戻つた安心感からか、寢息をたてて安らかに眠っている。そして、その様子を見守っていたアリスがここでチルノをさして口を開く。

ア「ねえ……………さつきこの人のことをチルノって呼んでた気がするんだけど……………聞き間違いいよね？……………だつてチルノってあの氷精でしょ？こんなに強いわけがないし……………あの……………幻想郷縁起……………だっけ？アレにもそんなに強いとは書かれてなかつたはず……………よね？」

ああ、なるほど……………まあ私も最初に見た時



せないのでは無いだろうか……

ア「……つていうか、縁起これにも載ってるけど貴方、よく見たらあのかき氷屋の店主じゃない!!」

チ「ええ、そうですよ。今後ともかき氷処『氷河屋』をご贖員に」

ア「うん、そうね。あそこのかき氷美味しい……つて違あう!!　なんで、あんたみたいな滅茶苦茶な力を持った奴が人間の味方で、しかも人里のかき氷屋なのよ!？」

そんな風にちよつとした錯乱状態に陥りながらされた彼女の質問にチルノはあつけられんと答える。

チ「それはだつて、あたい、人里に住んでるし……住んでる以上は近所付き合いは重要でしょ?」

ア「だから、なんで住んでるのよ……あなた妖精なんだからそんな必要ないじゃない……」

チ「そんなのあたいの勝手でしょ?……でもまあ、その本にも書いてあるけど、今までの悪戯の償い半分、そういう悪戯半分って感じで……味方させてもらってるよ」

ア「なんで、更に悪戯を重ねてんのよ……まあ、良いわ……ねえ藍……」

どこか疲れたような調子でアリスが尋ねる。

藍「なんだ?」

それに私が返すとチルノを指さしながらアリスが一言。

ア「こんなとんでもない奴が解決に乗り出してるなら私が出る幕なんて無いだろうし、こいつでも手こずるような異変に巻き込まれる

、なんてのはごめんだから………やっぱり………  
…あなたの言う通り…ここは、大人しく家に  
帰ることにするわ」

そして指を下ろしてから、先を続ける。

ア「まあ、ここまで誘い出されておいてなん  
なんだけど、やっぱり、その異変の首謀者の  
思惑に乗るのも何か癪だしね」

と己の意見を表明した。その表情はどこか  
諦めがついて吹っ切れたような………そんなも  
のに変わっていた。

藍「そうか、それならば是非もない。なるべ  
く早くこの異変を終わらせ、一刻も早く平穏  
を取り戻せるよう尽力すると約束しよう……  
………だからそれまで………」

ア「わかったわよ………自宅で引きこもつて  
れば良いんでしょ？せいぜい用心するわ」

藍「すまない………」

片目を閉じながらそう流す彼女に私は謝る  
ことしか出来なかった。

彼女とてこの幻想郷の危機に助力できない事  
がもどかしくて堪らない筈なのだ………そし  
てその思いも本来ならありがたいものなのだ  
が………と私がやりきれない思いを抱えて  
いると、ふと、チルノが指摘と提案をする。  
チ「あのさ、そのまま帰るのは良いんだけど  
………流石になんの説明も無しに帰すのは却  
って危険じゃない？ あと………そこで伸び  
てる人の事も頼めたりしないかな」

チルノの視線の先には氷柱のダメージから  
か、深く眠ってしまったっている雪女の横たわる  
姿があり、アリスに事情や事の顛末を簡単に

説明した上で彼女を保護して貰え無いかと言う事らしい。

確かにそれなら安心だし、もしも彼女が目覚めれば二人で協力して自衛にすることもできるし、彼女ほどの実力者ならレテイの身柄を任せられる。

そう、彼女とて、この異変に直接関わるとなれば不足なだけであって、相当な手練れであることは間違いないのだ。

私がアリスに今起きている異変の内容を話し、レテイ・ホワイトロックの身柄を任せられ無いか聞いたところ、不承不承といった様子だったが、了承してくれた。

ア「あくくあ……追い返された上にお守りままで頼まれちゃったか……でも、そんなことになつてるなら放つて置けないし……これでも、まあ異変に関わつてるのには変わりないわよね」

と最後にはそう納得し、——案外満更でもなさそうだ——この件は丸く収まった。

そして、アリスがレテイを人形たちに運ばせ帰路についたのを見届けると、私たちは再び影のチルノを追う為、探索を再開した。すると段々と、今回の目的地が露になつてくる。

………私たちはずっと上に向かっていた。  
つまり………

藍「………白玉楼、か………」

………咄嗟に決め付けてしまったが、しかし  
<sup>あなが</sup>強ちはずれてもいないはずだ。

何故ならこの先には、冥界とそこに存在す



る、〃白玉楼〃と呼ばれる建物とそこへと続く長い階段がある。

そして、（いずれも縁起に載っていることだが、）その白玉楼には冥界の幽霊たちを管理している主人、西行寺幽々子と言う亡霊が住んでいる。

……何が言いたいかと言うと、前回のレミリアの件から察するに、敵は私たちの足止めの為（<sup>エリア</sup>）にその区域で最も強力な者を自陣へと取り込もうとするはず……となると、冥界に居る者の中で最も強力な者とは即ち、「死を操る程度の能力」を持ち、冥界に居る数多の幽霊の管理を一手に担う冥界の主たる幽々子様を於いて外に無い、と言うことだ。

――因みに、幽々子様は私の主である、紫様のご友人にあたる――

故に、行き先が冥界となれば、白玉楼以外にあり得ないはずだ。

そして、気が付くと冥界に入っており、案の定、追っている気配がこの先にある階段にまで続いていたので、その事を皆に告げ、先を急ごうと階段に沿って最速で飛行しようとしたところで、私たちは異変に気付いた――

チ「ん……あれは……」

藍「ん？ 何だ……あれは」

大「……」

橙「ンニヤ……」

私たちの進行方向の……その目的地の通過地点周辺で、何か複数の黒い物体が蠢いているのが見える。

そして、そこに近づくにつれ――黒い物の正

体が明らかになる……

藍「おい……チルノ……」

チ「ああ、わかってる……」

橙「はわわあ……」

大「あれって、まさか……」

チ「うん、間違い無いよ」

藍「アリスが話していた奴らか……」

大「あ、待って！誰かあそこで戦ってるよ！」

その黒く蠢いている物体のように見えてい

たのは、先ほどのアリス話にもあつた機械人

形の兵共だった——

そこへ近づいていくにつれ、その中心では誰

かが人形共を相手にしているその様子が明らか

になる……そこで大妖精が——

大「早く助けに行こうよ！囲まれてるよ!？」

チ「……大ちゃんに賛成かな……また、話を聞

けるかも知れないしね」

藍「ああ！無論だ！」

橙「いづくぞー!!」

当然のように満場一致で助勢に行くことに

決まった。

よって、全員で黒い人形の集団に突っ込んで

行った。

妖夢 s i d e

……くっ！こいつら……切りが無い！

正面から鉤爪の敵が来たかと思えば、私の背

後から、更に左斜め後方と真横、真上からも

一斉に挑みかかって来る——そいつらを倒

して落としても、次から次へと……時に私の  
死角、時には不意をついて真正面や正面より  
やや上、完全に背後を狙って来るなど……あ  
らゆる角度から攻撃を仕掛けてくる……  
妖「こいつら、上手く私の……くっ……嫌いな  
所を確実に突いてくる！……そして何より  
……」

そう、さつきから控えめに言っても百体は  
斬っている筈なのに一向に数が減らない……  
恐らく、先程こいつらが出てきたような裂け  
目が、目の前にいるこいつらの後ろで展開し  
、兵を補充しているのだろう。

妖「……良いだろう……そっちがそのつもり  
なら、私が倒れるか……そちらが尽きるか！  
行き着く所までやってやる!!」

私がそう気合を入れ直した所で、肩透か  
しな事態が発生した。

妖「……は？……退いていく……」

余りに突然な撤退に思わず面食らったまし  
たが、これが額面通りにただ引き下がったと  
捉えるほど弱い頭は持ち合わせていません。

妖「……何をたくらんで……っ!？」

その時、下から上空へ、こちらに向かつて  
くる者の存在に気付いた。

妖「……ツツ!!」

その者に意識を向けた時、何故か背中に氷  
でも入れられたかのような寒気と無機質な殺  
気を同時に感じ、こいつを絶対にこの先に通  
してはいけないと強く確信しました。

その灰色とはまた違った白が陰ったかよう  
な奇妙な着物の誰かは依然、まるで私の事な



いや、でももうそうとしか考えられない……！  
妖「これは……尚更あいつを追い掛け無い  
と！」

と、石段を登って行つた下手人を追おうと  
した、その矢先……

妖「………っ！こんな時に！………くっ！  
邪魔を……するなあーっ!!!」

先程まで姿を消していた人形共が再びスキ  
マのような裂け目から出現した……

藍 s i d e

近づいて行くにつれて敵の大まかなの数も  
見えてきた。

およそ数百はいそうな勢いだ……そして、次  
々と裂け目から出て来ることを考えれば……

藍「チルノ……あいつらを一時的にでも全滅  
させられるか？その後は私たちで……」

チ「いや、その必要は無いみたいだよ……」

藍「?……!!」

チルノからそう告げられた後に再び前に  
向き直ると人形共は自分たちがぐぐつて来  
たであろう裂け目を戻って行く所だった。

……要するに撤退だ。

藍「まさか……足止めにもならないと踏んで  
？」

チ「多分ね……さっきあたいに言つたよう  
なことをされたら大損害だからって所じや  
ない？」

確かに、チルノに兵を一瞬で……それも全  
滅させられたらたとえ雑兵といえど、戦力

の大幅な低下は間違い無い……使える駒は  
温存するということか……

チ「まあ、それより今は……その対戦相手の  
所に行こうか。せつかく邪魔者が居なく  
なつたんだしね……」

藍「ああ……そうだな、こちらの事情を説  
明しなくてはならないし、あちらからも話  
を聞かなくては」

そこで私たちは白玉楼の剣術指南役兼庭  
師の魂魄妖夢と合流した。

最初はチルノの姿のこともあつて警戒され  
たが（奴が通つたのだ）、こちらの事情を  
説明し、納得して貰つた上で互いに情報を  
交換した。

妖「なるほど、事情は理解しました。それ  
ほどの方がいらつしやると言うのなら、む  
しろ心強いですし……正直、一人でアレを追  
つて対応出来るものかと悩んでいた所です  
……とはいえ、たとえ私一人であろうと追う  
つもりではいましたが……」

藍「ああ、……では行こう。時間がおしい」  
そして、その道すがら、私は妖夢の話から  
疑問を感じてふと質問をした。

藍「なあ妖夢、先程お前は楼観剣を奪われ  
たと言つたが、白楼剣のみでどうやって戦  
つていたんだ？ 確かあれの切れ味は悪かつ  
たはずだが……」

すると妖夢はことも無げに答えた。

妖「そこは、刀は使用者の腕に左右されま  
すから……如何なる名刀であろうと素人が扱  
えばなまくら同然であるように、単なる鉄

の棒であろうと達人が使えば違うのと同じ理屈です。まあ尤も、この白楼剣は別に鉄の棒という訳ではありませんが……それに……相手は所詮機械人形なので、幾らでもやりようはあります」

妖夢が私の質問に答え、それに私が納得する……なるほど、確かにそれほどの剣技があれば可能か……流石は剣術指南役といった所だな……

私がそう一人領いていると、不意に妖夢が階段の先に視線を送る。

妖「……………っ!?!……………これは……………っ!!  
……………幽々子様……………!」

その妖夢の鬼気迫る表情にただならぬものを感じ、何事かと問い掛ける。

藍「どうしたっ!?!何かあったのか!?!」

妖「西行妖の封印が解かれました……」

藍「何っ!!」

妖「西行妖の封印が解かれると壊れる仕組みの結晶石がついさつき壊れました……」

藍「まさか……………幽々子様か……………」

妖「はい……………恐らく、先程の侵入者に対抗するべく、封印を解かれたのかと……………」

それを聞いていたチルノが……

チ「ということは、それほど追い詰められてるっ……てことか……………」

妖「ええ……………——幽々様危険!!」

それだけ、言うど妖夢は目にも止まらぬスピードで上を目指し、飛んでいった。

チ「……………っ!! 藍、大ちゃん、橙っ!あたいは先に行ってるよ……妖夢を一人には出来

無いからね」

そう私たちに告げた時にはもう、居なくなっていた。

大「ふ、二人を追いまししょう!! 私たちも!」

藍「ああ、そうだな……二人とも、しっかりついて来いっ!」

橙・大「はいっ!!」

————そして現在……………

くっ!! 幾ら思い返しても有効な手立てが……………っ!

? 「ら…………ん…………ん……………さん……………さん……………!……………

藍さんっ!」

藍「…………はっ!…………あ、ああ…………どうした? 妖夢?」

いつの間にか、深く考え込み過ぎていたよ  
うだ…………目の前の妖夢が私に呼びかけるのにも気付かないとは…………

妖「それはこちらの台詞です…………急に何か考  
えるように動かなくなつて…………どうかしたん  
ですか?」

藍「いや、すまない…………少し考えごとをして  
いた…………」

妖「それはやはりこの戦いの…………?」

藍「ああ…………そうだな」

妖「そうですか…………それで、まさにその事  
でなんです…………折り入ってお話が…………」

…………その、話を持ち掛けてきた妖夢の腰  
の刀を見る————



藍「奇遇だな妖夢……私も、ちょうど、  
たつた今……話す内容が出来た所だ」  
私は、妖夢のその白楼剣から目を離すこと  
なく、そう告げた。

橙 side

まずい……まずいよ……！

今、チルノがあやつられた白玉楼の人と戦  
ってる………だいぶ押され初めてるし、心な  
しかさつきより動きがぶくなって来てるよ  
うな気がするし………いったいどうすれば……  
……！

もう一度、弹幕でえんごしてみる？………。  
それとも、一度、藍様に指示をあおぎに……  
……？

橙「い、いや！いつまでも藍様に頼ってばか  
りじゃ駄目だ！ここはもう一度、弹幕でえん  
ごしてみよう！………でも——」

言いながら弹幕を展開する……

橙「このことは、藍様に連絡する！」  
そこへ、だいようせいも加勢しに来てくれ  
た。

大「橙ちゃんっ！私も手伝うよ！どうしよう  
か」

橙「うくん……私、弹幕でえんごするのと藍様  
に連絡もしなきゃだから……」

大「……！そっか！なら私は橙ちゃんを守り  
つつ運ぶよ！」

橙「うん！頼んだよ！」

だいようせいが私を運んで、座標移動で飛

んでもらうことで敵の攻撃から守ってもらっている間に、私は弾幕の展開と藍さまに連絡を………しよう………と思った所で逆に、藍さまから、式のつながりを通じた念話が届いた。

藍「橙っ!!聞こえるか?橙っ!」

橙「藍様っ!?!………えっええとく………あの、今チルノをえんごするために弾幕を展開して………でも、ちゃんとお伝えするつもりで………」

藍「弾幕?………ああ、こちらからも見えているぞ。頑張っているな………橙」

橙「えっ?」

藍「そんなことより橙。その………頑張っている所悪いのだが………大妖精も連れてこつちに来てくれないか?場所はいまお前がいるそこから………」

………  
・・・藍様から集合場所を伝えられた時、よく考えたら、それほど藍様と離れていなかったことを、いまさらながら、思い出した………

橙「さつきまでの私のかつとうって一体………ってそうじゃないっ!藍様の所に向かわないと………!だいようせいっ!いまから言うところにとべる?」

大「うんっ!いいよっ!どこに飛ぶ?」

橙「うん、あのね………ここから………」

大「うん、了解!………それじゃ、行くよっ!」

そこから、私たちはほどなくして藍様たちと合流した。

妖夢 s i d e

目の前の式神、八雲藍に話を持ちかけ……  
交渉は成立した……というより、話の内容を聞いてみると、あちらもこちらの考えてることにいたり、藍さんの方からも話を持ちかけてきたという方が正確でしょうか……  
まあいずれにしろ、賛成を得られたことには違いが無いのですが……

藍「なるほど……やはり、それが最善手か……」

妖「!!……ということは、藍さんも……?」

藍「ああ……どうやら、同じような事を考えていたららしい……」

妖「ならっ……!!」

藍「いや待て妖夢……概ね、私もお前の話と同意見だが、その前に付け足す事がある」

妖「?」

藍「なのでここからが、私が持ちかける話という事になるかな……」

藍さんが私に新たに追加した用件を話した後、自身の式である橙を呼び、その呼ばれた橙とその橙を運んで来た大妖精が私たちと合流した。

橙「それで……その、藍さま……私たちは何をすれば?」

召集を掛けられた橙がおずおずと自身の主に問いかける。

その事によって皆の視線が一つに集まり、その注目の中、八雲藍が返答する。

藍「うむ……そこにいる妖夢とも話合ったの

だが……………」  
そこで一旦の間を置いた後、静かに言い放つ。

藍「妖夢の白楼剣で幽々子様を斬りつけて貰う——…私たちはその手伝いだ」

チルノ side

くそ……………突破口が見えない……………！  
それどころか、徐々に追い詰められて行く……………！

チ「くっ!!……………歯が立たないっ!! 一体どうすれば……………」

時を止めようと、魔法を撃とうと、破壊しようと、運命さだめを手繰ろうと……………そして……………いくら、氷を放とうと——

——《死》には時など関係ないように……………  
——万物の《死》はその存在の消滅であるように……………

……………つまり——

火の《死》は燃え尽きること……………

水の《死》は蒸発、ないし凝固……………

木の《死》は枯れ朽ち果てること……………

金の《死》は錆び崩れ壊れること……………

土の《死》は風化し、塵と消えること……………

——《死》は破壊出来ず、むしろ破壊の行き着く先こそが《死》であるように……………

——そして、《死》は全ての運はばれる命の終着点であるように……………

——更に、先ほどの水の《死》が蒸発して気となるか、固まり氷となることであるなら……  
氷の《死》もまた溶解し水となるか、気化して空気となることであるように……

……死を操る彼女の前には何もかもが消滅してしまう……

チ「こんなの、一…体ッ！どうやって倒せつて言うんだッ！」

時を止めても動き回られ、魔法は撃つても彼女の手前5mほどで消滅し始め、近づく程に消滅が加速して…彼女の手元らへんで完全に消え失せてしまうし、フランの破壊の力は、最初から弱点である『目』がこっちの手に移らないように対応されてしまっていて、運命に関しては、まだ使い方が未熟なのか効果があるのかも判然としない有り様で……だが多分効いていないし——水の力は魔法を無効化している応用なのか、それとは別に付与されているのかわからないが、(予想では両方)全くダメだった……

にもかかわらず、動きはあちらのほうが洗練されていて、スピードも互角にまで底上げされておき、相手の『死を操る程度の能力』で徐々にこちらの力も命も削られていつている

……  
……  
……

チ「……あれ…？コレ…？詰んでない？」

まあ、奴が各種能力を付与した上に力も底上げしたんだろうけど……

チ「これは…ちよつと拙いなあッ!!」

でも流石に氷で武器を精製し、近づいて近距離攻撃すれば相手まで刃が届くので、相手方も躲すか受け流すかして、防がなければならぬから何とか戦いにはなっているんだけど……………

これはもう、アレを使ってみるしか無いか……消費する妖力が多くなって減少が加速しかねないので、中々踏み切れなかつたけど、もうそんなことを言ってる場合じゃないし、そもそも何でもっと早くしなかつたのかまでであるくらいだ。

チ「なんか、頭の悪いゴリ押し戦法っぽいけど……むしろ、あたいにはピッタリか!!」

その一言だけ言って、あたいは周囲に集中し始める。

すると、数秒とかわからずにあたいと全く同じ姿の氷の分身が出来上がる。

無論、この分身たちもあたいと同じ能力を使用出来るが、既にどの能力も対策されてしまつてるので、無意味に等しい。

なので、出来ることは一つだ。

チ「さあ……一斉にかかれ!!」

その合図と共に（あたいが操作しているのだが）分身たちが一斉に標的に殺到する。

しかし、ただ突っ込むだけでは直ぐに消されてしまうので、相手の攻撃は躲すように気を付けることは忘れない。（因みに妖力の消費を抑える為に50体ほどにしている）

まず、先頭の分身が正面から突っ込み、相手の右側を横切り様に一太刀浴びせる。

それに反応して相手が自身の刀で受け流す……

その隙に近づいていた他の分身二体が左右からそれぞれ挟撃する形で（あたいから見て）右を槍を持ったのと双刀の分身が迫る。

（双刀の方は柄を逆手に持ちカマキリのように  
なっている）

それに対し相手も迎え撃つ態勢に入る………  
が、迫っていた双刀の方が突然、剣を投擲する……敵方は慌てることなくあくまで冷静に、上に逃れつつ、その擲たれた武器を自身の左から迫って来ていた槍の分身にぶつけ、且つ敵全体を見渡して把握しようとしていた。

……なるほど、やっぱやるねえ……でも、まだまだっ！

幽「……」

……双剣を投げた本人（分身）は消え失せ、代わりに彼女が躲した筈の投げられた双剣がそれぞれがあたいの分身に変わっており、自分たちの足元の空間に氷の床を固定して足場にし、槍持ちの分身を二体で手を組み合わせて乗せ、槍の分身が脚に力を込めて飛び上がるのに呼吸を合わせ、二体の分身が上にその槍の彼女を体全体を使って投げ上げる。

……槍を自身の前、つまり相手のいる上方向に突きだし、勢いを加速させる形で妖力を足裏から解放する。

消費する妖力を必要最低限に止め、且つ相手への効果的な打撃を与える動きだ………  
しかし、どうやら相手の方が一枚上手だったようだ………

幽「——！！」

槍の分身が（相手から見て）視界から消え

る程のスピードになるタイミングで体転換することで体の位置を躲すと同時にそのままの流れでその場で刀を横に向けながら回転した……つまり、自身に向けて飛んできた槍を持ったあたいの分身を逆に、横薙ぎに斬って輪切りにした。

思わぬ反撃にあった槍のあたりは槍を半分くらしいの所で切断され、その身も刃が体の半分以上まで達して切り裂かれ、形を保てずに氷像となり、バァンツ!!と音を立て、呆気なく砕け散った。

恐らく死を操る程度の能力も乗っていたんだろう……そうでなくとも砕け散っていただろうけど……

チ「……………」

それなら、大多数を投入して囲み、様々な方向から、一体に付き一刀ずつ浴びせていく形に切り替えた。

その時、分身が三体くらい突っ込んだタイミングで、離れた場所で順番を待っていた分身が鞭で、その反対側の分身が鎖で幽々子の足と手をそれぞれ捕らえた!

幽々子の死の能力があるので長くは持たないが、その隙に他の分身が殺到する……

それもただ向かっていくのでは無く、ある者は彼女の背後に回り、またある者は背後の分身の大鎚に当たって貫うことで、その鎚の打撃面を蹴って加速をつけて短刀で迫り、他にも向かっている者の陰に隠れるなどして近づく者などe t c……が標的である彼女に突撃する……しかし、彼女は動じずに静かに待ち構



える。

……まるで、すべての分身たちの動きを見抜いているかのように……でも、これは見切れるかなあつ！

チ「くらええーっ！！」

あたい自身が真上から飛来し、彼女の周囲に迫っていた他の分身を吸収しながら、加速し、彼女の目を攪乱しつつ、死角である左斜め後方から胴を狙って飛び込む。

……だがまたしても、動きを読まれ、受け切られてしまった。

向こうはあたいが視界から消えていった大体の方向と自分の死角から、大まかな位置を予測して、更にその方向に対して気配を探り、位置を特定した上で回避しようだ。

——しかも、回避されるだけならまだしも、同時に反撃まで許してしまった。

その回避方法が空中で頭の辺を軸に宙返り、あたいの肩に手を乗せて支えに、あたいの後方へ飛ぶというもので、手で触れた、その瞬間に死の能力を使われてしまい、あたいは光の粒となって消え、再びその場に復活した。だが当然、出していた分身たちは消える。

——その後も、あたいは分身を増やしたり、分身同士やあたい（本体）との連携で敵な迫るも、返り討ちに遭い、切り捨てられ、切断され、砕かれ、次々と撃破されることで、次第に、こちらが追い詰められていった……

チ「くっ………これでもダメか……!!」

——ッ!？」

それはあたいが空中に設置した手のひら程の大きさの氷壁に反射させて氷弾を撃ち込み、死を操る程度の能力の乗った幽々子の弾幕に掻き消されていた時だった。辺りを見ると、さっきまで止んでいた………これは、大ちゃんと橙の弾幕………？が、飛び交っていた。

チ「………！ありがたい！」

そろそろ、力の補充が必要だと思っていたし、これで幽々子の弾幕だけでも相殺できるかも知れない。

早速あたいは幽々子が放ち始めた弾幕には当たらない大ちゃん達の弾幕を吸収していく。それ以外の弾幕は幽々子の死の能力が乗った弾幕に当たり、打ち消されていく。しばらくそれが続いたが、急にふと（大ちゃん側の）弾幕の雨が止み、相殺されずに飛んできた死の弾幕が側を通りすぎる。

チ「うおっ！危なっ!?………つてうわあ！」

こちらの弾幕が止んだことで相手も弾幕を止めるが、残った弾幕があたいに降りかかり、それを躲している間に相手がこっちに向かって来る！

そこから一転攻勢とばかりに打ち込み始める幽々子。

……鞘に収まった状態から刀を一気に抜き放ち、逆袈裟に斬り上げられた刀閃を上体を反らすことで躲し、そのまま頭から落下させ、飛行状態を一旦解除し、脚を畳んで回転しながら落下して逃れる。

……だが回転の途中で相手が刀を真っ直ぐ投げ

てきたのが見えたので、自身の横に平らな氷壁を作り、同時に氷で短刀を作り刀に当てる。キーンつと音が響き、氷は死の力（と刀との衝突）で砕け、霧散する…が刀の方も衝撃までは殺し切れず、空中で回転しながらやや上へ飛ぶ…それをこちらへ降下しながら飛んできていた彼女が空中の刀を回収し、あたいへと振り下ろす。

それに対し、予め作っておいた横の氷壁を蹴って横へ飛び、躲す。

蹴られた氷壁は跡形も無く砕けて消え、相手に使われるのを阻止する…：：：筈が、時を止められてしまい、あたいと幽々子以外の時が止まったことで、氷壁は辛うじて原型を留め、それをジャンプ台として使われ、早くも追いつかれる。

相手が向かってくる勢いそのままに、鋭い突きを繰り出す…：：：しかしギリギリ、目の前に正方形の立方体の氷塊を精製し、それを足掛かりならぬ手掛かりに、足を蹴り上げて回転して相手の頭上に逃れた。

同時に幽々子の突きはあたいが足場として作った六面体の氷塊に突き刺さり、一瞬動きを止める。

その隙を突いて氷の中に閉じ込めようと試みるが…：：：やはり失敗に終わる。

相手が一足早く、突きを外して刀の動きを止められた時、既に自身の周囲に死を操る程度の能力を展開しており、更にその力を纏った弾幕まで展開してきた。

あたいは自身の作りだした正六面体の氷が水

に変わっていくのを見て、弾幕の展開より早くその場から離脱する……しかし既に能力の効果範囲内にいた為、幽々子から距離を取った後、（ほとんどあつて無いようなものだけれど）一回休みを余儀なくされた。

大妖精 side

その場には私を含めたチルノちゃん以外の四人全員が集まっていた。

橙ちゃんが藍さんに呼び出されたみたいで、藍さんの居る位置に直接、座標移動して橙ちゃんと一緒に来た。

そこで藍さんからある作戦を告げられる……その内容は……

大「よ、妖夢さんを援護……ですか？ 妖夢さんのその……白楼剣を幽々子さんに当てられるように……」

藍「そうだ、もう現状それしか方法が無い」  
橙「で、でも大丈夫なんですか？ 藍さまの作戦をうたがうわけではないのですが……」

妖夢さんのその刀で斬るだけで……本当に？」  
橙「ちゃんが不安げに藍さんを見つめて問いかける。」

藍「ああ、それについては……」

妖「藍さん、そこからは私から説明します」

藍「……ああ、よろしく頼む」

藍さんの言葉を引き継ぐ形で、妖夢さんが説明に移る。

妖「この刀、白楼剣は切った者の迷いを断ち切る刀、幽霊であれば成仏し、人に使えば痛

みの後<sup>のち</sup>に迷いが消えます。つまり、操る影と幽々子様<sup>のち</sup>の間に意識の差が発生すると思われ  
ます」

大・橙「!!」

藍「既に式神を紫様へと放つてある。この作戦が成功して直ぐか、その前くらいには紫様の元へ連絡が行き、スキマにて一瞬でこちらに向かわれるだろう」

大「つまり、その差を利用して紫さんに境界で影を離して貰うという事ですね！」

妖「ええ、しかし問題は……果たして亡霊である幽々子様<sup>のち</sup>にこれを使つてどうなるのかは私にもわからないとところにあります……亡霊の性質から言つて、怪我をさせてしまうことも無ければ、成仏してしまうことも、恐らく無いでしょうが……幽々子様<sup>のち</sup>の亡骸<sup>なきがら</sup>を、供養でもしてしまわない限りは……」

藍 s i d e

その説明をする妖夢の表情はしかし、苦々しいものだった。

それもそうだろう……方法がそれしか無く、それが主の為にする行為であろうと、それによつて傷がつくことは無いだろうと思つていても、己が主人に刃を向けるという行為には抵抗が生じる。

……それが例え、本心から逆らっているのでは無く、むしろ主を救わんが為にするのだと理解していても……しかも、それによつて確実に救えるという保証もなく、悪くすれ

ば却って取り返しのつかないことになる可能性すらある……

私とて……もしも紫様が……そう考えただけで、いたたまれなくなる。

しかし、我々からすれば可能性が少しでも残っているのであれば踏み切らざるを得ない。

現に、チルノも追い詰められて来ているし、その上すぐにでも、その彼女の分身である影のチルノを追わねばならない。

……これ以上、犠牲を増やす前に……

妖「……分かっていきます……このままでは幽々子様も救われることは永遠にありえませんが……たとえ、僅かにでも希望があるのなら、それに賭けます。その結果、どのような事態になろうと全ての責は私が負います。最悪、この身に引き替えてでも幽々子様をお止める覚悟もあります……だから、どうかお願いしますっ!!皆さんの力を貸してくださいっ!!」

そう言い切り、勢い良く頭を下げる妖夢。

……だが、そう頼まれなくとも皆の答えはただ一つだ。

大「顔を上げてください妖夢さん……私たちは初めからその為にここまで来たんです。今更引き返したり、逃げたり、ましてやただ茫然と見て立ち尽くしたり、勿論断ったりもしません！」

橙「わ、私は藍さまや皆がいるので……なにも怖くありませんよ!!」

藍「大妖精の言う通りだ。私としてはむしろ現状打破の糸口さえ提示して貰って、有り難

いくらいだし、その……一番辛いのはやはり、妖夢：お前のはずなんだ：にもかかわらずその選択をしてくれたお前に、力を貸さぬ道理などない」

皆の言葉を聞き終えた妖夢がその目に涙を滲ませ、私達に感謝を伝える。

……その涙は皆からの温情の言葉故か、それとも、これから己が主に行う仕業の故か……

いずれにしても、これから行うことに変わりはない：そういえば、チルノにはまだ説明していなかったな……だが……

今、あいつに伝えにいつてもこちらが足手纏いになるばかりで何も伝わらないだろう。

ならば土壇場でこちらの意図を察して動いて貰うほうが、まだ上手く行くだろう。

私がそんな風に思案している間にも幽々子様とチルノの……目にも止まらぬ（というより最早見えない）攻防が続いている。

さあ……そろそろ、この戦いに決着をつける  
としよう。

## 第十三話 氷争（白楼 其の肆

アリス side

………つたく！なんなのこいつらっ!?

——右から二体、上から四体、左からは一  
………いや二体！

まず、自身は下へ逃げながら、上から追ってきた奴を先頭から片付ける。

槍を持った上海二体が挟み撃ちにして破壊。次の後続を大剣を担いだ蓬萊が鉤爪の攻撃を躲して懐に入り、その脇をすれ違い様に胴を真つ二つに断ち切る。

だが更に三体ほどその影から現れ、私に爪を届かせようとするが、既に鎖鎌を持った上海と蓬萊に鎖を胴周りに掛けられ、後方に矧がされた上で二体がそれぞれ逆に回ること巻き付け、更に逆の方へ飛んで引き絞って切断。残りの三体が正面の一体以外の二体がそれぞれ左右の斜め後方の位置へと回り込み、囲った状態から私や上海たちを中心に回る。

そうして、三周程回った所で急にこちらへと飛び掛かってきた——恐らく、回る間に距離を詰めてたんでしょね………

ア「………でも、無駄ね。ご苦労様っ！」  
私の周りを大盾を装備した上海&蓬萊がため、後一步でその鉤爪が私に届くのを防いだ。

ア「戦操：『ドールズウォー！』」  
攻撃が防がれた瞬間、足元に魔方陣が展開し、そこから十二体の上海たちがランスで一



齊に私目掛けて、人形兵どもを背後から貫く。貫かれた機械人形たちは鉄のひしやげるような音を立てると同時に動かなくなった。

……その人形たちを上海、蓬萊たちがランスを振って捨てる時、その落下先にスキマ（八雲のとは違う）が現れ、人形を回収するかのようになり込んでいった。

そして……更に新たな人形兵が送り込まれてくる。

もうかれこれ、十回ほどこれを繰り返している。

因みにこれはチルノたちと別れ、レティを私の家まで運ぶ道中で、彼女は他の上海たちにしっかりと守らせている………んだけど………

ア「初めて会ったときとは違ってずいぶんと積極的じゃない………何？誰かを背負ってる今ならやれるってわけ？………見くびられたものね！」

そして、目の前にスキマのようなモノが開き、新たな兵どもが送り込まれてくる………と身構えていると、先ほどまでとは違った姿の兵が目の前の裂け目を通して私と対峙する。ア「………え？こいつら………もしかして？」

そう、新しく出てきた奴らは、見覚えのある奴の帽子（ターバン）を巻いた何の武器も持っていない奴、武器の代わりに三体それぞれに異なる種類の楽器を一つずつ持つてる奴らだった。

一体はバイオリン、もう一体はトランペット、更に一体はキーボードだ。

………というか帽子の奴はどうみても今私が連れ

ている……………

ア「ええ……………もしかして、今度はそういう…」

…それを肯定するかのように眼前の楽器を  
持った三体から嵐の如く弾幕が放たれる。

ア「やっぱりいつ!?!」

更には辺り一帯を凍える程の寒気が多い尽  
くす……………

ア「うう……………ずっと!……………さ、寒っ!!

全く……………雪女は夏は力が出ない筈なのに  
いっ!」

どうにか、寒さをしのぎながら、楽器を持  
った三体放つの弾幕を躲して立ち回る。

空を華麗に舞うかの如く相手の弾幕を掻い潜  
りすり抜け相手の隙を突くように上海たちを  
差し向ける。

目の前の三体のうちのトランペットの敵から  
弾幕と共に管楽器の楽しげで元気の良いメロ  
ディーが聞こえてくる。

どうにか四体分の弾幕を躲し、こちらからも  
反撃にでる。

敵の弾幕は数こそ圧巻であるものの、良く見  
極めて対処すればそれほどでも無い。

……………戦闘の最中、まだメロディーが聞こえて  
いる……………

上からの弾幕を紙一重で回るように躲し、真  
後ろから来た攻撃も宙返りの要領で飛び避け  
、逆に上海で迎撃。

更に他の子たちで遠距離から弾幕を展開して  
いる三体に攻撃を仕掛ける。

相手もただ座して死を待つ訳も無く、こちら  
の攻撃に対応しつつ弾幕を緩める気配はない

……しかし、私は敵が態勢を崩したようなほんの僅かな感触を見逃さなかった。

そこから私はどこか前のめり気味で周りに注意を払わないような立ち回りであることにも気付かないほど目の前の敵に畳み掛けていった。

ア「……………ふふっ！」

敵がボロをだし始めている。完全に墜ちるのも時間の問題……………

——勝った!!?……………そう思いかけた瞬間、ようやく自身の異変に気付く。

ア「あ、アレ？ 何か……………おかしい……………？ 私、何でこんなにテンション高いの？ 気分が変に高揚して……………はっ……………!!」

……………そこでやっと思ひ出す……………

これは縁起に書かれていたホルターガイスト 騷 霊 三姉妹の能力と特徴と一致する！

本当に、己のぼんこつな記憶力が恨めしい…今だけはあの稗田の当主が羨ましかった。

そう、今私を襲っているこの異常……………これが、躁の音楽と呼ばれる……………メルラン・プリズムリバーの「躁の音を演奏する程度の能力」による旋律！プリズムリバー三姉妹の次女の能力による攻撃だ！

ア「まずいつ……………てことは、まさかっ!!」

私はいつの間にか、戦闘に夢中になり、守護対象である彼女から離れてしまっていた。それどころか、敵を知らず知らずのうちにその方向へと追いやっていた。

気が付かなかったとは言え……………これは私の失態だ。

いつの間にか、敵方との位置関係は敵を挟んで私の反対側にレティと彼女を護衛する上海たちという形になっていた。

ア「……………っ！ ……させるかつ!!」

私は上海・蓬萊を敵に向かわせつつ、護衛に付けている上海たちも使い、挟撃する……………

しかし、読まれていたのか挟撃は難なく躲され、むしろさつきよりも近づかれてしまった。

——時がやけにゆつたりと流れているように感じた……………

…だが、当然のことながら自分だけははその時間の中で普通に動いているということは無く、私もこの緩やかな時間に取り込まれたかのように……………のろい。

三姉妹を模した敵が彼女に至近距離で弾幕を放とうと楽器に手をかける……………

そこで私はそれを遮るように苦し紛れに弾幕で攻撃する。

ア「——ツツ！ 『偵符シーカードールズ』っ!!」

四本ものレーザー弾が相手に向けて直進する。

ア「——ツ!!」

でも、それも敵の弾幕に掻き消され、さらに……………辺り一帯の寒気をレティを模した雪女の機械兵がまた一段と強くした。

もう、指先すら動かせ無いほどの身を刺す寒さが私を襲う……………

ア「ぐううつつ……………！」

奴らの魔の手も彼女に迫って行く……………！

その場へと無意識に手を伸ばす……………

ゆつくりと進んでいく時のなかで、私は只々無力感に苛まれていた。

約束したのに、また守れないのか……

あの時と同じように……!!……またっ!!

——ガシィツ!!

その時……再び時のスピードが戻り始めた。

模メルラン  
機械兵「……!!（ギツ…ギイギゴゴ…）」

レテイ「ふ…うわあ…：全…：人が折角気持ちよく寝ていたって言うのに…：まあ人じゃないけど…：私の眠りを妨げるってことはあ…：もう、覚悟は出来てるんでしょうね」

♪

何が起きたのか、奇跡が起きたのかと目を丸くしていると突如、さつき迄眠っていた彼女と彼女を狙っていた人形兵共との間で戦いになった。

リリカ「だ…か…らあ…っ！ちゃんとこつちであつてるってば…！」

ルナサ「…：そういつてかれこれ一時間くらい彷徨ってるじゃない…：っていうかこつち…：私が最初に指した方角じゃ…：」

リリカ「まあまあ！細かいことは気にせず、張り切ってこ…っ!!」

メルラン「まあ…っ！…：うふ…：リリカがいると賑やかで良いわあ…！」

…：先ほど、敵が彼女に手を掛けようとした時（実際に首に手を掛けようとしていた）、目を覚ました彼女が相手の手を掴み交戦に入るか否かのところどころからともなく、三

人組の声が聞こえてきた。

………ん？リリカ………？ということ………

リリカ「待たせたナア！ プリズムリバー三姉妹！ ここに参上！ なくくんでねっ☆」

ルナサ「いやいや………待たせ過ぎだから………」

メルラン「まあまあ………見つかったんだから良いじゃなくらい………それに、間に合ってもいるみたいだし？」

次女のメルランが長女のルナサを宥め、その間にリリカが私のところにやって来た。

リリカ「ねえねえ！あなた、アリス・マーガトロイドでしよう？」

今はそれどころでは無いはずなのに、思わず気圧されるほど瞳を輝かせながらリリカが問いかける。

ア「え、ええ………そうだけど、それが………」

リリカ「やっぱり！人里で、あなたの人形劇を見た時から私！あなたと私たち姉妹は相性が良いと思ってたのよっ！………ねっ！そこで相談なんだけどさ！今のこれが終わったら………私たちと人里で共演してくれない？良いよねっ！？ね！」

ア「え、あ、ちよつと………」

リリカ「え？こんな危機的状况を救ってくれた恩人の頼みを断れる訳無いっ、是非共演させてくれ？いやくくっ………なんか恩に着せるみたいで悪いねくく！でも、私はお礼はちやんと受け取るタイプなんだよねく！という訳で、早速この状況に加担させて貰うよっ☆善は急げだレッツラゴー!!」

ルナサ「ちよつとリリカーっ!!置いてく

わよー！」

リリカ「はーいっ!!今行く!!」

一方的にまくし立てた上、勝手に恩を売られ、約束を取り付けられ、あまつさえ我が物顔で引つ張り回されたことは一旦脇みかたに置いておくとして、取り敢えずはこちらに協力みかたしてくれるみたいね。

そこで改めて、叩き起こされた(?) 怒りを敵に当たり散らしている彼女に視線を戻す。

そこまで怒っているわけでもなさそうだが、

(それとも、臨界点を越して逆に冷静か……)

ね) その残った理性故か、敵の方も攻めあぐねているようだ。

しかし、複数であることと相互の連携によって徐々にはあるが追い詰められていつている……じり貧という奴だ。

すぐにでも、加勢しなければならぬ……そこで私も三姉妹に追い付き、着くなりリリカに説明を求められる。

リリカ「ところで……目の前のあいつらってなんか私たちに似てる奴がいるんだけど、あれって能力ちからも似ている感じ?」

その問いはもう予想はついているが、答え合わせの為だけにかけられた問いだった。

その問いにこちらも若干食いぎみで答えを返す。

ア「ええ! その通りよ……奴らのうち三体はあなたたちと同じような攻撃をしてくるわ……

躁、鬱、幻想の三種の音ね。まだ躁しか聞いて無いけど見た目から言っても間違い無く他は鬱と幻想……だから……——っ!!?」

説明の途中で今まかさに話っていた鬱と幻想の演奏であろう音色が敵の手によつて奏でられていた。

ア「う……うう……はあく……な、なんだか……やる気が……」

音が聞こえた瞬間すぐに耳を手で塞いだにも関わらず、まるですり抜けてくるかのよう

に頭の中に流れ込んでくる。頭の中でその音を受け入れて行くにつれ、次第に自身の中からやる気や活気が洗い流されていくようだった。

なんと音が聞こえ始めてから数秒の出来事である……

ア「………っ!! (さっきはこんなに早く効果は出なかったのに……!!)」

こんなことを言うのも変な話だが、凄まじい勢いでやる気が失せていく……果ては生きる気力さえ喪われ始めたその時、ふと敵の演奏による影響が一気に弱まった。

……敵の音楽が消えた? いやそうじゃない……かすかにだけ聞こえている。

それなら……と辺りを見回そうと首を捻ると隣に答えがあった。

リリカ「ほら、ほらほらほらほらほら?」  
ルナサ「もう、調子乗ってないでちゃんとメルランに合わせなよ」

リリカ「はいはいはい♪わかってますつて〜!」  
メルラン「あらあく……ふふっ……私は別にこつちが合わせるのでもかまわないわよ〜?」

なるほど、合点がいった。



今、三姉妹のうちの二人が敵の演奏に対抗して……つまり今流れている鬱の音楽に対して躁の音楽、メルランの演奏で反対の音をぶつけることで音の波長を相殺しているということらしい。

だから、音が消えたように感じたのね……

ア「ありがとう、助かったわ」

三姉妹の長女に礼を言う。

ルナサ「礼には及ばないわ。それにまだ終わってないしね……」

——ドゴオー——……

一同「！！！！」

ルナサとの会話が切れる間に派手な爆発

音がなり、演奏中の二人も共に爆発のあつた方を見る。

レテイ「く……」

どうやら、レテイに敵の弾幕が直撃したらしい。

その一撃を皮切りに次々と敵からの弾幕をその身に浴びて行く。

恐らく、さっきの鬱の音は私達全体というより、暴れてなかなか手が付けられないレテイに向けたものだったらしい……普段は抑え役の幻想の音を増幅器として利用して——どうやっているのかわからないが——まで抑えようとしたのがついさつき音が相殺される直前に漸く効き目が現れたのだろう。(どれだけ怒っていたんだ……)ここまでの思考が私の頭の中を漠然と一気に駆け抜けた。

その刹那にいつもは上海たちを操る為に使っている魔法糸をレテイに向けて伸ばし、上海

たちもそこに急行させ、全力でその場からこ  
つちに引き寄せる。

その瞬間、レテイのさつき迄いた座標に敵の  
更なる追撃が一瞬遅く打ち込まれた。

またもドオーン、という激しい爆音が鼓膜を  
揺らす。

その隙に、彼女をこちらまで糸と上海で連  
れてくる。

そこで、何故か彼女が謝ってきた。

レテイ「……ごめんなさい……寝起きの怒り  
に任せて敵陣で暴れてみたんだけど……逆に  
迷惑かけちゃったわね」

つまり、彼女は彼女で私に気を使っていた  
らしい。

しかし……

ア「……案外、冷静だったのね……その割り  
にかなり頭に来ていたみたいだけど……」

それはもう、鬱の音がしばらく効かなかつ  
たくらいには……と思っていると、不意に

妙に怒気と圧を感じるにこやかな笑顔で：

レテイ「うんくん？それとこれとは別……あ  
んまり言わないんだけれど私、安眠妨害とか、  
だいつきらいなのよねっ！」

と言いつ放つ彼女……まあ何はともあれこ  
れで

………これで、完全に位置関係は三姉妹  
と私と彼女……対するは三姉妹と彼女の特徴  
の装飾と武器を装着した無骨な機械人形たち  
という絵面になった。

ルナサ「さて、だれがあの中のどれを相手す  
るかだけど……私らの姿（？）をした奴ら

は私らが相手をするよ」

今の位置関係になるなり、三姉妹の長女が口を開き、自分たちの姿の相手は受け持つと宣言する。

ア「わかつたわ。二手に別れたほうが混戦して変なことにならなそうだし……」

そう、音に関してはあの姉妹がなんとかしてくれるだろうが……実際の戦闘では私は（魔法のとはいえ）糸を使う……つまり、混戦は混戦に繋がる。

私の手腕なら糸同士が絡まることはまず無いとしても——そんなことになるほどドジでものろまでも無い——味方との戦闘ではややこしくなること受け合いだ。

まあ近距離で共に戦っても絡まらずにやつてのける自信があるにはあるが、味方がどのようになり立ち回るかの予測も必要になる上、完全に予測しきれるとは言え無い……その時、味方同士でぶつかって隙が生じるなどしては目も当てられ無い。

従って、どんなに小さくともリスクヘッジは行うべきで……

そこで、ルナサが相手を警戒しながら話しかけてきた。

ルナサ「ああ……それと、さつきりリカが色々言ってみたんだけど、気にしないで良いから……幻想郷にいつもの異変とは違う『危機』が訪れてるなら、最初から協力するのが筋だし……というか、どうせ強引に話しを取り付けられたんでしょ？悪かったわね、身内が無理を言っ……」

その言葉を聞きつけたらしい騒霊の三女が姉に抗議の声をぶつける。

リリカ「ええーっ!! そのくらいいいじゃん! 減るもんじゃなしー!! ……ていうか、むしろ増えるくらいまであるよ!!」

それを窘めてルナサが返し、その様子を微笑みながらメルランが見守る。

ルナサ「あんたが良くても向こうの都合があるでしょう…」

どこか物憂げで気怠げに、それでいてどこか圧力を滲ませ言い含める彼女にそれでもリリカは食い下がる。

リリカ「で、でも…!!」

そのやり取りを横で聞いていた私は（無論、敵に注意を払いながら）、そんな彼女が少し哀れに思えたのと、良く考えてみれば案外悪くないかも知れない提案だったと思いなおす…これは、意外にも本当にそう思った。なにせ、騒霊楽団の評判は耳に届いていたし、共演した時の里の人間の反応も面白そうだし、私の人形劇に新しい要素を取り入れられるかもしれない——あとは、この話をいい加減まとめないと…様子見を切り上げて敵が向かってきそうだからというのもあるが——その話に割って入るように私は言った。

ア「ねえ、その話、受けても良いわ」

ルナサ「？」

リリカ「えっ?…良いの?」

私の反応が意外だったのか、二人は一瞬固まると、それぞれが口を開く。

ルナサ「…別に、無理する必要はないのよ?」

リリカ「あ、あのく…私から言い出しといて  
なんだけど、本当…に？」

ア「ええ…別段他に都合があるわけでも無い  
し、この件が色々片付いたらになるけど、そ  
の後ならそっちの都合のいい日で構わないわ  
破格の条件に二人とも驚き、口を閉ざして  
いる。

うん…これはこれでいい気味ね。(主に気  
分が良い的な意味で)

ア「だから、その日に向けて今、合あわせをや  
らない？」

二人が同時に、え？と疑問符を口から吐く  
の見てからこう続ける。

ア「目の前のあいつらには私たちの初共演の  
観客兼練習台になって貰いましょう…尤も、  
演じ終わるころには彼らは八つ裂きになつて  
いるでしょうけど…ね」

私のその応えを受けて二人もそれぞれ、顔  
に笑みを称え、なるほど…それは名案ね…  
と含み笑いしたり、つしやあーっ！と拳を  
元気に天に突き上げたりしている。

と、そこにレティが話に入ってきた。

レティ「その初共演、私にも手伝わしてくれ  
ない？ 奴らへのお礼がまだだし、興味もあ  
るしね…」

…さて、これでこつちの話はまとまっ  
たけど…やっぱり、この期を見逃す奴ら  
じゃ無いわよね！

ルナサ「来るよ！」

私たちの動きだす気配を感じたのか、はた  
また、偶然タイミングが重なったのか…黒づ

くめの機械共は攻撃を再開した。

リリカ「……まったく！待ちきれないってこと?!」

ルナサの警告にまずリリカが幻想の中和する音楽を……続いて相手の鬱の音に対応して、メルランが音を奏でる。

メルラン「あら！それは光栄ね！おあいて演奏のしがいがあるわあ〜！」

次に躁のメルランの演奏に便乗して音を際立たせようとした敵の演奏を打ち消すようにルナサが鬱の音楽を周りに交響する。

無論、両者からも常に弾幕は飛び交い、辺り一帯は光弾の嵐に包まれる。

しかし空中でなのと、領域の制限もないため、ある一定の距離を取れば両弾幕に挟まれることも無い。

……離れられるギリギリから弾幕の隙間を縫って移動し、隠れ蓑にしつつ、糸を手繰り上海らを操ってレテイの機械兵へと攻撃する。

(完全に離れないのは三姉妹へのいざという

ときのフォローと支援の為)

レテイ「さっきのお礼はこの公演たたかいのアシストでたっぷりしてあげる！」

レテイが敵から発せれている寒気を抑え、逆に相手側のみ寒気が寄るようにコントロールしながら、弾幕を飛ばす。

しかしそれは相手も同じなので、互いの力の具合によってこちらが寒くなったり、普通になつたりを繰り返す。

ア「……くっ！ 案外しぶといわね……！」

実際、戦闘を始めてから約数十分くらい経

過していたように思う。

三姉妹の方は実質一対一だからまだしも、こちらは二対一であるにも関わらずだ。

しかも、私は上海たちを操って攻撃しているので実際は多対一だ。

ア「私は避けるのにも神経を使ってるとは言え上海<sup>この子</sup>たちは半自動なのよ……？ 一体どんな処理能力してるん、だか……！ (それにどこか動きを先読みされているような……?)」

戦い始めてからずっと(レテイ)機械兵は寒気を操る程度の能力をこちらに向けつつ、上海・蓬莱たちの攻撃をいなし、レテイの弾幕を相殺し、時に私か上海軍団から放たれる光弾をも相殺する。

それらの動きもこちらよりも若干先んじて行われているような感覚がある。

もちろん、気のせいだと言えばそれまでだけれど………

ア「……！ 魔光！ 『デヴィリーライトレイ』！」

レテイ「白符『アンデュレイションレイ』」  
機械兵「………」

怪符『テーブルターニング』

私とレテイの二人のスペルで同時に攻撃し、不可能弾幕で敵を包囲するが、相手もスペルを自身の周りに展開しながら、降りかかる弾幕に相殺し、(流石に私のレーザー弾は躲していた)弾幕の包囲を突破された。

ア「でもそれは悪手ね！」

その動きを前もって予測し、上海・蓬莱を相手の進行方向上に先回りさせておいた。

まずは大剣を担いだ蓬菜が、目標に鋭い上段正面真つ向斬りを浴びせる。

でもそれも、即座に能力の応用で氷の盾を精製され、斜めに受け流される。

その大剣の上海のすぐ後ろからランスの上海による、体躯全てを使った刺突が繰り出されるが、少し横にズレて躲かれ、相手の左斜め後方からの両刃斧の袈裟斬り振り下ろされる前に蹴り飛ばされた。

——なに？この…既にこつちの動きが筒抜けかのようなこの動きは……—

ア「……なら、次のステップに進みましょうか」

私は上海たちのうちの一体からレーザー弾をあの三人姉妹とそれと対峙する機械共とを別つように放たせ、三人と三体の注意を一旦こちらに向けて戦闘を一時中断させる。

彼女たちと奴らがこつちを向いたのを見計らってあさつての方向を指差す。(その間、レティに自身の人形を相手してもらっている)そこには——……

open!! < It's a phantasm theater >  
開演!! < 幻想楽団劇場 >

……と、大きく七色の光で上海・蓬菜たちに描かせていた。

リリカ・ルナサ・メルラン「!!!」

機械兵・機械兵・機械兵「……」

「」

うん。上手く三人にだけ伝わってくれたみ



たいね。

その数秒後、遠くから弾幕で相手に対抗しているだけだった三人がこちらに合流した。

これで五人がその場に揃い、敵が様子を伺っている間にお辞儀を済ませ……

——さあ、イツツビギニグ！（反撃開始）

ア「白符『白亜の露西亞人形』！」

私の上海たちが相手を囲うように左上、右

上、左下に複数配置され、それぞれから米粒弾が六方向に一気に発せられる。

それに合わせるようにまずはリリカが敵に近づき非スペルの攻撃を繰り返す。（つまり、

私の弾幕の包囲の中心付近）

リリカ「フアントムノイズ！」

その宣言と共にリリカの持つキーボードから音と一緒に音波の波紋のようなものと音符型弾が一瞬広がり、敵に直撃する。

辺り一帯を私の弾幕が覆っており、咄嗟に反撃に出た敵はリリカの攻撃に当りはしたものの衝撃を受け流し、逆にリリカに迫ろうとしていたが、リリカは相手に手を出してから直ぐさま身を翻し、私の弾幕を掻い潜りながら奴らから距離を取った。

次に、私の弾幕に隠れたリリカを追う敵にメルランが妨害を加え、それにルナサが追撃を加える。

メルラン「トランペットソウル！」

ルナサ「スローサウンド……」

その翻弄するような動きに私が更に合わせでスペルを変える。

ア「注力『トリップワイヤー』！」

次は弾幕の代わりに敵にダメージを与える糸が張り巡らされる。

そこで敵から逃れつつ戦っていた三姉妹それぞれが定位置で止まり、敵に向けて通常弾幕を敵に一斉砲火する。

それに対して敵は三々五々に散って、躲そうとするが、時々糸に引つかかったり、三人の弾幕を躲しきれずに被弾してしまったり……挙句、危うく敵同士で衝突しかけたりしていた。

——……？ これって……もしかして……！  
敵が糸の中での戦いに慣れて来たのを見つつ私は自身の仮定を確かめる為、一旦今の糸スペルを解いて、敵を中心におおよそ三姉妹を点対象の位置に陣取ると、スペル「グランギニョル座の怪人」を発動。

ルナサ・リリカ・メルラン 「二大合葬！」  
『霊車コンチエルトグロツソ 怪』！  
！！」

すると、彼女らも何かを察してくれたようで自分たち最大のスペルを出してくれた。

——……しかし、敵はこちらが位置について即座にスペルを発動したのに関わらず、直ぐにその位置関係から脱出するように動いた……  
こ・ち・ら・に・各・個・撃・破・に・向・か・う・こ・と・も・で・き・た・は・ず  
な・の・に・……

確かに、分かりやすい動きで、予測も容易だったからとも考えられるが、さっきの場面<sup>ワシントン</sup>で連携攻撃が厄介である事はあちらも認識したはず……ならば、自身を隔てて二手に分かれた私達の内どちらか、若しくは双方を倒しに行

くことも検討出来る筈なのに……………

……でも、いずれにせよ、これで私の中の仮説が確信に変わった。

私たちの高密度、大質量の弾幕の圏内から逃れたあいつらは弾幕の海に囲まれている私とプリズムリバー三姉妹を無視して、レティを先に斃たおしにかかった。

レティ「ふふ……いらっしや〜い♪」

当の本人は非常にヤル気（何がとは言わない）で途轍もない圧の感じる笑顔を敵に向けて暴れている。

レティ「冬符！『ノーザンウイナー』〜！」

スペルを放ち、更に冷気を操って氷で武器を作り、相手に踊りかかる、相手に寒風を吹かせ続ける。

……その、豪雪が舞う程の寒風によって私の確信が更に裏付けられた。

最早吹雪と言えるほどのものに吹かれている敵の背面に、吹雪の雪かあるいは零度の氷結によつてか……キラリと糸のようなものが光ったのを見逃さなかった！

——見つけたっ！

ア「上海っ!!」

上海「——……………っ!!!!」

私はスペルを解除すると同時に敵と同じ所まで飛び、上海に敵の後ろについている糸を断ち切るよう命令した。

その命に従い、真っ直ぐ数体の上海たちが糸の切断に向かう……

しかし、それを見ていた別の個体が割って入る。

それにすぐさま別の上海を向かわせて対抗する……そこに、私の動きに異常を感じた三姉妹が到着して戦いに加わり……再び場は混戦し始める。

機械兵レテイがプリズムリバー三人衆に囲まれて演奏に乗った魔力弾の攻撃を受ける……直前で回避、上に逃げ……待ち構えていた本物レテイに刀（氷）で斬りかかれ、それを受けつつ後退し、私は三姉妹の機械兵を上海・蓬莱人形部隊で相手取り、左右それぞれの斜め後方（右は上、左は下）からと、正面からの演奏魔弾をいなさせ、また自ら躲して上海たちに反撃を命ずると半自動の彼女らはそれぞれ、正面には陽動で大剣の一体が突撃……と見せかけて（ここで相手がヴァイオリンを盾代わりに構える）槍を構えた一体がその後から飛び込み、二体で一瞬翻弄した後挟撃。左は鎖鎌を持った子が相手の胴をトランペットごと鎖で捕らえ、そこを大鎚の子が吹っ飛ばす。

右は弩弓隊の子らが放つ矢を敵がキーボードで弾いている間にランスと盾持ちの子が近づき、押し込む。

その間にも隙あらばと敵の背後の糸を上海たちに狙わせるが、なかなかその隙を見せ無い……そこで、一旦敵を退けてから他メンバーと背中合わせに合流し、それぞれに伝える。ア「みんな！よく聞いて！ あいつらは自分の背後についてる糸で私たちの動きを読んで、互いの連携を取ってる！」

レテイ・ルナサ・メルラン・リリカ「……」

!!!!  
「」

リリカ「ふうくん……（・▽・）ニヤニヤ」

ルナサ「なるほどね……」

メルラン「あらあら〜♪」

レティ「つまり、そこを狙えば……!」

ア「そう! 少なくとも、今よりも動きは鈍るはず……」

そう、そして……やることはまだある。

ア「みんな、ちよつとだけその場でじつとして……」

そこで四人に向いた時にこっちに向かって来る奴らの姿が視界の隅に入つて、少し焦つたけれど、すぐさま心を落ち着かせ、軽く集中する。

ア「(大丈夫、そんなに難しくくないし)……」

心の中でそう呟くのとそれを感知して捉えるのはほぼ同時だった。

——これね!

それを見つけると即刻、私の人形たちの刃が自分たちに付けられていた(魔力で出来た)糸を断ち切った。

それは、一瞬発光し、私を含め五人の目に写った。

ルナサ・メルラン・リリカ・レティ「」

……っ!!!  
「」

ア「わかった? 今の私たちについてたのと同じ糸が奴らにもついてるから、それを各自狙って!」

ルナサ「了解!」

リリカ「アイ・アイ・サアーツ!」

メルラン「はあ〜い♪」  
レテイ「オツケー〜！」

各々が自分なりの返答をする中、ついに敵がこの場まで到着した。

レテイが自身を表した機械兵の氷の鉤爪武器に刀で打ち合う。

メルラン・ルナサ・リリカもそれぞれ、強い魔力を纏わせた楽器で敵の楽器を防ぐなり、逆に攻めるなり、同じ音で相殺するなりで対応する。

バイオリンニストの弦が弾き合う、トランペットの音が響き合う、キーボードの音が競い合い、弾幕と時々両者の楽器がぶつかりあう……そこに私も合いの手を入れること数手……

……ついにその時が来た！

私の上海たちが相手の僅かな隙を突き、鏝迫り合いに持ち込んだその瞬間に、レテイたちが相手の背後についた糸を切断した。

レテイ「……今っ！」

プリズムリバー三姉妹「……！！  
……！！」

機械人形「……!?!?……」

そこで、文字通りの頼みの綱を切られたことにより、更なる隙が生じた人形兵たちに私たちの全力の弾幕が直撃する……！！

一同「……合同スペル!! 合作っ!!」

『イリユージュォニスト・オブ・グランギニョル!!!』

私の上海・蓬萊たちがそれぞれ相手の人形兵共と同じくらいの頭身になり、レテイの能

力で武器が氷を纏う事で更に大きさと鋭さを増し、三姉妹が演奏の弾幕で相手の退路を断ちながらその包囲を狭めていきながら近づき、弾幕に意図的に作られている敵への道筋に人形たちが次々と突撃していく……その突撃と戦闘も演奏と連動して行われ……そこへ包囲の為だけに弾幕を展開していた三姉妹が敵に向けて一斉砲火……そして――

レティ「終わったわね……」

リリカ「ふうふうっ……やっとなつたあゝ」

ルナサ「でも、それなりに有意義な時間になったんじゃない？」

メルラン「うん♪楽しかったわね〜！」  
各々が戦闘が終了したことに安堵し、それぞれの感想を漏らす。

その視線の先の、先程まで敵がいた位置には上海たちの滅多斬り及び特攻爆発と、三姉妹の弾幕と、レティのラストスペルによって、塵すらも残っておらず、一見すると爆発に乗じて敵に逃げられたかのようにも見えるが、それは自身に残る確かな手ごたえが完全否定していた――

あとは……

ア「いいえ、まだ後片付けが残ってるわ」

リリカ「えっ!？」

メルラン「何々〜?」

ルナサ「……後片付け?……あっ」

と、ルナサは察したようなような声を上げ、私はそれを補足する。

ア「そう…あの糸を操ってた奴を始末しないと……」

一同（もちろん私とルナサ以外）がああ…と合点がいったような声を上げると、でも…と声を沈める。

リリカ「どうやって…探し出すの？」

レテイ「糸を辿ろうにも、全部叩つ切っちゃったしねえ…」（汗）

レテイが自身の容赦のなさを振り返って若干気まずそうにするのをよそに私が答えを返す。

ア「そんなこともあるのかと……つていうか最初からそのつもりで、糸の伸びていた方向から大体の位置に検討をつけてあるわ」

その言葉に対する私以外の、おお…!! という反応を聞きながら、本当は相手の糸に私の魔法糸を付けてより詳細且つ継続的に位置を知ろうとしたんだけど、そこまですると逆に操られそうだったのと、戦闘に集中力を使っていたから、維持することができないだろうという理由からやめたということを説明し、全員でその地点に向かうことにした。

……

そこにたどり着いた私たちは（たどり着いたと言っても案外近かった）その敵が、何故微動だにしなかったのかを理解した。



普通なら、まあこいつらの場合は作り主から命令されればだが：仲間が倒された時点で逃走を図っても良さそうなものだが、上海の一体を目印としてこの敵の真上に配置してマーキングしたその位置から一ビットたりとも動いていなかった。

また、逃走中であつても上海には自動で追跡することを命令してあつたので無駄ではあるものの、それを知っていて動かないにしても、上海を排除しようとしても良い筈なのにそれも無し……移動中にそのことを一人密かに疑問に思っていたのだけれど……その事は他のメンバーも不審に思っていたらしく、いざ現地に着くと一同の疑問は解消された。

その場に到着するなりそれを見つけると、口々に：そりや動けないわだの、そういうことか……だのと喋っていたので皆も同様の疑問を抱いていたのだと悟る。

そう：その敵は動かなかつたのではなく、動けなかつたのだ……：……というより、端から動くことを想定して造られたわけでは無いと言つたほうが正確かも知れないが……：

その容姿は他の人形に私がつも（今も）持ち歩いているものに似た魔導書を持っており、まさにそこに据え置きと言つた感じで本来は足がある筈の部分はチェスの駒のような形になつていた。

そして、手にしている魔導書は開かれ、絶えずページが風でパラパラと捲られているかのように動いていて、その魔導書自体も使用者の手から僅かに浮いていた。（因みに手は魔

導書の下に添えられていた)

リリカ「さて……それはそうと、そろそろ幕引きにしようか!」

という、リリカの号令とも宣言とも取れる一言で皆が、もちろん私もそれぞれの能力で武装し、臨戦体制を取った……

その時だった……

最初に違和感を感じたのは私だった。

ア「――……っ!? ま、待つて!」

みんな………と言う頃にはもうそれは発動しており、他の皆もその時には異変に気付いたけれど……既に後の祭りだった……

レテイ「――っ!!?」

メルラン「……きやあっ!!?」

ルナサ「くっ………この、……!!」

リリカ「うわあっ………!」

全員の能力発動から二秒程でいきなり全員の体が例の人形のオブジェのような敵の周りに瞬間移動させられ、青く光る魔法糸が複数投げ集まつてできた球体から飛び出てきた糸に全員捕らえられていた。(球体は恐らく転移と同時に出現)

……これはもう、どう考えても………!

リリカ「ちよっ、ちよっど!? これはヤバくない?」

ルナサ「これは誰がどう見てもトラップ……

だよね……」

メルラン「えっ……えくくっ!!なによこれえ

ーっ!!」

レテイ「ま、拙いわね………」

流石にこの事態にはあのメルランでさえ混

乱を禁じ得ず（端から見ると余り慌てているようには見えなかったが）、他の皆は言わずもがなだ。

しかも、真の危機はまだまだここからだった。

レテイ「ちよ、ちよつと…これは、危ない

！避けて！リリカっ!!」

リリカ「……え!? ……って!うそお…!!」

レテイから警告され、気付いたリリカがう

おっ!!危なっ!と言いつつ、レテイからの

攻撃を躲した。

その本人は肩で息をしながら氷で出来た刀を地面から引き抜くのを堪えようとしており、その必死の抵抗虚しく刀を引き抜き、構えなおした。

———どうやら、最悪なことにこの糸に捕まっている者は……

ルナサ「……くっ…まずいつ…避けて!!」

リリカ「そ、そつちもそつちも!!」

メルラン「ご、ごめんっ!! あんまり余裕

ない…!!…かもっ…!!」

レテイ「お、抑えきれない——っ!!!」

……皆、例外なく体を操られるよ  
うだ……

———ご、このままじゃ……同士討ちにさせられてしまう…!!!



る加減の無さと力に引つかかっていると、術者として対抗している機械人形兵の頭部から煙と発熱、機械的な何かがショートしているかのようなスパークが人形の全身から起き始めている。

これは……まるで、限界を振り切つてしまっているかのような……もう、そんなもの何の関係も無いとでも……!!

そこまで考え、嫌な予感が脳裏を過つた時、まるでその答えを肯定するかのよう……目前に現実という形でそれは現れた。

唐突に、敵術者人形の手の上の魔導書上の球体に数字が表示されカウントダウンを始めた……

それを目撃した皆の顔にも一斉に緊張が走る。ルナサ「ま、まさかコイツ……!!」

リリカ「……もしかしなくても自爆する気だよね……コレ……」

メルラン「えっ……嘘でしょ……」

レテイ「……!!」

ア「——っ!!!」

……さつきからどうにか上海たちを奴の所へ向かわせられないかと試してはいるものの、むしろ奴の命令で勝手に同士討ちをさせ無いよう抑えるので精一杯でそれどころでは無いし、少しでも気をそらすと、仲間の体の操縦権を持つていかれてしまいそうだ……

——かつて、夜明けの来ない永夜の異変の時に出会った紅魔館の主をしている吸血鬼の少女、レミリア・スカーレットの言葉

がふと浮かんだ……………

——これが、運命だとも言うの……………？

……………  
……………  
……………  
……………  
……………

---

### 永夜異変時

その日は妙な晩だった。

何故か、夜が明ける時間となっても一向に夜明けが来る気配がなかった。

この現象に興味を引かれた私はすぐさま原因究明に乗り出した。

といつても、異変の首謀者と事を構えようというつもりは別に無く（それも面白そうだったが）、ただの興味本位の探索だ。

そのいつもよりも少し永い、後に永夜異変と名付けられることになる異変の探索の道中、当時よりも前々回の異変（前回は春節異変）の黒幕であり、血のように赤い館の主……………

「永遠に紅い幼き月」こと、レミリア・スカ  
ーレットと遭遇した。

レ「こんばんは。良い夜だな……………人形師さん？」  
ア「……………!!」

唐突に背後から話かけられたので、驚きながらもすぐさま振り返り、上海たちを前方に配置して態勢を整える。

レ「おやおや、そんなに怖がることないだろう？……フツ……」

そこで声の主を見止めると、そこには斯の紅霧異変の黒幕、レミア・スカーレットとその側に控える「完全に蕭洒な従者」こと、十六夜咲夜の二名の姿が目映る。

……だからといって、別に無警戒で良い相手でも無いし、異変の犯人よりも警戒すべきかも知れないが、とりあえず上海たちの武装を解除した上で挨拶を返す。

ア「いや、全く無警戒でいるのもそれはそれで失礼かなと思つて……なんとっても今宵の月とは比べ物にならない程『紅い月』がお相手ですもの」

レ「……アハハハハッ……それもそうだな……しかしそうか、畏敬から来るものだったか……それはこちらこそ失礼した……それに免じて、振り返った後に初めて気付いたように見えたのは気のせいだったということにしておいてあげるわ」

ア「……というか、さっきの急な登場はそこに控えてるメイドの仕業でしょう？ ご主人ならちゃんと躡ておいてくださらない？」

レ「あらあらそれはとんだご挨拶ね。うちの咲夜は別に躡なくとも完璧であることで有名だと思うのだけれど」

ア「ええそうね。……ところで、従者に時を止めさせてまでサプライズチックな登場で近づいてきた理由でもお聞かせ願おうかしら？」

まあ脅威とは言え、面と向かっていればそこまで気を張るような相手でもないのだけれど

、探索も再開したいので会話もそこそこ用件を聞くと……………

レ「別に？　ただ面白そうな夜の散策中に他にも面白そうな運命が転がってるなと思つてそつちに足を向けてみただけ」

まるでピクニツク気分ね……………。

ま、こつちも似たようなものだけれど……………と考えているとふとそれはどんなものなのか気になつたので聞いてみた。

ア「へえくく、因みにどんなものだったかとか聞いて良い？」

レ「ああ……………これはいつになるのかはわからないんだけど、あなたこの先……………崖っぷち？　というか、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされることになるわよ」

……………それはとても軽い調子で、まるでトーストに塗るバターやジャムはそのこの棚だからとでも言うが如しだった。

ア「…………………………（えつ……………それ……………そんなさらつと……………——つていうかこの幻想でそんなことある？）」

レ「ふふつ……………固まつてる固まつてるっ！　これは果たして恐怖からかしら？　それとも興味？　絶望？　緊張？　疑心？……………もしかしたら案外興奮とか喜悦だったりして……………まあ、いずれにしても受け止め切れて無いみたいね」  
それはまあ……………そんな事をいきなり告げられればさもありなんと云つた感じだけれど、もしもそれが決まつた未来だとすると……………考えられるのは……………

レ「あ、一つ言つておくと博霊の巫女は関係





想のほとんどは後々で思い出した)  
それも運命というその言葉くらいで他の言葉  
はぼんやりとしている。

そこで再び現実に戻され、それが幼い頃  
に体験した出来事と重なる……その運命  
という言葉と共に……

……  
あれは、私がまだ魔法使いではなく、魔法  
使いを目指す、一人の少女だった時……  
魔法の森へ素材を探しに入ろうとして……

……  
？「その貴女。その森に入っちゃダメよー  
ー……？危ないからあ……」

なんとも気の抜けた、緊張感のない声でそ  
の女性（多分、成人している）は、私の頭上  
の結構な上空を飛びながら警告してきた。

——場面は変わり、当時の実力では倒しき  
れない魔物か妖怪の類に襲われ、なけなしの  
魔力も手段も尽き、絶対絶命の窮地に陥って  
いた過去が蘇る。

——その正体不明の妖魔、その妖魔に今に  
も襲い掛かられる瞬間と、目の前の敵の機械  
人形兵とその掌にある本の紙上のカウントダ  
ウンが重なる。

——「……なら、私と約束しなさい。ムリ  
そうだと感じたらすぐに逃げる事……その為  
の余力は残しておくこと……」

……紅白の巫女装束を身に纏った彼女の言葉。

——「……その人のこと頼めないかな？」

「しよーがない……分かったわ。任せなさい」

……チルノの言葉……そして、レティの姿が  
視界に入る。

……なるほどね……これは運命………感じ  
るわ……

——でも、約束を果たす望みは絶対に捨て  
ないっ!!!

あの時の私とは違うということ、約束を守  
り切って証明する!!

ア「まさか、あの時の忠告を今、果たすこと  
になるとはね……でも、感謝するわっ!!!」

声高にそう叫ぶや否や、操られ、互いに同  
士討ちさせられそうになっている私の上海た  
ちを遥か上空まで飛ばし、そのまま上海たち  
で同士討ちさせた。

………ただし、大爆発を起こす程に激しく、  
だが………

ア「犠牲……『スーサイド……パクト』！」

あの子たちには上空に飛ばした時に既に自  
爆の指令を出してあり、あとは敵に操縦権を  
明け渡した、あの子らが半自動なこともあり  
、敵は当初の挙動を上海たちの同士討ちせざ  
るを得ず、結果………凄まじい爆発と爆煙と  
爆炎が空に巻き起こり、オレンジの巨大な光  
球を作った。

そしてその間にすぐさま仲間の抵抗力に自身  
の操作を上乘せして主導権の奪還を図るが……  
………やはり、相手の出力で失敗に終わる。

ア「やつぱり………駄目?………」

くっ……………」

失敗したのだろうか、無駄だったのだろうか  
か……………なら、何を間違えたのだろうか……  
あれが駄目だったのだろうかとか、あの場面  
は仕方なかったのだろうか……など既に起こ  
った出来事や状況がまるで走馬灯のように流  
れ……………時がひどくゆっくりに感じる……………  
皆が、私が、己の意思に反して動き、味方へ  
それぞれの刃を突き付ける様に絶望する。

ルナサがレテイの首筋にヴァイオリンの弦を  
あてがい、  
リリカはキーボードをメルランの頭上へ振り  
かぶり、

そのメルランはトランプットをルナサへと向  
け、

レテイがリリカに氷の槍を突き付け……………  
私は人形以外での攻撃を他の全員に強いられ  
そうになるなかで、その中心にいる奴の掌の  
魔導書とその中心の球体のカウントダウンが  
一から零に変わる瞬間……………

---

何故か、その瞬間に、あの時助  
けてくれた彼女の姿が走馬灯の最後の画の  
ように頭の中に浮かんだ。  
想像の中の彼女が空から飛来し、妖魔の獣を  
霊滅、調伏しながら、言う。

—「ほら、言わんこつちや無い……………でも、ま

あ……………  
……………やるじゃん』

チ『よく、持ち堪えたね  
その自身の回想とは違う声が聞こえた次の瞬間には現実に戻され、目の前にあつた光景は先程まで想起していたものとまるで：瓜二つで……………

——上から飛来してきたチルノが、飛んで来たその勢いそのままに敵の機械人形兵を真上から打ち砕き……………木っ端微塵にし……………その残骸の一つさえ、逃さないとはかりに、全てを氷漬けにして、見蕩れる程に綺麗な氷塊の中に閉じ込める。  
……………まるで、あの頃の焼き直しのようだった。

く異界某所く

ただひたすら暗い空間にポツンとその持ち主へと映像を届け続ける鏡だけが、唯一の光源であるこの部屋で、飛<sup>フレイワ</sup>王<sup>イワン</sup>リードと呼ばれるかの人物は一人で座るにはやや横に長いソファのようなものに腰掛け、顔を自身の左手に、また左の肘はひじ掛けに預け、鏡が映す映像を眺めていた……………

その映像の内容は、自身の傀儡の兵たちがその攻撃対象である、とある少女たちとの戦闘の記録で、対象の少女らの特徴の一部……………ある者は弦<sup>ヴァイオリン</sup>楽器、またある者は管<sup>トランペット</sup>楽器、他にも鍵盤に帽子（ターバン）などを身に付けた無骨な人形兵が少女らと戦闘を繰り広げてい

る様子が写し出されている。

……………やがて場面が変わり、自身の最後の兵  
(無論、映像の中に於いて最後という意味)

に少女らが窮地に追いやられている様が映されても、その主は喜びや、悦びを表す様子など微塵も無く、むしろ少し不服そうな雰囲気すら滲ませながら、依然先程と変わらぬ様子で、鏡の映像を見つめていた。

——そこに、もう誰の目からみても少女らの絶体絶命と思われたそこに、突如第三者の介入があり、いともたやすく自身の最後の兵が破壊され、映像が砂嵐に変わる。

——その者は、その後しばらくそれを眺めていたかと思うと、不意に、不敵な笑みをその顔に浮かべた——



## 第十三話 氷争（白楼） 完結

アリス side

あの後……………真上からの垂直急降下で機械人形兵に突撃して、チルノが人形兵を粉微塵にした後、そいつに操られそうになっていたその場の全員が敵の魔の手から自由を得た。今は皆、各々……………安堵から座り込んだり、大きくため息を吐いたり、脱力したりしている。……………そして、敵が派手に爆散したその中心で、水色髪に白装束（白地に青のラインが襟に入って白地の所には氷の結晶の模様があしらわれている）の彼女が特にこともなげに立っている……………すると、それから程無くして彼女の仲間である三人が姿を現す。

……………右から橙、藍、大妖精の順に降り立つ。それは、つい数時間程前に会い、そして別れたメンバーに違いなかった……………そこで私のほうから彼女らに話かける。

（彼女らの方でも何やら、どうしたチルノ？

や次の目的地について話していたのでその合間を見計らってだが）

ア「ねえ、ここに戻って来たってことはもう一区切りついた感じかしら？」

その声にチルノは頷き、答える。

チ「うん……………そうだね……………まだ完全に終わっては無いけど……………」



チルノside

あたいがアリスの問いに返事をする、そう、良かったわね……と、それ以上はもう何も聞いて来なかった……でも、安心したような何か吹っ切れたような響きがその言葉の中に含まれているように感じた。

それからは、何故いるのかわからない、プリズムリバー三姉妹に藍が事情を聞き、こちらからも事情を話して、これからもアリスたちと行動を共にするらしいので、次のあたいたちの進路上にアリスの家があるのでそこで、アリス、レテイ、ルナサ、メルラン、リリカの五名と別れることになった

——約一時間程前——

く白玉楼く

幽々子とのおよそ数十分程の打ち合い（交戦に入ってから）の後、ふっ飛ばされた拍子にみんなが集合して話し合ってる様子が反転する視界の中、映ったので合流したかったが相手がそれをさせてくれない。

チ「くっ……何か作戦があるっぽいのに……うあッ……！」

皆に気を取られていると、いつの間にか間

合いを詰められていて、そこから鋭い居合い抜きが放たれる。

それをなんとか躲して、距離を取ると同時に、氷で弓を作り反撃する。

弓の方の氷を微妙に調節し、弓を張り、つがえた矢を放つ。

相手もそれに反応し、発射された矢を弾く。

……こんな攻防がさつきからずっと繰り返されているので、こつちから皆の所に行けないし、皆の方もあたいに近づけない。さて、どうしたもんか………

藍 side

藍「――では皆、手筈通りに頼む――」

橙「はい！了解しましたっ！」

大「は、はいっ！ ……よろしくお願ひします！ う、上手く出来るかな………」

妖「それでは皆さん、……いきますよっ！」

その号令と共に全員が一斉に飛び上がり

……作戦の幕が上がった。

最初に妖夢が先陣を切る………ついで、私が………と、行こうとしたが……幽々子様に行く手を遮られる。

妖「………っ!!」

藍「やはり、そう簡単ではないか………」

チ「アンタの相手はこつちだ！」

だが、追い付いたチルノが横合いから割つ

て入ったことで状況が元に戻る。

まさか、目指していた目標それ自体に止められそうになるとはな……………

実質的には先んじて制されかけたと言うことになろう……………だが……………

藍「今、妖夢を見逃したのは……………どこかためらいを感じさせるな……………」

これは好機！

…その言葉の浮かぶ前にはもう全員に指示を飛ばし（合図は事前に決め手おいた）、自身も白玉楼の桜舞う蒼穹へと飛びたった。

…これも開幕の打ち合わせ通りにスペルを豪快に空に散らす……………

藍

―「式弾！」「ユーニラタルコンタクト！」「―

幽々子 s i d e

何故……………？ どうして……………??

どうして…………… 私は……………守ると……………心に誓った……………あの子と剣を交えているの？……………

どうして私は……………それを今、当然かのように振る舞っているの……………？……………わからない……………わからない……………

……………

ねえ、どうして……？

妖忌……

……  
……  
……

. . . .

そこで……

私の意識が……戦わされているものとは別に、過去の……遠い記憶へも飛んでゆくのを感じた。

今でも、はつきりと思い出せる……あの人が私の前から……何の前触れも無く降る時雨のように、または、ふと降りやむ長雨ながさめのよう……姿を消した、あの日の事を……

——幽々子様……

これからもどうか妖夢の事を……私の孫娘を使つてやつて下さいますよう……宜しくお願い致します……あやつは……あの子はあなた様にお仕えする事をこそ至上としますゆえ……

——でも、私、亡霊こんなだし……仕えて……

……貰うことなんて、ほとんど無いと思うのだけど……このお庭の手入れがせいぜいだと

思うのだけれど……………

——それで良いのです……………掃除に洗濯、炊事、庭木の手入れ……………なんでも構いません……………こき使つてやつて下さい……………主らしく堂々としていて構いません……………でも出来れば、家族に接するように母親のよう、……………姉のように、時には妹や娘のよう……………そして……………友のように……………親しく接して頂ければ、それ以上の事はありません……………

——それはもちろんっ！……………この間からもね……………あの子、まだあんなに小さいのに、初めて私に料理を作ってくれたのよ!?! しかも、それがすごく美味しくて! だからつついっつい食べ過ぎちゃって……………! 凄いでしょっ!?! 妖夢には悪いけれど……………これからはご飯のことで苦労かけちゃうかも……………

——……………ほっほっほっ……………それは、それは……………結構でございますなあ……………

——それでね……………私一人で食べるのも勿体ないから、一緒に食べましょう!……………つて言っただけ……………あの子、自分はもう味見で食べたからつて言つて聞かなくて……………主人より先に従者が食べるなんてあり得ないし、それは、数に入れなくて良いつて言っただけ……………

——ああ……それは、妖夢も一丁前に主  
に対して遠慮しているんでしょうなあ……  
まったく、従者が主人の誘いを断り、心配を  
かけるとは……あやつもまだまだ半人前です  
な……

——あら、厳しい……あんまり私の妖夢  
をいじめないでね？

——それほどまでに思っていただけで  
……妖夢も従者冥利に尽きることでしよう。

——そもそも、私の我が儘が元だし……  
……

——……しかし、そうですか……それほ  
どまで考えておられますか……それならもう  
何の心配も要りませぬ……

——ねえ、勘違いだったら恥ずかしいの  
だけど……さつきから、これが今生の別れの  
ように感じるのは……考え過ぎかしら……？  
それに……その、言い回しも……

そう私が言った時、あなたは……嬉しいよ  
うな……悲しむような……寂しような……  
それでも、何か意を決した……そんな何と  
も言えない表情の後で……優しく、儚く……  
しかし、こちらを安心させようとするかの  
ような脆い笑顔と共に、響く……

——ええ、それはまさしく、幽々子様の  
取り越し苦労……要らぬ心配でございまし  
たな……はっはっはっ……ははは……！

——……？ ……も、もう！ 笑うなんて  
ひどいわくつ……ふふっ……

結局その時感じた前兆のような予感のこと  
は、妖忌が思いその他上げた笑い声と、それ  
に対してくすぐったいくらいの羞恥心を覚え  
た事な搔き消され、霧消した……

——………っ!? —— どうして？

—— どうして………？

—— どうして ——

—— どうして ——

—— どうして —— ……。

—— どうして、どうしてどうしてどうし  
てどうしてどうしてどうしてどうしてどうし  
てどうしてどうして、どうしてどうしてどう  
してどうしてどうしてどうしてどうしてどう  
して、何で何で何で、、？ ——

—— 今日、私の前でちつとも弱音を吐か  
なかったあの子が泣き崩れているのを目の当  
たりにした……

私はそれを……悪いと思いつつも、襖の隙間  
から様子を伺った。

そこで妖夢……私の可愛い従者は私に隠れ  
てひっそりと、静かに、しかしさめざめと泣

いていた……………

——まだ小さかった彼女は……………ここえで……

——何処へ行ったの……………？ ……つ！

……………行つてしまわれたのですか……………？

——……………お爺様……………と、私に心配かけま  
いと、私の居た居間からはかなり離れている  
というのに、必死に声を押し殺しながら泣い  
ていた……………

——私は偶然その場に居合わせた風を装  
い、妖夢に、いつもの二倍近くの家事（主<sup>おも</sup>に  
食事の用意）を言い渡しておき……………

（言いつける間、平静を保とうと健気に頑張  
る顔から徐々にゲンナリとした顔になつてい  
った）自分は少し散策に出掛けるつもりでも言  
いつ……………今となつては何処にいるかもわから  
ない魂魄妖忌の搜索に乗り出した……………

——……………そして、今に至る……………

そして……………未だに発見には至っていない……………  
妖夢には本当の目的を告げずに出てきたとは  
いえ……………このままじゃ合わせる顔が無いわ……………

——……………本当に……………何処に行つてしまつた  
の？妖忌……………あなたは妖夢にとつてたつた一  
人の家族でしょう？ それでなくとも、妖夢  
はあなたのことが大切だし、慕つてもいるの  
よ……………？



——ねえどうして？ 一体何があつたの？ ……私はどうすれば良いの？

その時、妖忌失踪の前日に彼から言われた事が頭に浮かぶ——

——家族として、接してやって下さい……

——どういうこと？ まさか、家族はもう私がいるから自分は必要無いってこと？

そんなことあるわけないっ!!

私は妖夢に確かにそのつもりはあるけれど、あなたもその一員なのに……!

……私から見ても、あなたは家族なのに……

——でも、どれだけ探しても、心の中で叫んでも、彼は見つからず、私はとうとう、探すことを諦め……代わりにある決意を固める。

あの子の事は私が守る……どんな困難に見舞われようと、波乱の逆風に吹かれようと……もちろん私にも至らない所はあるけれど、そこはあの子自身の手も借りることになるかもしれないけれど……

それでも、借りなければならぬ所は少しずつ減らして、あの子（妖夢）が頑張らなくても私自身を……もちろんあの子自身も守り通せるくらいに……!

——そう……あの日……結局妖忌を見つけれなかった時にそう誓った筈……

——でも、今の私は妖夢や妖夢の味方をしてきている人たちに刃を向けている。

——どうして？体だけじゃなくて意識も……というかそもそも……意識が支配されているから体も……？  
ああ……とつても、眠くて……気持ちよくなって……なんだ……か……どうでも、良くなつ……  
……

藍「……諦めるなあつつ!!」

藍 s i d e

状況は……正直、あまりよろしくない……  
なんとか必死に喰らい付き、それでやつと……  
という状態だ。

だが、体捌きや、動作、移動速度こそ見切れず、目で追うこともままならないが……その代わり、行動パターンや、出現位置（これはそう見えているだけだが）の予測、幾つかの技の種類といったものがだんだんと掴めて来ていた。

それらは相手を目で追うことを敢えて止め、  
おおよそ私の得意分野である、分析や、計算、  
演算に注力した結果であると言えた。

なので、今一度全体に喝を入れ、統率が利きやすいよう引き締めた上でそれぞれに適した動きを指示する。

藍「(そうだ！ 諦めるな！まだ終わっていない！ 次は恐らく、チルノの攻撃を幽々子様が……) 大妖精っ!! 橙とともに今、

妖夢のいる座標にとんでくれ！」

大「はいっ！」

私の指示を受けて、大妖精が橙を連れ、妖夢のいる場へと座標移動する。

これで位置的には、チルノと幽々子様、大妖精と妖夢と橙、私の三方に別れる。

そこで、私は何処へとも無く叫ぶ。

藍「チルノオーっ！！私たちに構わず、全員で幽々子様を囲むように立ち回れっ！信じろっ！！」

藍「大妖精っ！次は妖夢を連れ弾幕を展開しながら上へ飛行してくれ！」

大「……！はいっ！」

そこで私も弾幕を展開しながら動き、恐らくチルノと幽々子様がいるだろう範囲を橙と二人で囲む！

……今までの戦闘で、判ったのは幽々子様は囲まれるのを極端に嫌がるということだ。

それは勿論、囲まれれば、後ろをとられもするし、異なる方向から攻撃が飛んで来るので嫌わない者のほうが少ないだろうが……

しかし、あの方は少しでも自身の前後、または左右や上下を取られると……すぐにでは無いし、また絶対でも無いが、抜けだそうとする傾向があったので、大妖精には予め妖夢と上に行つて貰うよう指示し、先回りさせた。

その上で、大妖精らよりも速く、自らも移動し、橙と挟み撃ちの位置に付き（この時、若干下の方を位置取る）、幽々子様が上に行くように誘導する。

すると案の定、どこかのタイミングでチル

ノが自身を含めた私たち三人で囲めたのか、それとも、幽々子様が根負けしたのかは、(二人の戦闘が早すぎて)わからないが、幽々子様が上に一瞬で現れた。

……前もって打ち合わせていた作戦通りの為、即座にトップスピードで妖夢が上から斬りかかる!

藍「(よし、これであと数刻で紫様のもとへも式のカラスが辿り着くは……)」

——ヒュオオン……

藍「え……?」

いつも紫様のお通りになるあのスキマの形容しがたい音がしたのでそちらを振り向くと紫様が予想よりも十秒程も早くここへ到着されたので目を剥いていると……

紫「……どこ? 幽々子を……私の親友を苦しめる不屈き千万極まる下衆野郎はどこかしら……? ねえ、藍?」

藍「………!!!」

どうやら、頭に血が上り過ぎ、周りが良く見えてらっしゃらない様子だったので、教えさせていただいたその時に、そこに再び目を戻すと、妖夢が幽々子様を白楼剣で一閃した所だった……

チルノside

不意に藍の叫びがあたいの耳に届いた。

藍や大ちゃんたちに構わず、あたいを含めた全員で幽々子を囲めと言う……

今まで、みんなを気にかけてながら……時に背に庇いながら戦っていたそれをやめろと言う……

そ、そんな……そんなことっ……!

チ「あ、あたいは……っ!」

でも、このままでは……いずれ……

こんなの……もう、一つしかないじゃないか!

あたいは、幽々子とあたいの方向に弾幕を

展開している二人を背にする形から、分身に

幽々子を任せると同時にその隙に幽々子の頭

上を一回転で飛び越え、背後を取ろうと動く。

……が幽々子が速攻で分身のあたいを斬り、

背後のあたい目掛けて刀を振るう……!

しかも着地刈り……(ここ空中だぞ!?)

チ「ぐっ……!!」

すぐさま氷で盾を作って防ぎ、その盾にそ

のまま矢を生やし、盾を弓として弦を引く……!

余りに急な為、精製に気を回す余裕も無く、

弓も盾も表面が凸凹として無骨で……と、

幽々子が時を止め、突然上に飛行する。

ま、拙いっ! 藍からの指示で上には大ぢや

んと妖夢が……!

チ「……つさせるかあ!!」

弓にしていた盾の両端に足を掛け、既に引

いていた弦を更に引き伸ばす……!

そして、最大まで引いたところで手を離れた。

戻ろうとする力を最大限まで高められた弦が

一瞬で収縮し、そのまま氷の盾に消える……

するとその弦に掛けられていた矢は慣性の法

則に従い、盾に出来た穴を滑走路として勢い

よく標的に特攻していった。

更には空気の摩擦を吸収し、逆に推進力にす

る式まで矢に組み込まれている。

つまり、空気抵抗を受ける↓吸収↓推進力

に変換↓更に空気抵抗を受ける↓吸収↓……  
これにより、的に当たるか障害物に当たるま  
で無限に加速し続ける……  
ケド、その前に破壊されたら何の意味も無い  
けどね……

幽々子に放った矢が撃たれた本人の手で切  
り砕かれた。

楼観剣の刃が氷の矢を矢尻から水平に両断す  
る——だが！

チ「いつけええええーっ！っ！」

めげること無く、すかさず二発目を幽々子  
に見舞う……その先で……

妖「……ゆゆこさまあーっ！っ！」

時が止まった世界で、動ける筈が無い妖夢  
が、幽々子に上から迫る！

幽々子はあたいの氷の矢と、妖夢の予想外  
の追撃との二択の板挟みに遭い……結果、

あたいの氷の矢を取り、妖夢から白楼剣の斬  
撃をまともに食らった——

妖「……申し訳ありませんっ!!……でも  
、これで……!!」

幽々子 side

——そう……

妖夢が遂に……私に一太刀浴びせたのね……

——そして、これは白楼剣ね……迷いを断  
ち切る刀の……

——これはもう、何の心配も要ら無いつて  
ことかしら……？

——幽々子様……主として、妖夢を試せると判断された時、または窮地に陥りあなた様にまでそれが飛び火しかねない場合は……遠慮は要りませぬぞ……

——そう……わかりました。あの子を……信じるわ！

藍 s i d e

藍「……………これはっ！ どうしてだ!? 一体どうなっている!!」

紫「……………境界が、見えない……………」

妖夢が幽々子様を白楼剣で切り、影の意識と幽々子様の意識に差が生まれ、その境界を紫様が広げていく……………筈だったのに!!

むしろ、先程よりも強く結びついているように見える……………っ!! まさか……………!

藍「逆だったのか……………!? 迷いがあるから、憑かれているのでは無く……………迷っているから……………? いや……………」

そうでは無い……………それなら、戦いを放棄することとて、決断であり、迷いを断つことになるはず……………ならば、なぜ……………

——っ!!

そこまで、考えて……………思い付いて当然とも思える自明の理に思考が行き当たる……………

藍「そんな……………幽々子様っ!」

紫「幽々子……………」

迂闊だった!! ……迷いを断ことで戦意  
が失われるなら、その逆もあり得る!

しかも、迷いがあつたことで辛うじて残って  
いたなけなしの意識差をもその迷い諸共、消  
してしまった……………!

その程度のアツて無い様な差では紫様の境  
界操作で引き剥がせなかつたことを差し引い  
ても……………これは私の失態<sup>ミス</sup>だつ!!

しくじつた! なんとお詫びすれば……………!

そもそも迷いの源がこちらとの交戦の実行に  
あると先入観を持つこと自体……………

いや、待て!! 何をそんな後で幾らでも出  
来るような後悔に浸っている!

考えろ! せめて最悪の事態を回避出来るよ  
う努めろ! いやそれも違う! 努めるでは  
無くなんとしても回避するのだ!!

なんとしても……………!!

その時、必死に頭を回転させんとする私の  
目の前で……………——悪夢が、再開した。

妖夢 s i d e

……………どこか、なんと無くわかつていたから  
か、それとも薄々予感がしていたからなのか  
……………私の心は酷く冷静だった。

本当に、自分でも非道いと思う。

でも、そうならないで欲しいと願っていたけ  
れど、この場が……………幽々子様との戦いの場が、



先程、この白楼剣で一太刀入れた後も続くの  
では無いか……まだ終わらないのでは……？  
と心のどこかで疑っていた。

でも、もうそれに縋るよりほかになかった。  
縋って、その作戦に己の全てを懸けて臨むよ  
りほかに……

だが、当たって欲しくない嫌な想像は不本意  
ながら的中し、皮肉にも今の私の心に静寂を  
齎<sup>もたら</sup>せてくれている。

……そして、目の前を見遣れば先程よりも姿  
の薄くなってしまうわれた、変わり果てたお姿  
の幽々子様が今も尚、楼観剣をこちらへと向  
けておられるのが目に入る。(その変わり黒  
い影も薄くなり、薄っすらと幽々子様のお姿  
が見えている)

チ「……ウツウウウ……よう……む……！気  
をつ……ガハっつ!!……ゴホツツ……

ハアっ……ハ、付けろっ！死ぬ……なあっ……！」  
大「……っ!!っチルノちゃんっつ!!」

妖「!!」

自身もギリギリの瀬戸際で辛い状態にも関  
わらず、こちらを心配して声をかけてくれる  
チルノ……その、無理を押しした行動を心配  
する大妖精。

……今、チルノは幽々子様の作り出したあの  
黒い影が素材となっている黒い楔に貫かれ、  
地面に描かれ浮かび上がっている謎の陣と、  
すり鉢状の薄黒い結界のようなものの核にさ  
れ、縛られている。

——事態は唐突で、まさに急転直下の一言だ  
った——

私が白楼剣で幽々子様に一闪し、その後すぐに動きが落ち着かれるというこちらの思惑に反し、急にこれ迄の動きを大きく上回り、恐らくその一瞬に作り出したのであろう黒い影で出来た楔のような得物をチルノの体の中心部（多分鳩尾）に投げて突き刺し、そのまま空中に固定してしまった。

更にそこから、地面に陣が展開し、チルノの止められている座標を頂点に地面の円形の陣へ向けてすり鉢状に薄く黒い膜のような結界が張られ（正確にはチルノはうつ伏せに下から上に貫かれており、その楔の先端がすり鉢の結界の頂点になっている）、それは中にいる者の能力を封じる効果がある。

そして、当然のことながら外からの能力による干渉も無効化される。

紫様（いつの間にかいらしていた）と藍さんと大妖精、橙が結界への進入を試みて、空を飛ぶことすら叶わなくなっていた事と、紫様と藍さんが結界の外から能力を使おうとされた時に、結界の縁に能力が届いた瞬間…霧散したので間違い無い。

それを見て今度は陣の内に入って加勢しようとしたが、あくまで怪力や身体能力が高いただけなので、幽々子様に簡単に手や足を斬られるなどしてあしらわれ、陣の外への撤退を余儀なくされた………そして今、私だけが幽々子様と対峙してここにいる……

くくく遠い記憶くくく

妖「…っ！……………あつ……………!!」

自身の手ずから木刀が投げ出され、自らは無様に地面に転がる……………

それに遅れるようにして直後に木刀も地を転がり、コロカランと音を立てる。

幽「……………っ!?!?あらあら……………妖夢…大丈夫!？」

お爺様との打ち合い（稽古）で遅れをとつた私に、幽々子様が心配してくださって声を掛けられた……………のでは無い。

その心配をお掛けした方に今しがた打ち取られたのである。

忌「これっ！ 妖夢！ お守りするべき主に遅れを取るとは何事かっ！」

妖「も、申し訳ありませんっ！ おじ……………師匠！」

幽「ま、まあまあ…妖忌…」

しかし、だからといって容赦無く師匠…もといお爺様からの檄が飛ぶけれど…………

そして、幽々子様がそんな祖父を宥める。

幽々子様との試合↓私が一本取られ↓祖父に叱られ↓幽々子様が祖父を宥める…………ここま

でが今日この日の一連の流れだった。何故か今日いつもの修行や稽古では無く

ずつとこの繰り返しだった。

忌「全く……………剣術指南役が指南差し上げるべきお方に剣術で負けるとは……………これでは先が思いやられる……………ふう…もうお前に教えるべきことは全て教えたというのに、これでは……………」

妖「……………?」

忌「己の体、心、魂にこれまで教えたことを叩きこめ！妖夢！今までと同じだが、ここから先は己の努力、精進次第だっ！……さあっ……もう一本！」

妖「はいっ師匠！」

幽「あらあら……ふふっ」

忌「幽々子様もどうか、もう暫くお付き合い下さい……」

幽「私は別に構わないのだけど……そろそろ休憩にしない？早朝からずっと妖夢も疲れしているでしょうし……あなただっ……と立ちっぱなしで妖夢を見ているじゃない？」

忌「いえ、お気遣い痛み入りますが……それには及びません……あなた様さえ良ければ……」

幽「あ、やっぱりちよつと私疲れちゃったかも……」

忌「……幽々子様」

幽「もう、わかったわよ……じゃあ間を取ってあと五本やったらでお茶にしましょう？それで良いでしょう？それで丁度お昼前くらいだし……」

妖「では、その間に私が昼餉のご用意を……」

幽「……だから、（汗）ちゃんと休んで……そうだわ！今日は人里に何か食べに行きましよう！それなら用意しなくて良いし、気分転換にもなるでしょ？」

妖「し、しかし……」

幽々子様のそのご提案に私が遠慮がちに躊躇っている……

忌「……妖夢。主のご意向を汲むのも従者の務めの内……ここはご厚意に甘えさせていた

だくぞ……」

妖「……！わかりました！ありがとうございます！  
ます！」

忌「礼なら、私では無く幽々子様にな……」

妖「はい！ありがとうございます！幽々子様  
！」

忌「雨を斬れる様になるには三十年……空気を  
斬れる様になるには五十年……そして、  
時を斬れる様になるには二百年は掛かる……  
か……」

妖「？」

忌「……では、準備するか……」

妖「……！はい！」

その翌日、私の祖父、魂魄妖忌が白玉楼か  
ら姿を消した。

…その日を境に幽々子様は異様に私に言付け  
たり手合わせを願ったり、ご自身も良く出掛  
けられるようになられた。

私に気を使わせないように振る舞っては  
いられない、明らかに私に心配かけまいとし  
ての行動だろう……そして、

剣術の修行に於いても手合わせの際に一切手  
心を加えられ無くなられた。

いや、そんなことは良い……お爺様も私の余  
りの不甲斐の無い体たらくに見限りをつけら  
れたのだろう……必死に喰らい付いていたつ  
もりだったけど……ただ、つもりになってい  
ただけなのだろう……（失踪されたと分か  
ったその時にはみつともなく啜り泣いたもの  
だが）その稽古の最中いつも、私を試すかの

ような、私の成長を待つておられるような……  
そんな眼差しが……印象的で……

~~~~~  
そして、今もその時の視線が私を見据えて  
いる……

己の全てが遅かった。

言い訳にしかならないが、不意を付かれた分  
だけ行動が一拍遅れ、全てを終えられた後、  
まんまと距離を取られた……

私は静かに自分の傍の地面に刺さった、目  
前の楼観剣に瓜二つな……それこそ、柄にあし  
らわれた桜の意匠までも似せられた氷剣に手  
をかけ、引き抜く……

チルノが空に縫い止められる直前に、せめて  
これだけとは私の傍の地面に投げて刺し、渡  
してくれたものだ。

楔から逃れられ無いことが分かったからだろ  
う……この氷剣には彼女の全力が込められて  
いた。

手に取っただけでわかる……この一戦にどれ  
だけの思いを掛けてくれたのか……

まず、刀の重さが普段の楼観剣を握っている  
かのような手応えで、刀の柄から鍔、鎧、反  
り、峰、果ては切っ先までもほぼ完全に再現  
されていた……（おまけに、氷剣であるにも  
関わらず、触った時の温度まで……少し朝の  
冷気に晒された時の楼観剣程度でしかなかつ  
た）でも、そこまでが限界だったみたいで、  
凄く楼観剣に近く似せてあるけれど……

やっぱり何処か違う……でもそれは、そうだ  
ろう……むしろ、ただ剣を交えただけで良く

もここまで似せて、あの一瞬で作り上げたものだ……感心を越えて軽く戦慄すら覚える……だが、そこは何処まで私が調整して、この刀を使い熟して立ち回れるかだ。

……正直に言う、平気なわけでは全くない。

組み立てて貰った作戦を活かし切れず、剩え状況を悪化させ、皆の努力を無駄にし、窮地に陥っており、当然、幽々子様もまだお救い出来ていない……

最早、余りの申し訳無さから動揺が一周回つて、完全に振り切っているが故に冷静なだけ。例えるなら、何処も彼処も痛いのが為に逆に何処が痛いかわからないようなものか……

頭を抱えている藍さん、泣きじやくる大妖精、不安げにことの成り行きを見守る橙、一見、態度振る舞いだけは冷静な紫様、瀕死に追い込まれたチルノ……そして、目の前の幽々子様……

だが、今は私と幽々子様との一戦に懸けるチルノを思いを受け取った、藍さんも、橙も、大妖精も、紫様も皆が不安と期待を胸に見守ってくれて

いる……だから、私も……

皆の期待に応えたい……いや！ 応える！！

いつもの試合の掛け声の為に深く息を吸い

……

妖「それでは……いざ尋常に……」

その時点で勝手知ったるとばかりに刀を構え直された。

妖「始めっ!!」

チルノ side

くっ!! まさか、こんな……こんなはずじゃ……!!

自身の体のほぼ真ん中を貫く楔に手を掛け、引き抜こうと悪足掻きしながら、ここまでの経緯を思い返していた。

藍や妖夢達の考えに便乗して行動したまでは良かった……いや、良かった筈だ。

でも、想定外のことが起こったんだっ!

けど、今はそんなことは問題じゃない……

問題は……あたいが能力を封じられ、皆までこの陣の内側では、能力ちからが使えないと言う事!

この陣による結界はあたいに刺さったこの楔の先端から展開している。

……幽々子が妖夢に横一闪にされた後、意識が戻って来るかという思いと裏腹に何故か突っ込んで来る幽々子に驚かされ、咄嗟に上に逃げたけれど、その直後にこの楔が飛んで来たので躲せなかった……ならばせめてと、あたいが幽々子と戦った感触から出来る範囲で楼観剣に似せた刀を氷で作り、妖夢のいる地面に投げて寄越した……

本当に、紙一重だった。刀を作って投げ寄越す瞬間、時を止めても無いのに世界がゆつくりに見えた。

その僅かな瞬間に全てを込めるしかなかった。そこまで、見えていたなら弾くことも出来たかもしれない……いや、見た瞬間に直感した。



これには吸収の術式が掛けられていて、幾ら弾こうとしたところであたいの作った氷は吸収されて結局何の抵抗も無くあたいに当たる。……そして、現に今、その吸収の術式にしてやられている。

解術しようにも式が複雑化している上、解に力を込めようとすればその分だけ、吸収量が多くなるよう仕込まれている。

——解除できないっ!!

チ「しかも……!コレ、何度も式変わるし解けそうところで、見計らったみた………い、に!?!」

もう分かった。

なるほど……そういう、ことか!

この楔の術式変更は幽々子じゃない……何処かこの近くのあいつが……操作している!

しかも、あたいが術の解除に掛かる時間を把握しているから、本体である必要も無い……そして、あたいが解除に掛かる時間を測ったのは……レティに掛けられていたあの術式を解いた時だ!

チ「ま、マズい!マズい!! この結界も……

あたいの……っ!莫大な妖力を動力源に……しているから……力を確実に削られる……!」

そのうち、あたいの吸収結晶の自己補完でも間に合わないレベルに……しかも今は能力を封じられていて使えない!

……あたいの妖力が尽きれば、この能力封じの結果も動力源を失って消えるだろうけど、そもそも、逃げられないし、そうなるにあたいが全ての妖力を失って死に、一回休みにな

るしかない……でも、それはみんなの負担が大きくなる。

第一、みんな戦っている時に休んでなどいられない……

というかそれじゃ、あたいの妖力が多過ぎて時間が掛かり過ぎる。

なら、結界の容量を超える妖力を流し込めばと思つて試したけど……やっぱり、消費量を多く、式の壊れない程度に調整されてしまった。

術式の方も相変わらず、一瞬で解けそうなら一瞬で、数秒〜数分掛かりそうなら数秒〜数分で解除の前に切り替わってしまう。

やっぱり、ここまでの繊細と感度の必要な事今も目の前で妖夢と戦闘中の幽々子には無理だ。

……妖夢に全てを託した……妖夢さえ幽々子に勝利してくれば……厳密にはあたいが氷で拵えた楼観剣モドキを幽々子に当ててくれれば……刀に仕込んだ式が発動して幽々子を氷で拘束してくれる……

チ「……でもっ！頼りきったら駄目だろ!!

それで何もしないのは違うだろっ！……あたいはあたいでコレから抜け出さないと！」

でもっ！　こんなのどうすればっ!!

出力する事自体、状況を悪化させるから収納も制御も転移も使えないっ！

唯一使える吸収も……あたいに直接刺さった楔こいつの吸引力の方が強くて、気休め程度に

しかならない!!

……そうなのか？　ただここで耐えている

ことしか出来ないのか?!  
チ「でも絶対に……絶対に諦めないぞ!!」

紫 s i d e

——死舞……「黒楼郷」……!!

幽々子が発動した結界を発動した直後、私には、恐らく無意味であるだろう事がわかっていても、自身の能力で結界を破るのを試す外になかった

そして、結界の内側に直接入って止めようとしても、とても敵わなかった。

こちらには、妖怪としての身体能力があるにも関わらず、まるで歯が立たない。

さすがは我が親友だと感心すると共に絶望した。

一切の無駄の無い見事な手前だ……これに妖夢が……あの子が挑むのか……

ところでこの結界内には物理的には進入が可能だけでも能力の一切が無効化される。

その基準は恐らく、出自に由来するか、技術技能が由来するかという所だろう。

境界を操る私の能力にも技術的応用が絡まないものばかりではないけれど、それらは全て自身の特殊能力の土台があつてこそ……

それに引き換え妖夢の剣術はその名の通り剣術……技術的側面が強く、結界の範囲外だから無効化の制約を受けない……他にも例を挙げると永遠亭の医師の薬を作る能力はあの方の頭脳から来る技術なのでセーフ。

佐渡の二ツ岩の化け狸の化けさせる能力は化け狸の変化の力がその技術の根幹なのでアウト……といった具合だ。(因みにチル<sup>かのじよ</sup>ノの作った氷剣が消え無いのは、結界が張られる前だったからでしょうね)

しかし、妖怪としての身体能力や怪力が許されているのは、全ての妖怪が少なからず持つていて普遍的だから……

その証拠に大妖怪クラスの身体能力が封じられ、せいぜい上級く中級クラスが良いところだった…でなければ幾ら幽々子の腕が立つといつでもあそこまで圧倒されない(それでも凄いんだけど……)。

だが実際は圧倒されており、(幽々子に近づかなかった為に)事無きを得ていた藍に助けを求めて結界外に出なければどうなっていたことか……あの結界の中は妖怪特有の再生能力までも落ちていた。

結界の外に出た途端、瞬く間に手足が再生したからだ。

つまり、あのままあの陣というか結界の中に居た場合、細切れにされてそこで命も話も終わっていたことだろう……

それにしても、まさに危機一髪だった……手足四本の内三本持っていかれた時点で藍を呼び、私も後方に転回しつつ、前方回転受け身の要領で飛び受け身で距離を取り、上に向いた所で無事な手を上に突き出し、そこを藍に攫って貰うことで何とか幽々子の凶刃と結界から逃れるだけ……それで精一杯……  
そこまですごい確信した。

私達は妖夢にとつての足手纏いにしかならない……チルノレベルならいらず、少なくとも、あの結界の中に於いてはあの子以外には対応し得ないだろう……  
しかし、私も……あの子に全体重を預けるなど……野暮な真似はしないわ！

妖夢 s i d e

打ち合い始めて、早十数合……私は早くも、幽々子様との果たし合いに格の違いを魅せつけられていた。

でも私は、この一瞬の油断さえ許されない……このピンと緊張の糸の張りつめたこの切り合いに……

言い様のない、不思議な高揚感を覚えていた……こんな非常時に、なにを不謹慎なと自分でも思うのだが……しかし……

——美しい……

その一言だ……技から技へ無駄無く無理無く繋がり、その流れや勢いが削がれることが無く、止まったように見えても、私の攻撃に対する燕返カウンターしだったり、まさに……正真正銘の剣舞だ……！  
でも何故だろう……最初はついていくのがやつとなくらいだったのに……今はなんとなく剣筋が見える……

一切の淀みなく神速で振るわれる刀を今は捌ける……このまま幽々子様と舞っていれば……この人と同じになれるのか……いつかこの人のように戦場いくさばを華麗に舞い、駆けることが

……ずっと、こうして居たい……ずっと……  
この人と切結び、舞踊って……

妖「……は……っ!!」ギインツ

危なかった！ 何を見蕩れてるんだ私はっ

!!

今がどういう時か忘れたのかっ!!!

なんとなく振った一閃に幽々子様の姿がふ  
つとなくなり、次の瞬間に間合いを詰められ  
胴を狙われるも、ぎりぎりの所で白楼剣で防  
ぎ距離を取った。

皆の命の懸かったこんな時に、何を夢見が

ちな少女のような事を！

いつか、この人のようにだと？ 違う!!!

今だ!! それなら今掴み取れ!!!

それが出来なければ最早無価値っ!!

今まで生きて来た意味さえ失うっ！

……何故なら……!!

理解したっ！ 漸く出来ましたっ！ お爺様

!!

これまでの打ち合いで！ 漸く！

幽々子様の強さの訳が……!!

……何処か似ていると思ったら、師匠……

これは、あなたの剣に似ている！ 私の目指

す……貴方の剣に……!!

そう……幽々子様の剣術は私の修行の延長線

上……行き着く先……完成形……

でも、今までそれがわからなかったのは、そ  
のことを意識出来なかったから……では何故  
、今の今まで意識出来なかったのか……それ  
は……生死の懸かった瀬戸際で……皆の未来  
さえ懸かった瀬戸際で初めて……集中力が極

限まで高められたおかげでやっと気付けるよ  
うなものだったから……

—— お前に教えるべきことは全て教えた  
—— 主に遅れを取るとは……

私に教えられることは全て伝授された……  
そして、師匠の技は全て……

私と師匠の稽古や修行を観てこられた幽々子  
様がそのままその身に写しておられる！

ずっと観てこられたからといって、それが出  
来るのは……幽々子様が、見たものをそのま  
ま素直に受け入れておられるがゆえ。

そこで思い出される、とある記憶……

—— 私、生前の記憶って殆ど無いのだけ  
れど……私のお父様……かしら……？が、詩われ  
ていた詩だけは何故かちゃんと覚えてるのよ  
ねえ……

それは、幽々子様の生来の氣質が魂にその  
詩を刻んだから……そしてそれは私の師であ  
るお爺様の剣術をも……！

幽々子様と剣を交えながら、今までの回想  
を頭の片隅でするうち、私の目からは自然と  
一筋の涙が流れた。

……私は間違っていた！ 今、この事実を  
実感するまで!! ずっと、私は……

師匠に見限られたと、お爺様に捨てられたと  
……己の頑張り虚しく、実力が及ばないが為  
に……そう思っただけだったっ！

「違うんだ！ 師匠は……私なら越えられる筈  
だと……信じて……！」

だから!!!

.....

……見えるっ！——自然と……っ！ 次の手が！  
上段横薙から返す刀で下段払い……そして、  
反撃を警戒し、敢えて霞に曖昧に構えて即応  
……私は上段に対してしやがみで躲し、続く  
下段を側面に楼観剣（氷）を斜めに構えて受け流す……と、一度距離を取り、霞の構えの  
対応し辛い左側面への周り込みを試みる。  
すると、逆に！そのまま右に斬りかかる構えから足を右転回させ、左を周り込んで来る私に振りかかってくる！

その横薙を跳躍で躲し、自身の頭を地の方、足を天に躰を平常時とは逆にして飛び越え、着地……するのを狙って足払いが来るのが見えたので左脚での着地を直前で右脚に変え、足払いに耐える。

単に相手の体勢を崩すのが目的の軽い足払いなのでこちらの右脚に止められるが、相手は地に手を着き、左脚を蹴り上げ、右脚を軸に回転して、私の顔の左側面を刈ってくる。

それを後方に体を大きく退け反らせて避け、地面に手を着く……（体は柔らかく保つよう、鍛錬していたのが役に立った）と同時に足を蹴り上げ、逆立ち状態で頸を反らせて前を見ると、案の定……左回転蹴りの勢いそのままに体勢を立て直した幽々子様が刀で私の脚を狩ろうとされていた。

だがその時には私の足はさつきまでの顔の位置にあり、同時に肘を少し軽く曲げて伸ばし



、手を中心に回る足の遠心力を後方に流し、後ろに跳び、そのまま前を見て着地……二刀を構え、追撃に備える。(手を地に着いている間も二振りの刀は手中にあり、手を地から離すと同時に再び握る。因みにさつき着いた手は氷楼観剣を持った右手のみで左手は平衡を取っている)

——っっ!!! その時には既に目の前にまで迫って更に、正面から斜め袈裟斬り(右)が飛んで来る所だった。

それに反応し、白楼剣で受け流す……それを流し切るや否や楼観剣で突きを繰り出す。

更にそれを(相手から見て)左転回で躲されると同時に自身の右斜め前方に位置取られ、そのまま右から逆袈裟に切り上げられる……それに急遽、突いていた右手の刀の内に隠れるように脚運びで移動し、右手の氷の楼観剣でそのまま流し、切り上げてガラ空きになった相手の胴に手首を返して切りこむ……が、既に刀を逆手に持ち替えており……受けられ、そこから素早く順手に持ち替えられ、弾かれた上、上から袈裟斬りが振りかぶられた。

それをまた、左の白楼剣で流し……そのような切り合いが更に数十……百数と続き、ようやく終焉を迎えた……!

幽々子 side

ああ……遂に……!!……私を……

よくぞ……………私を……………!!

おめでどう……………妖夢っ!!

——私はいつでも、あの子と掛かり稽古をする時、あの子に対して、負い目のような何かを感じていた……………それは主に、あの子が私に対して劣等感を感じていたことに由来する……………

彼女はいつも、私との稽古で打ちのめされる度、毎回決まって……………悔しそうに唇を引き結んだ後……………私もまだまだですね、これではお爺様に、師匠に顔向け出来ません……………精進致します……………と、努めて平静に、真顔で……………己の不甲斐なさ、そこから来る悲しさを必死に噛み殺しているのを見て……………私の方こそ申し訳無い気持ちが常にあった。

私のコレは、貴方と妖忌の修行や稽古を……………打ち合いを見て……………それで……………

自然と、身に着いただけで……………

でも、それを言う勇氣が私には無かった……………言えれば少しはあの子も……………

いや、関係ないかもしれないわ……………そのことを知ったとしても、あの子はきつと……………

どころかより一層……………そんな思いと、私自身を拒絶されるかもしれない、話を信じてもらえないかもしれない怖さが相まって……………

私はずっと言い出せずにいた……………

でも今日!!! ——やつと今日!!!

あの子はそんな苦渋の日々から開放される!

それも自分自身の手によって!!

私はずっと、あの子が密かに努力を積み重ねていたことを知っているっ!!

それが今、実ろうとしている……………

嗚呼……………

遂に……………あなたは私（わたし）を超えたわ!!  
……………私の突きよりもあの子が私の胸を捉える  
方が一瞬早い……………それはもう、分かっ  
ていても止める事は出来無い……………感  
覚で分かる……………言うに及ばずとは思  
うけれど、当然これまでに一切手加減は  
していない。

それは相手に失礼であるのと、あの子が私の  
全力を破らなければ意味が無いと思っ  
たから……………あとは、そもそもこの身  
体にへばりついた気色の悪い影蟲が強  
制してくるのも要素としてはあるけれど……………

でもあの子は全力で臨んだ私を正面から打ち  
破った!! 紛れも無い勝利だつ!!

これで……………やつと……………

晴れて貴女に、教えを請える……………

……………この戦いが終わったら……………私、貴女から  
剣を……………

—————ズクツ……………

……………え?

……………、……………ナンデ……………妖夢が……………  
刀に……………貫かれ……………て……………

妖「ゆ、ゆこさま……………かふつ……………う……………」

幽「……………ようむ……………?……………!!」

—— 声が出る!!

……体が自由に……こ、これは……

—— 嫌な想像が、ふと頭を過る……

—— 違う！私じゃない！

—— 体は付いて行かなかつたけれど……

—— だつて、私は負けて……

—— 相手の剣筋は……

—— もうやめて……お願いよ……!!

—— 見えていたのだから……

—— いやあ……っ！……いやあ……あああ……！！

—— 受けるのは……

……その時、今更ながら思い出す……

さつきもの凄い勢いで何か……そうあれは

紫だった……紫が凄い速さで飛んで通り過ぎ

て行って……手に……何か掴んで、外まで

引っ張つて行つた……私と、妖夢の刀との間

にある何かを……っ！——

—— そうだ……あれは……

—— ……別に私の体じゃなくてもいいのよ……

—— 私に取り憑いていた、影だ。

紫 side

ぐっ!!! やっぱりに間に合わなかつた……

……!!

私はずっとこの機会を待っていた……待つ

ていたが……やはり後出しでは、どんなに

速くとも防ぐまでには至らない……

私は幽々子に取り憑いていた影の蟲を手に  
掴み陣に出るまでの一瞬、予め考えていた悪  
い予想の的中に、ギリっ……と歯を軋ませた。  
そう、私はいずれ妖夢の剣が幽々子を上回  
り、影が追い詰められた時、妖夢の刀を妨害  
するだろうと先読みしていた。

——妖夢と幽々子の戦闘中……

……だが、その瞬間がいつ訪れるか……幾ら  
視力が常人離れしていようとも難しい。

そもそも本人達同士の感覚レベルの話なので  
どれだけスローに見えたとしても、見極める  
ことなど出来ない、それに……そもそも

紫「驚いたわ……まさかここまで速いだなん  
て……」

結界の外に出て身体能力が大妖怪クラスに  
回復しても尚、剣の軌跡を追うのが精一杯な  
程素早い動作……これではその瞬間を見極め  
て事前に動くことなど不可能……

けれど……いつでも飛び出せるように用意  
しその時を虎視眈々と待つことは出来る!!

藍に妖術で光の縄で適当な木と木を繋いで貫  
い……（木は境界で切り取り発射の位置も角  
度も自在にしてある）

それに足を掛けて、後ろに引き、さながら  
パチンコ玉のように飛び出そうという算段だ。  
縄の伸縮は縄自体を境界に見立てて操る……  
飛ぶ……というより弾かれる角度は、いつ  
その瞬間が訪れても良いよう……常に幽々子  
のいる方へ照準をあわせて計算し、角度を変

える。

もし時が来たら足を掛けた光縄を一気に収縮させ、収縮が頂点に達する……つまりくの字から一文字に変わる寸前まで脚に力を溜め、真一文字になった所で一息に蹴り抜く……それによつて結界内を超高速で移動し、影を捕らえられるはずだ。

しかし、どれだけ速く影を引かせた所で妖夢の刃を先に間に合わせることは……恐らく出来ない。

私としては何とか間に合わせ、影の出現に即座に反応し、妨害など0か、0に限り無く近いくらいにしたい……もしそう出来れば……妖夢の刃が先に届き、事無きを得られる……だから、速く影を取り去うと、遅く取ろうと、妖夢が負ければ意味がないと知りつつも……最高速で影を幽々子から引き剥がしたい……

(それでなくともあの下等生物をもう、一秒

たりとも親友に触れさせたくないけど)

そうして、己の動体視力を全開で二人の戦いを凝視し続け、何処に影が現れても良いよう飛び出す角度の計算を続け……遂にその瞬間は訪れた……が、見た瞬間、悪い予感が走る……

幸い、今の位置から修正する必要も角度の調整も必要無い!

すぐに掛ける足を片足から両足に変え、境界を操り、縄を強力なゴムのよう一気に締め、限界点時に大妖怪としての全力で藍の妖術で形成された光縄を蹴り出す。

影が妖夢の妨害に出て来るのはほんの一瞬だった……けれど、それだけあれば十分！

幽々子の体から妨害の為に出て来た蟲を掴み、予めスキマから取り出しておいた刀で幽々子から切り離す！

これは刀の切れ味は関係無く、どころか刀である必要も無い。

何故ならあの影の蟲共は私の能力や気配、持つているモノに反応して避けてくる……

それを利用し、幽々子の身体との接続を最低限にしていたた所を狙って刀を一閃する……

すると、影の大部分は幽々子から離れているので、影の蟲は嫌がって幽々子の身体から全ての影を引っ張り出す……

よって、刀である必要は無いのだが、振りやすさと空気抵抗の面等から刀の方が都合が良いと判断したのだ。

幽々子と影の間を割り、離れたかを確認することも無く影の蟲を引っ掴み、飛んで来た勢いそのままに陣の外へと飛び去る。

……故に端から見ればただ猛スピードで通り過ぎただけに見えたことになるのだけれど。……果たして、私が陣の外で影を境界

に一時的に閉じ込め、同時に後ろを急いで振り返るとそこには……幽々子の刀に貫かれた妖夢の姿が静止画のようにそこに映っていた。しかも、最悪なことに……

紫「そんなんっ……！半霊、ごと……」

幽々子の持つ楼観剣は妖夢の半身たる……

その半霊ごと妖夢を貫いていた……

——楼観剣は一振りで幽霊十匹分の殺傷

力を持つ……

余りの光景に呆気にとられ、目の前の現実を受け入れられず、立ち尽くす……

二人の立ち回りで一時的に舞い上がっていた桜の花びらや砂煙の動き……妖夢が、持っていた氷の楼観剣を取り落とす様子に至るまで、全てがスローモーションで流れて行く……

そこに、振り絞るような咆哮が耳に飛び込んできた。

チ「つつ!! ……つああああああああ

ああああああ!!!」

その直後にパリンツ!と薄いガラスの割れるような音が響いたかと思うと空中に固定されていたチルノが私の元に落ちて来て、よろけながらも歩み寄り、私の胸ぐらを掴む。

チ「……おいつ! ぼーっと突っ立っている場合か!! そんな暇があるなら、早くその手の中の虫ケラをリグルに連れてかせる!!!」

紫「……!!!」

チ「……はやく!!!」

紫「っ!!!言われなくてもっ!!!」

言われて私は、急に手の中の物体の不快感と嫌悪感と憎悪を思い出し、その感情を隠しもせず、スキマから博麗神社にいるリグルを取り出して、命じ……神社まで連行させた。リ「じゃ、じゃあ行ってくるね……『ついて来い!』」

蟲を連れ行くリグルを見送りもせず、私は幽々子と妖夢の元へと駆け寄った。



そこには既に、藍、橙、大妖精、チルノの四人も揃っていた。

藍は諦めたように目を伏せ、橙はその藍に縋り付くように寄り添っている。

大妖精は口を両手で覆い、驚愕に目を見開いている。

チルノは悔しさに歯を食いしばり軋ませ、今にも叫び出しそうだ。

そんな中、私の親友の啜り泣きが辺りに響く

……

幽「……妖夢……!!ああああ……!!

妖夢——うっ……うっ……うっ……うっ……うっ……うっ……!!」

藍「……………」

橙「……………」

大「そ、そんな……あ……あ………」

チ「……………」つ!!!」

幽「ごめんなさい……ごめんなさい……!!

私「……………」

——探せ

妖「ゆ……ゆゆこさ……ま………」

——探せ!

幽「私、ただ……あ……あなたから……剣術を……

……お……あなた、が……私の、し、指南役……

……だから………」

——早く、探せ!!

妖「……………」よかつ……た………あ……幽々

子……様……ご無……事……で………」

幽「……………」!!!」

——全力で!!頭を回転させろ!この状況を覆す手立てを!

チ「くそっ……………！ あの時あたいがもつと  
ちやんと幽々子に目を向けていれば……………」

大「チルノちゃん……………」

幽々子も相当弱っている……………妖夢は今にも  
死にそうだ……………幽々子は亡霊……………つまり霊体……………

妖夢は刀の刺し傷もそうだが、致命的なの

は半霊を殺されたから……………それなら、境界を

操って二人を融合させる？ 妖夢の半霊の代

わりに幽々子を据えて……………？

……………いや、それは出来ることならしたく

ない……………それなら、私の力を二人に……………駄

目だ足りない！

だったらチルノの妖力を……………いや……………時間が

無いしチルノから妖力を取ると戦力が……………

……………

異界某所

飛「さて、彼の者は気付くか……………」

東京某所

侑「彼女は気付くかしら……………」

……………くっ！！駄目だ。全く何も……………

!?!? ……いや、待て！ 待って……………

チルノはなんて言っていた？

——あの時、あたいがちゃんと……………

妙に引つ掛かる……………チルノは他意は無く心

底そう思ってたのだらうけれど……………

あの時……………——！！

そういえば、あの時……………どうして私は幽々

子では無く、影の方を掴んだの？

影から切り離れた時点で、私が幽々子を持てば影はもう幽々子に取り憑こうとはしないし……それ以前に離脱の速度に付いて来れない筈なのに……！

私はふと自分の手の平を見る……

私の……「境界を操る程度の能力」で……過去、現在、未来の境界を操れば……今なら対して時間も経っていない！遡るのはほんの数分前!!

過去に干渉するのは……それも自分の今いる時間軸に干渉するのはかなりの力を消費するけれど……それでも全体の妖力の三分の一程度……今はそれほど世界も分岐していない上、遡る時間も短く済む。

……迷っている時間は無い!!!

チ「……なあ、賢者さんや……何か手立てがあるっぽいなら乗らせてくれない？」

紫「……！」

突如、私の考えを読んだかのように彼女<sup>チルン</sup>から言の葉が発せられた。

……気付けば皆の視線を一身に受けていた……  
……何かを感じていたのは確かでしょうけど……それ以上に藁にも縋る思いなのが顔に出ていた。

紫「……私の力で境界を操り、過去現在未来の境界を弄って過去の私に干渉するわ」

大「……？」

藍「……!!」

橙「……」

チ「へえ……なるほど……」

今の話を聞いた中でも納得したものが半数  
……もう、それで良い!!

時間が惜しい!

チ「……………」

そして、既に察しているそばかりに彼女から手が差し出される……話が早くて助かる!!

紫「じゃ、行くわよ」

その手を取り、境界を操り、僅か数分程前の自分自身へとスキマを繋げ、上半身を突っ込み……すぐ様半身をスキマから引き抜く。

紫「良しっ!! 上手く行ったわ!」

そんな風を目論見が上手く行ったことを一人喜んでみると……皆から私を訝しむような視線が送られて来た。

その視線は果たして……………

——我が親友とその従者を含む六名から送られているのだった。

チルノ side

あたいは全て覚えている……覚えているが  
敢えて知らぬ存ぜぬを突き通すことにした。

改変前の惨劇の事など誰にも言える訳がない。

改変に関わったあたいと八雲紫以外には誰の記憶からも無かった事になっている……

あたいは例のスキマを紫が開くに当り、継続的に妖力を送る為に、ずつと紫と手を繋いでいた……それこそ、改変によって今の位置に変わる、その直前まで……………

だから、あたいにはその記憶がるんだろう……  
実際、『妖夢は死ななかつた。』その『事実』

だけが重要だ。

因みに、紫があの人と（超高速で）すれ違った時、紫が引っ搦んだのは幽々子なので、妖夢が振るったあたいの楼観剣（氷）は影に直撃し、その成れの果てが（私と紫から見ても）先程まで妖夢が斃たおれていたところに凍てつき、転がっている。

なので、あたかもみんなと同じように紫に、何言っただコイツ……的な視線を送っている。

その後の皆の反応は……

藍「紫様、とにかく今回はこれにて決着………ですね」

橙「お、終わりですか……？ホントのホントに終わりですか……！　　終わりですね!!!

イ……ヤッター!」

大「ハア……良かった……お、お疲れ様……チルノちゃんつ!!」

幽「……紫……」

そこで、幽々子が不意に紫に向き直り……

何か、（恐らくお礼）を言おうとしたところで「ばっ」と紫が幽々子に駆け寄り、そして抱き締め、小さく囁やくように切実に、ごめんなさい……と一言、謝った。

その一言に全ての感情を込められているのが伝わってきた……それは押し殺したような声音で皆に悟られまいと必死で……しかし、そんな様子が余計に切なさを掻き立てる……

幽々子はそんな紫を安心させるように、酷く怖い夢をみた子供を落ち着かせるかのように頭を撫で、優しく抱き返している。

……そして、自らの頬にも一筋の涙が伝い、  
涙声を発する。

幽「ううん……本当にありがとう……助け  
に来てくれて、ありがとう……！」

と、そこに少し入りにくそうに妖夢が……あ  
、あの……と声を掛けてきたので二人は目尻  
に涙を滲ませたままで顔を向ける。

妖「……紫様……従者である私からも心の底か  
ら……お礼を申し上げます……！他に言葉が  
見つかりません……本どに……なんと、言っ  
たらあ……い……いか……っ!!」

紫「いえ、良いのよ……こつちこそ、礼を言  
わせてちょうだい……白玉楼の……剣術指南  
役兼庭師、魂魄妖夢。……私の大切な友人を  
守り抜いてくれて、ありがとう……！心か  
ら感謝するわ」

幽「……っ！」

紫「幽々子！」

妖「あつ……！幽々……子……様……！」

妖夢が紫に、紫が妖夢に互いに感謝の気持  
ちを伝えあつた辺りで限界が来たらしい幽々  
子が「ふらっ……」と体勢を崩し、妖夢も幽々子  
に注意を向けながらも後を追うように気を失  
つてその場に崩れるように倒れそうになるが  
、あたいが妖夢を紫が幽々子を抱き止める事  
で事なきを得る……

影チルノ（分身） side

事態が収束しつつある……というより収束  
した白玉楼の某所からおよそ1km程離れた

上空……………

——影の楔を中継点、素体に癒着した影及び、素体を起点、オリジナル<sup>複製元</sup>を動力源とした能力無効化フィールドの術式の破壊及び消滅を確認。

尚、原因はフィールド展開の起点に設定されていた素体がフィールド外に離脱した事、また、素体に付与されていた影が切除され且つ、封印を受けた事により力場の不安定化を招いた為であると考えられる——

オリジナル<sup>複製元</sup>に貫通、挿入されていた楔はフィールドの動力源以外に用途は皆無である為、力場の崩壊後、即座に維持を放棄。

その後、オリジナル<sup>複製元</sup>の手による解除、破壊を確認——

——以上の点を踏まえ、更なる改善、改良の余地ありと判断……………これ以上の滞在の必要性……………皆無。本体に帰還。

白玉楼の遙か上空、その場を後にする影が一つ……………しかし、それに目を向ける者は誰一人としておらず、それを意識出来る者もまたいなかった……………

チルノ side

それから…緊張の糸が切れたからか、戦いによる消耗ゆえか、或いはその両方か……………

気を失った妖夢と幽々子の二人を屋敷の一室に布団を敷いて寝かせ、(何故か紫が二人入れるサイズの布団をスキマから出していたが……さっさと二人分の布団を敷いて、二人を別々の布団に寝かせた)

五人で相談した結果、白玉楼をそのままにして行くのは危険との事であたいの分身を二体程と藍、紫が式神をそれぞれ二体……その式の素体として橙が自分の部下から猫を提供し、見張りとして置いて行く事に決定した。

(……その式が妙に(自分より)出来が良さそうだったのを見た橙が不安そうに藍を見ていた……その視線に藍もふと目を合わせる——  
——なんで藍はちよつと嬉しそうなんだ……?)

そうして、あたい達は白玉楼を後にした。

……その後、あたい達はアリスらと再会する。

そして、話は冒頭へと戻る……

ア「そう、そんな事が……ねえ……」

チ「ああ、そんなわけだからまだ油断は出来無い……」

あたいはここまでの経緯を掻い摘んでアリスに説明した。

だが、それで十分だったようで……

ア「それじゃあ……今、白玉楼は守れる人妖がないせいりで、あなた達の分身やら式で補っている状態ってワケね」



チ「ああ……でも、心配要らない。分身とは言えあたいとほぼ同じコトが出来るようにしといたからね」

ア「でも、その分力を使うし、戦力も減るのよね？」

チ「？……まあね。分身も式も妖力を消費するし……」

ここまでで、アリスがなにを言わんとしているかあたいにはもう分かった……

チ「まさか、……白玉楼に……？」

ア「そ、任せて貰えない？……まさか、今更……危険だからとか言わないわよね？もう十分巻き込まれちゃってるものね」

チ「本当なら下がって貰いたい所だけど……人手が要るのも確かだしな……」

ア「話が分かるじゃない。……まあ、安全面でも打算があるから安心して良いわよ？」

チ「？……ああ、幽々子と妖夢か……」

ア「そう……彼女たちが目覚めれば……もう万全よね」

そう……つまり、彼女たち二人が目覚めるまで護衛し、目覚めてからも共闘の姿勢を取ろうと言うのだ。

……そしてそれには……

リリカ「はっはああくくっ！　話は聞かせて貰ったぜい！」

メルラン「もらったぜくく！」

ルナサ「もちろん、協力するよ」

レティ「『毒を食らわば皿まで』ってね！

ここまで来たら最後まで付き合わないとスッキリしないわあ……」

ふう……聞く耳は持たれなそうだ……

チ「………つてことなんだけど、良いかな？」

あたいはさつきからこつちに視線を向けている三人に意見を聞く。

大「私はチルノちゃんが良いなら………」

橙「藍さま、いかががしましょう？」

藍「ふむ……確かに全くバラバラでいるよりは危険は少ないかも知れんな………よし！………では………白玉楼を頼めるか？」

ア「ええ、任されたわ！」

リリカ「合点承知イ!!」

メルラン「感謝感激雨霰えくっ♪」

ルナサ「よくし気張つてコー………」

レテイ「襲つて来た端から千切つて投げてやりましょうっ！」

………なんか最後の人だけ殺意が………まあ、良いか………

その後はあたいがみんなの消耗を賄えるだけの回復結晶――

魔力や霊力にも変換出来る――を彼女らに渡して、代わりにあたいは分身を引き上げ、藍は……紫様に連絡を取って式を引き上げてくださるよう要請する”と言つてから自分の式も呼び戻していた。

無論、白玉楼が誰もいない状態にしないよう、呼び戻すのはアリスたちが白玉楼に着いてからだ。

あたいたちは彼女らを見送り、次の戦場へ足を向けた……

第十三話 氷争（萃夢 其の壺

???  
side

何か、胸騒ぎがする……………それに、この  
気配は……………?——

——私は、昨日まで地底の旧地獄跡……………旧  
都と呼ばれるその場所でいつものように……同  
じ鬼であり、山の四天王にして、飲み仲間の  
勇儀と、朝から晩……晩から朝まで梯子酒をし  
て店を巡り歩いていたんだけど……………——因み  
に何度か勇儀は席を外したらしく姿が見当た  
らないことがあったが酔ってて正直よく覚え  
てない——そこで私が「よ」おお□くく——し  
い□……もう一軒、もういつけんくく♪”と次  
の店を目指し始めた時だった——その時は  
丁度勇儀の奴の姿が見えなかったけど、また  
すぐ戻ってくるだろう、とか、また旧都の見  
廻りでもしてんだろう、とか、深くは考えな  
かった……………それに、すぐにそれどころじゃ無  
くなつた……………

伊吹萃香Ⅱ萃

萃「……………?……………なあんか……………  
地上が妙だな……………」

萃香 side

……………何か変な予感というか引つかかりを

感じた私は地上に向かつて飛んで行った。

——この時は何故か久々に、気味の悪い事に……酔いから醒めていた。

旧都の出入り口、地上と地下を繋ぐ穴の番人である嫉妬の橋姫やら、やたらに明るい土蜘蛛やら、釣瓶落としの妖怪やらに絡まれないうよう自身の『疎と密』を操り、霧と化して移動する。

その際、あえて橋姫のすぐ横を通り抜ける……これは自身の能力に対する信頼故だった。

水橋パルスィー水

水「——!?!?……今なにか……?……気のせい……」

首を傾げるパルスィー……  
ゑゑえ……（困惑）どんだけひとを嫉みたいの……コイツ……

……そして相手の姿が小さくなってから呟く……

萃「なんか例の鴉天狗からはパフォーがどうとか何とか疑われてるみたいだけど、ありや筋金入りだな……」

通り掛かるだけで……とかどんだけだ……とか  
独りごちながら地底の出口である縦穴へと向かう……霧に変じた身体は時折人に近い形を取ったり雲のような不定形になりながら穴の中を進む。

まあ人形ひとがたの時はたまたま雲の形がそう見える……くらいの頻度と形だが。

そのまま上に向って進んで行くと、例の如く先程思い浮かべた愛想の良い土蜘蛛と、釣瓶落としが世間話に花を咲かせていた。

キスメと黒谷ヤマメだ。

『釣瓶落とし』のキスメの方は入っている桶

が何処かから吊り下がっていて、ヤマメの奴は自身の張った蜘蛛の巣の上に腰掛け、脚をぶらぶらさせながら談笑中だ。――蜘蛛の巣といってもただ座る為だけの細めのもので、片すのは簡単そうだ――時折、キスメの意見も求めながら、それでさあ……など、呑気に話している。

その横を――さっきの橋姫の事もあるので――更に薄く広がりつつ、離れながら通り過ぎる……当たり前だが今度は全く勘付かれもしない。

そのことを確認しつつ、縦穴を更に上へ上へと進み……この穴の出口、妖怪の山の空洞を目指す。

そう、この地底への入口は妖怪の山へと通じているのである。

かつては自身も妖怪の山に住み、他の鬼と共に現在の上位種の天狗の上に立ち、四天王の一角だったりもしたが、今は山を降り、幻想郷のあちこちに居座っている。

――そのうち、暗い穴の先に光が見え始めた。最初は小さな点に過ぎなかった光も、近づくとつれて大きくなってくる……その色はまだ赤みが差してはいない。

――となると……今地上は昼間か昼前くらいか……

何となく、そう思いそのまま外へと抜け……

……ようとした……が……

見張り天狗 A

「このところ、なあくんか上の連中ピリピリしてないか？」

見張り天狗 B

「……まあ、確かにな……一体、何を殺気立っているんだか……」

見張り天狗 A

「でも、ちよつと分かる気もすんだよな……」

見張り天狗 B

「……お前もか……実は俺も変な感じはしてる……嫌な気配だ……」

——ふうん……ここには、滅多に誰も配備されないのに珍しく山の天狗がいるのはそういう理由か……

私があるまま縦穴から洞窟を抜けて行こうとすると、男の天狗（恐らく若手）が二人、洞窟の入口の見張りに付いていた。

……しかもなんか、そこそこ出来る奴を寄越してんじゃん……

その二人の鴉天狗はその後も軽く言葉を交し合いながらも辺りに鋭い視線をそれとなく送り油断無く周囲を警戒している。

……しかも、集中が一切途切れることない……  
萃「おいおい……どんな警戒網敷いてんの……  
……どんだけだよ……（しかも……）」

私は既に霧状態のまま見張りの天狗たちを難なく通過して、その上空にまで出て来たのだが……そこでも……

萃「等間隔に……六、七……十……、……  
……まじか……」

およそ、天狗組織内でも精鋭に数えられるであろう者たちが、私が漂うその周辺だけでも数十は居て、それぞれ巡回、警邏、警備に当たっている。

その者たち以外にも、格は下がるものの兵士と思われる者たちも妖怪の山を囲むように警護に付いている。

山の麓辺りを哨戒（白狼）天狗、中腹を鴉天狗、その上を更に精鋭の鴉天狗が見張っている。

萃「……………（しかもあいつまでいるし……………）」  
なんと警戒に当たっている鴉天狗の中に混じって天狗の長……………天魔までいる。

私は既に霧状の自分を山全体に広げていたので天狗たちの数を正確に把握する事も出来たがそれよりもこの状況を説明してもらおう為に、次期天魔に話を聞きに行くことにした。

——というかぶつちやけ二十を数えた辺りからめんどくなくなってやめた……………

萃「……………正直、羊数えてるみたいで眠くなりそうだし意味無いし……………」

???「……………（……………くそっ！ 何なんだ？

これは一体!? 何かが具体的に攻めて来てるワケでもねーのに……………嫌な感覚だけは露骨に伝わって来やがる!!）」

萃「よお！ 随分、気が立ってるねえ〜」

???「っ!？」

萃「……………そんなビビることはないだろ？ 私だよわ・た・し……………忘れちゃったか？ 来坊……………」

話かけた瞬間警戒と鋭い視線を向けて来た顔見知り、来坊（くるぼう）こと魔社宮来遠ましろみやくおんが私の姿を見止めて警戒を解き代わりに面倒くさそうな顔に変わりながら返す。

魔社宮来遠Ⅱ来

来「…忘れるワケないでしょう…ガキの頃から付き合いのある人を……っていうか、今仕事ですし、昼間つから絡まんで下さいよ……ましてや、今立て込んでまっし……」

萃「ほう……それはそれは……やっぱり天魔ともなるとあちこち引つ張り回されて大変つてコト？」

来「それも…次期天魔つてだけですケドね……いや、これはそういうんじゃない……なんつーか……」

そこから、ソイツ……次期天魔の少年（若しくは青年？）は少しの間逡巡した後ぼつりと、自身の蓬髪に手を埋めて搔くようにしながら……

来「今は具体的にどうこうって段階では無んすけど……」

萃「……？」

煮えきらない物言いをする彼を訝しみながらも私が次の言葉を待つと、頭に手をやるのをやめ……こちらをまっすぐ見つめながら話始める。

来「俺も何か異様な気配というか、ただならぬ雰囲気っつーか……とにかく嫌な予感が付いて離れないんですよ……それが俺一人ならいざ知らず、哨戒の白狼天狗から俺直属の



奴らに至るまで漏れなく全員がその怖気というか嫌な感じというか、その気配のことを訴えかけてくるんです……」

萃「……ふむ、つまり何かの前触れみたいなのを感じると……」

来「ええ……まだ何も起こっていないんでなんともいえないんですけど、だからといって起きてからでは遅いし見過せないんで、こうやって警戒体勢取るしかないって……」  
つまりは予感だけひしひしと感じられる割りには未だ妖怪の山には異変が無く、膠着しているということらしい。

来「いや……まあ、この妙な気配で山全体が殺気立ってんのが異変と言え無くもないんですけど……でも、これはまだ……なんっーか、単なる氷山の一角な気がすんですよ……」

萃「う……ん……とどのつまり、その気配とやらはなんかのオマケってことかい？」

来「確証も何も無いただの感触っすけど、可能性はあります」

萃「ん……あ！ あいつは？あんたの親父で現天魔の……」

私「その名を口にした途端、食い気味に『ハア……』とため息をついて顔に手を当てる来坊。」

来「あくもう！あのクソ親父っ！ こんな時に一体どこほっつき歩いてやがんだよ……！  
！ったく……っ！」

萃「あ……」

次期天魔の少年こと、来坊のその嘆きを聞いて納得した私はもうその事について触れな

かったが、本人はヤレ母をどうの、ヤレそもそも長としての自覚がどうのと、尚も愚痴り続ける。

それにもげんなりして来たのていい加減話を  
変える。

萃「…つていうか、あんた…なんで身分隠して警備してんの？」

来「…っえ？」

萃「いや、だつて…なんでわざわざ下つ端になりすましてんの？ 次期天魔なんだから堂々としてりや良いじゃん。 まあ鴉天狗でも実力や地位はあるほうだけでも」

そう、天狗は種族の中でも上位種。

その中でも鴉天狗は報道担当とはいえかなりの実力を備えている。

来「あく…それはまあなんとというか、ぶつちやけめんどいじゃないですか…：色々と」

萃「…：はあ!? いやいや！ 身分隠してるほうがめんどいだろ!? どうしてそう  
なつた！」

叫ぶ私に、来坊は静かに…：

来「いえ…：実際色々動けて便利でっし、

変に気負わないで良いから気楽なんですよね」  
急ぎえ…：と困惑する私にそれに、と続ける。

来「その方が組織の頭押さえようとする連中にも見つけにくいでしょうし、伝令も確実に出来て楽なんすよ」

としたり顔（いやちよつとキメ顔入つてたかな）で言う来坊に呆れて嘆息しながら、心配を口にする。

萃「お前エ…：そんなで大丈夫か？ちゃんと

友達いるか？ 周りど…上手く行ってるか？」  
来「…！そ、そんな事どうだって良いじゃないっすか!? お、大きなお世話っすよ!!」  
明らかな動揺を見せた彼に私は更に言葉を重ねる。

萃「ま、まさかお前…今巷で言う所のぼっち——」

来「へ、へ変な、言い掛かりはよしてくださいよ!? ちゃんとツレの一人や二人居ますし!!」

萃「…：…おい、私は鬼なもんで嘘が嫌いだから一応きくけど…：そのツレとやらにはちゃんと打ち明けてるんだろっね…：…実在するならだけど…：…」

慌てた様子で言い募る彼に私は声を低くする。

来「それはもちろん…：…っていうか隠すの無理ですよ…：…さすがに…：…あ、因みにいまソイツら、地底に通じる洞窟見張ってます。来るとき見ませんでした?…：…って！幾ら何でも失礼じゃないすか!? ノンフィクションっす!!! 実在の団体や人物っすよ!!! ちゃんと!!」

…：…あいつらかよ!!  
私は洞窟を抜けて最初に出くわした、くつちやべりつつも周りに鋭い警戒の目を油断無く…：…それとなく光らせていた鴉天狗二人を思い出す。

来「まあこんな時なんで、内から外からに限らずヤバいようなところを見張らせてんすけどね…：…ほら、地底って地底に何かあっても地

底から何か来てもヤバいじゃないですか……」  
そんな危険極まる所を（恐らく）なげなし  
の友達二人に見張らせて大丈夫か……と思っ  
たが、その友達とやらも最初に見た時にな  
りのやり手っぽかった事を思い出して、心配  
を取り消した。

萃「……ってことはソイツら二人がお前さん  
の直属かい？」

一応聞いて見ると案の定……

来「ええ、それにそこには他に部下もいるし  
なんかあつたら即知らせが来ます」

萃「……ねえ。やっぱその身分隠すの意味  
あんの？その知らせに来る奴だつて来坊が天  
魔つて知つてんだろ？」

来「？……いいえ？ 知りませんよ？ だつて  
ダチの二人以外には言つてないですから」

萃「……え？ だつたらなんであんたのところに  
知らせが行くのさ？」

来「俺は単なる、天魔に対する連絡報告係つ  
て事になってますから……あ、因みに他にも  
そういう奴らがいるんで特別視される事もな  
いっす」

萃「いや……だつたらソイツらだつて報告す  
る時にお前だつて気付く……」

来「姐さん。報告の際は面と向かつてじゃ  
無いし、他の奴らと報告する時は妖術使つて  
そこに天魔がいるっぽく仕立てるんすよ……  
それでもみんな不審がりません……こういう  
時は便利ですよね……天魔の畏れ多さつて（  
遠い目）」

萃「……そこまでする……？ いや絶対そつ

ちのがめんどくさいって！」

目の前で遠い目をしながら言い募る少年の  
未来が心配になった私は更に言葉を重ねる。

萃「あんた、そんな事しててコミュ障とか大  
丈夫？」

来「大丈夫ですっ!!俺、ぼっちじゃないん  
でっっ!! 何より姐あねさんと話せているのが  
その証拠っ！」

力強く拳をつきあげるように体の前で握り  
締めながら断言する未来の天魔少年を前にし  
て若干の目眩を覚えながら話題を変える。

萃「……はあ……まあもうそれはいいや……  
しかし……あんたが『天嵐』を持ち出す程と  
はね……」

来「ええ、これは俺の独断ですが……その位  
ヤバいと判断したもんで」

『天嵐』とは、天狗という種族内の各種族  
の中に於いて精鋭のみで構成される各種族混  
成部隊のこと。

さつき山全体の警戒に当たっている天狗をざつ  
と見渡した時に精鋭鴉天狗（たぶん『天嵐』）  
は頂上付近に固まってたけど、それはそこが  
割りかし多いつてだけで山の中腹の鴉天狗や  
裾野や麓の辺の白狼天狗とかにもちらほらと  
いた。

来「……っていうかこんなところで油売ってて  
良いんですかい？姐さん」

萃「ん？」

来「いや、ほら……滅多に妖怪こじの山こに来ない  
姐さんがここに来たってことは俺らほどで無  
いにしても何かしらを感じ取ったから足運ん

だんでしよう？」

萃「まあそうだけど……」

目の前で怪訝そうな顔を向けてくる若き天魔にニヤリと笑いかける。

萃「忘れちゃった？ あたしはあなたの目の前前にいるのだけじゃないってのをさ……」

来「知ってますよそりや……でも、それを今出してるなんてどーやってわかるってんですか……」

そう、私は幻想郷の各地に分身を置いている。(分身っていうより分裂体？)

これは密と疎の内、疎を操る能力の応用だ。

その力で自分自身を小さく分裂させることも出来るので、後はソイツらを私の等身大にまで大きくするだけだ。

萃「んじゃ……ここでのことはだいたいわかったしそろそろお暇するよ……」

そう言うが早いか、少年天魔の目の前で山

四天王が一人……伊吹萃香の姿が霧となり消えてゆく。

最初は先つぼの纏められた薄茶色の長髪の端から……次は、腰から鎖で吊るされた分銅(三角錐、球、立方体)の中で三角錐……かと思えば真紅の瞳の右の方から……続いてその身長に不釣り合いな、頭から左右に生えた捻れた角の左の先……等まるで捉え所が無い――

――その後も白のノースリーブの肩が、伊吹瓢の底が、紫のロングスカートの腰部が……と消えて行き、果ては頭の赤いリボンまでもが霧化して消えた。

……そして、伊吹萃香の姿が霧に掻き消えた



が私だけだからってだらけないのっ！」  
狭い店内に二人の少女の声が響く。

一方は本棚から目当ての本を探しており、もう一方はさつきまで店番で勘定台を挟んで来客を待っていたのが、余りの閑古鳥の鳴きっぷりに退屈し、悲鳴とも呻きともつかない声を上げ、台の上うつ伏せに身を投げて突っ伏し……潰れた生卵のような醜態を晒していた。

……そのもう一方の少女こと私、本居小鈴は誰がどう見ても、どこからどう見ても完全にだらけきった姿勢で、うう……とヤル気のない呻き声を上げる。

しかし、それも仕方無いではないかと思う。

何せ、ここ最近も客足も遠のき気味で更には別段変わったことも無いからだ……

鈴「だつてえくく……しようがないじゃないく……暇なのよおくく……」

求「それなら本棚の掃除とか……」

鈴「やった……」

求「……なら整理とか……」

鈴「やった……」

求「じゃあ貸し出し期限切れの貸し本回収してきたら？」

鈴「それももうやったよ……まだ期限内の貸し本の確認も終わったし……」

求「だったら製本は？」

鈴「……依頼が無い……」

求「そう……でも、私が近いうちに頼むからね」

私は友人のその言葉に反応し、期待と共に

“ばっ！”と顔を上げる！



鈴「……………っ！クリスQの新作っ!？」

求「いいえ……………歴史本関連。つまり仕事」

鈴「……………小説の方だっ仕事じゃん……………」

……………期待を込めた問に対して首を横に振る

阿求<sup>とも</sup>に口を尖らせる私……………

それを見かねてか、阿求は本棚から本を手に取り、表紙を確認しては戻す作業をしながら尚も提案してくる。

求「じゃあもうこのお店の本でも読んでたら？そんなみつともないとこをお客さんに見られるよりマシでしょ？」

鈴「ええ……………そうだけ……………このお店の本は一通り読んじやったし……………」

求「……………っ！……………どんだけひまなのよ……………新しく本が幻想入りとかしてないの？」

暇過ぎて店内の本を読破してしまっただ事を告げると呆れと驚きの伺える表情がこちらに向けられる。

阿求の言うそれらは外来本と言い、外の世界から博麗大結界に隔離されたこの幻想郷内に流れついた本の事を指している。

確かにそれらがあれば、少なくとも退屈からは抜け出せるが……………

鈴「……………それなら良かったんだけどね……………」

求「ああ……………何もない、と……………」

そうそう都合の良いことがあるわけもなく……………（まああつたらあつたで怪しいけれど）  
というか、間が悪過ぎる気がする。

いつもなら、（まあありきたりなのばかりだけど）外来本の一つや二つ流れついている筈

なのだ。

……それが一冊も見当たらない……いつもの場所に探しに行っても……

鈴「……ええ、そうなのよねえ……いつもならつままないながらも何かしら落ちてたりするの……」

求「それ大丈夫なの？ここは主に外来本を扱ってるんでしょ？」

鈴「それなら大丈夫。今までに入った本があれば足りるし……っていうかそもそも今はそんな流行ってないし……はあ……」

……と、また話が最初の……この店の不況という話題に戻ってしまったことで思わずため息が洩れる……だがそ、れにしても……と思う。この退屈さは何か異常な……嵐の前の静けさ……という奴ではないのだろうか……？

確かに、そうであって欲しいというかそうとでも考えていなければとてもじゃないけどやっつけられないと言う気持ちもあるが……それだけではないようななにか予感めいたものを感じる気がするのだ。

そういう予感が、ワクワク感が……ギリギリの所で私の気持を繋いでくれている……もちろん、これは気のせいで……私がそう思いただけのただの願望……なのかも知れないが……とにかく、何かがこのひたすらに鬱屈した状況を打ち砕いてくれないかと思わずにはおれなかったし、何か起こりそうな気がするのも事実なのだ。

……しかし、私はわかってなかった……この、あまりに退屈過ぎる不景気さ……

う既に危機がすぐそこまで来ている証で、今までの代わり映えしない日常が如何に尊く：今のこの退屈ささえもその前にはマシと思えるような地獄が待っていることを……私は、まるでわかつていなかった。

阿求 side

私の目の前で、友人が如何にも気だるげと、いった風の声を上げ、受付台の上に突っ伏し、情けない声で呻いている。

その友人とは、飴色の髪を鈴の髪止めでツイテールにした、紅と薄紅の市松模様の着物を着たこの店の看板娘にして店員の、本居小鈴という可愛らしい少女である。

因みにいまは店番中でありクリーム色のフリルエプロンを上から身に着けている。

そんな彼女を横目に私はお店の本棚から目的の本を探して、手に取って表紙を見ては戻し見ては戻し……と、物色を繰り返しながら、目的のものが見つければ腕に抱えていく。

その作業中に彼女としていた何気ない会話から……どうやら小鈴はこのあまりの静けさに辟易しているということらしい……

確かに、今この店は閑古鳥が鳴き続けているようだけれど……

それに、特に異変もなく平和であるのは確かなのだし：寧ろ妖魔本が無いことで、小鈴が不用意に妖魔本に手を出して凶事に巻き込まれることも、妖魔本に魅入られることもないだろうし……と、そこまで考え、次の本を

手に取ろう…と手元にあつた本を棚に戻そう  
……としたその時。

チリリン…：…イイン…：……

？「……じゃまするぞうい」

求「……？……ええ……」

鈴「っ!! い、いらつしやいま…せ…

あつ!!お久しぶりです!マミゾウさん!!」

私は今やこの店には珍しくなった、来客に  
ふと顔を向ける……

久々の鈴奈庵への来客は、よりにもよって例  
の化け狸……『捕らぬ狸のデイスガイザー』  
こと、二ツ岩マミゾウだった……

二ツ岩マミゾウⅡ岩

岩「いやく久しぶりじゃの小鈴……と稗田  
のご当主」

二ツ岩マミゾウ：佐渡の二ツ岩ともあだ名  
される彼女は幻想郷の勢力の中でも実力者の  
部類に入る。

手下の狸たちを従え、裏で暗躍する。

果たして今回の彼女は敵か味方か……

いずれにしても油断のならない相手であるこ  
とは間違いないが……味方であったところ  
で何を狙っているのかわかったものではない  
からだ……まあ、根本的に妖怪は人間が必要  
なので真つ向から敵には回らないだろうが…  
……

岩「……いやいや!そんなに警戒する事無い  
じやろうて……!」

私の疑いの眼差しに気付いてか、マミゾウ  
氏が宥めるような事を言う……

求「正直、以前にあなたに良いように利用さ

れていたことを知ってから、油断ならないと  
思っています……ですが……」

私は彼女へ向けていた警戒を解くように、  
ため息と共に目を閉じ、すぐに開く。

岩「ああ。わしは今回……というか、今回も  
！そちら側じゃぞ！」

鈴「……あ、それはそうとマミゾウさん……今  
まで何処にいたんですか？」

岩「ふむ……良い質問じゃな……実は……」

その言葉の終わるか終わらない内に彼女の  
姿が人里に紛れる為の格好から普段の妖怪と  
しての装いに変わる。

人間変装時の黄緑色の紋付き羽織に黒の長着  
、頭に葉っぱの髪留めをただけの姿がボン  
っという音と共に煙に包まれ、煙が晴れたか  
と思うと妖怪としての普段の姿……

狸というよりアライグマのような尻尾に、頭  
に狸耳を生やし、服は薄い桃色の肩掛けに黄  
土色の無地のノースリーブと、臙脂色のスカ  
ートで素足に下駄を履き、頭にはさつきの髪  
留めが変化したのか、一部丸く枯れた木の葉  
の帽子を被った平常時と思しき姿に変わる。

岩「さて……気付いておるかの……最近、人  
里の様子がちよいとおかしいのは……儂はその  
原因を探る為、独自に動いておったのよ」

鈴「人里？　人里がなにか？……別に普段と  
変わらないと思いますけど……」

求「ええ……特に人が消えたとか事件が起きた  
とかは聞かなかったですし……」

岩「まあ、人里でなにかあればお前さんらの  
耳に入らん筈はないのお……」

そうである。片や最近まで盛況だった貸本屋：片や、言っても稗田家当主である：ましてや、狭い人里内：何かの騒ぎや事件があれば噂として耳に入る筈……

岩「じやが、里全体が既に変容していれば：どうじゃ？」

求・鈴「「……!?!」」

求「……まさか：そんな……!」

ザザツ……!

その時、店の外で何者かの足裏が地面を擦る音がした……

岩「そうら……もう来おったぞ……!」

まるでその言葉を待っていたかのように、

次々と店内に人型の機械人形のような黒い兵が店に押し入り、あつというまに取り囲まれてしまった……

マミゾウは不敵かつ老獪な笑みを貼り付けたまま周囲の招かれざる客達を目だけで見渡す。

その者どもの内中央の一体が指揮官なのか、両手の鉤爪状の武器を片腕だけ上げてこちらへ振り下ろし：差し向けて来た!

ふと咄嗟にマミゾウを見た。

岩「流石に多勢に無勢じゃな：ふむ」

その言葉の中途にはもう懐から葉っぱを取り出し……しかし、それをさせまいと敵が一斉にこちらへ襲い掛かる!

だがそれが届くか届かないかの寸前でドロントツ!と辺りが煙に包まれ、晴れた時には二人の姿は消え……人形兵達も二人を見失ったように辺りを見回している。(何故か私の事にも気付かない……) やがて：一通り店内を虱潰し

に探し、いないと見るやぞろぞろと鈴奈庵を出ていった。

だがそこにはまだ人形兵が二人……と思うが早いか、ドロンッ！という変化の術特有の音と煙が立ち込め、薄れるようにすう……と消えたかと思うと、先程まで消えていた二人が姿を現した……

そこでようやくからくり気付く。

つまり、消えたのではなくマミゾウ本人を含めた三人共化けさせられていたのだ。

岩「さて：取り敢えず危機を脱したわけじやが……」

求「：今のは何だったんですか？」

鈴「何か全身：黒尽くめだったよね……？」  
変化が解けての第一声を彼女が上げると私たちもそれに続くように質問をする。

岩「それはまだ儂にも定かではない……：奴らが何者なのかはな……」

求「それなら、ひとまず里の守護者のもとへ行きませんか？何か知っているかも……」

岩「いや：あの寺子屋の教師も知っているのは現状くらいのものじやと思うぞ？会いに行くのは賛成じやが」

他に誰も居なくなつた店内：異様な静けさの中でこれからの方針について話し合う。

鈴「うくん：それじやまずは慧音先生の所……？」

求「そうね……今はそれくらいしか……」

取り敢えず方針は決し、人里の守護者である上白沢慧音のもとを尋ねることとなつた。

……店の外へ出てても異様に静かなのは変わらなかつた……

人が……誰もいない……私が店に入るまでの状況とかけ離れた情景に流石に違和感を覚えるが、あんなモノたちがうろついているのだから里の者が皆逃げるか隠れるかしている方が自然かと考えを改める……でも、それにしては……

求「皆、何処かに避難するか家に閉じ籠っているのでしょうか……」

岩「いや、それはないじやろう」

鈴「え? どうして?」

岩「お前さんらは店内にいる時、誰かの悲鳴やら、騒ぎがあるのを聞いたか?」

鈴「……そういわれれば……」

そう、あのモノたちから逃げたのだとすれば何かしら騒ぎになっていてもおかしくはない……にも関わらずそれらしい騒音も喧騒も、全く聞こえて来なかつた……

岩「それに……先程儂がした話を覚えておるかう……この里全体に異変が生じ……里の人間の様子がおかしいと……」

鈴「あつ!」

求「……それは……どういった異変ですか……?」

岩「まあ待て……続きはあの教師と合流してからにしよう……ここだと、いつまた奴らが来るか分からんからな」

それもそうだ……こんな誰もいない通りにたち尽くしては、どうぞ狙ってくださいと



言っているようなものだろう。  
私たちは寺子屋を目指し移動した。  
因みに今は昼を少し過ぎたくらいなので本来なら寺子屋で授業が行われている筈である：ゆえに慧音もそこにいるだろう……そこまでの道筋は私が覚えているのでその自分の記憶に従って進む。

里人A    s i d e

……ここは何処だ……いや、周りには竹が生い茂っているので竹林ということはわかる。そして恐らくは幻想郷の「迷いの竹林」だろうことも予想出来る……が肝心なのはその「迷いの竹林」どあたりなのか見当もつかない。ということだ。入口なのか、出口なのか……はたまた真ん中らへんなのか……全くわからない……それどころか……まあ入った者を迷わせるのがこの「迷いの竹林」の性質らしいから当たり前なのだが……いや、それも問題だがそれ以上に……俺にはここまで来た時の記憶が無い。

いや：正確には、どの道順で……どこを通つて……等の記憶は朧げながらある。  
だが、何故そうしようと思つたのか、どんな目的や意図があつたのか等の記憶が無い……  
……そして、更に妙なものは……これは今もそうなんだが……何故か変に……、冷静で……落ち着いている。

普通はこんな所に、わけも分からず一人で居

れば多少の混乱や狼狽等があつても良さそう  
なものなのに今でも…そんな自分の状態も含  
めて粛々と受け止めている。

こんな所…というのは、ここは入った者を  
迷わすというだけでなく、人を襲う危険な妖  
怪も出没するという意味でもあるので尚のこ  
とだ。

俺の名前…は…大丈夫だ…思い出せる  
…俺の名前は「畑咲 空汰」だ。

「それにしても…何でこんな所に…」

俺は確か、嫁から買い物を頼まれていて、  
仕事帰りに買って帰ろう…と考えながら仕  
事場に…向かった筈…とそこまで  
思い当った所で、不意に背後の茂みからナニ  
かの気配がした！

空汰「——っ!!!」

!!

な、なんだ…今、その茂みからっ…

!!

よ、妖怪…なのかつ…？ く、くそう

…う…ふ…あ、足が震えて…

…腰もぬ、ぬ、抜け…

く、くくくく喰わ

れる!!

な、何なんだ？ さっきのさっきまで異様な  
程落ち着いていたのに…き、急に恐  
ろしくなつて来て、恐怖で頭が真っ白に…  
…!!

？「ん？ 誰だ？ 誰かそこにいるのかあ？」

空汰「!？」

人間の…声？ それも少女…？

い、いやっ！妖怪は人間に魅力的に見える姿  
を取るから例え美男美女に見えても油断出来  
……

？「おっ！」ガサッ

……ない……との結論に至った所で相手の方が  
草場の陰から姿を現した。

……っっ！！

茂みから顔を出したのは白い洋服に肩掛けの  
ついた赤いもんぺ姿でかごを背負った白髪の  
美少女だった。

？「……あんた、こんな所で何してんだ？」

謎の白髪美人は訝しみながらこちらに質問  
を投げかける。

……いや待て……確かコイツ……阿求様の幻想郷  
縁起に………そうだ!!!コイ

ツは!!!

……藤原妹紅だ!!!

藤原妹紅Ⅱ紅

紅「……おいあんた……大丈夫か？ 顔が真  
っ青だぞ……？」

……何故だ……相手のことがわかった……  
敵でないこともわかった………それどころか、  
俺のような人を守り、この竹林から出してく  
れる人物なのも理解した………助けが来たん  
だ!!…なのに…なんで

……  
……なんで、体の震えが止まらないんだ？

紅「おい、本当に大丈夫かあんた……震えて  
いるが………どこか悪いのか？」

こちらを気遣って、手をのばしてくる不死  
の少女………  
……っ!!!

恐怖のあまり、ついその手から逃げてしまった。

空汰「……………っ!!」

紅「……………はあ……………まあ、そういう反応には慣れてきたつもりだったし、今更どうこう言うつもりないけど…やっぱ精神的に…来るものあるよ……………うん……………不意打ちだったからかな?……………はは……………」

しかし、こちらのおんまりな態度にも、切なそうにしながらも親切さが崩れない所を見るに…やはり、言われ慣れているらしい。

そのような少女の境遇に同情しながらも…やはりまだ恐れが心から消えてくれない…  
一体……………この不自然な恐怖心は何なんだ?…  
……………!!

ここまで来てもまだ怯える自身の心に苛立ちを感じ始めたその時……………蓬萊の少女と藤原妹紅が尚もこちらに差し出してくれていた手をそのまま…何かから俺を庇う形にして俺とその何かの間に立つ。

紅「……………つたく! こんな時に!……………おいあんた…立てるか?」

少女が俺を護る体勢に入ったのと、グルルルウ……………!と野犬か熊か判別出来ないが、どちらとも取れるような声が少女が顔を向けている竹藪の方から聞こえて来るのはほぼ同時だった。

俺を背に庇う少女から声が掛けられる。

俺は何とかその呼びかけに答える。

空汰「あ、ああ……………ああ! 大丈夫だ! それよりあんた……………」

紅「ん？……いや、私は大丈夫だ……あんたも……さっきの反応を見る限り、知ってんだろ？私のコトを……多少はさ……そういうワケだから、少し下がってな」

相変わらず少し寂しそうな笑みの後、相手に相対する為、前を向く藤原妹紅……

やっぱりだ……なんだコレは………？

今も、俺は向こうの化け物よりも、今尚俺を背に庇って立っててくれる彼女に恐れを抱いている……いや寧ろ、如何にもおどろおどろしい見た目をしたあっちの物の怪を見て歓んですらいる……さっきから……本当にさつき竹林で気が付いた時から一体なんだっていうんだ？……まるで心が今までの自分と違うような……現にまだ、目の前の少女をまともに見れないのに、化け物の方は………細部を………観察……出来る。

頭部は狼のような形で目は左右に二つずつあり、獸耳が見当たらず立ち上がり二足歩行も可能で前足と後ろ足に鋭いノコギリ状の爪が………云々………

普通は逆の筈………人の姿の妹紅を見て安心し、向こうの化け物に怯える………本来抱くべき人の感情とは真逆の己の思考に俺は戦慄していた。

いや、ある意味では、明らかに実力のあるこの少女と向こうの………見た目こそ恐ろしいが、多分下級の妖怪であろう両者を見比べれば畏れるべきは前者であるという見方も出来るのかも知れない………そうではない。

そういうことではない………！

何故なら——彼女は……味方なのだ。

味方がそれほど強ければ心強さを感じこそすれ、恐ろしいだの怖いなどと怯えようがない！！

……とそこで、間合いを見極めたのか、相手と睨み合っていた少女が一步動いた。

紅「おい……あいつは私が始末するから。あんたは出口に向って逃げな」

空汰「お、おい……」

紅「大丈夫……この竹林の出口だったら……幸い、あんたの後ろの方をずっと真っ直ぐ行つたの所にある」

……彼女は俺に背を向けている……

向かい合っている化け物も俺より彼女に注意が向いている。

餌に立ち塞がる邪魔者の彼女を排除（或いは食べるつもりか）したら次は俺を狙うつもりだろう……まあ、彼女が相手ではそのどちらも叶うことはないだろうが……

少女が下級妖怪に攻撃しようと手を構え、術を繰り出す………刹那

、この目が信じられない物を視界に捉えた。

紅「な、あ……かはっ……！」

少女の……肺から空気が絞りだされたような呼気が漏れ……同時に敵対していた妖魔の方からもギャア！と断末魔の鳴き声上がる。それは両者が互いに刺し違えた為ではない。彼我の戦力差がありすぎるからだ。

なら何故妹紅の方からも苦鳴が上がったのか………火を見るより明らかだった。

紅「あ、あんた……なんで………！こ、これ

は……」

空汰「こ、これは……！……そ、そんな……！

俺は……俺は……!!」

相変わらず、何故かはわからない……

だが、目の前の現象を簡潔に説明すると……

……俺の影が……彼女ら二人を串刺しにしていた。

……それも一撃で彼らを……まるで一本の竹串に団子でも刺し通すが如く貫いている。……しばらくすると先に妖魔の方に変化があった。

なんとも形容し難いおぞましい叫びを上げながら、かの妖怪の姿が縮んでゆく。

……これ程異常なことか己の眼前で展開しているにも関わらず、尚も冷静な自分に戸惑う気持ちと、今起こっている事態に対する戦慄と恐怖、そしてやはりそれらを客観的に冷静に見つめる心が緋い交ぜになり、俺の精神は混沌を極めていた。

……ただ立ち尽くすのみだ

紅「こ、コイツは……！くっ!!このおっ!!」

縮んでいく妖怪の姿が完全に影に吸収されて消える間、彼女の方の体も見ると間に炎に包まれ、頭髪の数本を残して全て燃え尽きた。

紅「ふう……なんとか抜けたか……」

しかし、次の瞬間には彼女は元通りに、五体満足でそこにいた。

そう……これが蓬萊人、藤原妹紅の……「死な

ない程度の能力」。

不老不死となれる蓬莱の薬を飲んだことで手に入れたとされる……そして今のはそれを利用し、自分の体を炎の妖術で焼き尽くし、己の体を別の位置へ再生させることで、影の串刺しから逃れたのだ。

だが……それは、まるでこの影のことを知っているかのような動きと対応だった。

紅「なあ……あんた……一緒に永遠亭まで来てくれないか？」

妹紅のその申し出を聞いて、ふと気が付くと、いつの間にか俺から出ていたあの黒い影のようなモノは消えていた。

そこで彼女の方を見るとなにやら若干顔に冷や汗を浮かべているような……

空汰「……………」

紅「大丈夫……道案内は私がする……………道中の安全も保証する。私があんたを送り届けるから……………」

その後、俺は妹紅に連れられ永遠亭まで護衛されるのだった。

妹紅 s i d e

不味いことになった!! 非常に不味いっ

!!

紅「もし! 私の予想通りなら……………!」

悪い予感が胸の中を渦巻く……………!

竹林で出会った彼は永遠亭の奴らに投げつけた。

あとはあいつらがなんとかするだろう。



私は私で思い浮かんだ悪い予想を確かめる為  
竹林の中を疾走し、人里へと向っている。

紅「頼む！慧音っ！無事でいてくれっ!!」

あのお節介は里の守護者なだけに、今頃は  
里中の人間を助けようと奔走しているはずだ。  
竹林に居たあの人間だけが偶々影に侵されて  
いた？……いや、それはないだろう……そう  
なると、里中の人間が既に取り憑かれていて  
あいつはその内の一人と考える方が自然……  
…焦りと共に、走る足に力がこもる……とそ  
こで気付く。

紅「……クソっ！飛んだ方が早いのはわかっ  
てんだろう!!…気付くのが遅れた……!!」  
すぐに自身の妖力を込めて飛び、妖術で加  
速を掛ける。

全身が炎に覆われ、目の前が赤く染まる。  
走る勢いそのままに空へ飛び上がり、真昼の  
青空に赤い線が走る……私は人里へ急行した。

慧音 s i d e

この現象は一体……？里の人間が皆一様に、  
意識か希薄で朦朧としているように見える。  
……駄目だ……あちらもこちらも声を掛けて  
もまるで反応がない。

先程まで授業を受けていた子供達も一斉に、  
なんの前触れもなくそうなった。

同じように……どの子からも反応がない。

誰か人を……と寺子屋の外へ飛び出したが、  
そこでも、中の子供たちと同じ状態の人々が

そこかしこで立ち尽くしているのみだ。

しかし、取り敢えず私は里の外に出て、里があつたという歴史を食べ、人里を隠すことにした。

慧「この状態では、万一外から襲撃があつた際に対応できない……里中の人間全員を一人避難させていたのでは間に合わないかも知れん……」

私は里外に出て里の門を見上げ、能力を発動させる。

……すると一瞬で里が丸ごと、そこに最初から存在しなかつたかのように忽然と姿を消した。そして、先程まで里のあつたその何も無い土地に背を向け、里の守護者として立ち上がる。

慧「……一先ずはこの里を死守することに全力を尽くす!!」

……これで今の所は……心配ないか……そう、これが、半人半獣たる私、上白沢慧音の能力の片割れ：「歴史を喰う（隠す）程度の能力」！人里がここに存在していた歴史を喰い、人里を隠す。

今はこれで充分だ。

あとは私がここを守る……!!

慧「さあ、鬼でも蛇でも来るなら来いっ!!」

阿求 side

……やはりいないか……

萃「あれ……いないなあ……」

寺子屋を出てすぐの通り……そこを出て、

目的の人物どころか誰一人中にいなかった事になんともなくふと振り返える……

鈴・岩・求「……っ!!!」

屋根の上……誰かが幼子のする開脚のようなポーズで座っていた。

後ろの二人も振り返っていたようで、驚きに息を呑むのを微かに感じた。

私も驚きから思わず息を呑む。

無理もない……何しろ相手は――

私が自分の縁起にも記している幻想郷の最上位種にして最強の人攫い……「鬼」。

その中でも規格外の強さを持ち、山の四天王を張る……『小さな百鬼夜行』こと伊吹萃香、が……寺子屋の屋根の上、目の上にてを翳す呑気な人探しの仕草で、さも当然のようにそこにいたのだから……

そこで、今気付いたのだろうか……彼女が下を見下ろし、こちらに声を掛けてきた。

萃「ねえ、あんたらさあ……ここで教師やってるっていう半人半獣……何処行つたか知らない？」

## 第十三話 氷争 (萃夢 其の弐)

チルノ side

幻想郷の空は…今起こっている事に関わらず、穏やかで静かだ。

それが逆に異様な不気味さを醸し出す。

道案内役の橙と藍を先頭に進むあたいたちに飛行時に生じる風鳴りの音だけが耳を打つ。

ふと不意に先頭の二人が立ち止まる。

チ「どうしたの？」

藍「おかしい……………気配が消えた？……………それに……………これは……………」

橙「あ、あれ……………」

大「……………」

どうも、二人とも追っていた気配を見失ってしまっているようだ。

それは流石にまずいと、こちらから声をかけ先を促そうとしたその時、藍が口を開く。

藍「くっ！見失った……………だが代わりに……………複数の気配が同時に……………」

チ「え？」

橙「う……………うわわわわ……………たつたくさんいますよっ!!？」

二人には影チルノの気配（若しくは影の

気配か）が……………何故か複数確認出来るらしい。

いや、どうやら追っていた奴とは別の奴みたいだが……………

チ「どういうこと？」

藍「いや……………追っていた気配が突然消えたかと思うと幻想郷中のあちこちに似たような気配をもつ奴が現れて……………しかし、新たに現れ



者はまだ良いだろう…生まれついでの人で  
ある者もまた…でも、私のような…  
…偶々、偶然…功績を認められた一族に居  
ただけの者にはどうも天界は退屈だ…  
…それも、功績を認められたのは「名居」の一  
族であり…私の一族はその部下であった為  
に天界に住まうことを許された…タダのオマ  
ケ…それでも、まだちゃんと仕えていた一  
族の者は良いだろう…私のような者は働い  
てさえおらず、ただその一族に属していたと  
いうだけで天人となったのだ。

だから、今の生活のありがたみなどそもそも  
わかりようが無い……実際、それ故に私  
は思い上がり、詰まるところの不良に育った  
……天人へとなった際、元あった「地子」と  
いう名から「天子」という名へと変わった  
ことも拍車をかけたかも知れない。

だが、素行を改めるつもりも改心し反省する  
つもりもさらさら無い。

私は私だ…この私以外にはあり得ない!!  
周りの評価など知らん。

私は私のまま、今まで通り勝手気ままに生き  
る!!

幻想の賢者に多少灸を据えられたからと言っ  
て変えられるようなやわな性格はしていない。  
…でも、やはり天界はやはり退屈過ぎるわ  
……

以前、余りに暇なので催事に使う仙丹を摘み  
食いで天界を一時的に追い出されたけれど  
、その時の地上のちよつとした騒動の方がよ  
つほど刺激があった程だ。

けど……それももう、終わったし……  
……  
ああ……  
……  
……今日も天界は、無駄に平和  
ね……

？「ああ……総領嬢様あーっ!!」

比那名居天子Ⅱ天

天「……ん？」

私がいとも通り、いつも通り平和で何も無い天界に辟易しながら自宅で黄昏れていると、如何にもダルそうに、私に仕えてる妖怪……永江衣玖が家の門から呼びかけて来た。彼女はいわゆる竜宮の使いなんだそうだが、まあぶっちゃけ良く知らない。興味も無い。私も私で、億劫そうに呼ばれた方へと首をひねる。  
すると、衣玖がこっちにスタスタと歩いて来るのが見えた。  
そして一言……

永江衣玖Ⅱ衣

衣「まだ、こんな所にいらしたんですか……いやまあ、知らせてないので当然と言えば当然ですが……」

天「は？私だつてこんな所（天界）飽き飽きだけど、居るのは当然でしょ？」

衣「まあそうですがそういうことでは無くてですね……総領嬢様に危険が迫っているのでお伝えに上がった次第です」

天「え……いや、明らかに今、パツと思いついただけだったよね？もののついで……みたいな」

衣「……まあそうですね……否定はしません。何せ天界に住まう全天人に伝えて回っている最中ですし」

天「えっ何？そんなオオゴトになってんの？」  
衣「ええまあ……天界に侵入者が現れたんですが……」

天「ええ!!? 何ソレ！面白そう!!」  
衣「あの……最後までお話を聞きください。お願いですから」

天「ああ、ごめんごめん……それで？」

私は衣玖の持つて来た避難勧告に興味を持ち、先を促す。

衣「ああ……その侵入者というのがですね……例の地上の鬼で……ああ因みに、霧になれる方です。その鬼は元々天界に分身を居座らせていたんですが……その鬼の少し様子が変なんですよね」

天「変って、どんな風に？」

衣「何というか……全身が黒く塗りつぶされていて、影がそのまま立ち上がったかのような状態と言いますか……よくわかっていないのですが……」

ふむ、ここまでの話をまとめると……全身黒  
タイツ風の地上の鬼、伊吹萃香が天人を襲撃した……と

衣「いえ、全身黒タイツでは無いです。どこぞの犯人ですか」

思考に直接ツツコミを入れられた!?!と思ったが、ただ心の声が漏れていただけだった。天「でも、黒幕かどうかはともかく、ソイツが実行犯なのには違いないでしょ？」



衣「まあそうですが……で、その下手人な  
んですが触れるとその黒いのが触れられた相  
手にも感染するんですよ……」

天「は!?何ソレ怖っ!!」

衣「とある天人の証言によると天人が一人：  
その黒萃香に仙桃を嚙って身体強化しながら  
挑みかかったらしくて……それで発覚したん  
ですが……」

天「マジ……?」

衣「マジです」

天「ふふ……（困惑）」

衣玖が、衝撃的な……というかかなり気持  
ち悪い、避難勧告への経緯を聞いて思わず：

天「ソレ、誰か止める人いなかったの?」

衣「ああ、もちろん止める人はいましたよ?  
もちろん……」

なんで二回言った……大事なことなんだろ  
うか……そこで衣玖が更に続ける。

衣「まあ、汚らわしい……とか下賤な……とかと  
いうありきたりな理由ではありましたが……」

天「ああ……なるほど」

それも天人には珍しくもないことだ、かつ  
て地上にいた者らでさえ地上の者どもを見下  
すのだから……実際、私もそうだし……

天「で、初回だし?特に危機感も何もないも  
んだから、ナメてかかってまんまと術中にハ  
マった……と」

衣「ええ、もう……まるつきりお察しの通りで  
す、はい」

流石にこんなん……正解したからって得意に  
ならんわ……幾らなんでも……つていうかし

ようもな……

衣玖も同感なのか、とても遠い目をしている。  
天「で？流石に前例が出来たんだからしつかり逃げ惑ったんでしようね？」

それで私が皮肉混じりに問い返すと彼女は  
言い難くそうに且つ、ため息混じりに

衣「ああ……はあ……それが、たった一人  
とはいえ、同じ天人様が地上の存在ごときの  
手に落ちたことに気分を害されたというか……  
……気位を刺激されたというか……」

天「……は？まさか全員で向ってった……と  
かいうんじゃないでしょうねっ!!？」

その時ののは？を言った私の顔は自分で言う  
のものなんだが、とても他人に見せられない聾  
めっ面をしていたことだろう……

衣「それがあく……ええ、まあはい……」

天「……つつっ！……シヨボおーっ！！  
!!」

天「で、アレでしょ？『おのれ、地上の一妖  
怪の分際でーっ！！』……とかそんな感じ  
でしょ？」

衣「まあ中には『よくも我が同胞を……』云  
々……という方もおられました……」

天「いやいや……それそんな変わんないから  
……つか、何そのバリエーション」

天「……で、そのままみんな仲良く全滅した  
……と」

……と、半ば呆れ半ば失望のため息をつき  
ながらさつきまで自分が仰向けに寝そべり寛  
いでたビーチチエアの中空に手をさつと引つ  
手繰るように……振る。



衣「ああ…無論わたくし、ここに来る迄に、  
僭越ながら、そして誠に微力ながら、尽くせ  
る手は尽くさせていただいております」  
だから、内心を先回りすんなっ!!怖いわ  
!!

衣「ああそれとですね…特攻でその尊いお  
命を散らされた方にはこんな方もいらっしや  
いました…『衣玖様…ここはお任せ下さ  
い…それより、他の天人の方々に一刻も早  
くこの事態を…それと…娘を…天子のこ  
とをどうか、お願い致します…』…以上、総  
領様のお父上からの伝言でした」

天「……………ねえ」

衣「はい」

天「人様の父親の必死の言伝ことづてを随分と軽く扱  
つてくれるわね…ま、どーでも良いんだけ  
どさあ……………」

天「…それとさあ、誰の親が命を散らしたつ  
て?…話を聞く限りじゃ、ソイツら全員

黒い何かが感染して操られてるだけじゃん…」

衣「そうですか?何も手立てが無いのでは同  
じことでは?」

天「今の所は…つてのが抜けてるわよ?」

その反論に衣玖は深いため息のあと…言  
い放つ。

衣「…仰っしやられることも御もつともで  
すが…それも、総領様いかんの気力如何にかかっ  
ているということをお忘れ無く…」

衣「私はもとより、総領様のお父上より貴  
方様を頼まれておりますので…尚のことでご  
ざいます」

……と、先程の態度が鳴りを潜め、なーんか急にしおらしくなる……が……。

天「いやいや隠さなくていいーから……アンタは他人になんか興味ないで……しよっ！」

そこで私は、さつき掴んでいたものを彼女に投げて寄越す。

天「どうせコレでしょ？……ここへ来たお目当ては？」

……それは、私が寝そべっていたビーチチエアの薄い天蓋となって日光を程よく遮っていた羽衣だった。

——私は日差しにも強いので別にいらなのだけどりゾート気分を味わう為に敢えてかけていた——

即ち、目の前の竜宮の使い……永江衣玖の持ち物だ。

衣「……で、そうだったとして……それが何か？」

天「いや別にイ？……アンタが親父に頼まれたからとか、ツマンナイ言い訳するからさ……」

衣「私は確かに、他人の行動やその他諸々について興味などありませんし……どうでも良いのですが……それが今何か関係が？」

天「無いわね」

衣「私はただ命じられた通りに……使われた通りに仕事をするだけです……」

天「ふくん……じゃあそれさ……私でも使われてくれんの？」

まあ、コイツが自分の得物はじりものを取りに来たのは確定として……でも、それだけにしては……

……ふむ……

天「じゃあさ……ちよつと、手伝ってほしいんだけど……」

衣「はい。なんでしょう」

天「……操られてる天人軍団と黒萃香……ここまで連れて来て」

衣「……ああ……それが……なんといいますか……」

天「……なに？　もしかしてもう地上に降りちやつたとか？」

衣「いえ……まさか総領娘様からそう言っていただけとは思っておりませんでしたので……」

天「……もう、こつち来てるってこと？」

衣「……はい」

なるほど……流石は衣玖、仕事が……いや最早これは……

天・衣「話が早くて助か（るわ！）」ります！」

まあ……コイツがこんな時に長話なんて変だとは思ったけど、私をつかまえとく為か……でも、ま……退屈凌ぎにはなりそう……かな？

天「つくかさ……衣玖……あんた、誰の許可得てこんな勝手してんの？ん？もし私が首を縦に振らなくてもヤラす気満々じゃん……まあ私もヤル気があつたから良かったようなもの……親父の必死の言伝思つきし破られてるし……（笑）　カワイソ〜っ！wwww」

衣「いえいえ、滅相も御座いません。私はちやんと他の天人様方にお伝えしましたし、総

領娘様の御身もこの身に代えてもお守り致します……ただ、兼ねてより常日頃から貴方様が『退屈だ』と仰つしやられていたので少々気を回したつもりだったので、そのようなことを言われるのは心外ですね」

天「いや、思いつきり独断専行じゃん……」  
……などと話している間に遠くの地平線（天にあつても地平線と言うのだろうか——どうでも良いけれど）から黒い点のようなものが見え始める。

ポツポツと現れ、こちらへと向って来る。

天「さて、と……じゃあ、ちよつと……遊び相手になつて貰おつかな？」

衣「ええ。思う存分暴れて頂いて構いませんよ……」

天「そう……じゃあ遠慮なく。思いつきしやるから頑張つて合わせて頂戴！」

衣「了解しました」

そして、最後に会話を締めるように互いの手どうしを合わせてパンツと鳴らす——私は左手、衣玖は右手だ——そして……

——地底

——地霊殿

はあ……ようやく仕事が一段落しましたね……私、地霊殿の主であるサトリ妖怪……古明地さとりはその日一日の業務を終えて、自身の書齋で寛いでいた。

そこに、ドアの方から——





紅茶の豊かな香りが口いっぱいいな広がり、  
疲れがすうつと薄まるように消える心地だ。

しばらくそうして寛いでいると、そわそわと  
落ち着かない様子でお燐がこつちを見ている。

そこで、サードアイをお燐に向けて「見る」……

——うう……さとり様のお膝………／＼／＼………

いやでも……今は休まれてる最中だし………

でもでも！もう、お夕飯の準備も終わってる

し………

さ「お燐、いらっしやい……」

そんなお燐に微笑みかけ、膝を軽くポンポ  
ンと叩き、乗るよう促す。

燐「……！ は、はいっ!!! ふふ……♪」

すると彼女の全身が一瞬で炎に包まれ、包  
まれたのと同じくらいの速さで炎が消えると  
そこには先つぽに小さく火が燃えている、尾  
が二本の黒猫がちよん、と座っている。

燐「にやあく………っ♡」

猫に変身した（というより普段が人に化け  
ているのだが）お燐が嬉しそうに鳴きながら  
こつちに素早くかけ寄って来ると、ぴよんっ  
と一気に膝の上に乗って甘える。

私が顎を撫でてあげると、お燐も気持ち良さ  
そうに喉を鳴らす……と、そこでドタバタと  
廊下を駆けてくる音が聞こえて来たかと思う  
と唐突にドアが開かれ、悲痛な……しかし真剣  
味にかけた叫びが上がる。

霊鳥路空Ⅱ空

空「ああー……っ!! ヤツパリ抜け駆け  
してるー……!! ずるいよ、お燐ばかり  
!! 私も私も……!」

その非難するような台詞は後半は甘えねだ  
るような声に変わり、ばっ！と私に背後から  
抱きつく。

さ「お、お空っ！……もう……しようがないです  
ね……」

と、言いつつも私もまんざらでも無いので  
優しく頬を撫でてやる。

燐『あぁ……お空く夕飯の支度おつけー  
？』

空「もう！ひどいよお燐！私に任せて先に行  
っちゃうんだもん！」

燐『ええ……だってもうほとんど終わって、  
やることか特になかったじゃん……』

空「そうだけどさぁ……」

燐『だいたい、あたいだってさとり様にお茶  
を淹れて持って行ってただけだし』

空「でも……自分だけさとり様と寛いでたじゃ  
ん」

燐『……それは……まあ……成り行きで？』

空「まあ……もうそれは良いけど。私もさとり  
様にかまって貰ってるしー！」

言いながら体を擦り寄せるお空。

さ「うん……別に忘れてたりサボっていたりは  
無いみたいね……よしよし……」

右肩に顎を乗せてくるお空を右手で、膝に  
乗るお燐を左手で撫でてやりながら、二人の  
方へサードアイを向け、心の中を覗いて仕事  
をこなしていたかを確かめる……無論、夕飯の  
支度もすでに済んでいた。

……そこでふと、撫でていた手を止める。

空「さとり様？」

燐「？」

二人からの訝しげな視線を感じる。

だが私は急に感じた外からの異様な気配に、館の外へサードアイを向けた。

さ「……………お燐、お空……………少し外の様子を見てください。ペットたちを一箇所に集めて待っていてください」

燐「……………わかりました……………行くよお空」

空「うにゅ？」

さ「ああ……………それから、夕飯は先に済ませておいて下さい他のペットたちにも……………頼みましたよ」

燐「……………はい！」

そこで、私は自室のドアを開け、廊下に出る。

そこからは飛んで、玄関口まで向かう……………廊下を右に曲がり、その先の階段を……………

——バリント……………!!

降り……………ようと廊下を飛行していたらいきなり数メートル先の廊下の窓（壁も）をぶち割り、気配の元凶らしき者たちがずかずかと侵入してきた。

全身黒尽くめのそいつらはただ黙って私の進路を塞ぐ。

だが私からすれば対処すべき問題がわざわざ向こうから来てくれたわけで、進路を塞がれていると言うのは語弊があるが、格好としてはそういう他無い。

それに……………

さ「他にも気配が……………これは、地底中に……………

!？」

しかも、目の前の輩どもにサードアイを向けても心を読むことが出来無い……

さ「あなた達には聞きたいことも言いたいことも山とあります……が、今はそれどころではありませんね……」

言い終わらないうちにこっちから動こうとした瞬間、相手も一気に間合いを詰める。

――  
戦鬪

くとある異界く

薄暗い部屋の中、中央にある巨大な鏡から発せられている申し訳程度の光がこの部屋の明度を辛うじて支えている。

その薄明かりを発する鏡には様々な場面や状況が次々と映し出されている。

飛「さて……次なる手は……」

その部屋の中、一人の男がソファに肘を付き、ひとり眩く。

その男の視線の先にはこの部屋の光源でもある映像を映す巨大な鏡が鎮座している。

そこにはこの男の奸策する場所の各所が映し出され途切れることなく流れている。

――博麗神社……無名の丘……三途の川

……白玉楼……天界……命蓮寺……輝針城……

……e t c

それはその地に住まう幻想の者たちも例外では

なく、それぞれに困惑、混乱、対応に駆り出され奔走する様子が映されている。

飛「萃めし夢……萃まりし想い……」

男は目を僅かに細め、次なる一手を口にする。

飛「夢の通り路……永き夜の始まりだ……」

……鏡の仄暗い明かりだけが男の顔を不気味に照らしていた。

### ——博麗神社

紫 side

……何かおかしい。何か胸騒ぎがする

……

先刻、白玉楼にて幽々子についた影（コ）

を皆で協力して祓った後、一人スキマで神社に帰った私は霊夢たちに事のあらましを聞かせ持ち帰った氷漬けの影（コ）の封印を霊夢に頼み、神社の縁側に腰掛けながら、周辺に警戒網を敷いていた。

紫「静かね……」

あのととき……紅魔勢モドキ共が攻めて来て

以来、博麗神社には何も攻めて来る気配がない……

諦めたわけではないことは未だに博麗神社で気持ち悪くくねっている影たちが証明している。

でも、ようやく……敵の次の目的地が推測出来た。

藍たちが向かっている方向からしてもまず間違いは無いはず……

そう……奴らが紅魔館の次に襲撃したのは白玉楼……これで、点は二つとなり点と点が繋がり線となる……もちろん確定では無く推測に過ぎ無いものの、これである程度の目星は付く……そう……つまり……

紫「この異変は過去の異変を辿っている……」  
よつて……次は萃夢想……のはず……

紫「でもあの異変は幻想郷中に影響してた上に異変の黒幕も神出鬼没だったのよねえ……」  
しかも、また嫌な予感がするし……それに……

紫「この異変が推測通りだとしたらそれは……」

そこで、近づいて来る気配にふと顔を上げる。

魔「よつ！……今度はなに企んでんだ？……いや、今は何考えてくれてんだ？かな……何せ今は手を組んでるんだしな……」

紫「……まあそうですね……否定はしないわ」

魔「ほお、珍しく素直だな……槍でも降るんじゃないか？」

紫「あなたの方は相変わらずの減らず口ね……まあ良いですわ……それより本題に入りましょう……」

そこで私は今まで考えていた推測を話した。  
魔「おいおい……それ、ちゃんとあいつらには話してあるんたらうな？それだけわかってるだけでも大分違うだろ……」

紫「もちろん話しましたわ……まだただの仮説の段階ということも一緒にね……」

そう、このことはもちろん既に伝達済み……

…だが……

紫「余計な先入観や固定観念は状況を悪化させかねない……だから、あくまで参考程度にと言うに留めましたけれど……」

魔「だけだよ……もしそうだとしたら……  
…コレ……」

紫「ええ……そうね……」

もう、後手に回ってしまっているかもしれない……相手がこちらに対してアドバンテージがあるとすれば、その一つは狙いが何なのか判明していないということ……もちろん、おおまかな目的は膨大な力……であるのはわかるものの……この幻想郷のどこから？ または誰から？……もしくは両方？ それをどこからどのように引っ張ろうとしているのかが分からない……それは、可能性が全く無いからではなく……寧ろその逆……何処からでもあり得るから……可能性があり過ぎて絞り込めない……例えば彼女、チルノの事をとって見てもそうだ。

彼女は今回の異変の為にこの私が備えた存在だが……その力を奪われることで逆に利用された。

幸いその力は半分程度しか奪取されずに済んだけれど、半分でも大き過ぎるし、それさえ単なる足掛かりに過ぎなさそうな所を見ると、何処まで計算済だったのかわかったものじゃない……でも、私とてただ手をこまねいていた訳ではない……想定出来る範囲で手は打たせて貰った……あとはそれらが吉と出るのを祈るのみ……いや、吉を出させて見せ

よう……例えどう転ぼうとも……全員の納得のいく形で。

ここからが……正念場ね……

チルノ side

これは……紫の言っていたことが現実味を帯びて来たな……

あたいは白玉楼で聞いていた紫の仮説を思い返していた。

く回想く 白玉楼某所にて

チ「ねえ、話してなに？」

紫「ああ……来てくれてありがとう。まずはお礼でも言わせて下さいな……ふふ……」

チ「いやさあ……別にそういうのいいから。早いとこ本題に入ってくれない？」

紫「ふふ……あらあら♪……つれないですわね……」

チ「いや、これでもかなり付き合っただけだわ。つもりだけど？」

紫「……やれやれ……その表情……確かにもう既に十二分にご迷惑をおかけしているようですわね……」

チ「……で？何がわかったの？」

紫「……いくらなんでも話が速すぎませんこと？その様子、もう内容を察していらっしやるのでは？（汗）」

チ「さあ？それはソツチから話を聞いてみないことにはわかんないよ……それがただの答え合



わせになるかどうかはさ……」

紫「それでは単刀直入に……この異変、今追っている相手の行き先は……」

チ「過去の異変が起きた地をなぞっている？」

紫「……：……：やっぱりただの答え合わせじゃないの……（遠い目）これ、私がこの先を言う意味ありまして？」

チ「……良いから続けて」

紫「では話を続けますけれど……これはただその地を狙っただけのもの……であるということですよ」

チ「まあ、確かに今までのことを振り返ってもそうだよね……紅霧異変を……完璧とは言わないまでもある程度再現するなら、最低でも霧を出させないと駄目だしね」

紫「ええ、今回の白玉楼においてもそれは言えること……異変の中心であるあの西行妖をそもそも輪切りにしてしまっていますものね……：……でも、どちらも異変の当事者が影に取り憑かれているのは変わらない」

チ「それと、土地か……紅霧異変は紅魔館……」

紫「……：……（コクツ）春雪異変は白玉楼……そしてそのどちらも最低でもその異変の中心的人物が狙われている……つまり、必ずしもかつての異変をやり直す必要は無く……：……ただその土地……：……つまり場と当事者……ないし黒幕が揃えばそれで良い……：……と」

チ「ってことは敵の差し当たったの目標は幻想郷巡りってことか……：……」

紫「ええ……私の推測通りならね……：……」

チ「……確かに、これまでのことを考えても迂

闇に決めてかかるのはヤバそうだよね……」

紫「……ふう……やれやれ、やはりあなただけに話して正解でしたわ……」

チ「……で……どうするの？このことはみんなに……」

紫「まだ、ご内密いただけるかしら？」

チ「え？」

紫「言ったでしょう？私の推測通りなら……ですわ」

チ「でも、別に……」

紫「もちろん、話すかどうかはあなたにお任せします。タイミングについても」

チ「じゃあ、まだ話すなって釘刺す意味ないじゃん……」

紫「いいえ……あなたなら藍たちと行動を共にする中で時機を見逃さないでしょうし、軽率なことはしないだろうとの判断ですわ」

チ「……なるほど？……ならそこら辺の判断はあたいがさせてもらうけど……」

紫「……ではこれで話しは終わりです。……この幻想郷の未来の為……期待以上の働きを期待していますわ」

……そして、紫はスキマを使って博麗神社へと戻っていった。

く回想終わりく

……つたく……期待がデカいよ……こんな……

ただの氷の妖精つかまえてさあ……

あたいは黒い影の気配を追う藍と橙の反応を見てほぼ確信する。

次の異変が『萃夢想』がターゲットなら、次

に影に取り込む対象は間違いなく萃香だ。  
彼女の力は『疎と密を操る程度の能力』……  
その力を使つてかつては幻想郷中の人妖の心を  
萃め宴会を三日おきに開かせていた……  
狙うべき異変の中心人物としては申し分ない  
……その上、厄介な能力持ちだ……  
それは、己の分身を作り出したり、巨大化し  
たり、逆に小さくなったり……変幻自在に自  
身の姿を変えられる事……挙げ句、霧にまで  
なれるという……まあ能力の応用なんだろう  
けど……

その中でも分身と霧が特に厄介だ……霧にな  
られると捕まえられないし、一人と複数人と  
ではその仕事量も段違いだ。

しかも相手は鬼……妖怪の中でもトップのパ  
ワーと再生能力を持つ種族……おまけに萃香  
はその中でも四天王の一角を張っている鬼だ  
……もう、その強さは折り紙付きだろう……  
藍と橙はそれぞれ、追っていた気配が消えた  
と思つたら今度は追っていた奴より気配こそ  
小さいが複数同時に現れた……と言つていた  
……そして今、橙が

橙「ぜ、全員……とんでもない強さです!!  
結構な距離のはずなのに……ここまでプレッ  
シャーが……」

間違い無い……こんなことか出来るのはあ  
の妖怪ひと以外考えられない。

そして、紫の推測通りならこれで萃夢想の標  
的は半分は達成されてしまったことになる。  
異変の中心人物……あとは異変の土地ぶたい……

藍「ああ……しかも、いたる所……あちこちから同じ気配が近づいてくる!!」

大「チルノちゃん……」

チ「……みんな下がって……あたいの背後に……」

藍「そうは言うが……!?!?……なるほど……」

……では、ここはひとまずそうさせて貰おう」

あたいは氷の分身でみんなの周りを固め、  
接敵に備える。

……そして、遠くから見え始めた黒い点が  
大きくなりやがて人で言う小さい子供ほどの  
サイズになりその姿をあらわにする。

橙「う、うわわわわわわ……!!」

藍「なっ!!こ、こいつは……」

大「嘘……ッ!!」

小さな百鬼夜行……伊吹萃香の輪郭した……

黒い影が大人数であたいたちを包囲していた。